ISSN 1348-0952

研究紀要

研究紀要

創刊号

二〇〇三・三

財団法人山形県埋蔵文化財センター

創刊号
2003.3

目　次

東北北半における縄文晩期前葉の注口土器	小林　圭一	1
最北の破鏡－鏡片分布からみた古墳出現期の動態（予察）－	高橋　敏	45
城輪柵跡出土の軒丸瓦	水戸部　秀樹	55
今塚遺跡の再検討とその性格について	植松　暁彦	59
遊佐荘大楯遺跡の成立	山口　博之	77
須恵器長頸瓶の製作技法－山形県内の窯跡出土資料から－	吉田　江美子	117
山形県内出土の瓦質土器	□桑　弘美	124
奥羽南半における「伊達氏系遺物」の分布について	□桑　登	136
渋江遺跡検出の墓域について－主に近代墓に関する報告－	押切　智紀 多田　和弘 西田　明日香	146
明治時代に建造された山形県内の奥羽本線旧隧道の概要と現況	犬飼　透	154
考古遺物を活用した学校教育への協力－出前授業を中心に－	佐竹　桂一	162

財団法人山形県埋蔵文化財センター

題字

財団法人山形県埋蔵文化財センター　理事長　　木村　宰

創刊のことば

財団法人山形県埋蔵文化財センターは、山形県内における埋蔵文化財の調査研究を行い、県民の文化財に関する理解を深めるとともに、文化財保護と地域開発の調和を図り、もって、県民の文化生活の向上と地域文化の振興に寄与することを目的として、平成５年４月に設立されました。

以来、東北横断自動車道、東北中央自動車道などの高速道路をはじめとする道路建設や、圃場整備事業、山形ニュータウン建設等に伴う多くの発掘調査を実施してまいりました。この間、国の重要文化財に指定された舟形町西ノ前遺跡の土偶（通称「縄文のビーナス」）をはじめとして、多数の貴重な埋蔵文化財が発見されました。

さらには、発掘調査のみならず、埋蔵文化財の活用及び保護思想の普及啓発の一環として、発掘調査説明会はもとより、出前授業や縄文フェスティバル等の開催などにも力を入れているところであります。こどもからおとなまで、埋蔵文化財を通じてふるさとの歴史に親しみ、そして誇りを感じ、山形県人としてのアイデンティティを確立するよすがとなればと心ひそかに思っている次第です。

こうした中、当センターは、今年度で設立 10 周年を迎えることができました。これもひとえに皆様方のあたたかいご支援とご協力のお陰であり、心からお礼申し上げる次第であります。そこで、これを期に、埋蔵文化財の調査研究のさらなる充実を図るとともに職員がこれまで蓄積した学術的な研究成果を発表する場として「研究紀要」を刊行することと致しました。

この研究紀要が、考古学研究の資料としてのみならず、埋蔵文化財に対する皆様方のご理解を一層深めることとなることを期待いたしまして創刊のことばといたします。

平成 15 年３月

財団法人山形県埋蔵文化財センター
理事長　　木　村　　宰

東北北半における縄文晩期前葉の注口土器

小林　圭一

1　はじめに

注口土器は細い管状の注ぎ口を持つ、急須に似た形態の土器で、多様な器種で構成される縄文時代晩期亀ヶ岡式土器の中にあっても、その精巧な造作と複雑な装飾文様から、亀ヶ岡式の象徴的な存在とも言える器種である。晩期のほぼ全般（大洞Ｂ式～同Ａ式）を通して製作されたが、特にその前半の時期に発達が著しく、変化の過程を鋭敏に示す器種として、型式区分の指標としての役割を担っていることは、多くの研究者の認めるところであろう。

一般に亀ヶ岡式土器は、深鉢・鉢・浅鉢・皿・壺・注口・香炉形土器で構成され、椀形や台付等が加わるが、その母体は後期後葉の瘤付土器にある。それぞれが形態を変化させながら亀ヶ岡式に継承されるが、注口土器は後期の壺形に系統的な脈絡を有しており、晩期になって独立した器種として確立したものである。後・晩期の弁別については、研究者間の合意を見るに至っていないが、晩期を亀ヶ岡式の成立をもって定義づけるならば、「注口土器の確立＝亀ヶ岡式土器の成立」と見ても、大過はないように思われる。

本稿では、亀ヶ岡文化の中心地域である東北北半（青森県・岩手県・秋田県）の注口土器について、後期末葉（瘤付土器第Ⅲ・Ⅳ段階）から晩期前葉（大洞 BC2 式）までの検討を通して、後期注口土器から晩期注口土器への系統的変化の過程を考察する。注口土器についての型式細分案を提示することで、筆者の考える該期の型式編年の一端を明確にし、今後進展するであろう編年研究の指針にしたいと考える。

なお注口土器は注口形、注口付土器とも称されるが、本稿では一般的な注口土器の名称を用いる。また注口土器は液体状の物質を注ぐ目的に使用され、精巧な造作から非日常的な土器と考えられるが、本稿では編年を主眼としたため、用途については言及しない。

2　研究史

注口土器全般の研究史については、鈴木克彦氏の論攷（鈴木克彦 1997）に詳しいので、ここでは亀ヶ岡式成立期の注口土器に関わる研究を主に取り上げる。

亀ヶ岡式の注口土器が考古学的な検討課題として扱われたのは、昭和初期の中谷治宇二郎氏の研究（中谷 1926・27a・27b・36）を嚆矢とする。中谷氏はそれまで土瓶形と急須形に区分されていた注ぎ口を持つ土器に対して、一括して注口土器の名称を与えた先駆者で、取り分け 1927 年に刊行された『注口土器ノ分類ト其ノ地理的分布』は、当時収集し得た殆どの資料を駆使した大著で、今日的に見ても注口土器の類型をほぼ網羅しており、注口土器の形態分類と地理的分布といった考古学の基礎作業をなしたという点で、評価されるものである[1)]。

中谷氏は、注口土器を器形と文様によって四つの型式に分類し、その地域的分布と出現頻度等から文化の領域（文化圏）を設定し、更にはそれ等の文化の伝播経路にも言及した。陸奥式（亀ヶ岡式）に属する注口土器は、Ｃ型（急須型）とＤ型（粗製的型式・退化型式）に区分され、Ｃ・Ｄ型の東北地方を中心とした分布の偏在性と、Ａ型（把手付）→Ｂ型（土瓶型）→Ｃ型と「支配的な型の領域」が北方に漸次移行する文化伝播の在り方が指摘された。

中谷氏の見解は、1930 年前後に論議された所謂「南漸・北漸論争」に直接与するものではなかったが、後者に立脚していたことは明白であり、当時整備されつつあった編年的視点を全く欠いていた。注口土器の変遷序列や研究方法上の不備に対しては山内清男氏の痛烈な批判（山内 1929）があり、特に文様を持たないＤ型注口土器をＣ型からの派生と捉えた系統観は完全に否定され、今日の編年研究において顧みられることは殆どない。

統計的手法や先史地理学的手法を導入した画期的な研究ではあったが、山内氏の精緻な型式研究を眼前にして

は、脆くも崩れ去るしかなかったと言えよう。

1930年山内清男氏により亀ヶ岡式土器の６細別案が提示され、亀ヶ岡式の変遷序列が確定した（山内1930）。今日の晩期編年研究の根幹をなすものであるが、亀ヶ岡式の鉢形についての記載が主であったため、注口土器を直接論究することはなく、関東地方出土の注口土器についての解説にとどまっていた[2)]。

山内氏が注口土器の型式変化に言及したのは、1964年刊行の『日本原始美術 1 縄文式土器』の「文様帯系統論」（山内1964）の注においてである。山内氏は注口土器の型式毎の変化について、その形制[3)]の変化と文様帯の重畳の観点から解説したが、注口土器の型式毎の特性が的確に規定されたことで、鉢形と共に型式判別の指標としての役割が付与され、今日においても編年研究の典拠となっている。筆者の研究も山内氏の方針に準じており、山内氏についての詳細は後述する。また同氏はこの中で亀ヶ岡式９細別案を初めて明記し、注口土器の形制から大洞Ｂ式の細分（大洞B1・B2式）を論じた。しかし他の細分型式（大洞BC1・A2式）の内容について具体的説明はなく、基本資料の提示のないまま、型式名のみが独り歩きする弊害をもたらしたことは否めず、大勢の支持を得るには至らなかった。

山内氏の亀ヶ岡式再細分に先立ち、芹沢長介氏によって「雨滝式」の問題が提起された（芹沢1960）。1958年岩手県雨滝遺跡を再度調査した芹沢氏は、大洞Ｂ式と同BC式が共伴したという層位的状況から、この２型式を「雨滝式」として統合し、1930年に設定された山内氏の編年に疑念を表明した[4)]。これに対し山内氏は亀ヶ岡式の再細分という形で応戦したことは、前記した通りである。芹沢氏は層位的所見を踏まえて、三叉文と羊歯状文は文様系統の差異として、同時期に並行して使用されたと主張したが、今日的知見では、入組三叉文と羊歯状文がある時期併存の関係にあったことは疑いなく、その点では芹沢説にも一理ある。しかし近年の研究の動向が示すように、大洞Ｂ・BC式の区分は、同氏が意図した統合化の歩みとは裏腹に、細分化を指向しており、少なくとも両式が系統的に異なるという考えは否定され（高橋龍三郎1999）、過渡的型式としての大洞BC1式の存在意義が検討されて来ている（金子1992a・b）。

その後、亀ヶ岡式の注口土器を対象とした研究として、藤村東男氏の研究（藤村1972）がある。藤村氏は山内氏が示した型式変化を更に吟味すると共に、注口土器を「急須形で口縁が内傾するもの（Ａ型）」、「急須形で口縁が外反するもの（Ｂ型）」、「ツボ形に近い形態となるもの（Ｃ型）」の３形態に区分し、今日通用となっている分類の基礎を築いた。また藤村氏は後期後半の注口土器との比較から、晩期初頭（大洞Ｂ・BC式）の様相が大きく異なり、晩期になって独自の展開を示すことを指摘した。しかし同氏が対象とした後期後半の注口土器は、瘤付土器前半期に帰属するものであり、大洞Ｂ式の細分に消極的態度をとっていた以上（藤村1980）、懸隔が存するのは当然の帰結であったと言えよう[5)]。

安孫子昭二氏は、藤村氏の分類を踏襲して注口土器を３形式に分類し、山内氏の亀ヶ岡式９細別案に準拠した注口土器の配列を模式図を用いて解説した（安孫子1982）。模式図では、大洞B2式に出揃った各型式の消長が具体的に図示されており、特に大洞BC1式段階が規定されたことで、変遷の細かな階梯が跡づけられた。Ａ・Ｂ形式の組列については、形を変えて各種の概説書にも引用されており（佐原1979、小林達雄1994）、注口土器の型式変化の理解に大きく貢献している。しかし各段階の同時性や型式認定の根拠は不明瞭であり、特に大洞B2式と同BC1式の型式内容には問題を残している。

鈴木克彦氏は、亀ヶ岡式の成立を論じる中で、後期末～大洞Ｂ式の注口土器を考察した（鈴木克彦1981）。鈴木氏は注口土器の底部や体部の形状に判断の基準を見出し、「大洞Ｂ式の中でも古手」の段階を抽出した。取り分け後期末と晩期注口土器の差異について、前者が平底又は上げ底の小形底部であるのに対し、後者は丸底を呈するといった明快な基準を示して、後期末～晩期初頭の３段階の変遷を解説した（図１）。同氏は十腰内第Ⅵ群土器を大洞B1式とする従前の編年（今井・磯崎1968）には慎重な態度をとったが、新たに大洞Ｂ式の細分案を提示したことで、亀ヶ岡式注口土器の成立過程を明確なものとした。しかし後年型式区分に改変が加えられたことは、遺憾と言わざるを得ない（鈴木克彦1997）。

当該期の注口土器に対し最も精緻な編年案を提示しているのは、金子昭彦氏である（金子1991）。金子氏は東北全域の晩期前葉の注口土器を集成して、山内清男氏に準拠した注口土器の細かな階梯案を提示した。同氏は

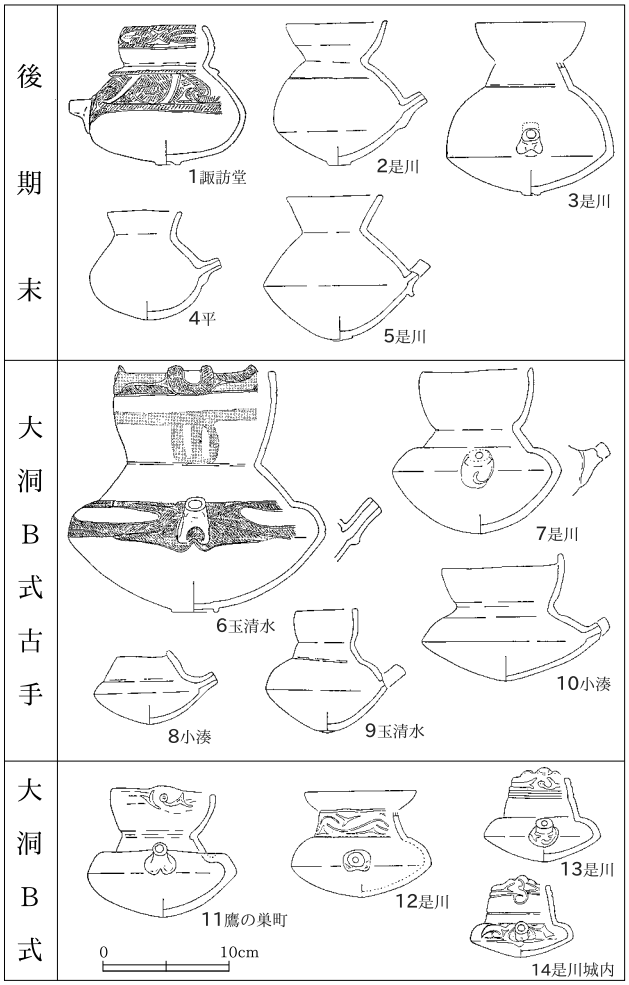


図1　鈴木克彦氏編年案（鈴木克彦1981）

注口土器の種々の属性の消長と、肩の形態変化や文様の在り方等から、注口土器の系統関係を明示した。過渡的型式として大洞 BC1 式を積極的に評価しており、大洞 B2 式を３細分、同 BC2 式を２細分し、結果的に大洞 B2 ～ BC2 式を６階梯とした[6)]。型式学的検討を通して導出された編年であり、出土状況に基づく検証は今後に委ねられるが、各系列の詳細にわたる変遷の過程を示したことで、注口土器に対する系統的理解を飛躍的に進展させており、学ぶべき点は少なくない。

林謙作氏は、岩手県一戸町山井遺跡出土の注口土器に対し、文様帯構成からその変遷を解説した（林ほか 1995）。林氏は口端正面の文様をⅠ文様帯、注口周辺をⅡ文様帯として、それ等が拡大・分裂する過程に注口土器の型式変化を指摘した。特にⅠ文様帯の展開・Ⅱ文様帯の成立を大洞 B1 式と同 B2 式の区分の指標、Ⅱ文様帯の分裂・Ⅱｃ文様帯（頸部文様帯）の成立を大洞 B2 式と同 BC 式の区分の指標、Ⅰ文様帯の分裂と口端部文様帯の分離を大洞 BC 式細分の指標と見なした。注口土器の文様帯構成に明確な変遷序列を指摘しており、筆者も大筋では準拠している。

以上、先学によって示された研究成果を概観した。晩期注口土器は藤村氏が指摘した３類型の区分が通用となっており、各類型は大洞 B1 式の段階に出揃い、以降の消長は一様でなく、漸次収斂化の過程を辿る。注口土器の編年は 1964 年の山内氏の指針が基本となるが、型式毎の特性を指摘したにとどまっており、型式変化の細かな階梯を埋め合わせる作業が求められている。

以下では、前出の鈴木・金子・林氏の研究を参考にして、後期末葉～晩期前葉に至る注口土器の変化の過程について、型式学的検討を試みてみたい。

3　注口土器の分類と編年

A 注口土器の分類

亀ヶ岡式の注口土器は、形態的特徴から三つに大別される（藤村 1972）。筆者も先学の分類に従い、以下のように類型化した。但し分類表記については藤村氏等の表記法は踏襲せず、Ａ・Ｂを逆に表記している[7)]。

Ａ類（図２－１）：「３段作りの注口土器」（林 1976）で、外折する口縁部、内傾する頸部、扁平な体部の三つの部位で構成されるのが通例である。口縁部が内彎して立ち上がり、皿状を呈し、頸部が分立する。藤村氏のＢ型、安孫子氏のＢ形式、金子氏のβ類、須藤隆氏のＦ１類（須藤ほか 1995）に相当する。

Ｂ類（図２－２）：「２段作りの注口土器」（林 前掲）で、内傾する口頸部と扁平な体部を持つ。口頸部は直線的に内傾し、口縁部と頸部の境界の屈折点は存在しない。藤村氏のＡ型、安孫子氏のＡ形式、金子氏のα類、須藤氏のＦ２類（須藤ほか 前掲）に相当する。

Ｃ類：胴の張った壺形を呈し、注口が付される。口頸部は短く、直立乃至外反する。藤村氏のＣ型、安孫子氏のＣ形式、金子氏のγ類に相当する。口縁・頸部が分化したものや、大洞 B1 式に特有の短頸で丸味を帯びた体部の所謂「広口・球胴注口土器」（須藤 1992）も含まれており、更なる細分が必要となる。

これ等の３類型の内、晩期前葉に卓越するのはＡ・Ｂ類である。Ｃ類は後期末～大洞 B1 式期に広く認められるものの、大洞 B2 ～ BC1 式期の様相は判然とせず、同 BC2 式になって再び顕在化し、大洞Ａ式ではＣ類にほ

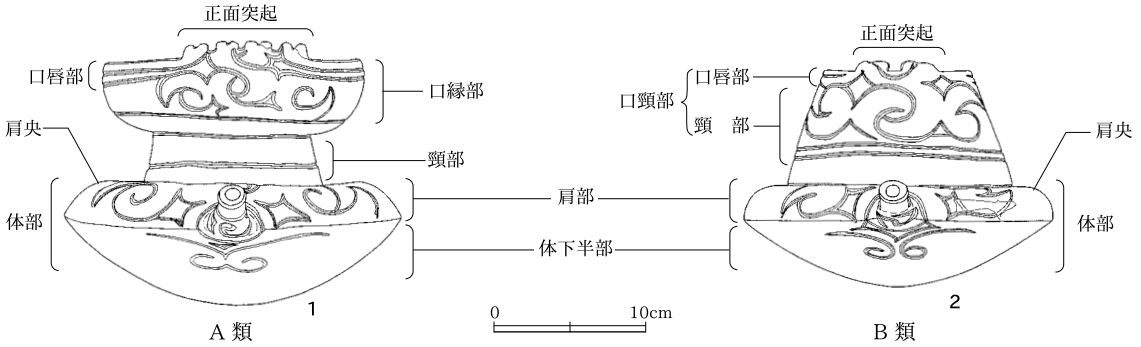


図2　注口土器の種類と部位（是川中居遺跡出土の大洞B2古式）

ぼ収斂される。しかしC類の晩期前葉の系統的脈絡が判然としないため、今回の対象からは除外した。

注口土器の部位の名称については、図2に示した。基本的には金子昭彦氏（金子 1991）に準じているが、若干の補正を加えている。学史的には中谷治宇二郎氏の呼称（中谷 1927a）が存しており、一部参考に供した。

図2は、青森県八戸市是川中居遺跡出土の大洞B2古式の組み合わせである（宇部ほか 2002）。A類は、**口縁部・頸部・体部**の3段構成で、体部の最大径の稜線より下位を**体下半部**（金子氏の胴下半部）、体上半を**肩部**とし、口縁部の口端付近を**口唇部**とする。口唇部は本来「口縁の先端の縁の部分」（青森県教委 1990）を意味するが、口縁部を細分する必要から弾力的に解釈した。B類は、**口頸部・体部**の2段構成で、体部についてはA類と同様であるが、口頸部（金子氏の頸部）はA類に倣って口端付近を**口唇部**（金子氏の口縁部）とし、その下位を**頸部**とする。また両類とも注口部を土器の正面に据えており、注口部直上にある前立て状の口縁部突起は**正面突起**と呼称する[8)]。

B 年代的変遷の前提

注口土器の細かな検討に入る前に、年代的変遷の前提となる型式変化の大枠を提示する必要があろう。

一般に急須形と称される亀ヶ岡式注口土器は、後期の壺形注口土器の系譜を引くものである。東北地方の縄文後期は全期を通じて注口土器が盛行したが、後期前葉では「鉢形系統」が主流を占めたのに対し、後期中葉を境にして「壺形系統」が台頭して主客が逆転し、後期後葉以降は「壺形系統」にほぼ収斂され、晩期亀ヶ岡式へと至る（鈴木克彦 1997）。亀ヶ岡式注口土器の成立を考察する上で、後期中葉が転換期となる。

後期中葉（宝ヶ峯式期）には、「宝ヶ峯型」（鈴木克彦前掲）と称される特徴的な注口土器が登場する。口縁部・頸部・体部の3段構成のものと、口頸部・体部の2段構成の二態が存するが、体部が丸く球状を呈する特徴を持ち、半肉彫的手法で曲線文様が描出され、器面全体は研磨され光沢を有する。前者は晩期A類、後者は晩期B・C類に系統的に連なると考えられ、この宝ヶ峯型注口土器を母体として亀ヶ岡式注口土器が成立する。

山内清男氏は、後期後半の壺形と注口土器の特徴として「Ⅱb文様帯」を指摘した（山内 1964）。Ⅱb文様帯は後期中葉に出現する「頸部と体部の境界に凸彎する彎曲を持った発達が認められる」副文様帯で、特に後期中葉に発達が著しく、凸面は無文もあるが、文様を有し文様帯をなすものも多く、宝ヶ峯型注口土器を特徴づける。以降凸彎の度は少なく或いは痕跡的となって、晩期中葉大洞C1式まで壺形の頸部の装飾の一部として残存が認められる。文様帯としては晩期壺形にのみ継承され、注口土器では後期末の段階でほぼ途絶えることになるが、注口土器のⅡb文様帯の消失が、壺形から独立した器種の確立を意味するとも受け取れるであろう。但し凸彎はなくなるが、晩期A類の頸部はⅡb文様帯の系譜を引くものである（今村 1983）。

後期後葉以降注口土器は3段構成が主体を占め、2段構成は客体として存するのみで、前者は系統的にスムーズに発展して晩期A類の成立に至るのに対し、後者は傍系の位置にあり、晩期B類との系統性は明確とは言い難い。後期後葉（瘤付第Ⅱ・Ⅲ段階）の注口土器A類は装飾性が強く、口縁・頸部が長く細身で、器幅に対する器高が相対的に高く、壺形土器との判別は困難である。更に後期末（瘤付第Ⅳ段階）では無文が一般化して、体部は膨らみを増し、やや押し潰れた感を呈し、頸部の凸彎は僅かとなる。底部は丸底も存するが、小さく作出され

る例が多く、亀ヶ岡式成立前夜の様相を整える。

晩期注口土器の編年については、前記したように山内清男氏によって指針が示されている（山内 1964）。即ち壺形の体部に注口を加えた後期の注口土器の形制は、大洞 B1 式まで継承されるが、大洞 B2 式では体部が低平となり、肩が付き、注口付近を中心に沈線文様が生じ、独立した器種としての歩みを始める。大洞 BC 式では肩の部分が縮小し、頸の下方が広くなり、複雑な文様帯の重畳を示し、大洞 C1 式では口唇や肩が縮小し、隆帯状となり、厚い突起列又は近似のものが加えられ、頸部には磨消縄文の文様帯を持つ。以降大洞 C2 式では平底、大洞 A 式では壺形の復古といった変遷を辿る[9]。

上記の山内氏の定義を図解したのが、金子昭彦氏が作成した模式図（図３）である（金子 1991）。山内氏は形態の分別は特に行わなかったが、その形制の変化、取り分け肩部と文様帯構成（文様帯重畳）の在り方を重視した。A 類の部位毎の形態変化を見ると、口縁部は退縮、頸部は拡大、体部は扁平化の過程を辿り、肩部は縮小し、大洞 C1 式では突起列となる。文様帯では当初沈線のみであった頸部文様が、大洞 BC 式に文様帯と化し、同 C1 式では体下半部にも磨消縄文が展開する。文様は無文から注口付近、更には全周へと発展が見られ、大洞 C1 式には沈線文様から磨消縄文に転換する。

山内氏は従前の大洞 BC 式を同 BC2 式に改称して、大洞 B 式と同 BC 式の間を繋ぐ型式として、大洞 BC1 式を新たに設定した（山内ほか 1971）。従って大洞 BC 式として解説された雨滝例（図３－４）は、大洞 BC2 式に相当すると言えるであろう。

図３を見る限りでは、大洞 B2 式と同 BC2 式の間にはかなりの開きが存する。口縁部を見ると、大洞 B2 式（図３－３）は正面突起直下の文様が口端に露出するのに対し、同 BC2 式（図３－４）では区画沈線が貫通し、明確に分離されており、口端に截痕が加えられる。また口縁部下位の文様が後者では器面を全周展開する。頸部は概して傾きが強くなり、下端の幅が広く、同一文様が規則的に配列され、頸部文様帯を構成する。また肩部は縮小し短く張り出す。両型式間には上記した差異が存するが、系統的発展を考察する上で、その間隙を埋め合わせる作業が求められる。その過渡的資料が大洞 BC1 式に相当する内容であろうと筆者は考える。

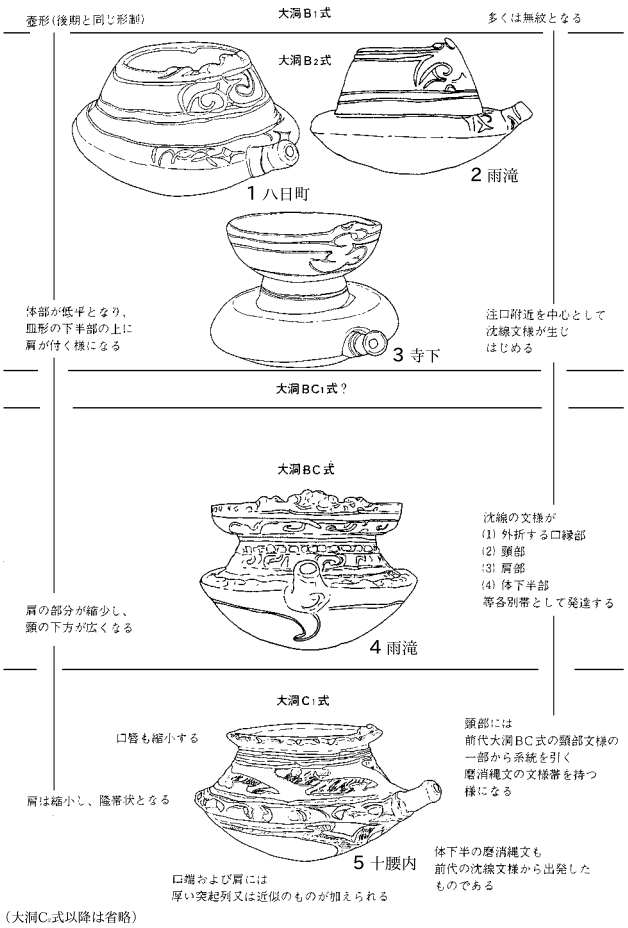
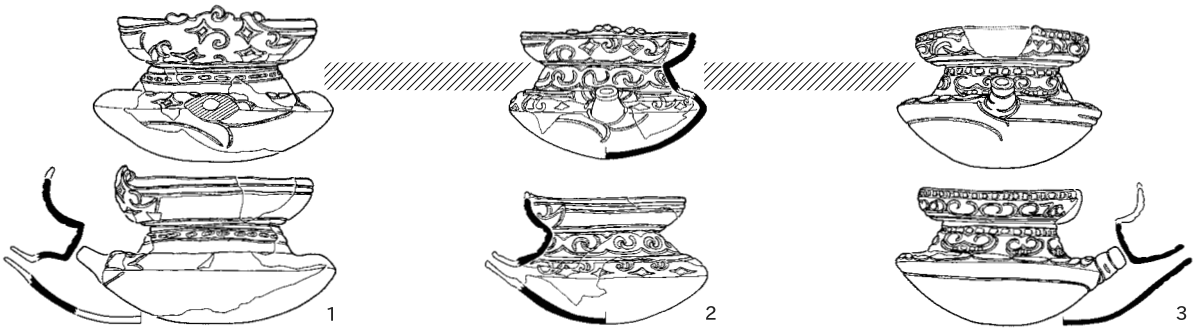


図3　山内氏の注口土器の編年（模式図）

そこで、山内氏の解説から省かれた大洞 BC1 式に対する筆者の理解について、岩手県安代町曲田Ⅰ遺跡ＥⅢ－011 住居跡出土の注口土器３例を基に説明したい（図４）。同住居跡は、入組三叉文と羊歯状文の土器が共伴した事例として著名であり、その位置づけは研究者間で差異が存する。筆者は下記するように、図４－１→２→３の順で新しくなるという前提に立っており、時期幅は限定されるものの、一括性は認めていない[10]。

図４－１は大洞 B2 新式に位置づけられる。口縁部の正面突起直下には巴状文様が展開するが、正面のみで口端に露出し、これを挟んで口唇部には２条の沈線が囲繞される。頸部には沈線間に断続した点列が加えられるが、明確な文様帯は構成せず、肩部の文様は注口付近のみで、頸・肩の接着部が肩央より下位に位置する。山内氏の図３－３に比すと、形制の扁平化が進み、口縁部文様が横位に拡大しており、新しい様相が看取される。

図４－２は大洞 BC1 式に位置づけられる。口縁部は１に類似するが、口唇部上端の沈線が貫通し、巴状文様の上下端が区画される。頸部にはＣ字文[11]が囲繞され



大洞B2新式　　大洞BC1式　　大洞BC2式

図4　曲田Ⅰ遺跡EⅢ-011住居跡出土注口土器〔縮尺1/6〕

頸部文様帯を構成しており、肩部にも菱形とＪ字の交互文様が全周される。口縁部が縮小し、頸部文様帯が生成する等、１よりも新しい様相が看取される。

図４－３は大洞 BC2 式に位置づけられる。口縁部文様は全周するが、正面に形骸化した巴状文様を残し、口唇部に截痕列が囲繞される。頸部には上向きでＣ字状に区画した８単位の文様が配列され、口唇部・頸部上端・肩部文様内に截痕が加えられる。肩部が縮小し短く張り出しており、図３－４の大洞 BC2 式に近似した様相を示す。

上記した３例の比較から、頸部文様帯の生成が大洞 BC1 式の特徴として指摘されるであろう。Ａ類の頸部は後期のⅡｂ文様帯の系譜を引くことは前記したが、その文様化はⅡｂ文様帯の再生を意味するものである。但し凸彎は認められず、壺形と注口土器の頸部の文様帯は相同の関係にあると見なすことができるであろう。

また大洞 BC1 式は肩部文様が器面を全周展開する段階でもある。注口付近に生じた文様が横位に拡大し、背面・側面に配置された文様が全周展開する変遷の経過を辿るが、Ａ類の肩部の全周化は頸部文様帯の生成と軌を一にしており、口縁部文様とは必ずしも同調しない。

Ｃ 一括資料の検討

前項では、注口土器の型式変化について、山内氏の判別基準から型式学的に導出した変化の大枠を提示した。ここでは時間的に限定される一括性の高い資料から、前記した編年観の補強を試みたい。例示する資料は、墓壙に埋納されたり、住居跡に廃棄又は放置されたと考えられる同時期の資料である。

（１）岩手県宮古市近内中村遺跡第 1154 号墓壙跡

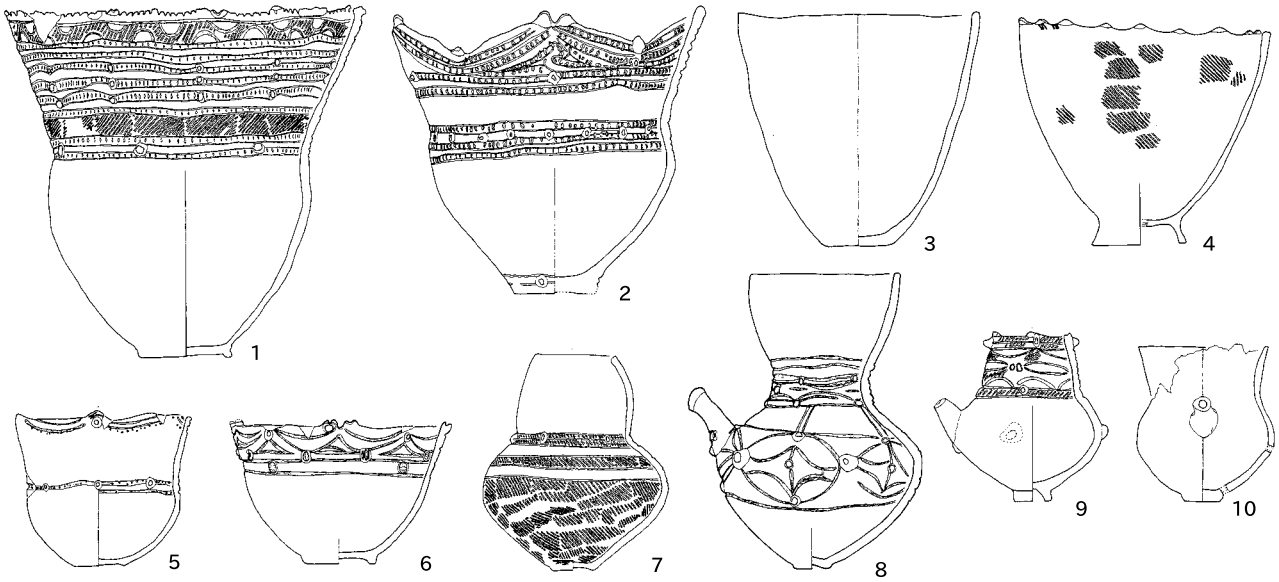
近内中村遺跡（図５－１～10）は、三陸海岸中央部の宮古湾を４㎞遡った山間低地に位置する。第 1154 号墓壙跡は 1.7 × 1.3 ｍの隅丸方形の墓壙で、深鉢４、注口土器３、鉢形２、壺１の計 10 点の完形土器が副葬されていた（鎌田 2001）。深鉢（図５－１・２）の刻目手法の特徴から、後期後葉瘤付土器第Ⅲ段階に相当し、該期の基準資料に位置づけられる（小林圭一 1999）。注口土器は３段構成（８）と２段構成（９・10）からなり、前者は口縁部が長く、頸部と体部に文様を有し、後者は口頸部の内傾と外反の二態が存する。特に８は均整のとれた形態から、注口土器編年を考察する際の該期の基準資料に位置づけておきたい。

（２）岩手県盛岡市堂ヶ沢遺跡Ｋ－ 11 住居跡１号

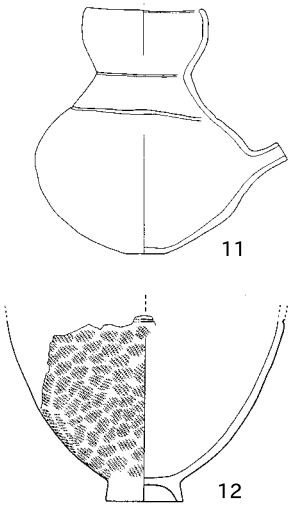
堂ヶ沢遺跡（図５－ 11・12）は、北上川支流雫石川左岸の段丘上に立地する。Ｋ－ 11 住居跡１号は 4.5 × 3.7 ｍの略円形の竪穴住居跡で、床面から注口土器（11）と台付鉢形（12）が出土した（高橋正之ほか 1980）。11 は無文のＡ類で、器高が高く、体部が丸味を帯び、底部がやや平坦に作出される。12 の上半は欠損し文様が判然とせず、明確な型式判別は困難であるが、注口土器の形態的特徴から筆者は大洞 B1 古式に位置づけたいと考える。なお図示はしていないが、住居内の石囲炉に粗製深鉢が埋設されていた。

（３）岩手県九戸村道地Ⅲ遺跡ＦⅡ－９住居址

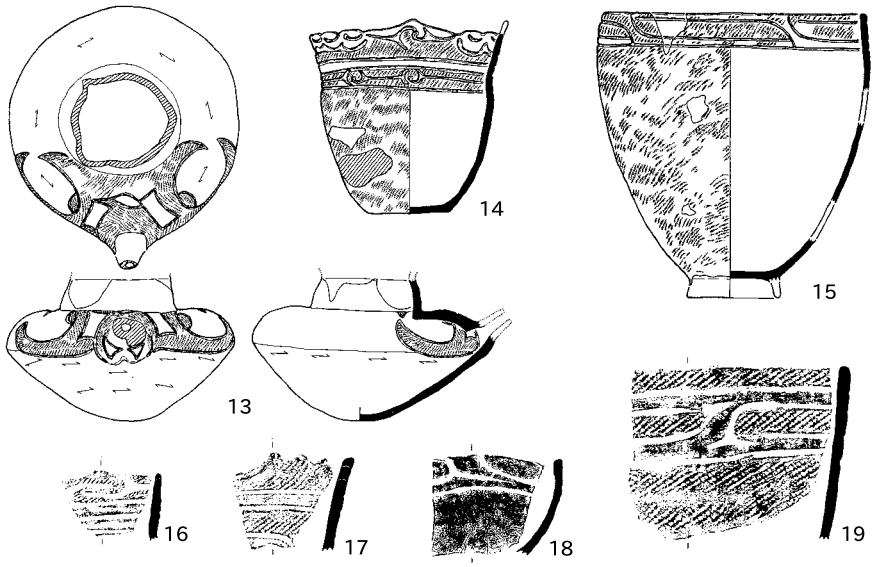
道地Ⅲ遺跡（図５－ 20 ～ 27）は、新井田川（瀬月内川）上流域左岸の丘陵緩斜面に位置する。ＦⅡ－９住居址は 6.2 × 5.6 ｍの略円形の住居跡で、床面から台付浅鉢１、浅鉢１、台付鉢１、壺形１、注口土器２の計６点の完形土器が出土した（種市 1983）。図５－ 20 は口端に３単位の入組三叉文と装飾突起、口縁部に魚眼状三叉文[12]が深く彫り込まれ、入念な磨きが加えられている。22 は緩い小波状口縁で、頸部に６単位の入組帯状文が配されるが、文様帯の下端は頸胴界の屈折部よりも降下して



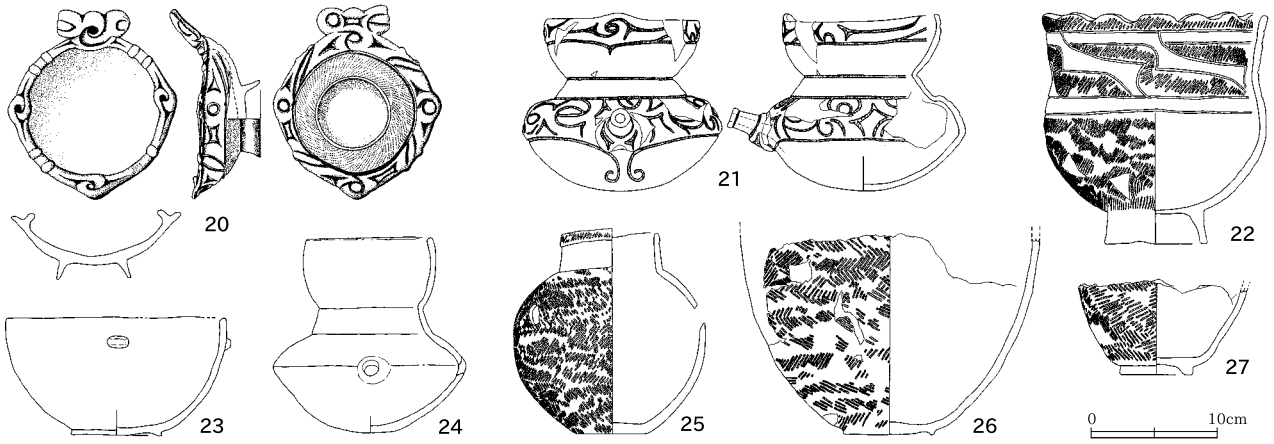
岩手県宮古市近内中村遺跡第1154号墓壙跡出土土器



岩手県盛岡市堂ヶ沢遺跡
K-11住居跡1号出土土器

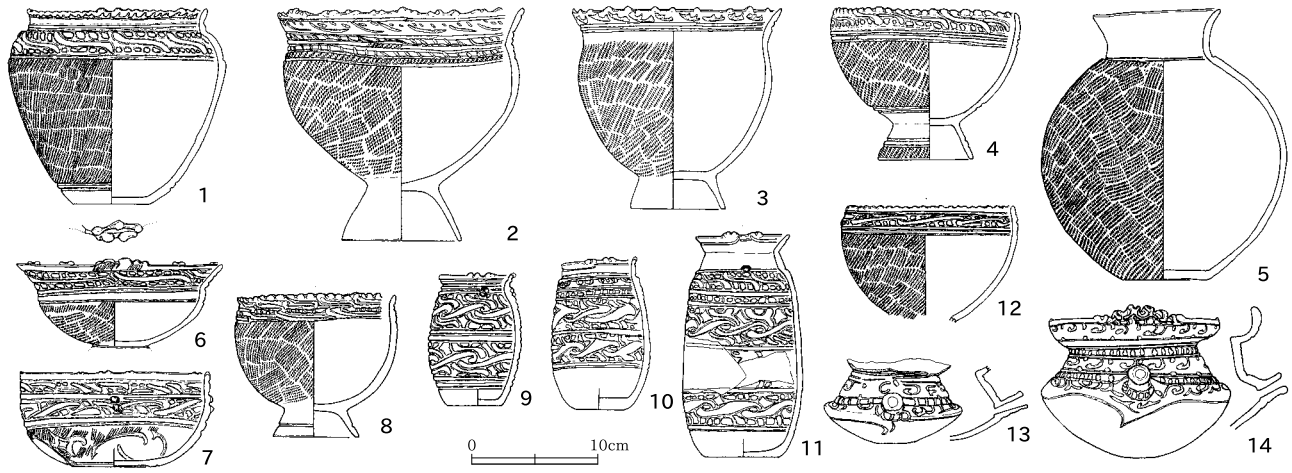


岩手県安代町曲田Ⅰ遺跡GⅣ-014住居跡出土土器



岩手県九戸村道地Ⅲ遺跡FⅡ-9住居址出土土器

図5　遺構内出土の一括資料（1）



青森県平賀町木戸口遺跡第6号竪穴遺構出土土器

図6　遺構内出土の一括資料（2）

おり、筆者は東北北半の大洞 B1 新式に特有の台付鉢と位置づけている（高柳 1993）。注口土器２例（21・24）は、有文・無文の差異はあるが形態的に類似しており、口縁部は長く内彎気味にほぼ直立し、頸部は幅広で短く、体部はやや扁平で明瞭な稜を持ち、丸底を呈する。特に 21 は口縁部と肩部に全周して文様が配置される点で特異で、系統的脈絡は不明と言わざるを得ないが、形制は扁平化の過程を示しており、筆者は大洞 B1 新式の基準資料に位置づけたいと考える[13]。

同じ新井田川（雪谷（ゆきや）川）水系の岩手県軽米町長倉Ｉ遺跡 B21 住居跡状３号（星ほか 2000）でも、床面直上から 24 に類似した注口土器（図７－ 15）が出土しており、同様に大洞 B1 新式に位置づけられる。

（４）岩手県安代町曲田Ｉ遺跡ＧⅣ－ 014 住居跡

曲田Ｉ遺跡は、馬淵川支流安比川水系の山間の緩斜面に位置する。晩期前葉の住居跡が 55 棟検出されており、特に前出のＥⅢ－ 011 住居跡が著名である。ＧⅣ－ 014 住居跡は６× 5.9 ｍの楕円形の住居跡で、東壁際の床面から図５－ 13 ～ 19 が一括出土した（鈴木隆英 1985）。完形土器は鉢・深鉢・注口土器の３点で、前二者（14・15）は口唇の区画線が消失し、口頸部文様が口端に露出する一方で、縄文地文が残存する。14 は正面突起直下に入組三叉文が施される他は、二重の弧線文が巡らされるのみで、入組三叉文の単位文様[14]は生じていない。以上のことから、筆者は大洞 B1 新式～ B2 古式の過渡的資料と位置づける。13 はＡ類であるが、口縁部を欠き、頸部は無文でやや凸彎気味に直立し、肩・頸の接着点が肩央よりも若干下がり、注口の左右には対称の翼状（ガイゼル髭状）の磨消縄文が施される。肩部の文様は矩形の磨消文様の一端が注口直上で入り組み、翼状の文様は先端が上下で対向する鉗脚（蟹の鋏）状を呈しており、大洞 B2 式に盛行する巴状文様の前駆的様相を示す。また注口下部の二袋状突起には三叉状の沈刻が施され、道地Ⅲ例（図５－ 21）に共通する。

（５）青森県平賀町木戸口遺跡第６号竪穴遺構

木戸口遺跡（図６）は、津軽平野南端の丘陵上に位置する。第６号竪穴遺構は住居跡と考えられるが、調査は遺構の 1/3 程度しか実施されず、現存プランから径 10 ｍの大型住居跡であった可能性が推定される。遺物は遺構の中央部から集中して出土しており、一括資料としての資料価値が高いと指摘されている（葛西ほか 1983）。報告書の図示資料は 51 点で、深鉢・台付鉢・鉢・浅鉢・皿・壺・注口土器で構成され、文様は羊歯状文を施したものが殆どで、入組三叉文は一切認められない。注口土器２例（図６－ 13・14）は、いずれもＡ類に属し、頸部文様帯を有し、肩部は縮小し短く張り出している。山内氏の雨滝例（図３－４）に近似しており、大洞 BC2 式に位置づけられる。

（６）小　結

以上、注口土器を出土した一括性の高い事例を紹介した。この他にも、岩手県軽米町駒板遺跡Ⅲ C87-5 ピット（酒井ほか 1986）、青森県浪岡町源常平遺跡第 70 号住居跡（三浦ほか 1978）、青森県青森市長森遺跡第３号住居跡（塩谷・山岸 1985）、秋田県大館市家ノ後遺跡 SK109（谷地ほか 1992）等が挙げられる。特に家ノ後例は大洞 B1 新式の基準資料となるが、注口土器２例は

いずれもＣ類に属するため、今回の対象からは除外した。

近内中村例を瘤付第Ⅲ段階、堂ヶ沢例を大洞 B1 古式、道地Ⅲ例を大洞 B1 新式、曲田Ⅰ例を大洞 B1 新式～ B2 古式の過渡的段階、木戸口例を大洞 BC2 式に位置づけたが、後期末葉～晩期初頭の注口土器Ａ類は、形態的に図５－８→ 11 → 21・24 → 13 の変遷が想定される。即ち形制は扁平化の道程にあり、器高に対する器幅が増し、大洞 B1 新式には体部中央に明瞭な稜線を持つようになる。また同 B1 新式までの多くが、体部中央を境に底部からの立ち上がりと肩の傾きがほぼ同じであるのに対し、曲田Ⅰ例（13）ではその均整が崩れており、肩部上端がやや陥没する。既に道地Ⅲ例（21）にその前兆が看取され、肩部の変化を一括資料から跡づけることが可能となろう。

また木戸口例（図６）は、大洞 BC2 式の型式内容を明示した資料として重要である。入組三叉文は図６－14 の注口下部に存するものの、他の器種には全く認められず、芹沢氏の雨滝式の反証になり得る事例と考える。

これまでの検討から策定された後期末葉～晩期前葉の型式区分は、以下の８階梯である。

「瘤付第Ⅳ段階（後期末）→大洞 B1 古式→同 B1 新式→過渡的段階→同 B2 古式→同 B2 新式→同 BC1 式→同 BC2 式」

この他にも、後述するように大洞 BC2 式終末の段階の抽出が可能と考える。大洞 B2 古式と同 B2 新式については、寺下例（図３－３）を前者、曲田Ⅰ例（図４－１）を後者の基準として細分した。大洞 BC2 式については雨滝例（図３－４）が基準であり、その過渡的段階として曲田Ⅰ例（図４－２）を基準に大洞 BC1 式を設定した。

４　新井田川・馬淵川流域の注口土器の変遷

上記の検討を踏まえて、亀ヶ岡文化の中心地域である新井田川・馬淵川流域出土の注口土器の変遷過程を考察したい。該域を対象とするのは、両水系が通常同一の地域圏として扱われており、他地域に比し報告されている資料が多く、系統的変化が辿り易い点にある。しかし是川中居・八幡遺跡のように下流域に位置する遺跡と、曲田Ⅰ遺跡のように上流域に位置する遺跡とでは、地域的差異も想定されるが、ここでは考慮に入れず、同一圏内の資料として扱っている[15)]。なお山内氏が解説した図３－１～４は、馬淵川中流域から出土した資料である。

Ａ 注口土器Ａ類の変遷

図７は、該域出土の注口土器を上記の型式区分に沿って配列したものである。左端の縦の網点がＡ類、右端がＢ類の変遷系列であるが、先ずはＡ類から検討したい。

後期中葉の宝ヶ峯型注口土器を母体とするＡ類は、後期末～晩期初頭にかけて無文化が進行しており、後期末と晩期初頭の判別は困難を来す。近内中村例（図５－８）の瘤付第Ⅲ段階を基準にすると、この形態に近似した資料が、図７－２・３である。長い口縁部、やや凸彎する頸部、球状を呈する体部、小さな底部、外反気味に屹立する注口等に特徴があり、瘤付第Ⅲ段階に属する資料と考えられる。１・４・５は長く内彎した口縁部を有し、小さな底部が作出されるが、２・３よりも体部が扁平化し、器高に対する器幅が増しており、後期末（瘤付第Ⅳ段階）に位置づけられよう。後期末の一括資料としては、新井田川水系の岩手県駒板遺跡Ⅲ C87-5 ピット（酒井ほか 1986）が存するが、Ａ類の完形資料は認められていない。

大洞 B1 古式も無文が主であるが、体部の扁平化が更に進行し、丸底も多くなる。口縁部は内彎するものが多く、頸部が伸張し、頸部の凸彎も認められる（９）。体部に弱い稜を持つものも存し（６・８～ 10）、注口下部には後期末と同様に二袋状突起が多用される（６・９）。Ａ類は体部よりも頸部の方がより垂直に近い傾きが通例であるが、両者の傾きがほぼ同じ例も多く、９・10 は体部の重心が下方にある下膨れ状を呈する。該期のまとまりとしては、馬淵川水系の山井遺跡下層出土土器（林ほか 1995）が相当するが、大洞 B1 新式も含まれており、後期末と同様に良好な一括資料を欠いている。

大洞 B1 新式では前記したように、新井田川水系の道地Ⅲ遺跡（図５－ 21・24）や長倉Ⅰ遺跡（図７－ 15）で一括資料が得られている。口縁部は内彎気味にほぼ直立し、頸部は幅広で、体部中央には明瞭な稜線が形成される（12 ～ 15）。頸部は無文であるが、12 のように正面突起直下や注口下部に文様を有する例が現れる。既に道地Ⅲ遺跡（図５－ 21）で見たように、全周化した文様構成も存するが、Ａ類に主体的に継承されるものではないであろう。なお注口基部に半球状の膨らみを有する例も認められる（図５－ 21、図７－ 12・15）。

大洞 B1 新式～ B2 古式の過渡的段階の設定を馬淵川上流域の曲田Ⅰ遺跡ＧⅣ－ 014 住居跡（図５－ 13）を基に試みた。注口付近の磨消縄文に特徴づけられ、文様は注口の左右にほぼ対称の翼状（ガイゼル髭状）モチーフと矩形の磨消文で構成され、大洞 B2 式以降の前駆的様相を示す。体下半部の注口直下にはノ字状の磨消縄文が認められる（図７－ 17･18）。肩部はやや彎曲を強め、体下半の傾きとの均衡が崩れ（17 ～ 19）､曲田Ⅰ例（図５－ 13）では肩部上端が肩央よりも陥没する。図７－ 19 は磨消縄文を伴わないが、肩部の形態から該期に位置づけた。口唇部が区画され、正面で入り組む三叉文が囲繞されており、12 からの発展が想定される。この段階は本来大洞 B2 古式に帰属されるものであるが、過渡的様相の強い段階として位置づけておきたい。

大洞 B2 古式は、山内氏が同 B2 式で解説した馬淵川水系の寺下例（20）が基準となる。体部の扁平化が進行し､肩部上端が肩央よりも陥没し､肩の下端は底に向かって垂直に近い角度で落ちる例も見られ（22 ～ 24）、口縁部は器高を減じ皿状を呈し、正面突起が配される。体部の磨消縄文はなくなり、注口付近を中心として巴状の沈線文様が一筆書きで施され、矩形文様の一端を開放した例が多く見られる（23・24）。口縁部の正面突起直下には巴状モチーフを組み合わせた文様が施され、口唇部には巴状文様を基点に２条の沈線が囲繞される（20 ～ 22･24）｡頸部にも１～２条の沈線が囲繞される例が多い。

大洞 B2 新式は曲田Ⅰ例（図４－１）に基づいている。肩部上端の陥没が著しく、肩央が上方に迫り出し、体部の扁平化のピークに当たる。頸部は下端が広がり傾きが強く、文様は平行沈線や断続した点列で構成されるが、文様帯の構成はまだ認められない。口縁部・肩部の文様は更に発展し、横位に拡大する。肩部の文様は、注口を中心として対称に菱形文が配され、巴状のモチーフが描出されるものの、一筆書きではなく、菱形文は完結する（図７－ 26 ～ 31）。26 のように背面・側面に文様が施される例も存するが､全周する傾向はまだ認められない。正面突起の装飾が発達し、刻みや下縁の縁取りが加えられ、菱形文の頂点が口端に突出する。口縁部文様は菱形と棘状文様の末端を入り組ませることで、巴状のモチーフを浮き出させているが、先行型式に比しポジ文様が細く描出されており、形骸化の過程を辿る。また体下半部の注口直下のノ字文は、先行型式では注口付近の稜線から垂下される例が多いのに対し、該期では体下半部に沈線が囲繞され、注口直下でノ字状に反転する。

大洞 BC1 式は曲田Ⅰ例（図４－２）に基づいている。形制は前段階を踏襲するが、肩部は縮小傾向にあり、呼応して肩自体も張り出す。肩部文様が注口付近にとどまらず、器面を全周展開する段階で、頸部にも文様が施されるようになるが、口縁部文様は必ずしも全周展開はしない（図７－ 33 ～ 35）。肩部の注口付近には巴状文様を残す例（33 ～ 35・38）もあるが、Ｃ字文（36・37）等の単位文様で構成される例も現れる。口縁部の正面突起直下には巴状文様が施されるが、繁縟となり文様の形骸化が進行する。頸部にはＣ字文等の同一文様を規則的に配する例（33・37）や、後続型式に盛行する鉢巻き状と枠状の浮文（４単位）を交互に展開する例（38）も散見され、口唇部や肩部上端、頸部上端には截痕列が巡らされる（33・36 ～ 38）。33 の肩部上端には５単位の瘤状突起が付され、後続型式に継承される。

大洞 BC2 式は山内氏の雨滝例（図３－４）に基づいている。肩部は縮小して､体部形態が菱形に近似するが、肩部が張り出す例（図７－ 42 ～ 44）から､段と化し（41･46）、突起列（45）への変遷の過程が想定される。口縁部は短く立ち上がり、正面突起はＢ突起列が発展して珊瑚状突起（42 ～ 44・46・47）と化し、口縁部文様帯は口唇部が区画され口部装飾帯として分離される。口縁部下位にはＣ字文等が全周されるが、正面突起直下のＸ字状のモチーフは大洞 B2 式以来の巴状文様の名残をとどめる。頸部は下端が広がり傾きが強く、Ｃ字文（42）や 38 から発展した鉢巻き状の交互文様（41・44・46・47）等で構成され、上下端にも截痕列を巡らし、３段構成をなす例が多い。肩部上端には突起が付され、体下半部にも截痕列等の文様が進出する（41・46・47）。

45 は肩部に突起列を有し、頸部に４単位からなる鉢巻き状の磨消縄文、体下半部の注口直下にも磨消縄文が施され、無文部は一段低く削り取られる。口縁部は退縮し、口端にＢ突起を巡らし、注口基部は菱形の隆起装飾となり、大洞 C1 式（図３－５）の様相に近似する。しかし体下半部の文様は注口直下のみで、口唇部に刻目隆帯を巡らし、肩部の突起列が上下から入り組む深い陰刻で作出される等、古的様相も残している。体下半部の文

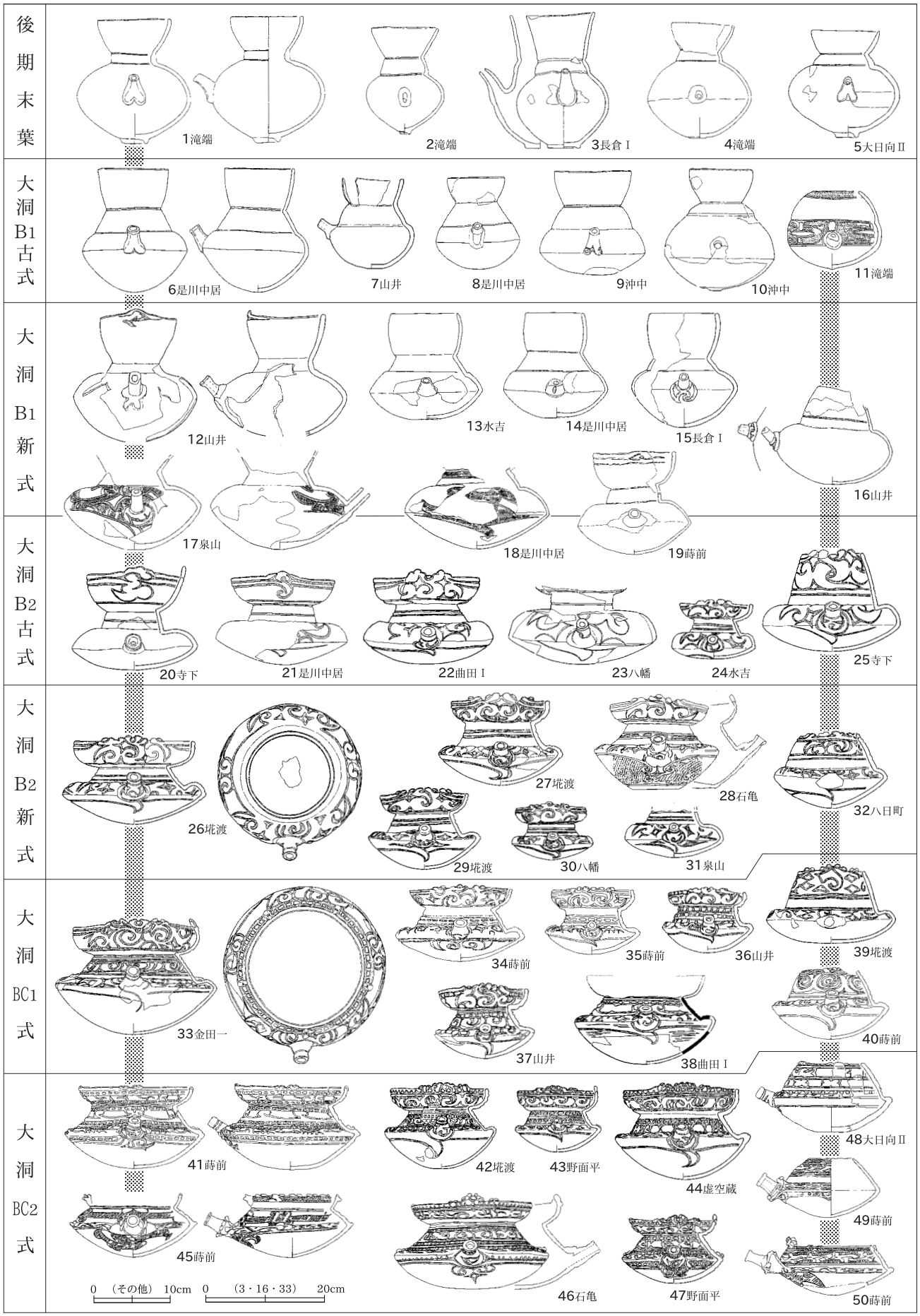


図7　新井田川・馬淵川流域出土注口土器変遷図

様や肩の突起列の様相はＢ類の 50 に近似しており、筆者は大洞 BC2 式終末の段階として位置づけておきたい。

従って大洞 BC2 式のＡ類については、42 ～ 44 → 41・46・47 → 45 の変遷を想定している。

Ｂ 注口土器Ｂ類の変遷

Ｂ類については、図７の右端に変遷序列を示した。Ｂ類は後期中葉宝ヶ峯型の系譜を引くが、後期末葉の様相が判然としない。瘤付第Ⅲ段階の基準である近内中村遺跡で、口頸部が内傾する注口土器（図５－９）や広口壺（図５－７）が検出されており、また当該域でも長倉Ⅰ遺跡（図８－２）に散見され、連綿とした存在が想定される。しかし傍系としての位置にあり、変遷過程はＡ類ほど明確になっていない。Ｂ類が当該域に顕在化するのは大洞 B2 式以降である。

後期末～晩期初頭においては、Ａ類と同様に無文が主体であったと想定されるが、該当する資料は確認できない。最古期に位置づけられる資料は、図７－ 11 であろう。口頸部と肩部の傾きに大きな差はなく、境界で僅かに屈折して傾いたまま口縁が立ち上がる。体部の重心が下位にあり、小さな底部（ボタン状の突出）が作出される。口唇部に縄文帯、肩部に磨消縄文が配されるが、肩部文様は長楕円と短楕円の交互の文様が全周され、後者を三叉文が囲い、前者の上下に平行沈線が垂下され、区画内が磨り消される。形態的特徴から大洞 B1 古式に位置づけられるものであろう。

16 は 11 の系譜を引くと思われる。口頸部・体部の境界の屈折が明確となり、体部の膨らみが強く、大洞 B1 新式に位置づけたが、同 B2 古式との過渡的段階に相当する可能性も否定できない。口頸部は下位に１条の沈線が囲繞され、注口下部に入組三叉文が沈刻される以外、口頸部正面や注口付近の文様は認められない。

大洞 B2 古式になると、Ａ類との共通性が明確となる。25 の形制はＡ類に同調しており、肩部上端が肩央よりも陥没し、扁平化が進行する。口頸部と肩部注口付近にはＡ類と同様の巴状文様が施され、前者の下端は２条の沈線で区画される。体下半部のノ字文は注口直下のみで、沈線は囲繞されない。

大洞 B2 新式は山内氏が同 B2 式で解説した馬淵川水系の八日町例（32）が基準となる。口唇部に区画沈線が巡らされ、口頸部は口端の装飾帯と頸部の文様帯に区分され、後続型式の前駆的様相を示す。口端正面にはＢ突起が発達し、頸部と肩部にはやや形骸化した巴状文様が施され、体下半部には沈線が囲繞され、注口直下でノ字状に反転する。

大洞 BC1 式はＡ類の肩部形態との類似性と、口頸部・肩部文様の全周化を基準に設定されるであろう。39 は口頸部の背面は判然としないが、肩部は全周化しており、両部位の正面には巴状文様が配される。巴状文様には菱形文が二重に付加されており、モチーフ自体は形骸化している。40 は口唇部が区画され、頸部に渦巻き状のＣ字文が全周される。当該域の大洞 BC1 式のＢ類に特有のもので、先行型式まではＡ類に共通した文様で構成されていたが、当該期にはＢ類の独自性が現出する。

大洞 BC2 式では、Ａ類で見たのと同様の肩部の変化が看取される。即ち 48 → 49 → 50 の変遷で、肩部の張り出すものから、隆帯化への過程を辿る。口頸部は口唇部が分離され、口唇部・頸部・頸部下端と３段構成となり、頸部にはＫ字文（羊歯状文）を器面に全周する例が多く、体下半部にも文様が進出する（49）。

50 はＡ類で指摘した大洞 BC2 式終末の段階に相当する。肩部に陰刻による突起列を有し、頸部にはＫ字文（羊歯状文）を巡らし、口端正面にはＡ突起風の大型突起とその周囲にＢ突起が付される。注口基部は菱形の隆起装飾となり、注口は土器本体に比し大きく作出され、体下半部には磨消縄文が施され、規格性を強める。しかしＢ類は大洞 C1 式に継承されることなく、この段階をもってほぼ姿を消す。

5　東北北半出土の注口土器の様相

前項では、同一地域内における注口土器の変遷過程を概観したが、更に対象を広げ東北北半の各地で出土した注口土器の特性を型式毎に検討して、型式変化に対する理解を深めて行きたい。

Ａ 後期末～晩期初頭の注口土器（図８－１～ 23）

後期末（瘤付第Ⅲ・Ⅳ段階）～晩期初頭（大洞 B1 古式）にかけては、Ａ・Ｂ両類とも器面の無文化が進行し、良好な一括資料の類例にも乏しく、型式の判別は主に形制の変化に頼らざるを得ない。

後期末葉（図８－１～９）においては、Ａ類と共にＣ類も認められるが、管見に入ったＢ類に相当する資料は

殆どない。瘤付第Ⅲ段階では、近内中村例（図５－９）以外に図８－１・２を指摘するにとどまる。広口壺との分化は不明瞭で、口頸部は比較的長く、直立気味に内傾しており、Ｃ類との区分も明確ではない。Ａ類の形制については既に記したが、長い口縁部、やや凸彎する頸部、球状を呈する体部、小さく作出された底部に特徴があり、底部は弱い上げ底又は高台が付される。注口は細長く外反気味に屹立し、多くは注口基部直下に袋状の膨らみを持ち、先端がすぼまる傾向にある。

後期最終末の瘤付第Ⅳ段階では、Ｂ類の様相は依然判然としない。Ａ類は体部が球状を呈するが、やや押し潰された形制で、扁平化の兆しを示しており、底部は小さく作出され、弱い上げ底又は高台が付される。口縁部は直線的に外傾する例（６～８）と、内彎気味に立ち上がる例（３・５・９）とがあり、口端に肥厚した山形突起を配し、三角形や三叉状等の彫去を施した立体的な装飾口縁（３～５）も認められる。４はＣ類に含むべき資料で、装飾口縁はＣ類に顕著であるが、前段階の１に萌芽的様相が看取され、大洞 B1 古式まで残存する[16]。また注口直下には二袋状突起を持つ例(図７－１・５)が多く、底部は前段階よりも小さく作出される傾向にあり、特に中央が窪んだボタン状の突出（図８－４）は、二袋状突起と共に大洞 B1 古式にかけて盛行する。

図８－６は体部がほぼ球状を呈し、注口・瘤状突起の間に七宝繋状の文様が構成され、三叉状の沈刻が施される。口縁部には下閉じ弧線が配され、内側の地文が磨り消される。七宝繋状の磨消文様に三叉文を配した注口土器は、後期末の東北南半～東関東にかけて広く分布しており、同様の文様構成を持つ広口壺と共に、広域編年の指標に位置づけられている（小林圭一 1999）。高石野遺跡は八郎潟沿岸に位置しており、恐らく搬入品と思われるが、類似の文様構成の広口壺は、北上川上・中流域の岩手県大緩遺跡（斉藤ほか 1979）や手代森遺跡（佐々木ほか 1986）でも出土している。大洞 B1 式に特有の「広口・球胴注口土器」（須藤 1992）の広域的な広がりの基盤が用意されていたと見ることができるであろう。

大洞 B1 古式では、Ａ・Ｃ類に主体があるが、Ｂ類も僅かに散見される。いずれの類型の形制とも、体部がやや扁平化した球状や、下膨れ状を呈しており、丸底の底部が一般的となる。Ａ類では口縁部が内彎する例が多く、直線的に外傾する例は口縁部が短く立ち上がる（11・12）。頸部の凸彎（10 ～ 12）も見られるが、頸部下端の幅が広がり、頸部と体部の傾きにあまり差のない類型が顕著である。この傾向は後期末（６・８・９）にも認められるが、特に北海道の御殿山式の注口土器に特徴的であり、時期的な関連が想定される[17]。13 ～ 15 は肩部が短く、頸部が伸張し、直線的乃至外彎気味に立ち上がる。特に 15 は十腰内第Ⅵ群土器（今井・磯崎 1968）であり、当該期に特有の形制と言えるかもしれない。

Ｂ類もＡ類と同様に口頸部と肩部の傾きに大きな差はなく、境界で僅かに屈折するのみで、丁度Ａ類の口縁部を省略した形態に相当する（22・23）。図７－ 11 も同様の形制から大洞 B1 古式に位置づけている[18]。

当該期の注口土器は無文が主流であるが、Ｃ類に属する所謂「広口・球胴注口土器」には文様が認められる。図８－ 18 は注口基部を大きく巻き込んだ入組帯状文が横位に展開しており、磨消部に対向した三叉文が施される。19 は６の文様の系譜を引くもので、体上半に下閉じ弧線風の文様が配され、内側の地文が磨り消される。18・19 とも文様は注口基部を中心に展開しており、体部上端に縄文帯や断続した点列が囲繞される。20・21 は口縁部が比較的長く、Ａ・Ｃいずれの類型に含めるのか逡巡する資料であるが、体部上端に文様帯が巡らされており、Ｃ類に近似する。18 ～ 21 の頸・体部境界付近の文様帯は、恐らくⅡｂ文様帯の名残として捉えられるものであろう。Ａ・Ｂ両類は無文が主流であるため、後期の文様帯構成は後期終末の無文化と共に一端消滅したと見ることもできる（林ほか 1995）。しかし主としてＣ類にⅡｂ文様帯と体部の全周化した磨消文様が継承されており、後続型式のＡ類の文様への関与が想定される。その意味では、後期末～晩期初頭にかけてはＣ類が主導的位置を占めていたとも解釈できよう[19]。

鈴木克彦氏は、後・晩期の区分として体部と底部の形状に着目した（鈴木克彦 1981）。即ち球型を呈する体部と小形底部を後期的な要素として弁別したが、鈴木氏が後期末と位置づけた資料（図１－１～５）は、筆者の大洞 B1 古式にほぼ相当する内容である。同氏は十腰内第Ⅵ群土器を大洞 B1 式には含めず後期末に位置づけており、その多くを晩期初頭と考える筆者と大別の区分を異にするのは、当然の帰結であろう。しかし筆者の考え

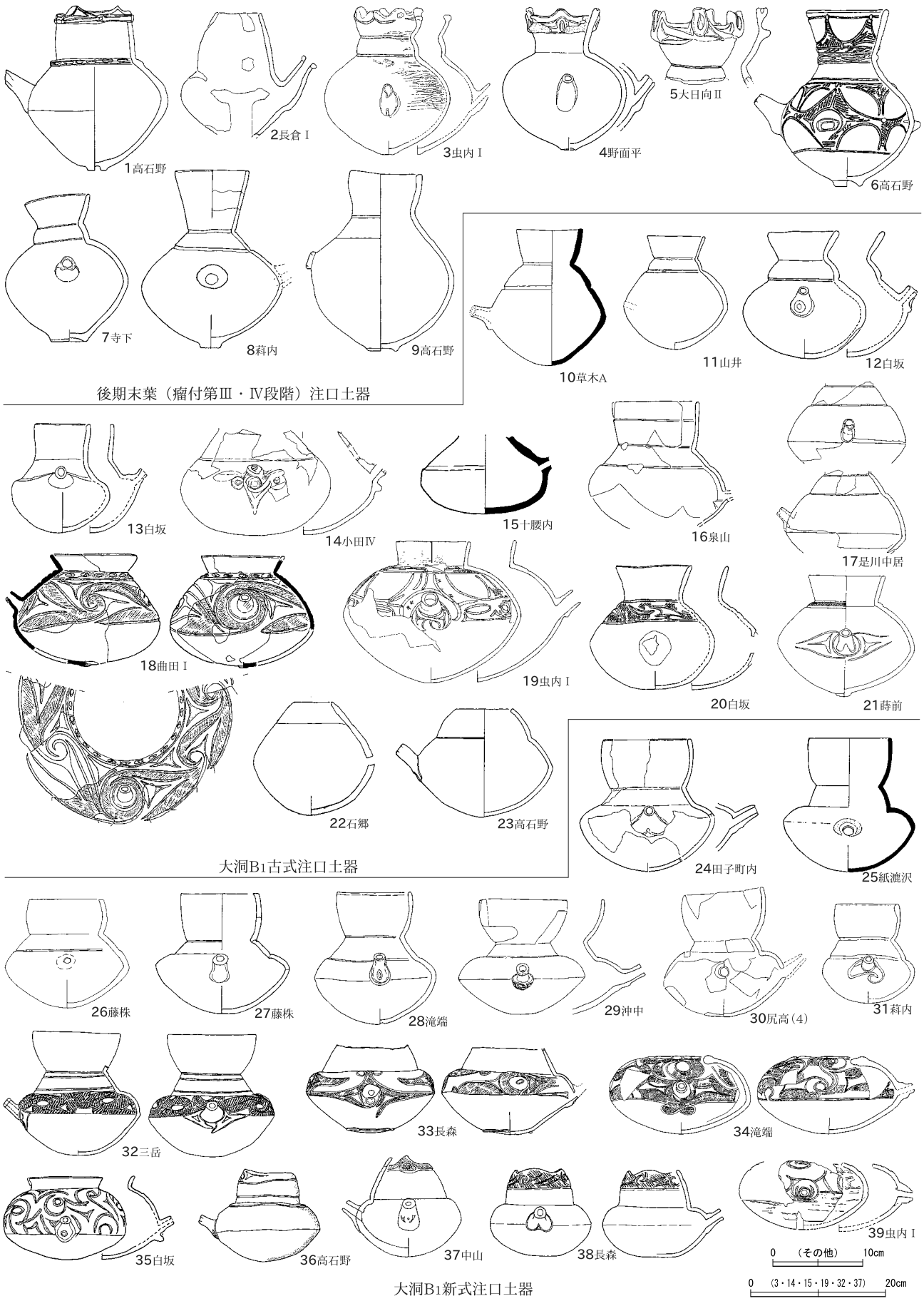


図8　東北北半の後期末葉～晩期初頭の注口土器

る後期末と大洞B1古式とでは継承される属性も多く、判別が困難であることは認めざるを得ない。

東北北半では、後期末～晩期初頭のB類は僅かに散見されるのみである。古的様相を帯びたB類は、寧ろ宮城県北半（沼津貝塚・摺萩遺跡等）に多く認められており、該域には後期末葉においても広口壺が安定して存している。B類の成立に関しては、少なくとも北緯40度以北でその系統性を明確にすることはできず、宮城県北半を中心とした地域に母体があった可能性も考えられる。

B 大洞B1新式の注口土器（図８－24～39）

大洞B1新式については、前記したように岩手県道地Ⅲ遺跡や長倉Ⅰ遺跡で一括資料が得られている。A類については無文が卓越しており、丁寧に磨かれ光沢を持つ。形制は口縁部が内彎気味にほぼ直立し、頸部は幅広く、体部中央には明確な稜線が形成される等、定型化が著しい（24～31）。その分布は新井田川・馬淵川流域のみならず、岩木山麓（25）、米代川水系（26・27）、津軽半島（30）、北上川水系（31）と、東北北半に広く及んでおり、一時期を画する公算は大であろう[20]。

図７－12の口縁部には正面突起が付され、その直下に入組三叉文が施される。山井遺跡下層出土の土器であることから、大洞B2式以前であることはほぼ疑いない（林ほか1995）。正面突起は一山状を呈し、その直下に入組三叉文を単独に配するのみであるが、この三叉文の尻が伸長することで、後続型式に見るような全周した三叉文の成立に至ると解釈され、大洞B2式に盛行する巴状文様の母体になったと考えられる。

当該期のA類の口縁部に文様を有する例は稀有であるが、注口直下の形状は、二袋状突起（24）、入組三叉文（29）、巴状の膨らみ（31）等のバリエーションを有し、新旧の様相が錯綜する。また底部は殆どが丸底を呈するが、小形底部も一部に残存する（図７－13・14）。

当該期の基準資料である道地Ⅲ例（図５－21）は、口縁部と肩部に全周した文様が配置される点で特異な例と言える。本例の口縁部には4単位の入組・魚眼状三叉文を配置し、下端は沈線で区画され、正面で棘状の沈刻が下方に突出する。肩部は注口基部を中心にして、複雑な曲線文様が全周され、下端は体部中央に囲繞された沈線で区画される。肩部の文様は欠損部分もあり詳細に復元できないが、X字状の浮文を意識してか、上下で入り組む単沈線と矩形のモチーフが交互に配される。

口縁部に4単位の魚眼状三叉文を配置した類例は、青森県青森市玉清水遺跡（図１－６）に見ることができる。玉清水例は磨消縄文の文様が口唇部と肩部に巡らされ、口縁部下位には赤彩による弧状の文様が描出される。形制が図７－13・14に近似しており、当該期に位置づけられよう。また道地Ⅲ例の肩部文様に類似した文様を渉猟すると、秋田県森吉町白坂遺跡（図８－35）を挙げることができる。本例はC類に属し、口頸部が短く下膨れ状の形制で、体上半部は入組文と反転して角立てた沈線文様で構成される。白坂例を更に単純化させた文様構成が34であろうか。円文と矩形の入組文で構成され、区画内の地文が磨り消される。道地Ⅲ例（図５－21）や白坂例（図８－35）のような体上半部に展開する全周した文様は、本来は磨消縄文に由来しており、地文を消失したものと筆者は考える。

当該期に相当するA類の磨消縄文の資料を渉猟すると、いずれも全周化した三叉文や入組帯状文に関連した文様で構成される（32・33）。34のような複雑化した入組文様の磨消縄文を経て、道地Ⅲ例や白坂例のような地文を欠いた複雑な沈線文様に至ると考えられるが、体部の全周化した磨消縄文の在り方は、前記したようにC類の所謂「広口・球胴注口土器」に顕著に認められるものであり、その影響関係が想定される。しかし後続型式の注口土器に主体的に継承されることはなく、体部の全周化した磨消縄文は、「広口・球胴注口土器」の廃絶と共に当該期でほぼ姿を消し、後続型式では口唇部と注口付近のみに磨消縄文が施される。

B類はまだ僅かに見られるのみであるが、体部が張り出して、体部中央を境に底部からの立ち上がりと肩の傾きがほぼ等しく、口頸部の傾きが起き上がる傾向にある（36～38）。文様は口唇部に区画沈線が囲繞され、魚眼状又は入組三叉文が施され、縄文地文が認められる。図７－16の山井例は、体部の形状から当該期に位置づけたが、口頸部下端に沈線が囲繞され、大洞B2古式の前駆的様相を示しており、大洞B2古式との過渡的段階に位置する可能性もあろう。

鈴木克彦氏は、円文を中心に置く魚眼状文や体部・底部の形状から、「大洞B式の中でもより古手のもの」（図１－６～10）を抽出した（鈴木克彦1981）。同氏は体

部の稜線の低下と丸底の底部を判別の基準においたが、筆者の大洞 B1 新式にほぼ相当する内容である。同氏の編年案が提示された 1980 年前後の研究の趨勢は、大洞 B1 式の設定には消極的な状況にあったが、十腰内第Ⅵ群土器と大洞 B2 式の間に新たな階梯を挿入した同氏の編年案は、今日的観点では高く評価されるものであった（小林圭一 1999）。しかし後年、「大洞 B 式の中でも古手」の注口土器（図１－６）を大洞 B1 式に位置づける一方で、嘗ての後期末の一部（図１－２）も同型式に変更し、また筆者が大洞 B1 新式の基準資料と考える道地Ⅲ例（図５－ 21）を大洞 B2 式に位置づけている（鈴木克彦 1997）。図の提示のみで、変更の真意ははかりかねるが、改訂された編年には賛同できない。

C 大洞 B2 式の注口土器

大洞 B2 式については、新井田川・馬淵川流域における事例から、大洞 B1 新式～ B2 古式の過渡的段階、大洞 B2 古式、同 B2 新式の３段階に区分した。

（1）大洞 B1 新式～ B2 古式の過渡的段階（図9－1～ 14）

大洞 B1 新式～ B2 古式の過渡的段階は曲田Ⅰ遺跡 G Ⅳ－ 014 住居跡（図５－ 13）を基に設定したが、注口付近の磨消縄文の文様に特徴づけられる。文様は注口の左右に対称に配置され、矩形の磨消文様と先端が細く尖った翼状（ガイゼル髭状）モチーフで構成され、体下半部にもノ字文が施される（図７－ 17・18）。

注口付近に磨消縄文を配したＡ類で、口縁部まで残存する例は少なく、図９－１を指摘するにとどまる。１は口唇部が区画され、魚眼状三叉文が囲繞され、縄文地文を有する。肩部はやや彎曲を強め体下半部との傾きの均衡は崩れるが、口縁部の器高は相対的に高い。２は注口付近に文様は持たないが、口縁部には三叉文の一端と円形刺突から垂下した沈線でノ字状のモチーフが描出される。実測図では縄文の図示はないが、報告書の写真図版では１と同様の縄文地文が認められる。

上記の２例から、口唇部に縄文地文を有し全周された入組・魚眼状三叉文とノ字状の文様が、当該期の口縁部文様の特徴として指摘できるであろう。

図９－５は、図７－ 18 の口縁部と思われる。図９－５は一山状の正面突起直下に入組三叉文を配し、区画沈線がその直下で反転し、巴状文様の前駆的様相をなす[21]。３・８には縄文地文は存しないが、正面突起直下で入り組む三叉文で構成されており、９・10 も類似の資料である。体部中央に明瞭な稜線を持ち、肩部と体下半部の傾きがほぼ等しいか又は肩部がやや彎曲しており、当該期に相当すると判断した。４はＣ類に属するが、口縁部文様や体部の形制がＡ類に準じる稀有な例である。

頸部は無文が通例であるが、縄文帯（図７－ 18）や沈線を巡らした例（図９－３・11・13）も存する。図７－ 18 の頸部上端の縄文帯は、Ⅱｂ文様帯に連なる古的様相と言えるが、沈線の囲繞は後続型式に多用される。

図９－ 12 は口縁部に小型鉢を乗せた特異な例で、体部は低平で、注口付近に磨消縄文の文様が施される。口縁部は小波状を呈し、波底部からＪ字状の短沈線が垂下され、短沈線の間に突出した下閉じの連続弧線文、更に点列帯が巡らされる。正面のノ字状の文様は、２・７のノ字状文との関連を窺わせる。12 の口縁部文様は、当該期の基準資料である図５－ 14 の口縁部文様に近似しており、編年的位置の傍証になり得るかもしれない。

当該期のＢ類の様相はまだ判然としない。特に注口付近の磨消縄文の文様を有する例は確認できず、形制と口縁部の文様から 14 を当該期に相当させた。しかし口端の三山状の突起中央の下縁に縁取りが加えられており、後続型式に位置づけられる可能性もあろう[22]。

山内清男氏は大洞 B2 式の注口付近に沈線文様が生成することを指摘した（山内 1964）。しかしその古的様相を帯びた類例はいずれも磨消縄文の文様であり、縄文地文が消失することで、大洞 B2 式に盛行する巴状文様が成立したと想定される。従って正確には沈線文様がはじめに生じた訳ではなく、磨消縄文からの発展形態として理解されよう。但し図 17 －１、図 18 －１・２のように沈線文様も存してはいるが、後続型式の巴状文様には続いて行かない。注口周辺の磨消縄文は、先行型式の全周化した磨消縄文の系譜を引く可能性も考えられるが、また積極的に結び付ける根拠を欠いており、系統的脈絡は不明と言わざるを得ない。

以上をまとめると、当該期は大洞 B2 式の前駆的様相が整ってくる段階として位置づけられる。Ａ類が主体であり、Ｂ類は依然傍系で、Ｃ類はほぼ姿を消す。形制は扁平化の過程にあり、肩部と体下半部の傾きがほぼ等しく又は肩部がやや彎曲しており、口縁部の器高は相対的に高い。口縁部には正面で入り組む三叉文が囲繞され、

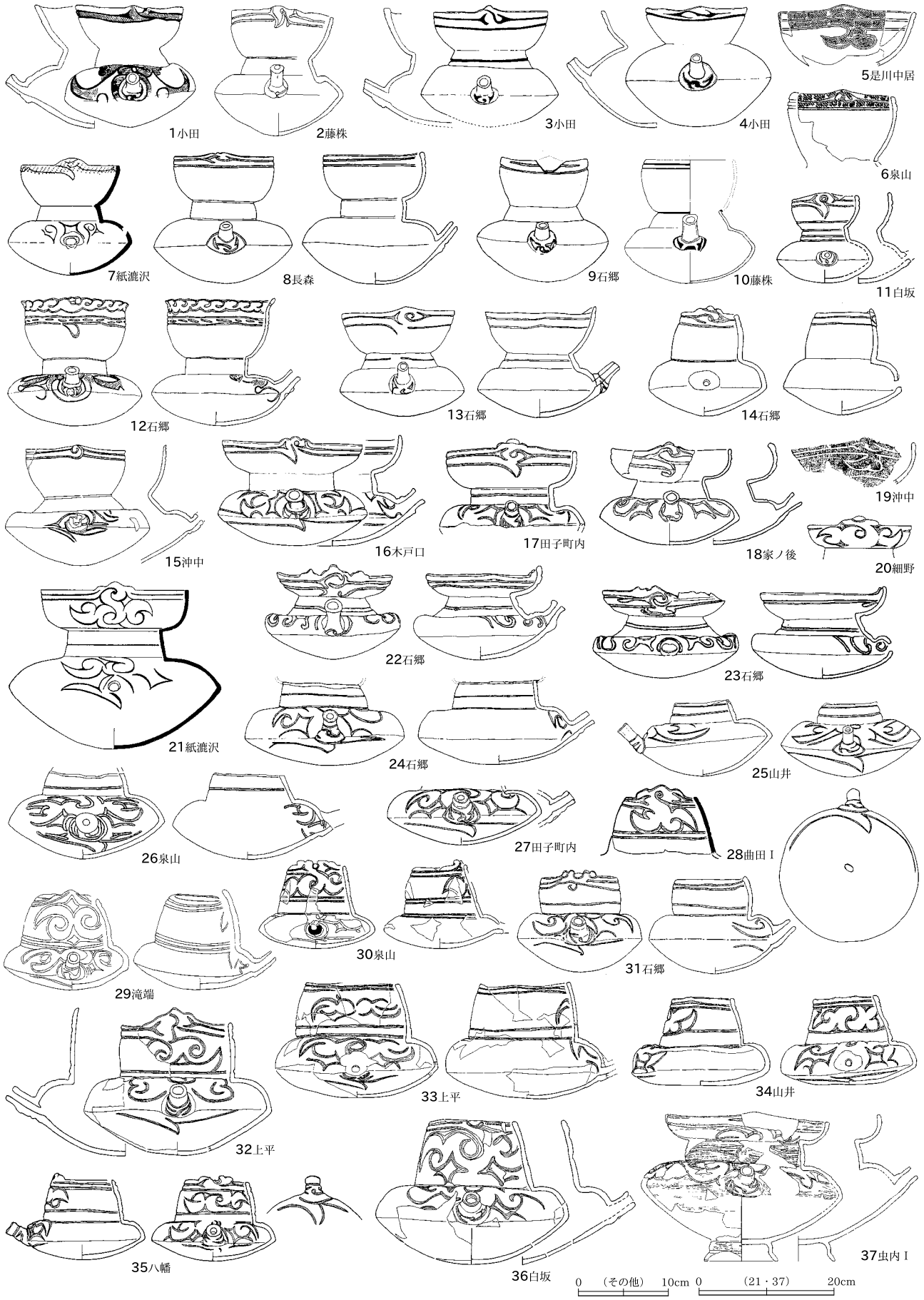


図9　東北北半の大洞B2古式注口土器

注口付近は磨消縄文の文様で構成される例が多く、体下半部にはノ字文の原型が現れる。口縁部にもノ字状の文様が生じており、縄文地文を残す例も多い。正面突起は一山状を呈する例が多く、注口基部の半球状の膨らみが明瞭となり、注口直下には入組三叉文の沈刻が通例となる。しかし二袋状突起の痕跡をとどめ、対向する三叉状の沈刻を施す例（図９－10・12）も散見される。

金子昭彦氏は「大洞 B2 式の古い部分」の特徴として、「磨消縄文が見られるものがほとんどである」との見解を示している（金子 1991）。筆者の当該期が相当することになるが、金子氏が図示した型式内容には、筆者の大洞 B1 新式も含まれており、やや見解を異にしている。

鈴木克彦氏は大洞 B2 式の注口土器として、図１－11 ～ 14 を提示した（鈴木克彦 1981）。この内、11・12 が当該期に相当すると考えられる。11 は一山状の正面突起直下に入組三叉文を配するのみで、肩部上端が陥没し、注口直下に二袋状突起が認められる。図７－12 の系譜を引くものであり、大洞 B2 式の中でも初現となる資料であろう。図１－12 は頸部に横位 S 字状の入組文様を巡らし、その咬合部に対向した三叉文が配され、頸部文様帯を持つ特異な例である。注口直下の二袋状突起には三叉状の沈刻が施されており、体部の形制からも当該期に相当すると思われる。

（２）大洞 B2 古式（図９－15 ～ 37）

大洞 B2 古式は山内氏の寺下例（図７－20）が基準であるが、当該期からＢ類が顕著になり、Ａ・Ｂ両類の組み合わせは、是川中居遺跡（図２）が基準となる。

寺下例（図７－20）は、口端正面に三山状突起[23]を配し、口唇部には正面で入り組む三叉文と区画沈線が囲繞され、口縁部正面には区画沈線から垂下した巴状の原初的文様が施され、注口付近には文様を持たない。肩部上端の陥没も弱く、先行型式で指摘した特徴に近似しており、大洞 B2 古式でもより古相に位置づけられよう。

是川中居例（図２）は、体部の形制や口縁・口頸部と肩部の文様が共通しており、同時期の組み合わせと見なし得るであろう。いずれも肩部上端が陥没して、肩の下端は垂直に近い角度となり、口縁・口頸部文様は巴状文様、注口付近は一筆書きの巴状文様で構成される。注口下部には入組三叉文の沈刻、注口直下の体下半部には稜線から垂下した双頭渦文又はそれに類する沈線文様が施される。先の寺下例よりは新しい様相を有しており、大洞 B2 古式は先行型式に近似する古相と、口縁部文様が発達する新相とに二分される可能性が考えられる。

図９－15 ～ 19 は、大洞 B2 古式の中でも古相に位置づけられる。15 は口縁部の器高が高く、前段階に近似するが、肩部上端が陥没し、注口付近には巴状文様の原初的な文様が施される。16 ～ 18 は口端正面に三山状突起が配され、口唇部には正面で入り組む三叉文が囲繞され、その直下の区画沈線は正面でノ字状に反転する。注口付近の文様は左右対称の鉗脚（蟹の鋏）状のモチーフで構成されたり（16）、矩形文様の一端が開放されており（17・18）、肩部上端の陥没は僅かである。口縁部のノ字状文は２・７の系譜を引くもので、19 や寺下例（図７－20）を経て、図２に見るような巴状文様が成立したと想定され、口唇部に三叉文のモチーフを残す例は古的様相と考えられる。なお口縁部と肩部文様の型式学的な検討については後述する。

当該型式からＢ類の存在が顕著になる。口頸部文様はＡ類の口縁部文様に共通するが、28・29 のように対向した一組の巴状文様で構成されるものが古相である。後述するように、肩部文様の鉗脚状のモチーフは古い特徴であり、29 の肩部文様がその傍証になるもので、先のＡ類の寺下例の段階に相当するものであろう。

正面突起としてはＡ類と同様に三山状突起も存する（28・29・32）が、Ｂ突起が並立され突起の間に半円を加えた例も多く見られる（図７－25、図９－30・31・35）。但し口唇部の三叉文と口縁部の巴状文様を同居させた例（30・32・35）や、口唇部を区画した例（31・33 ～ 35）が存しており、Ａ類との差異も認められる。31 のＪ字状の短沈線はノ字状文との関連を有するものであろう。鈴木克彦氏が大洞Ｂ式として提示した図１－13・14 も、当該期に相当すると思われる。いずれも三山状突起が付され、13 の口唇部には正面で入り組む三叉文とその直下に平行沈線が囲繞されており、14 の正面にはＡ類に見られるような巴状文様の原初的形態が認められる。

Ｂ類の肩部文様もＡ類に共通しており、注口を中心として巴状の沈線文様が一筆書きで施され、矩形文様の一端を開放した例が多く見られる（図９－29・31・33・36）。またＢ類には、体部の低平化が著しく、平底に近

い形制のもの（30・33・34）も存しており、形制についても独自の系統が想定される。

Ｂ類が顕在化するのとは対照的に、Ｃ類が忽然と姿を消す。Ｃ類が果たして来た役割をＢ類が代用するようになったのか、その相関性は判然としない。しかしＢ類の文様の生成には、Ａ類が深く関与していたことは疑いなく、Ａ・Ｂ両類のセット関係が確立したという点では、当該期が亀ヶ岡式注口土器の成立を考える上での画期になるものであろう。

37 は高台付の底部を有するＡ類の特異な例である。口縁部と注口付近に変形化した巴状文様が施され、頸部にも沈線文様を有する。高台上部が凸彎し下端が開くが、凸彎の度合いは弱い。台付浅鉢・鉢の脚部の凸彎は、同時期の壺形の頸部の凸彎との相関性を有しており、大洞 B2 新式～同 BC1 式にかけて特に発達が著しい。37 は凸彎の度合いが弱く、体部の形制からも当該期の位置づけが妥当であると判断される。

Ａ・Ｂ両類の注口部の特徴としては、注口基部に半球状の膨らみを持つようになり、注口直下に入組三叉文の沈刻が施される。また注口先端には環状の沈線が施される例が多く見られ、後続型式に継承される。

金子昭彦氏は、「大洞 B2 式の中位の部分」として、「磨消縄文はなくなり、注口付近を中心とした沈線文様が施される段階」と規定し、その文様は一筆書きのように続く傾向を指摘した（金子 1991）。筆者の大洞 B2 古式も同様の理解に基づいているが、同氏が図示した資料には、筆者の大洞 B1 新式～ B2 古式の過渡的段階に相当する例が多く認められ、筆者が古相と考える木戸口例（図９－ 16）や寺下例（図７－ 20）が「大洞 B2 式の新しい部分」に位置づけられる等、同氏の型式内容とは必ずしも合致しない。

（３）大洞 B2 新式（図 10 － 1 ～ 11・13・16）

大洞 B2 新式については、Ａ類は曲田Ｉ遺跡（図４－１）、Ｂ類は山内氏の八日町例（図７－ 32）を基に設定した。その他にＡ類では垪渡（ごみわたり）例（図７－ 26）と上平例（図 10 － 1）、Ｂ類では泉山例（図 10 － 5）と上平例（図 10 － 9）が基準的な資料と考える。

Ａ・Ｂ両類とも形制は肩部上端の陥没が著しく、肩央が上方に迫り出し、扁平化のピークに当たる。肩部の下端は底に向かって垂直に近い角度で落ちて、断面形態は著しい非対称を呈しており、取り分けＡ類に顕著である。

Ａ類は頸部下端が広がり傾きが強く、頸部には平行沈線や点列帯が囲繞されるのみで、文様帯の構成は認められない。口縁部・肩部の文様は、先行型式よりも横位に拡大する傾向にある。肩部の文様は注口付近のみならず背面・側面にも施されるようになるが、巴状のモチーフが基本であり、同一文様による全周化には至っていない。但し文様の上・下端が沈線で連結された例が現れる（図７－ 26、図 10 － 1 ・ 4）。注口の左右には菱形文が施されるが、先行型式で見た矩形の一端が開放されたり、沈線が伸びる例は少なく、菱形のみで完結する例が多く、菱形の頂点に対向して三叉状・棘状の沈刻が施される（図７－ 26、図 10 － 1・4）。文様が横位に拡大するのは、巴状文様の形骸化に伴って、菱形や半円等の付加的要素が加えられたり、入り組む沈線が単線から複線構成に変化したことによるものと考えられる。

口縁部には、三山状突起の左右にＢ突起が配されるようになる。口唇部上端の沈線は、Ｂ突起中央の窪み又は突起間から垂下し、口端に並行して囲繞され、正面突起の反対側で同様に口端に露出する例が多く見られ（図７－ 26 ～ 29、図 10 － 1 ・ 2 ・ 4）、三山状突起の頂部が分割され菱形文の頂点が露出したり（図７－ 27）、半円が施されたり（図７－ 26、図 10 － 2）と、三山状突起が主流であった先行型式からの発展が看取される。

Ｂ類は山内氏の八日町例（図７－ 32）が基準となる。八日町例は口頸部・肩部の文様はＡ類に同調しているが、口唇部に区画沈線が囲繞され、口部の装飾帯が分離される。口唇部に沈線を囲繞する例は先行型式に認められており（図９－ 31・33 ～ 35）、Ａ類とは異なった系統の存在が想定される。

上平例（図 10 － 9）の肩部文様は、正面・背面が上平例（図 10 － 1）、側面が垪渡例（図７－ 26）に近似しており、体部の形制もこれ等に共通する。口唇部は沈線で区画され、正面突起はＡ類と同様の三山状突起の頂部が分割された突起が配され、また背面・側面にもＢ突起が付される。頸部文様は菱形や半円文様が付加され、巴状文様は形骸化しており、背面にも同様の文様が施され、頸部下端には点列帯が囲繞される。当該期のＡ類も頸部に点列帯を囲繞する例が多く、Ｂ類頸部下端の平行沈線・点列帯は、Ａ類頸部文様との相関性を有すること

図10　東北北半の大洞B2新式注口土器（大洞B2古式含む）

を窺わせる事例である。

Ｂ類はＡ類に比べると、肩部上端の陥没を持たない例が多く認められる（図 10 － 5 ～ 8 ・10、図 17 － 5）。Ａ類にも存する（図７－ 31）が、Ｂ類ほど顕著ではない。またＢ類の口頸部・肩部の文様は、Ａ類に同調する例が多いが、全周展開する例も現れる。

図 10 － 13・16 は、口頸部文様が全周した例である。13 は肩部文様も側面に施されており、全周化の道程にある。いずれも菱形入組文で構成され、入り組む沈線が複線で構成される点で共通する。Ｂ類においては、Ａ類に先駆けて口頸部文様の全周化が成立するのであろう。しかし巴状文様から生成したのではなく、菱形入組文であることは、Ｂ類独自の系統が存していたように思われる。

図 10 － 12 は、口頸部と肩部が全周化している。口

頸部には対向した弧線文と菱形文、肩部には一端が渦巻く菱形文と菱形・三叉状の文様が交互に配されており、両文様帯とも巴状文様とは無関係の同一文様が規則的に繰り返される。12 の注口直下には二袋状突起の痕跡が認められ、体下半部のノ字文も正面のみで全周しないことから、当該期よりも古く位置づけられる可能性が考えられる。

その他にも古的様相を持った類例を渉猟すると、図 10 － 14・15 が挙げられる。15 の肩部文様は上下で入り組む矩形文様と弧線文が交互に配され全周展開する。口頸部には大洞 B2 古式 A 類で指摘した巴状文様の原初的形態が存しており、正面突起も三山状を呈する。14 は肩部が無文であるが、口頸部に上下で入り組む矩形文様と楕円文が交互に配され全周化しており、体部の形制も古相を呈する。

筆者は、図 10 － 12・14・15 を大洞 B2 古式に位置づけたいと考えている。巴状文様とは関わりを持たない全周化した系統、即ち矩形・菱形入組文を施した系統が大洞 B2 古式以来存続していたと想定され、入り組む沈線が、単線から 13・16 のような複線構成へと変化したと考えられる[24]。

A・B 両類とも体下半部の文様には、ノ字文が多用される。先行型式のノ字文は稜線から注口直下に向かって沈線が垂下され、反転して稜線に戻る構成であるのに対して、当該期では体下半部に沈線が囲繞され、注口直下でノ字状に垂下して反転する構成が多くなる。沈線が囲繞されるということは、体下半部が文様帯として強く意識され始めたことを窺わせる。特に B 類では、図 10 － 7・13、図 17 － 5 のように、注口直下に対向した巴状文様が施されており、大洞 BC2 式終末の段階に盛行する磨消縄文の萌芽が現出する。

金子昭彦氏は、「大洞 B2 式の新しい部分」として、「単位文様（あるいは文様要素）が出現しはじめる段階」であり、「特に肩部に注口を中心として対称に菱形文を配すること」が多く、「その後の段階のように単位文様を規則的に配列して肩部を一周するという傾向は見られない」ことを指摘している（金子 1991）。しかし発表直後に「肩部が縮小して張り、（口）頸部あるいは頸部の文様（沈線は含まない）が注口上付近のみに留まらずに広がっている場合と、肩部の文様が全周展開していなくとも注口と反対の位置に施文されている場合は、大洞 BC1 式に含めた方が良さそうだと思うようになった」として、編年案を改訂している（金子 1992a）。

筆者の大洞 B2 新式は、金子氏の当初の編年とほぼ同様の理解に基づいている。しかし同氏の「大洞 B2 式の新しい部分」には、前記したように筆者の大洞 B2 古式の資料が多数含まれており、必ずしも合致した内容とはなっていない。また改訂後の編年で見ると、筆者の大洞 B2 新式の多くが、金子氏の大洞 BC1 式に相当することになるであろう。

筆者の大洞 B2 新式が、果たして独立した型式として設定が可能であるのか、問題になるところである。筆者は図 7 － 26 → 33 の変遷を想定しており、截痕を加えた段階が大洞 BC1 式と認識している。従ってその直前の段階として、当該型式の設定を試みた次第である。

D 大洞 BC1 式の注口土器（図 11）

大洞 BC1 式は、山内清男氏によって示された大洞 B2 式（図 3 － 1 ～ 3）と同 BC2 式（図 3 － 4）の間を埋める過渡的様相の段階として、曲田 I 遺跡 E Ⅲ － 011 住居跡出土の注口土器の比較から、設定したものである（図 4 － 2）。その特徴は、A 類における頸部文様帯の生成と、肩部文様帯の全周化にあり、文様においては截痕が加えられる。

A 類では金田一例（図 7 － 33）が最も良好な例となる。器高に対する口縁部の比率が先行型式よりも減じており、肩部は張り出すが迫り上がりは弱く、肩部の縮小化の道程を示す。口縁部には巴状文様が施されるが、渦巻菱形文の頂点は口端や区画沈線にそれぞれ接して開き、文様の繁縟化が顕著となる。しかし文様は正面のみで全周展開せず、正面突起には突起中央の窪みと突起間に刻みや文様が加味される。頸部には上下端の平行沈線とその間に単位文様として C 字文が囲繞される。肩部の上端には截痕列が巡らされ、注口付近と背面には巴状文様、側面にもそれに類する C 字状の文様が施されるが、文様帯の上下幅が縮小しており、文様は繁縟化する。

筆者は図 7 － 26 と 33 を型式差と見なし、26 の発展形態を 33 と位置づけている。33 は肩部文様の全周化という点では、好適な例とは言い難いが、截痕列が囲繞されており、大洞 BC 式の範疇に含め得るものである。筆者の変遷の前提が成り立たず、26 と 33 を同一型式

に含めるとなると、前記した筆者の大洞B2新式の多くは当該型式に包括すべきものとなろう。文様帯構成の差異を除くと、それだけ先行型式との分別が困難であることは認めざるを得ない。

当該期A類の口縁部文様は、前記したように巴状文様は残るものの繁縟化が著しく、巴状文様は形骸化の過程を辿る。口縁部文様が全周化された例（図７－36、図11－1・3・6）は、いずれもC字文で構成されており、口唇部に沈線が囲繞され、口部装飾帯が区分される例も現出する（図４－２、図11－３・６）。図７－36は正面突起直下に巴状文様を残し、図11－1は口唇部の区画沈線が正面でJ字状の文様に参入し途切れており、いずれも口端に截痕列が巡らされる。図７－37は正面突起直下に巴状文様を施し、背面･側面にも文様を持つが、特に側面に四葉状文様が施され、口唇部の２条の沈線間には截痕が加えられる。なお図７－34・35の口縁部文様は、正面のみで全周展開しない。

当該期は頸部文様帯の出現が大きな特徴となるが、頸部が点列帯（図７－34・35、図11－３・５・６）や截痕列（図11－９）のみで、文様帯を構成しない例も多く存しており、また両者が共存した例（図７－36、図11－１）も見られる。頸部文様帯としてはC字文を囲繞した例が多く（図４－２、図７－33・37）、後続型式で盛行する鉢巻き状と枠状の浮文を交互に配置した例も現れ（図７－38、図11－２）、上下端には截痕列･点列帯が巡らされる（図７－37・38、図11－２）。

肩部文様の全周化も当該期の特徴であるが、C字文で構成される例が多く（図７－36・37、図11－２・８・９）、後続型式の肩部に多用される陰刻と羊歯状文を交互に配置した文様の初現形態も現出する(図11－1・3・10)。巴状文様も残存する（図７－33～35・38、図11－４～６）が、全周化した例も認められる（図７－34・38、図11－４・６）。特に図７－38は図７－33と同様の巴状文様で構成されるが、正面・背面・側面のそれぞれの文様の間に対向した棘状の沈刻を加えることで、全周化に至っている。

A類の図11－４・７は、その形制から当該期に位置づけたが、系統的脈絡は判然としない。４は口縁部に４単位の魚眼状三叉文を配し、頸部は平行沈線文のみで構成される。肩部は巴状及びそれに類する文様で全周され、繁縟化しており、平底を呈する。７は全ての文様帯が羊歯状文で構成され、体部の断面形態は古相を呈する。

B類は先行型式でも指摘したように、A類に比べ肩部上端の陥没は顕著でなく、肩部が横に張り出した形制が多く、A類と同様に横位に突出して、肩部文様が正面から確認しにくい例も多くなる（図７－40、図11－11・12・25）。口頸部に巴状文様を残す例は少なく（図７－39、図11－11・16・17・18）、肩部もC字文等の単位文様で構成される例（図11－12･16）が殆どで、巴状文様もやはり少なくなる（図11－13・17）。

口頸部は口唇部が区画され、頸部の巴状文様は先行型式のような菱形の一端の渦巻き又は入り組みを主とした構成から、C字文と同様に弧線と棘状沈刻の交互文様によって描出されており、菱形文は付加されるのみで、形骸化が進行する。

その他の口頸部文様としては、羊歯状文（図11－12)、鉢巻き状文様（13・15)、菱形入組文（14・19）等が認められる。特に渦巻き状のC字文で構成される例（図７－40、図11－21～23）は、漆塗りの精巧な造作であり、新井田川・馬淵川流域に特徴的な分布を示している。その点で秋田県の横手盆地に位置する平鹿例（25）は、該域からもたらされた可能性も想定される。

B類の口頸部下端には、点列帯が囲繞される例が多い（図11－11・12・17・18・20・22・25)。先行型式にも見られ（図10－９)、この部位の文様がA類の頸部文様と相関性を有することは前記したが、当該期のB類に特に顕著であり､判別基準になり得るかもしれない。頸部下端に点列帯を持つことで、口頸部の文様帯は口唇部・頸部・頸部下端の３段構成をとる例が多くなる。

図11－28は、先行型式（図10－13・16）の系譜を引くと考えられる。口頸部・肩部とも文様が全周展開しており、口頸部の渦巻菱形文の一端は複線化し、肩部C字文の一部は菱形文とJ字状の文様が結合して、その末端が下方に開く構成となる。このように末端が開いた渦巻菱形文は大洞BC1式の鉢・壺形の文様に特徴的であり、全周化した文様構成と共に当該期の根拠に数えられる。注口直下には対向した巴状文様も施されており、大洞BC2式終末の段階の磨消縄文へと連なって行く。

図11－26・27は、口頸部・肩部文様とも全周展開しないが、繁縟化した文様から当該期に位置づけた。

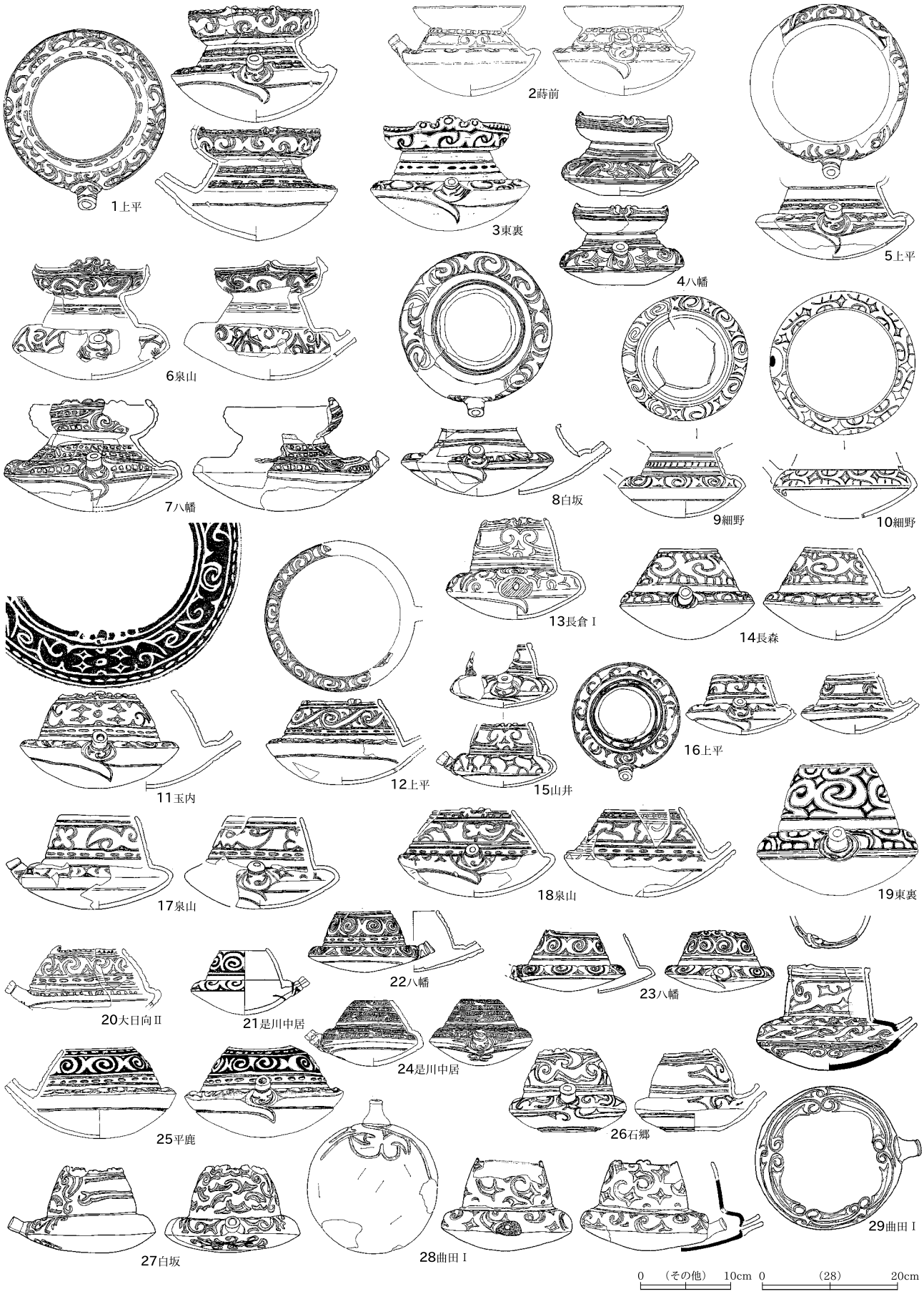


図11　東北北半の大洞BC1式注口土器

26は平底で口唇部と体下半部、27は低平な丸底で口頸部背面に伸長した三叉状の文様が施される。29は肩部文様帯が稜線で分帯されており、複雑な文様帯の重畳を持つ特異な例である。分帯した肩部には入組三叉文・矩形入組文が施され、体下半部には4単位の双頭渦文とその上端に入組三叉文、下端に魚眼状三叉文が施され、体下半部の文様帯を構成する。

26～29の体下半部の文様を考慮に入れると、A類よりもB類において、体下半部が文様帯として強く意識されていたことを窺わせており、大洞BC2式終末の段階のB類に主体的に継承されて行ったと想定される。

金子昭彦氏は「大洞BC1式」として、「肩部の文様が注口付近にとどまらず、器面を全周展開する段階」と規定している（金子1991）。筆者も同様の理解に基づいており、大筋では同氏の編年に賛同する。しかし前記したように同氏の「大洞BC1式」には、筆者の大洞B2古・新式が含まれている点で、異同が存する。

E 大洞BC2式の注口土器

大洞BC2式については、新井田川・馬淵川流域における検討から、山内氏が規定した大洞BC2式と、大洞BC2式から同C1式への型式変化の過渡的様相を示す段階とに大別したが、更に前者は新古に二分される可能性が想定される。

（1）大洞BC2式（図12）

大洞BC2式は山内氏の雨滝例（図3－4）が基準となる。肩部は縮小し、頸部は伸張しその下端が広がり、複雑な文様帯の重畳を示す点に特徴がある。青森県木戸口遺跡（図6）で一括資料が得られており、入組三叉文を伴わない羊歯状文主体の段階が確認されている。

A類の口縁部は退縮の方向にあり、文様帯の上下幅が狭まるが、最も特徴となるのは、口唇部の沈線が正面突起直下で貫通して、口部装飾帯が分離される点である。既に先行型式（図11－3・6）に存しており、B類では大洞B2古式（図9－31・33～35）に認められるが、A類では当該期に顕著となる。その点で図12－2は正面の文様が口端に露出した稀有な例である。

口縁部の文様は、C字文乃至それに類する文様が施され全周展開する例（図7－42～44・47、図12－1・5～11）が多く、巴状文様も残存する（図12－2・4）。しかし巴状文様は細身で、X字又はC字文と呼称した方が適切かもしれない。C字文においても正面のみ文様が異なる例（図7－42、図12－11）や、正面のX字状の文様が強調された例（図7－44、図12－5・10）は、先行型式の巴状文様の名残をとどめたものであろう。

正面突起は先行型式よりも装飾が加味され、珊瑚状突起（林ほか1995）と呼称されるように大きく作出され、口端には殆どに截痕列が囲繞される。

頸部は傾きが強く、上下幅が伸張し、同一文様が規則的に配置される。C字文やそれに類した文様（図7－42・44、図12－1・3・5・7・8・10・11）、また鉢巻き状に四葉状・枠状の文様を配した例（図7－46、図12－2・6・12・13）が卓越しており、羊歯状文（図12－14）やK字文（図12－16～21）、口縁部文様に近似した構成のもの（図12－5・10）も存する。上下端には截痕列が囲繞され、文様帯が3段構成となる例が多い。

肩部は上下幅が縮小し、横位に短く張り出す形制で、C字文や羊歯状文等が施されるが、正面から文様が確認できない例が多い。図12－16～20は頸部と肩部の境界で弱く括れ、肩部がやや丸味を持って落ちる形制を呈するが、いずれも頸部がK字文、肩部が羊歯状文で構成されており、文様と形制の相関性を窺わせる。またK字文が多用されることから、年代的差異即ち新相として捉えられる可能性も考えられる。

肩部上端には突起を持つ例が散見される（図7－41・46・47、図12－6・12）。既に先行型式に見られる（図7－33）が、壺形の頸部（Ⅱb）文様帯においても大洞BC2式に突起を付す例が多くなっており、壺形の突起との相関性が想定される。壺形と注口土器の頸部の文様帯は相同の関係にあったことは前記したが、肩部上端の突起に関しては再び同調したと見なすことができるであろう。

体下半部には、肩部の縮小化に呼応するかのように截痕列が進出する（図7－41・46・47、図12－7・10～13・15）。大洞B2新式以降体下半部には沈線が1条囲繞されるのみで、平行沈線は稀であった（図7－34、図11－4）。当該期では截痕列のみの例（図12－7・10・11・15）と、截痕列直下にも沈線を囲繞する例（図7－41・46・47、図12－12・13）が見られ、また注口直下のみならず側面・背面と4単位の文様を施す例

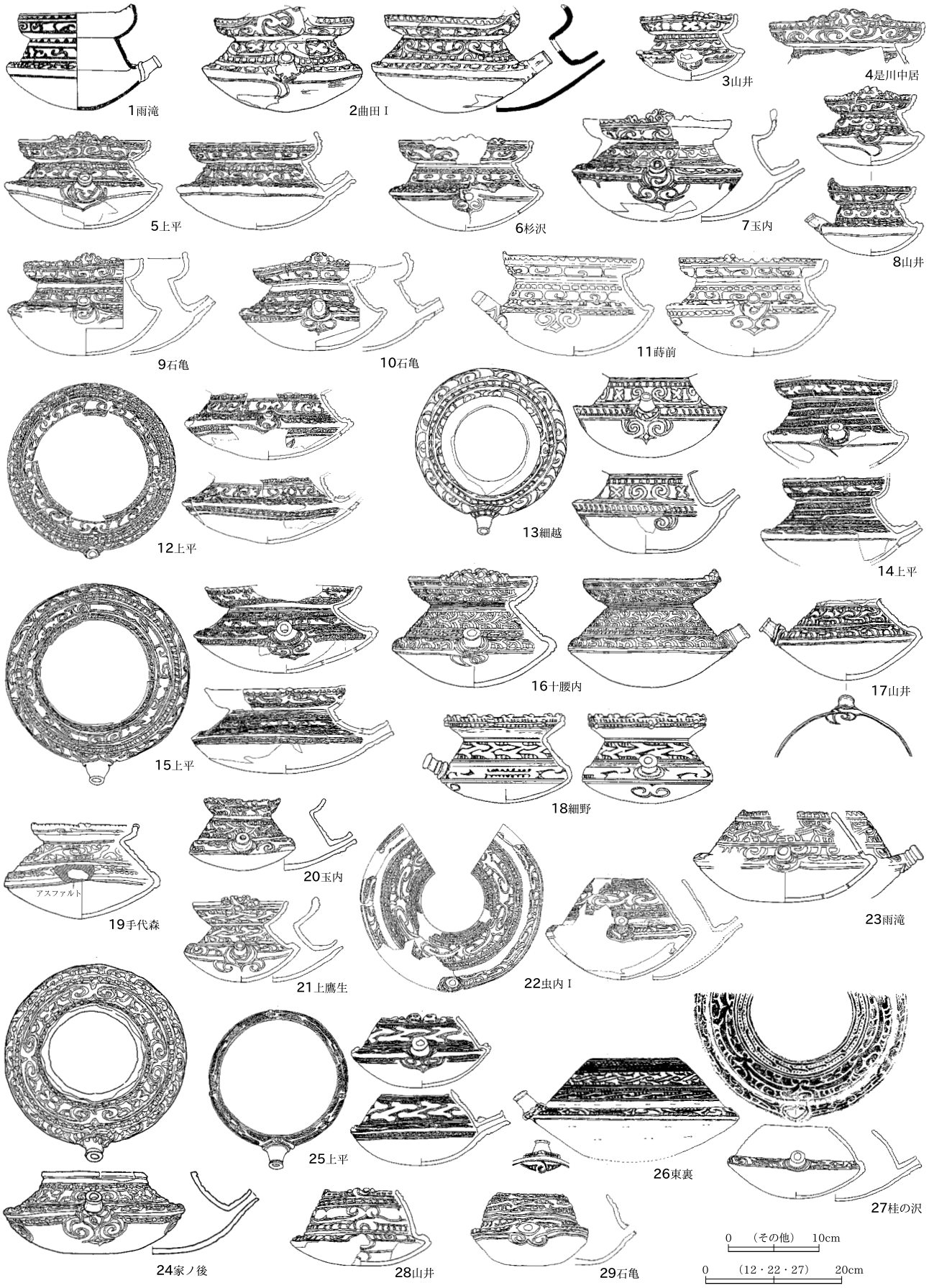


図12　東北北半の大洞BC2式注口土器（1）

も現出する（図 12 － 7・11・13）。体下半部の文様は、先行する型式では主にＢ類に看取されるものであったが、当該期ではＡ類にも顕在化しており、共に後続型式の磨消縄文に連なって行くと想定される。

Ｂ類の形制はＡ類に同調しており、肩部が縮小しその文様帯の上下幅も狭まる。口頸部は口唇部が沈線で区画され頸部と分離され、頸部の文様帯は複雑な重畳を示す。

Ｂ類の頸部文様は、Ｋ字文（羊歯状文）が主体となる。図 12 － 22 はその原初的形態を呈するもので、23・25・26 が典型となる。Ｋ字文は矩形入組文の系譜を引く文様で、上下で半単位ずらした矩形入組文の内側沈線（咬合部寄り）をＳ字に反転させ、区画内に截痕を充填した文様を繰り返し配したものである。既に先行型式の鉢形の頸部文様の入り組みを持ったＣ字文に、その初現を見ることができるが、大洞 BC2 式期に盛行し、特に終末段階のＢ類に顕著となる。

その他の文様としては、羊歯状文（29）、鉢巻き状文様（24・27・28）が存するが、文様帯の重畳が著しく、異なる文様を重畳した例（23・26・27）や、下端が無文帯となる例（図７－ 49、図 12 － 22・26）も見られる。

口端の正面突起はＡ類のような珊瑚状突起は見られず、平縁を呈する例が多い（22 ～ 24・26・27・29）。また口頸部は直線乃至内彎気味に立ち上がるものが通例であるが、24 は外彎気味に立ち上がっている。後続型式には直線又は外彎気味に立ち上がる例が多いことから、その関連性が想定される。

肩部の文様帯は上下幅が狭まっており、羊歯状文と陰刻が交互に施される例が多く、26・27 が典型となる。またＡ類と同様に体下半部に截痕列を囲繞した例も認められる（24・25）。

筆者は新井田川・馬淵川流域の事例から、大洞 BC2 式が新古に細分される可能性を指摘した。即ち肩部の形制と体下半部の截痕列の進出を根拠に挙げたが、頸部と肩部の境界が強く屈折し肩部が短く張り出す形制から、屈折が弱く段と化すものへの変化として捉えた。しかしその変化が体下半部の截痕列の進出と呼応するとは必ずしも認め難く、厳密な区分にはなり得ないかもしれない。但し後者の注口直下にはノ字文は認められず、殆どが双頭渦文で構成されており、ノ字文の有無が新古の判別の目安になる可能性は考えられる。またＡ類の口端に全周した突起を配する例が現れる（図 12 － 18・20、図 13 － 1）。左記の注口基部には環状の隆帯が囲繞される例も多く、これ等も新相の特徴と言えるであろう。

当該期から文様を施した注口土器Ｃ類が顕在化する。Ｃ類は後期末～大洞 B1 新式までは多く認められたが、大洞 B2 ～ BC1 式には不明瞭となり、体部に縄文を施した壺形の類型が僅かに知られるのみであった。当該期には複雑な文様帯構成を持つ壺形の注口土器が明確となり、大洞 C1 式更には同Ａ式へと継承されるが、晩期初頭のＣ類に直接系統が辿れるものであるのかどうかは、判然としない。

金子昭彦氏は大洞 BC2 式を新古に二分している（金子 1991）。「大洞 BC2 式の古い部分」については、「肩部が縮小した、その全体的な形態に最も特徴が見られる。頸部あるいは（口）頸部が三帯に別れ、上下の帯は無文あるいは截痕列が配される文様構成を持つものが一般的である」と規定している。また「大洞 BC2 式の新しい部分」については、「肩が縮小して体部全体が菱形に近くなった、その形態に最大の特徴を持つ」と規定している。図示された資料では、金子氏の「大洞 BC2 式の古い部分」には筆者の大洞 BC1 式と同 BC2 式が含まれており、「大洞 BC2 式の新しい部分」は筆者の大洞 BC2 式にほぼ合致した内容となっている。

林謙作氏は口端の区画が大洞 BC 式細分の指標となることを指摘している（林ほか 1995）。区画自体は先行型式にも見られ、前記した例外も存しているが、大筋では従うべき指針と言えるであろう。

（２）大洞 BC2 式終末の段階（図 13）

Ａ類については、蒔前例（図７－ 45）を基に設定した。口端にはＢ突起、口唇部には刻目隆帯が囲繞されるが、突起の全周化と口縁部下半の文様の消失といった変化が看取される。頸部には磨消縄文、肩部に突起列、体下半部に磨消縄文、注口基部に菱形の隆起装飾が認められ、新たな様相が現出しており、蒔前例に類する土器は、先に記したように大洞 C1 式に位置づけられるのが通例であろう[25]。しかしＢ類の蒔前例（図７－ 50）に比すると、頸部の文様を除き極めて類似した特徴を有しており、筆者は 50 に併行するＡ類として大洞 BC2 式終末の段階に位置づけている。

この系統を求めてみると、図 12 － 18・19 に原初的

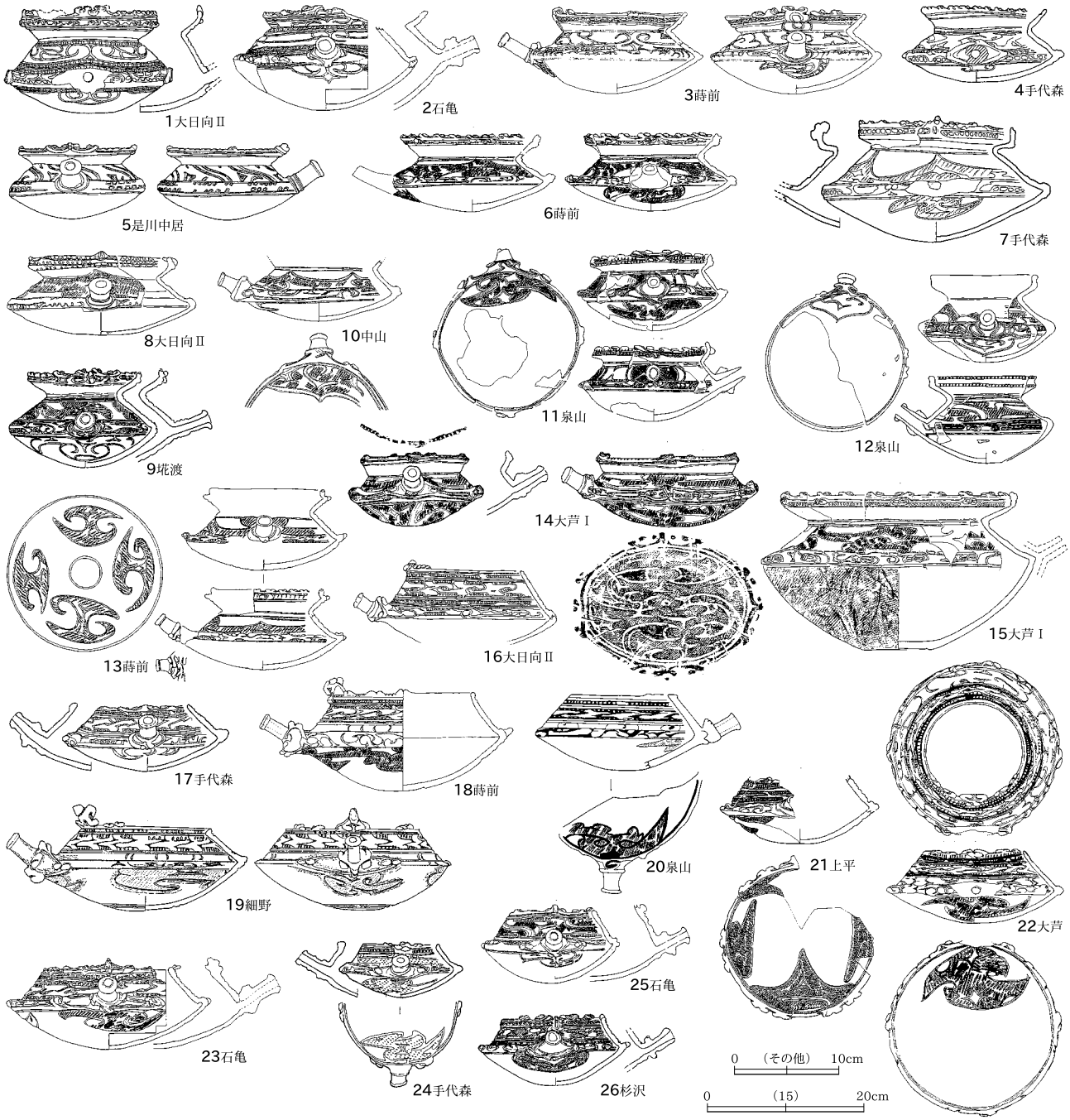


図13　東北北半の大洞BC2式注口土器（2）（大洞C1式を含む）

形態を指摘することができる。口縁部は退縮の方向にあり、図 12 － 18 の口縁部の形状は図７－ 45 に近似する。図 12 － 19 も口端に刻みが加えられ、口唇部に伸長化した入組三叉文のみが施される。両例とも頸部の上下幅が広く、肩部も丸味を有し、羊歯状文・Ｋ字文で構成されることから、筆者は大洞 BC2 式の新相に位置づけている。

図 13 － 1 ～ 3 はこれ等とほぼ同時期に位置づけられる資料であろう。正面突起を残し、口縁部下半には辛うじて文様帯が構成される。頸部には鉢巻き状文様が施されるが、縄文地文はなく、肩部は隆帯化の過程を示す。１・２の体下半部には截痕列が巡らされ、注口直下に双頭渦文、３の注口直下には截痕を加えた巴状文様が施されており、２・３の注口基部には環状隆帯が囲繞される。しかし菱形の隆起装飾はまだ認められない。上記した例（図 12 － 18・19、図 13 － 1 ～ 3）の系統から、蒔前例（図７－ 45）が成立したと考えられる。

図７－ 45 に併行する例が、図 13 － 4 ～ 13 であろう。形制は扁平化しており、体部の断面形態は菱形を呈し、肩部は隆帯化する。口縁部は刻目帯や截痕列で構成され、口縁部下半の文様帯は消失しており、正面に装飾性に富

む突起を付したり（５・７～９・11）、Ｂ突起が囲繞される（６・７・11）。従前のＡ類の口縁部は、外折して内彎気味に立ち上がる例が殆どであったが、当該期では外折した口縁部が中途で屈折して直立気味に立ち上がる有段口縁に変化しており、更に大洞C1式では退縮が進み突起列へと変化する。

頸部の文様は縄文地文を持つものと、地文を持たない二態が存しており、Ｋ字文（４）、鉢巻き状文様（13）、弧線文（６～８・10）、クランク状文様（５・12）等、文様モチーフはバラエティーに富む。体下半部にも文様を持つ例と持たない例（４・５・８）が存するが、前者の磨消縄文については後述する。注口基部には環状隆帯が囲繞されるが、菱形の隆起装飾の有無が認められる。恐らく持つ例が新しい様相であろう。

14・15は、上記の系譜を引く岩手県久慈市大芦Ⅰ遺跡出土の注口土器であるが、いずれも大洞C1式に位置づけられよう。14は楕円形の平面形態を呈し、体下半部に主要素[26]の末端が釣鐘状に膨らんで対向する磨消縄文、頸部には鉢巻き状文様に類する磨消縄文が施される。肩部の突起列や口端の細かい縦の刻目に新しい様相が看取され、口縁部の刻目帯は消失している。15は平底の大型の注口土器で、口縁・頸部は６に類似するが、肩部は深い陰刻によってＢ突起列が作出される。

Ｂ類は先に指摘したように規格性が極めて強く、東北北半一円に分布が認められる。即ち正面口端のＡ突起風の大型突起とその周囲のＢ突起、頸部のＫ字文、肩部の突起列、体下半部の磨消縄文、注口基部の菱形の隆起装飾に特徴づけられる（図13－16～23、図19－２・３）。既に先行型式（大洞BC2式）において頸部のＫ字文は盛行するが、当該期の口頸部は直線的又は外彎気味に立ち上がっており、先行型式で見たような内彎する例は認められない。また口端の突起の発達が著しく、平縁が主体であった先行型式とは対照的である。肩部には側面・背面と注口基部の菱形の隆起装飾の両端に横長のＢ突起が付され、また体下半部に磨消縄文を持たない古相には、羊歯状文の系譜を引く截痕が認められる（16・17）。

頸部の文様帯の上端には截痕列が巡らされるが、截痕は連続的ではなく、幅広の截痕を介してまとまりを持って配置される（16～20・22・23）。Ｋ字文の下端に截痕列を囲繞する例は少なく（16）、無文帯（17）や弧状の沈線文様等を施した例（18～20・22）も見られる。

24～26は頸部に磨消縄文を施す稀有な例である。24は頸部上端に截痕列を巡らし、その直下に鉢巻き状文様、体下半部の注口直下に反転した巴状の磨消縄文が施される。25は頸部にクランク状の主要素を配し、狭長な副要素は細かな截痕で充填される。肩部には大きな截痕が加えられ要所にＢ突起を有し、体下半部の注口直下には地文を持たない反転した巴状文様が施される。26は頸部上下端に截痕列を巡らし、その間に五角形乃至鼓状の副要素が上下交互に配される。肩部は深い陰刻により突起列が作出され、体下半部の注口直下には磨消縄文の文様が施される。３例とも頸部文様の在り方が大洞C1式に近似するが、体下半部の文様は注口直下のみで、特に前二者には反転した巴状文様が配される。この文様は後述するように体下半部磨消縄文の古的様相であり、少なくとも24・25は当該期に位置づけられると考える。

筆者の抽出したＡ・Ｂ両類が、同時期の関係にあるのかどうかは、問題になるところであろう。確かに両類の形制は近似している。体部の断面形態は菱形を呈し、共に低平化が著しく、口径（Ａ類は頸部上端の径）が大きく、注口基部は隆帯で装飾され、注口部は土器本体に比べ大きく作出される。また隆帯化した肩部、体下半部の注口直下の磨消縄文も共通しており、頸部文様の差異を除くと、Ａ類の口縁部を省略した形態がほぼＢ類に相当する内容となっている。

しかしＢ類の頸部文様はＫ字文主体であり、縄文地文を持たないのに対し、Ａ類は文様のバリエーションが豊富で、磨消縄文で構成される例が多い。また口縁部突起では、Ａ類が正面に装飾性に富む突起を配したり、Ｂ突起が全周化されるのに対し、Ｂ類は正面にＡ突起風の大型突起とその周囲にＢ突起を配するのみで、全周展開しない。Ａ類は頸部文様が磨消縄文で構成されることから、前記したように大洞C1式に位置づけられる場合が認められるが、筆者は当該期のＢ類に伴うＡ類の抽出を試みた次第である。従って大洞C1式に盛行する頸部の磨消縄文は、体下半部の磨消縄文の出現と軌を一にしており、大洞BC2式終末の段階に初現が求められる。

Ｂ類は当該期をもってほぼ姿を消し、大洞C1式にはＡ類とＣ類のみが継承される[27]。Ｂ類は規格性が強く、東北北半に広い分布が認められていただけに、その消失

は劇的な印象を受けざるを得ない。

では、何故これだけ盛行を極めた類型が廃絶されてしまったのであろうか。一つには、K字文の衰退に関連するものと考えられる。B類の頸部文様はK字文でほぼ統一されており、器形と文様の相関性が極めて強い。K字文が大洞C1式に継承されることはなく、B類はK字文と共に終焉を迎えたと言えるのかもしれない。二つ目には、A・B両類の形制が極めて近似していたことによるものと思われる。文様の差異を除くと、口縁部の有無だけが判別の基準となる。A類では口縁部の退縮が著しく、刻目帯・截痕列が囲繞されるのみとなる。またB類でも口端が僅かに外折する例（図13－19）も現れる。両類の形制は接近した状況にあり、B類が消滅したと見なすよりも、A類との融合化が進んだとの解釈も成り立つであろう。

筆者が大洞BC2式終末の段階として抽出した資料に対しては、研究者間で編年的位置づけに差異が存するのが実情である。即ち大洞BC式に含める立場と、同C1式に含める立場に大別される。前者に立つ研究者としては、高橋龍三郎・安孫子昭二・金子昭彦・鈴木克彦の各氏、後者に立つ研究者としては芹沢長介・藤沼邦彦・鈴木加津子の各氏が存する[28]。

研究者間の見解の相違は、大洞BC式の範囲をどのように規定するのかに関わっている。筆者は大洞BC2式から同C1式への型式変遷における過渡的な土器群としての抽出を試みた次第である。山内清男氏は型式設定に当たり、所謂羊歯状文が大洞BC式に固有であることを指摘していた（山内1930）。山内氏の設定基準を重視するならば、当段階のB類はK字文（羊歯状文）に特徴づけられており、大洞BC式の範疇に含めるべきものとなるであろう[29]。但しA類については、前記したように共通性が認められるものの、同時性については問題を残している。

高橋龍三郎氏は青森県細野・杢沢遺跡等の検討を通して、台付鉢の頸部文様が大洞BC式の羊歯状文から同C1式の「二溝間の截痕」に至る変化の過程において、斜行直線化した羊歯状文の過渡的な一群を「大洞BC式終末の型式」として抽出し、これ等に伴う精製土器の磨消縄文（主要素のみで構成される入組文）を明らかにした（高橋龍三郎1991・99）。

筆者が抽出した大洞BC2式終末の段階の注口土器と、高橋氏が指摘した土器群との整合性は現時点では明確になっていない。強いて傍証を挙げるならば、筆者の抽出した遺跡から高橋氏の指摘する平行化の過程にある截痕列や磨消縄文の土器群を出土している点、また注口土器B類に主体的に施されるK字文のネガ文様と、主要素のみで構成される磨消縄文のネガ文様との類似性といった情況証拠にとどまっている。しかし筆者は高橋氏が指摘した土器群にこれ等の注口土器が伴うであろうと私考しており、出土状況に基づく検証は今後の課題である。

6　部位毎に見た系統的変遷

これまでの検討を踏まえて、複数型式にまたがる注口土器の特徴的な属性の変遷を整理してみたい。

A 注口土器の形制の変遷

注口土器の形制は、山内清男氏の定義から大筋の変遷は明らかである。形制は低平化の過程にあり、口縁部は退縮、頸部は拡大、肩部は縮小の変遷を辿っており、後期末～晩期初頭にかけての形制の変化は、前記したように一括資料からも跡づけられている。

図14は、各型式の代表的な断面形態を配列したものである。後期末葉（瘤付第Ⅲ・Ⅳ段階）～大洞BC2式終末の段階まで10階梯に区分しており、形制は山内氏の指摘のように、扁平化の過程を明示している。

A類で見ると、後期末葉～大洞B1古式（1～10）にかけては、徐々に体部が張り出し、上部ら圧迫された様相を窺わせており、口縁部も縮小傾向にある。しかし壺形の形制から脱却したとは、まだ認め難いと言えよう。

大洞B1新式（13～17）では、口縁部が内彎気味にほぼ直立し、頸部は幅広く、体部中央には明確な稜線が形成され、大洞B2式に盛行するA類の原初的形態が確立する。壺形とは異なった独立した器種としての注口土器が成立したと見ることができるであろう。

更に大洞B1新式～B2古式の過渡的段階（19～23）では、口縁部の器高がまだ相対的に高いが、体部が張り出し稜線がやや尖鋭化し、肩部と体下半部の傾きがほぼ等しく又は肩部がやや彎曲する。

大洞B2古式（25～27）では、扁平化が進行して、頸部と肩部の接着の位置が低下し、肩部上端が弱く陥没する。また頸部は先行型式から継続して立ち上がる傾向

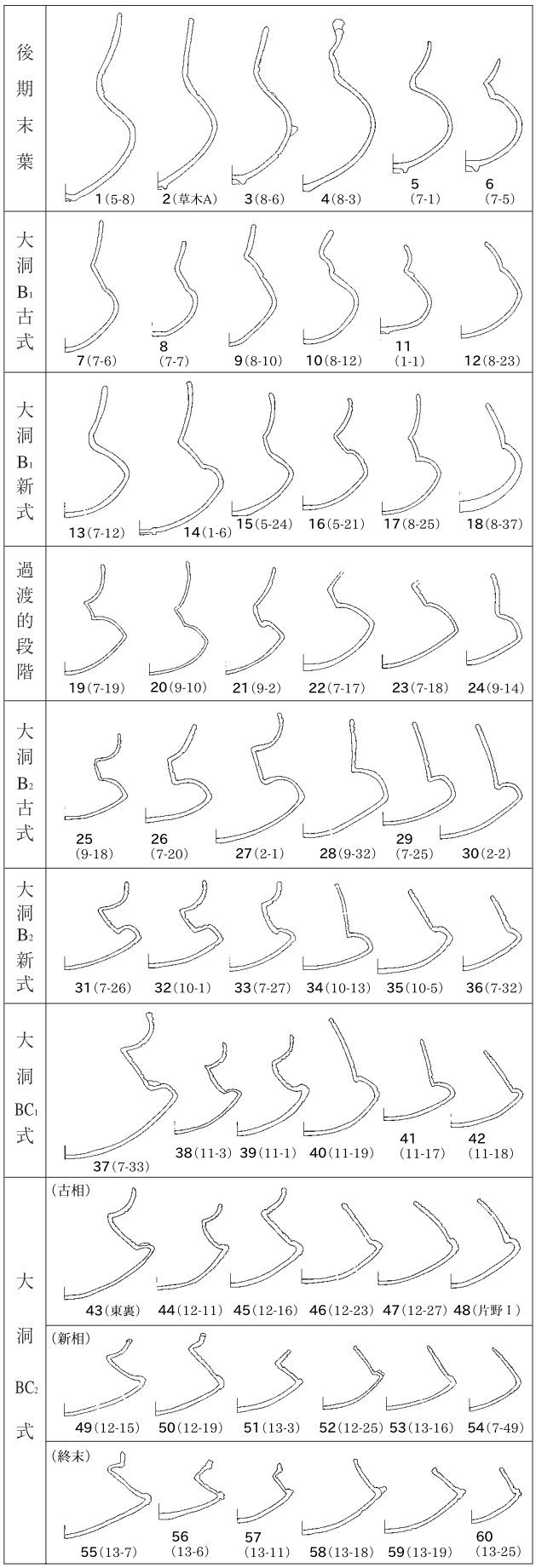


図14 注口土器の形制の変遷〔縮尺1/8〕

が看取され、口縁部の器高は相対的に減少する。

大洞 B2 新式（31 ～ 33）では、肩部上端の陥没が著しく、肩央は上方に迫り出し、扁平化のピークに相当する。肩部の下端は底に向かって垂直に近い角度で落ちて、断面形態は著しい非対称を呈する。また頸部は下端が広がり、傾きが強くなる。

大洞 BC1 式（37 ～ 39）では、先行型式の形制を踏襲して肩部が張り出すが、迫り上がりは弱まり、肩部が縮小傾向にある。頸部の上下幅が伸張しており、器高に対する口縁部の比率が減ずる。

大洞 BC2 式は、従前の大洞 BC2 式と終末の段階とに大別されるが、前者は更に新古に二分される。古相の段階（43 ～ 45）では、肩部が縮小しており、頸部と肩部の境界が強く屈折し、肩部が短く張り出す。頸部は上下幅が伸張し、口縁部は縮小する。その新相（49 ～ 51）では、更に扁平化が進行し、頸部と肩部の境界の屈折が弱く、段と化す。頸部の傾きは強まり、頸部と体下半部の傾きがほぼ等く、断面形態は菱形を呈し、口縁部は退縮する。

大洞 BC2 式終末の段階（55 ～ 57）では、肩部は隆帯化し、体部の断面形態は菱形を呈する。外折した口縁部は退縮が著しく、中途で屈折して直立気味に立ち上がる。

B 類については後期末葉の状況が判然とせず、大洞 B2 古式までは僅かに認められるのみである。大洞 B1 古式（12）では、口頸部と肩部の傾きに大きな差はなく、境界で僅かに屈折するのみである。大洞 B1 新式又は同 B2 古式との過渡的段階（18・24）にかけては、体部中央に稜線を持つようになり、肩部と体下半部の傾きがほぼ等く又は肩部がやや彎曲し、口頸部の傾きも立ち上がる。

B 類が顕在化するのは、大洞 B2 古式以降である。大洞 B2 古式（28 ～ 30）では、体部の形制は A 類に同調して、扁平化の過程にあり、肩部上端が陥没した例も認められる。但し体部の低平化が著しく、平底に近い形制の例も存する。

大洞 B2 新式（34 ～ 36）も、体部の形制は A 類に同調するが、肩部上端は陥没せずに肩部が上端から横に張り出し、下端が底に向かう例が多く認められる。

大洞 BC1 式（40 ～ 42）では、先行型式と同様に肩部上端の陥没が顕著でなく、肩部が横に張り出す例が多く

見られ、横位に突出して、肩部文様が正面から確認しにくい例も現れる。

大洞 BC2 式の古相（46 ～ 48）では、A 類の形制に同調し、肩部は縮小し、文様帯の上下幅が狭まり、頸部と肩部の境界が強く屈折して、肩部が短く張り出す。また口頸部の内彎した例が多く見られる。その新相(52 ～ 54）では、更に扁平化が進行して、頸部と肩部の境界の屈折が弱くなり、段と化すようになる。

大洞 BC2 式終末の段階（58 ～ 60）では、肩部は隆帯化して、断面形態が菱形を呈する。口頸部は直線的乃至外彎気味に立ち上がり、口径が大きくなる。B 類は当該期をもってほぼ姿を消し、大洞 C1 式に継承されることはない。

次に底部形態の変化に触れてみたい。晩期前葉の注口土器は丸底が通例であるが、後期末葉～大洞 B1 古式にかけては、底部が小さく作出される例が多く、弱い上げ底又は高台が付される（１～６）。特に瘤付第Ⅳ段階～大洞 B1 古式のA・C類には、中央が窪んだボタン状の突出が特徴的である。これは底部にボタン状の低い粘土を貼付した後削り出したものであるが、大洞 B1 古式では丸底の比率も高まっており、大洞 B1 新式には認められなくなる。底部の作出自体は大洞 B1 新式（14）まで残存するが、後続の型式では殆どが丸底で、平底又は高台付は例外的に見られるのみとなる。

注口部の変遷を後期末葉～晩期前葉で見ると、形制の扁平化に伴って注口部の位置は低下傾向にある。実際には大洞 B2 古式に低い位置に付されるようになるが、注口の傾きも瘤付第Ⅲ段階の外反気味に屹立した在り方から、次第に直線的となり、倒伏の傾向にある。

注口部の形状では、後期末葉に先細の無文の例が多く見られるが、大洞 B2 古式に注口先端に環状の沈線が施され、「箍(たが)状の隆帯」（林ほか 1995）となる例が多くなる。また注口基部の半球状の膨らみも、大洞 B1 古式や同新式に既に認められるが、盛行するのは大洞 B2 古式以降で、大洞 BC2 式の新相では環状の隆帯と化し、同終末の段階にはその外周に菱形の隆起装飾が施され、大洞 C1 式へと継承される。

注口直下の膨らみが二袋状を呈するのは、後期末（瘤付第Ⅳ段階）～大洞 B1 古式の特徴であるが、その残影は大洞 B1 新式～ B2 古式の過渡的段階まで認められる。

B 文様帯構成の変遷

口縁部・頸部・体部の３段構成からなるA類の文様帯の変遷を見ると、後期末葉～大洞 B1 新式にかけては無文化が著しく、文様帯の構成は一部の例に認められるのみである。文様が施される部位は口縁部と肩部であり、頸部は無文が通例となる。

大洞 B1 新式～ B2 古式の過渡的段階になると、口縁部と肩部の注口付近、更には体下半部の注口直下にも文様が施されるようになり、文様帯構成の基本が確立する。大洞 B2 古式も同様の構成が踏襲されるが、口縁部と肩部文様の発達が著しく、頸部には１条沈線が囲繞されるようになり、更に大洞 B2 新式の頸部には平行沈線や点列帯が囲繞され、頸部文様の発展過程が認められる。

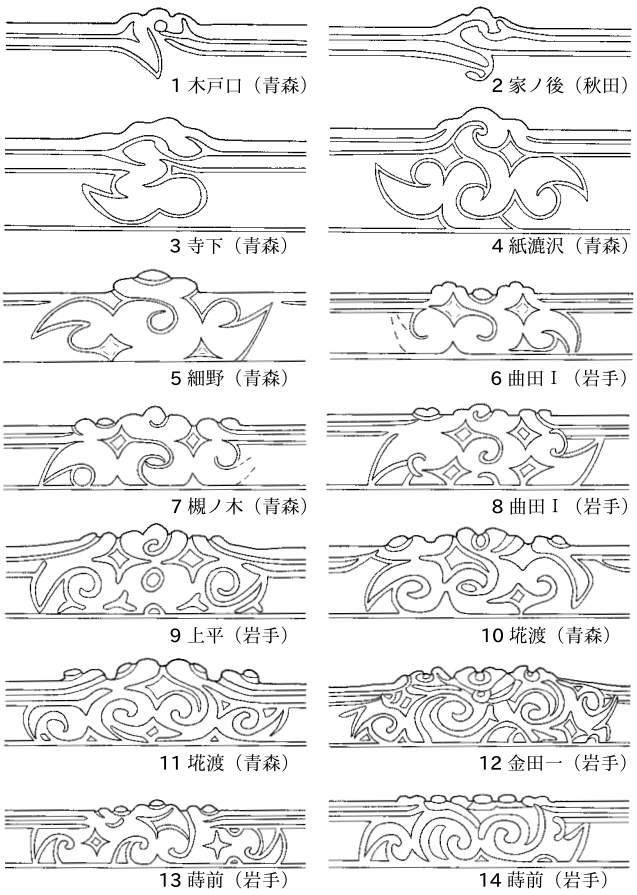
大洞 BC1 式は頸部文様帯が確立する点で画期となる。しかし先行型式の系譜を引く点列帯で構成される例も多々存しており、過渡的様相が看取される。

大洞 BC2 式では、口縁部・頸部・肩部・体下半部の文様帯が通例となる。口縁部文様は口部装飾帯と口縁部下位の文様帯とに分離され、文様帯の上下幅は縮小する。頸部文様帯は伸張しており、上下端に截痕列が巡らされ、３段構成となるものが多く、また肩部文様帯は上下幅が縮小し、横位に短く張り出すのみとなる。その新相では、口縁部下位の文様を欠いた例も散見され、肩部は更に縮小し、体下半部上端には截痕列が進出する。

大洞 BC2 式終末の段階では、口縁部が刻目帯・截痕列で構成されその直下は無文となる。頸部と体下半部には磨消縄文が施され、肩部は隆帯化し突起が付される。体下半部の磨消縄文は注口直下のみに施される例が多いが、B 類と同様に全周展開した例も見られる。

後期後半を特徴づけたⅡｂ文様帯は、注口土器の無文化と共に後期末には消滅しており、晩期の壺形にのみに継承されることになる。その点で後･晩期を境にして、注口土器と壺形は異なった方向を辿ることになるが、注口土器においてもその痕跡はC類やA類の一部に認めることはできる。しかし主体的に継承されるものではなく、大洞 BC1 式になって再生する頸部文様帯は、新たに出現した文様帯として理解することができよう。

口頸部・体部の２段で構成されるB類では、大洞 B2 古式以前は、口唇部のみの文様や頸部下端に沈線が認められるが、類例に乏しい。



1～6：大洞B2古式、7～11：大洞B2新式、12～14：大洞BC1式

図15　注口土器A類口縁部文様模式図

B類が顕在化する大洞B2古式では、口頸部の文様、肩部の注口付近の文様、体下半部の注口直下の文様の構成が通例となり、大洞BC2式まで継承される。基本的にはA類に同調した変遷を辿るが、B類においては口唇部が分離されたり文様の全周化した例が、既に大洞B2古式から認められる。

大洞BC1式では、口頸部文様帯が口唇部・頸部・頸部下端の３段構成をとる例が多く見られる。特に頸部下端には点列帯が囲繞されており、A類の頸部文様との親和性を示唆している。先行する大洞B2新式に平行沈線の囲繞される例が多いのも、A類の頸部文様と相互の関連を有していた結果と思われる。

大洞BC2式では、口頸部の文様帯の発達が著しく、文様帯の重畳が複雑となる。口唇部・頸部・頸部下端の構成は先行型式と同様であるが、頸部が多段化して異なった文様モチーフを重畳させたり、下端に無文帯を配する例が見られる。またその新相では、A類と同様に体下半部上端に截痕列が巡らされる。

大洞BC2式終末の段階では、口唇部が区画され、頸部の文様帯は上端・中位・下端の３段構成となる。上端には截痕列、中位にはK字文が巡らされるが、下端は無文帯・沈線文様・截痕列等で構成される。また肩部は隆帯化し、体下半部には磨消縄文の文様が出現する。

C 口縁部・口頸部の巴状文様の変遷

（1） A類の口縁部文様（図15）

A類の口縁部に巴状文様が多用されるのは、大洞B2古式～同B2新式にかけてである。

A類の晩期初頭には、既に全周化した磨消縄文の口縁部文様が存している。しかし大洞B2古式以降に盛行する巴状文様を主とした口縁部文様に、直接繋がることはないように思われる。

巴状文様の母体となるのは、大洞B1新式の山井例（図７－12）であろう。山井例は一山状突起の直下に入組三叉文が単独に配されるのみである。この三叉文の尻が伸長して連結すると共に、その直下に区画沈線が囲繞されることで、後続型式に見られる全周化した入組・魚眼状三叉文が成立すると考えられる。

従って大洞B1新式～B2古式の過渡的段階が、口縁部文様の胎動期に相当する。当該期は全周された三叉文が一般的となる。縄文地文を持つ例（図９－１・６）と持たない例（図７－19、図９－３・８）の二態が存し、正面突起として一山状突起が配される。その中には突起直下の三叉文の一端と円形刺突から垂下した沈線でノ字状の文様を構成した例（図９－２）や、区画沈線が正面で反転して巴状文様の前駆的様相をなす例（図９－５）も現れる。また大洞B2古式の古相にも同様の例（図９－16～19）が認められており、筆者はこれ等の系統から巴状文様が成立したと考えている。

図15－１・２は、大洞B2古式でも古相に位置づけられる（図９－16･18）。共に正面突起は三山状を呈し、下端の区画沈線が正面でノ字状に垂下する。このノ字状文様の発展形態が、図15－３の寺下例（図７－20）であろう。口唇部に入組三叉文を残し、正面で反転した区画沈線が、左側では尖鋭に、右側では丸味を持って更に反転し、括れ部で連結しており、下端の区画沈線には接着しない。同様の一筆書きの例は図９－５・19にも見られ、巴状文様の原型となるものであろう。

図15－４～６は、大洞B2古式の巴状文様である（図７－22、図９－20・21）。既に口唇部の入組三叉文は

姿を消しており、図 15 － 4 の三山状突起直下の入組文にその名残をとどめる。口唇部に囲繞された２条沈線は、先に見た全周した三叉文と区画沈線の系統であることは確かであろう。その点で三叉文を口唇部にとどめた例は古相に位置づけられる。

大洞 B2 古式の巴状文様は、菱形の頂点と三叉状の沈刻を対向させたり（６）、反転して角立てた沈線文様で描出されており（４・５）、文様の中央には菱形の一端の渦巻文や入組文が見られる。丁度Ｘ字状に対向した巴状のモチーフが、２組並列した構成をとっている。

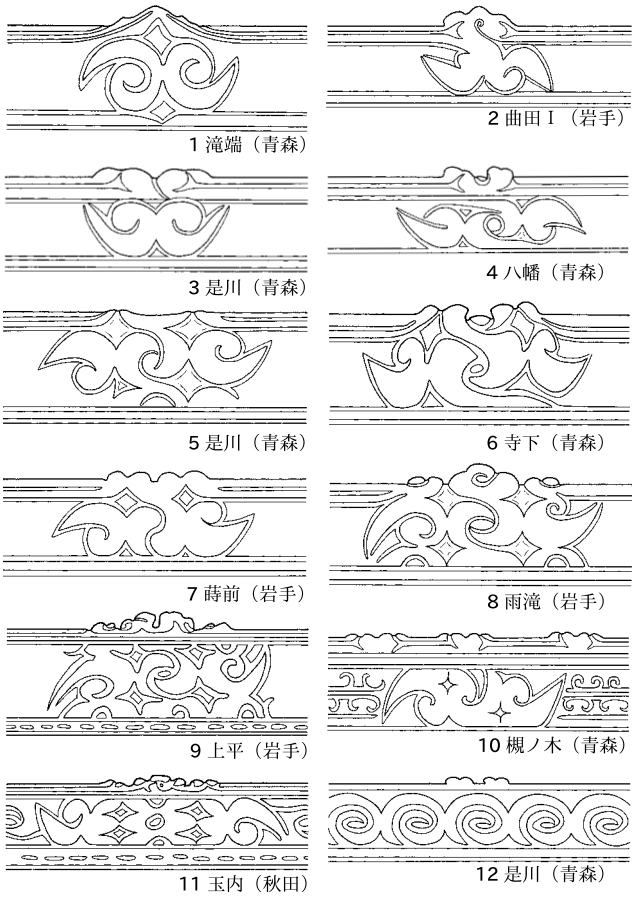
図 15 － 7 ～ 11 は、大洞 B2 新式の巴状文様である（図４－１、図７－ 26・27、図 10 － １・４）。正面突起は三山状を呈するが、突起の左右にＢ突起が配されるようになり、装飾が加味され、三山状突起の頂部も分割される（図 15 － 10・11）。口唇部上端の沈線が突起の装飾に参入しており、菱形文の頂部も突起間で露出する（図 15 － 7 ～ 11）。

大洞 B2 新式の巴状文様は、先行型式と同様に菱形の頂点と三叉状・棘状の沈刻を対向させて描出されるが、菱形が二重に配されたり（８）、円文や半円が付加され（９）、また渦巻菱形文の一端が複線化し（10・11）、文様の繁縟化が進行しており、先行型式で見たＸ字状に対向した巴状のモチーフは形骸化の方向を辿る。

図 15 － 12 ～ 14 は、大洞 BC1 式の巴状文様である（図７－ 33 ～ 35）。正面突起の装飾は華美となり（図 15 － 12）、口縁部文様は繁縟化して、横位に拡大する。菱形文の末端は、文様帯の上下幅の縮小に伴い上・下方それぞれに開く構成となっており（12 ～ 14）、ポジ文様は細身に描出され、巴状文様は形骸化する。

大洞 BC2 式では、口縁部文様帯は全周展開すると共に、口部装飾帯が分離され、上下幅が狭まる。巴状文様が残存する例（図 12 － ２・４）も例外的に存するが、Ｃ字文と同様の構成をとっており、Ｘ字状のモチーフにその名残をとどめるのみとなる。

Ａ類の正面突起の変遷を見ると、大洞 B1 新～ B2 古式の過渡的段階では、一山状の突起が配されるが、大洞 B2 古式ではそれが発展した三山状突起、更に大洞 B2 新式ではその周囲にＢ突起が付される。次第に装飾が加味され、大洞 BC2 式には珊瑚状突起へと発展するが、その終末の段階にはやや衰退の兆しを見せ始め、Ｂ突起列が全周に配される。



1～6：大洞B2古式、7～9：大洞B2新式、10～12：大洞BC1式

図16　注口土器B類口頸部文様模式図

（２）Ｂ類の口頸部文様（図 16）

Ｂ類の口頸部に巴状文様が多用されるのは、Ａ類と同様に大洞 B2 古式～同 B2 新式にかけてである。

Ｂ類は大洞 B2 古式になって顕在化する。それ以前の状況は判然とせず、Ａ類のように文様の系統を辿ることはできない。このことからＢ類の口頸部文様の成立に当たっては、Ａ類の影響の基にあったと想定される。

Ｂ類においては、Ａ類で見た原初的形態を残す例が僅かに認められる（図１－ 14、図 10 － 15）。いずれも三山状突起を配し、口唇部に三叉文が囲繞され、その直下に巴状文様が施されるが、下端の区画線には接着しない。

図 16 － １～３が、大洞 B2 古式でも古相に位置づけられる巴状文様であろう（図９－ 28・29）。図 16 － １は、正面突起直下に菱形文が二重に配され、菱形両端の沈線が入り組んだり反転して、対向した巴状文様が描出される。２は三山状突起直下に魚眼状三叉文を配し、その直下で区画沈線が反転して、一筆書きで対向した巴状文様が描出される。３は口端にＢ突起が並列して配置さ

れ、口唇部が区画され、突起間から垂下した短沈線を囲むように対向した三叉文が囲繞される。頸部には上下で対向する棘状沈刻と沈線文様で、X字状の巴状文様が描出される。上記した３例はいずれも対向した二つの巴状文様で構成されており、A類にはない特徴である。

図16－4～6は、大洞B2古式の巴状文様である（図7－25、図9－35）。基本的にはA類に類似しており、菱形の頂点と三叉状の沈刻を対向させたり、反転して角立てた沈線文様で描出されており、文様の中央には菱形の一端の渦巻文や入組文が認められる。A類との差異としては、口唇部の区画や三叉文の残存と、正面突起としての並列したB突起の多用が挙げられよう。

図16－7～9は、大洞B2新式の巴状文様である（図3－2、図10－6・9）。基本的な構成はA類に同調する。正面突起は三山状を呈するが、突起の左右にB突起が配され、装飾が加味され、口唇部の区画も見られるが、菱形文の頂部が突起間で露出する（図16－8・9）。巴状文様は菱形の頂点と三叉状・棘状の沈刻を対向させて描出されるが、菱形が二重に配されたり（8）、半円が付加され（8・9）、文様の繁縟化が進行する。

図16－10～12は、大洞BC1式の巴状文様である（図11－11・21）。口頸部文様帯は全周展開する例が多くなり、巴状文様の例は少なくなる。巴状文様はC字文と同様の構成となり、形骸化するが、菱形文は殆ど用いられず、あっても付加される程度となる（10・11）。当該期以降口頸部文様帯から巴状文様は姿を消す。

B類の正面突起の変遷を見ると、大洞B2古式では三山状突起や並列したB突起が多用されるが、大洞B2新式では、A類と同様に三山状突起の頂部が分割されたり、周囲にB突起が付され、装飾が加味される。しかし大洞BC2式ではA類のような珊瑚状突起は見られず、寧ろその終末の段階に発達が著しく、A突起風の大型突起とその周囲にB突起が配される。

D 肩部文様について（注口付近の巴状文様）

肩部文様帯に施される巴状文様も、口縁部・口頸部の文様と同様に大洞B2古式～同B2新式に主体がある。

肩部文様帯は、文様帯として後期以来の体部文様帯の系統にあるが、それは全周展開の磨消縄文が基本であり、注口付近に限った文様が施されるのは、大洞B1新～B2古式の過渡的段階以降である。大洞B1新式までの全周化した文様とそれ以降の肩部文様との間に、明確な系統関係が存したかどうかは判然としないが、少なくとも巴状文様の古相の文様は磨消縄文で構成されており、無関係であったとは断言できない。しかし全周展開が原則であり、間接的な影響は存したにしろ、ここでは無文を主体とした注口土器の注口付近に、新たに生成した文様として考察を進めて行きたい。

図17は、大洞B1新～B2古式の過渡的段階から大洞B2新式の肩部の巴状文様の例である。その初現となるのは、大洞B1新～B2古式の過渡的段階に位置づけられる曲田Ⅰ例（2）であろう。注口基部が弱く膨らみ、それを囲むように矩形の磨消文が配され、矩形の一端が注口直上で入り組む。またその外周には、先端が上下で対向した翼状の縄文地文の文様が左右対称に配される。翼状の文様は稜線に沿って沈線が伸びて上向いて鋭く反転し、更に楕円を描くようにカーブして、下向きに鋭く突き出し反転する構成で、対向した先端は細く作出され、カーブの中央には半円が付加され鉗脚（蟹の鋏）状となる。筆者は曲田Ⅰ例のような注口を挟んで対称をなす翼状の磨消縄文の文様が母体となって、巴状文様が成立したと考えている。注口を囲う矩形の磨消文と、先細の縄文地文の翼状（ガイゼル髭状）の文様が特徴であり、類似の文様は図7－17・18、図9－1にも認められ、同時期に位置づけられる。

注口を囲う矩形文様の系統は、先行型式の全周化した文様に求めることができるであろう。晩期初頭の全周化した文様の注口土器には、注口基部を中心とした文様構成をとる例が多く、注口基部を沈線で縁取ったり（図8－18・19）、矩形や三叉状の文様で囲う例（図8－33・34・39）が認められる。注口基部の周縁を縁取った区画沈線の系統から、注口を囲う矩形文様が成立したと考えられる。

また大洞B1式の全周化した文様には、沈線による入組文や反転して角立てた文様が多用されるが、ポジ部分の文様が同じ幅になるように曲線的な沈線や矩形文・三叉文等を入れ込む傾向が見られる（図5－21、図8－32～35）。初現的文様として細く作出される翼状の文様も、この系譜を引く可能性も考えられる。特に図8－33は末端が尖鋭となる磨消縄文で構成されている。大洞B1式には末端を尖鋭にした曲線的な磨消縄文も多用

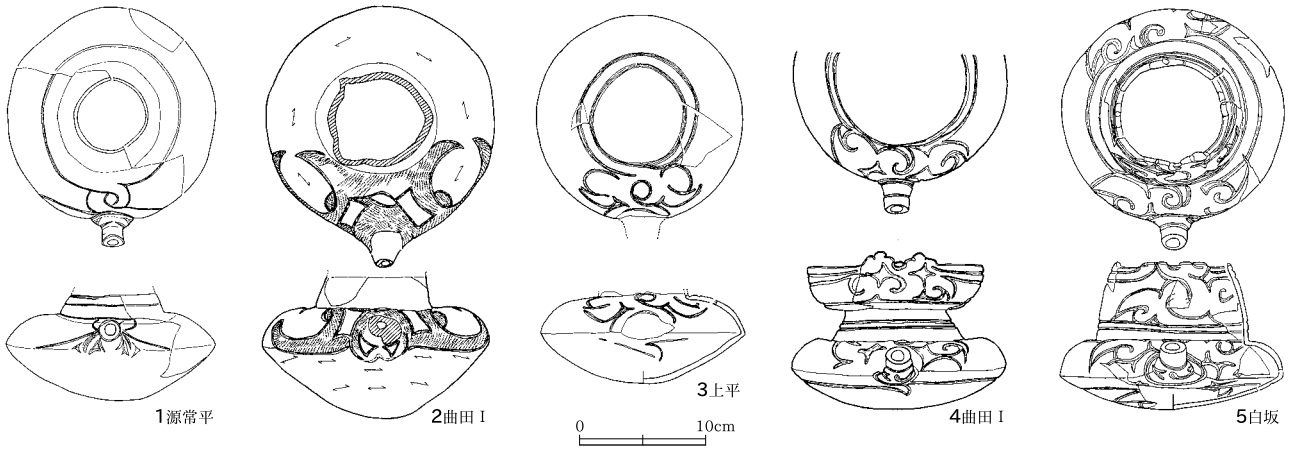


図17　肩部文様（巴状文様）の変遷

されており、その関連も想定されよう[30]。しかし現時点では、成立の系統性を明示するだけの良好な資料には恵まれていない。

源常平例（図 17 － 1）は、大洞 B1 新式又は同 B2 古式との過渡的段階に位置づけられる。肩部上端に沈線が囲繞され、一端が注口直上で右側稜線から上方に伸びた沈線と入り組み、左側稜線からは注口基部上端に沈線が伸びており、入り組んだ円文を囲うように対向した弧線が配される。正面から注口部を見ると、八字状の沈線によって稜線を底辺に三角形区画が作出され、区画内には注口基部を縁取った沈線に沿って三叉状の沈刻、更に注口基部にも三叉状の沈刻が施される。このように注口基部の左右に三角形乃至菱形区画を配し、注口基部を囲って三叉状の沈刻を加えた例は大洞 B1 新式に散見され（図 8 － 32・33）、注口付近が特別な文様施文部位として意識され始めた様相を窺わせる。図 18 － 2 の上鷹生例は注口付近を双頭渦文で菱形に囲った例で、大洞 B1 新式～ B2 古式の過渡的段階に位置づけられる。肩部には上端の渦文と入り組む左右の三叉文から伸長した角立てた沈線が施されており、巴状文様の前駆的様相が認められる。

大洞 B1 式の注口直上には、円文・渦巻文・入組文を配する例が多々存する（図 8 － 33・34・39）。源常平例もその系統にあるが、注口部が文様の基点になっていることによるものと思われる。注口直上に配する文様は肩部文様帯の上下幅に規定されるが、その系統は渦巻文（逆の字状）として大洞 BC1 式まで継承される（図 11 － 1 ・ 5 ・16）。

それでは、注口基部の矩形文様とその外周の翼状文様、更に注口直上の円文等を手掛かりとして、後続型式への変遷を見て行きたい。

先ず大きな変化となるのは、縄文地文の消失である。肩部文様のみならず、口縁部と体下半部からも縄文地文が消失する。大洞 B1 新式～同 B2 式にかけて、主要な文様帯から縄文地文が消失するのは、注口土器に限らず亀ヶ岡式土器全般の趨勢であり、他の精製土器と軌を一にした歩みを示していると言えるであろう。

上平例（図 17 － 3）は、縄文が消失した初期の例である。注口基部を囲う矩形文様の一端が翼状の文様と連結して、一筆書きで巴状の文様が左右対称に描出され、注口直上には円文を有する。巴状文様の円形の部分は大きく描出され、巴状文様の完成には至っていない。

曲田Ⅰ例（図 17 － 4）が、大洞 B2 古式に一般的な巴状文様である。左側の矩形文様は閉じているが、右側の一端は下向きと上向きの弧線に分かれ、一筆書きで巴状文様が描出される。矩形の頂点に対向して棘状沈刻が施され、また注口直上に J 字状の渦巻文を配することで、対向した巴状文様が 2 組並列した構成となっている。文様両端の撥ねる方向が上下逆になっており、口縁部文様の在り方と合致する。

大洞 B2 古式の曲田Ⅰ例（4）と先行する磨消縄文（2）を比べると、前者は沈線で区画された浮文が太く短く描出されるため、文様帯の横幅は狭まっている。また文様帯の上下幅の縮小によるものか、先端が上下で向かい合う構成から、一端のみとなり、左右対称から反転した構成への変化が読み取れる。その点で上平例（3）は未熟な巴状文様と左右対称の在り方から、過渡的様相を示していると言えるであろう。図 9 － 16・25・26・29 は、

先端が上下で対向した鉗脚状で、左右対称の構成をとることから、曲田Ⅰ例（図 17 － 2）の系譜を引くと考えられ、大洞 B2 古式でも古相に位置づけられる。

白坂例（図 17 － 5）は、大洞 B2 新式に位置づけられる。文様自体は先行する曲田Ⅰ例（4）とあまり変わらないが、矩形文様が沈線と化し、やや繁縟化するのと、背面に同様の文様が施される点に差異が存する。

大洞 B2 新式には、背面だけではなく側面にも文様が施されるようになり、全周展開の前駆的様相を示している（図 7 － 26、図 10 － 1・4・9・13・16）。白坂例は良好な事例とは言い難いが、上記の例で見ると、正面の巴状文様は注口の左右に菱形文が配され、菱形の頂点に対向して三叉状・棘状の沈刻が加えられ、注口直上には複線による「逆の字状」の文様が施される。先行型式で見た矩形の一端が開放されたり、沈線が伸びる例は少なく、菱形文のみで完結する。また背面には、正面と同様の文様（図 10 － 1・9）が施され、文様両端の跳ねる方向は正面の文様を横に 180 度転回させた構図となる。側面には上下で対向した棘状の沈刻と下向きに渦巻く双頭渦文（図 7 － 26、図 10 － 9）や、「く字状・逆く字状」の弧線で囲まれた文様（図 10 － 4・13）等が見られ、正面・背面とは異なった文様構成となる。

大洞 B2 新式と先行型式との大きな差異は、注口左右の菱形文にある。菱形文自体は矩形文様の形骸化した在り方であり、巴状のモチーフは文様の両端のみに認められる。先行型式で見られた対向した巴状文様が 2 組並列した構成は失われており、口縁部・口頸部の文様と同様に形骸化が進行する。

大洞 BC1 式では、肩部文様帯の縮小化と文様の全周展開により、巴状文様は少なくなる。その中で、図 7 － 33 の金田一例が良好な例となるであろう。肩部文様帯の上端に截痕列が囲繞され、文様帯の上下幅が圧縮されており、巴状文様を構成する対向した三叉状・棘状の沈刻は上下で連結し、渦巻文も複線で構成され、繁縟化が著しい。注口の左右に菱形文をとどめた例も散見される（図 7 － 34・38、図 11 － 4・5）が、次第に類似の構図をとる C 字文が取って代わり、肩部の縮小が著しい大洞 BC2 式では、巴状文様は認められなくなる。

E 体下半部の文様について

（1）注口直下の「ノ字文」について

「ノ字文」は体下半部の注口直下で、左から伸びて来た沈線がカーブを描いて下に向かい、鋭く反転して注口に戻る沈線文様で、片仮名の「ノ」に類似することからこの名を付した。大洞 B1 新式～ B2 古式の過渡的段階に原初的形態が認められ、大洞 B2 古式～同 BC2 式にかけて盛行する注口土器に特有の文様で、左側から垂下して反転する例のみで、逆ノ字を呈する例は存在しない。

大洞 B1 新式～ B2 古式の過渡的段階は、注口付近に磨消縄文を施す特徴を持つが、既に注口直下には体中央部の稜線から伸びた縄文地文のノ字文が認められる（図 7 － 17・18）。肩部の翼状文様の両端直下の稜線から、沈線が斜位に垂下しており、丁度体部文様下端の区画線としての様相を呈している。この文様から地文が消失することで、大洞 B2 古式以降の体下半部に盛行するノ字文が成立したと考えられる。

それでは磨消縄文のノ字文がどのように成立したのか、その来歴について幾つかの可能性を列記してみたい。

① 台付鉢の体部文様の「ノ字文」との関係。

② 注口土器 A 類の口縁部文様のノ字状文様との関係。

③ 注口基部の巴状の膨らみとの関係。

先ずは、①について検討したい。東北北半の大洞 B1 新式の台付鉢の体部文様帯の下端には、ノ字文がしばしば散見される。体部文様下端の区画沈線が右下がりのカーブを描いて垂下し、体部文様の三叉文や円文・入組文から垂下した沈線と結合してノ字状を呈するもので、地文に縄文が施され、ノ字の外周又は内部が磨り消される場合が多い。この文様と注口直下のノ字文との親和性を想定するものであるが、台付鉢は大洞 B2 式では小型化してより浅い鉢形の形制となり、ノ字の区画内は地文を持たず丁寧に研磨され、直下の体下半部に縄文が施され、後続の大洞 BC1 式まで残存する。

②は、注口土器の口縁部文様が、そのまま注口直下に移入されたと想定するものである。大洞 B1 新式～ B2 古式の過渡的段階の注口土器 A 類の口縁部文様には、前記したように縄文地文を伴うノ字状文様が散見される（図 9 － 2・7）。筆者はこの文様が大洞 B2 古式に盛行する巴状文様の母体になったと考えるが、ほぼ同時期に体下半部にも縄文地文のノ字文が現出する（図 7 － 17・18）。

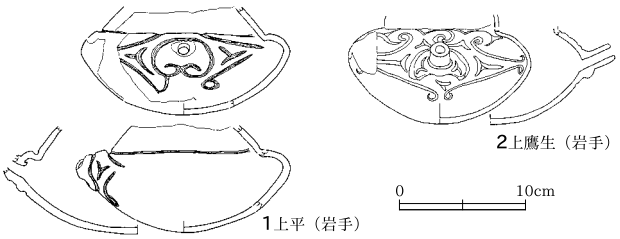
注口土器と台付鉢のノ字文の差異は、前者が 1 単位の

みであるのに対し、後者では４単位以上で構成される。しかし台付鉢のノ字文の原初的形態と注口土器の口縁部文様の描出手法は類似しており、また両者とも磨消縄文の例が多く、時期的にも限定される等、両者の文様は相関性を有していたことが想定される。従って①・②は本来一体の関係にあったと判断されよう。

③は、注口基部の巴状の膨らみの内、巴状の尖端部分が沈線で表現されたと考えるものである。大洞 B1 古・新式の注口基部には巴状の膨らみを持つ例がしばしば散見されるが、巴状の先端は右側から左へ上向きに巻き込む例が多く（図７－15、図８－19・31）、逆の例は少ない（図８－32）。注口直下のノ字文は必ず左からカーブを描きノ字となっており、逆の例は存在しない[31]。その点では台付鉢も同様であり、ノ字文の成立に当たって、③の案は妥当とは言い難いであろう。

上記の３案以外で筆者が注目するのは、「逆ノ字」の例に当たるが、図８－33 の長森例である。長森例は大洞 B1 新式に位置づけられ、注口基部を囲った三叉状区画の一端が開いて、細く尖った磨消縄文の文様が垂下される。正面から見ると、注口を中心に菱形の区画が形成され、その下端が逆ノ字状に突出し、上端は双頭渦文となる。実は大洞 B1 新式～ B2 古式の過渡的段階には、先に記したようにノ字文が体部文様の下端の区画線としての役割を果たしている。また後続する大洞 B2 古式にも稜線からノ字文が垂下される例が多く、体下半部に沈線が囲繞されるノ字文は、大洞 B2 新式以降に多くなる。その意味で、長森例はノ字文の原初的形態を呈しており、筆者はこのような例が発展してノ字文の成立に至ったと私考している。同様の例が図 18 －１の上平例で、下端の左側がノ字状、右側が渦巻き状を呈するが、時期的には後続する（大洞 B1 新式～ B2 古式の過渡的段階）。

ノ字文は大洞 B2 古式～同 BC1 式にかけて、Ａ・Ｂ両類に多用されるが、大洞 BC2 式では古相にのみ認められる。大洞 BC2 式の古相は、頸部と肩部の境界が強く屈折し、肩部が短く張り出した形制で、体下半部に截痕列を持たないのが特徴であるが、このような類型にのみノ字文が施される（図７－42 ～ 44）。一方肩部が段と化し、体下半部に截痕列を囲繞した新相の注口直下は、双頭渦文で占められている。このことからノ字文は双頭渦文よりも早い段階に姿を消したと言えるであろう。



大洞B1新式～B2古式の過渡的段階

図18　ノ字文・双頭渦文関連資料

なお、ノ字文に関連して注口基部直下の三叉文について触れておきたい。大洞 B1 古式の注口直下には二袋状突起や巴状の膨らみが多用されるが、この膨らみの部分に倒立状に対向した三叉状の沈刻を施した例が見られる（図８－19）。入り組みを持たずに、注口直下の窪みを囲う対向した構成となるが、後続の大洞 B1 新式にも継承される（図５－21、図７－15）。また大洞 B1 新式では半球状の膨らみの出現に呼応して、入組三叉文の沈刻の存在も明確になる（図８－29）。それ以降の大洞 B2 古式には入組三叉文が通例となり、同 BC2 式の新相まで多用される。しかし大洞 BC2 式終末の段階では、注口基部に環状隆帯、更に外周には菱形の隆起装飾が配され、両者が注口直下で結合して突起が付されるようになる。その結果従来三叉文が沈刻された部位が失われてしまい、入組三叉文は姿を消すが、図 13 － 20 の注口直下の巴状の沈刻は、その名残をとどめた例であろう。

注口直下の入組三叉文は、大洞 B1 新式～同 BC2 式まで一貫して用いられており、注口土器に施された文様の中でも最も長期にわたった文様要素として、特筆されるものである。

（２）注口直下の双頭渦文について

双頭渦文とは二つ並んだ渦巻き状の沈線文様で、大洞 B2 式～同 BC2 式にかけて、前記したノ字文と共に注口直下にしばしば認められる。その初現は大洞 B1 新式に求めることができるであろう。

大洞 B1 新式は、前記したように無文の注口土器Ａ類が主体であるが、体上半に全周化した文様を有する例が存する（図５－21、図８－34）。両例とも体部（肩部）文様帯の下端の区画沈線が注口直下で垂下して、下向きの渦巻きや、反転して逆鉢巻き状の文様が描出されており、図８－33 の正面の肩部文様の上端にも上向きの双頭渦文が認められる。図 18 －１・２も注口付近の菱形区画の下端が渦文で描出された例で、１はノ字文を伴っ

ている。恐らくこれ等の資料が、大洞 B2 古式以降の双頭渦文の母体になったと考えられる。

大洞 B2 古式の双頭渦文は、左右から伸びた沈線が注口直下で下向きに背向して外側に渦巻くのが通例であり（図２－２）、「３字状」の沈線を横倒しにした例（図２－１）も見られるが、ノ字文と同様に注口付近のみの構成となる。大洞 B2 新式では、体下半部に囲繞した沈線から垂下した双頭渦文の間に、菱形文を付加して錨形をなす例（図７－28）が現出する。しかし大洞 B2 古式～同 BC1 式までは、前記したノ字文が一般的であり、双頭渦文が顕著となるのは大洞 BC2 式で、特にその新相では文様のバリエーションが豊富に認められる。

大洞 BC2 式では、それまでの下向きに背向して外側に渦巻く類型（図 12 － 18）は少なくなり、注口直下に菱形文を配して、その頂点から上向きに伸びた沈線が内側に渦巻く例が多くなる（図 12 － 10・11）。その変形として渦巻文が複線化した例（図７－ 46、図 12 － 13・15・24、図 13 － 2）や、菱形文の上方斜辺が渦巻文と結合した例（図 12 － 6 ・ 7 ・25）、また巴状文様に関わる「逆の字状」の文様も散見される（図 12 － 3・16）が、当該期には従前の体下半部上端の沈線から延長した文様ではなく、独立した文様への変化が看取される。

当初双頭渦文は、下向きに内側から外に渦巻く単沈線で出発した文様であるが、菱形文が付加され、沈線は複線化して、大洞 BC2 式の新相に発達が顕著となる。しかしその終末の段階では、磨消縄文が取って代わり、姿を消すことになる。

（３）体下半部の磨消縄文について

大洞 BC2 式終末の段階になると、体下半部に磨消縄文の文様が盛行する。それまでの体下半部の文様は、前出のノ字文や双頭渦文等で構成されるのが通例であったが、当該期の磨消文様の登場と共に姿を消しており、この体下半部の文様帯は大洞 C1 式以降主要な文様帯として発展して行くことになる。

大洞 BC2 式終末の段階の磨消縄文の中でも古相を示す例が、図 13 － 7 ・11・24 のような注口直下に２個の巴状文様を反転させた構成であろう。更に４単位で構成された例が図 13 － 23、図 19 － 2 であり、巴状文様の変形した例が図７－ 45、図 13 － 13・19・20・22 である。筆者は上記の反転した巴状文様を磨消文様の系列の一つに想定している。

反転した巴状文様の初現は、大洞 B2 新式の B 類（図 10 － 13、図 17 － 5）に求められる。大洞 BC1 式の B 類（図 11 － 28）に継承され、A 類にも双頭渦文の巴状文様が認められる（図７－ 34）。上記の系譜を引いて大洞 BC2 式の新相の図 19 － 1 が成立したと考えられるが、この巴状文様は上端の沈線から独立した構成となり、沈線からの延長として施された従前の文様とは異同が存する。図 19 － 1 に縄文が施され、副要素や補助要素が付加されたことで、大洞 BC2 式終末の段階の巴状文様の磨消縄文の成立に至ったと想定される。巴状文様は元来大洞 B2 古式～同 B2 新式の口縁部・口頸部文様帯や肩部文様帯に多用された文様であるが、これ等の文様の衰退に伴い、注口直下の体下半部に脈絡を保ったことになるであろう。

大洞 BC2 式の新相には、図 19 － 1 のように、体下半部の正面（注口直下）・背面・側面の４単位の文様を有する例が現出する（図 12 － 7 ・11・13・24）。特に図 19 － 1 は側面が尖った構成で、突出部分がより発展した形態が大洞 BC2 式終末の段階の図 19 － 3 ・ 8 であり、大洞 C1 式の図 19 － 5 ・ 6 ・ 9へと継承される。文様帯の上限は突起下の沈線で区切られており、下限の区画は認められないが、底部を区画した例は散見される（図 13 － 13・18・19、図 19 － 1）。

体下半部の全周化した文様には、上記のような突出文様と曲線文様を交互に配し連続した文様の系列（図 19 － 3 ・ 8）と、図 19 － 2 のように同一文様を４単位配し、磨り消し部を介して途切れた文様の系列が存する。また注口直下と側面で異なった文様が施される例においても、磨り消し部を介して文様が途切れ個々独立した構成を持つ例（図 13 － 19）と、文様が途切れずに連綿と続く例（図 13 － 18）が認められる。この文様の連続・非連続の差異は、後者から前者への発展形態とも受け取れるが、大洞 C1 式にも後者の系列は存しており（図 19 － 6）、時期差ではなく雲形文内部での系統差と見なすべきものであろう（高橋龍三郎 1981）。

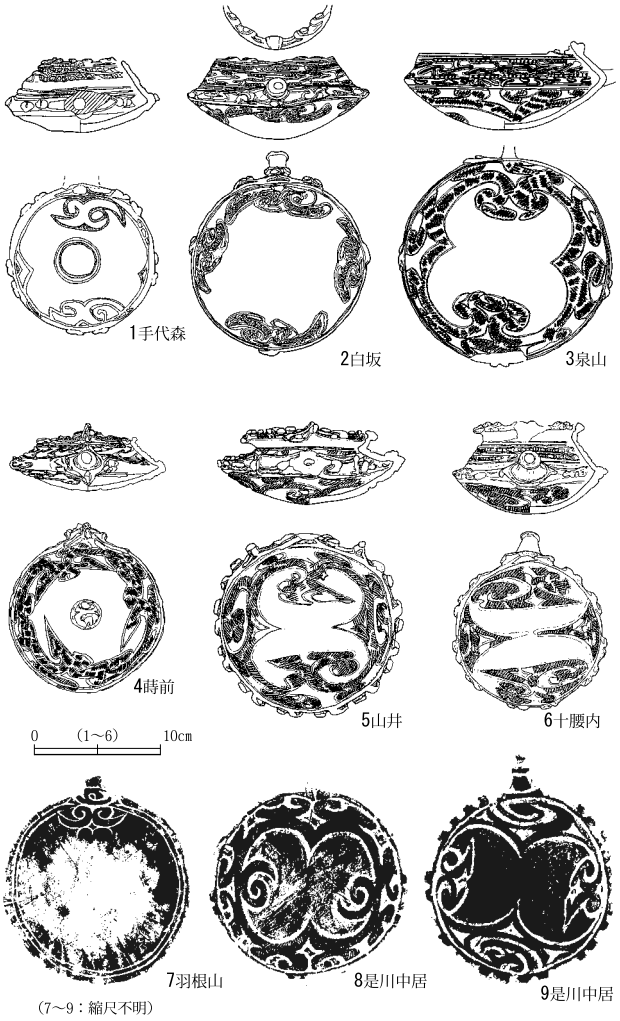
次に、大洞 BC2 式終末の段階と同 C1 式の磨消縄文の差異を検討してみたい。大洞 C1 式の体下半部の文様は、下限の区画線は持たず、雲形文を半割りにした文様を４単位乃至突出文様と交互に施した例が多い（図 19

－５・６・９）。雲形文は一端が丸味を帯び、もう一端は尖鋭で、底部側がやや直線的となる（図 19 － 6）。種々の副要素・補助要素が加えられ、複雑な文様となるが、基本的には大洞 C1 式の椀形等に一般的な雲形文を二分した形状に等しい。

一方大洞 BC2 式終末の段階の磨消縄文は、同 C1 式で見た雲形文はまだ認められない。前記したように反転した巴状文様の例（図 19 － 2）が多く、突出文様を有する例においても巴文様を配したり（図 19 － 8）、両端が丸味を帯びた逆鉢巻き状の構成を有しており（図 19 － 3）、一端が先鋭化する雲形文には至っていない。またポジ文様の幅が太く、その占める面積も大きく、大洞 C1 式の洗練された文様に比すると、やや生硬な印象を受ける。図 13 － 21 の上平例は、体下半部に雲形文と突出文様が交互に配され、頸部にＫ字文を合わせ持つ例である。体下半部のネガ文様の諸要素は細く加えられ、文様の区画線には陥入した文様が付加されないため、全体的に硬直した印象を受ける。頸部のＫ字文は崩れ、平行化の過程にある截痕列の様相を呈しており、大洞 C1 式に位置づけられる公算が大であろう。

大洞 C1 式の注口土器の体下半部の文様は、同式の椀形の文様に共通しており、その成立を一概に注口土器の系統に求めることはできない。しかし雲形文の部分を除くと、先行する図 19 － 3・８は大洞 C1 式の様相に近似しており、突出文様を有する類型については系統性を有していたと判断されよう。

図 19 － 4・５は、大洞 BC2・C1 式のいずれに含めるのか、逡巡する資料である。４の形制は低平化が著しく、口端は短く外折するが、正面に大型突起が付されており、Ｂ類の系統にある。頸部のＫ字文は残存するものの、截痕充填の区画が入組文からは独立した構成となっており、形骸化が認められる。体下半部の文様は、先端が尖った雲形文が３単位連続して配置され、底部の円形区画内に肉彫的手法によるＸ字状の浮文が施されるが、底部の浮文は大洞 BC 式にはない特徴である。５はＡ類の系統にあるが、頸部が陥没気味で、正面から頸部文様は確認できない。口端と肩部が突起列と化しており、口縁部は短く外折する。両例の形制はＡ・Ｂ類の区分を困難にしており、先に指摘した両類の融合化を示唆する資料であり、筆者は大洞 C1 式の古相に位置づける。６も



1～3・7・8：大洞BC2式、4～6・9：大洞C1式

図19　大洞BC2～C1式の体下半部文様

大洞 C1 式の古相の例であるが、頸部文様には末端の咬み合わない羊歯状文風の文様が囲繞される。しかし小葉部に相当する截痕は細かな刻目へと変化しており、形骸化の過程が看取される。

以上、体下半部の磨消縄文について、反転した巴状文様からの系統を検討して来たが、その初現となる文様は既に大洞 B2 新式に認められており、前記した双頭渦文の関与する余地はまず認め難いと言えよう。しかし大洞 BC2 式の注口直下に配した双頭渦文の変形として、７のような対称的に配置した巴状文様も認められており、何らかの関係を有していたことを窺わせる。

肩部の横長のＢ突起は、大洞 BC2 式終末の段階から多用される。先行する大洞 BC2 式の新相では、肩部の要所に突起が付されたり（図 19 － 1）、上下で入り組む陰刻により突起風に強調される例が認められるが、その終末の段階では肩部が隆帯化し、粘土粒と深い陰刻で

Ｂ突起列が作出される。突起は正面の菱形の隆起装飾の両端や、背面・側面といった要所に等間隔に配置され、全周に展開するものではない（２・３・８）。しかし大洞 C1 式の突起列はその間隔が短く又は連続的となり、全周化に至っている（５・６・９）。

7　結　語

以上雑駁ではあるが、東北北半における後期末（瘤付第Ⅳ段階）～大洞 BC2 式までの注口土器の変遷について論じて来た。基本的には、山内清男氏の５階梯の変遷案（後期末→大洞 B1 式→同 B2 式→同 BC1 式→同 BC2 式）に準拠しており、大枠では８階梯、細別では 10 階梯の変遷案を提示することになった。

特に大洞 B1 式と同 B2 式を新古に二分し、大洞 B1 式と同 B2 式の過渡的段階の抽出及び大洞 BC1 式の積極的な評価に努めており、更に大洞 BC2 式については三分される可能性を指摘した。結果的に詳細な変遷案を示すことになったが、一部に一括資料の援用を得ているものの、殆どが型式学的検討から導出した机上の編年であり、出土状況に基づく検証は今後に残された課題である。

晩期前半の注口土器の型式変化は、山内氏によって大枠の指針が示されて来た。即ち形制は低平化の過程にあり、口縁部は退縮、頸部は拡大、肩部は縮小の変遷を辿っており、その変化の過程の細かな跡づけを筆者なりに試みたのが、本稿の骨子となるものである。特に注口土器Ａ類の形制の変化を基軸に据えて、文様帯構成や文様要素の系統的変化を検討して来たが、後期末の壺形の無文化したＡ類から、文様帯の重畳が著しく、複雑な磨消縄文で構成される大洞 C1 式の注口土器への変遷を型式学的に跡づけるならば、少なくとも山内氏の５階梯は必須の区分であり、更にその間隙を埋め合わせることで、最終的には 10 階梯の変遷案を提示する結果となった。

筆者は変化の過程を鋭敏に示す器種として、注口土器を型式区分の指標に位置づけている。しかし注口土器のみが突出した編年案であることは否めず、他器種との整合性については多くの課題が残されている。特に大洞 BC1 式の評価は、入組三叉文と羊歯状文の共存を指摘した「雨滝式」に深く関わる問題であり、他器種からの明確な指示が求められる。また東北北半の注口土器が突出することにより、他地域との併行関係にも支障を来すことになろう。取り分け東北南半の注口土器との対比は不十分であり、今後北半に準じた注口土器編年の構築が求められる。

筆者が提示した編年は、晩期初頭においては鈴木克彦氏の旧編年案を、また大洞 B2 式以降では金子昭彦氏の編年案を追認することになった。鈴木氏の旧案では大別区分に問題を残すものの、筆者が大洞 B1 新式に位置づける「大洞Ｂ式の中でも古手」の段階が抽出されており、今日的にも通用となる優れた内容であったと思われる。その意味で、後年改変が加えられたことは遺憾と言わざるを得ない。金子氏は最終的には大洞 B2 式を２細分、同 BC2 式を３細分しており、大洞 BC1 式を含めると、筆者の大洞 B2 ～ BC2 式の編年にほぼ合致した区分となっている。しかし先に記したように、指示する内容については異同が存しており、整合性をいかに求めて行くのか、今後の課題であろう。

筆者は型式変化において文様帯構成を重視したが、それは林謙作氏の研究に負う所が多い。林氏は注口土器の文様帯の拡大・分裂する過程に型式変化の基準を見出しており、同氏の指摘した文様帯の変遷序列は、多少の例外は存するものの、妥当性の高い指針となっている。

後期末～晩期前葉における注口土器は、極めて系統立った変遷を示している。その中で亀ヶ岡式注口土器の成立をどの段階に求めることができるのか、問題になるところである。その変遷は他の器種と同様に漸次的であり、大きな画期を設けることは困難と言わざるを得ないが、壺形とは異なった独自の形態が確立した点を重視するならば、注口土器Ａ類の原初的形態が確立する大洞B1 新式にその成立期を求めることができるであろう。またＡ・Ｂ両類の組み合わせの確立と、文様帯やその後に継承される諸属性の確立を評価するならば、大洞 B2 古式の段階に画期が設定されるであろう。

しかしいずれの案をとるのか、それを画定するだけの十分な根拠を筆者は持ち合わせておらず、前者の段階に亀ヶ岡式注口土器の母体が形成され、後者の段階になって飛躍的な発展が認られる点を指摘するにとどめざるを得ない。

今回は、亀ヶ岡式前半期の代表的な類型であるＡ・Ｂ類についてのみ考察して来た。その他にも壺形の類型であるＣ類も存するが、本稿では殆ど触れることができな

かった。C類は後期末～大洞B1式にかけてはA類と共に主導的な位置を占めており、無視できない類型であるが、大洞B2～BC1式の様相が判然とせず、大洞BC2式以降になって再び盛行する。その系譜については、改めて検討してみたい。　（2002年12月27日稿了）

註

1）　中谷氏の集成的研究の背景に、杉山壽榮男氏編集の『原始文様集』（1923年刊）と『日本原始工芸』（1928年刊）が寄与していたことは、「附録二 注口土器資料表」（中谷1927a）から明らかである。『日本原始工芸』の刊行年次が『注口土器ノ分類ト其ノ地理的分布』の翌年であることから、『日本原始工芸』刊行前に中谷氏が同書の内容を利用できる立場にあったと推測され、同書の例言には、編輯に中谷氏の助力を得た旨が記されている。なお江坂輝彌氏によれば『日本原始工芸概説』（1928年刊）の大部分の文章は、中谷氏の筆になるという（江坂1972）。

2）　山内氏は埼玉県真福寺貝塚出土の大洞BC式の急須形土器に対し、「頸部（上半）と体部（下半）は隆帯状をなす肩に於いて直接に続いて居る」のが「大洞BC中間式」以降に見られる特徴で、「大洞B式では肩は頸と体（下半）との間に区劃された部分を有する」こと、また千葉県余山貝塚出土の「大洞B式に近い」注口付土器に対しては、「前述の如く頸と体下半との間に肩の区劃があり、壺形の器形が扁平化し終に急須形に至る道程を示して居る」と解説した（山内1930）。これに先立ち中谷氏に対する批評（山内1929）でも、注口土器の編年についての一端を披瀝しており、『日本先史土器図譜 第Ⅹ輯・第ⅩⅠ輯』（1941年刊）においても、関東出土の注口土器（注口付土器、急須型土器）に対し、亀ヶ岡式との比較から解説している（山内1967）。山内氏が型式区分の指標として注口土器を重視していたことは、1934年東京考古学会例会席上にて、注口土器及び香炉形土器の型式別の発達について発表されたことからも窺える（山内1964）。但し『ドルメン』「學界彙報」（第3巻第12号）によると、1934年11月17日（土）東大キリスト教青年会館にて原始文化研究会11月例会が開催され、「亀ヶ岡式土器」（参加者二十余名）の発表が行われているが、同年の東京考古学会例会の記録は見当たらず、原始文化研究会の誤記であった可能性が考えられる。また『日本先史土器図譜 第ⅩⅠ輯』では、1935年原始文化研究会席上にて同様の発表が行われた旨が記されているが、1934年の誤記であったと思われる。

3）　「かたち、こしらへかた。＝形製。」（『字源』角川書店に拠る）。

4）　芹沢氏は既に1958年6月刊行の『世界陶磁全集 1 日本古代篇』（再版）の図版解説で、雨滝遺跡出土の土器に対して「雨瀧式」の名称を用い、注口土器2例の層位的状況を例示していた（水野編1958）。雨滝遺跡第2次調査は同年10～11月に実施されているので、2例は第1次調査時（1953年4月実施）の資料である。芹沢氏が「雨瀧式」とした図版46上段（図3－2、図16－8）は筆者の大洞B2新式、図版46下段は大洞BC2式（古相）に相当する。なお同書では、岩手県小鳥谷遺跡出土の大洞BC式注口土器（東京大学人類学教室蔵）に対し、山内清男氏が解説しているが、筆者は大洞BC2式（新相）に位置づけている。

5）　藤村氏は晩期初頭のA・B両形態の差異に結び付けて注口部の接合方法の違いを指摘したが、該期通有の特徴とは認め難いように思われる。

6）　金子氏は当初大洞B2式を「古い部分」、「中位の部分」、「新しい部分」と三分したが、直後に「大洞B2式の古い部分を大洞B1式の新しい部分と考えて大洞B1式に含めて考えた方が良いと思うようになった」（金子1992a）と訂正した。筆者も金子氏の改訂案に賛同するが、改訂後の同氏の編年の真相が判然としない。なお同氏は「大洞BC2式の新しい部分」について更に新古に細分している。

7）　筆者が藤村氏等の分類表記を踏襲しないのは、以下の理由による。東北北半を見据えた場合、筆者のA類とした類型（3段構成）が後期の壺形注口土器の系譜を引き、大洞A式まで一貫した在り方を示すのに対し、筆者がB類とした類型（2段構成）は後期末葉の様相が判然とせず、晩期になって付随し、途上離脱する。筆者のA類が主導的位置を占め、B類が傍系であったことは明白であり、系統性を考察する上で、筆者のA類を表記の最初に位置づける必要があったことによる。なお鈴木克彦氏も同様の趣旨の指摘を行っている（鈴木1997）。

8）　A・B両類とも大洞B2古式～BC1式にかけては体部の扁平化が進行し、頸・肩の接着部の位置が低下する傾向にある。肩部上端が陥没したものについては、肩部中央の最高点を**肩央**と呼称する。

9）　山内氏の注口土器に対する記述は、以下の通りである。図版・参考図版番号は筆者の判断で省略したが、本稿掲載の資料については本稿挿図番号を付した。「後期では注口土器は多く壺形であって（番号省略），体部に注口が加えられている。晩期の始め大洞B1式でも同じ形制を示しているが，多くは無紋となる。大洞B2式（図3－1～3）では体部が低平となり，皿形の下半部の上に肩が付く様になる。注口附近を中心として沈線文様が生じはじめる。大洞BC式（図3－4）になると肩の部分が縮少し，頸の下方が広くなる。沈線の文様が(1)，外折する口唇部　(2)，頸部　(3)，肩部　(4)，体下半部等各別帯として発達する。大洞C1式（図3－5）では肩は縮小し，隆帯状となる。口唇も縮小する。口端及び肩には厚い突起列又は近似のものが加えられる。頸部には前代大洞BC式の頸部文様（図3－4）の一部から系統を引く磨消縄文の文様帯を持つ様になる。体下半の磨消縄文も前代の沈線文様から出発したものである。大洞C2式（番号省略）もC1式と大体同様の形制を持っている。但し底は丸底でなく平底となる。文様帯も手法の変遷があるが，大差ない。しかし，壷形の体上部を持った形態が多少出現する。大洞A式では今迄の体部がつぶれた，坪井博士が古く算盤玉形と形容した形から，再び壷形に復古する。しかし体中央には嘗てあった肩の隆帯，注口附近の装飾は残存する。次の大洞A'式には注口付土器は無くなるらしい。」（山内1964）。

10）　曲田Ⅰ遺跡ⅢE－011住居跡出土土器を大洞B2式に位置づける研究者は須藤隆氏（須藤1992）、大洞BC1式に位置づける研究者は林謙作（林1993）、金子昭彦（金子1992a）、鈴木加津子（鈴木加津子1993）の各氏である。但し金子・鈴木両氏は大洞BC2式の存在も指摘しており、ある程度の時間幅を認めている。なお報告者は大洞B2式と同BC式が同一層中に混在していたと見なしているが、時期的にはかなり近接していたと考えている（鈴木隆英1985）。

11）　C字文とは上下で対向する棘状沈刻と、渦巻文・上下で入り組む弧線文等が交互に配置された文様を指し、ポジ文様がC字又はX字状を呈する。大洞B1新式に初現が認められ、大洞B2新式～同BC2式に多用される文様である。

12）　対向する三叉文の呼称として、魚眼状・入組・玉抱の各三叉文が存するが、研究者によって指示する内容が異なるた

め、筆者は須藤隆氏の分類（須藤ほか 1995）を参考に、以下のように定義した。「魚眼状三叉文」は円文・円形刺突・円文に類する文様の左右に三叉文が対称的に配置されるもので、中心文様を囲うように配され、三叉文の末端が中心文様に接することは稀である。「入組三叉文」は対向する三叉文の一端が中央で入り組んで、ほぼ点対称に展開するもので、咬合部は接着と未接着とに二分され、前者では円形・楕円形・円形刺突を巻き込む形態と反転のみの形態が見られ、後者にも一方のみ円形刺突を巻き込む形態が存する。これ等には従来玉抱三叉文と称された類型も含まれるが、入組三叉文との判別が困難であるため、入組三叉文に包括している。

13）　図５－21 を大洞 B1 式に位置づける研究者が大勢であるが、鈴木克彦氏は大洞 B2 式に位置づけている（鈴木克彦 1997）。金子昭彦氏も当初大洞 B2 式の古い部分（金子 1991）に位置づけたが、大洞 B1 式（新）に修正している（金子 1993）。

14）　この場合の単位文様とは、基本的な単位となる文様要素を機械的に配した在り方を指しており、異なった文様要素を交互に配置した構成から、突起等とは関係なく同一文様要素（ポジ・ネガ文様を問わず）を繰り返し入れ込んだ文様構成への変化として用いており、「追い込み式のくり返し」（今村 1983）の文様に相当する内容である。従って図５－14 の体部文様は単位文様を構成していることになるであろう。

15）　西田泰民氏によると、同じ馬淵川流域でも上流域の岩手県側では胎土に海面骨針が殆ど含まれないのに対し、下流域の青森県側ではある程度含まれるといった差異が存するという（西田 1994）。また後期末～大洞 B1 式では、新井田川中・上流域に羽状縄文の粗製深鉢が顕著であるのに対し、馬淵川流域では LR が主体といった差異が存するようである。

16）　大洞 B1 古式の装飾口縁の代表例としては、『北の誇り・亀ヶ岡文化』（青森県教委 1990）22 頁所収の青森県青森市沢山遺跡出土の大型注口土器（器高 31 ㎝）が挙げられる。Ａ類の数少ない有文の注口土器として重要である。

17）　御殿山式の注口土器では、口縁部と頸部、頸部と体部の境界に連鎖状貼付文を囲繞する例が多く、また頸部文様帯を構成するものも認められる。

18）　大洞 B1 古式Ｂ類の有文の例としては、『縄文の美－是川中居遺跡出土品図録 土器編－』(八戸市博 1985)43 頁４(『縄文土器大成　4　晩期』図版 211）が挙げられる。口頸部・体部とも４単位の魚眼状三叉文（磨消縄文）で構成され、口頸部の内彎が著しい。

19）　図１－１の諏訪堂例の頸・体部境界の隆帯もⅡｂ文様帯の名残として捉えられるが、Ｂ類に含めるかどうかは判断しかねる。大洞 B1 古式Ａ類でⅡｂ文様帯を残す例は、青森市玉清水遺跡に認められる。『小杉嘉四蔵 蒐集考古学資料写真集』（小杉 1988）の表紙資料（『北の誇り・亀ヶ岡文化』194 頁所収）で、頸部文様帯は魚眼状三叉文と弧線・帯縄文が交互に配置される。註 16 の沢山遺跡を含め青森平野に特異な注口土器が散見されるのは、御殿山式の分布域である北海道渡島半島との窓口としての地理的位置に関連しているようにも思われる。

20）　東北北半一円だけではなく、北海道苫小牧市柏原５遺跡（工藤ほか 1997）でも認められており、広域的な広がりを有している。

21）　報告書では同一個体との記載はないが、並列して提示されており、土器観察表によると捨て場２の同一のグリッド・層位から出土している（宇部ほか 2002）。口縁部下端と頸部上端の径もほぼ等しく、双方を合成しても何ら違和感はない。なお大洞 B1 新式～ B2 式の過渡的段階のＡ類の良好な資料は青森県玉清水遺跡で２例認められる（『北の誇り・亀ヶ岡文化』22・64・195 頁所収）。

22）　大洞 B1 新式～ B2 式の過渡的段階のＢ類の例としては、青森県弘前市小森山東部遺跡出土の大型注口土器が挙げられる（今井 1968）。口唇部は縄文地文の魚眼状三叉文、体中央部には縄文帯が囲繞され、注口付近に磨消縄文の文様が施される。しかし提示された実測図は写真図版と対比すると、図上復元の部分が多く正確性を欠いており、対象からは除外した。

23）　林謙作氏は「「横に相並ぶ二個の瘤」のあいだに山が一つ割りこんだようなもの」を「Ａ－Ｂ突起」と呼称している（林 1993）。しかしＡ突起とＢ突起の折衷形態としての意味が読み取れ、好適な呼称とは思えないため、筆者は「三山状突起」の名称を用いる。

24）　金子昭彦氏は図 10 － 12・15・16 を大洞 BC1 式に位置づけている（金子 1991・92a）。同氏は大洞 BC1 式の装飾文様の一つとして、「周囲に半円形の文様を配置することの多い方形の入組文」（金子 1992a）を挙げていることによるものであろう。

25）　蒔前例（図７－45）について金子昭彦氏は「大洞 C1 式の古い部分」に位置づけている（金子 1991）。

26）　ネガ文様を構成する３要素（主要素・副要素・補助要素）については、高橋龍三郎氏の定義に準拠している（高橋龍三郎 1981）。

27）　筆者が確認できた大洞 C1 式Ｂ類の例は、北海道女名沢遺跡（鈴木・林 1981）、青森県亀ヶ岡遺跡（青森県立郷土館 2001）、秋田県地方遺跡（石郷岡ほか 1987）等数例に過ぎない。

28）　芹沢氏（芹沢 1960）は蒔前例（図７－49）を大洞 C1 式に、藤沼氏（藤沼 1989）は蒔前例（図 13 － 18）を大洞 C1 式に、鈴木加津子氏（鈴木加津子 1993）は細野例（図 12 － 18、図 13 － 19）を大洞 C1 式に位置づけている。また鎌木義昌氏も青森県八幡遺跡出土の同様の注口土器（倉敷考古館蔵）に対して、大洞 C1 式の編年的位置を与えている（水野編 1958）。金子氏は「大洞 BC2 式の新しい部分」を細分して、筆者のＢ類をその中でも新しい段階に位置づけている（金子 1991）。なお鈴木克彦氏は筆者のＢ類（図７－50、図 13 － 18・19）については大洞 BC 式に含めるが、筆者のＡ類（図７－41）については大洞 C1 式に含めている（鈴木克彦 1997）。

29）　山内氏は『日本先史土器図譜 第ＸＩ輯』（1941 年刊）の群馬県板倉沼出土の急須型土器に対して、「又下半部の磨消縄紋も寧ろ大洞Ｂ～Ｃ中間式のものと並行して居る。」（山内 1967）と解説し、大洞 BC 式段階の注口土器の体下半部の磨消縄文の存在を指摘していた。また『日本原始美術　1　縄文式土器』（1964 年刊）の参考図版に掲載された蒔前例（図 13 － 18）に対しても、大洞 BC 式の型式名を付与していた。上記からも、山内氏が当段階のＢ類を大洞 BC 式の範疇に含めていたことは明らかであろう。

30）　『縄文の美－是川中居遺跡出土品図録 土器編－』（八戸市博 1985）44 頁５の是川中居例（『縄文土器大成　4　晩期』図版 205）は、口縁部が内彎して内傾する特異な例で、口縁部文様は末端が尖鋭化した曲線的な磨消縄文で構成されるが、肩部が短く、頸部が伸張した形制から、大洞 B1 古式（又は同新式）に位置づけられる。

31）　右側からカーブを描いて逆ノ字文となる例は、青森県玉清水遺跡（註 21）に認められ、大洞 B1 新式～ B2 古式の過渡的段階に位置づけられる。

引用文献

青森県教育委員会　1990『北の誇り・亀ヶ岡文化－縄文時代晩期編－』図説「ふるさと青森の歴史」シリーズ③
青森県立郷土館　2001『青森県立郷土館収蔵資料図録－第３集・考古編（２）－』
安孫子昭二　1982「第五章 縄文時代 後･晩期」『村山市史 別巻一 原始･古代編』村山市史編さん委員会編
石郷岡誠一ほか　1987『秋田市秋田新都市開発整備事業関係埋蔵文化財発掘調査報告書－地方遺跡・台Ｂ遺跡－』秋田市教育委員会
今井富士雄　1968「小森山東部遺跡」『岩木山－岩木山麓古代遺跡発掘調査報告書－』岩木山刊行会
今井富士雄・磯崎正彦　1968「十腰内遺跡」『岩木山－岩木山麓古代遺跡発掘調査報告書－』岩木山刊行会
今村啓爾　1983「文様の割りつけと文様帯」『縄文文化の研究 5 縄文土器Ⅲ』雄山閣
宇部則保ほか　2002『八戸市内遺跡発掘調査報告書 15 是川中居遺跡１』八戸市埋蔵文化財調査報告書第 91 集
江坂輝彌　1972「あとがき」『日本考古学選集 24 中谷治宇二郎』築地書館
葛西励ほか　1983『木戸口遺跡』平賀町埋蔵文化財報告書第 12 集
金子昭彦　1991「大洞 B2 式の磨消縄文について（上）－東北地方北部を中心として－」『研究紀要』ＸＩ　岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター
金子昭彦　1992a「大洞 B2 式の磨消縄文について（中）－東北地方北部を中心として－」『研究紀要』ＸⅡ　岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター
金子昭彦　1992b「「雨滝式」の再検討」『北奥古代文化』第 22 号　北奥古代文化研究会
金子昭彦　1993「大洞 B2 式の磨消縄文について（下）－東北地方北部を中心として－」『研究紀要』ＸⅢ　岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター
鎌田祐二　2001『近内中村遺跡－第１次～第７次発掘調査の概報－』宮古市教育委員会
工藤肇ほか　1997『柏原５遺跡－一般国道 235 号日高自動車道苫東道路改良工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書Ｉ－』苫小牧市埋蔵文化財センター
小杉嘉四蔵　1988『小杉嘉四蔵 蒐集考古学資料写真集〔玉清水（１）遺跡〕』青森縄文文化を探る会
小林圭一　1999「東北地方 後期（瘤付土器）」『縄文時代』第 10 号　縄文時代文化研究会
小林達雄　1994『縄文土器の研究』小学館
斉藤淳ほか　1979『東北縦貫自動車道関係埋蔵文化財調査報告書－Ｉ－』岩手県文化財調査報告書第 31 集
酒井宗孝ほか　1986『駒板遺跡発掘調査報告書－東北縦貫自動車道関連遺跡発掘調査－』岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第 98 集
佐々木清文ほか　1986『手代森遺跡発掘調査報告書－北上川水系大沢川の河川改修工事に伴う事前緊急発掘調査－』岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第 108 集
佐原真　1979『日本の原始美術 2 縄文土器Ⅱ』講談社
塩谷隆正・山岸英夫　1985『長森遺跡発掘調査報告書』青森市教育委員会
鈴木加津子　1993「真福寺小考－安行式と亀ヶ岡式における編年と分布の推敲－」『埼玉考古』第 30 号　埼玉考古学会
鈴木克彦　1981「亀ヶ岡式土器」『縄文文化の研究 4 縄文土器Ⅱ』雄山閣
鈴木克彦　1997「注口土器の研究－主として東北地方の注口土器集成－」『研究紀要』第２号　青森県埋蔵文化財調査センター
鈴木克彦　2001『北日本の縄文後期土器編年の研究』雄山閣
鈴木公雄・林謙作編　1981『縄文土器大成 4 晩期』講談社
鈴木隆英　1985『曲田Ｉ遺跡発掘調査報告書－東北縦貫自動車道関連遺跡発掘調査－』岩手県埋文センター文化財調査報告書第 87 集
須藤隆　1992「東北地方における晩期縄文土器の成立過程」『東北文化論のための先史学歴史学論集』加藤稔先生還暦記念会
須藤隆ほか　1995『縄文時代晩期貝塚の研究２ 中沢目貝塚Ⅱ』東北大学文学部考古学研究会
芹沢長介　1960『石器時代の日本』築地書館
高橋正之ほか　1980『御所ダム建設関連遺跡発掘調査報告書（昭和 52 年度・53 年度）』岩手県埋文センター文化財調査報告書第 13 集
高橋龍三郎　1981「亀ヶ岡式土器の研究－青森県南津軽郡浪岡町細野遺跡の土器について－」『北奥古代文化』第 12 号　北奥古代文化研究会
高橋龍三郎　1991「第２節 縄文時代晩期前半の土器」『縄文沼遺跡発掘調査報告書』小泊村教育委員会・早稲田大学文学部考古学研究室
高橋龍三郎　1999「東北地方 晩期（亀ヶ岡式）」『縄文時代』第 10 号　縄文時代文化研究会
高柳圭一　1993「1992 年の縄文時代学界動向 土器型式編年論 晩期」『縄文時代』第４号　縄文時代文化研究会
種市進　1983『道地Ⅱ遺跡・道地Ⅲ遺跡発掘調査報告書－東北縦貫自動車道関連遺跡発掘調査－』岩手県埋文センター文化財調査報告書第 64 集
中村大　1992「米代川流域における亀ヶ岡土器様式－大洞Ｂ式における文様変遷の再検討とその地域性について－」『年報 能代市史研究』第２号
中谷治宇二郎　1926「注口土器の分布に就て」『人類学雑誌』第 41 巻第５号　東京人類学会
中谷治宇二郎　1927a『注口土器ノ分類ト其ノ地理的分布』東京帝国大学理学部人類学教室研究報告第４編　東京帝国大学
中谷治宇二郎　1927b「日本の石器時代遺物の研究 1. 注口土器の分類とその分布（摘要）」（1999 年刊『日本縄文文化の研究＜増補改訂版＞』溪水社 所収）
中谷治宇二郎　1936「日本新石器文化の一考究－特に分布圏と文化圏に就て－」『考古学』第７巻第１・２合併号　東京考古学会
西田泰民　1994「東北北部における海面骨針含有土器」『縄紋晩期前葉－中葉の広域編年』平成４年度科学研究費補助（総合Ａ）研究成果報告書
八戸市博物館　1985『縄文の美－是川中居遺跡出土品図録 土器編－』目で見る八戸の歴史２
林謙作　1976「亀ヶ岡文化論」『東北考古学の諸問題』寧楽社
林謙作　1993「曲田Ｉと八幡－東北北部晩期前葉の土器－」『論苑 考古学』坪井清足さんの古稀を祝う会編
林謙作ほか　1995『山井遺跡－縄文晩期の包含層－』一戸町文化財調査報告書第 36 集

藤沼邦彦　1989「亀ヶ岡式土器様式」『縄文土器大観 4 後期 晩期 続縄文』小学館
藤村東男　1972「東北地方における晩期縄文時代の注口土器について」『史学』第 44 巻第２号　三田史学会
藤村東男　1980「大洞諸型式設定に関する二、三の問題」『考古風土記』第５号
星雅之ほか　2000『長倉Ⅰ遺跡発掘調査報告書』岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第 336 集
三浦圭介ほか　1978『源常平遺跡発掘調査報告書－東北縦貫自動車道関係埋蔵文化財発掘調査－』青森県埋蔵文化財調査報告書第 39 集
水野清一編　1958『世界陶磁全集 1 日本古代篇』（再版）河出書房新社
谷地薫ほか　1992『曲田地区農免農道整備事業に係る埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅱ－家ノ後遺跡－』秋田県文化財調査報告書第 229 集
山内清男　1929「Ｊ.Nakaya：A Study of the Stone Age Remains of Japan. Ⅰ.Classification and Distribution of Vases with Spouts.」『史前学雑誌』第１巻第３号　史前学会
山内清男　1930「所謂亀ヶ岡式土器の分布と縄紋式土器の終末」『考古学』第１巻第３号　東京考古学会
山内清男　1964「縄文式土器・総論」『日本原始美術 1 縄文式土器』講談社
山内清男　1967『日本先史土器図譜－図版・解説－』（再版・合冊刊行）先史考古学会
山内清男ほか　1971「山内先生と語る」『北奥古代文化』第３号　北奥古代文化研究会

図版出典

青森県教育委員会　1976『泉山遺跡発掘調査報告書－一般県道櫛引上名久井三戸線道路改良工事埋蔵文化財発掘調査－』青森県埋蔵文化財調査報告書第 31 集
青森県教育委員会　1979『細越遺跡発掘調査報告書－青森西部ほ場整備関係埋蔵文化財発掘調査－』青森県埋蔵文化財調査報告書第 49 集
青森県教育委員会　1985『尻高（２）・（３）・（４）遺跡発掘調査報告書』青森県埋蔵文化財調査報告書第 89 集
青森県教育委員会　1995『泉山遺跡－道路改良事業（櫛引・上名久井・三戸線）に係る埋蔵文化財発掘調査報告書－』青森県埋蔵文化財調査報告書第 181 集
青森県教育委員会　1998『水吉遺跡－八戸平原開拓建設事業（世増ダム建設）に伴う発掘調査報告－』青森県埋蔵文化財調査報告書第 245 集
青森県教育委員会　2001『十腰内（１）遺跡Ⅱ－県営津軽中部広域農道建設事業に伴う遺跡発掘調査報告－』青森県埋蔵文化財調査報告書第 304 集
青森県立郷土館　1997『馬淵川流域の遺跡調査報告書』青森県立郷土館調査報告書第 40 集
秋田県教育委員会　1975『鹿角大規模農道発掘調査略報』秋田県文化財調査報告書第 35 集
秋田県教育委員会　1981『藤株遺跡発掘調査報告書』秋田県文化財調査報告書第 85 集
秋田県教育委員会　1983『平鹿遺跡発掘調査報告書』秋田県文化財調査報告書第 101 集
秋田県教育委員会　1988『玉内遺跡発掘調査報告書－一般国道 282 号改良工事に係る埋蔵文化財発掘調査－』秋田県文化財調査報告書第 171 集
秋田県教育委員会　1994『東北横断自動車道秋田線発掘調査報告書ＸⅢ－小田Ⅳ遺跡－』秋田県文化財調査報告書第 243 集
秋田県教育委員会　1994『白坂遺跡発掘調査報告書－県営圃場整備事業に係る埋蔵文化財発掘調査－』秋田県文化財調査報告書第 244 集
秋田県教育委員会　1994『桂の沢遺跡発掘調査報告書－小滝阿仁前田停車場線地方道改良事業に係る埋蔵文化財発掘調査－』秋田県文化財調査報告書第 247 集
秋田県教育委員会　1996『秋田外環状道路建設事業に係る埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅳ－片野Ⅰ遺跡－』秋田県文化財調査報告書第 265 集
秋田県教育委員会　1998『虫内Ⅰ遺跡－東北横断自動車道秋田線発掘調査報告書ＸＸⅢ－』秋田県文化財調査報告書第 274 集
秋田県埋蔵文化財センター編　1983『高石野遺跡発掘調査概報』琴丘町教育委員会・秋田県埋蔵文化財振興会
一戸町教育委員会　1986『蒔前－岩手県蒔前遺跡出土資料の図録－』一戸町文化財調査報告書第 17 集
岩手県教育委員会　1981『東北縦貫自動車道関係埋蔵文化財調査報告書－Ⅳ－（一関地区 東裏遺跡）』岩手県文化財調査報告書第 55 集
岩手県埋蔵文化財センター　1982『御所ダム建設関連遺跡発掘調査報告書－盛岡市 萪内遺跡－』岩手県埋文センター文化財調査報告書第 32 集
岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター　1986『大日向Ⅱ遺跡発掘調査報告書－東北縦貫自動車道関連遺跡発掘調査－』岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第 100 集
岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター　1995『大日向Ⅱ遺跡発掘調査報告書－国道 395 号改良工事関連遺跡発掘調査－』岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第 225 集
岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター　1997『上鷹生遺跡発掘調査報告書－上鷹生ダム建設関連遺跡発掘調査－』岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第 253 集
岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター　1999『大芦Ⅰ遺跡発掘調査報告書－ふるさと農道緊急整備事業大芦地区関連発掘調査－』岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第 306 集
大迫町教育委員会　1979『小田遺跡発掘調査報告書』大迫町埋蔵文化財報告第４集
久慈市教育委員会　1985『大芦遺跡発掘調査報告書』久慈市埋蔵文化財報告書第５集
古代學協會　1997『青森県石亀遺跡における亀ヶ岡文化の研究』古代學研究所研究報告第５輯
五城目町教育委員会　1984『中山遺跡発掘調査報告書』
三戸町教育委員会　2000『沖中遺跡・沖中（２）遺跡 発掘調査報告書』三戸町埋蔵文化財調査報告書第１集
階上町教育委員会　2000『滝端遺跡発掘調査報告書－県営南の郷中山間地域総合整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査－』
八戸遺跡調査会　2002『是川中居遺跡－長田沢地区－』八戸遺跡調査会埋蔵文化財調査報告書第２集
八戸市教育委員会　1988『八幡遺跡発掘調査報告書』八戸市埋蔵文化財調査報告書第 26 集
平賀町教育委員会　1979『石郷遺跡』平賀町埋蔵文化財報告書第７集
盛岡市教育委員会　1990『上平遺跡群（上平遺跡）－第４次発掘調査概報（遺構・土器）－』
盛岡市教育委員会　1995『上平遺跡群（猪去館・上平Ⅱ遺跡）－平成４・５年度発掘調査概報－』

最北の破鏡

―鏡片分布から見た古墳出現期の動態（予察）―

高橋　敏

1　はじめに

筆者は 1999 年に、山形市中野に所在する馬洗場Ｂ遺跡（図１）の調査を担当する機会を得た。遺跡は古墳時代から近世まで断続的に存続した複合遺跡であり、最上氏に関連する中野城にちなんだ地名から遺跡名が付けられている。遺跡の南には、古墳時代前期の木製品が大量に出土した服部・藤治屋敷遺跡が隣接し、本遺跡が幾分先行する印象を持つものの、出土品の様相などから何らかの関連がある可能性が想定される。

調査は、主体となる平安時代の遺構の検出を念頭に置いて実施した。しかし、表土除去後の遺構確認作業中に古墳時代前期を中心とする土器片が多く出土したことから、平安時代確認面下層に古墳時代の文化層の存在が想定され、その後のトレンチ調査の結果、竪穴住居跡などの遺構が確認された。古墳時代前期の遺構としては、竪穴住居跡 20 棟あまりと河川跡などが検出された。河川跡からは多くの土器・木製品の他に、木組み遺構も出土している。

2　出土した破鏡

破鏡は、古墳時代の遺物が多く散布する地点で遺構を検出するため、面的に下げている際に出土した。プランは確認できなかったが、調査終了後の検討で遺物がほぼ同じレベルで確認できること、古墳時代前期の竪穴住居跡に切られていると考えられることなどから、未確認であった竪穴住居跡の覆土から出土したと判断される。

破鏡（図２）は復元径 8.2cm を測る内行花文鏡で、１／３強遺存している。平縁・斜行する櫛歯文・３重の重圏文・直行する櫛歯文・内行花文が観察されるが、鈕及び鈕座は存在しない。内行花文は六弧の可能性が高い。破断面及び全体が研磨され１箇所に穿孔が観察される。懸垂用と考えられる穿孔は破断面のほぼ中央に穿たれており、シンメトリーを意識したと考えられる。

図１　遺跡位置図

図２　馬洗場Ｂ遺跡出土破鏡（内行花文鏡）

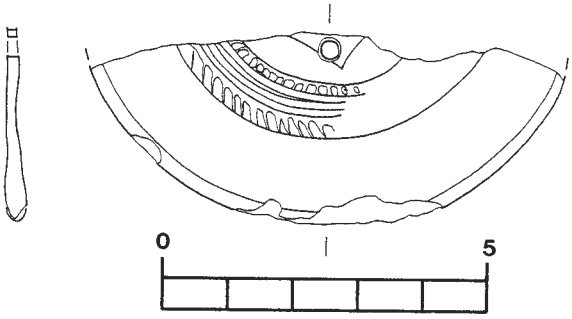


図３　破鏡実測図

この内行花文鏡は、現在の時点で日本最北（北限）の破鏡である。破鏡が山形市で確認された意味、人あるいはモノの移動・波及という大きな問題に関する糸口、馬洗場Ｂ遺跡の性格などを把握する資料とするため以下に、全国の破鏡及び鏡片の集成を試み、分布の傾向、破

鏡が出土する遺跡及び遺構の性格や年代、鏡種などについて検討しよう。

3　研究史略

破鏡研究史は、画像鏡や方格規矩鏡・三角縁神獣鏡などの大型鏡研究に比して、活発に研究されてきたとは言い難い。しかし、1970 年代以降北部九州を中心として研究が始められ、高倉洋彰氏、高橋　徹氏、正岡睦夫氏等が優れた論文を発表された。さらに、1980 年代以降の出土例の増加に伴って論考も増え、小柳和宏氏、副島邦弘氏、藤丸詔八郎氏、前出高橋　徹氏らが報告書中で考察を展開している。1994 年前原市で開催された「第 35 回埋蔵文化財研究集会『倭人と鏡』」は、高倉・高橋両氏の他、森岡秀人氏が破鏡集成とその東伝について、論究されるなど、「破鏡」研究のピークを迎えた。その後、今尾文昭氏は、破断面の研磨痕跡の詳細な観察を基に、桜井茶臼山古墳での破鏡の存在を明らかにしている。

4　破鏡の概念

本稿では、破鏡を含めた鏡片を集成した。総計は 678 点にのぼる。国立歴史民俗博物館による集成を基本とし、月刊文化財発掘出土情報などからも補っている。用語についても概ね国立歴史民俗博物館集成に従ったが、一部は報告書あるいは新聞等の記事に倣った所がある。

「破鏡」の概念として、鏡片の中で破断面または鏡面全体が人為的に研磨され懸垂用と考えられる穿孔が穿たれているもの、あるいは研磨・穿孔のいずれかが観察されるものを「破鏡」とする。単に破片として出土し、研磨・穿孔など二次調整が確認されていないものは「鏡片」として扱うこととする。しかし、これら「鏡片」の中には詳細な破断面及び鏡面の観察がなされていない例が一定量含まれていると思われ、実体顕微鏡などによる観察を行えば「破鏡」とすることが出来うる個体が見いだせる可能性がある。また、墳墓・古墳出土「鏡片」例の中には「完形鏡」で副葬されたが、盗掘などの外的要因により破片となったものが多く存在するのも事実であろう。今尾文昭氏によれば桜井茶臼山古墳では 1 例のみ破鏡で、メスリ山古墳では破鏡はないとのことであり、古墳出土「鏡片」は注意が必要との指摘を受けた。

5　破鏡・鏡片の分布と出土状況

破鏡は総数で 161 点確認することができた。先学の論考にあるように北部九州に分布の中心があり、中国・近畿・東海と東漸するに従って希薄となる。長崎県・宮崎県・鹿児島県では確認例が極めて少なく、関東では千葉県及び神奈川県の東京湾岸地域に偏在している。日本海側の佐渡、北限となる山形市の本例は、分布域の縁辺であり、その意味する所の問題が大きいと考えられる。（図 4）また、分布の中心をなす北部九州においても、幾つかのグループに細分できる。福岡市・前原市などの玄界灘に面した一帯、神崎町・小郡市など筑後川中流域、熊本県菊池川流域、大分県竹田市を中心とする大野川中上流域、同県安心院町を中心とする駅館川中上流域などである。中国四国近畿では、広島県神辺町を中心とする芦田川中流域、岡山市周辺、鳥取県青谷町周辺、愛媛県松山市周辺、高知県南国市・春野町などの高知平野一帯、香川県観音寺市・善通寺市一帯、神戸市・大阪市など大阪湾に面した一帯・滋賀県琵琶湖東岸などが指摘できる。一方、東海では愛知県清洲町・名古屋市の庄内川流域、北陸では石川県金沢市犀川下流域で複数確認されるのみである。面的な分布ではなく点的な分布といえる。

破鏡を出土遺構から見ると、集落・祭祀遺構から出土したものが 99 点、墳墓・古墳から出土したもの（不明含）62 点となり、集落・祭祀遺構出土が卓越する。分布傾向は、集落・祭祀遺構出土が破鏡全体の分布とほぼ一致する一方で、墳墓・古墳出土とは明確な違いが読みとれた。北部九州では玄界灘に面した一帯が中心となるのは同様で、次いで大分県玖珠川上流域と周防灘に面した地域にまとまりがある。他では岡山県岡山市と広島県福山市を中心とするやや広い地域、大阪府淀川下流域に分布するが、近畿以東では極めて少なくなっている。破鏡を墓に入れる行為が伝わらなかったのか、意識的に避けたのかであろうか、興味深い課題となる。

集落・祭祀遺構から出土した鏡片は 119 点を数える。分布域は、集落・祭祀遺構出土破鏡と驚くほど一致した。このことから、これらの鏡片は破鏡とほぼ同様の位置づけがなされていたと考えることができそうである。また、前述したように詳細な観察により研磨痕跡が認められれば、破鏡に組み入れることも可能であろう。

墳墓・古墳出土鏡片は 357 点である。分布の中心となる北部九州の墳墓（甕棺）出土鏡片は、須玖岡本遺跡・井原鑓溝遺跡・三雲遺跡・原の辻遺跡など拠点遺跡から集中して出土しているのが特徴となる。それ以外の地域では、岡山県・香川県・愛媛県の瀬戸内海沿岸地域と大阪府・奈良県北部・京都府南部に集中域が見られた。しかし、これらの鏡片は出土遺構の帰属時期がやや降るものがほとんどで、北部九州における鏡片の位置づけとは異なると想定される。

6　破鏡・鏡片の出土時期

次に、鏡片・破鏡の出土遺構の帰属時期について集成表を基に概要を述べる。時期については、引用した各文献の記載に従っている。

破鏡の中で集落・祭祀遺跡から出土した 99 点のうち、出土遺構が明確なものでは竪穴住居が 47 点を占め、溝・河川跡が 12 点となっている。流れ込みや千葉県の 1 例が古墳中期に降る以外は、概ね弥生Ⅴ期を中心として、いわゆる弥生庄内併行期におさまっている。従って地域による時期差はほとんど無いことが理解された。一方、破鏡の中で墳墓・古墳から出土した 62 点は地域間での時間差が窺え、北部九州では概ね弥生Ⅴ期～庄内併行期を中心とするのに対して、それ以外の地域では古墳前期が中心となっていた。

鏡片では、集落・祭祀遺構から出土した 119 点のうち、出土遺構が明確なものでは竪穴住居が 38 点、溝・河川跡 20 点となっている。九州と四国では弥生Ⅳ期～Ⅴ期を中心とするのに対して、それ以外の地域では弥生Ⅴ期～古墳前期と、やや新しくなるようである。一方、墳墓・古墳から出土したものは、遺構の種別や地域による時期差が明瞭である。遺構的には、古墳及び祭祀遺構では地域差による先後関係は窺えず、概ね古墳前期～中期を中心とするのに対して、墳墓ではほとんどが北部九州に存在し、甕棺が弥生Ⅲ期～Ⅳ期、箱式石棺や組合せ式木棺などが弥生Ⅳ期～Ⅴ期となっている。

7　まとめ

これまでの集成を基にした雑駁な検討をまとめると以下のようになる。

①　破鏡と鏡片は、時期・地域により位置づけが異なっているようである。

②　弥生Ⅲ期からⅣ期頃、北部九州の玄界灘に面する拠点遺跡（クニ？）で、鏡片が甕棺に副葬されるようになる。特定墳墓に集中する場合が見られる。

③　弥生Ⅳ期からⅤ期頃、鏡片は北部九州を中心とするが九州全域と四国沿岸部・吉備地方・大阪府淀川下流域に拡がり、主に集落内の竪穴住居内や溝・河川などに廃棄される。

④　弥生庄内併行期に、穿孔や破断面が研磨された破鏡が出現する。鏡片と分布域がほぼ一致しているが、中心域は大分県大野川中下流域である。また、愛知県庄内川下流域にも拡がる。日本海側では、鳥取・石川・佐渡と点的ではあるが拡がりを見せ、古墳前期初頭には山形でもみられる。これらの破鏡は、主に集落内の竪穴住居内や溝・河川などに廃棄される。

⑤　古墳前期を中心とする頃、吉備地方の古墳の多くに破鏡が副葬されるようになる。また、東京湾岸と利根川下流域の集落で鏡片と破鏡が竪穴住居や溝に廃棄される。

⑥　鏡片・破鏡の伝播ルートは、大きく分けて２つのルートが考えられる。一つは北部九州から瀬戸内海を主要交通路として愛媛県松山市周辺、香川県善通寺市周辺、吉備地方、そして大阪府淀川下流域へと続くルートである。東海地方へは紀伊半島を迂回して、庄内川を遡ったと考えられる。大分県大野川中下流域での集中現象に関して武末純一氏は、「鏡をマツリの道具として扱った近畿・瀬戸内の習俗の波及という可能性」を指摘しており、興味深い。もう一つは、北部九州から日本海を主要交通路として鳥取県青谷上寺地遺跡、石川県古府クルビ遺跡・無量寺Ｂ遺跡、新潟県佐渡島蔵王遺跡、そして山形県馬洗場Ｂ遺跡へと続くルートである。２つのルートとも海と主要河川を主たる交通路としたことが推測され、さほど時間を置かずに各地に波及した可能性が考えられる。これに対して、東海系曲柄鍬の東国波及に関して樋上　昇氏が、「南関東から東北南部へ、陸路或いは海と陸路を経て人的移動とともに伝播した。」と述べているように、破鏡も同じルートでもたらされたのではないかという指摘が、同僚から寄せられた。しかし、生活具ではない破鏡の伝播と生活具（土木具）であ

る東海系曲柄鍬の伝播とは、必ずしも同列に捉えなくても良いのではなかろうか。

今尾文昭氏から、「最近、沿海州でも破鏡が出土しているので、そちらからの伝播も考慮に入れた方がよいのでは、との指摘も受けた。

⑦　集落・祭祀遺構から出土した破鏡と鏡片の分布域を見ると、東北地方以外でも出土が見られない空白地域が何カ所か存在している。太平洋側では、愛知県矢作川以東から神奈川県相模川以西の地域、日本海側では、島根県・福井県・富山県から佐渡以外の新潟県が空白となっている。これらの地域は、破鏡や鏡片を好まなかったということも考えられるが、破鏡や鏡片が伝播し始めた時期には、既に強固な政治的集団としてのまとまりを見せていた地域でもあり、あえて威儀具あるいは祭祀具としての破鏡を必要としなかった地域とも言えそうである。むしろ、それら集団の縁辺にいる中小集団が、破鏡や鏡片を積極的に導入しようとしたのではなかったろうか。

8　おわりに

本稿は、馬洗場Ｂ遺跡の本報告執筆のための覚え書きを基にしている。今後、さらなる検討を加え、本報告で成果を発表したい。

なお、本稿をまとめるにあたり、多くの方々から指導並びに助言を得た。また、多くの文献から引用させていただいたが、紙数の都合により、氏名及び文献名は割愛させていただいた。

図４　破鏡・鏡片（集落出土）分布図

鏡　片　集　成

	県名	市町村名	遺跡名	鏡式	遺存度・面径(cm)		遺跡概要	出土遺構	遺構の年代	銘文	備考
1	山形県	山形市	馬洗場遺跡	内行花文鏡	破片	8～9	集落	竪穴住居	古墳初頭	無し	穿孔有り。破断面研磨
2	山形県	山形市	川前２遺跡	海獣葡萄鏡	破片	6	集落	竪穴住居	７Ｃ後半～８Ｃ初頭	不明	朱彩された布に包まれた可能性
3	福島県	北会津村	会津田村山古墳	内行花文鏡	破片		古墳	不明	古墳前期	無し	破断面研磨
4	新潟県	新穂村	蔵王遺跡	珠文鏡	破片	6.4	集落	掘立柱建物脇	弥生終末～古墳初頭	無し	破断面研磨？　内行花文鏡と供伴
5	新潟県	上越市	春日山古墳	鈴鏡	破片		古墳	不明	古墳後期	無し	現物無し
6	新潟県	堀之内町	古林１号墳	不明	破片	7.5	古墳	不明	古墳後期	無し	現物無し
7	新潟県	六日町	伝飯綱山古墳群	乳文鏡	破片	9.8	古墳	不明	古墳中～後期	無し	
8	富山県	高岡市	桜谷２号墳	不明	破片		古墳	不明	古墳時代	無し	現物無し
9	石川県	加賀市	分校高山古墳	方格規矩鏡	破片	12.8	古墳	不明	古墳時代	無し	
10	石川県	金沢市	古府クルビ遺跡	弥生小型仿製鏡	破片	9.0	集落	包含層	弥生時代	無し	破断面研磨
11	石川県	金沢市	無量寺Ｂ遺跡ＢⅡ区	双頭龍鳳文鏡	破片		集落	溝	弥生庄内式併行期	空欄	穿孔有り。破断面研磨　懸垂鏡
12	石川県	金沢市	塚崎遺跡６号住居	弥生小型仿製鏡	破片	8	集落・生産	竪穴住居	弥生庄内式併行期	無し	
13	石川県	辰口町	西山９号墳	不明	破片	13.8	古墳	横穴式石室	古墳後期	無し	
14	石川県	羽咋市	四柳白山下遺跡	不明	破片		集落	河川	弥生終末～古墳初頭		
15	石川県	羽咋市	吉崎・次場遺跡Ｖ８号土坑	キ龍文鏡	破片		集落	土坑	弥生Ⅳ期？	無し	
16	福井県	上中町	十善ノ森古墳	方格規矩鏡	破片	22	古墳	横穴式石室	古墳後期	無し	
17	福井県	福井市	今市岩畑遺跡８号墳	仿製六弧内行花文鏡	欠損	5.2	古墳	不明	古墳前期	空欄	
18	福井県	福井市	今市岩畑遺跡	仿製四獣鏡	欠損	7	墳墓	包含層	古墳中期	空欄	
19	埼玉県	嵐山町	大木前遺跡	二神二獣鏡	破片		集落	竪穴住居	平安時代	無し	古墳前期の破鏡　伝世？
20	埼玉県	大宮市	三崎台遺跡３次	弥生小型仿製鏡	欠損	7.6	集落	竪穴住居	弥生Ⅴ期	空欄	中央部欠損　破鏡ではない？　擦痕多い
21	茨城県	つくば市	国松馬場古墳	不明	破片	10.9	古墳	箱式石棺	古墳後期	無し	
22	茨城県	水戸市	溜沼台古墳群？	三角縁波文帯三神三獣鏡	破片	22	古墳	不明	古墳時代	空欄	
23	茨城県	結城市	林愛宕塚古墳	方格八乳鏡	欠損	9.3	古墳	礫槨	古墳中期	無し	穿孔有り。
24	群馬県	新田町	中溝・深町遺跡	内行花文鏡	破片	9～10	集落	竪穴住居	古墳前期	空欄	
25	千葉県	市原市	草刈六之台遺跡88号住居	不明（鏡片）	破片		集落	竪穴住居	古墳前期	無し	穿孔有り（ペンダント）。破断面研磨
26	千葉県	市原市	御林跡遺跡	不明（鏡片）	破片		集落	溝	弥生終末～古墳初頭	無し	未発表　詳細不明
27	千葉県	市原市	草刈遺跡Ｌ区029号	重圏文鏡	破片	7	集落	竪穴住居	古墳前期	空欄	
28	千葉県	市原市	草刈遺跡Ｌ区301号	重圏文鏡	破片	9.2	集落	竪穴住居	古墳前・中期	空欄	背面に赤色顔料
29	千葉県	市原市	草刈遺跡Ｃ区97号住居	珠文鏡	欠損	6.8	集落	竪穴住居	古墳前期	無し	
30	千葉県	市原市	草刈遺跡Ｃ区039Ａ住居	珠文鏡	破片		集落	竪穴住居	古墳前期	無し	
31	千葉県	市原市	姉崎二子塚古墳	勾玉文鏡	破片	8.1	古墳	空欄	古墳中期	無し	
32	千葉県	市原市	草刈遺跡Ｄ区241号住居	不明	破片	8.4	墳墓	不明	古墳時代	無し	
33	千葉県	神崎町	不明	不明	破片	8.69	不明	不明	不明	無し	
34	千葉県	木更津市	請西遺跡群野焼Ａ遺跡	不明（鏡片）	破片	9.5	集落	溝	不明	無し	朱が付着　破砕鏡か
35	千葉県	木更津市	東谷遺跡	単キ鏡	破片		集落	竪穴住居	古墳前期	空欄	彩色有り
36	千葉県	木更津市	高部32号墳	二神二獣鏡	欠損	14.4	古墳	組合式木棺	庄内併行	銘帯「□竟好潔～」19文字	彩色有り
37	千葉県	小見川町	地々免遺跡	獣形鏡	破片		集落	竪穴住居	古墳後期		
38	千葉県	佐倉市	太田・大篠塚遺跡	重圏文鏡	破片	11.2	集落	竪穴住居	古墳時代	空欄	
39	千葉県	佐原市	片野向遺跡	重圏文鏡	破片		集落	竪穴住居	古墳後期	空欄	
40	千葉県	佐原市	禅昌寺山古墳	画像鏡或いは獣帯鏡	破片	20.4	古墳	木棺直葬	古墳後期	銘帯二文字	
41	千葉県	袖ヶ浦市	根崎遺跡	鋸歯文鏡	破片	7.2	集落	竪穴住居	古墳中期	空欄	穿孔有り。破断面研磨
42	千葉県	長南町	能満寺古墳	不明	破片		古墳	木炭槨	古墳前期	無し	
43	千葉県	八日市場市	蒲野古墳群11号墳	不明	破片	6.9	古墳	木棺直葬	古墳前期	空欄	鏡背面に赤色顔料付着
44	神奈川県	伊勢原市	伝伊勢原市内	不明	破片	12.3	不明	横穴？	不明	無し	
45	神奈川県	寒川町	大神塚古墳	内行花文鏡？	破片		古墳	不明	古墳時代	無し	
46	神奈川県	逗子市	池子遺跡群ＮＯ２地点	内行花文鏡？	破片	9.4	集落	竪穴住居	古墳前期	無し	破断面摩滅。２カ所の穿孔痕跡
47	神奈川県	不明	伝神奈川県	位至三公鏡	破片	4.7	不明	不明	不明	無し	
48	神奈川県	横浜市	大場第二地区遺跡群ＮＯ２地区	内行花文鏡	欠損	5.7	集落	竪穴住居	弥生Ⅴ期	無し	穿孔有り。破断面研磨
49	山梨県	春日居町	寺の前古墳	不明	破片	11.7	古墳	横穴式石室	古墳終末期	無し	
50	長野県	飯田市	壱丈藪３号古墳	不明	破片	8.8	古墳	横穴式石室	古墳後期	空欄	
51	長野県	飯田市	兼清塚古墳	画文帯神獣鏡	破片	20.3	古墳	竪穴式石室	古墳中期	空欄	
52	長野県	更埴市	森将軍塚古墳	三角縁神獣鏡	破片	22	古墳	竪穴式石室	古墳前期	空欄	
53	長野県	佐久市	社宮司遺跡	多鈕細文鏡	破片	24.2	集落	空欄	弥生Ⅴ期	空欄	ペンダントに加工
54	長野県	須坂市	鎧塚１号墳	方格規矩鏡	破片	14	古墳	竪穴式石室	古墳中期	空欄	
55	長野県	長野市	石川条里遺跡	内行花文鏡	破片		祭祀	空欄	古墳前～中期	空欄	
56	長野県	長野市	松原	不明	破片		集落	空欄	古墳時代	空欄	
57	長野県	長野市	大黒山古墳	神獣鏡	破片		古墳	空欄	古墳中期	空欄	
58	静岡県	磐田市	新豊院山古墳群Ｄ２号墳	素文鏡	破片		古墳	竪穴式石室	古墳前期	無し	
59	静岡県	磐田市	二ツ山古墳	不明	破片		古墳	礫槨	古墳後期	無し	
60	静岡県	磐田市	磐田67号墳	素文鏡	破片	4.6	古墳	木棺直葬	古墳中期	無し	
61	静岡県	小笠町	上平川大塚古墳	三角縁四神四獣鏡	破片	22.1	古墳	不明	古墳時代	銘帯「・・子□□・」	
62	静岡県	静岡市	三滝ヶ谷古墳群２号墳	珠文鏡	破片		古墳	横穴式石室	古墳後期	無し	
63	静岡県	静岡市	上ノ山遺跡	素文鏡	破片		古墳	木棺直葬	古墳前期	無し	
64	静岡県	富士市	須津山山腹古墳	変形獣形鏡	破片		古墳	横穴式石室	古墳時代	無し	
65	愛知県	春日井市	勝川遺跡	不明	破片		集落	包含層	古墳後期	無し	
66	愛知県	清洲町	朝日遺跡	キ龍文鏡	破片		集落	墓坑	弥生後期末	無し	破鏡　赤塚次郎氏教示
67	愛知県	東海市	兜山古墳	内行花文鏡	破片	11	古墳	粘土槨	古墳前期	無し	
68	愛知県	名古屋市	高蔵遺跡	キ龍文鏡	破片	11	集落	竪穴住居	弥生後期初頭	無し	破鏡　未発表　赤塚次郎氏教示
69	愛知県	幡豆町	伝中ノ郷古墳	不明	破片		古墳	横穴式石室	古墳後期	無し	
70	岐阜県	可児市	身隠古墳	不明	破片	9.8	古墳	粘土槨	古墳前期	無し	
71	岐阜県	可児市	伝可児町西宮之洞	仿製内行花文鏡	破片		不明	不明	不明	無し	
72	岐阜県	巣南町	伝伊久良河宮跡	神獣鏡	破片		祭祀	不明	不明	無し	伊久良大塚古墳出土とも言われる
73	岐阜県	関市	砂行遺跡	方格規矩四神鏡	破片		集落	竪穴住居	弥生終末～古墳初頭	無し	穿孔有り。破断面研磨
74	岐阜県	関市	砂行１号墳第２主体	仿製半円方形帯四神鏡	欠損	11.1	古墳	木棺直葬	古墳中期	空欄	
75	岐阜県	垂井町	親ヶ谷古墳	内行花文鏡	破片		古墳	粘土槨	古墳前期	無し	現物無し
76	岐阜県	南濃町	行基寺古墳	内行花文鏡	破片		古墳	粘土槨	古墳前期	無し	現物無し
77	岐阜県	美濃加茂市	太田大塚古墳	内行花文鏡	破片	16.3	古墳	粘土槨	古墳前期	無し	
78	岐阜県	柳津町	佐波古墳	不明	破片		古墳	竪穴式石室	古墳前期	無し	現物無し
79	三重県	阿山町	東山古墳	四獣鏡	欠損	13.7	古墳	木棺	古墳前期	銘帯「□竟自有紀青龍～」	破断面研磨
80	三重県	上野市	八王子神社跡古墳	不明	破片		古墳	不明	古墳時代	不明	
81	三重県	上野市	北門遺跡	内行花文鏡	破片		古墳	不明	古墳中期	空欄	
82	三重県	嬉野町	伝郡塚古墳	仿製十二弧内行花文鏡	破片		古墳	不明	古墳前期	不明	
83	三重県	嬉野町	向山古墳	獣形鏡	破片	5.9	古墳	粘土槨	古墳前期	不明	
84	三重県	上野市	丹那山古墳	不明	破片		古墳	粘土槨	古墳時代	不明	
85	三重県	紀勢町	向井古墳	不明	破片	12.4	古墳	不明	古墳時代	不明	彩色有り
86	三重県	紀勢町	伝紀勢町錦	不明	破片	9.6	不明	不明	不明	不明	
87	三重県	久居市	善応寺山古墳	獣形鏡	破片	10	古墳	不明	古墳時代	不明	彩色有り
88	三重県	明和町	鴨塚古墳	獣形鏡	破片		古墳	不明	古墳時代	不明	不明
89	三重県	四日市市	志氏神社古墳	仿製内行花文鏡	破片	12.5	古墳	不明	古墳前期	不明	
90	滋賀県	大津市	上高砂遺跡	方格規矩鏡	破片		不明	包含層	古墳時代	無し	破砕鏡
91	滋賀県	草津市	北萱遺跡	素文鏡	破片		集落	包含層	不明	無し	
92	滋賀県	多賀町	木曽遺跡ＳＨ24	珠文鏡	破片	5.4	集落	竪穴住居	古墳中期	空欄	破砕鏡
93	滋賀県	能登川町	斗西遺跡	内行花文鏡	破片	10.2	集落・祭祀	河川	古墳前期	有「宜」のみ遺存	破砕鏡
94	滋賀県	能登川町	伊庭遺跡	鳥文鏡	破片	10	集落	包含層	古墳時代	無し	
95	滋賀県	守山市	大洲遺跡	素文鏡	破片	3	集落	土坑	古墳前期	空欄	破砕鏡
96	滋賀県	野洲町	大岩山古墳	不明	破片	14	古墳	不明	古墳前期	無し	現物無し
97	兵庫県	上郡町	井の端７号墓	不明	破片	13.7	墳墓	箱式石棺	弥生庄内式併行期	空欄	破鏡
98	兵庫県	尼崎市	田能高田遺跡	不明	破片	8.8	集落	包含層	古墳前期	空欄	
99	兵庫県	尼崎市	池田山古墳	画像鏡	破片	19	古墳	竪穴式石棺	古墳前期	銘帯「・・羊・・」	現物無し
100	兵庫県	尼崎市	池田山古墳	七弧内行花文鏡	破片	18.1	古墳	竪穴式石棺	古墳前期	空欄	
101	兵庫県	尼崎市	池田山古墳	斜縁神獣鏡	破片	14.8	古墳	竪穴式石棺	古墳前期	空欄	
102	兵庫県	尼崎市	阿保親王塚古墳	三角縁波文帯神獣鏡	破片	21.8	古墳	空欄	古墳前期	無し	
103	兵庫県	尼崎市	阿保親王塚古墳	三角縁神獣鏡	破片	22.1	古墳	空欄	古墳前期	空欄	
104	兵庫県	小野市	敷地大塚古墳	内行花文鏡	破片	15	古墳	不明	古墳中期	銘帯文字らしきもの有り	
105	兵庫県	加古川市	南大塚古墳	三角縁獣文帯三神三獣鏡	破片		古墳	竪穴式石棺	古墳前期	無し	
106	兵庫県	加古川市	天坊山古墳	画文帯神獣鏡	破片	12.6	古墳	竪穴式石棺	古墳前期	空欄	
107	兵庫県	神戸市	森北町遺跡	重圏銘帯鏡	破片		集落	空欄	弥生Ⅴ期	有り「心忽・・」	破鏡
108	兵庫県	神戸市	吉田南遺跡	内行花文鏡	破片		集落	竪穴住居	弥生庄内式併行期	鉛座「字画らしき」	穿孔有り。破断面研磨
109	兵庫県	神戸市	篠原遺跡	乳文鏡（弥生小型仿製鏡）	欠損	9	集落	溝	弥生Ⅴ期	空欄	

110	兵庫県	神戸市	会下山二本松古墳	不明	破片	15.5	古墳	竪穴式石棺	古墳前期	空欄	現物無し
111	兵庫県	神戸市	大蔵山古墳	不明	破片	6.2	古墳	割竹型木棺	古墳前期	無し	
112	兵庫県	神戸市	金棒池古墳	不明	破片	9.8	古墳	不明	古墳後期	無し	
113	兵庫県	五色町	鳥飼	唐草文鏡	破片	8.9	空欄	空欄	空欄	無し	
114	兵庫県	龍野市	白鷺山古墳	内行花文鏡	欠損	10.0	古墳	箱式石棺	弥生庄内式併行期	銘帯「寿如金石」鉗帯「位至三公」	破断面研磨
115	兵庫県	龍野市	龍子三ツ塚２号墳	夕龍鏡	欠損	11.7	古墳	竪穴式石棺	古墳前期	空欄	破断面研磨
116	兵庫県	龍野市	西宮山古墳	獣形鏡	破片		古墳	横穴式石室	空欄	空欄	
117	兵庫県	豊岡市	中ノ郷・深谷１号墳	四葉座内行花文鏡	破片	4.5	古墳	組合式石棺	古墳前期	「長□子□」	
118	兵庫県	豊岡市	長谷・ハナ１号墳	不明	破片	9.5	古墳	木棺直葬	古墳時代	空欄	
119	兵庫県	浜坂町	戸田忠霊塔古墳	不明	破片	10.6	古墳	空欄	古墳時代	空欄	
120	兵庫県	播磨町	大中遺跡	内行花文鏡	破片		集落		弥生Ⅴ期	無し	穿孔有り。破断面研磨
121	兵庫県	日高町	シゲリ谷古墳群	乳文鏡	破片	4.8	古墳	横穴式石室	古墳後期	無し	
122	兵庫県	姫路市	御旅山１３号墳	珠文鏡	欠損		古墳	不明	古墳中期	空欄	
123	兵庫県	姫路市	山の越古墳	半肉彫獣帯鏡	破片	16.4	古墳	石棺直葬	古墳中期	空欄	
124	兵庫県	姫路市	手柄山	不明	破片		不明	不明	弥生時代	空欄	現物無し
125	兵庫県	姫路市	手柄山	内行花文鏡	破片		不明	不明	弥生時代	空欄	
126	兵庫県	三木市	高木古墳群	獣形鏡	破片		古墳	竪穴式石棺	古墳時代	空欄	現物無し
127	兵庫県	三原町	戒壇寺	不明	破片		空欄	空欄	空欄	無し	
128	兵庫県	三原町	倭文委文古墳	仿製八弧内行花文鏡	破片	9	古墳	空欄	古墳時代	無し	
129	兵庫県	八鹿町	西家の上山頂古墳	内行花文鏡	欠損	10	墳墓	不明	不明	空欄	
130	京都府	綾部市	聖塚古墳	変形神獣鏡	破片	13.6	古墳	粘土槨	古墳中期	無し	
131	京都府	大山崎町	鳥居前古墳	環状乳神獣鏡	破片		古墳	竪穴式石室	古墳前期	無し	
132	京都府	亀岡市	滝の花塚古墳	仿製鏡	破片	9	古墳	割竹型木棺	古墳中期	無し	現物無し
133	京都府	亀岡市	向山古墳	仿製ダ龍鏡	破片		古墳	不明	古墳前期	無し	
134	京都府	木津町	城山遺跡	獣帯鏡	破片	15	墳墓	方形台状墓	弥生時代後期後半	無し	
135	京都府	京都市	天塚古墳	獣形鏡	破片	17.7	古墳	横穴式石室	古墳後期	無し	
136	京都府	京都市	天塚古墳	不明	破片		古墳	横穴式石室	古墳後期	無し	
137	京都府	京都市	天塚古墳	不明	破片		古墳	横穴式石室	古墳後期	無し	
138	京都府	京都市	一本松塚古墳	仿製鏡	破片	11.9	古墳	竪穴式石室	古墳前期	無し	
139	京都府	田辺町	興戸２号墳	仿製内行六花文鏡	破片	12	古墳	割竹型木棺	古墳前期	無し	
140	京都府	長岡京市	今里車塚古墳	仿製方格規矩獣文鏡	破片	22	古墳	不明	古墳中期	無し	
141	京都府	福知山市	狸谷１７号墳	四獣帯鏡	破片	11.0	古墳	木棺	古墳前期	空欄	穿孔有り。破断面研磨
142	京都府	福知山市	寺ノ段２号墳第４主体部	内行花文鏡	破片	17	古墳	木棺	古墳前期	無し	破断面研磨
143	京都府	福知山市	武者ヶ谷２号墳第３主体部	内行花文鏡？	破片	8.7	古墳	組合式木棺	古墳後期	無し	
144	京都府	舞鶴市	千歳下遺跡	二神二獣鏡？	破片	14	祭祀	包含層	古墳中期	銘帯「□□孫孫□」	穿孔有り。破断面研磨
145	京都府	舞鶴市	千歳下遺跡	不明	破片		祭祀	包含層	古墳中期	空欄	穿孔有り
146	京都府	向日市	寺戸大塚古墳	三角縁唐草文帯四神四獣鏡	破片	21.6	古墳	竪穴式石室	古墳前期	銘帯「天王日月」	
147	京都府	弥栄町	愛宕神社古墳	不明	破片		古墳	組合式木棺	古墳前期	空欄	
148	京都府	弥栄町	奈具岡北１号墳くびれ部	珠文鏡	欠損		古墳	流土	古墳中期	空欄	
149	京都府	弥栄町	溝谷２号墳	不明	破片	9.6	古墳	木棺直葬	古墳中期	無し	
150	京都府	八幡市	伝八幡町	画文帯神獣鏡	破片	18.9	不明	不明	古墳時代	無し	
151	京都府	山城町	椿井大塚山古墳	三角縁獣帯四神四獣鏡	破片		古墳	竪穴式石室	古墳前期	銘帯「天王日月」	
152	京都府	山城町	椿井大塚山古墳	三角縁銘帯四神二獣鏡	破片		古墳	竪穴式石室	古墳前期	銘帯「□巨古・・」	
153	京都府	山城町	椿井大塚山古墳	三角縁獣帯神獣鏡	破片	21.5	古墳	竪穴式石室	古墳前期	無し	
154	京都府	山城町	椿井大塚山古墳	内行花文鏡	破片		古墳	竪穴式石室	古墳前期	無し	
155	京都府	山城町	平尾城山古墳	仿製三角縁三神三獣鏡	破片		古墳	竪穴式石室	古墳前期	無し	
156	大阪府	大阪市	瓜破北遺跡	異体字銘帯鏡	破片		集落	包含層	弥生Ⅴ期	有り銘帯「□永・」	
157	大阪府	大阪市	瓜破北遺跡方形周溝墓	内行花文鏡	破片		墳墓	包含層	弥生庄内式併行期	無し	穿孔有り
158	大阪府	大阪市	瓜破北遺跡方形周溝墓	方格規矩鏡	破片		墳墓	包含層	弥生庄内式併行期	無し	
159	大阪府	大阪市	加美遺跡２号墓	内行花文鏡	破片		墳墓	木棺直葬	弥生庄内式併行期	無し	
160	大阪府	柏原市	玉手山６号墳	画文帯神獣鏡	破片		古墳	竪穴式石室	古墳前期	無し	
161	大阪府	河南町	寛弘寺１２号墳	盤龍鏡	破片	10.7	古墳	不明	古墳前期	無し	
162	大阪府	河南町	寛弘寺１２号墳	珠文鏡	破片		古墳	不明	古墳前期	無し	
163	大阪府	河南町	神山丑神遺跡	不明	破片	14.8	不明	包含層	古墳時代	無し	
164	大阪府	岸和田市	風吹山古墳	空欄	破片		古墳	不明	古墳中期	無し	
165	大阪府	堺市	城ノ山古墳	不明	破片		古墳	竪穴式石室	古墳中期	無し	
166	大阪府	堺市	城ノ山古墳	不明	破片		古墳	竪穴式石室	古墳中期	無し	
167	大阪府	堺市	城ノ山古墳	不明	破片		古墳	竪穴式石室	古墳中期	無し	
168	大阪府	堺市	百舌鳥古墳群	不明	破片		古墳	竪穴式石室	古墳中期	無し	
169	大阪府	吹田市	垂水遺跡	不明	破片	28	集落	落ち込み	古墳前期	空欄	
170	大阪府	高槻市	芥川遺跡	方格規矩鏡	破片	11.5	集落	竪穴住居	弥生Ⅴ期	無し	
171	大阪府	高槻市	塚原遺跡	漢式鏡	破片	22	集落	不明	不明	無し	現物無し
172	大阪府	高槻市	石塚古墳	不明	破片		古墳	不明	古墳時代	無し	現物無し
173	大阪府	富田林市	真名井古墳	不明	小破片		古墳	割竹型木棺	古墳前期	無し	
174	大阪府	東大阪市	福万寺遺跡	方格四乳鏡	破片		集落	遺構内	古墳前期		
175	大阪府	東大阪市	福万寺遺跡	画文帯神獣鏡	破片		集落	遺構内	古墳前期		
176	大阪府	東大阪市	福万寺遺跡	内行花文鏡？	破片		集落	土坑	古墳前期		
177	大阪府	東大阪市	福万寺遺跡	画文帯神獣鏡	破片		集落		古墳前期	無し	
178	大阪府	東大阪市	福万寺遺跡	画文帯神獣鏡	破片		集落		３世紀	無し	
179	大阪府	東大阪市	福万寺遺跡	方格四乳鏡	破片		集落		３世紀		
180	大阪府	東大阪市	福万寺遺跡	方格規矩鏡	破片		集落	包含層	古墳前期	空欄	
181	大阪府	東大阪市	福万寺遺跡	半円方形帯神獣鏡	破片		集落	包含層	古墳前期	半円方格帯「天（王）（日）（月）	
182	大阪府	藤井寺市	津堂城山古墳	不明	破片	12	古墳	竪穴式石室	古墳中期	無し	
183	大阪府	藤井寺市	津堂城山古墳	不明	破片	12	古墳	竪穴式石室	古墳中期	無し	
184	大阪府	藤井寺市	津堂城山古墳	不明	破片		古墳	竪穴式石室	古墳中期	無し	
185	大阪府	藤井寺市	津堂城山古墳	不明	破片	17	古墳	竪穴式石室	古墳中期	無し	
186	大阪府	松原市	上田町遺跡ＳＫ01	不明	破片		集落	土坑	弥生Ⅴ期	空欄	
187	大阪府	八尾市	八尾南遺跡	内行花文鏡	破片		集落	包含層	弥生Ⅴ期	無し	穿孔の痕跡有り
188	大阪府	八尾市	池島Ⅰ期	不明	破片	9.0	生産	土坑	古墳前期	空欄	破断面研磨
189	大阪府	八尾市	西ノ山古墳	空欄	破片		古墳	不明	古墳前期	無し	現物無し
190	奈良県	河合町	佐味田宝塚古墳	三角縁神獣鏡	破片		古墳	割竹型木棺	古墳前期	無し	
191	奈良県	河合町	佐味田狐塚古墳	不明	破片		古墳	粘土槨	古墳中期	無し	
192	奈良県	広陵町	池上２号墳	不明	破片		古墳	粘土槨	古墳中期	無し	
193	奈良県	御所市	宮山古墳	三角縁天王日月唐草文帯二神二獣鏡	破片		古墳	竪穴式石室	古墳中期	半円方格帯「天（王）（日）（月）	
194	奈良県	御所市	宮山古墳	不明	破片多数		古墳	割竹型木棺	古墳中期	不明	現物無し　破片 11 点出土
195	奈良県	櫻井市	桜井茶臼山古墳	仿製内行花文鏡	破片		古墳	竪穴式石室	古墳前期	不明	破断面研磨
196	奈良県	田原本町	清水風遺跡	前漢鏡	破片		集落	河川	弥生中期後半	無し	
197	奈良県	天理市	中山大塚古墳	二仙四禽獣鏡？	破片	14	古墳	竪穴式石室	３末～４世紀初頭	有り「方□」	
198	奈良県	天理市	中山大塚古墳	平縁鏡	破片		古墳	竪穴式石室	３末～４世紀初頭	無し	
199	奈良県	天理市	千塚山古墳	乳文鏡	破片	7.6	古墳	不明	不明	無し	
200	奈良県	天理市	東大寺山古墳	不明	破片		古墳	割竹型木棺	古墳前期	無し	
201	奈良県	天理市	東大寺山６号墳	不明	破片		古墳	横穴式石室	古墳後期	無し	
202	奈良県	奈良県	伝奈良県	画文帯神獣鏡	破片		不明	不明	不明	無し	現物無し
203	奈良県	大和郡山市	小泉狐塚古墳	不明	破片		古墳	横穴式石室	古墳後期	無し	
204	奈良県	橿原町	澤ノ坊２号墳	環状乳神獣鏡	破片		古墳	不明	古墳前期	不明	
205	奈良県	橿原町	澤ノ坊２号墳	画像鏡	破片		古墳	不明	古墳前期	不明	
206	奈良県	橿原町	野山９号墳	四獣形鏡	破片		古墳	割竹型木棺	古墳中期	無し	
207	奈良県	橿原町	下井足遺跡	小型鏡	破片	5	古墳群内	土塁	中世	無し	
208	和歌山県	有田市	鷹島遺跡	内行花文鏡	破片	10	墳墓	不明	古墳時代	無し	
209	和歌山県	南勢町	向井山古墳	不明	破片	12.2	古墳	不明	古墳時代	無し	
210	和歌山県	日高市	城山２号墳	不明	破片	11.6	古墳	不明	古墳時代	無し	
211	和歌山県	和歌山市	太田黒田遺跡	内行花文鏡	破片	9	集落	溝	古墳前期	無し	穿孔有り　破断面研磨
212	和歌山県	和歌山市	滝ヶ峯遺跡	斗龍文鏡	破片		集落	空堀			
213	和歌山県	和歌山市	岩橋千塚古墳群内	内行花文鏡	破片		古墳	不明	古墳時代	無し	穿孔有り　現物無し
214	岡山県	赤坂町	森古墳	不明	破片	11.9	古墳	箱式石棺	古墳前期	無し	穿孔有り　破断面研磨
215	岡山県	岡山市	百間川兼基遺跡	不明	破片		集落	遺物包含層	古墳前期	空欄	破断面研磨
216	岡山県	岡山市	川入遺跡	内行花文鏡？	破片	20	集落	竪穴住居	古墳前期	無し	
217	岡山県	岡山市	吉備東山遺跡	弥生小型仿製鏡	破片		集落	土坑	弥生Ⅴ期	無し	
218	岡山県	岡山市	津寺遺跡	弥生小型仿製鏡	破片		集落	竪穴住居	古墳前期	無し	
219	岡山県	岡山市	雄町遺跡	不明	破片		集落	竪穴住居	古墳前期	無し	
220	岡山県	岡山市	北方薮ノ内遺跡	捩文鏡	破片	7	集落	中世水田	中世	空欄	中世水田下層に弥生時代の包含層がある
221	岡山県	岡山市	津寺４号墳	内行花文鏡	破片		古墳	組合式木棺	古墳前期	無し	穿孔有り　破断面研磨
222	岡山県	岡山市	頭高山古墳	内行花文鏡？	破片	大型	古墳	箱式石棺	古墳前期	無し	破断面研磨　現物無し
223	岡山県	岡山市	宗形神社古墳	不明	破片		古墳	箱式石棺	古墳前期	空欄	破面研磨　鏡面に絹製品付着

224	岡山県	岡山市	七つグロ古墳群	不明	破片		不明	不明	不明	不明	破鏡3面の記録　七つグロ1号墳から鏡片多数
225	岡山県	岡山市	一宮天神山２号墳A主体部	獣形鏡	破片	12.0	古墳	竪穴式石室	古墳前期	無し	
226	岡山県	岡山市	七つグロ古墳群	キ鳳鏡	破片		古墳	割竹型木棺	古墳前期	無し	
227	岡山県	岡山市	七つグロ古墳群	方格規矩鏡	破片		古墳	割竹型木棺	古墳前期	鉇座「辰」	
228	岡山県	岡山市	浦間茶臼山古墳	獣帯鏡	破片		古墳	竪穴式石室	古墳前期	無し	２片　戦前にも出土
229	岡山県	岡山市	横原古墳群１号墳	不明	破片	10	古墳	竪穴式石室	古墳前期	空欄	
230	岡山県	岡山市	雲山鳥打２号弥生墳丘墓	不明	破片		墳墓		弥生庄内式併行期	無し	
231	岡山県	落合町	川東車塚古墳	不明	破片	11.4	古墳	割竹型木棺	古墳前期	空欄	
232	岡山県	鏡野町	竹田妙見山古墳	内行花文鏡	破片	23.0	古墳	割竹型木棺	古墳前期	無し	穿孔有り。破断面研磨
233	岡山県	北房町	桃山遺跡２区	不明	破片	9.0		包含層		無し	穿孔有り
234	岡山県	熊山町	前内池墳墓群	四獸鏡	破片	7.3	墳墓	竪穴式石室	古墳初頭	無し	破断面研磨
235	岡山県	山陽町	桜山２号墳	不明	破片	9.2	古墳	組合式木棺	弥生庄内式併行期	無し	穿孔有り。破断面研磨
236	岡山県	山陽町	岩田１号墳	不明	破片		古墳	周溝	古墳後期	無し	
237	岡山県	総社市	横寺遺跡	不明	破片		集落	竪穴住居	古墳前期	空欄	破断面研磨
238	岡山県	津山市	正仙塚古墳後円部	半円方形帯神獸鏡	破片	11.7	古墳	長持形石棺	古墳前期	銘帯有り	穿孔有り。破断面研磨
239	岡山県	津山市	外道山遺跡Ｊ地点	内行花文銘帯鏡	破片	13.6	墳墓	表採	弥生時代	銘帯「日且□日」	
240	岡山県	不明	竹塚	不明	破片	３寸９分	不明	不明	不明	無し	穿孔有り。破断面研磨
241	岡山県	邑久町	不明	平縁変形鏡	破片	２寸	古墳	竪穴式石室	古墳時代	無し	
242	岡山県	邑久町	不明	仿製内行花文鏡	破片		不明	不明	不明	無し	
243	広島県	神辺町	亀山遺跡	不明	破片		集落	溝	弥生Ⅴ庄内式併行	無し	破断面研磨
244	広島県	神辺町	神辺御領遺跡	細線式獸帯鏡	破片	11.0	集落	溝	弥生Ⅴ庄内式併行	無し	穿孔有り。破断面研磨
245	広島県	甲田町	青迫遺跡	方格規矩四神鏡	破片	18	集落	包含層	弥生Ⅴ庄内式併行	銘帯「□次（飲）」	破断面研磨
246	広島県	新市町	城山Ａ遺跡	内行花文鏡	破片	8.7	墳墓	土坑	弥生時代	空欄	破断面研磨　ＳＫ11付近
247	広島県	千代田町	中出勝負峠第８号墳裾土坑墓	内行花文鏡？	破片	19.2	墳墓		古墳前期	無し	
248	広島県	千代田町	京野遺跡	内行花文昭明鏡	破片	8	集落	竪穴住居	弥生Ⅴ期	銘帯「忠□□」	破断面研磨
249	広島県	千代田町	京野遺跡	仿製内行花文鏡	欠損	6.4	集落	段状遺構	弥生Ⅴ期	空欄	鉇欠損　破鏡とはいえない？
250	広島県	筒賀村	釜鋳谷遺跡	内行花文鏡？	破片	18.7	古墳	箱式石棺	古墳前期	無し	破断面研磨
251	広島県	広島市	池ノ内遺跡	内行花文鏡	破片		集落	竪穴住居付近	弥生Ⅴ期	有り「長宜子孫」	破断面研磨
252	広島県	広島市	月見城遺跡	内行花文鏡？	破片	16.2	古墳	木棺直葬	古墳中期	無し	破断面研磨
253	広島県	広島市	神宮山第１号古墳	内行花文鏡	破片	19.7	古墳	竪穴式石室	古墳前期	無し	穿孔有り。破断面研磨
254	広島県	福山市	石鎚山２号墳	内行花文鏡	破片		古墳	木棺直葬	古墳前期	無し	破断面研磨
255	広島県	福山市	石鎚山２号墳	内行花文鏡	破片	12.8	古墳	木棺直葬	古墳前期	有り「君宜高官」	穿孔有り。破断面研磨
256	広島県	福山市	石鎚権現５号墳ＳＫ14土坑墓	飛禽鏡	破片	９～10	墳墓	木棺直葬	古墳前～中期	無し	破断面研磨
257	広島県	福山市	屋部迫古墳	不明	破片		古墳	横穴式石室	古墳後期	無し	後期とするには古式であり、古墳に伴うか疑問
258	広島県	福山市	福山市津之郷町所在の古墳	三角縁波文帯盤龍鏡	破片	22	古墳	不明	古墳前期	無し	
259	広島県	福山市	不明	不明	破片	13	古墳	箱式石棺	古墳時代	無し	
260	広島県	福山市	不明	不明	破片	11.1	古墳	箱式石棺	古墳時代	無し	
261	広島県	福山市	山の神古墳	不明	破片		古墳	横穴式石室	古墳後期	無し	
262	広島県	府中市	備後国府跡砂山地区	獸帯鏡あるいは方格規矩鏡	破片	9.0	集落	溝	古墳時代	無し	
263	広島県	三次市	四拾貫第９号墳	半肉彫式獸帯鏡	破片		古墳	割竹型木棺	古墳前期	無し	破断面・全面研磨
264	鳥取県	青谷町	青谷上寺地遺跡	重圏文鏡	破片		集落	包含層	弥生後期後半～古墳初頭	無し	５個の穿孔　破断面研磨
265	鳥取県	青谷町	青谷上寺地遺跡	内行花文鏡	破片		集落	包含層	弥生後期後半～古墳初頭	無し「長宜子孫」の可能性	穿孔有り　破断面研磨
266	鳥取県	倉吉市	向山宮ノ峰遺跡	不明	破片		集落	不明	古墳時代	無し	
267	鳥取県	倉吉市	向山宮ノ峰13号墳	不明	破片		古墳	組合式木棺	古墳前期	無し	
268	鳥取県	倉吉市	向山宮ノ峰21号墳	不明	破片		古墳	箱式石棺	古墳前期	無し	
269	鳥取県	鳥取市	秋里遺跡	内行花文鏡	破片		集落	溝	弥生Ⅴ期	有「宜」のみ遺存	破断面研磨
270	鳥取県	鳥取市	伊勢谷遺跡	不明	破片		不明	試掘中	不明	無し	
271	鳥取県	羽合町	長瀬高浜遺跡	素文鏡	破片		集落	不明	古墳時代	無し	
272	鳥取県	羽合町	長瀬高浜遺跡Ｅ３土器群	仿製八弧内行花文鏡	破片		集落	土器群	古墳前期	無し	
273	鳥取県	羽合町	南谷大山遺跡	重圏文鏡	破片		集落	竪穴住居	弥生Ⅴ期	無し	
274	鳥取県	船岡町	伝坂田１号墳	乳文鏡	破片	8.2	古墳	不明	古墳時代	無し	
275	鳥取県	米子市	福市遺跡吉塚31号住居	不明	破片		集落	竪穴住居	弥生庄内式併行期	無し	鉇のみ
276	鳥取県	米子市	青木遺跡	八禽鏡	破片	8.3	集落	竪穴住居	弥生Ⅴ期	無し	竪穴住居床面の中央ピットから
277	鳥取県	米子市	新山山田遺跡	珠文鏡	破片		集落	流路	空欄	空欄	
278	鳥取県	米子市	石州府29号墳第２主体部	神獸鏡あるいは獸帯鏡	破片		古墳	木棺	古墳前期	無し	鏡片副葬
279	島根県	出雲市	大念寺古墳	不明	破片		古墳	家型石棺	古墳後期	無し	
280	島根県	加茂町	土井・砂遺跡１号墳	内行花文鏡	破片	17	古墳	木棺	古墳前期	無し	破断面研磨
281	島根県	仁摩町	明神古墳	不明	破片（2片）		古墳	家型石棺	古墳後期	空欄	
282	島根県	東出雲町	鳥越山遺跡	不明	破片		不明	空欄	空欄	無し	
283	島根県	安来市	五反田１号墳	重圏文鏡	欠損	5.6	古墳	竪穴式石室	古墳前期	空欄	
284	山口県	山陽町	長光寺山古墳	斜縁神獸鏡	破片		古墳	割竹型木棺	古墳前期	無し	
285	山口県	下関市	柳瀬遺跡	内行花文鏡	破片	17	集落	溝	弥生後期	有り「且」	穿孔・研磨無し
286	山口県	下関市	松屋古墳	不明	破片	9	古墳	箱式石棺	古墳時代	空欄	現物無し
287	山口県	周東町	奥ヶ原遺跡Ⅰ地区	内行花文鏡？	破片	11.4	集落	竪穴住居	弥生Ⅴ期	空欄	破断面研磨
288	山口県	新南陽市	竹島古墳	三角縁神獸鏡	破片		古墳	竪穴式石室	古墳前期	無し	
289	山口県	豊浦町	植田遺跡	仿製方格規矩鏡	破片	11.14	集落	包含層	古墳後期	無し	
290	山口県	萩市	天長山古墳	不明（斜縁）	破片	12.8	古墳	割竹型木棺	古墳前期	空欄	
291	山口県	光市	げんべい山古墳	不明	破片		古墳	横穴式石室	古墳終末期	空欄	現物無し
292	山口県	平生町	神花山古墳	不明	破片		古墳	箱式石棺	古墳中期	空欄	現物無し
293	山口県	防府市	切畑南遺跡第３地区	不明	破片	12	集落	表土層	弥生時代	空欄	
294	山口県	山口市	大内氏関連街並遺跡ＳＫ57	重圏文鏡	破片		集落	土坑	弥生Ⅴ期以降	空欄	
295	愛媛県	朝倉村	野々瀬Ⅳ遺跡Ｂ２区	弥生小型仿製鏡（内行花文鏡）	欠損		集落	土器溜まり	弥生Ⅴ期	空欄	
296	愛媛県	今治市	高橋湯ノ窪遺跡	細線式獸帯鏡	破片	16	集落	包含層	弥生時代	空欄	
297	愛媛県	今治市	相の谷９号墓	獸帯鏡	破片	17	古墳	箱式石棺	古墳前期	無し	
298	愛媛県	今治市	久保山古墳	神獸鏡	破片		古墳	竪穴式石室	古墳中期	無し	
299	愛媛県	今治市	久保山古墳	不明	破片	９～11	古墳	竪穴式石室	古墳中期	無し	
300	愛媛県	今治市	唐子台又エ門谷上古墳	不明	破片	14.5	古墳	不明	古墳時代	空欄	
301	愛媛県	今治市	唐子山古墳	不明	破片		古墳	不明	古墳時代	空欄	
302	愛媛県	伊予市	免波護古墳	不明	破片	11.3	古墳	横穴式石室	古墳後期	空欄	
303	愛媛県	伊予市	広田神社上古墳	三角縁神獸鏡	破片		古墳	不明	古墳前期	無し	
304	愛媛県	伊予三島市	四ツ手山古墳	鈴鏡	破片	10	古墳	横穴式石室	古墳後期	無し	
305	愛媛県	砥部町	永満田遺跡	漢鏡	破片	13	集落	包含層	弥生後期～古墳前期	無し	破断面研磨
306	愛媛県	北条市	大相院遺跡	前漢鏡	破片		集落		弥生終末		
307	愛媛県	北条市	大相院遺跡	後漢　斜縁鏡	破片	15.2	集落		弥生終末		
308	愛媛県	松山市	文京遺跡	後漢　斜縁鏡	破片		集落	溝	弥生終末	無し	穿孔有り　破断面研磨
309	愛媛県	松山市	東本遺跡	方格規矩鏡	破片	14.2	集落	竪穴住居	弥生Ⅴ期～庄内併行	無し	破断面研磨
310	愛媛県	松山市	釜ノ口遺跡	内行花文鏡	破片	8.7	集落	溝	庄内併行		穿孔有り　破断面研磨
311	愛媛県	松山市	文京遺跡	不明	破片		集落	包含層	弥生Ⅳ～Ⅴ期	無し	
312	愛媛県	松山市	文京遺跡	不明	破片		集落		弥生中期後半		
313	愛媛県	松山市	不明	不明	破片		集落	不明	不明	空欄	未発表
314	愛媛県	松山市	塔ノ口山古墳	内行花文鏡	破片		古墳	石室？	古墳時代	鉇座「長宜子孫」	
315	愛媛県	松山市	塔ノ口山古墳	不明	破片	14.6	古墳	石室？	古墳時代	空欄	
316	愛媛県	松山市	鳶ヶ森６号墳	不明	破片	11	古墳	横穴式石室	古墳終末期	空欄	
317	愛媛県	松山市	西野Ⅲ遺跡	不明	破片		墳墓	土坑墓	弥生Ⅴ期	空欄	
318	高知県	高知市	介良遺跡	不明	破片		集落	河川？	弥生後期	無し	
319	高知県	高知市	介良遺跡	内行花文鏡	破片		集落	ＳＤ１溝	弥生Ⅴ期	空欄	
320	高知県	宿毛市	曽我山古墳	獸首鏡	破片		古墳	礫槨	古墳中期	無し	
321	高知県	南国市	田村遺跡群Ｌｏｃ45　ＳＴ１	方格規矩四神鏡	破片	16.5	集落	竪穴住居	弥生Ⅴ期	銘帯「・・意真大・・」	破断面研磨
322	高知県	南国市	田村遺跡群Ｌｏｃ34Ｂ　ＳＰ１	方格規矩四神鏡	破片	15.3	集落	自然流路	弥生Ⅴ期		破断面研磨
323	高知県	南国市	田村遺跡群	内行花文鏡	破片	8.4	集落	竪穴住居	弥生Ⅴ期	空欄	
324	高知県	春野町	西分増井遺跡	後漢鏡	破片		集落		弥生後期後半～古墳初頭		穿孔有り
325	高知県	春野町	西分増井遺跡群ＳＴ５	不明	破片		集落	竪穴住居	弥生庄内式併行期	空欄	破断面研磨
326	高知県	春野町	西分増井遺跡	後漢鏡	破片		集落		弥生後期後半～古墳初頭		
327	高知県	春野町	西分増井遺跡	後漢鏡	破片		集落		弥生後期後半～古墳初頭		
328	高知県	春野町	西分増井遺跡	後漢鏡	破片		集落		弥生後期後半～古墳初頭		
329	徳島県	石井町	城ノ内丸山古墳	内行花文鏡	破片		不明	不明	古墳時代	無し	
330	徳島県	海部町	昼間遺跡正力地区	内行花文鏡	破片	14.6	集落	不明	弥生庄内式併行期	無し	穿孔有り　破断面研磨
331	徳島県	海部町	寺山１号墳	内行花文鏡	破片		古墳	横穴式石室	古墳後期	無し	穿孔有り　破断面研磨
332	徳島県	徳島市	庄遺跡	斜縁二神二獸鏡	破片	10.4	集落	攪乱	弥生庄内式併行期	無し	穿孔有り
333	徳島県	徳島市	庄・蔵本遺跡	異体字銘帯鏡	破片	9.4	集落		弥生終末	有り「以而□」	穿孔有り　破断面研磨
334	徳島県	徳島市	三谷遺跡	捩文鏡	欠損		集落	包含層	縄文～中近世	空欄	
335	徳島県	徳島市	勢見山古墳	神獸鏡	破片		古墳	割竹型木棺	古墳前期	無し	現物無し
336	徳島県	徳島市	宮谷古墳	三角縁四獸鏡	破片	22.2	古墳	前方部墳丘裾	古墳前期	無し	
337	徳島県	土成町	十楽寺山古墳	不明	破片		古墳	竪穴式石室	古墳前期	空欄	現物無し

338	香川県	綾歌町	快天山古墳	内行花文鏡	破片	11.6	古墳	割竹型木棺	古墳前期	無し	
339	香川県	綾歌町	毘沙門山古墳	捩文鏡	破片	7.2	古墳	空欄	空欄	無し	
340	香川県	観音寺市	一ノ谷遺跡群	蝙蝠座鈕内行花文鏡	破片	16.1	集落	包含層	古墳時代以降	無し	穿孔（4孔）有り　破断面研磨
341	香川県	観音寺市	鹿隈古墳群	方格規矩鏡	破片	13	古墳	空欄	古墳前期	無し	穿孔（2孔）有り
342	香川県	観音寺市	鹿隈鐙子塚古墳	不明	破片		古墳	空欄	古墳前期	銘帯「・・□王□・」	
343	香川県	坂出市	遍昭院裏山古墳	乳文鏡	破片	9.2	古墳	空欄	空欄	銘帯（擬銘帯）	
344	香川県	志度町	不明	不明	破片		古墳？	粘土槨	古墳時代	無し	
345	香川県	善通寺市	彼ノ宗遺跡	弥生小型仿製鏡（内行花文鏡）	破片	8	集落	竪穴住居	弥生庄内式併行期	無し	穿孔（2孔）有り　破断面研磨
346	香川県	善通寺市	稲木遺跡	方格規矩四神鏡	破片	18.6	集落	包含層	古墳時代以降	無し	
347	香川県	善通寺市	稲木遺跡	四葉文座内行花文鏡	破片		集落	包含層	古墳時代以降	無し	
348	香川県	善通寺市	不明	不明	破片		空欄	空欄	空欄	無し	
349	香川県	高松市	猫塚古墳	内行花文鏡	破片		古墳	不明	古墳前期	不明	
350	香川県	高松市	猫塚古墳	神獣鏡	破片		古墳	不明	古墳前期	不明	現物無し
351	香川県	高松市	円養寺遺跡D地区	不明	破片		墳墓	竪穴式石室	古墳前期	無し	
352	香川県	津田町	赤山古墳	不明	破片		古墳	割竹型木棺	古墳前期	無し	現物無し
353	香川県	津田町	龍王山古墳	不明	破片		古墳	竪穴式石室	古墳前期	無し	現物無し　鉄製鏡
354	香川県	長尾町	是行谷古墳群	三角縁神獣鏡	破片		古墳	空欄	空欄	無し	現物無し
355	香川県	山本町	知行寺山古墳	不明	破片		古墳	竪穴式石室	古墳時代	無し	破断面研磨
356	福岡県	朝倉町	後山遺跡1号石棺	内行花文鏡	破片	14.9	墳墓	箱式石棺	弥生Ⅴ期	鈕座「長宜子孫」	穿孔有り
357	福岡県	甘木市	平塚川添古墳	長宜子孫四葉座鈕内行花文鏡	欠損		集落	溝	弥生Ⅴ期	鈕座「長宜子」	破断面研磨
358	福岡県	飯塚市	伝　飯塚市	半肉彫獣帯鏡	破片	13.4	不明	不明	不明	「宜子・・」	
359	福岡県	飯塚市	伝　飯塚市	半肉彫獣帯鏡	破片	13.4	不明	不明	不明	銘帯「・・宜子・・」	
360	福岡県	行橋市	稲童古墳群26号墳	内行花文鏡	破片		古墳	箱式石棺	古墳前期	鈕座「長宜（子）孫」	
361	福岡県	行橋市	竹並遺跡A－13号横穴墓	仿製内行花文鏡	破片	6.5	横穴	横穴	古墳中期	空欄	
362	福岡県	行橋市	津留遺跡	方格規矩鏡	破片	13.6	集落	溝	弥生Ⅴ期	空欄	
363	福岡県	大島村	沖ノ島7号遺跡	平縁鏡	破片		祭祀	洞穴	古墳中～後期	空欄	
364	福岡県	大島村	沖ノ島18号遺跡	方格規矩鏡	破片		祭祀	洞穴	古墳前期	申酉	
365	福岡県	大島村	沖ノ島18号遺跡	キ鳳鏡	破片		祭祀	洞穴	古墳前期	空欄	
366	福岡県	大島村	沖ノ島18号遺跡	三角縁神獣鏡	破片		祭祀	洞穴	古墳前期	空欄	
367	福岡県	大島村	伝　沖ノ島18号遺跡	仿製三角縁神獣鏡	破片	21.9	祭祀	洞穴	古墳前期	空欄	
368	福岡県	大島村	沖ノ島19号遺跡	鋸歯文鏡	破片		祭祀	岩陰	古墳中期	空欄	現物無し
369	福岡県	大島村	沖ノ島21号遺跡	格子目文鏡	破片		祭祀	岩上	古墳中～後期	空欄	
370	福岡県	大島村	沖ノ島21号遺跡	円圏文鏡	破片		祭祀	岩上	古墳中期	空欄	
371	福岡県	大島村	沖ノ島21号遺跡	素文鏡	破片		祭祀	岩上	古墳中期	空欄	
372	福岡県	大野城市	御陵古墳群6号墳第2主体部	内行花文鏡	破片	13	古墳	組合式木棺	古墳前期	銘帯「長□□孫」	
373	福岡県	大野城市	仲島遺跡（51）7区SK 287	後漢鏡様式	破片	8～9	集落	土坑	弥生Ⅳ期	不明	
374	福岡県	大牟田市	潜塚古墳	内行花文鏡	破片	13.5	古墳	箱式石棺	古墳前期	空欄	
375	福岡県	小郡市	三沢栗原遺跡Ⅳ区43号住居	不明	破片	22～23	集落	竪穴住居	古墳前期	空欄	穿孔有り　破断面研磨
376	福岡県	小郡市	三沢栗原遺跡Ⅴ区30号住居	不明	破片	18～22	集落	竪穴住居	弥生Ⅳ期	空欄	破断面研磨
377	福岡県	小郡市	みくに保育所内遺跡1号住居	方格規矩鏡	破片		集落	竪穴住居	弥生Ⅴ期	空欄	破断面研磨
378	福岡県	垣生町	上り立遺跡	キ龍鏡	破片	10.4	墳墓	箱式石棺	弥生時代		
379	福岡県	春日市	日拝塚古墳	獣形鏡	破片	12.5	古墳	横穴式石室	古墳後期	不明	
380	福岡県	春日市	伝　昇町遺跡	内行花文鏡	破片	12.9	不明	不明	弥生Ⅴ期	不明	
381	福岡県	春日市	須久岡本遺跡D地点	草葉文鏡	破片	七寸八分	墳墓	不明	弥生Ⅲ期	無し	現物不明
382	福岡県	春日市	須久岡本遺跡D地点	草葉文鏡	破片	23	墳墓	不明	弥生Ⅲ期	無し	現物不明
383	福岡県	春日市	須久岡本遺跡D地点	草葉文鏡	破片	七寸八分	墳墓	不明	弥生Ⅲ期	方格内「母」	
384	福岡県	春日市	須久岡本遺跡D地点	内行花文銘帯鏡	破片		墳墓	不明	弥生Ⅲ期	銘帯「・・内清・」	
385	福岡県	春日市	須久岡本遺跡D地点	内行花文銘帯鏡	破片		墳墓	不明	弥生Ⅲ期	銘帯「・・而以・・之・」	
386	福岡県	春日市	須久岡本遺跡D地点	重圏銘帯鏡	破片	17.3	墳墓	不明	弥生Ⅲ期	銘帯「・明光・夫明心・」	
387	福岡県	春日市	須久岡本遺跡D地点	重圏銘帯鏡	破片	16.7	墳墓	不明	弥生Ⅲ期	銘帯「・清白而・」	
388	福岡県	春日市	須久岡本遺跡D地点	重圏銘帯鏡	破片		墳墓	不明	弥生Ⅲ期	銘帯「内・不池」	
389	福岡県	春日市	須久岡本遺跡D地点	重圏銘帯鏡	破片		墳墓	不明	弥生Ⅲ期	銘帯「之・於之重・」	
390	福岡県	春日市	須久岡本遺跡D地点	重圏銘帯鏡	破片	16.7	墳墓	不明	弥生Ⅲ期	銘帯「・清白而・流澤」	
391	福岡県	春日市	須久岡本遺跡D地点	重圏銘帯鏡	破片	五寸	墳墓	不明	弥生Ⅲ期	銘帯「光長」	現物不明
392	福岡県	春日市	須久岡本遺跡D地点	重圏銘帯鏡	破片		墳墓	不明	弥生Ⅲ期	銘帯「見」	
393	福岡県	春日市	須久岡本遺跡D地点	単圏銘帯鏡	破片		墳墓	不明	弥生Ⅲ期	銘帯「忘」	
394	福岡県	春日市	須久岡本遺跡D地点	星雲文鏡	破片	五寸二分	墳墓	不明	弥生Ⅲ期	不明	
395	福岡県	春日市	須久岡本遺跡D地点	星雲文鏡	破片	五寸二分	墳墓	不明	弥生Ⅲ期	不明	
396	福岡県	春日市	須久岡本遺跡D地点	星雲文鏡	破片		墳墓	不明	弥生Ⅲ期	無し	
397	福岡県	春日市	須久岡本遺跡D地点	星雲文鏡	破片	五寸二分	墳墓	不明	弥生Ⅲ期	不明	
398	福岡県	春日市	須久岡本遺跡D地点	星雲文鏡	破片	五寸五分	墳墓	不明	弥生Ⅲ期	不明	
399	福岡県	春日市	須久唐梨遺跡調査区西隅9層	不明	破片		集落・墳墓	包含層	不明	不明	破断面研磨
400	福岡県	春日市	須久岡本遺跡土坑墓	弥生小型仿製鏡	破片		墳丘墓	土坑墓	弥生Ⅴ期	空欄	
401	福岡県	粕屋町	平塚古墳	内行花文鏡	破片	13.6	古墳	箱式石棺	弥生庄内併行期	鈕座「・・子」	朱付着
402	福岡県	勝山町	上所田遺跡石蓋土坑墓	細線式獣帯鏡	破片	8.2	墳墓	石蓋土坑墓	弥生Ⅴ期	空欄	
403	福岡県	嘉穂町	タタラ遺跡16号住居	弥生小型仿製鏡	破片	4.7	集落	竪穴住居	弥生Ⅴ期	無し	
404	福岡県	苅田町	石塚山古墳	細線式獣帯鏡	破片	15	古墳	竪穴式石棺	古墳前期	空欄	
405	福岡県	苅田町	岩屋4号墳	不明	破片		古墳	組合式木棺	古墳中期	空欄	
406	福岡県	北九州市	岩屋遺跡	双頭龍文鏡	破片	9.9	墳墓	箱式石棺	弥生Ⅴ期	「位至三公」	
407	福岡県	北九州市	岩屋遺跡	後漢鏡	破片		墳墓	箱式石棺	弥生Ⅴ期	空欄	
408	福岡県	北九州市	岩屋遺跡	後漢鏡	破片		墳墓	箱式石棺	弥生Ⅴ期	空欄	
409	福岡県	北九州市	岩屋遺跡	後漢鏡	破片		墳墓	箱式石棺	弥生Ⅴ期	空欄	
410	福岡県	北九州市	岩屋遺跡	後漢鏡	破片		墳墓	箱式石棺	弥生Ⅴ期	空欄	
411	福岡県	北九州市	馬場山41号土坑墓	キ鳳鏡	破片	14	墳墓	土坑墓	弥生Ⅴ期	空欄	
412	福岡県	北九州市	馬場山遺跡S－5号石棺墓	方格規矩鏡	破片	9.8	墳墓	箱式石棺	弥生Ⅴ期	空欄	
413	福岡県	北九州市	御座古墳群1号墳	三角縁獣文帯三神三獣鏡	破片		古墳	覆土	古墳前期	空欄	
414	福岡県	北九州市	高津尾遺跡17区13号土坑墓	流雲文縁方格規矩四神鏡	欠損	14.5	墳墓	土坑墓	弥生Ⅴ期	銘帯「・・大・・」	破断面研磨
415	福岡県	北九州市	高島遺跡S－1号箱式石棺墓	四葉座内行花文鏡	破片	17.6	墳墓	箱式石棺	弥生Ⅴ期	鈕座「長□□□」	
416	福岡県	北九州市	長野A遺跡Ⅲ区14号住居	不明	破片	7.5	集落	竪穴住居	古墳後期	空欄	
417	福岡県	北九州市	上長野A遺跡	キ龍文鏡	破片	10.5	集落	河川跡	弥生時代		破鏡
418	福岡県	鞍手町	神崎遺跡	内行花文鏡	破片	10	横穴	墓道	古墳後期	空欄	
419	福岡県	久留米市	祇園山古墳据第1号甕棺	半円方格帯鏡	破片	10.4	古墳	甕棺	古墳前期	銘帯「吾作明□・・・」	穿孔有り　破断面研磨
420	福岡県	久留米市	ヘボノ本遺跡	不明	破片	11	集落	竪穴住居	弥生Ⅴ期	空欄	
421	福岡県	犀川町	石ヶ坪土坑墓	変形獣首鏡	破片	17	墳墓	箱式石棺	弥生Ⅴ期	空欄	
422	福岡県	志摩町	一の町遺跡	方格四神鏡	破片		不明	不明	弥生中～後期	「順」	
423	福岡県	瀬高町	車塚古墳丘下	獣帯鏡	破片	17.5	墳墓	甕棺	弥生Ⅲ期	空欄	
424	福岡県	太平村	穴ヶ葉山遺跡40号石蓋土坑墓	内行花文鏡	破片	17.3	墳丘ない墓	石蓋土坑墓	古墳前期	空欄	穿孔有り　破断面研磨
425	福岡県	太平村	能萬寺3号墳	キ鳳鏡	破片		古墳	竪穴式石室	古墳前期	空欄	
426	福岡県	太宰府市	伝　太宰府市大字泉字金塚	内行花文鏡	破片	13	墳墓	土器棺	弥生Ⅴ期	不明	現物不明
427	福岡県	田主丸町	不明	内行花文日光鏡	破片	7.3	不明	不明	弥生時代	空欄	
428	福岡県	田主丸町	不明	仿製内行花文鏡	破片		墳墓	箱式石棺	弥生時代	空欄	
429	福岡県	筑紫野市	阿志岐古墳群B群24号墳	中国製蝙蝠文鏡	欠損	11	古墳	割竹形木棺	古墳前期	無し	穿孔有り　破断面研磨
430	福岡県	筑紫野市	御笠地区遺跡F地区70号ﾊﾝﾁ	内行花文鏡	破片	13.8	集落	竪穴住居	弥生庄内併行期	銘帯「長宜」	破断面研磨　鏡背に赤彩
431	福岡県	筑紫野市	峠山遺跡1号墳	三角縁神獣鏡	不明		墳墓	壺棺	古墳前期	不明	穿孔有り
432	福岡県	津屋崎町	津屋崎41号墳	不明	破片		古墳	横穴式石室	古墳中期	半円方格帯	
433	福岡県	津屋崎町	津屋崎41号墳	不明	破片		古墳	横穴式石室	古墳中期	不明	
434	福岡県	津屋崎町	津屋崎41号墳	画文帯神獣鏡	破片		古墳	横穴式石室	古墳中期	半円方格帯	
435	福岡県	津屋崎町	津屋崎41号墳	内行花文鏡	破片		古墳	横穴式石室	古墳中期	不明	
436	福岡県	津屋崎町	津屋崎41号墳	方格規矩鏡	破片		古墳	横穴式石室	古墳中期	不明	
437	福岡県	豊津町	徳永川ノ上遺跡1号墳墓群6号墓	方格規矩渦文鏡	欠損	10.5	墳墓	土坑墓	弥生庄内併行期	空欄	破断面研磨
438	福岡県	豊津町	徳永川ノ上遺跡1号墳墓群8号墓	三角縁画像鏡	破片	22	墳墓	土坑墓	弥生庄内併行期	空欄	破断面研磨　赤色顔料
439	福岡県	豊津町	徳永川ノ上遺跡2号墳墓群1号墓	凹帯縁方格規矩鏡	破片	10	墳墓	箱式石棺	古墳前期	空欄	
440	福岡県	豊津町	平遺跡	キ鳳鏡	破片	16	墳墓	箱式石棺	弥生Ⅴ期	空欄	
441	福岡県	豊前市	小石原遺跡	不明	破片		集落	空欄	弥生Ⅴ期	空欄	
442	福岡県	豊前市	鬼木四反田遺跡	朝鮮鏡？	破片	5	集落	竪穴住居	弥生後期初頭		
443	福岡県	那珂川町	油田古墳群1号墳	仿製内行花文鏡	破片	9	古墳	組合式木棺	古墳前期	無し	現物不明
444	福岡県	那珂川町	恵子若山古墳	珠文鏡	破片	7.2	古墳	割竹形木棺	古墳前期	空欄	
445	福岡県	那珂川町	仲遺跡	内行花文鏡	破片		集落	田の床土	古墳時代	空欄	破断面研磨
446	福岡県	二丈町	長須隈古墳	キ鳳鏡	破片		古墳	舟形石棺	古墳中期	鈕座「長・・」	現物無し
447	福岡県	二丈町	吉井水付遺跡	不明	破片	10	集落	包含層	弥生Ⅴ期	空欄	破断面研磨
448	福岡県	二丈町	吉井水付遺跡	不明	空欄		集落	包含層	弥生Ⅴ期	空欄	破断面研磨
449	福岡県	二丈町	吉井水付遺跡	不明	空欄		集落	包含層	弥生Ⅴ期	空欄	破断面研磨
450	福岡県	福岡市	飯氏遺跡群Ⅱ区	内行花文鏡	破片		墳墓	甕棺	弥生Ⅴ期	空欄	
451	福岡県	福岡市	野方中原遺跡1号石棺墓	獣帯鏡	破片	9.5	墳墓	甕棺	古墳前期	銘帯　判読不能	

452	福岡県	福岡市	野方塚原遺跡１号箱式石棺墓	獣帯鏡	破片	11.2	墳墓	甕棺	古墳終末期	空欄		
453	福岡県	福岡市	飯盛谷Ｂ遺跡	方格規矩鏡	破片		墳墓	周溝	古墳前期	無し		
454	福岡県	福岡市	老司古墳３号石室	三角縁王氏作徐州銘四神四獣鏡	破片	22.9	古墳	横穴式石室	古墳中期	銘帯「□氏作・・」	穿孔有り　破断面研磨	
455	福岡県	福岡市	山ノ鼻１号墳	半肉彫獣帯鏡	破片		墳墓	不明	古墳前期	空欄		
456	福岡県	福岡市	野多目前田遺跡第１調査区３号溝	仿製内行花文鏡	欠損	18.1	集落	溝	中世	鈕座「天」	破断面研磨	
457	福岡県	福岡市	窪田水ヶ元遺跡	方格規矩鏡	欠損	10.5	集落	竪穴住居	弥生～古墳時代	無し	磨研	
458	福岡県	福岡市	羽根戸南	空欄	破片		古墳	割竹形木棺	古墳前期	空欄		
459	福岡県	福岡市	東那珂遺跡	青銅鏡	破片	9.4	集落	竪穴住居	古墳前期	空欄	穿孔有り　彩色あり	
460	福岡県	福間町	伝　大字宮地獄付近	キ鳳鏡	破片	18	不明	不明	不明	無し	沖ノ島出土？	
461	福岡県	前原町	三雲遺跡南小路地区１号甕棺墓	重圏彩画鏡	破片	27.3	墳墓	甕棺	弥生Ⅲ期	空欄		
462	福岡県	前原町	三雲遺跡南小路地区１号甕棺墓	羽状地文鏡	破片	19.3	墳墓	甕棺	弥生Ⅲ期	空欄		
463	福岡県	前原町	三雲遺跡南小路地区１号甕棺墓	内行花文銘帯鏡	破片	18	墳墓	甕棺	弥生Ⅲ期	銘帯「玄錫・・」		
464	福岡県	前原町	三雲遺跡南小路地区１号甕棺墓	内行花文銘帯鏡	破片	18.8	墳墓	甕棺	弥生Ⅲ期	銘帯「・明流・」		
465	福岡県	前原町	三雲遺跡南小路地区１号甕棺墓	内行花文銘帯鏡	破片		墳墓	甕棺	弥生Ⅲ期	空欄		
466	福岡県	前原町	三雲遺跡南小路地区１号甕棺墓	内行花文銘帯鏡	破片	16.4	墳墓	甕棺	弥生Ⅲ期	空欄		
467	福岡県	前原町	三雲遺跡南小路地区１号甕棺墓	内行花文銘帯鏡	破片	16.4	墳墓	甕棺	弥生Ⅲ期	銘帯「白」または「日」		
468	福岡県	前原町	三雲遺跡南小路地区１号甕棺墓	内行花文銘帯鏡	破片	16.4	墳墓	甕棺	弥生Ⅲ期	銘帯「玄錫・・」		
469	福岡県	前原町	三雲遺跡南小路地区１号甕棺墓	内行花文銘帯鏡	破片		墳墓	甕棺	弥生Ⅲ期	銘帯「・事君怨・・」		
470	福岡県	前原町	三雲遺跡南小路地区１号甕棺墓	内行花文銘帯鏡	破片	17	墳墓	甕棺	弥生Ⅲ期	銘帯「錫　流澤」		
471	福岡県	前原町	三雲遺跡南小路地区１号甕棺墓	内行花文銘帯鏡	破片	18	墳墓	甕棺	弥生Ⅲ期	銘帯「　」		
472	福岡県	前原町	三雲遺跡南小路地区１号甕棺墓	内行花文銘帯鏡	破片		墳墓	甕棺	弥生Ⅲ期	空欄		
473	福岡県	前原町	三雲遺跡南小路地区１号甕棺墓	内行花文銘帯鏡	破片		墳墓	甕棺	弥生Ⅲ期	空欄		
474	福岡県	前原町	三雲遺跡南小路地区１号甕棺墓	内行花文銘帯鏡	破片		墳墓	甕棺	弥生Ⅲ期	空欄		
475	福岡県	前原町	三雲遺跡南小路地区１号甕棺墓	不明	破片	16	墳墓	甕棺	弥生Ⅲ期	銘帯「・疏遠」		
476	福岡県	前原町	三雲遺跡南小路地区１号甕棺墓	不明	破片	16.3	墳墓	甕棺	弥生Ⅲ期	銘帯「　流」		
477	福岡県	前原町	三雲遺跡南小路地区１号甕棺墓	不明	破片		墳墓	甕棺	弥生Ⅲ期	銘帯「　　之」「之」		
478	福岡県	前原町	三雲遺跡南小路地区１号甕棺墓	不明	破片		墳墓	甕棺	弥生Ⅲ期	空欄		
479	福岡県	前原町	三雲遺跡南小路地区１号甕棺墓	不明	破片		墳墓	甕棺	弥生Ⅲ期	空欄		
480	福岡県	前原町	三雲遺跡南小路地区１号甕棺墓	不明	破片		墳墓	甕棺	弥生Ⅲ期	空欄		
481	福岡県	前原町	三雲遺跡南小路地区１号甕棺墓	不明	破片		墳墓	甕棺	弥生Ⅲ期	空欄		
482	福岡県	前原町	三雲遺跡南小路地区１号甕棺墓	不明	破片		墳墓	甕棺	弥生Ⅲ期	空欄		
483	福岡県	前原町	三雲遺跡南小路地区１号甕棺墓	不明	破片		墳墓	甕棺	弥生Ⅲ期	空欄		
484	福岡県	前原町	三雲遺跡南小路地区１号甕棺墓	不明	破片		墳墓	甕棺	弥生Ⅲ期	空欄		
485	福岡県	前原町	三雲遺跡南小路地区１号甕棺墓	不明	破片		墳墓	甕棺	弥生Ⅲ期	空欄		
486	福岡県	前原町	三雲遺跡南小路地区１号甕棺墓	不明	破片		墳墓	甕棺	弥生Ⅲ期	空欄		
487	福岡県	前原町	三雲遺跡南小路地区１号甕棺墓	不明	破片		墳墓	甕棺	弥生Ⅲ期	空欄		
488	福岡県	前原町	三雲遺跡南小路地区２号甕棺墓	内行花文銘帯鏡	破片	6.2	墳墓	甕棺	弥生Ⅲ期	銘帯「内　・・夫」		
489	福岡県	前原町	三雲遺跡南小路地区２号甕棺墓	重圏銘帯鏡	破片	11.4	墳墓	甕棺	弥生Ⅲ期	銘帯「月」		
490	福岡県	前原町	三雲遺跡南小路地区２号甕棺墓	（「日光」銘鏡系）	破片	7.6	墳墓	甕棺	弥生Ⅲ期	空欄		
491	福岡県	前原町	三雲遺跡南小路地区２号甕棺墓	内行花文銘帯鏡	破片	7.4	墳墓	甕棺	弥生Ⅲ期	銘帯「下大」		
492	福岡県	前原町	三雲遺跡南小路地区２号甕棺墓	内行花文銘帯鏡	破片	6.5	墳墓	甕棺	弥生Ⅲ期	銘帯「下大」		
493	福岡県	前原町	三雲遺跡南小路地区２号甕棺墓	内行花文銘帯鏡	破片	6.4	墳墓	甕棺	弥生Ⅲ期	銘帯「下」		
494	福岡県	前原町	三雲遺跡南小路地区２号甕棺墓	「日光」銘鏡	破片	6.5	墳墓	甕棺	弥生Ⅲ期	銘帯「見之光」		
495	福岡県	前原町	三雲遺跡南小路地区２号甕棺墓	「日光」銘鏡	破片	6.5	墳墓	甕棺	弥生Ⅲ期	銘帯「見」		
496	福岡県	前原町	三雲遺跡南小路地区２号甕棺墓	内行花文銘帯鏡	破片	7.5	墳墓	甕棺	弥生Ⅲ期	空欄		
497	福岡県	前原町	三雲遺跡南小路地区２号甕棺墓	（「日光」銘鏡系）	破片	8.2	墳墓	甕棺	弥生Ⅲ期	空欄		
498	福岡県	前原町	三雲遺跡南小路地区２号甕棺墓	（「日光」銘鏡系）	破片	6	墳墓	甕棺	弥生Ⅲ期	空欄		
499	福岡県	前原町	三雲遺跡南小路地区２号甕棺墓	（「日光」銘鏡系）	破片	6.5	墳墓	甕棺	弥生Ⅲ期	空欄		
500	福岡県	前原町	三雲遺跡南小路地区２号甕棺墓	（「日光」銘鏡系）	破片	7	墳墓	甕棺	弥生Ⅲ期	空欄		
501	福岡県	前原町	三雲遺跡南小路地区２号甕棺墓	（「日光」銘鏡系）	破片	7	墳墓	甕棺	弥生Ⅲ期	空欄		
502	福岡県	前原町	三雲遺跡加賀石地区	方格規矩鏡	破片		墳墓	甕棺	弥生Ⅲ期	空欄		
503	福岡県	前原町	三雲遺跡番上地区Ⅰ－２・３区	不明	破片		集落	溝	平安	空欄	混入	
504	福岡県	前原町	三雲遺跡深町－15地区	方格規矩鏡	破片			包含層	弥生～古墳	空欄		
505	福岡県	前原町	三雲遺跡イフ地区４号石棺墓	内行花文鏡	破片		墳墓	箱式石棺	弥生庄内併行期	空欄		
506	福岡県	前原町	三雲遺跡上覚地区	不明	破片		不明	不明	不明	不明		
507	福岡県	宗像市	徳重・高田16号墳Ｄトレンチ	内行花文鏡	不明		古墳	不明	不明	鈕座「君宜」	穿孔有り　破断面研磨	
508	福岡県	宗像市	稲元久保14号墳	内行花文鏡？	破片	14.7	古墳	割竹形木棺	古墳中期	空欄	穿孔有り	
509	福岡県	夜須町	鬼神山古墳１号墳	不明	破片		古墳	割竹形木棺	古墳前期	空欄		
510	福岡県	八女市	亀の甲遺跡95号石棺	方格規矩鏡	破片	14.1	墳墓・集落	箱式石棺	弥生時代	空欄	鏡片副葬	
511	福岡県	吉井町	不明	不明	破片	20.7	不明	不明	不明	空欄		
512	福岡県	吉井町	塚堂古墳後円部封土	弥生小型仿製鏡	破片	5.2	不明	不明	不明	空欄		
513	福岡県	吉井町	塚堂古墳後円部封土	弥生小型仿製鏡	破片	6.1	不明	不明	不明	空欄		
514	福岡県	若宮町	汐井掛遺跡28号木棺墓	飛禽鏡	破片	8	墳墓	組合式木棺	弥生Ⅴ期	空欄		
515	福岡県	若宮町	汐井掛遺跡６号箱式石棺墓	内行花文鏡	破片	16.9	墳墓	箱式石棺	弥生Ⅴ期	鈕座「□宜□□」		
516	福岡県	若宮町	汐井掛遺跡203号土坑墓	内行花文鏡	破片	16	墳墓	土坑墓	弥生Ⅴ期	空欄		
517	福岡県	若宮町	汐井掛遺跡175号木棺墓	内行花文鏡	破片	18	墳墓	組合式木棺	弥生Ⅴ期	空欄		
518	福岡県	若宮町	古屋敷遺跡３号住居	空欄	破片		集落	竪穴住居	弥生Ⅴ期	空欄		
519	福岡県	怡土村	井原鑓溝遺跡	流雲文鏡	破片	17	墳墓	甕棺	弥生Ⅳ期	銘帯　判読不能	現物無し	
520	福岡県	怡土村	井原鑓溝遺跡	流雲文四神鏡	破片	15.6	墳墓	甕棺	弥生Ⅳ期	銘帯「新有・・玄武陰陽」	現物無し	
521	福岡県	怡土村	井原鑓溝遺跡	Ｓ字様華文四神鏡	破片	14.15	墳墓	甕棺	弥生Ⅳ期	銘帯「新」	現物無し	
522	福岡県	怡土村	井原鑓溝遺跡	波文方格規矩鏡	破片	14.1	墳墓	甕棺	弥生Ⅳ期	銘帯「飲豊泉駕」	現物無し	
523	福岡県	怡土村	井原鑓溝遺跡	忍冬様華文方格規矩鏡	破片	14.1	墳墓	甕棺	弥生Ⅳ期	有り	現物無し	
524	福岡県	怡土村	井原鑓溝遺跡	獣帯規矩四神鏡	破片	14.1	墳墓	甕棺	弥生Ⅳ期	銘帯「漢有善・・明左」	現物無し	
525	福岡県	怡土村	井原鑓溝遺跡	波文規矩四神鏡	破片	14	墳墓	甕棺	弥生Ⅳ期	空欄	現物無し	
526	福岡県	怡土村	井原鑓溝遺跡	菱形文規矩四神鏡	破片	13.8	墳墓	甕棺	弥生Ⅳ期	空欄	現物無し	
527	福岡県	怡土村	井原鑓溝遺跡	方格規矩四神鏡	破片	13.8	墳墓	甕棺	弥生Ⅳ期	空欄	現物無し	
528	福岡県	怡土村	井原鑓溝遺跡	方格規矩四神鏡	破片	13.8	墳墓	甕棺	弥生Ⅳ期	有り	現物無し	
529	福岡県	怡土村	井原鑓溝遺跡	方格規矩四神鏡	破片	13.2	墳墓	甕棺	弥生Ⅳ期	有り	現物無し	
530	福岡県	怡土村	井原鑓溝遺跡	方格規矩四神鏡	破片	13.2	墳墓	甕棺	弥生Ⅳ期	空欄	現物無し	
531	福岡県	怡土村	井原鑓溝遺跡	方格規矩四神鏡	破片	12.8	墳墓	甕棺	弥生Ⅳ期	空欄	現物無し	
532	福岡県	怡土村	井原鑓溝遺跡	方格規矩四神鏡	破片	12.8	墳墓	甕棺	弥生Ⅳ期	空欄	現物無し	
533	佐賀県	伊万里市	牛戻遺跡Ｈ区３号石棺墓	細線式獣帯鏡	破片		墳丘ない墓	箱式石棺	弥生Ⅴ期	空欄	破断面赤彩	
534	佐賀県	小城町	伝　一本松古墳群	捩文鏡	破片	8.9	古墳	不明	古墳時代	無し		
535	佐賀県	小城町	伝　一本松古墳群	不明	破片		古墳	不明	古墳時代	不明	現物無し	
536	佐賀県	小城町	寄居ＳＴ01古墳	不明	破片	8.7	古墳	石蓋土坑墓	古墳前期	不明		
537	佐賀県	上峰町	目達原大塚古墳	不明	破片		古墳	横穴式石室	古墳中期	不明	現物無し	
538	佐賀県	上峰町	五本谷遺跡75号土坑墓	不明	破片	11.8	墳墓	土坑墓	古墳前期	不明	現物無し　破断面研磨	
539	佐賀県	唐津市	桜馬場遺跡	内行花文鏡	破片	19.2	墳墓	不明	不明	無し		
540	佐賀県	唐津市	神田堤遺跡	不明	破片	17.9	不明	包含層	不明	不明		
541	佐賀県	神埼町	吉野ヶ里遺跡吉野ヶ里地区Ⅴ区	内行花文鏡？	破片	22.2	集落	溝	弥生Ⅳ期	不明		
542	佐賀県	神埼町	吉野ヶ里遺跡吉野ヶ里地区Ⅴ区	不明	破片		集落	溝	弥生Ⅳ期	不明		
543	佐賀県	神埼町	吉野ヶ里遺跡吉野ヶ里地区Ⅴ区	内行花文鏡？	破片	22.2	集落	溝	弥生Ⅳ期	不明		
544	佐賀県	神埼町	吉野ヶ里遺跡志波屋四の坪地区	不明	破片	18.8	集落	竪穴住居	弥生Ⅳ期	不明		
545	佐賀県	神埼町	志波屋三本松遺跡	キ龍文鏡	破片	11	墳墓	土器棺	弥生時代	無し		
546	佐賀県	神埼町	志波屋六本松古墳群	位至三公鏡	破片	9.2	古墳	包含層	不明	不明	穿孔有り　破断面研磨	
547	佐賀県	神埼町	花浦遺跡石棺墓	内行花文鏡？	破片		墳墓	箱式石棺	弥生時代	無し	穿孔有り　破断面研磨	
548	佐賀県	神埼町	城原三本谷北遺跡	方格規矩鏡	破片	10	墳墓	箱式石棺	弥生時代	無し	穿孔有り　破断面研磨	
549	佐賀県	神埼町	北外遺跡	内行花文鏡？	破片	20	不明	不明	空欄	不明		
550	佐賀県	北波多村	親王塚古墳	不明	破片		古墳	横穴式石室	古墳後期	不明		
551	佐賀県	佐賀市	柴尾橋下流遺跡	内行花文鏡	破片	14.5	集落	溝	古墳前期	無し		
552	佐賀県	佐賀市	修理田遺跡ＳＸ2024	不明	破片	8.8	集落	不明遺構	弥生Ⅴ期	空欄	破断面研磨	
553	佐賀県	白石町	湯崎東遺跡Ｅ３区	不明	破片		集落	包含層	弥生庄内併行期	不明	破断面研磨	
554	佐賀県	大和町	岡裏遺跡６区	不明	破片		集落・墳墓	包含層	弥生時代	不明		
555	佐賀県	多久市	四反田遺跡８号住居	弥生小型仿製鏡	破片	6.9	集落	竪穴住居	古墳前期	無し	穿孔有り　破断面研磨	
556	佐賀県	武雄市	六ノ角遺跡	キ龍文鏡	破片	6.4	不明	不明	弥生時代	無し		
557	佐賀県	武雄市	みやこ遺跡	内行花文鏡	破片	18	墳墓・集落	箱式石棺	弥生Ⅴ期	無し		
558	佐賀県	武雄市	みやこ遺跡Ⅵ区下層	キ龍文鏡	破片	12	集落	不明	弥生時代	無し		
559	佐賀県	鳥栖市	平原遺跡２区ＳＸ222	仿製六弧内行花文鏡	破片	7.4	祭祀	祭祀品集積	古墳中期	無し		
560	佐賀県	鳥栖市	長ノ原遺跡４号住居	不明	破片	14.6	集落	竪穴住居	弥生Ⅴ期	不明		
561	佐賀県	中原町	町南遺跡ＳＢ103竪穴住居	位至三公鏡	破片	8.2	集落	竪穴住居	弥生庄内併行期	不明	穿孔有り	
562	佐賀県	中原町	原古賀三本谷遺跡ＳＫ400	内行花文銘帯鏡	破片	10.8	集落	土坑	弥生Ⅴ期	銘帯「而」		
563	佐賀県	東脊振村	二塚山遺跡26号土坑墓	内行花文鏡	破片	15.6	墳墓	土坑墓	弥生時代	無し		
564	佐賀県	東脊振村	松ノ内Ａ遺跡ＳＲ祭祀遺構	弥生小型仿製鏡	完形	7.7	墳墓・祭祀	土坑	弥生Ⅴ期	無し	破断面研磨・朱付着	
565	佐賀県	東脊振村	瀬ノ尾Ｂ遺跡11地区マ－18Ｇ	方格規矩鏡	破片	11.6	集落	柱穴	弥生Ⅴ期	無し		

566	佐賀県	東脊振村	西一本杉ＳＴ009古墳	不明	破片	10.9	古墳	割竹形木棺	弥生庄内併行期	空欄		穿孔有り
567	佐賀県	東脊振村	三津西遺跡	内行花文鏡	破片	15.4	墳墓	不明	不明	無し		
568	佐賀県	三田川町	南角遺跡	内行花文鏡	破片	14.6	墳墓	土坑墓	弥生時代	無し		
569	佐賀県	大和町	惣座遺跡	不明	破片		集落	溝	弥生Ⅴ期	不明		現物無し
570	佐賀県	大和町	伝　大和町大字池上	不明	破片	17.4	不明	不明	不明	銘帯「□□」		
571	佐賀県	大和町	十三塚遺跡	キ鳳鏡	破片	11	墳墓	箱式石棺	古墳前期	無し		
572	長崎県	石田町	原の辻遺跡	方格規矩鏡	破片		墳墓・集落	甕棺	弥生Ⅲ～Ⅳ期	無し		
573	長崎県	石田町	原の辻遺跡	方格規矩鏡	破片		墳墓・集落	甕棺	弥生Ⅲ～Ⅳ期	無し		
574	長崎県	石田町	原の辻遺跡	不明	破片		墳墓・集落	甕棺	弥生Ⅲ～Ⅳ期	無し		
575	長崎県	石田町	原の辻遺跡	不明	破片		墳墓・集落	甕棺	弥生Ⅲ～Ⅳ期	無し		
576	長崎県	石田町	原の辻遺跡	不明	破片		墳墓・集落	甕棺	弥生Ⅲ～Ⅳ期	無し		
577	長崎県	石田町	原の辻遺跡	不明	破片		墳墓・集落	甕棺	弥生Ⅲ～Ⅳ期	無し		
578	長崎県	石田町	原の辻遺跡	不明	破片		墳墓・集落	甕棺	弥生Ⅲ～Ⅳ期	無し		
579	長崎県	石田町	原の辻遺跡	神獣鏡	破片	11.2	墳墓・集落	甕棺	弥生時代	銘帯「□□居右□」		
580	長崎県	勝本町	掛木古墳	獣帯鏡	破片	15.4	古墳	横穴式石室	古墳後期	無し		
581	長崎県	勝本町	カラカミ遺跡辻屋敷貝塚	方格規矩鏡	破片		集落	不明	弥生Ⅴ期	無し		穿孔有り２孔
582	長崎県	北有馬町	今福遺跡Ｂ－３・４区	弥生小型仿製鏡	破片	7.5	墳墓・集落	溝	弥生時代	無し		
583	長崎県	北有馬町	今福遺跡Ｂ－３・４区	弥生小型仿製鏡	破片	7.8	墳墓・集落	溝	弥生時代	無し		
584	長崎県	志佐町	栢ノ木遺跡２号石組	内行花文鏡	破片	10.4	墳墓	箱式石棺	弥生Ⅲ～Ⅳ期	無し		彩色有り
585	長崎県	世知原町	岩谷口遺跡１区	内行花文鏡	破片	9.8	岩陰	不明	不明	無し		
586	長崎県	東彼杵町	白井川遺跡Ｆ－３区	獣帯鏡	破片	15	墳墓・集落	包含層	弥生Ⅳ～Ⅴ期	無し		
587	長崎県	平戸市	田助遺跡	内行花文鏡	破片		墳墓	箱式石棺	古墳時代	無し		
588	長崎県	南串山町	遠見塚遺跡１号石棺	仿製内行花文鏡	破片	8.3	墳墓	箱式石棺	古墳中期	不明		
589	長崎県	峰町	下ガヤノキ遺跡Ｆ地点	内行花文鏡	破片	17.7	墳墓	箱式石棺	弥生Ⅲ～Ⅳ期	銘帯「□行心伝而」		
590	長崎県	峰町	下ガヤノキ遺跡Ｆ地点	不明	破片	9.2	墳墓	箱式石棺	弥生Ⅲ～Ⅳ期	無し		
591	長崎県	峰町	下ガヤノキ遺跡Ｇ地点北方	獣形鏡	破片		墳墓	箱式石棺	古墳後期	無し		
592	長崎県	峰町	深入遺跡	不明	破片		不明	不明	弥生時代	無し		
593	長崎県	峰町	木坂遺跡５号石棺	弥生小型仿製鏡	破片	9.7	墳墓	箱式石棺	弥生Ⅴ期	無し		
594	熊本県	芦北郡	伝　芦北郡	三角縁尚方作銘二神二獣鏡	破片		不明	不明	不明	銘帯「悉皆右長保・」		
595	熊本県	阿蘇町	狩尾・渇の口遺跡	夕龍鏡	破片		墳丘ない墓	箱式石棺	弥生Ⅴ期	空欄		穿孔有り・破断面研磨　赤色顔料
596	熊本県	宇土市	轟貝塚	不明	破片	11	不明	不明	不明	空欄		
597	熊本県	嘉島町	二子塚遺跡４号住居	不明	破片		集落	竪穴住居	弥生Ⅴ期	空欄		
598	熊本県	嘉島町	二子塚遺跡67号住居	不明	破片	16.4	集落	竪穴住居	弥生Ⅴ期	空欄		
599	熊本県	嘉島町	二子塚遺跡86号住居	不明	破片	10.4	集落	竪穴住居	弥生Ⅴ期	空欄		
600	熊本県	嘉島町	二子塚遺跡148号住居	不明	破片	7.4	集落	竪穴住居	弥生Ⅴ期	空欄		
601	熊本県	菊水町	諏訪原遺跡Ｂ区１号住居	弥生小型仿製鏡	破片		集落	竪穴住居	弥生Ⅴ期	無し		
602	熊本県	熊本市	上高橋高田遺跡	不明	破片	9.9	集落	包含層	弥生～古墳時代	空欄		穿孔有り
603	熊本県	熊本市	上高橋高田遺跡	不明	破片	7.5	集落	包含層	弥生～古墳時代	空欄		穿孔有り
604	熊本県	熊本市	戸坂遺跡	内行花文鏡	破片	15	集落	不明	弥生時代	無し		破断面研磨
605	熊本県	熊本市	石原亀の甲遺跡	仿製内行花文鏡	破片	7.5	集落	不明	弥生時代	無し		
606	熊本県	熊本市	弓削山尻遺跡	仿製内行花文鏡	破片		集落	不明	不明	無し		
607	熊本県	熊本市	清水前遺跡群	不明	破片		集落	包含層	空欄	空欄		破断面研磨
608	熊本県	泗水町	古閑原町	内行花文鏡	破片	14.6	集落	空欄	不明	無し		穿孔有り　破断面研磨
609	熊本県	七条町	うてな遺跡Ⅲ区10号－Ａ溝	弥生小型仿製鏡	破片		集落	溝	弥生Ⅴ期	空欄		
610	熊本県	城南町	構口遺跡	弥生小型仿製鏡	破片	8.1	集落	不明	弥生時代	無し		
611	熊本県	玉名市	柳町遺跡Ⅵ区ＳＤ－ 49	仿製六弧内行花文鏡	欠損	5.5	集落	溝	古墳前期	空欄		穿孔有り
612	熊本県	玉名市	柳町遺跡Ⅲ区	不明	破片		集落	包含層	古墳前期	空欄		破断面研磨
613	熊本県	玉名市	高岡原遺跡10号住居	不明	破片		集落	竪穴住居	弥生Ⅴ期	空欄		
614	熊本県	久木町	西一町畑遺跡	方格規矩鏡	破片		集落	包含層	不明	無し		破断面研磨
615	熊本県	本渡市	妻の鼻28号板石積石室墓	不明	破片		墳墓	板石積石室墓	古墳中期	空欄		
616	熊本県	南関町	大場石棺群Ａ群１号石棺	飛禽鏡	破片	11	墳丘ない墓	箱式石棺	弥生Ⅴ期	空欄		穿孔有り・破断面研磨
617	熊本県	矢部町	枯木原遺跡	方格規矩鏡	破片	14.5	不明	不明	不明	無し		
618	熊本県	山鹿市	古閑白石遺跡	仿製内行花文鏡	破片		墳墓	箱式石棺	弥生時代	無し		
619	熊本県	山鹿市	方保田東原遺跡	不明	破片		集落・祭祀	包含層	弥生時代	空欄		
620	熊本県	山鹿市	方保田東原遺跡２号石棺	不明	破片		墳丘ない墓	箱式石棺	古墳中期	空欄		
621	熊本県	山鹿市	方保田遺跡	中国鏡	破片	17	不明	不明	不明			
622	熊本県	山鹿市	方保田白石遺跡	不明	破片	6.9	集落	包含層	弥生Ⅴ期	空欄		
623	大分県	安心院町	大平石棺群大平２号石棺	獣帯鏡	破片	9.4	墳墓	箱式石棺	古墳時代	無し		穿孔有り　破断面研磨
624	大分県	安心院町	大平石棺群大平３号石棺	三角縁神獣鏡	破片	23.8	墳墓	箱式石棺	古墳時代	空欄		
625	大分県	安心院町	宮ノ原遺跡２次Ｂ－３区	不明	破片		墳墓・集落	空欄	弥生Ⅴ期	空欄		破断面研磨
626	大分県	安心院町	宮ノ原遺跡12号竪穴	不明	破片		墳墓・集落	空欄	不明	空欄		破断面研磨
627	大分県	犬飼町	舞田原遺跡16号住居	獣形鏡	破片		集落	竪穴住居	弥生Ⅴ期	空欄		穿孔有り　破断面研磨
628	大分県	犬飼町	高松遺跡16号住居	内行花文昭明鏡	破片	10.2	集落	竪穴住居	弥生Ⅴ期	空欄		破断面研磨
629	大分県	犬飼町	高松遺跡36号住居	方格規矩鏡	破片	17.2	集落	竪穴住居	弥生Ⅴ期	空欄		破断面研磨
630	大分県	宇佐市	本丸遺跡	内行花文鏡	破片	20	墳墓	土坑墓	弥生庄内併行期	空欄		穿孔有り　破断面研磨
631	大分県	宇佐市	上原遺跡	内行花文鏡	破片	16	集落	竪穴住居	弥生時代	空欄		破断面研磨
632	大分県	臼杵市	臼塚古墳	不明	破片		古墳	舟形石棺	古墳中期	空欄		
633	大分県	大分市	尼ヶ城遺跡	方格規矩鏡	破片	16.5	集落	竪穴住居	弥生時代	空欄		穿孔有り・破断面研磨
634	大分県	大分市	守岡遺跡Ⅱ区11号住居	獣形鏡	破片		集落	竪穴住居	弥生Ⅴ期	空欄		破断面研磨
635	大分県	大分市	守岡遺跡Ⅱ区１号住居	内行花文昭明鏡	破片	9.5	集落	竪穴住居	弥生時代	銘帯「而」		破断面研磨
636	大分県	大分市	雄城台遺跡６次８号住居	内行花文鏡	破片	9.7	集落	竪穴住居	弥生庄内併行期	無し		穿孔有り・破断面研磨
637	大分県	大分市	雄城台遺跡７次１号住居	方格規矩鏡	破片	8.9	集落	竪穴住居	弥生Ⅴ期	空欄		破断面研磨
638	大分県	大分市	野間10号墳	神人獣形文鏡	欠損	13	古墳	箱式石棺	古墳前期	銘帯「宜」		穿孔有り
639	大分県	大分市	地蔵原遺跡	内行花文昭明鏡	破片		集落	竪穴住居	弥生時代	銘帯「而」		破断面研磨
640	大分県	大分市	東大道遺跡	不明	破片		不明	不明	弥生時代			
641	大分県	大田村	古城得遺跡20号住居	キ龍文鏡	破片	10.5	集落	竪穴住居	弥生Ⅴ期	空欄		穿孔有り
642	大分県	大野町	二本木遺跡34号住居	内行花文鏡	破片		集落	竪穴住居	弥生Ⅴ期	空欄		穿孔有り・破断面研磨
643	大分県	大野町	松木遺跡27号住居	方格規矩鏡	破片	11.6	集落	竪穴住居	弥生Ⅴ期	空欄		穿孔有り
644	大分県	大野町	石井入口遺跡56号住居	不明	破片		集落	竪穴住居	弥生Ⅴ期	空欄		破断面研磨
645	大分県	大野町	石井入口遺跡92号住居	画像鏡	破片		集落	竪穴住居	弥生Ⅴ期	空欄		破断面研磨
646	大分県	玖珠町	名草台遺跡	獣帯鏡	破片		墳墓	箱式石棺	不明	空欄		破断面研磨
647	大分県	玖珠町	おごもり遺跡Ⅱ区	内行花文鏡	破片		墳墓	土坑墓	不明	空欄		破断面研磨
648	大分県	佐賀関町	猫塚古墳	平縁式六獣鏡	破片	17	古墳	箱式石棺	古墳前期	空欄		現物無し
649	大分県	佐賀関町	猫塚古墳	鳥獣文鏡	破片	17	古墳	箱式石棺	古墳前期	銘帯「・・羊・・」		現物無し
650	大分県	竹田市	小園遺跡Ａ区４号住居	方格規矩鏡	破片		集落	竪穴住居	弥生Ⅴ期	空欄		穿孔有り・破断面研磨
651	大分県	竹田市	石井入口遺跡24号住居	弥生小型仿製鏡	破片	5.45	集落	竪穴住居	弥生Ⅴ期	空欄		
652	大分県	竹田市	石井入口遺跡75号住居	内行花文鏡	破片	8.2	集落	竪穴住居	弥生Ⅴ期	空欄		破断面研磨
653	大分県	千歳町	鹿道原遺跡	弥生小型仿製鏡	破片	9.1	集落	竪穴住居	弥生Ⅴ期	空欄		穿孔有り
654	大分県	千歳町	鹿道原遺跡	内行花文鏡	破片	13	集落	竪穴住居	弥生Ⅴ期	空欄		
655	大分県	野津町	原遺跡３号住居	方格規矩鏡	破片		集落	竪穴住居	弥生Ⅴ期	空欄		穿孔直前あり
656	大分県	萩町	山ノ神谷遺跡	内行花文鏡	破片	12	集落	竪穴住居	空欄	空欄		穿孔有り
657	大分県	日田市	草場遺跡	方格規矩鏡	破片	11.8	墳墓	箱式石棺	弥生時代	空欄		破断面研磨
658	大分県	日田市	小迫辻原遺跡３号住居	内行花文鏡	破片		集落	竪穴住居	弥生Ⅴ期	空欄		穿孔有り・破断面研磨
659	大分県	日田市	徳瀬遺跡Ｂ区石棺墓	位至三公鏡	破片	7.8	墳丘ない墓	箱式石棺	古墳前期	空欄		
660	大分県	豊後高田市	割掛遺跡２号土坑	内行花文鏡	破片	19	墳丘ない墓	箱式石棺	弥生庄内併行期	空欄		穿孔有り・破断面研磨
661	大分県	豊後高田市	割掛遺跡４号土坑	方格規矩鏡	破片	17.5	墳丘ない墓	箱式石棺	弥生庄内併行期	空欄		破断面研磨
662	宮崎県	串間市	銭亀塚	不明	破片	5	古墳	平石積石槨	古墳後期	不明		
663	宮崎県	西都市	松本原遺跡24号住居	不明	破片		集落	竪穴住居	古墳時代	無し		未整理
664	宮崎県	佐土原町	下那珂町遺跡	キ龍文鏡	破片	10	不明	不明	弥生後期			
665	宮崎県	新富町	伝　新田原45号墳	乳文鏡	破片	7.4	古墳	横穴式石室	古墳後期	無し		
666	宮崎県	新富町	銀代ヶ迫遺跡９号住居	内行花文鏡？	破片		集落	竪穴住居	弥生Ⅴ期	無し		
667	宮崎県	高鍋町	持田古墳群	不明	破片		不明	不明	不明	無し		
668	宮崎県	宮崎市	蓮ヶ池46号横穴墓	不明	破片	8	横穴	不明	古墳後期	無し		
669	宮崎県	宮崎市	蓮ヶ池52号横穴墓	不明	破片	7	横穴	不明	古墳後期	無し		
670	宮崎県	宮崎市	伝　広島古墳	画文帯半円方格帯鏡	破片	12.3	古墳	不明	古墳時代	半円方格帯「・・吾日・」		穿孔有り・破断面研磨
671	鹿児島県	国分市	舞鶴城跡	方格規矩鏡	破片		集落	包含層	弥生Ⅴ期	空欄		穿孔有り・破断面研磨
672	鹿児島県	川内市	石神原Ａ遺跡	不明	破片	8.6	集落	空欄	空欄	空欄		未整理
673	鹿児島県	長島町	白金崎古墳	不明	破片		古墳	横穴式石室	古墳後期	空欄		現物無し
674	鹿児島県	東市来町	向□城跡１号住居	不明	破片		集落	竪穴住居	古墳前期	空欄		穿孔有り・破断面研磨
675	沖縄県	浦添市	浦添城跡コーグスク地区	方格規矩鏡	破片	9.8	グスク	包含層	14世紀頃	空欄		
676	沖縄県	具志川市	宇堅貝塚	方格規矩鏡	欠損		集落	包含層	弥生Ⅲ～Ⅳ期	無し		
677	沖縄県	具志川市	宇堅貝塚	不明	破片		集落	包含層	弥生Ⅲ～Ⅳ期	無し		
678	沖縄県	具志川市	宇堅貝塚	不明	欠損		集落	包含層	弥生Ⅲ～Ⅳ期	無し		

城輪柵跡出土の軒丸瓦

水戸部　秀樹

1　はじめに

一昨年、山形県酒田市に所在する泉森窯跡が、財団法人山形県埋蔵文化財センターにより発掘され、多数の古瓦が出土した。出土した古瓦の内容は単弁十弁蓮華文軒丸瓦、丸瓦、平瓦である。軒平瓦は出土していない。ほかに須恵器も多く出土しており、窯跡の大概の時期も９世紀代前半と判明している。

既に発行された調査説明資料（財団法人山形県埋蔵文化財センター 2001）でも指摘されているが、泉森窯跡から出土した軒丸瓦は、出羽国の国府跡とされる城輪柵跡で出土した、伊藤・小野氏による分類でいう軒丸瓦第３類（伊藤・小野 1987）と同笵（図２、図３・４）である。つまり泉森窯跡で生産された瓦は城輪柵跡で消費されたと考えてよい。これまで城輪柵跡ではこの種の瓦が出土することは少なかったが、供給遺跡である泉森窯跡でまとまった資料を得ることができたので、城輪柵跡で出土している同笵の軒丸瓦について、より詳細な検討を加えることが可能となった。

城輪柵跡は移転を繰り返す出羽国府のなかでも井口府（柏倉・小野 1978）とされている。近頃刊行された八森遺跡の報告書（佐藤 2002）のなかでも佐藤禎宏氏は城輪柵跡の創建を９世紀第１四半期とし、城輪柵跡が井口国府であろうと述べている。筆者も泉森窯跡の調査成果を得ての検討のうえ、これらの意見に大過はないと考えている。

そうすると今回の発掘調査で出土した軒丸瓦は城輪柵跡の創建期、９世紀第１四半期とされる第Ⅰ期（小野 1997）の建物に使用された瓦であると考えられる。ただし、瓦の出土量は消費遺跡である城輪柵跡では非常に少なく、また城輪柵跡第Ⅰ期の政庁域の建物が掘立柱建物跡で構成されることなどから、瓦は本瓦葺ではなく部分的に使用されたか、あるいはごく一部の建物に限定的に葺かれた可能性が高い。この点については瓦の出土地点、丸平瓦、軒丸瓦の割合をあらためて検討する必要があろう。

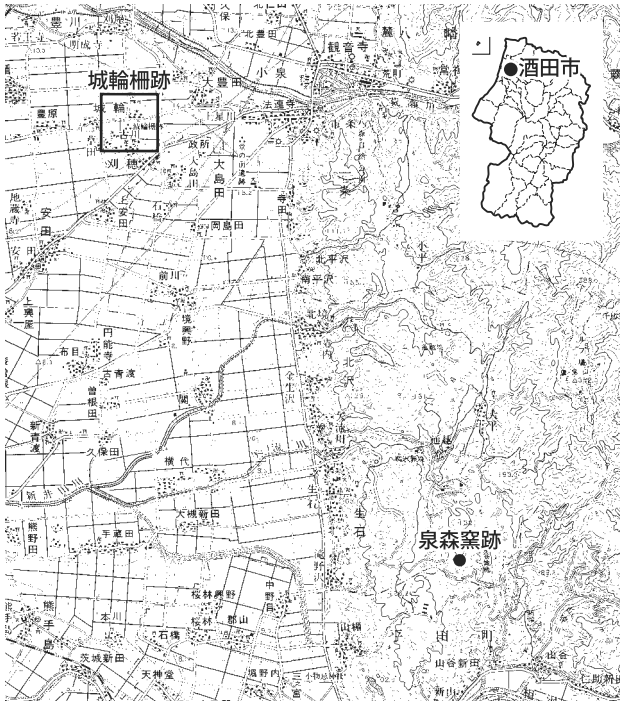


図１　遺跡位置図（１：100,000）

本稿では泉森窯跡出土の軒丸瓦と城輪柵跡出土の軒丸瓦の同笵関係を再確認し、さらにその後に確認された笵の彫り直しが認められる資料、笵の異なる新資料の報告を通して、これまでの研究のなかで単弁十弁蓮華文軒丸瓦がどのように扱われてきたかを整理し、泉森窯跡の報告書作成に資したいと思う。

2　単弁十弁蓮華文軒丸瓦の研究史

城輪柵跡に関する研究は数多いが、ここでは主な研究のみ取り上げて整理したい。

以下詳述するが、内容が少々複雑なため、先に結論を述べておく。まず、図２に示した瓦が城輪柵跡より出土したものである。図３・４が泉森窯跡より出土した瓦である。三者比較すれば同笵瓦であることは明らかであるが、図４の瓦には瓦当面の右下部分の弁間にのみ、間弁の名残ともいえる三角形の文様が瓦当面中央に向かって配されている。これは図２・３の瓦の笵に新たに彫り直しを加えた箇所であり、同笵瓦でありながら時期的に図

図２　城輪柵跡　単弁十弁蓮華文軒丸瓦

図３　泉森窯跡　単弁十弁蓮華文軒丸瓦

図４　泉森窯跡　単弁十弁蓮華文軒丸瓦（彫り直しあり）

図５　泉森窯跡　単弁八弁蓮華文軒丸瓦

図６　『城輪の出羽柵址及び国分寺址調査』掲載写真

図７　『城輪の出羽柵址及び国分寺址調査』掲載写真

図２・３・４・６下段中央・７は同笵、図４のみ彫り直しが認められるので一段階新しい。
図５は 2001 年発掘の新資料。
図６・７は『城輪の出羽柵址及び国分寺址調査』（阿部 1932）から転載。

２・３の瓦より新しい証拠となる。ただし、大きな時期差はないであろう。

図５に示した瓦は初めて確認された単弁八弁蓮華文軒丸瓦である。弁数こそ違うがほかの特徴は前二者と一致しており、やはり同時期の瓦であるといえよう。既に弁間に間弁が見られるので図４の彫り直しが行われた瓦と同じ段階か、あるいは弁数の減少を文様の簡略化ととらえればより後出のものとも考えられる。

さらに図６下段中央の瓦、図７・図８左も阿部氏の報告中の写真図版、伊東氏ほかによる『城輪柵跡予備調査概報』（伊東ほか 1965、以下概報と略す）のみでの検討ではあるが、弁の配置、弁と珠文、弁と中房の陰刻花文との位置関係などから前述の瓦と同笵であると考えられる。概報掲載の図８右は、既に現存しない図７の瓦の報告中の写真図版から起こしたと推定されるスケッチである。概報では図８左の瓦とは異なる分類で扱われているが、モデルとなった図７と図８左の瓦は、同笵であると既に述べた。

A　阿部正已氏の報告

城輪柵跡出土の瓦については現在まで阿部氏の報告（阿部 1932）に拠るところが大きい。概報でも阿部氏報告の中の写真図版をもとに瓦の説明をしている。

阿部氏の報告（阿部 1932、48 頁）では軒丸瓦（巴瓦と記載）は甲種、乙種、丙種の３種類に分類されている。実測図、拓本はなく写真図版のみ掲載されているが、文章中の各分類の説明と写真図版との対応関係は記されていないため、説明の内容と写真図版を照らし合わせて確認するほかない。また、軒丸瓦が載るのは図６・７のみである。前提として瓦の個々の説明が提示している写真図版のものであることが必須条件である。

筆者が確認したところ、甲種（図６の上段２点）は伊藤・小野氏の軒丸瓦１類に相当する。“各瓣内に雄蕊一雙づゝを配す”というのは弁内に子葉が２枚あることを表しているのだろう。また“十葉の蓮瓣を有し”とあるが実際は八弁である。

乙種は次に述べるとして丙種（図６、下段右）について見てみよう。外区に“二十餘個の星狀突起を一列に配列し”とあり、外区内縁の珠文を表現しているものと見ることができる。また、甲種と同じように子葉をもつ弁を“二本の雄蕊を包める蓮瓣數葉”と表している。伊藤・小野氏の軒丸瓦２類に相当する。

さて、乙種が本題の単弁十弁蓮華文軒丸瓦（伊藤・小野氏の軒丸瓦３類）に相当するものである。“蓮瓣の數は十葉”、“蓮瓣は高く棍棒放射狀をなせり”との表現からみても図６下段中央の軒丸瓦を指していると見て間違いない。さらに、“此種の巴瓦は稍々完形のもの一個と、三分の一の破片を發見”とあり、写真図版の中でこれらに対応するものを探すと、完形に近いものが図６下段中央の瓦であり、三分の一のものが図７の瓦となる。この二つの軒丸瓦を同一種として阿部氏は認識していたところが、次に述べる概報での記載内容と異なる部分である。また、乙種は笵型を使わず指頭で作製しているとも述べているが、これは誤りで笵を使用して作っていることは間違いない。

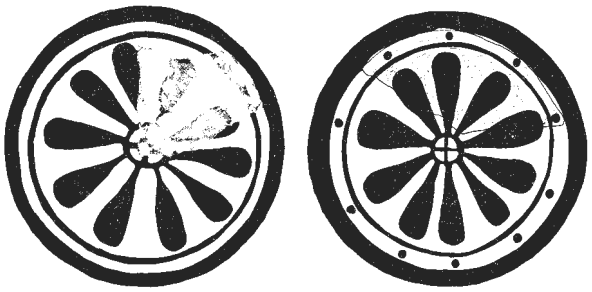


図８　『城輪柵跡予備調査概報』25 頁掲載図

B　『城輪柵跡予備調査概報』での記載

予備調査で出土した遺物は少数であり、軒丸瓦（鐙瓦と記載）の解説については阿部氏の報告に多くを拠っているようである。阿部氏の報告遺物と概報での遺物の対応関係は概報に明示してあるので、ここでは前段で触れた記載内容が異なる部分を見てみたい。

概報 26 頁記載の“（３）単弁蓮華文鐙瓦第一類”の項では、小破片しかないが、阿部氏の報告書の写真図版でほぼその全形を知ることができるとある。図示されたのはその小破片の拓本（図８左）である。

同じく“（４）単弁蓮華文鐙瓦第二類”の項では阿部氏の報告中の写真図版で存在が知られるが、現存するものはないとある。図示されたのはその写真図版をもとに作製したスケッチ（図８右）のようである。阿部氏の報告では、単弁の瓦は乙種の２個のみである。概報では乙種の各々の瓦に依拠しながら、各個体を対応させるように述べ、一類（図８左）と二類（図８右）に分類している。その根拠は二類の軒丸瓦には一類には見られない外区の珠文が配されていることとしている。しかし、阿部氏の報告中の写真図版で見る限りでは、図６下段中央の瓦は外区が欠損しているうえに、写真図版自体が不鮮明なため、あたかも珠文が初めから配されていなかったかのようにも見える。さらに概報での単弁蓮華文鐙瓦第一類とした瓦（図８左）は図２・３・４の瓦当面の右上部分に相当するのであるが、ちょうど外区に珠文が配されるべき箇所を欠損している。これにより概報では、図６

下段中央の瓦と図８左の瓦をもって外区に珠文をもたない軒丸瓦として分類したものと推測される。阿部氏の報告遺物が実見できないうえ、予備調査での出土遺物がわずかだったことが残念である。

C　城柵官衙遺跡検討会資料での分類

軒丸瓦は１類から５類に分類されている。軒丸瓦１・２類は、阿部氏の甲種・丙種にそれぞれ対応する。軒丸瓦３類は“十葉単弁蓮華文”とあり、図８左の図を、同４類は図８右の図を転載している。概報の記載を受けてのものである。この資料で不明なのは軒丸瓦５類としたものであるが、図示されておらず、また説明も“３類と同瓦当面文であるが、単弁が不揃い”とあるのみである。３類と同じ瓦当面文ということは、やはり単弁十弁蓮華文であると推測されるので、新資料として図５に示した瓦が該当することもなさそうである。筆者未見の資料かもしれないのでここでは保留にしておく。

D　小　結

これまでをまとめると、まず阿部氏による乙種は２点の瓦（図６下段中央・図７）が提示されているが、これは阿部氏が同種と認識したとおり同笵であろう。次に概報で提示された拓本（図８左）はやはり乙種、スケッチ（図８右）は阿部氏の報告中の写真図版（図７）をもとにしたものと推測した。また、これら図８に示された瓦は素文の外区外縁が復元されている。一部に笵端痕が見られるものはあるが、筆者が観察した資料の中には復元図のような素文の外区外縁が確認できる瓦はなかった。

城柵官衙遺跡検討会資料では軒丸瓦３類（図８左）が乙種に当たる。軒丸瓦４類はスケッチ（図８右）であり、同５類は資料が明らかにされておらず保留とした。

結局のところ、これまでいくつかに分類された単弁十弁蓮華文軒丸瓦であるが、確実に存在する型式は阿部氏が提示した乙種のみであった。

3　おわりに

ここまで城輪柵跡出土の単弁十弁蓮華文軒丸瓦の研究史を追った。さらに泉森窯跡で確認された新知見をあわせて述べる。

泉森窯跡の調査以前に確認されていた単弁十弁蓮華文軒丸瓦の型式は前述のとおり、阿部氏の乙種のみである。この笵には一度の彫り直しが認められるので、二段階に時期を設定することができる。図５に示した八弁の軒丸瓦は確認した限りでは初出の資料である。十弁の彫り直しが行われた新段階と同じか、後の段階と考えられるが、なおこの点については検討を要する。泉森窯跡では十弁の古段階、新段階、八弁のものが出土しているが、城輪柵跡では十弁の古段階の瓦のほかは確認していない。今後の調査で発見されるか、あるいはほかの消費遺跡に供給されたのだろうか。

本稿ではこれまでの研究を整理し、単弁十弁蓮華文軒丸瓦の評価を行った。今後は瓦当文様だけでなく、丸瓦、平瓦の製作技法などもあらためて検討し、その系譜、技術背景にも迫ってみたい。

城輪柵跡ではほかにも宝相華文軒丸瓦（佐川 2001）とこれに組み合う軒平瓦が出土している。同笵の瓦が寒河江市平野山窯跡からも出土しており、この両遺跡の関係は以前から注意されてきたが、これらについては別稿をもうけたい。

泉森窯跡は現在報告書を作成中であるが、調査担当者の野尻侃氏の協力により発表する機会を得た。今後も更なる新発見が期待される。

先学の研究に対し、失礼を承知で稿を起こした。幸運にも泉森窯跡でのまとまった資料を得たことで論を進めることができたに過ぎない。私自身先学の研究には多くを教えられた。本稿もすべて先学の研究をもとに成り立つものである。これからも範とし、研究を進めたい。

引用文献

財団法人山形県埋蔵文化財センター　2001『泉森窯跡・坂ノ下遺跡調査説明資料』財団法人山形県埋蔵文化財センター
伊藤邦弘・小野忍　1987「城輪柵の瓦」『第 13 回古代城柵官衙遺跡検討会資料』古代城柵官衙遺跡検討会
柏倉亮吉・小野忍　1978「城輪柵遺跡の内郭と性格について」『山形県・民俗歴史論集』（第２集）東北出版企画
佐藤禎宏　2002「第Ⅵ章　古代史上の八森遺跡」『八森遺跡　古代編』（八幡町埋蔵文化財調査報告書第 11 集）八幡町教育委員会
阿部正巳　1932『城輪の出羽柵址及び国分寺址調査』（山形郷土研究叢書５）国書刊行会
伊東信雄・板橋源・飯田須賀斯・柏倉亮吉　1965『城輪柵跡予備調査概報』酒田市教育委員会
佐藤禎宏　1979「仁和三年条の出羽国府移転に関する覚書」『庄内考古学第』16 号　庄内考古学研究会
小野忍　1997「城輪柵遺跡」『蝦夷・律令国家・日本海－シンポジウムⅡ・資料集－』日本考古学協会 1997 年度秋田大会実行委員会
佐川正敏　2001「平安時代前期陸奥国・出羽国の宝相華文軒丸瓦の研究」『東北学院大学　東北文化研究所紀要』第三十三号　東北学院大学

今塚遺跡の再検討とその性格について

植松　暁彦

1　はじめに

近年、発掘調査の増加に伴い山形盆地南半 (古代出羽国最上郡) の奈良～平安時代の遺跡の様相が徐々に明らかになっている。筆者も本地域の遺跡調査に携わる機会を得、特に山形市北部の今塚遺跡では木簡、墨書土器等の官衙的な遺物が出土し、報告書において「 遺跡の性格については (中略) 文字資料等から推測して、一般農村と規定するよりは役所的な機能を備えた集落、或いは祭祀関連の集落 」と結んだ (須賀井・植松 1994)。

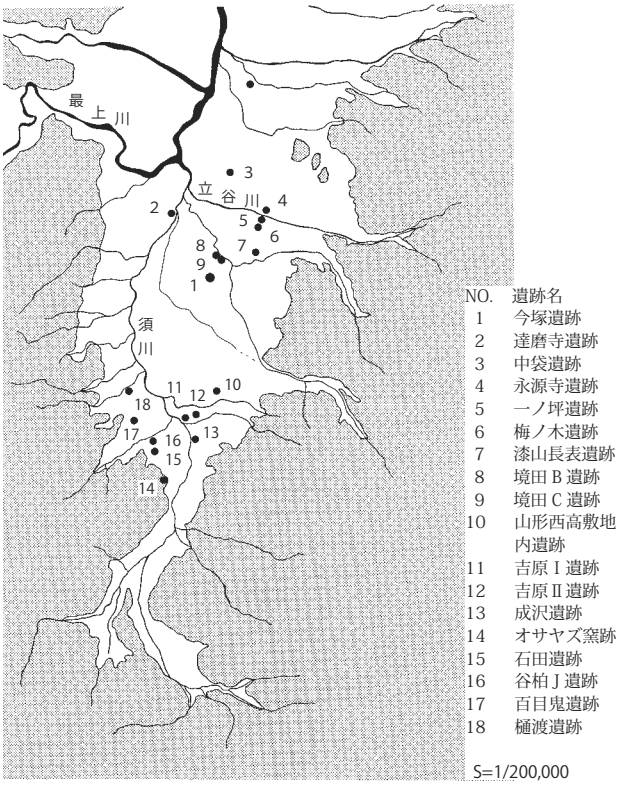
しかし、遺跡は遺構的には掘立柱建物跡で構成されるものの、規模や規格性に乏しく所謂官衙遺跡と呼ぶには躊躇がいる。本稿では今塚遺跡の遺物や遺構を再吟味し、近年の調査で事例が増えた周辺遺跡の比較等も踏まえて、遺跡の性格や最上郡内に於ける位置付けを検討する。

2　研究史と土器編年

今塚遺跡は山形市北部の今塚地区に位置し、馬見ケ崎川左岸の自然堤防 (微高地) 上に立地する。周辺には古墳時代の国指定史跡の嶋遺跡や特異な棟持柱建物が検出された長表遺跡が分布する (第 1 図)。調査では遺跡範囲の南半 7,800 ㎡が対象で、古墳時代前期の竪穴住居跡を主とする集落や河川跡、平安時代を主とする掘立柱建物や総柱建物跡、井戸跡、溝跡等が検出された (第 15 図)。

古代の遺物では溝跡から出土した①「 仁寿三年 」(853 年) の郡符木簡や兵士の食糧支給等の木簡、②「 生・一麗 」等の同一字種の一括墨書土器、③「 調所 」の墨書土器、④「 一等書生伴 」の墨書ある人面土器が注目された。

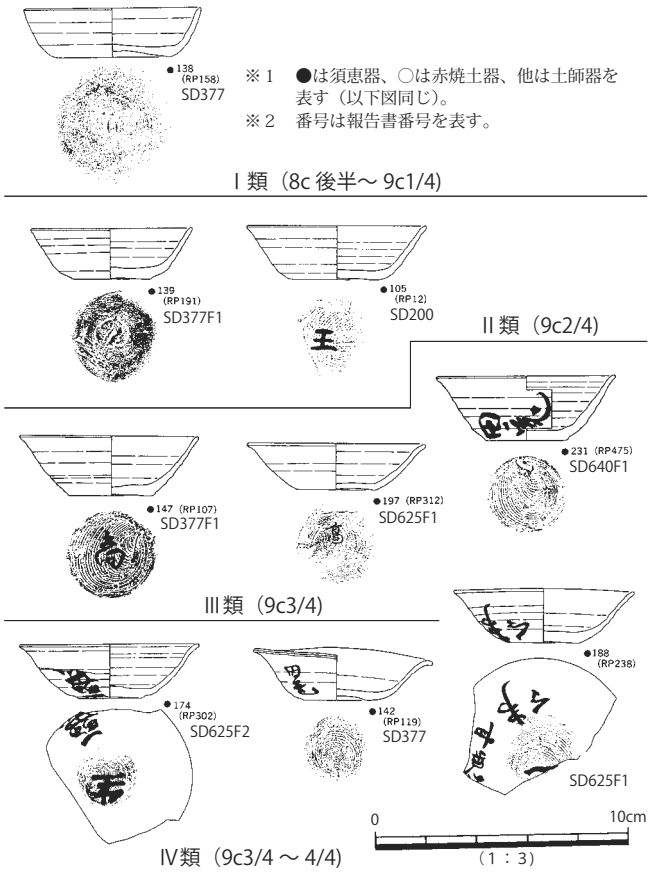
このうち①については報告書付編で平川南氏が検討を加え、本遺跡を「 役所 (性格不明) の一部 」と考えている (平川 1994)。②については報文では祭祀的な遺物としたが、近年横山昭夫氏も陰陽道に関わる墨書土器として紹介した (横山 1998)。また、北村優季氏は「 高 」墨書土器の出土から関東地方「 高麗 」の移植民に関わる可能性も言及している (北村 1997)。この他、報告書では本文中で主要な墨書土器に留めた釈文を山形県埋蔵文化財センターが中心に『山形県内出土古代文字資料集成』で報告書分の釈文を全て列記した。(尾形他 1998)。



第 1 図　遺跡位置図

また、伊藤邦弘氏と筆者は『山形県の官衙関連遺跡』の集成で、県内の官衙関連遺跡中でも上位に位置付け、後述する遺跡類型化を行った (伊藤・植松 1998)。同検討会では、山中敏史氏が③から国府関連の役所、④から郡書生の居宅の可能性を言及した (山中 1998)。

一方、遺物相については、報告書で一部「 形態的に古い様相を示す 」ものもあるが、①等から「 出土土器は 9 世紀代が主体で 10 世紀まで下るものは認められない 」と年代観をまとめた。佐藤庄一氏や阿部明彦氏・水戸弘美氏、筆者も各報告書等で、①が出土する S D 967 と並走する S D 377 溝跡の土器群に概ね 9 世紀中葉 (9 世紀第 2 ～ 3 四半期) の年代観をあて、当該期の基準資料としている。(植松 1997・佐藤他 1998・阿部他 1999)



第２図　土器変遷図

第２図にはこれらに準拠して本遺跡で最も出土量の多い須恵器坏を基準に本稿における土器編年観を示した。

3　墨書土器の再検討

今塚遺跡では、古代の土器が溝跡等を中心に油脂箱で約50箱出土した。特にＳＤ625・377(ＳＧ200)の溝跡からは多様な字種を含む墨書土器が一括して出土し、本遺跡の性格を考える上で多くの知見を与えてくれる(第３～５図。報告書追加再録)。報告書では事実記載に留めたものが多い墨書土器群について、再度検討を行う。

墨書土器については、報告書では主だったものを取り上げ、考察で「墨書文字･記号集成」を表した(第６図)。

本稿では、報告書作成当時は肉眼観察であったが、赤外線カメラ等を用い、一部報告墨書土器に修正加筆等を行い再録した(第７図)。また、報告書で掲載できなかった分も含め全ての墨書土器を集成(第11図)し、判読可能なものを表（第８～10図）にし、報告書未掲載の字種等を各字主な１点を実測(第12・13図)し、集成図(第14図)を作成した。

詳細は別稿に譲るが、これら集成表等からは、各遺構毎に字種や時期に一定の傾向が窺えた。更に遺構毎に土器が集中出土した地点をプロットする事で、同一字種の偏りがある事等も分かった。以下に上記の墨書土器で遺跡の性格等を示唆する字種を取り上げ、概略を記す。

A「生・一麗」関連の一括墨書土器群　ＳＤ625の「22－32Ｇに位置する窪地状の落ち込みに密集」し、「意識的に一括廃棄した状況」が看取られる墨書土器群で、「生･一麗」等の同一字種60個体以上が出土した(第３図)。報文では「一括出土状況から祭祀的な様相窺い知れる」とまとめた。

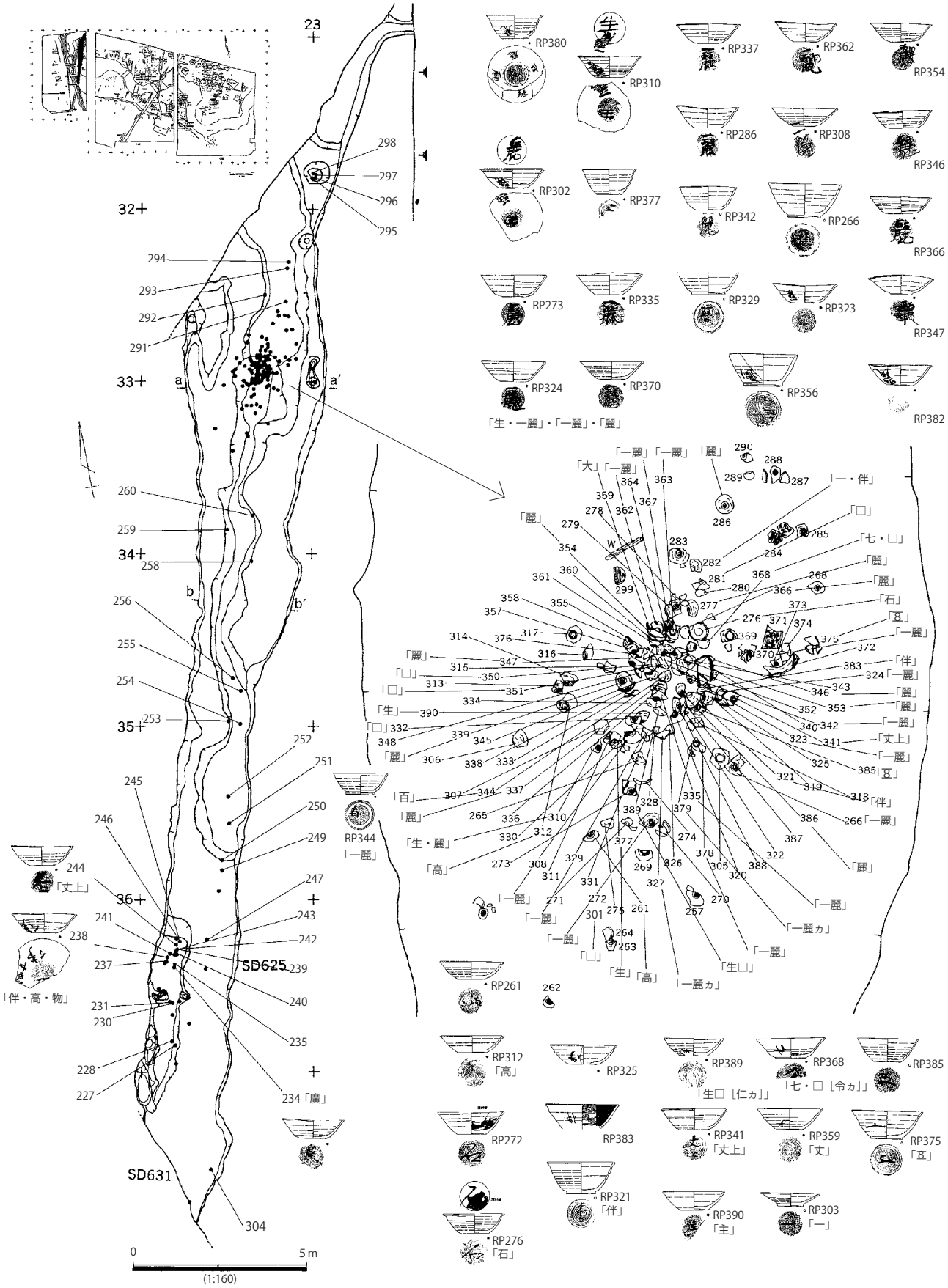
今回、再度字種の観察を行い幾つかの知見を得た。①同一字種にも字体により達筆な字体から崩し字、一部簡略化のもの等に分類可能で、②数量は前者が散見的で、後者ほど数量が多い(第６図)。③達筆な「麗」(第７図:報205)[1] 上部を観察すると、一般的な「丽」ではなく「皿」で、所謂呪符(符録：水野1997)に類する字種の可能性があり、④須恵器高台付坏の器種に限られ、墨書部位も特異性が窺える(底部「生」･体部４面対「一麗」)。

これらを概観すれば、①と②から丁寧で達筆なものが少数手本(報205・紀３)として書かれ、それを複数人物が模写し崩れ一部字体が簡略化される状況が推測される。③と④からは見本となる報205等の特異性やその出自、使用法等について様々な示唆が得られる。

具体的な祭祀の内容については、字種自体の類例がなく判断に窮するが、近年研究が進む水辺祭祀の何らかの「禊・祓い」に関わる一例と考えたい。その理由は出土遺構が浅い溝跡で水辺に関わり、③の「生」を中心にした「一麗」の字種構成等が「人心や社会情勢の穢れを清浄化」を意味すると捉えるからである。更に一括廃棄状況や①の組成や偏りから少数の上位識者とそれ以外の集団により水辺で供物を捧げる供膳具として墨書土器が用いられ、使用後に一括廃棄(祓い)された状況が窺える。

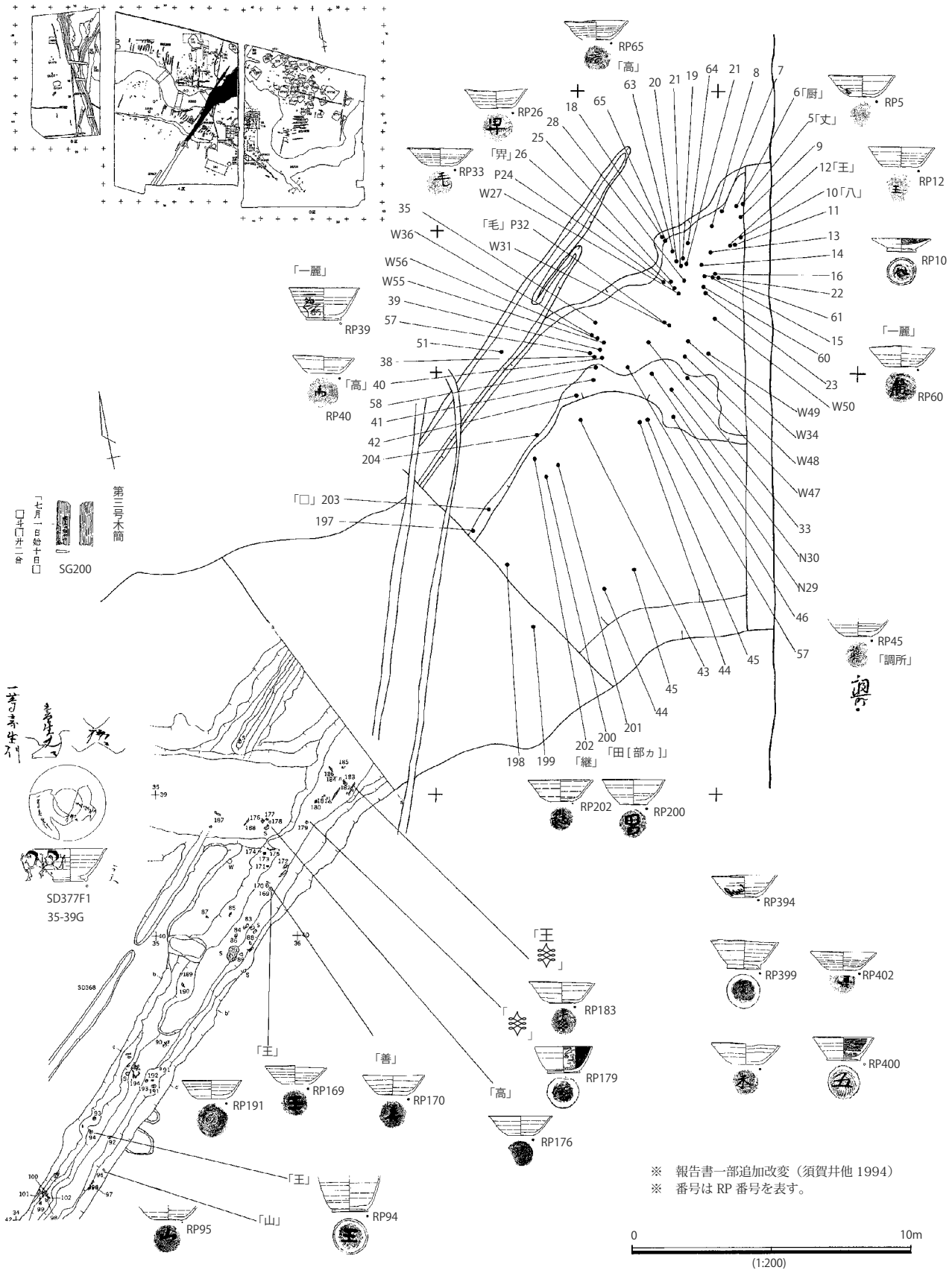
B「調所」銘の墨書土器　ＳＧ200より出土し、古代税収の「調」を納めた「所」と推測される(第４・６図)。報告書では木簡や墨書土器と共に『「調所」や「書生」という文書作成に関する文字資料』から、遺跡の性格を「役所的な機能を備えた集落」とした。

「調」は古代出羽国では狭布・米・穀の三種である。８世紀後葉からは、「調」が遠国に限られ蝦夷への夷禄に充てる等の理由から、隣国陸奥国と並び自国で利用

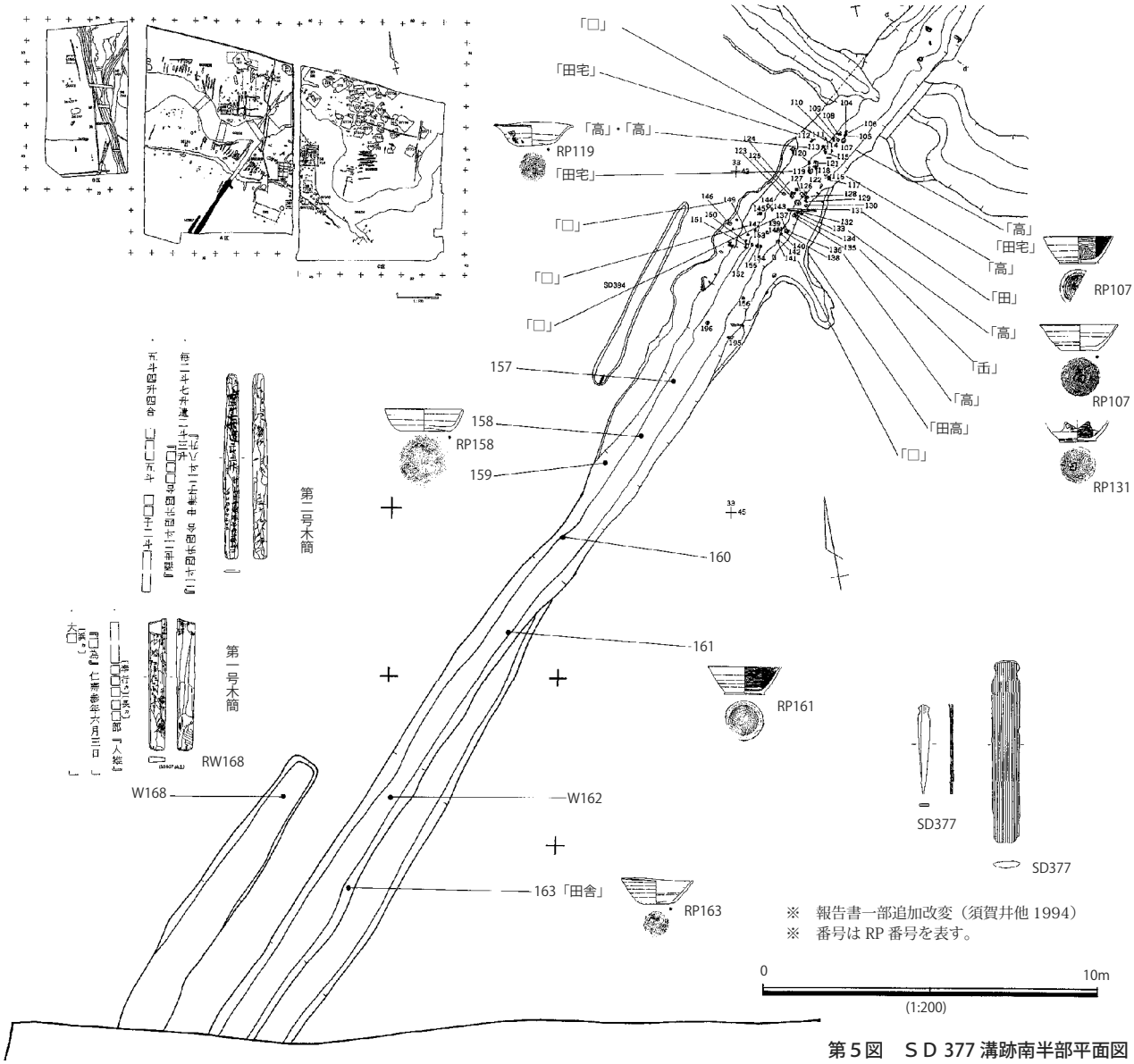


※　報告書一部追加改変（須賀井他 1994）
※　番号は RP 番号を表す。

第３図　ＳＤ 625 溝跡平面図



第４図　ＳＤ 377（ＳＧ 200）溝跡北半部平面図



第５図　ＳＤ 377 溝跡南半部平面図

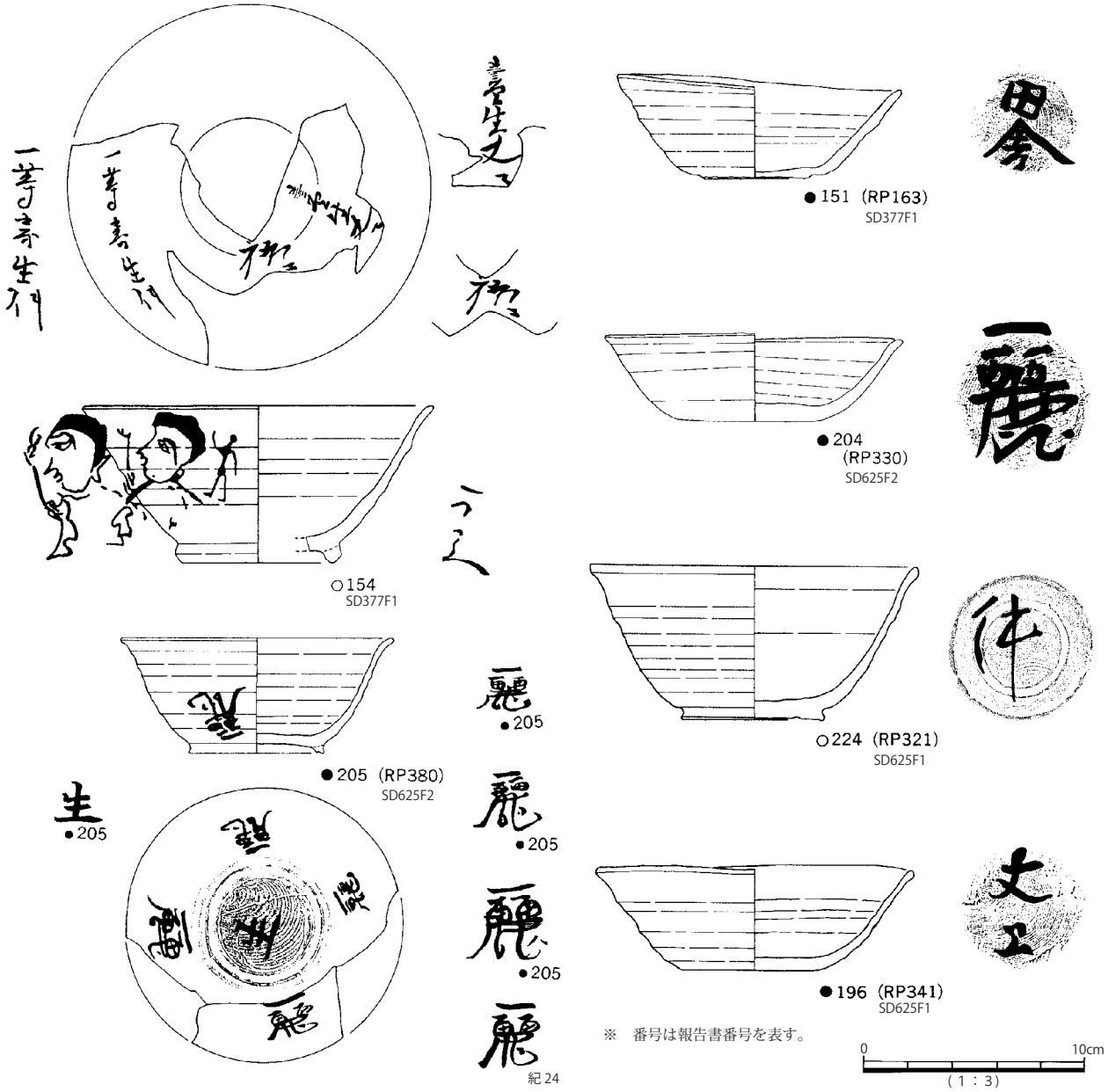
する他国には見られない規定が設けられる。また、ＳＧ 200 に連なるＳＤ 377 (第４図：同一遺構の可能性) [2] では「田宅」(報239) や「田舎」(紀580) 等の「田」と「宅」・「舎」の建物に関わる墨書土器の共伴、後述する米の支給に関わる郡符木簡の記述等と合わせて考えれば、出羽国の「調」の中でも米 (白米・玄米)・穀 (籾殻：佐藤 1997) を収納管理した可能性が推測される。

Ｃ「一等書生伴」銘の墨書土器　ＳＤ 377 中央部から出土し、本稿で赤外線カメラで実測図に一部追加・修正し再録した (第４図)。外面に人面墨書と対側に墨書の一部、内面体部横位に「一等書生伴」、同部縦位に「□等書生丈部」、「□」の文字が確認できた。これらの文意は報文「文書作成に関わる文字資料」として留めた。

具体的には「一等／書生／伴 (丈部)」と分けられる。「一等」は『軍令』に官人の職務に応じた等級を付す規定があり最も高い等級にあたる [3]。「書生」は、地方官人の職制で弘仁 13 年 (822 年) 太政官符『郡雑人』に「郡書生」がみえる。郡書生は郡毎に規模に応じて定員が規定され (佐藤 1997)、本遺跡の主体である９世紀中葉 (863 年：村山分郡以降) には、最上郡は８郷 (『延喜式』) で『戸令』により中郡に相当し、規定では４名置かれる。

「伴」は「大伴」氏の弘仁年間 (823 年) の改名による姓名と推定され、最上郡では承和 11(844) 年「外従八位伴部道成」が「吉弥候」姓を賜り、元慶２年 (878 年) の元慶の乱で「擬大領伴貞道」が 560 名の兵と共に国府より秋田城に派遣された資料がある。これは当時の最上郡内に郡司クラスの在地勢力「伴」氏の存在を窺わせ、郡司以下の郡雑人「郡書生」にもこれら在地勢力の

第６図　報告書墨書文字・記号集成図



第７図　報告書修正図

出自者が関与していた事が推測される。本遺跡では他にも「伴」、「丈」の墨書土器が一定量出土し、土器群の年代 (850 年前後) 的にも上記「書生／伴 (丈部)」の墨書土器に関わるものと判断される。

一方、外面の人面墨書は横向の二人の人物、後に線状に小人物が表される。前者の服装は頭に樸頭、服装は袖の長い衣袍を着用し、手に幣を持ちかざす様子が観察され、これらは官人層の仏教以外の宗教祭祀の行為を表現していると考えられる。また、内面の人名数等から描かれた官人が書生「伴」・「丈部」氏の可能性や、前述符録に類似する「麗」墨書 (陰陽道系) との関連も窺える。

Ｄ木簡　ＳＤ 377 や併走するＳＤ 967 から３点木簡が出土した (第４・５図)。報告書付編で平川南氏が釈文と解説をまとめている。要約すれば、第１号木簡は、上から下の役所に宛てた下達文書 (郡符木簡) で、「仁寿参 (三) 年六月三日」(853 年) の紀年がある。何らかの役職「長」の「□部『人雄』」に宛てられ、『人雄』は自署と判断している。

第２・３号木簡は、古代の役所が食糧を兵士に支給した木簡で、具体的には「酒世」、「中津子」等の人名に、各々「二斗四升四合 (240 合)」前後の支給額 (軍団兵士１日当たり米８合／約 30 日分) が記され、概ね兵士１年分 (約 30 日勤務) の番上粮に相当するとしている。他に「毎二斗七升 (＋) 遺二斗三升」(＝５斗＝１俵) の

	墨書字種(釈文)※1	報告番号※2	紀要番号※2	遺構番号 層位 グリッド	種別	器種	残存率※3	墨書部位※8	字体規模※5	字体濃淡※5	RP番号	年代観※4	付着物※6	備考※7
1	生 一麗	205	528	SD625F2	須恵器	坏	半完形	外底 外体	小	生 淡	380	Ⅲ - Ⅳ		報告修正 接合
2	生 一麗	173	529	SD625F1	須恵器	坏	半完形	外底 外体	中 大	濃 濃	310	Ⅳ		
3	生 一麗	174	530	SD625F2	須恵器	坏	半完形	外底 外体	中 大	淡 淡	302	Ⅳ		
4	生 一麗		1	SD625F	須恵器	坏	底片	外底 外体	大	淡 淡		Ⅳ		紀 26 接合
5	生 一麗 一麗		2	SD625F 22-33	須恵器	坏	底完形	外底 外体 内底	中 大	淡 淡		Ⅳ		
6	生 一麗		3	SD625 F1-F 2 22-33	須恵器	高台坏	底完形	外底 外体	小 大	濃 淡		Ⅲ - Ⅳ		紀 25 接合
7	一麗		13	SD625F 22-32	須恵器	坏	底片	外底	大			Ⅲ		
8	一麗		15	SD625F 22-32	須恵器	坏	底片	外底	大			Ⅳ		
9	一麗		17	SD625F 22-32	須恵器	坏	半完形	外底	大			Ⅲ		
10	一麗		20	SD625F 22-32	須恵器	坏	底片	外底	大			Ⅲ		
11	一麗		27	SD625F 22-32	赤焼土器	坏	底完形	外底	大			Ⅲ - Ⅳ	渋	
12	一麗		23	SD625F 22-33	須恵器	坏	底片	外底	大			Ⅲ	墨	
13	一麗		22	SD625F 22-35	須恵器	坏	底片	外底	大			Ⅲ - Ⅳ		
14	一麗		14	SD625F 22-3 6	須恵器	坏	底片	外底	大			Ⅲ		
15	一麗		30	SD625F 22-37	赤焼土器	坏	体部片	外体	大			不明		
16	一麗		28	SD625F	赤焼土器	坏	底片	外底	大			Ⅲ		
17	一麗		12	SD625F1 22-34	須恵器	坏	底完形	外底	大			Ⅲ		
18	一麗		31	SD625F1 22-36	内黒土器	高台坏	体部片	外底	大			Ⅱ - Ⅲ		
19	一麗		18	SD625 F1・F2	須恵器	坏	底片	外底	大			Ⅳ		
20	一麗		7	SD625 F1-F2 22-33	須恵器	坏	底片	外底	大			Ⅳ		
21	一麗		29	SD625 F1-F2 22-33	赤焼土器	坏	底片	外底	大			Ⅲ	渋	
22	一麗		8	SD625F2 22-32	須恵器	坏	底完形	外底	大			Ⅳ		
23	一麗		9	SD625F2 22-32	須恵器	坏	底片	外底	大			Ⅲ	渋	
24	一麗 墨痕		10	SD625F2 22-32	須恵器	坏	半完形	外底 内体	大			Ⅳ	渋	
25	一麗		11	SD625F2 22-33	須恵器	坏	底完形	外底	大			Ⅲ - Ⅳ	擦．渋	
26	一麗		16	SD625F2 22-33	須恵器	坏	底片	外底	大			Ⅳ	煤	
27	一麗		4	SD625F2	須恵器	坏	底片	外底	大		363	Ⅳ		
28	一麗		19	SD625F2	須恵器	坏	底片	外底	大			Ⅳ	墨	硯
29	一麗		21	SD625F2	須恵器	高台坏	底片	外底	中			Ⅲ - Ⅳ		
30	一麗		5	SD625	赤焼土器	高台坏	底片	外底	中		367	Ⅲ - Ⅳ	渋	
31	一麗		6	SD625	須恵器	坏	半完形	外底	大		378	Ⅳ	渋	
32	一麗	182	539	SD625F1	須恵器	坏	半完形	外底	大		362	Ⅳ		
33	一 麗	217	541	SD625F1	赤焼土器	坏	半完形	外体 外底	大		342	Ⅳ	渋	
34	一麗	219	542	SD625F1	赤焼土器	坏	半完形	外底	大		266	Ⅲ - Ⅳ		
35	一麗	223	543	SD625F1	赤焼土器	坏	半完形	外底	大		329	Ⅲ - Ⅳ	渋	
36	一 麗	175	532	SD625F2	須恵器	坏	半完形	外体 外底	中 大	淡 淡	308	Ⅳ	墨	
37	一麗	176	533	SD625F2	須恵器	坏	底完形	外底	大		273	Ⅳ		
38	一麗	177	534	SD625F2	須恵器	坏	底完形	外底	大		370	Ⅳ	渋	
39	一麗	178	535	SD625F2	須恵器	坏	半完形	外底	大		286	Ⅳ		
40	一麗	179	536	SD625F2	須恵器	坏	半完形	外底	大		335	Ⅲ	渋	
41	一麗	180	537	SD625F2	須恵器	坏	半完形	外底	大		337	Ⅳ		
42	一麗 □	181	538	SD625F2	須恵器	坏	半完形	外底 外体	大		324	Ⅳ	渋	
43	一麗	189	540	SD625F2	須恵器	坏	半完形	外底	中		323	Ⅳ		
44	一麗	207	544	SD625F2	須恵器	坏	半完形	外体	大		356	Ⅲ	煤．朱	
45	一麗	204	579	SD625	須恵器	坏	完形	外底	大		330	Ⅲ	擦．渋	報告修正
46	一麗	101	513	SG200	須恵器	坏	完形	外底	大		60	Ⅲ	渋	
47	一麗	116	514	SG200	赤焼土器	坏	半完形	外体	大		39	Ⅲ - Ⅳ		
48	一麗		277	Ⅲ 22-37	須恵器	坏	底完形	外底	大			Ⅳ	墨	
49	一麗		278	Ⅲ 22-37	須恵器	坏	底片	外底	大			Ⅲ - Ⅳ	渋	
50	一麗 □		330	SB 6 EB483F1	須恵器	坏	底片	外底 外体	大 小			Ⅲ		
51	麗		38	SD625F 22-32	赤焼土器	高台坏	底完形	外底	中			Ⅲ - Ⅳ		
52	麗		37	SD625F 22-33	須恵器	坏	底片	外底	中			Ⅳ		

	墨書字種(釈文)※1	報告番号※2	紀要番号※2	遺構番号 層位 グリッド	種別	器種	残存率※3	墨書部位※8	字体規模※5	字体濃淡※5	RP番号	年代観※4	付着物※6	備考※7
53	麗		32	SD625F1	須恵器	坏	底片	外底	大		277	Ⅳ		
54	麗		33	SD625F2	須恵器	坏	底片	外底	中		337	Ⅳ		
55	麗		34	SD625F2	須恵器	坏	底片	外底	大		339	Ⅳ		
56	麗		35	SD625F2	須恵器	坏	底片	外底	大		353	Ⅳ		
57	麗		36	SD625F2	須恵器	坏	半完形	外底	大		386	Ⅳ	渋	
58	麗	183	545	SD625F2	須恵器	坏	半完形	外底	大		347	Ⅳ		
59	麗 □	184	546	SD625F2	須恵器	坏	半完形	外底 外体	大		354	Ⅳ	擦．渋	
60	麗	185	547	SD625F2	須恵器	坏	半完形	外底	大		346	Ⅲ		
61	麗	186	548	SD625F2	須恵器	坏	半完形	外底	大		366	Ⅳ	渋	
62	麗	187	549	SD625F2	須恵器	坏	半完形	外体	大		382	Ⅳ		
63	［麗カ］		42	SD625F 22-32	須恵器	坏	底片	外底	大			Ⅳ		
64	［麗カ］		43	SD625F 22-33	須恵器	坏	底片	外底	大			Ⅲ		
65	［麗カ］		49	SD625F 22-33	須恵器	坏	体部片	外体	中			不明		
66	［麗カ］		50	SD625F 22-33	須恵器	坏	体部片	外体	大			不明		
67	［麗カ］		47	SD625F 22-36	須恵器	坏	底片	外底	中			Ⅲ - Ⅳ		
68	［麗カ］		46	SD625F	須恵器	坏	底片	外底	大			Ⅲ - Ⅳ		
69	［麗カ］		48	SD625F	須恵器	高台坏	底片	外底	中			Ⅲ - Ⅳ		
70	［麗カ］		40	SD625F1	須恵器	坏	底片	外底	大		379	Ⅳ	渋	
71	［麗カ］		45	SD625F1	須恵器	坏	底片	外底	大			Ⅳ	墨	硯
72	［麗カ］		41	SD625F2 22-32	須恵器	坏	底片	外底	大			Ⅳ		
73	［麗カ］		39	SD625F2	須恵器	坏	底片	外底	大		327	Ⅲ	擦．渋	
74	［麗カ］		44	SD625F2	須恵器	坏	底片	外底	大			Ⅲ - Ⅳ		
75	□［麗カ］		130	SD625F 22-32	須恵器	坏	底片	外底	大			Ⅳ		
76	□［麗カ］		145	SD625F 22-35	赤焼土器	坏	底片	外底	大			Ⅲ		
77	□［麗カ］		94	SD625F2	須恵器	坏	半完形	外底	中		332	Ⅳ		
78	廣 一麗		76	SD625F	須恵器	坏	底片	外底 外体	中	濃 淡		Ⅲ - Ⅳ	煤	未掲実測
79	廣 麗		75	SD625	須恵器	坏	底片	外底 内底	中 大	濃 淡		Ⅳ		未掲実測
80	廣		77	SD625 F1-F2 22-33	赤焼土器	高台坏	底片	外底	小			Ⅲ - Ⅳ	渋	
81	廣	193	564	SD625F1	須恵器	坏	底完形	外底	中		234	Ⅳ		
82	□［廣カ］		212	SD625F1	須恵器	坏	底片	外底	中			Ⅲ - Ⅳ		
83	生		52	SD625F	須恵器	坏	体部片	外底	中			Ⅲ - Ⅳ		
84	生		55	SD625 F・F 1 22-32	須恵器	坏	底片	外底	小			Ⅲ - Ⅳ		
85	生		53	SD625F2 22-33	須恵器	坏	底完形	外底	中			Ⅳ		
86	生		51	SD625F2	須恵器	坏	体部片	外底	小		365	Ⅲ		
87	生		54	SD625	須恵器	坏	底片	外底	大			Ⅳ		
88	生	206	531	SD625F1	須恵器	坏	底片	外底	小		377	Ⅲ - Ⅳ		
89	生		284	Ⅲ 40-37	須恵器	坏	体部片	外体	小			不明		
90	田舎	151	580	SD377	須恵器	坏	完形	外底	中		163	Ⅳ		報告修正
91	田［舎カ］		189	SD377F1 34-43	須恵器	坏	底片	外底	小			Ⅲ		
92	□［田舎カ］ □		98	SD625F 22-37	須恵器	坏	底片	外底 外体	大	淡 淡		Ⅳ	墨	硯
93	舎 □		191	SD377F1	須恵器	坏	底片	外体 外底	中	淡 淡		Ⅳ		未掲実測
94	田宅 頁	239	577	Ⅲ 36-47	内黒土器	坏	半完形	外体 外底	小 中	淡 濃		Ⅳ		
95	田宅	103	516	SG200	須恵器	坏	半完形	外体	中		394	Ⅳ		
96	田宅 □		180	SD377F1 34-42	赤焼土器	坏	底片	外底 外体	小			Ⅳ		
97	田宅		177	SD377F1	須恵器	坏	底片	外体	小			Ⅱ - Ⅲ		
98	田宅		178	SD377F1	須恵器	坏	体部片	外体	中			不明		
99	田宅		182	SD377F1	赤焼土器	坏	底片	外底	小			不明		
100	田宅		179	SD377	赤焼土器	坏	底片	外底	小		112	Ⅲ - Ⅳ		
101	田宅		181	SD377	赤焼土器	坏	底完形	外底	小		140	Ⅳ	渋	
102	田宅	142	502	SD377	須恵器	坏	半完形	外体	小		119	Ⅳ	煤	
103	田宅	231	572	SD640F1	須恵器	坏	半完形	外体	中		475	Ⅲ - Ⅳ	渋	
104	田宅		262	Ⅲ 33-42	須恵器	坏	底片	外底	中			Ⅳ	渋	
105	田宅		266	Ⅲ 33-42	赤焼土器	坏	底片	外底	中			Ⅳ		
106	田宅		263	Ⅲ 42-41	須恵器	高台坏	底片	外底	中			Ⅲ - Ⅳ	渋	
107	田宅		264	Ⅲ 42-43	須恵器	坏	底片	外底	小			Ⅳ	擦	
108	田宅		265	Ⅲ 42-43	須恵器	坏	底片	外底	大			Ⅲ - Ⅳ		
109	田宅		195	SD377	須恵器	坏	半完形	外底	中		114	Ⅳ		
110	宅		328	SB1EB4	須恵器	高台坏	底片	外底	中			Ⅱ - Ⅲ		
111	宅		199	SD377F1 34-32	須恵器	坏	底片	外底	中			Ⅲ - Ⅳ	渋	
112	宅		202	SD377F1	須恵器	坏	底片	外底	中			Ⅲ		
113	□［宅カ］		219	SD377F1 34-42	赤焼土器	坏	底片	外底	中			Ⅲ - Ⅳ		
114	□［頁カ］		197	SD377F1	須恵器	坏	底片	外底	中			Ⅳ		
115	田高		80	SD625F2	内黒土器	高台坏	底片	外底	小			Ⅱ		
116	田高	212	556	SD625F1	内黒土器	坏	底片	外底	小		107	Ⅱ		

第８図　墨書土器釈文表（１）

	墨書字種 (釈文) ※1	報告番号 ※2	紀要番号 ※2	遺構番号 層位 グリッド	種別	器種	残存率 ※3	墨書部位 ※8	字体規模 ※5	字体濃淡 ※5	RP番号	年代観 ※4	付着物 ※6	備考 ※7
117	田高		267	Ⅲ 40-37	須恵器	高台坏	底片	外体	中			Ⅲ - Ⅳ		
118	田 高		190	SD377	内黒土器	坏	底完形	外底 外体	小	濃 淡	131	Ⅱ - Ⅲ		未掲実測
119	[田高カ]		302	Ⅲ 42-42	須恵器	坏	底片	外底	中			Ⅲ - Ⅳ		
120	舁	102	525	SG200	須恵器	坏	半完形	外底	大		26	Ⅲ	墨	硯
121	田□ [部カ]		270	Ⅲ 31-44	須恵器	坏	底片	外底	大			Ⅳ		
122	田		287	Ⅲ 42-38	須恵器	坏	底片	外底	小			Ⅳ		
123	[田カ]		300	Ⅲ 34-42	須恵器	坏	底片	外底	小			Ⅲ		
124	上高		268	Ⅲ 33-43	須恵器	坏	底片	外底	中			Ⅳ		未掲実測
125	上		193	SD377F1	内黒土器	高台坏	底片	外底	小			Ⅲ - Ⅳ		
126	高下 一		206	SD377	須恵器	坏	底完形	外底 外体	大 小	淡 濃	137	Ⅳ	墨	硯 未掲実測
127	下 高		269	Ⅲ 33-43	須恵器	坏	底片	外体 外底	小 中	濃 濃		Ⅲ - Ⅳ		
128	高		58	SD625F 22-32	須恵器	坏	底片	外底	小			Ⅲ - Ⅳ	渋	
129	高		59	SD625F 22-33	須恵器	坏	底片	外底	小			Ⅲ		
130	高		61	SD625F 22-37	須恵器	坏	底片	外底	大			Ⅲ		
131	高		56	SD625F	須恵器	坏	底片	外底	小			Ⅳ		
132	高		57	SD625F1	須恵器	坏	底完形	外底	小			Ⅳ		
133	高		60	SD625	須恵器	坏	底完形	外底	小			Ⅳ		
134	高	197	557	SD625F1	須恵器	坏	半完形	外底	小		312	Ⅲ - Ⅳ		
135	高	198	558	SD625F1	須恵器	坏	半完形	外底	小		261	Ⅲ - Ⅳ	墨	硯
136	高	84	571	SE181	須恵器	坏	底完形	外底	小		80	Ⅲ	煤	
137	高	112	517	SG200	須恵器	坏	半完形	外底	中		399	Ⅲ - Ⅳ		
138	高	104	518	SG200	須恵器	坏	完形	外底	中		40	Ⅲ	渋	
139	高	108	519	SG200	須恵器	坏	半完形	外底	中		65	Ⅲ - Ⅳ	煤	
140	高		174	SD377F 34-43	赤焼土器	坏	体部片	外体	中			不明		
141	高		170	SD377F	内黒土器	高台坏	底片	外底	小			Ⅱ		
142	高		172	SD377F1 33-42	須恵器	坏	底片	外底	大			Ⅲ - Ⅳ		
143	高		168	SD377F1 34-42	須恵器	坏	底片	外底	小			Ⅲ	渋	
144	高 □		169	SD377F1 34-42	須恵器	坏	底片	外体 外底	中	淡 濃		Ⅲ	墨	
145	高		167	SD377F1	須恵器	坏	半完形	外底	中			Ⅲ	煤	
146	高		173	SD377F1	赤焼土器	坏	底片	外底	中			Ⅲ	渋	
147	高		175	SD377F1	須恵器	坏	底片	外底	小			Ⅳ	擦	
148	高		176	SD377F1	須恵器	坏	底片	外底	中			Ⅲ - Ⅳ		
149	高	146	503	SD377F1	須恵器	坏	底片	外底	中		176	Ⅳ	渋	
150	高		163	SD377	須恵器	坏	底完形	外底	小		116	Ⅲ	煤	
151	高		164	SD377	須恵器	坏	底片	外底	中		113	Ⅲ - Ⅳ		
152	高		165	SD377	須恵器	坏	底完形	外底	中		113	Ⅲ - Ⅳ		
153	高		166	SD377	須恵器	坏	底完形	外底	大		136	Ⅲ - Ⅳ	渋	
154	高		171	SD377	須恵器	高台坏	底完形	外体	中		133	Ⅲ		
155	高	147	504	SD377	須恵器	坏	半完形	外底	中		107	Ⅲ		
156	高		255	Ⅲ 32-42	須恵器	坏	底片	外底	大			Ⅳ		
157	高		254	Ⅲ 32-43	須恵器	坏	底片	外底	小			Ⅲ		
158	高		245	Ⅲ 33-42	須恵器	坏	底片	外底	中			Ⅲ	煤	
159	高		243	Ⅲ 33-43	須恵器	坏	底片	外底	小			Ⅲ		
160	高		249	Ⅲ 33-43	須恵器	坏	体部片	外体	中			不明		
161	高		259	Ⅲ 33-43	赤焼土器	坏	底片	外底	小			Ⅲ	煤	
162	高		260	Ⅲ 33-43	赤焼土器	坏	底片	外底	小			Ⅲ		
163	高		261	Ⅲ 33-43	赤焼土器	坏	底片	外底	小			Ⅲ		
164	高		251	Ⅲ 34-42	須恵器	坏	底片	外底	小			Ⅳ	擦	
165	高 □		252	Ⅲ 40-43	須恵器	坏	底片	外底 内底	大			Ⅳ	墨	
166	高		242	Ⅲ 40-45	須恵器	坏	底片	外底	中			Ⅲ		
167	高		250	Ⅲ 41-44	須恵器	坏	底片	外底	小			Ⅲ - Ⅳ	擦	
168	高		253	Ⅲ 42-40	須恵器	坏	底完形	外底	中			Ⅳ		
169	高		246	Ⅲ 42-41	須恵器	坏	底片	外底	大			Ⅲ - Ⅳ		
170	高		257	Ⅲ 42-41	須恵器	坏	底完形	外底	小			Ⅲ - Ⅳ	煤	
171	高		258	Ⅲ 42-41	須恵器	坏	底片	外底	小			Ⅳ	煤	
172	高		256	Ⅲ 42-42	須恵器	坏	底片	外底	中			Ⅱ - Ⅲ		
173	高 □		244	Ⅲ 42-43	須恵器	坏	底片	外体 外底	中	淡 淡		Ⅳ	渋	
174	高		248	Ⅲ 43-40	須恵器	坏	底片	外底	中			Ⅲ - Ⅳ		
175	高		247	Ⅲ 47-38	須恵器	坏	底片	外底	小			Ⅲ - Ⅳ		
176	高		319	X-0	須恵器	坏	底片	外底	小			Ⅲ - Ⅳ	墨	
177	高		320	X-0	須恵器	坏	底片	外底	小			Ⅲ	渋	
178	高		321	X-0	須恵器	坏	底片	外底	小			Ⅲ	煤	
179	高		322	X-0	須恵器	高台坏	底完形	外底	中			Ⅲ - Ⅳ		
180	□ [高カ]		314	Ⅲ 42-41	須恵器	坏	底片	外底	小			Ⅲ	墨	硯
181	□ [高カ]		211	SD377F1	須恵器	坏	底片	外底	小			Ⅲ - Ⅳ		
182	□ [高カ]	148	512	SD377F1	須恵器	坏	底片	外底	中			Ⅲ	渋	
183	一等書生伴 □等書生丈部 □	154	501	SD377	赤焼土器	坏	底片	外体	小			Ⅲ - Ⅳ	墨	報告修正
184	伴高物 □	188	550	SD625F1	須恵器	坏	底片	外体 外底	中	淡 淡	238	Ⅲ - Ⅳ	煤	
185	伴 一		67	SD625F1	須恵器	坏	半完形	外体 外底	中	淡 淡	282	Ⅳ	擦	
186	□ [一伴カ]		104	SD625F	須恵器	坏	底片	外底	大			Ⅲ		
187	伴		62	SD625F1	須恵器	坏	半完形	外体	小		247	Ⅳ	擦 . 渋	
188	伴		63	SD625F 22-32	須恵器	坏	体部片	外体	中			不明		
189	伴		64	SD625F	須恵器	坏	体部片	外体	小			不明	渋	
190	伴		65	SD625F 22-32	赤焼土器	坏	底片	外体	小			Ⅲ		
191	伴		66	SD625F	赤焼土器	坏	体部片	外体	小			不明		
192	伴	202	551	SD625F2	須恵器	坏	底片	外体	中		325	Ⅳ		
193	伴	224	552	SD625F1	赤焼土器	坏	底完形	外底	中		321	Ⅱ - Ⅲ	擦 . 渋	報告修正
194	伴	211	553	SD625F2	内黒土器	坏	体部片	外体	中		383	Ⅲ - Ⅳ		
195	丈上	190	554	SD625F1	須恵器	坏	完形	外底	中		244	Ⅳ	煤	
196	丈上	196	555	SD625F1	須恵器	坏	半完形	外底	中		341	Ⅳ		報告修正
197	丈		78	SD625 F1-F2 22-33	須恵器	坏	底片	外体	小			Ⅲ - Ⅳ		
198	丈		79	SD625F 22-33	赤焼土器	坏	底完形	外底	小			Ⅳ		
199	丈	107	523	SG200	須恵器	坏	半完形	外体	小		5	Ⅳ	擦 . 渋 煤	
200	王 □□	238	574	Ⅲ 42-41	須恵器	坏	半完形	外底 外体	小	濃 淡		Ⅲ - Ⅳ	墨	硯・習字
201	王		72	SD625F 22-37	須恵器	高台坏	底片	外底	小			Ⅲ - Ⅳ		
202	王		73	SD625F 22-37	須恵器	坏	底完形	外底	中			Ⅲ - Ⅳ	墨	硯
203	王		74	SD625F 22-32	須恵器	蓋	半完形	外体	小			Ⅱ - Ⅲ		
204	王	105	522	SG200	須恵器	坏	底片	外底	小		12	Ⅱ - Ⅲ	渋	
205	王		185	SD377F1	須恵器	坏	底完形	外底	中			Ⅱ		
206	王		186	SD377F1	須恵器	坏	底片	外底	中			Ⅱ	煤	
207	王	141	505	SD377F1	須恵器	坏	半完形	外底	大		169	Ⅲ - Ⅳ		
208	王	152	506	SD377	須恵器	坏	半完形	外底	大		94	Ⅱ - Ⅲ		
209	王		275	Ⅲ 42-40	須恵器	坏	底片	外底	小			Ⅱ - Ⅲ	渋	
210	王		276	Ⅲ 35-40	須恵器	坏	底片	外底	小			Ⅱ	擦	
211	王	240	575	Ⅲ 31-44	内黒土器	坏		外底	中			Ⅱ		印刻
212	王	237	576	38-35	須恵器	蓋	半完形	外体	小			Ⅱ - Ⅲ	墨	硯
213	王		205	SD377	須恵器	坏	底完形	外底	小		147	Ⅲ		
214	王𠂉	144	508	SD377F2	須恵器	坏	半完形	外底	小		183	Ⅳ		
215	善		88	SD625F 22-37	須恵器	坏	底片	外底	中			Ⅳ		
216	善	109	524	SG200	須恵器	坏	底片	外底	中		402	Ⅳ		
217	善	149	507	SD377F1	須恵器	坏	半完形	外底	中		170	Ⅳ		
218	善		279	Ⅲ 42-41	須恵器	坏	底片	外底	中			Ⅲ		
219	善		204	SD	須恵器	坏	底完形	外底	中		141	Ⅲ - Ⅳ	擦 . 煤	
220	善		326	X-0	須恵器	坏	底片	外底	中			Ⅲ - Ⅳ	渋	
221	主	199	565	SD625F2	須恵器	坏	底片	外底	小		390	Ⅲ - Ⅳ	渋	
222	主		285	Ⅲ 32-42	須恵器	高台坏	底完形	外底	小			Ⅲ - Ⅳ	擦	
223	貞		271	Ⅲ 42-34	須恵器	坏	底片	外底	中			Ⅲ - Ⅳ		未掲実測
224	貞		272	Ⅲ 32-44	赤焼土器	坏	底片	外底	中			Ⅳ		
225	毛		84	SD625F1	須恵器	坏	底片	外底	中			Ⅲ - Ⅳ	渋	
226	毛	110	521	SG200	須恵器	坏	半完形	外底	中		33	Ⅳ	渋	
227	石		82	SD625F2 21-36	須恵器	坏	底片	外底	大			Ⅳ		
228	石	192	559	SD625F1	須恵器	坏	完形	外底	大		272	Ⅲ - Ⅳ	漆	
229	石 石	191	560	SD625F1	須恵器	坏	半完形	外底 内底	大	濃 濃	276	Ⅲ - Ⅳ		
230	石		309	Ⅲ 32-42	須恵器	高台坏	底片	外底	中			Ⅲ - Ⅳ	渋	
231	石		290	Ⅲ 33-43	須恵器	高台坏	底片	外底	大			Ⅲ - Ⅳ		
232	西		81	SD625F1	須恵器	坏	底片	外底	中			Ⅳ		刻 未掲実測
233	西		192	SD377F1 34-42	須恵器	坏	半完形	外底	中			Ⅲ - Ⅳ	擦 . 渋	
234	山		194	SD377	須恵器	坏	底完形	外底	大		95	Ⅲ	擦 . 渋 煤	
235	山□	95	573	SK901	須恵器	坏	底片	外底	小	淡	494	Ⅲ - Ⅳ		
236	一		91	SD625F1	内黒土器	高台坏	底完形	外底	中			Ⅲ		
237	一	226	568	SD625F2	赤焼土器	皿	底完形	外底	中		303	Ⅲ		
238	一	227	569	SD625F2	赤焼土器	皿	半完形	外底	中			Ⅲ	煤	
239	一	200	570	SD625F1	須恵器	坏	底完形	外体	中		257	Ⅳ	渋	
240	五	117	526	SG200	赤焼土器	坏	半完形	外底	大		400	Ⅱ		
241	七 □	194	567	SD625F2	須恵器	坏	底片	外体 外底	中	濃 濃	368	Ⅲ - Ⅳ	擦 . 渋	
242	八		227	SG200F2	須恵器	坏	底片	外底	大			Ⅰ - Ⅱ	擦 . 渋	
243	八		228	SG200F2	須恵器	坏	底片	外底	大			Ⅲ		
244	八		229	SG200F1	須恵器	坏	底片	外底	中			Ⅱ		
245	八		230	SG200F2	須恵器	高台坏	底完形	外底	小			Ⅲ - Ⅳ		
246	八		231	SG200F2	須恵器	坏	底片	外底	大			Ⅱ		
247	八	121	527	SG200	内黒土器	坏	半完形	外底	中		10	Ⅲ - Ⅳ		
248	八		183	SD377F1	須恵器	坏	底完形	外底	大		201	Ⅱ		
249	八		184	SD377F1 35-39	須恵器	坏	底片	外底	大			Ⅳ		
250	百		90	SD625F2	須恵器	高台坏	底完形	外底	小		344	Ⅲ - Ⅳ	墨	硯 未掲実測
251	調所	111	515	SG200	須恵器	坏	半完形	外底	小		46	Ⅲ - Ⅳ	擦	
252	生仏	195	563	SD625	須恵器	坏	完形	外体	小		389	Ⅲ - Ⅳ	渋	
253	守		85	SD625F 22-36	須恵器	坏	底片	外底	小			Ⅱ - Ⅲ	擦	未掲実測
254	神		233	SG200F3	須恵器	坏	底片	外底	中			Ⅰ - Ⅱ		未掲実測

第９図　墨書土器釈文表（２）

	墨書字種 (釈文) ※1	報告番号 ※2	紀要番号 ※2	遺構番号 層位 グリッド	種　別	器種	残存率 ※3	墨書部位 ※8	字体規模 ※5	字体濃淡 ※5	ＲＰ番号	年代観 ※4	付着物 ※6	備　考 ※7
255	雀		280	Ⅲ 27-41	須恵器	坏	半完形	外底	小			Ⅲ - Ⅳ		未掲実測
256	継		232	SG200F2	須恵器	坏	半完形	外底	大		202	Ⅳ		未掲実測 SD377 合
257	米	106	520	SG200F1	須恵器	坏	半完形	外底	中			Ⅳ		
258	易		281	Ⅲ 34-42	須恵器	高台坏	底片	外底	中			Ⅲ - Ⅳ		未掲実測
259	甲		323	X-0	須恵器	坏	底片	外底	大			Ⅲ	擦	未掲実測
260	良		83	SD625F 22-32	須恵器	坏	底片	外体	大			Ⅳ	擦 . 渋	未掲実測
261	矢 矢		87	SD625F	須恵器	蓋	半完形	外体 摘	小	淡 淡		Ⅲ	墨	硯 未掲実測
262	有		293	Ⅲ 31-42	須恵器	坏	底片	外底	中			Ⅲ - Ⅳ		未掲実測
263	皿 □		218	SD377	赤焼土器	坏	底完形	外底 外体	中			Ⅲ - Ⅳ	墨	未掲実測
264	大	201	566	SD625F2	須恵器	坏	完形	外体	小		359	Ⅲ - Ⅳ	墨 . 渋	硯
265	亠		86	SD625F	須恵器	坏	底完形	外底	大			Ⅳ	渋	
266	尓※		282	Ⅲ 32-44	須恵器	坏	底片	外底	小			Ⅲ - Ⅳ		未掲実測
267	□ [尓ヵ] ※		207	SD377	須恵器	坏	底完形	外底	中		149	Ⅳ		
268	𠀑		187	SD377F1 33-42	須恵器	坏	底完形	外底	大			Ⅲ	渋	則天 未掲実測
269	𠀑		188	SD377	須恵器	坏	半完形	外底	大		135	Ⅲ	擦 . 渋 煤	則天
270	𠀑		273	Ⅲ 42-42	須恵器	坏	底完形	外底	大			Ⅲ		則天
271	𠀑		274	Ⅲ 33-42	須恵器	坏	底片	外底	大			Ⅲ	渋	則天
272	≋	158	509	SD377F1	内黒土器	坏	半完形	外底	小		179	Ⅱ		記号
273	□ [≋ヵ]		226	SD377F1	内黒土器	高台坏	底片	外底	中			Ⅱ		記号
274	ɮ ɮ	218	561	SD625F2	赤焼土器	坏	半完形	外底 外体	中	濃 濃	385	Ⅲ - Ⅳ		記号
275	ɮ ɮ	225	562	SD625F	赤焼土器	高台坏	底完形	外底 外体	大	淡 淡	375	Ⅱ - Ⅲ		記号
276	ɮ		68	SD625F 22-32	須恵器	坏	底片	外底	中			Ⅳ		記号
277	ɮ		69	SD625F 22-37	須恵器	坏	底片	外底	中			Ⅲ - Ⅳ	墨	記号
278	ɮ		70	SD625F 22-32	赤焼土器	坏	体部片	外体	大			不明	墨	記号
279	ɮ		71	SD625F	赤焼土器	坏	底片	外底	中			Ⅲ - Ⅳ		記号
280	☉		89	SD625F 22-35	須恵器	坏	底片	外底	小			Ⅲ - Ⅳ		記号 未掲実測
281	☉		289	Ⅲ 42-43	須恵器	坏	底完形	外底	中			Ⅳ	擦	記号
282	□ [☉ヵ]		106	SD625F	須恵器	坏	底片	外底	中			Ⅲ - Ⅳ	墨	記号・硯
283	∞		283	Ⅲ 35-40	須恵器	坏	底片	外底	中			Ⅳ		記号 未掲実測
284	×	232	578	SD640F1	赤焼土器	坏	完形	外底	中		473	Ⅳ	煤	印刻

※1　釈文のカギ括弧は破片で推定したもの。□は墨痕が薄いが判読したものを表す。
※2　報告番号は報告書番号を表す。紀要番号は本稿紀要番号を表す。
※3　残存率は底部を主に墨書の有無を判断するもので、完形は底体部ほぼ残存。半完形は底部残存体部一部欠損。底完形は底部残存体部欠損。底片は底部欠損を表す。
※4　年代観は「第２図土器変遷図」に従う。
※5　字体規模は墨書字体全体の相対的な大中小、字体濃淡は部位や字体複数の場合の相対的濃淡を表し、同一字種の場合は部位を表す。
※6　内面底部を主に明らかな付着物等を表し「墨」は墨汁、「漆」は漆、「煤」は煤、「渋」は渋状の付着物、「擦」は明瞭な摩滅痕跡等が認められるものを表す。
※7　「報告修正」は報告書修正図 (第７図)、「未掲実測」は未掲載墨書土器実測図 (第 12・13 図) を表す。硯は墨汁や擦痕跡等から明らかに転用硯と考えられるものを表す。
※8　外・内は外面・内面、底・体は底部・体部を表す。

第 10 図　墨書土器釈文表（３）

墨書字種	出土遺構							計	全字種数 ※1	全文字数 ※1	墨書部位※２					計 ※3
	ＳＤ 625	ＳＤ 377	ＳＧ 200	ＳＢ	ＳＥ ＳＫ	Ⅲ層他	その他				外底	外体	内底	内体	その他	
判読可能土器	137	56	22	2	4	59	5	285	67	54	247	58	4	3	4	316
判読不明 (□)	66	19	8	3		27		123			90	34	1	2		127
計	203	75	30	5	4	86	5	408			337	92	5	5	4	443
組成率 (%)	49.8	18.4	7.4	1.2	1.0	21.1	1.2	100			76.1	20.8	1.1	1.1	0.9	100

※1　全字種数は１文字や複数文字、記号も含めた文字の種類数を表し、全文字数は使用される文字 (漢字) や記号の数を表す。
※2　外・内は外面・内面を表し、底・体は底部・体部を表す。
※3　１個体に複数文字が、部位が異なり墨書されるため数量が異なる。

第 11 図　全墨書土器概要表

支出残高を記す公粮支給に関する記述も注目している。

先学の文献史から本遺跡主体の９世紀中～後葉の出羽国軍制を概観すれば、１戸正丁の 1/3 を徴兵した出羽軍団兵士 1,000 人 (弘仁六年〔815 年〕私糧、後番上粮８合 [穀・米] ／日) と、諸郡からの鎮兵 650 人 (長上粮１升６合 [穀・米] ／日)、弘仁年間に設置された健児 880 人 (列士：出挙稲健児糧料 5,8412 束 [穎稲] ／年) の計 2,530 人が公粮を支給される本来の主な兵力で１府２城 (秋田城・雄勝城) に配置されていた。

しかし、９世紀後葉の元慶の乱 (878 年) の翌年出羽権守藤原保則は「承前国司、无置一人」と上奏し、実際には同乱以前に「列兵」がほとんど置かれない状態が続いた事が窺える。

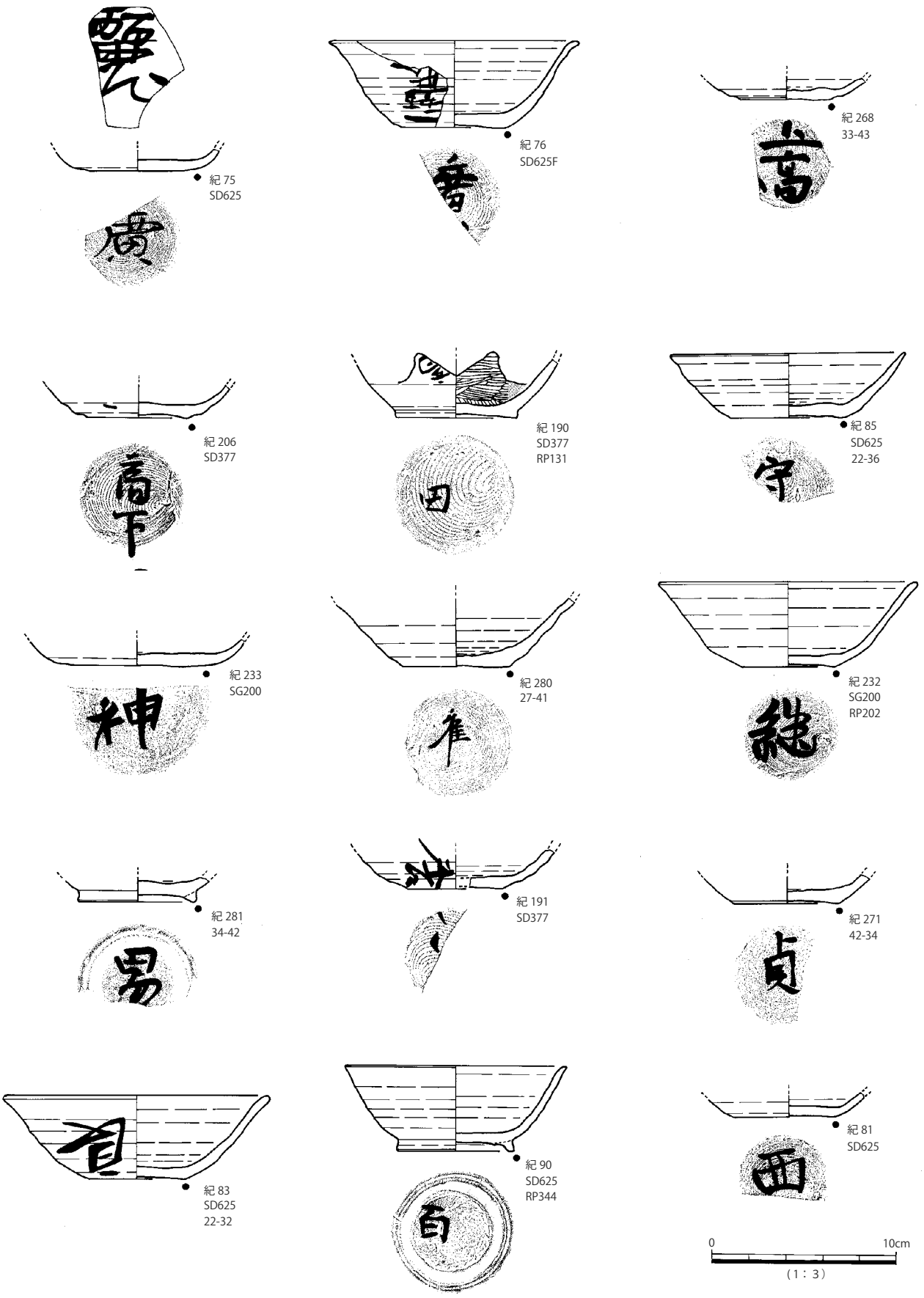
これら上記の木簡の存在は、本遺跡が木簡 (郡符木簡) の差出し、受取りに関わる遺跡か、それと同レベルの木簡が廃棄されうる遺跡と推測される。更に第２・３号木簡は、前述記事を勘案すれば、同乱前後の社会的緊張に起因する事も推測され、共伴する新相の土器群 (Ⅳ期) と対応するであろう。また、５斗１俵を基準とする公粮は、この木簡記載段階では既に舂米化され運搬に適した単位や状態で保管収納されていた可能性もあり、後述する倉庫の形態とも合わせ、報文で平川氏が指摘する「当時の役所 (性格不明) の一部」の可能性が強く窺える。

4　検出遺構の再検討

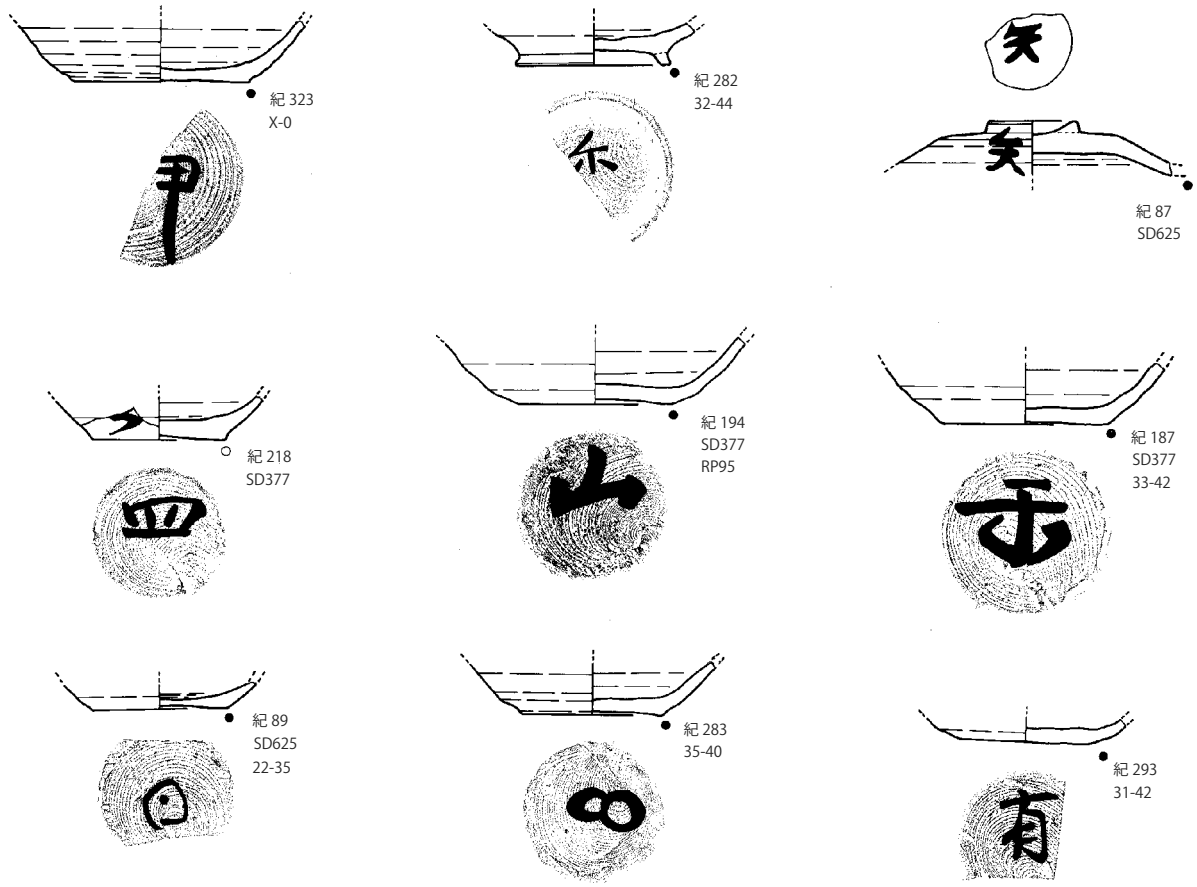
本遺跡では 10 棟[4)] の掘立柱建物跡 (以下、建物と記す) が検出され、一部３時期の重複関係もあるが「他の建物を含め (中略) より近接した年代での変遷」とし、「時期幅も９世紀内に納まる」ものとした。本遺跡は当該地域 (最上郡内) の一般集落に多く見られる竪穴住居 (1982 渋谷) がなく、建物跡だけで構成される。しかし、前述『山形県の官衙関連遺跡』では、文字関係資料が出土する遺物状況は官衙的様相を示すのに比べ、「遺構の規模、配置等に計画性はみられない」特徴を指摘する。

近年、本遺跡のある古代最上郡内の調査例の増加から遺跡相互の比較等が少しづつ可能になっている。本稿では総柱建物を高床倉庫と判断し、梁行に比して桁行が５間以上の長大な建物を所謂長舎建物と称し、本遺跡で特徴的な総柱建物 (ＳＢ２) や長舎建物 (ＳＢ３) の形態 (間尺) に注目した。そして、同郡内で面的な調査により上記建物が検出される遺跡を集成 (第１・18・19 図) し、主な遺跡 (限定された調査区で全体不明確を除く) の建物形態や構成等から分類 (第 15 ～ 17 図) を行い、建物形態と規模の比較分布図 (第 20 図) を作成した[5・6)]。

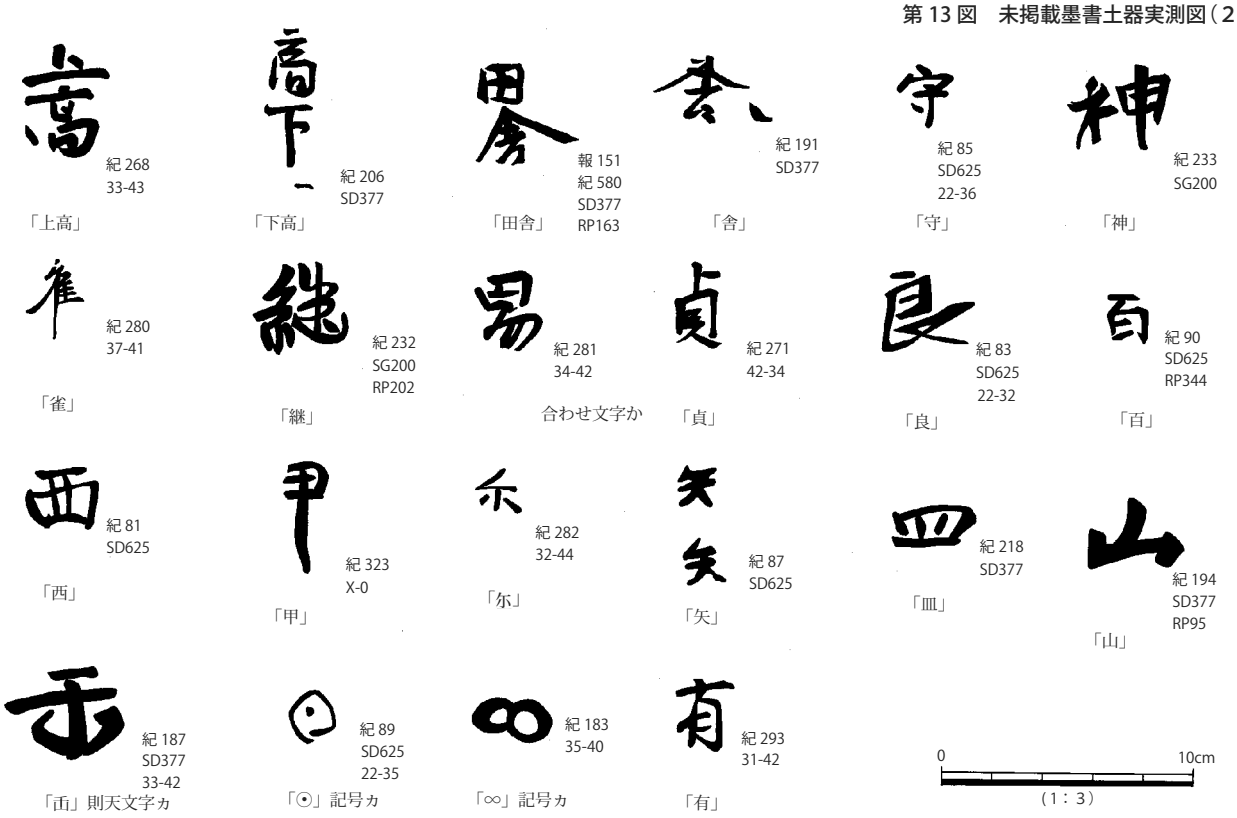
詳細は別稿に譲るが、同郡内では全体に総柱建物は２×２間の形態が一般的で、形態毎に規格性や集落構成等の相違等がみられた。以下に概略する。



第 12 図　未掲載墨書土器実測図（1）



第 13 図　未掲載墨書土器実測図（2）



第 14 図　未掲載墨書文字記号集成

Ａ総柱建物 (高床倉庫)　本遺跡では２×４間 (ＳＢ２) の中型の総柱建物 (Ａ１類：以下、倉庫と記す) が検出され、柱根や根固石や支柱痕等も確認された。同形態・規模の建物は中山町達磨寺遺跡のみに認められ、ＳＢ96 は全体に廂を持つ差異はあるが、規模的にはほぼ同規模の構造である。達磨寺遺跡は竪穴住居と併存する集落構成 (Ａ２類) が本遺跡と異なるが、石帯や灰釉陶器、鍛冶遺構等の官衙関連 (官人層) 的な様相を呈する。

他方、それ以外の倉庫とその遺跡を概観すれば、前述小型の２×２間の形態が一般的である。これらには、基本的には集落が建物跡 (倉庫群) で構成され (竪穴住居が併存するが立地が異なるもの含む：梅ノ木) ほぼ同規格の倉庫群が直列やＬ字形に並ぶもの (Ｂ類) があり、特に区画施設を有する一群 (境田Ｂ・吉原Ｉ・石田：Ｂ１類) 等もある。また、同形態ながら集落構成が竪穴住居等と併存し単体で検出されるもの (Ｃ類) がある。この中には、建物跡の性格上、時期幅の検討は要するが、集落が建物 (倉庫) 群に後続 (９世紀末葉) して竪穴住居に変移縮小するもの (漆山長表：Ｃ１類) や、併存し規格性が乏しい傾向のもの (一ノ坪：Ｃ２類) 等がある。他に大型のタイプ (Ｄ類) もあるが、瓦を焼成した窯跡との関連が窺える（第 18・19 図)。

Ｂ長舎建物跡　本遺跡の２×５間 (ＳＢ３) が相当し、同形態の検出は山形市成沢遺跡 (ＳＢ１・2) のみである。当遺跡は緑釉陶器等が出土し規模的にも大型である。長舎建物は , 県内では『山形県の官衙関連遺跡』でも基準にした官衙的な遺跡に多く、官衙主体部である「政庁」や「館」、実務機関の「曹司」的建物と考えられる。

5　まとめ

本稿では今塚遺跡の特に溝跡の墨書土器と特徴的な建物群について再検討を加えた。以下に本遺跡の遺構と遺物の変遷、当時の最上郡の様相を整理してまとめとする。

本遺跡の出現時期は、前述土器編年のＩ期 (８世紀後半～９世紀初頭) と考えられる。しかし、量的に微量で遺構は判然とせず、ＳＤ 377・640 の溝跡が認められる程度である。墨書土器は「神」等がやや後れて (９世紀初頭～前葉) 始めて散見される。周辺に古墳時代の有力遺跡があり在地勢力の成長が成因であろう。

Ｉ期は、出羽国で宝亀の乱 (778 年) が起こり、国府が秋田城から南下する段階 (延暦～弘仁年間) で、在地勢力の「復」(押切 2001) 等のため延暦 11(792) 年に最上郡の田租、弘仁２(811) 年に調庸が免除される。一方でこの時期は本遺跡で確認される郡雑任「郡書生」が郡毎に規定 (822 年) され、郡衙正倉の倉庫群を各郷毎等に分散 (795 年)、収穫した近辺に小院設置 (823 年) 等が規定される。これらは全体に律令的制度により在地勢力が拡充した可能性を示し、次期以降に増加する本遺跡の一因になろう。

Ⅱ期 (9 世紀前～中葉) から墨書土器の量が一定量散見され、「高」や「王」、「八」、「守」等の限られた字種に多い。ＳＢ１(「宅」) が本段階頃と推測される。

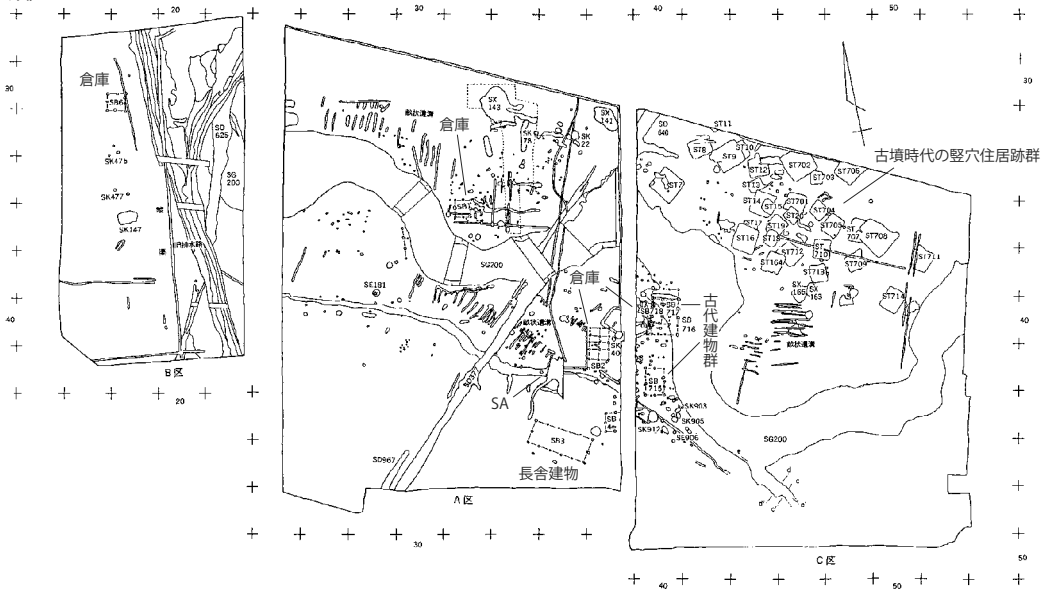
Ⅲ期 (９世紀中～後葉) から多様な墨書土器群の増加が認められ、本遺跡の主体を為す段階と捉えられる。建物もＳＢ６(「一麗」)・716 等で同時期の遺物が確認され、上記ＳＢ１とほぼ主軸を南北軸に取る建物群や倉庫群 (ＳＢ２他)、ＳＥ 181 井戸跡等がⅡ～Ⅲ段階で形成される。全体的にはＳＤ 377 溝跡も同様に当期で主体を為し、共伴する「調所」や「一等書生伴」もこの段階と考えられ、ＳＤ 967 の第１号木簡 (仁寿三年:853 年) が年代観を付与する。

Ⅱ～Ⅲ期は、当国で地震 (830・850 年) や飢饉 (841 年)、鳥海山噴火 (871 年) 等の自然災害が続発し、承和３(843) 年には倉庫内の調庸が欠け、「境接夷落」状態になる。これに行政は嘉祥 3(850) 年に租調の免除や、「倉廩」を開き (穀・穎の) 貸振、陰陽師の派遣依頼等で対処した。本遺跡の「調所」収納物もこれら災害に対応した事が推測され、本来蝦夷への夷禄等の「調」(穀・米) が、第２号木簡の兵士の食糧支給に変容した可能性がある。また、次期の陰陽道系と推測される「生・一麗」墨書土器群の祭祀も災害で困窮した社会背景の中で行われた事も考えられ、上記の関連が窺える。

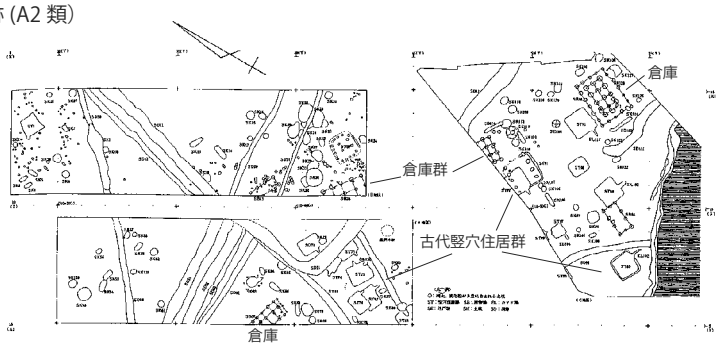
Ⅳ期 (9 世紀後葉) はⅢ期より新相で出土量はⅢ期と同様である。ＳＤ 625 溝跡はⅢ～Ⅳ期に主体的で祭祀も当期の所産であろう。ＳＤ 377 も同時期まで機能する事が窺え、「田宅」・「田舎」墨書土器も確認される。他建物群と主軸を異にする唯一のＳＢ３長舎建物はＳＤ 377 とほぼ直交し、全体の土器出土量等と勘案すれば新相の建物と考えられ、上記墨書土器の可能性もある。

Ⅳ期は本遺跡の最終段階に当たり、前期からの流れで

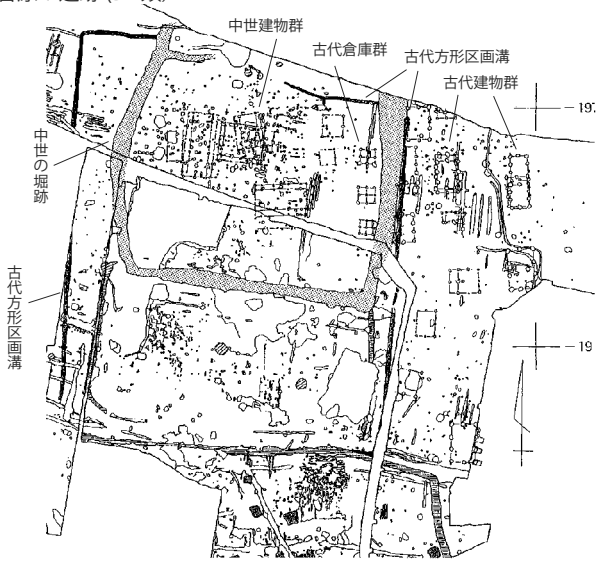
A類：２×４間総柱倉庫を有する遺跡
今塚遺跡 (A1 類)



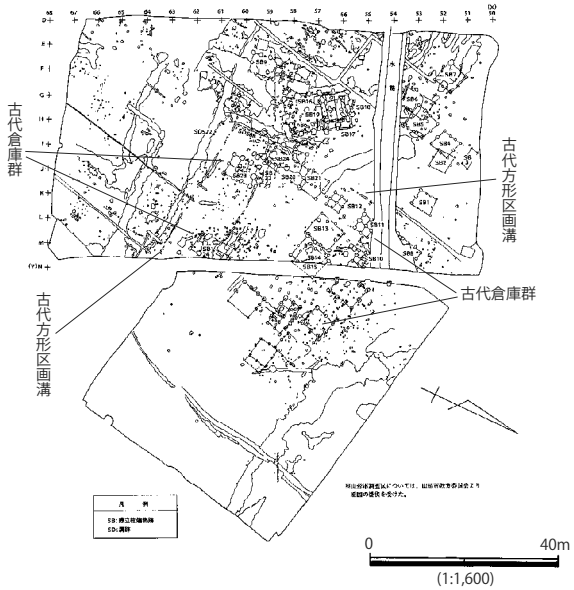
達磨寺遺跡 (A2 類)



B類：２×２間の総柱倉庫が列状にやＬ字型並ぶ遺跡
吉原Ⅰ遺跡 (B1 類)



石田遺跡 (B1 類)

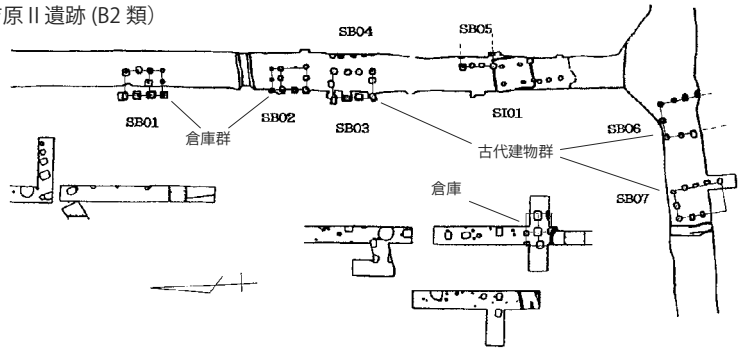


※　全て同スケール

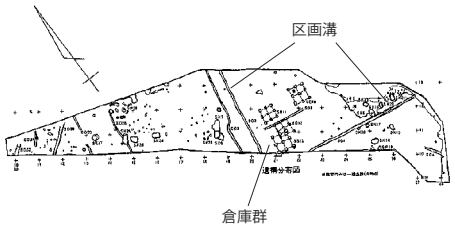
第 15 図　総柱建物（倉庫）を有する遺跡分類図（1）

B 類

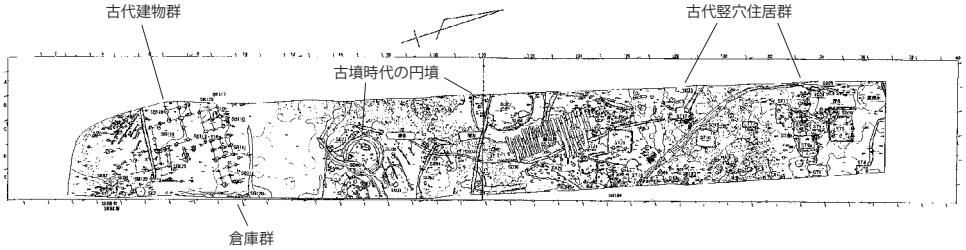
吉原 II 遺跡 (B2 類)



境田 B 遺跡 (B1 類)

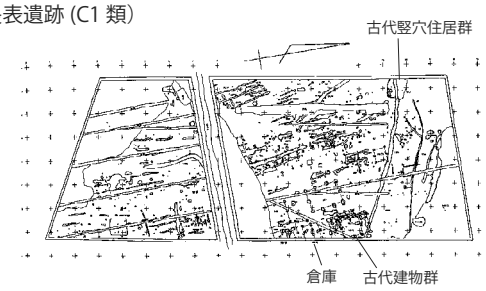


梅ノ木遺跡 (B2 類)

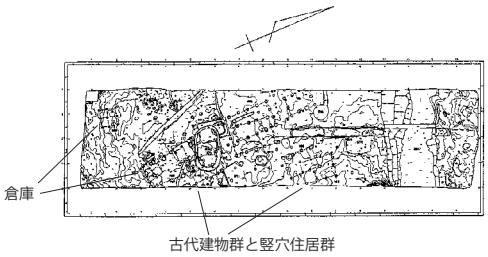


C 類：２×２間の倉庫が単体で検出される遺跡

漆山長表遺跡 (C1 類)

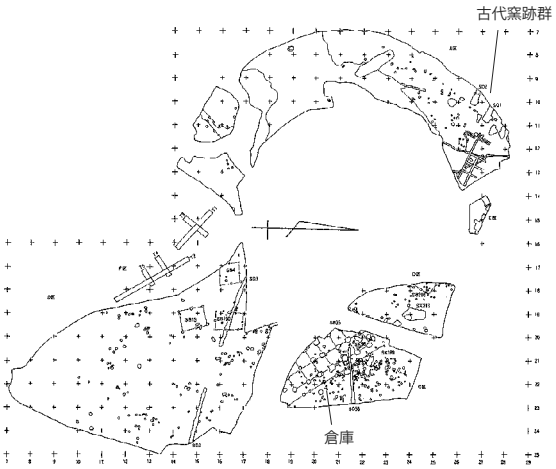


一ノ坪遺跡 (C2 類)

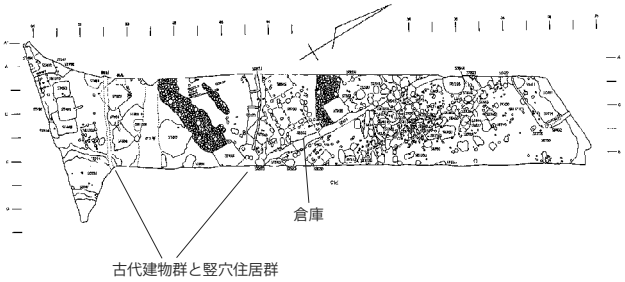


D 類：２×６間以上の大型の倉庫のある遺跡

オサヤズ窯跡

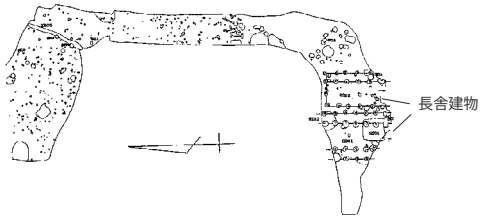


永源寺遺跡 (C1 類)



長舎建物のある遺跡

成沢遺跡

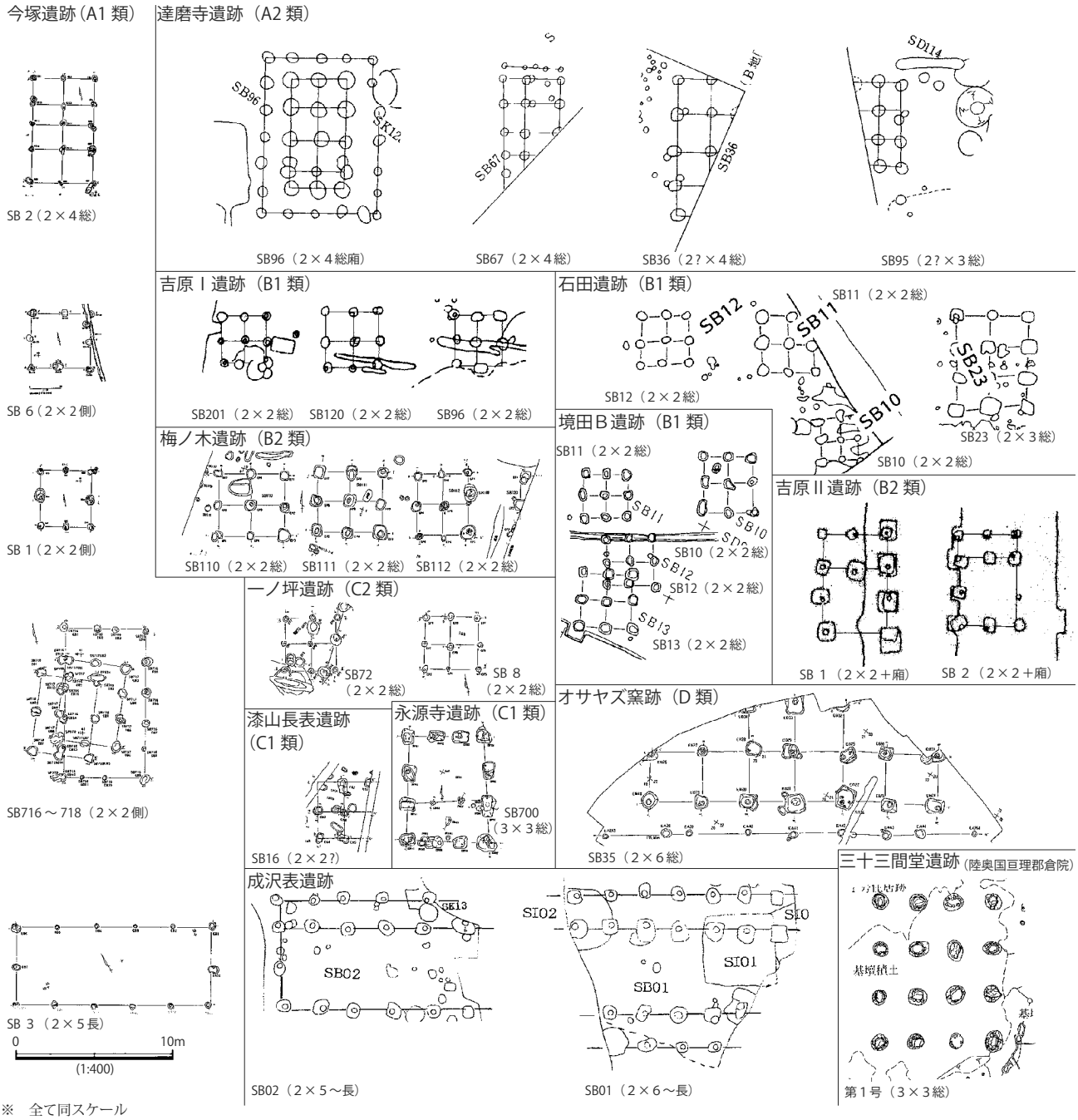


0　40m

(1:1,600)

※　全て同スケール

第 16 図　総柱建物（倉庫）・長舎建物を有する遺跡分類図（２）



※　全て同スケール

※　括弧内は、梁行×桁行、総・側柱建物を表す。

第 17 図　総柱建物（倉庫）・長舎建物の遺跡別平面図集成

遺跡名	集落構成	建物 NO.	間　尺	規模 (m) 梁行	規模 (m) 桁行	床面積 (㎡)	付　属 施設等	配　置 (他ＳＢ等)	建物方向 (磁北比)	主体時期	時期資料	備　考	報告書	年度
今塚	ＳＢのみ	SB716	３×５	5.2	9.6	49.9		並行	やや東傾	９Ｃ前～中	ＥＰ土器・溝土器	同上	センター	1994
		SB3	２×５	5.0	12.5	62.5		不規則	西傾	９Ｃ中	溝と直交方向			
成沢西	ＳＢ集中	SB1	２×６～	5.5	13.2	72.6	東西廂	併行	磁北	９Ｃ後	ＳＴ重複・緑釉	緑釉陶器出土	山形市	1998
		SB2	２×５～	5.2	11.7	60.8	東廂			～10C 前		※床面積は現存長	現説	

※１　ＳＢのみ：ＳＢ（掘立柱建物跡）だけで構成される遺跡、ＳＢ集中：ＳＴ（竪穴住居）も存在するが分布や時期に差異がある遺跡、SB・ST 共存：分布・時期的に並立する遺跡を表す。

※２　※印は、形態的（２×２間の等間尺等）に倉庫と判断されるが、側柱の建物を表す。「～」は調査区外に延び形態が不明なものを表す。

※３　建物の主体時期は、遺構の性格上判断が難しく、報告書を基に建物と重複・併行関係にある溝跡や竪穴住居、遺跡全体の土器群等から判断した。

※４　センター：山形県埋蔵文化財センター調査報告書、埋文：山形県埋蔵文化財調査報告書、山形市現説：山形市教育委員会現地説明会資料を表し、数字は報告書番号を表す。本表で引用文献に変える。

※５　Ａ類：２×４間総柱建物（倉庫）のある遺跡（Ａ１：ＳＢのみで構成される遺跡。Ａ２：ＳＢとＳＴが共存する遺跡）

Ｂ類：２×２間総柱建物（倉庫）を主体に直列やＬ字形に並ぶ遺跡（Ｂ１：区画施設等が認められる遺跡。Ｂ２：区画施設等が未検出な遺跡）

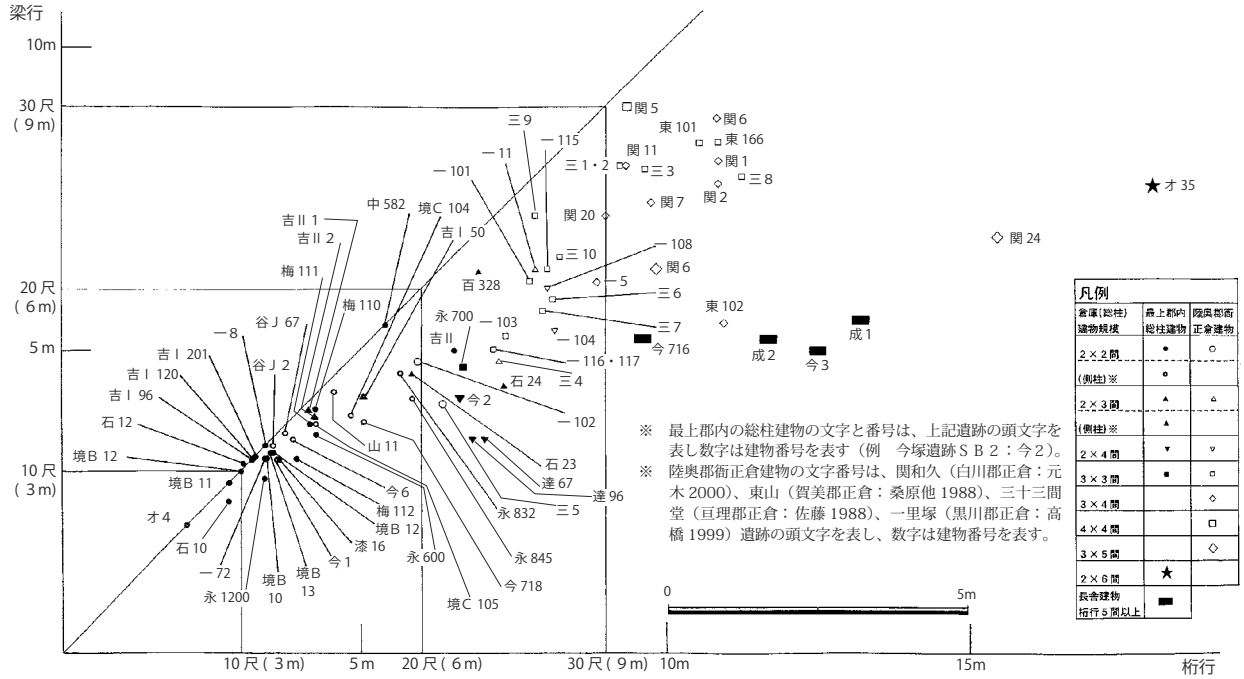
Ｃ類：２×２間総柱建物（倉庫）等を単体で検出する遺跡（Ｃ１：ＳＴもあるがＳＢの分布や時期が異なる遺跡。Ｃ２：ＳＢとＳＴが共存する遺跡。Ｃ３：調査区の制約から全体不明な遺跡）

Ｄ類：２×６間総柱建物（倉庫）等の特殊な大型倉庫を検出する遺跡

第 18 図　古代最上郡の長舎建物（側柱建物）の規模

遺跡名	集落構成 ※1	建物 NO.	形態 (間尺) ※2	規模 (m) 梁行	規模 (m) 桁行	床面積 (㎡)	付属施設他	配置 (主 SB 比)	SB 方向 (磁北)	主体時期 ※3	時期資料 ※3	備考	報告書 ※4	年度	分類 ※5
今塚	SB のみ	SB2	2×4	4.2	6.6	27.7		併行	やや東傾	9C 中～後	SB 方向・溝土器	郡符木簡・「調所」、「一等書生伴」等の墨書土器多数出土。	センター7	1994	A 1
		SB1	2×2※	3.6	3.3	11.9					EP 土器・SB 方向				
		SB6	2×2※	3.5	3.8	13.3									
		SB718	2×2※	5.0	3.8	19.0					SB 重複・SB 方向				
達磨寺	SB・ST 共存	SB96	2×4	3.5	6.8	23.8	総廂	併行	やや東傾	9C 中～後	ST 土器・SB 方向	石帯・灰釉陶器出土。鍛冶遺構多数検出。	埋文 104	1986	A 2
		SB67	2×4	3.5	7.0	24.5	東廂								
		SB36	2～×4		8.8										
		SB95	2～×3		5.2										
吉原 I	SB 集中	SB96	2×2	3.2	3.2	10.2		併行	ほぼ磁北	8C 末～9C 前	出土土器	方形区画溝 (約 80m) 有 SB96～201 の 3 棟直線等間隔で並ぶ。	山形市現説	1998	B 1
		SB120	2×2	3.2	3.2	10.2									
		SB201	2×2	3.2	3.2	10.2									
		SB50	2×2※	3.9	5.0	19.5	西廂								
石田	SB のみ	SB10	2×2	2.8	2.5	7.0		併行	ほぼ磁北	8C 末～9C 中	EP 土器・方向	方形区画溝 (約 55m) 有 SB10～12 L 字配置。SB23・24 並列配置。他に市教委調査実施。	センター現説	2000	B 1
		SB11	2×2	3.5	3.3	11.6									
		SB12	2×2	3.1	3.0	9.3									
		SB23	2×3	4.6	5.8	26.7									
		SB24	2×3	4.4	7.3	32.1									
境田 B	SB のみ	SB11	2×2	2.8	2.8	7.8		併行	磁北	8C 末	区画溝土器	区画溝 (約 25m～) 有り。SB10～13 L 字配置。SB12・13 重複関係。	埋文 111	1987	B 1
		SB13	2×2	3.3	3.5	11.6									
		SB10	2×2	3.2	3.4	10.9		併行	磁北	9C 前					
		SB12	2×2	3.0	3.0	9.0									
境田 C	SB のみ	SB104	2×2※	3.9	4.8	18.7		併行	磁北	9C 中～後	出土土器	2 棟が直線に並ぶ。付符木簡、風字硯出土	埋文 62	1982	B 2
		SB105	2×2※	3.8	4.2	16.0									
梅ノ木	SB 集中	SB110	2×2	4.0	4.2	16.8		併行	磁北	8C 末～9C 前	EP 土器・SB 方向	SB110～120 直線等間隔で 4 棟並ぶ。SB119 と L 字配置。8 世紀前～中葉 ST 有り	センター78	2000	B 2
		SB111	2×2	3.8	4.1	15.6									
		SB112	2×2	3.2	3.9	12.5									
		SB120	2×2～	3.4											
		SB119	2×2～	4.7											
吉原 II	SB 集中	SB1	2×2	4.0	4.1	16.4	南廂	併行	磁北	8C 末～9C 前	ST 重複・SB 方向	SB 1～4 同軸線上並ぶ SB 1・2 対面して廂付	山形市現説	1998	B 2
		SB2	2×2	3.9	4.2	16.4	北廂								
		SB4	2×2～	4.4			南北廂								
		SB	2×2	5.0	6.5	32.5									
漆山長表	SB 集中	SB119	2×2	3.3	3.6	11.9	西柱列	併行	磁北	8C 後～末	EP 土器・SB 方向	9 世紀後半 ST 有り	センター58	1998	C 1
永源寺	SB 集中	SB700	3×3※	4.8	6.6	31.7	南床束	併行	ほぼ磁北	9C 中～後	同軸溝跡土器・SB 方向	SB700 床束有り。SB700・832・845 が並列。ST → SB 併行。SB650・1200 方向異なり規模小、中世か。	センター86	2001	C 1
		SB832	2×2※	4.6	5.6	25.8									
		SB845	2×2※	4.2	5.8	24.4									
		SB650	2×2	3.6	4.2	15.1		不規則	やや西傾	不明					
		SB1200	2×2※	2.9	3.4	9.9			やや東傾						
一ノ坪	SB・ST 共存	SB8	2×2	3.4	3.4	11.6		不規則	やや東傾	9C 後	SB 方向	他 SB・ST 同軸方向。最終段階、大型 ST 移行	センター78	2000	C 2
		SB72	2×2	3.2	3.4	10.9		ほぼ併行	やや西傾	9C 前	ST 重複				
山形西高	SB 集中	SB11	2×2※	4.3	4.5	19.4		併行	ほぼ磁北	8C 末～9C 前	出土土器	ST 主体で SB 集中域有り	県現説	1997	C 2
谷柏 J	SB・ST 共存	SB2	2×2※	3.3	3.5	11.6		不規則	やや東傾	8C 末～9C 初	EP 土器	小型 SB 多い。中世遺構有り。	センター96	2002	C 2
		SB67	2×2※	3.6	3.7	13.3		ほぼ併行	ほぼ磁北	9C 後	河川土器				
百目鬼	SB・ST 共存	SB325	2×3※	3.2	5.3	17.0		不規則	東傾	9C 後～10C 初	出土土器	SB325～327 は一部柱穴欠落し、方向散在	センター96	2002	C 2
		SB326	2×3※	4.9	6.0	29.4			ほぼ磁北						
		SB327	2×3※	4.8	6.3	30.2			東傾						
		SB328	2×3	6.3	6.9	43.5			ほぼ磁北						
中袋	SB のみ	SB582	2×2	4.2	4.4	18.5		不規則	やや西傾	9C 後～10C 初	グリッド土器	石帯・灰釉・硯・溝跡	センター97	2002	C 3
樋渡	SB のみ	SB95	2×3※	4.1	4.3	17.6		不明	やや東傾	9C 後	出土土器	SB 一部柱穴欠落。緑釉	センター96	2002	C 3
オサヤズ窯跡	SB のみ	SB4	2×2※	2.1	2.1	4.4		不規則	ほぼ磁北	不明	瓦出土出土土器	瓦窯跡検出。中世遺物有り。	センター72	2000	D
		SB35	2×6	7.6	18.0	136.8	東柱列	併行	西傾	8C 末～9C 初					

第 19 図　古代最上郡の倉（総柱建物等）の形態と規模



第 20 図　総柱建物倉庫と長舎建物の形態比較図

元慶の乱(878年)が起こり、仁和3(886)年には最上郡が村山郡と分郡され、人口増加や田地開発に伴うものと推測される。本遺跡の最終末は概ねⅣ期以降、急激に希薄になり前述両溝跡の覆土に砂を含む事から河川の氾濫等による移転や廃棄が考えられる。

一方、本遺跡の具体的な性格は、一連の墨書土器や木簡等の遺物相、同郡内で単体で比較すれば特異な形態の総柱建物(倉庫)や長舎建物の遺構群等の構成から、報文でまとめた「一般農村と規定するよりは役所的な機能を備えた集落、或いは祭祀関連の集落」と捉えられる。

更に本稿の遺物再検討や隣国郡倉等の遺構群と比較した結果、『一般的な郡倉群よりは下位レベルで穀類(約千斛)[7]を収納した「役所(郡の特別倉庫：調所)的な機能を備えた」郡司以下の郡書生が複数活動し「祭祀」活動も行う官人層の「集落(居宅)」』と考えられる。

具体的な官人層は不明だが、「郡衙の出先機関(山中1994)」的な「調所」(倉庫)と「田宅」・「田舎」[8](居宅)を合わせ持つ存在の在地豪族で、墨書土器群にやや年代幅があり出土量が多い「高」に関わる人物と判断する。

最後に墨書土器の観察、釈文に当たって三上善孝氏、北野博司氏、村木志伸氏、齋藤俊一氏、伊藤邦弘氏、押切智紀氏に御協力、御指導を得た。また本稿を作成するにあたり佐藤庄一氏、須賀井新人氏には多大な御指導を受けた。記して感謝を述べたい。

註

1) 「報」は報告書の遺物番号、「紀」は紀要番号を表す。
2) 報告書の土層断面等から一連のものと判断される。
3) 押切智紀氏の御教示による。
4) 報告書では明らかな建物として9棟としたが、ＳＢ3の北西、ほぼ同方向の全て礎板を持つ3基（ＳＰ43他）の柱穴からなる建物の可能性もある柱列（ＳＡ）が検出されている（第15図）。
5) 側柱建物でも2×2間等の方形形態を倉庫として抽出した。
6) 特に総柱建物は所謂郡倉との比較から隣国陸奥国の主な郡倉院と推定される遺跡の総柱建物（礎石含む）も併記した。
7) 村松恵司氏（松村1998）は文献史等との比較により床面積から収納量を指摘する。
8) 「田舎」は「城堡」で著名な『軍防令』東辺条の「堪営作者」義解に見え、土器年代は異なるが遺跡の性格上示唆的である。

引用文献

阿部明彦　1998「庄内平野の様相」『第24回古代城柵官衙遺跡検討会』
阿部明彦　1999「山形県の古代土器編年」『第25回古代城柵官衙遺跡検討会』
伊藤邦弘・植松暁彦　1999「山形県の官衙関連遺跡」『第25回古代城柵官衙遺跡検討会』
井上光貞他　1976『律令』岩波書店
植松暁彦　1997「庄内高瀬川と月光川流域の平安時代の集落変遷について」『山形考古第6巻』
岡田荘司　1994「陰陽道祭祀の成立と展開」『平安時代の国家と祭祀』　続群書類従完成会
尾形與典　1998『山形県内出土古代文字資料集成』山形県の古代文字資料を考える会
押切智紀他　1997「出羽国設置と米沢」『米沢市史』
押切智紀　2001『永源寺跡遺跡発掘調査報告書』(財)山形埋蔵文化財センター
柏倉亮吉他　1979「出羽国府の整備と郡衙制」『山形県史』　山形県
加藤稔他　1996『図説山形県の歴史』河出書房新社
金子裕之　1999「仏教道教の渡来と蕃神崇拝」『古代史の論点5』　小学館
北村優季　1997「律令国家と出羽国」山形考古学会発表要旨
木元元治他　2000「陸奥国南部各郡の資料　白河郡」『第26回城柵官衙遺跡検討会』
桑原滋郎他　1988『東山遺跡Ⅱ』宮城県多賀城跡調査研究所第12冊
佐藤庄一　1998『平野山古窯群跡第12地点遺跡第2次発掘調査報告書』(財)山形県埋蔵文化財センター
佐藤則之他　1988『亘理町三十三間堂遺跡』宮城県教育委員会第27集
佐藤信　1977『日本古代の官都と木簡』吉川弘文館
渋谷孝雄　1982『境田C遺跡発掘調査報告書』山形県埋蔵文化財調査報告書第62集
須賀井新人・植松暁彦　1994『今塚遺跡発掘調査報告書』(財)山形県埋蔵文化財センター第7集
高橋栄一他　1999『一里塚遺跡第44・47次発掘調査報告書』宮城県教育委員会第179集
仲野博他　1999『古代出羽文献・出土文字資料集稿』東北芸術工科大学歴史遺産研究協議会
平川南　2000『墨書土器の研究』吉川弘文館
松村恵司　1998「正倉の存在形態と機能」『古代の稲倉と村落・郷里の支配』奈良国立文化財研究所
水野正好　1997「都市と流行する病（1)」『信仰関連遺跡調査課程』　奈良国立文化財研究所埋蔵文化財センター
山中敏史他　1998『律令国家の地方末端支配機構をめぐって』奈良国立文化財研究所
山中敏史　1994『古代地方官衙遺跡の研究』株式会社塙書房
横山昭男他　1998『山形県の歴史』山川出版社

遊佐荘大楯遺跡の成立

山口　博之

1　はじめに

山形県は現在一つの行政区分で成立しているものの、その内部は独立的な、四つの地域から成る。すなわち、「置賜」「村山」「最上」そして大楯遺跡の所在する「庄内」である。その地理的状況は、日本海に面する「庄内」と、内陸地方であるそれ以外の三地域に二分される。庄内地方は、最上川の河口に展開する庄内平野と、北には鳥海山、南には摩耶山、金峰山、東には月山がそびえ立ち、西側は海岸砂丘で閉ざされる。海岸砂丘は35㎞にも及び、江戸期からの植林により、松林となっている。これらの障壁に囲まれて、南北を長軸とする細長い平野として庄内平野は存在する。南北55㎞、東西幅は最北部遊佐町付近では約3㎞、南部鶴岡市付近では約25㎞に達する。この南北約北西約30㎞の海上には、山形県のただ一つの離島である「飛島」が浮かぶ。大楯遺跡の所在する遊佐町は、庄内平野の北側、鳥海山に境を接する辺りに位置している。

図1は、大楯遺跡の位置を列島の中で表現したものであるが、この図に拠りながら庄内地方と大楯遺跡の地理的位置を、古代中世という時期設定で概観すれば次のようになろう。当地から北側に500㎞付近には、中世の交易拠点である余市大川遺跡・上ノ国勝山館・志海苔館が所在する。この地域から札幌にかけては9～10世紀代には須恵器がより南の地域から持ち込まれ、活発な交易が行われていたことが知られている。同じく南側には敦賀・平安京が位置する。古代出羽国とこれらの都市の重要な関係は言うまでもないことである。1000㎞付近には北サハリン南端のユジノサハリンスク、西には渤海、南に釜山・博多・太宰府、同じく1500㎞付近には西に北京、南に上海が位置する。これらの都市の中には古代中世の出羽国に係わる史料の中にも度々姿をあらわすものが存在し、当地と歴史的関連性を有する重要な拠点であることは疑いない。こうした都市との関連性を保証するのは船運を中心とする海上交通である。

以上から明らかとなった地理的位置さらには交通の様相からすれば、ちょうど北海道の南部と、京都の中間地点に位置するこの地域は、日本海を仲介とした、交通の要衝という姿が浮上してくる。山形県遊佐町の奥羽山脈側小原田地区に所在する大楯遺跡は、こうした

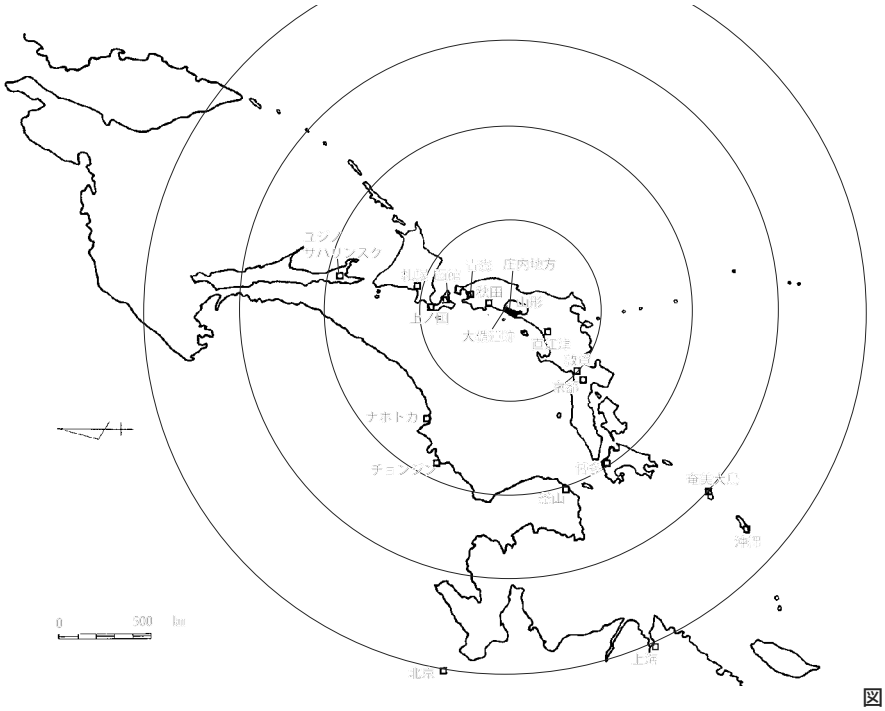


図1　大楯遺跡位置図

地域性の上に存在する東北を代表する鎌倉時代の遺跡である。本稿では、この大楯遺跡の成立過程を検証する。

大楯遺跡の研究の現況について概観すれば次のようになる。遺跡理解の基本となる発掘調査報告書は当然であるが、この他にも論稿が蓄積されている[1)]。伊藤邦弘、飯村均、八重樫忠郎は出土陶磁器の様相について考察している[2)]。伊藤邦弘、藤原良章、小松良博、岡陽一郎は当遺跡の歴史的様相について考察している[3)]。河野眞知郎は都市遺跡鎌倉との出土遺物についての比較を行っている[4)]。伊藤清郎は庄内地方の中世の様相を分析する中で、大楯遺跡の存在について触れている[5)]。さらに岡は、概括的ながら、大楯遺跡の景観について、本稿では十分取り扱わなかった時期について述べている。併せて参考にしていただきたい[6)]。これらの検討を通して大楯遺跡は、優秀な貿易陶磁器や国内産陶器の存在が特筆され、ミニ鎌倉とでも言うべき様相が見いだせること。鎌倉文化のショーウインドーとでも呼ぶべき遺物内容であることなどが考察され、東北の中世を考えるうえで看過できない遺跡のひとつであることが明らかとなってきた。

本稿では、大楯遺跡成立の様相について、庄内地方の古代の遺跡の様相から検討を開始し、その自然地理的要件、歴史的地理的要件、考古遺跡の時期的分布の検討、考古遺跡の類型化、文献史的検討を行い、庄内地方の古代の遺跡の立地と景観について、その時期的変化を整理する。さらにはこうした考古資料の分析から見いだされた庄内地方の古代から中世への変化を、大楯遺跡の成立という現象に収斂させ考察しようとするものである。また、吹浦湊を大楯遺跡の外港と位置付け、吹浦湊と海上交通の歴史的検討を行う。これらの作業を通して、大楯遺跡の立地する庄内地域の古代から中世へという変化を明らかにしたい[7)]。

こうした、論点に迫る研究としては、大阪府日置荘遺跡について考察した、鋤柄俊夫の一連の研究[8)]。石川県を中心とする北陸地方の初期荘園について考察した、吉岡康暢の一連の研究。北陸地方の古代集落遺跡の様相について明らかにした田嶋明人の研究。北陸の律令社会の様相について考古資料から考察した、宇野隆夫の研究などが存在する。本稿もかかる先行研究に導かれていることは言うまでもない[9)]。

2　庄内地方に見る遺跡群の自然地理的展開

大楯遺跡の成立を探るため、大楯遺跡の周辺に見る遺跡群の展開についての、地理的条件を整理してみよう。対象時期は、本稿に係わる８世紀以降の約 1300 年間を中心とするが、特に関係が深い時期は８世紀後半から 12 世紀後半である。

最初に当地域の現在までの地形の形成と遺跡を取り巻く現代の自然地理的環境を整理する。次に、庄内地方の自然地形のうち、河川などの水利に関係している潅漑の問題について、現在の水系の図幅から得られた情報をもとに整理し推定する。こうした作業を通して、遺跡群の展開と、地理的環境の相関を明らかとしたい。遺跡の存在は地理的条件と無縁ではあり得ないのは当然である。また砂丘の砂堆下や最上川河口に広がるデルタの下という、地表に顕在しない遺跡の存在には遺跡の立地を十分補足するために留意する。

（１）庄内平野の自然地理的環境

当地方は、最上川の河口に展開する海岸平野である庄内平野と離島「飛島」からなる。西部の海岸砂丘は「庄内砂丘」と呼ばれ、北は吹浦から南は湯野浜までの約 34 ㎞、東西は約 2.5 ㎞であり、途中いくつかの河川で切断されるものの、日本では鳥取砂丘に次ぐ規模を有している。

庄内平野は、基本的には最上川と赤川の堆積作用によって形成されたものであるが、古代中世に関係する地形の形成としては、最上川の流域に連ならない河川の作用も重要であった[10)]。当地域の河川の位置を現況で図示したのが図２である[11)]。日本海に開口する河川は現在４つを数える。北から「月光川」「日向川」「最上川」「赤川」である[12)]。このうち日向川・赤川の現河口は人工のものであり、長年に亙る洪水被害に鑑み、その防止のために放水路として改修されたものである。本来日本海に開口する河川は、「月光川」「日向川」「最上川」の３河川である。これら３つの河川とその支流が当平野の形成には重要であった[13)]。

（２）庄内平野の河川と潅漑流域の推定

当地では潅漑水源はとくに河川に依存する。用水の管理と土地の支配が一体となって展開して可能性が高い。このような観点から、各河川の流域の様相につい

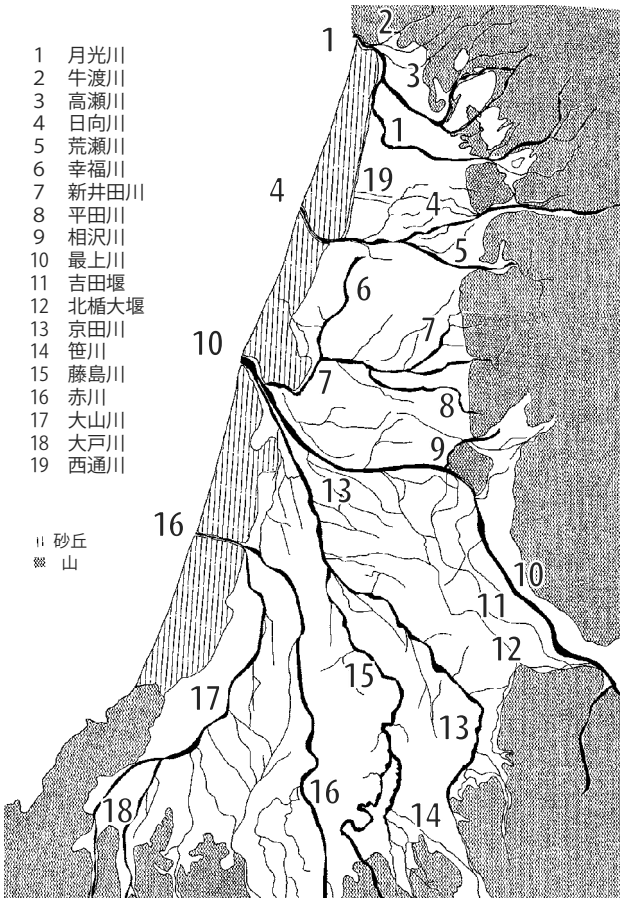


図２　庄内地方各河川位置図

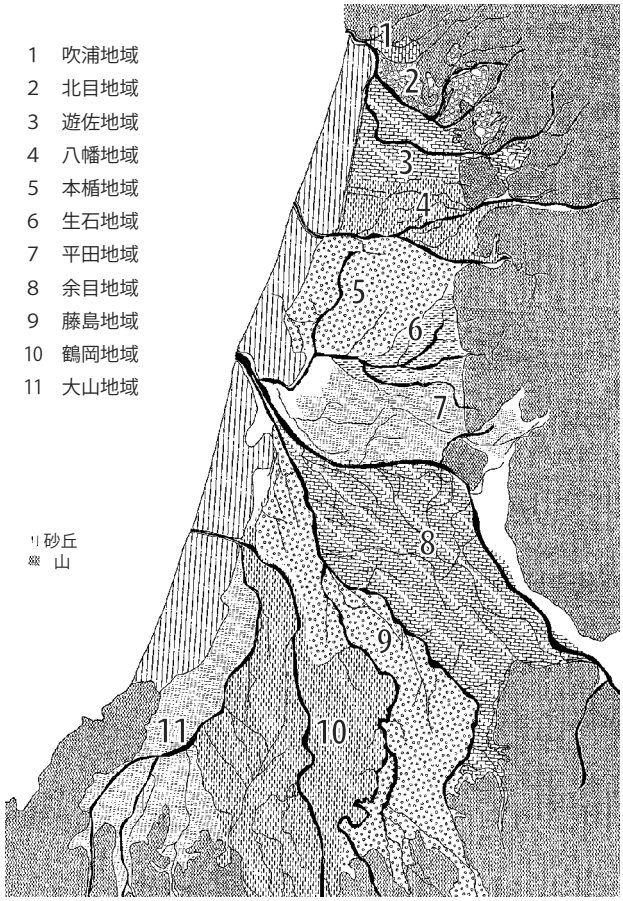


図３　庄内地方各河川流域推定図

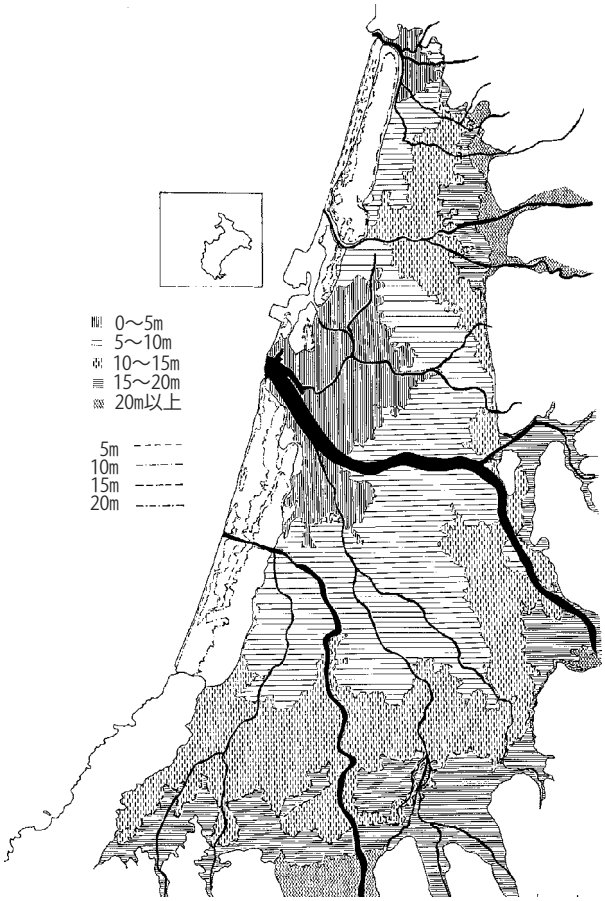


図４　庄内平野標高分布図

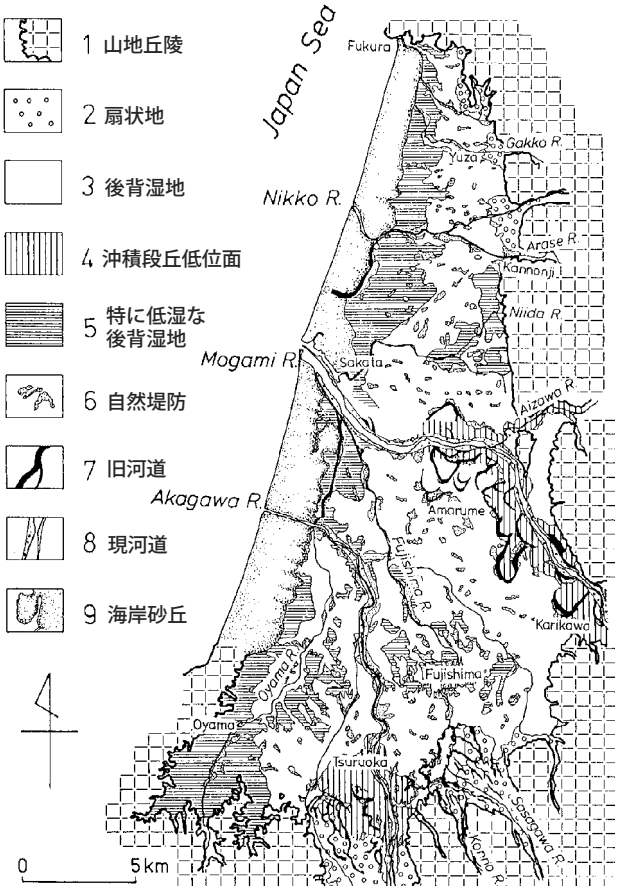


図５　庄内平野の微地形分類図（有賀 1984）

て図化したのが図３である[14]。河川はそれぞれに流域を作出し、流域は水利権を作出し、各河川が地域の管理権を離れ国の管理下となった現在でも、各河川や潅漑用水ごとに土地改良区の慣行水利権などの形で遺存している。こうした水利の関係を整理することは、土地の開発の様相を整理することにつながり重要である。この図から、いくつかの潅漑流域を推定する事ができる。各地域の代表的地区名をその地域名と見て整理すれば、北から「１、吹浦地域」、「２、北目地域」、「３、遊佐地域」、「４、八幡地域」、「５、本楯地域」、「６、生石地域」、「７、平田地域」、「８、余目地域」、「９、藤島地域」、「10、鶴岡地域」、「11、大山地域」となる。これらの地域は用水の管理上からは、それぞれ独立的と見ることができる。在地勢力が用水の監理権を掌握する場合、この流域が一つの単位となろう。これに氾濫原やデルタ、砂丘などの地理的影響が組み合わされて在地勢力の影響範囲が形成されていたと見ることができる。

これら河川とその支流について、庄内平野の北側から概観する。月光川は鳥海山に源を発する河川であり、支流には「高瀬川」「牛渡川」などを持ち、その流域は遊佐町の北半を中心とする。さらにその北半には、月光川の支流ではあるものの、独立的に流域を形成する、「牛渡川」流域も存在する。これより南の地域最上川の河道までの間には、日向川、新井田川がある。日向川は「荒瀬川」を支流に持ち、新井田川の支流には「矢流川」、「平田川」、「幸福川」がある。最上川の河道より南の地域では、「京田川」、「赤川」、「大山川」がある。京田川はその支流として、「藤島川」「今野川」を持つ。赤川は当地方の南半の地形形成に大きな役割を果たした河川であり、いくつもの支流を持っている。大山川も西側の地形の形成には重要であり「大戸川」などの支流を持つ[15]。以上庄内平野の河川と流域について整理した。さらに中世遊佐荘の地理的景観の成立について整理するために、庄内平野の形成史と、庄内砂丘の形成史について検討する。

（３）庄内平野と砂丘の形成史について

庄内平野や庄内砂丘の形成史に論究した論文は蓄積が大きいが、ここでは有賀友子、角田清美、阿子島功の論功に拠りながら、庄内平野の地形の形成時期と砂丘の活動時期について整理してみたい[16]。有賀は庄内平野の形成史を整理している（図５）。同氏によれば、約 4,000yB.P. には、現在の海水準とほぼ同じ高さに位置し、本稿に関係する、約 1,200yB.P. では、海岸砂丘は形成され、扇状地の形成も安定し、各河川は沖積面を下刻する傾向にあるという[17]。基本的には現在の地形の形成をこの時代までに溯って見ることが出来ることになり、本稿に関連する時期では、ほとんど現況地形と相違がないと見ることができる。阿子島功も、砂丘より内側の低地は、起伏とも、およそ変化がないと見ている。

角田清美は各砂丘の形態と分布を検討している。同氏に拠れば、砂丘は５つの砂丘列に別れそれぞれが時間差を持って成立しているという。砂丘内には考古遺物を含む場合のある「クロスナ層」が３層形成され、砂丘形成の休止期に発達する古土壌である。「クロスナⅠ～Ⅲ層」の成立時期は、それぞれ、4000 年以前、3500 年から 1500 年～ 1000 年以前、16 世紀代となるという[18]。本稿に関連する時期について注目すれば、クロスナⅡ層が重要であり、本地層が堆積すると考えられるほぼ古墳時代から奈良・平安時代の期間は、砂丘の活動に静穏な様相が伺うことができる。16 世紀代戦国時代頃には、これまた静穏な時期が見られるということになろう。これ以降、17 世紀にはまた砂丘の活動が活発化する。当時ここを訪れた橘南谿の『東遊記』には、飛砂の激しさが綴られている。以上「クロスナ層」の様相からすれば、当地には砂丘の活動が活発な時期と、静穏な時期とが時期差を持って存在していることになる。

地形の状況は、最上川よりも北岸の平坦で低湿地にかからない土地は、出羽丘陵側に沿って細長く伸びている（図４・５）。開発に適した土地は限られ、川南の地域の方が低湿地にかからない土地が多い。とくに遊佐の南部から、酒田にかけての砂丘の内側は低湿であり、この地域では自然堤防の高まりを除いては遺跡が構えられることはない（図５・６）。川南旧赤川の最上川との合流点付近も同様である。砂丘の東側には、最上川以北以南を問わず、広く後背湿地が分布する状況である。特に低湿な後背湿地や後背湿地を除いた部分というのは、平野部ではわずかであり、開発地として適切な箇所は少ない状況が見て取れる。川北の飽海郡ではこの傾向は著しい。低湿な後背湿地の中に島状に点

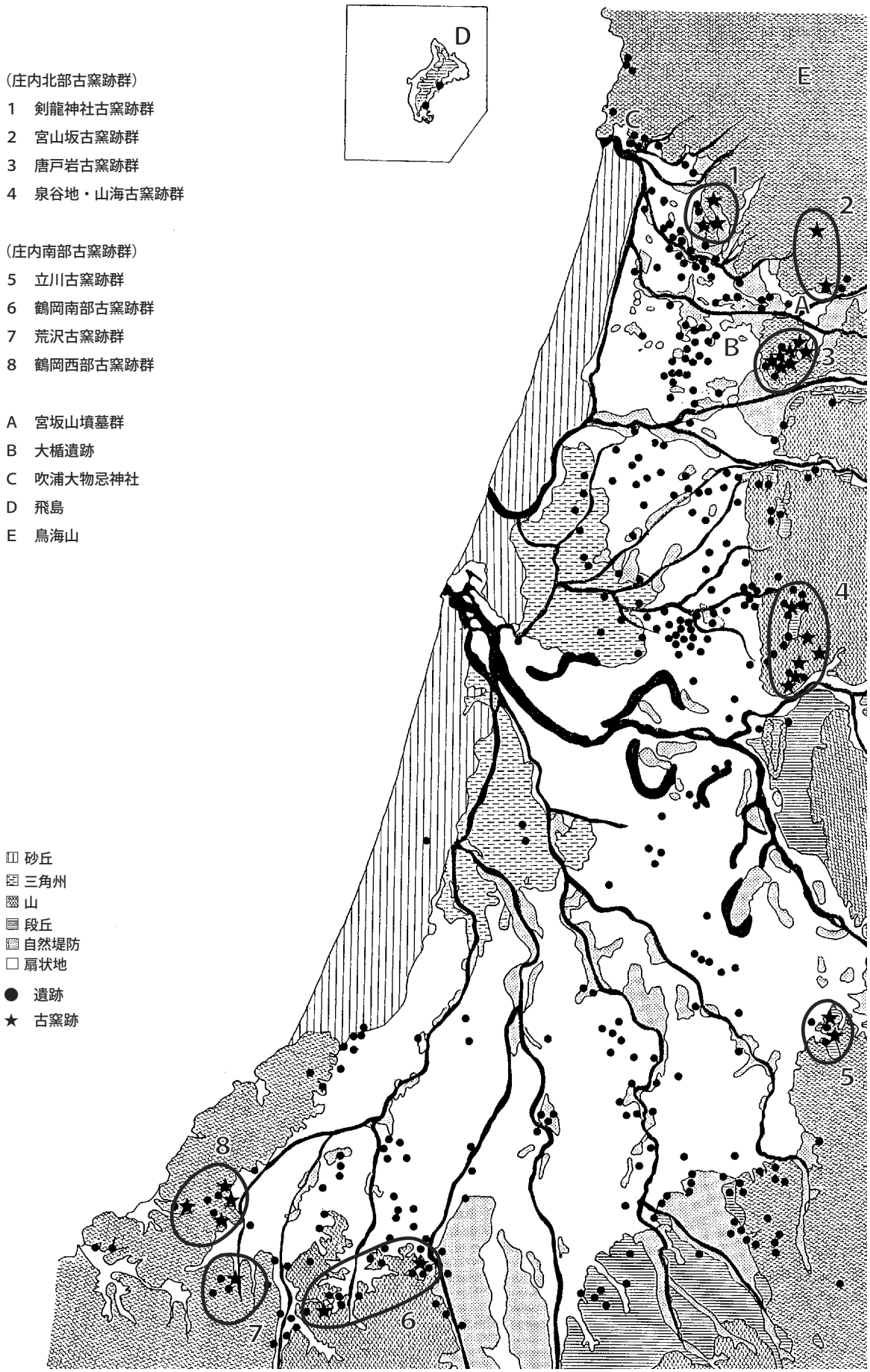


図６　庄内地方古代遺跡分布図

在する自然堤防の存在は遺跡の立地上重要である。このような、地理的環境を理解しつつ、本稿では、米地文夫、阿子島功の作製した庄内平野の図と大正２年測図から基本図を作製し、遺跡の分布を検討することにする[19]。

（４）砂丘下や特に低湿な後背湿地に営まれる遺跡

遺跡の分布状況を詳細にするために、砂や土壌の堆積下に存在する可能性のある遺跡の展開を検討する。砂丘下の「クロスナ層」に形成された遺跡と、特に低湿な土地に展開する遺跡について検討を加えたい。

砂堆の下から須恵器や土師器が得られている事例がいくつか知られている。佐々木七郎は酒田市黒森、鶴岡市七窪、鶴岡市三瀬宮の前の各遺跡から出土した弥生土器について報告している[20]。これらは天王山式の特徴を持ち弥生時代終末に位置付けられる。小野忍は、このうちの酒田市黒森遺跡からは、土師器や須恵器も出土していると報告している。これらは 1921 年～ 1927 年まで行われた赤川の河口を開削事業に伴い、砂丘を断ち割ったところ、砂丘下から現れた泥炭層から出土したものという[21]。角田はこの地層を「クロスナⅡ層」と見ている[22]。土師器は小野によれば、「回転糸切り痕を伴う内黒土師器坏である」ということから、この年代は当地域の土器編年に照らせば９世紀中葉を中心とした時期と考えられよう。９世紀代かそれ以前の遺跡は現在の砂丘下にも展開していることが想定出来る。

次に、特に低湿な後背湿地である、三角州の分布範囲から検出された遺跡について検討したい。このうち、家際遺跡、蛙橋遺跡、中谷地遺跡は発掘調査データが詳細である（表１）。３遺跡は、酒田市街地の北方に営まれるが、標高は 5m 以下（図４）であり、立地上はデルタとなる。家際遺跡からは、８世紀後半～９世紀代の土器群が出土している。蛙橋遺跡からは、９世紀中頃～後半の土器群とともに石帯が出土している。中谷地遺跡からは、８世紀中頃の土師器が出土し、下層からは弥生時代中期に比定される土器が出土している。デルタの堆積物のさらに下に遺跡群が展開することが予想された[23]。しかしながら、ここには幸福川が流下し自然堤防上に遺跡が営まれた可能性が見いだされる（図５）。

まとめれば、砂丘下の遺跡の存在を傍証する、「クロスナⅡ層」あるいは「クロスナⅢ層」の庄内砂丘内部における面的展開はいまだ明らかではない。このために、砂丘下の遺跡について分布図に加えることは出来ない。砂丘下に遺跡は存在し、それは砂丘活動が静穏な時期に営まれていたこと。その広がりや所在については現況では不明であることを確認しておくに止めざるを得ない。デルタに営まれた遺跡である、家際遺跡、蛙橋遺跡、中谷地遺跡の立地の周辺には、有賀の提示した図５によれば自然堤防の存在が表されている。これらの遺跡はデルタ中の微細な地形上の高まりを利用して営まれた可能性が高い。川南にも２遺跡ほどデルタ中に存在する遺跡を知ることが出来るが、これらも付近には低平な自然堤防の発達を見ることができ、同様に低平な自然堤防上に遺跡が営まれた可能性を指摘できる。デルタ下の遺跡は、自然堤防の存在に従って営まれるのであろう。また、地形的にも安定していることから、個別的状況には検討の余地を残すが、古代・中世の大量の遺跡が、河川堆積によって庄内平野に深く埋もれていることは、ほとんどないと言えるであろう[24]。

3　歴史地理的分析

歴史的に直接古代まで溯って当地域の様相を検討する史料には恵まれないため『正保絵図』に見える、近世初頭の村落配置・村落分布・河川・街道・湊について検討する。これを古代から中世にかかる、本稿の時期の分析定点として使用する[25]。また、当地域の地域的認識がいかに行なわれていたかということに関係して行基図などの古図をもとに検討する[26]。さらに、こうした検討に連なるこの地域地域の具体的な発達過程を地名から読み取ることもできため、特徴的地名にも論究する。これらの検討を通して中世遊佐荘大楯遺跡の成立について見通しを得たい。

（１）古代の政治的様相

古代の郡郷と国府の問題について、表２に従って簡単に整理しておきたい[27]。現在の行政区分の山形県を指すであろう古代の国名は出羽国である。出羽国建国にかかわる記事の初出は、越後国のより北方に突出した、現在の庄内地方のおそらく南部を割いて出羽郡を置くという、和銅元年（708）９月 28 日の記事であり「続日本紀」に載る。同時に出羽柵が置かれると考えられる。この和銅元年の時点で越後国とは別な行政単位としてこの地域の経営を行おうという意図が見える。５年後

の和銅五年（712）10月1日に『陸奥国最上・置賜二郡を割きて出羽国に隷せしむ』と「続日本紀」に見え、ここにほぼ現在の行政区分山形県の全域が出羽国として成立する[28]。現在の庄内地方とされる行政区分の地域が越後の延長として早くから独立的に経営され、後にそれ以外の地域、現在の置賜地方・村山地方・最上地方が陸奥国から分離され出羽国が創出されることは、庄内地方の経営が重要であったと見ることができる。さらに、出羽柵は庄内秋田と日本海側を移動を繰り返しながらも、山形県の内陸部には移動することはない。出羽国の開発の一つの中心がこの日本海沿いの地域にあったことは明白であり、この状況は古代を通して不変である。

国府は、『三代実録』仁和三年（887）の記事に『国府在井口』と見え、酒田市本楯に所在する「城ノ輪柵跡」がこれに当たると想定されている[29]。郡は「田川郡」「出羽郡」「飽海郡」の三郡が設けられており、それぞれ複数の郷から構成される[30]。古代「田川郡」は最上川よりも南のさらに南半の地域に想定されることが多い、『和名抄』では「田川郷」「甘禰郷」「新家郷」「那津郷」「大泉郷」の5郷で構成される。「出羽郡」は最上川よりも南の地域のさらに北半の地域に想定されることが多い。「大窪」「川辺」「井上」「太田」の4郷で構成される。この他に『和名抄』高山寺本には載らないものの、「余戸郷」の存在も加えれば5郷で構成されることになる。「飽海郡」は最上川よりも北の地域に想定されることが多い。『和名抄』では「大原郷」「飽海郷」「屋代郷」「秋田郷」「井手郷」「遊佐郷」の6郷から構成される。それぞれの訓や郡域、郷域については確定していない部分もまた多い。さらには郡衙、駅舎などの官衙遺跡の確定は行われていない。

（2）正保絵図に見る近世初頭の庄内地域

次に、『正保絵図』に拠りながら、近世初頭17世紀始めの村落配置、村落分布、河川、街道、湊について検討し、当地域の古代における、村落配置、村落分布、河川、街道、湊、条里遺構についての分析の定点とする。

致道博物館には『正保絵図』と呼ばれる史料が複数所蔵されている。著名なのは『出羽一国之絵図』と、庄内地方を描いた『庄内三郡絵図』の2本である。このうち、小稿では『庄内三郡絵図』（縦2.18m、横4.58m）を基本図として使用した[31]。同図輻は丁寧な彩色により、山々の景観、海岸の波濤に至るまで見事に描かれている。柏倉亮吉によれば『出羽一国之絵図』（縦11.08m、横5.09m）の作製は、図中にあらわされる領主の在任期間からして、正保元年（1644）から慶安元年（1648）の期間に限られるという[32]。『庄内三郡絵図』は正保国絵図に関係して編まれたものという[33]。『庄内三郡絵図』（以下『正保絵図』）の景観年代は『出羽一国之絵図』と同時期、正保元年から慶安元年頃と見ることができるという[34]。この図から、近世初頭の村落分布、河川、街道、湊について把握することができ、古代の様相への手がかりを得ることができる。

①正保絵図に見る近世初頭の村落分布と古代遺跡の数量比較

図7は『正保絵図』を図化したものである。この図から近世初頭の村落分布と古代遺跡との数量変化を比較検討したい。『角川地名大事典』によれば、当地域に存在する、3つの郡の村数は、「遊佐郡」が約140村で郡高は都合4万6、243、977石、「櫛引郡」が約180村で郡高は都合6万8829、114石、「田川郡」が約60村で郡高は2万6、882、037石となる。計算上は川北に対して川南の村数は約1.3倍となる[35]。村高を単純に計算した場合にも約2倍となり、川南の生産力は川北のそれを凌駕していたと見ることができる。しかし、川北と川南の平坦地の面積をこれまた単純に比較すれば、これも約2倍である。こうした理解からすれば、川南の方が面積当たりの村数は少ないことにもなる。同様に古代の遺跡数から検討すれば、川北の古代の遺跡の合計は約100箇所となり、川南の古代の遺跡の合計もまた約100箇所となる。両者の遺跡数の概数の比率は、川南；川北＝1；1となる。しかしながら、両者の平地面積の比率の概数は、川南；川北＝2；1となることから、川南の方が面積当たりの遺跡数は少ないことになる。こうしたことからすれば、古代以来、庄内地方の開発の中心は川北地域にあったことがわかる。

次に各流域ごとの数量変化を検討する。図6と図7を比較し、古代の遺跡数から近世初頭の村数の変化を把握すれば、吹浦地域では7→4、北目地域では15→6へ、遊佐地域では30→26へ、八幡地域では16→40へ、本楯地域では30→37へ、生石地域では18→17へ、平田地域では25→23へ、余目地域では17→37へ、藤島地域17→41へ、鶴岡地域では45→73へ、大山地域で

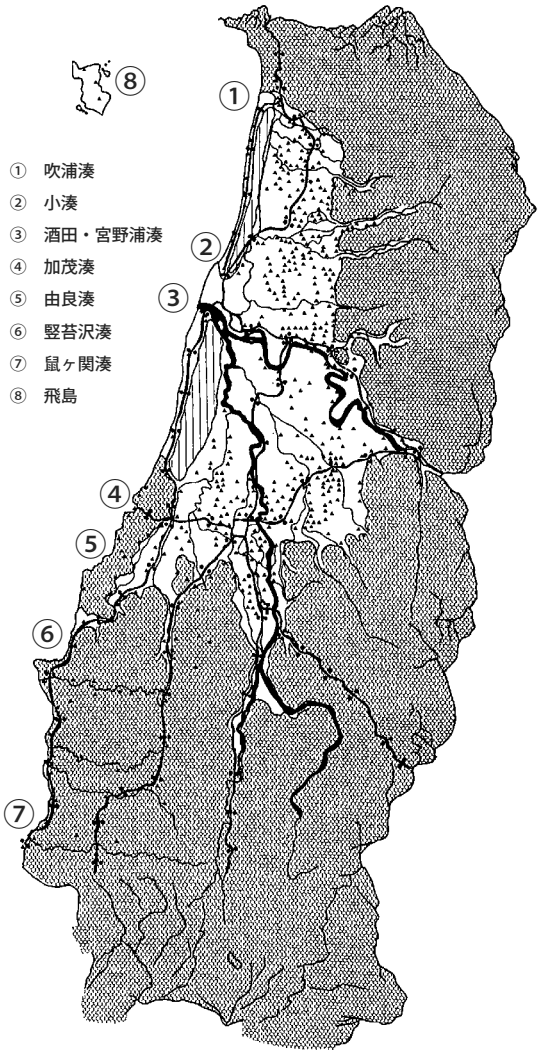


図７　庄内地方正保村落配置図

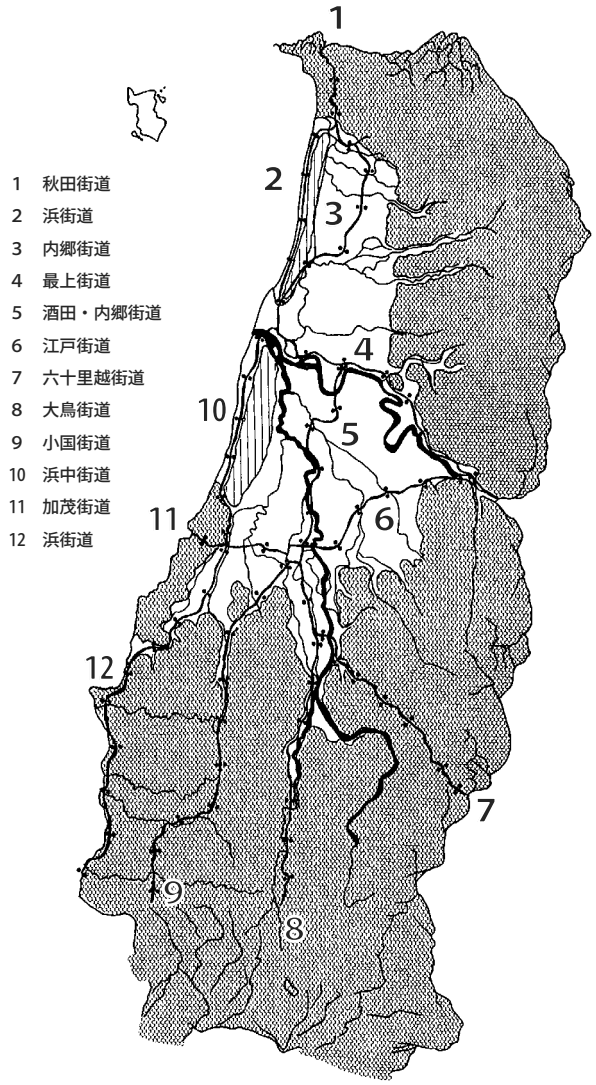


図８　庄内地方正保主要街道図

は 23 → 22 へとなる[36]。これらは３つの類型に分けることができる。類型Ⅰは、数量の変化がほとんどない地域であり、吹浦地域、遊佐地域、本楯地域、生石地域、平田地域、大山地域がこれに含まれる。類型Ⅱは、古代では少なく近世に入ると村数が増加した地域であり、八幡地域、余目地域、藤島地域、鶴岡地域がこれに含まれる。類型Ⅲは、古代では遺跡は多いが近世に入ると村数が減少した地域であり北目地域がこれに含まれる。

このうち後者の２つの類型に注目してみたい。『正保絵図』の段階では、類型Ⅱの八幡地域、余目地域、藤島地域のうち、八幡地域では古代遺跡の希薄な、荒瀬川と日向川との合流地区が開発され村立てが行なわれている。余目地域では全体として村が増加しているが、古代の遺跡と村位置はほとんど変化がない。藤島地域では、河川沿いの自然堤防上が遺跡立地の主体となっていたが、河川の間の地域にまで村立てが行なわれている。鶴岡地域でも同様に河川の間の地域にまで村立てが行なわれている。こうしたことからすれば、類型Ⅱの地域での開発は、低湿地や高燥地への開発であり、これは古代以降に中心的に行なわれていたことになる。しかしながら、日向川の砂丘へと突き当たる地域のような特に低湿な後背湿地や、現酒田市街地北部の特に低湿な後背湿地、赤川と藤島川合流地点付近の特に低湿な後背湿地などは、古代から通じて開発されることはなかった。また最上川の流路周辺の沖積段丘低位面も、一部に立地する自然堤防の高まりを除いては村として開発されることはなかった。次に注目する類型Ⅲの地域は北目地域だけである。古代にはこの地域は計画的に開発されていることがわかる。

まとめれば、古代以来、庄内地方の開発の中心は川

北地域にあったことがわかる。さらに古代では自然堤防の高まりなどに遺跡が立地していたものが、近世になって、用水に恵まれない地域の開発と、特に低湿な後背湿地に村立てが行なわれたことが判明する。

②地名から推定できる開発時期

庄内地方の集落の成立について、地名の検討から、特に低湿な後背湿地や、余目地域の開発が行なわれた時期を知ることもできる。

長井政太郎は庄内地方の開発を、地名の成立から歴史的に知ることができるという[37]。庄内地方に分布する「曾根」「京田」「興屋」「新田」地名は、それぞれ時期差をもって成立しているというのである。「曾根」は最上川の右岸飽海地域の存在し、もっとも古い開発地名であるという。「京田」は鶴岡市街地の北西方向と、月光川の自然堤防上に立地し、「興屋」や「新田」地名よりも古い開発を示すものという。「興屋」は慶長六年（1601）の史料にその存在を見いだすことができ、「新田」は元和九年（1623）に開発された酒田市北部の上藤塚新田を始めとし、明和九年（1769）の絵図には約30箇所を見いだすことができるという。さらに、それぞれは分布地域的に特徴があるという。「曾根」地名は酒田市街地東側の古代以来開発の進行した、新井田川流域の上田地域と平田地域とに存在し、「京田」地名、「興屋」地名も古代以来の立地景観を踏襲しているものと見ることができる。

先程の検討からすれば、近世の開発にかかる地名として注目すべきは、低地や高燥の土地に展開する新田地名である。この地名は川南では、大山川の庄内砂丘に沿った地域や、赤川との合流地域、京田川と赤川の合流地域の低地展開する。高燥の余目地域にも多くの分布を見ることができる。川北では最上川の流域に沿った地域、酒田市街地の北西方に広がる低地地域、遊佐から伸びる運河である西通川流域、遊佐地域に多い。

余目地域は古代以来遺跡の少ないところであり、開発には「北楯大堰」や「吉田堰」などによる水利の開発の必要であった事が知られている[38]。こうした潅漑施設が整備完成した近世になって始めて村立ても行なわれるようになったことが「新田」地名の分布からわかる。同様に酒田市街地の北西方に広がる低地地域、遊佐から伸びる運河である西通川流域も、特に低湿な後背湿地は中世までは開発が行なわれず、近世になって村立てが行なわれたことがわかる。遊佐周辺では、この段階までも開発の余地があったことも注目しておきたい。

③『正保絵図』にみる庄内地域の河川と水路

庄内地方の河川について、歴史的に見た開発と流路の変更について検討したい。庄内地方に於いては、最上川が最大の河川として知られ、そのほかにもいくつかの重要な河川が、地形の形成について役割を果たしたことについては先述した。これらの河川のうち、月光川、西通川、日向川、赤川そして、そのほかの、水路について図２に表示した[39]。庄内地方の河川のうち本来日本海に開口する河川は、「月光川」「日向川」「最上川」の３河川である。主な水路あるいは潅漑用水路として、西通川、北楯大堰、吉田堰、青竜寺川がある。最上川や赤川の重要性は繰り返すまでもない[40]。ここでは、日向川、月光川、西通川について、これらの名称の歴史的展開と、日向川河口の滞水状況について確認しておきたい。

最初に、日向川について検討する。この川は『正保絵図』では「日光川」と見え、『筆濃余理』には小湊川別名「日向川」とも記される川である[41]。勾配の急な山間地から、平坦地へと急に緩やかになる流れはいくたびも洪水を引き起こしている。このために、安政五年（1858）正月から新しい河口開削を起工し、文久二年（1862）に竣功している。現在の河口はこれにあたる。『佐藤藤蔵家文書出羽国飽海郡植付縁起』は、砂丘の植林を進めた佐藤藤蔵家の文書であるが、これによれば、日向川の河口は、飛砂によって埋まり一帯が滞水し「水の落ち口もなくて湖水に見えし事、宮野内新田（六ツ新田）より、吉出川迄南北大概弐里程の御田地一面水湛え、諸鳥の寄ること湖水を塞ぐ。近村の民早朝に水辺をまわれば鷹、すがの鳥（おしどり）日々四、五羽ひろいしとなり。」という状況であった。砂丘の活動が活発な特に冬場の時期ともなれば、日向川河口が容易に閉塞し、砂丘の内側に滞水していたことが分かる。水害と川口付近の滞水が大きな問題であった[42]。

次に、月光川という河川名称は、『日光川史』によれば明治八年（1875）の吉出村文書に見えるのが早い例であり、明治期以降の呼び名である[43]。さらに、「吹浦川」「町川」「吉出川」などの呼称も見える[44]。致道博

物館所蔵の『正保絵図』には、上流比山地区までは「祓川」、ここから地峡の隘路を抜けて平野へと流下すると「遊佐川」と見える。月光川名称の成立は、鳥海山の本地が薬師であることから、日光・月光の脇侍を鳥海山から流下する河川に仮託し、薬師信仰に連なる、宗教世界を構成することから成立したものであろう。字限り図によれば、大楯遺跡のすぐ北側には月光川が流下していた時期がある。大楯遺跡にかかわる河川交通にも重要であったという事実を確認しておきたい。この河川が吹浦へと連なり、湊と結びついていた。

最後に、西通川は、船通川、船通堰とも呼ばれる開削堰である。開削時期を示す史料には恵まれないが、『月光川史』によれば、近世初頭の慶長六年（1601）から、元和八年（1622）までに運河として開削されたものと伝えている。また、日向川河口近くの土地に対しての、排水堰としても重要であった[45]。西通川の流路である、遊佐町南山下から、酒田市六ツ新田までの約７㎞と、ここより東側には標高 10m に満たない土地が続く。ここは容易に滞水する場所であったのは、先述の通りである。さらに、この場所には新田地名が広く分布し、開発が江戸期に入ってからであったことも指摘しておく。

（３）庄内地方の交通路

陸上交通と水上交通について検討したい。水上交通は海上交通と内水面交通の二つに分けることが出来る。ここでは最初に陸上交通を整理し、次に内水面交通である河川交通を整理し、最後に海上交通について触れて行く。陸上交通については、最初に「正保絵図」に表される交通路について、図８に拠りながら概観する。さらにその各々について、古代あるいは中世の文献と出土文字史料に現れる交通路と比較し、古代あるいは中世の交通路について述べていきたい。

『正保絵図』には、陸上交通路が表されている。太く描出されさらに両脇に２点を所々に添えてあるものと、前者よりは細く描出された交通路である。前者は主要街道と把らえられ、所々に添えてある２点は一里塚と見ることが出来る。後者の細く描出された交通路は、村と村とを繋ぐ道であり、主要街道とは区別されている。このため繁雑を恐れて図示していはいない。まず主要街道について注目してみたい。

絵図には両脇に２点を添えてある街道が、鶴岡・酒田を起点として 12 箇所描かれている。それぞれ１秋田街道、２浜街道、３内郷街道、４最上街道、５酒田街道・内郷街道、６江戸街道、７六十里越街道、８大鳥街道、９小国街道、10 浜中街道、11 加茂街道、12 浜街道という[46]。１は隣国である秋田領に向かう街道である。３は２の脇街道とでも把らえられようか、４は最上川沿いに新庄方面に向かう街道である。５は酒田方面に向かう街道である。６は鶴岡から藤島城の脇を通り、立川町清川付近で最上街道と合流する街道であり、参勤交代に使用された街道である。７は丸岡城周辺で分岐する。明治十七年（1884）『輯製二十万分一図』「村上」によって確かめれば、松根から月山の麓に分け入り、十王峠を越え大網へと入り、大峠を越えて志津へ出、山形に向かう街道であると思われる。８は朝日岳山中の大鳥池近くまで追うことが出来るもののあとは消え入ってしまう。大鳥池周辺には城館跡も存在する。恐らく上杉景勝の整備した朝日軍道に結び付き、米沢方面への街道となるのであろうが、このルートは早くから街道としての機能を失っている。９は越後領雷村への街道である。『輯製二十万分一図』「新潟」によれば、この街道は雷村から、南あるいは西に向い村上へと続いている。11 は庄内藩の外港である加茂湊に向かう街道である。２・10・12 は一連の街道であると考えられ、庄内地方を南北に縦断している。これらは砂丘の外側、日本海との間に立地し、絵図によれば街道の近傍西側には海が描かれ、その波濤はあたかも街道の路肩を洗うかのように描かれている。この街道は脇街道と見られがちであるが、この街道沿いには多くは漁業や製塩に関係した村々を見出だすことが出来、安定した交通路であることがわかる。さらに、この交通路は致道博物館所蔵の明和七年（1770）の「庄内二郡絵図」にも描かれていることから、砂丘の活動が活発な時期であっても安定的に維持された交通路であった。この街道をとった場合には酒田・鶴岡という拠点都市を通過する事なく隣国に移動することも出来るため、有用性も高いのであろう。

庄内藩領から他国へと向かう場合の出入り口は、鼠ケ関口、小国口、大網口、清川口、吹浦口の五カ所であり、いずれも番所が設けられていた。鼠ケ関口は 12 浜街道の番所、小国口は９小国街道の番所、大網口は７六十

里越街道の番所、清川口は４・６の最上街道と江戸街道の番所、吹浦口は１秋田街道の番所と見ることが出来る。

さてこれらの街道は中世にはいかに存在していたのであろうか。わずかに見える史料としては次のものがあげられる。

『吾妻鑑』文治五年（1189）八月三日条には藤原泰衡の郎従田川太郎行文と秋田三郎が、源頼朝の北陸道軍を率いた比企藤四郎（能員）と宇佐美平次（實政）と戦い、敗れ、梟首されるという記事が見える。北陸道軍の進攻ルートは、『吾妻鑑』文治五年七月十七日条に詳しい。これによれば、「下道を経て上野国高山・小林・大胡・佐貫などの住民を相催し、越後より出羽国念珠ケ関に出でて合戦を遂ぐべし」と見える。この交通路に関係した街道を絵図から見いだせば、12 浜街道、９小国街道があげられよう。浜街道にそって越後村上から念珠ケ関へと出、さらに念珠ケ関川を東に向かい関川で小国街道と合流することが出来る。ここから、小国街道を北上すれば藤原泰衡の郎従である田川太郎行文の根拠と伝える、田川館に行き当たる。12 世紀代のかわらけも出土し、田川館を見下ろす山上には七日台墳墓群が営まれている[47]。浜街道と小国街道は少なくともこの時期には成立しており、しかも軍勢の移動に使用されるような、主要街道であったことは疑いない。

次に、『義経記』の「直江の津にて笈探されしこと」、「亀割山にて御産の事」に見える、義経主従が都落ちし奥州藤原秀衡のもとへむかうルートがある。『義経記』は物語りではあるが参考にはなろう。これによれば、義経主従一行は念珠ケ関から出羽国に入り、「三世」の薬師堂、「大泉の庄大梵字」「清川」「矢向の大明神」「亀割山」「せひ」「栗原寺」と通過し平泉に至る。「三世」とは 12 の浜街道に残る三瀬であり、現在も気比神社境内に薬師堂が残る、「大泉の庄大梵字」は鶴岡市街地に大宝寺という地名が残る、ここから６の江戸街道を通り「清川」へと抜け、最上川沿いに「矢向の大明神」、さらには「亀割山」、「せひ」の瀬見温泉、陸奥の栗原郡に所在する「栗原寺」と結ぶルートが想定出来る。以上のことから浜街道、大山街道、江戸街道というルートの中世での存在を推定することが出来る。陸上交通の存在として、中世では、12 浜街道、９小国街道、６江戸街道と 11 大山街道の存在を指摘しておきたい。さらにはこうした街道は、鎌倉や平泉といった政治拠点と結び付くものであったこともまた確認されなくてはならないであろう。

古代でも交通路をいくつか文献史料から見いだすことが出来る。『延喜式』の兵部式の「諸国駅伝馬条」によれば、当地方に「飽海」「遊佐」の駅が置かれ、それぞれに駅馬 10 匹を置いた。このルートは、最上川の水上交通を利用しながら内陸や陸奥国と結び付いたものである。「飽海駅」の推定地は飽海郡平田町郡山付近、「遊佐駅」は飽海郡遊佐町大楯付近にそれぞれ位置するものという[48]。平田町周辺には古代遺跡が密集して存在するが、「飽海駅」の推定地はいまだ確定しない。同じく「遊佐駅」の擬定地は大楯遺跡周辺に求められているが、大楯遺跡そのものは、古代の遺物には乏しく、駅舎に推定できる遺構も見ることはできない。擬定地としては不安を残す。駅路想定ルートの平田町から遊佐町にと向かうルートは、正保絵図には街道としては描かれていない。恐らく、飛鳥から生石、一条八幡の門前を過ぎて、日向川を渡り、蕨岡、平津と向かう、山沿いの道がこれに当たるのであろう。このルートは荒瀬川と日光川を渡らなくてはならないが、そのほかの部分では安定した地形を選んでいる。

さらに、出土史料から確認されたルートがある。鶴岡市西郊の「山田遺跡」から、駅に備え付けてある馬の世話をする者達である、駅子の名前が連記されたと考えられる「駅子木簡」が出土した。８世紀中葉から９世紀中葉の遺物とともに、河川跡から出土している。この木簡の存在により本遺跡周辺には、古代出羽国田川郡に関係する駅家の存在が推定されることとなった[49]。山田遺跡の位置は 12 浜街道の位置と近接し、古代北陸道の一部が浜街道として遺存している可能性がある。

付け加えれば、烽火ネットワークの問題もこうした陸路の状況を補完するものとして重要であろう。佐藤信は『日本三代実録』仁和三年（887）五月二十日条に見える、出羽国国府移転問題の記事から、古代出羽国における烽の存在を指摘している[50]。情報の伝達手段としての烽火の有効性は言うまでもないことであるが、国府移転の懸案の一つが、最上郡へ移した時の、秋田・雄勝城への烽火ネットワークの有効性であったことは興味深い。

（4）歴史的に見た庄内地方の河川交通

当地域の河川交通の様相については、最上川の河川交通が注目されるが、この他の庄内地方を流れる河川については不明な点が多い。断片的な資料からであるが検討すれば、酒田市生石4遺跡では、現存長約6mの独木舟が、船首と船尾を切断され、道路の木樋として使用されていた。時期は8世紀後半から9世紀のものである。付近には平田川が流れ低湿地も展開する。こうした場所での交通手段として使用されていたものであろう。さらには、藤島町でも同様な独木舟が出土し遺存長は11.5mを測る。ここは、藤島川の側であり、同じく内水面の交通手段として使用されていたものであろう[51]。興味深いことに、こうした独木舟は近世まで使用されていた。庄内藩主酒井忠真は元禄四年(1691)十月に鶴岡城三の丸にあたる百間堀遊猟をするために、独木舟を購入している[52]。河川や低湿地などではこうした独木舟による交通が、近世まで盛んであった。

最上川沿いに川湊が存在することは、『延喜式』の水駅の記載からも、古代に溯って存在することは確実であるがいまだ判明していない。『正保絵図』にもはっきりしない。近世も半ばの事例とはなるが明和六・七年（1769・70）の「庄内藩より御国目付への御答書」には、「船着き五ケ所　飽海郡酒田湊　田川郡飛島　田川郡加茂村　田川郡鼠ケ関村　川舟着田川郡清川村」と見え川湊として、最上川沿いの清川さらには、川・海両方の船着きとして酒田が上げられている[53]。古代以来の湊と見ることができる。以上のことから、内水面は丸木舟などの交通手段によって利用されていたこと、最上川には川湊があったことがわかる。

（5）歴史的に見た庄内地域の海上交通

当地域にかかわる海上交通について検討したい。海上交通について注目する視点は、この地域の地理的位置の検討で述べたように、この地域の存在が、海上交通の結節点としての意味合いが見いだせるのではないだろうかという意図からである。[54]。最初に、『正保絵図』の検討を通して、江戸初期の湊の位置と、現在の調査資料を補完しながら各湊の様相について触れて行きたい。次に中世のこの地域を含む海上交通の様相、さらには古代のこの地域の海上交通の様相について検討していきたい[55]。

①正保絵図に見る湊

江戸初期の『正保絵図』に記載がある湊は、吹浦湊、小湊浦、宮浦、加茂の湊、鼠ケ関、飛島の6カ所である[56]。このほかの湊には記載がない。これらの湊には他地域との航路が記載されていることから、漁港というよりも商港としての機能が高いと考えておきたい。江戸中期明和六・七年(1769・70)の「庄内藩より御国目付への御答書」には、酒田、飛島、加茂、鼠ケ関が海上交通の湊として記載されているのは同様である[57]。遊佐荘大楯遺跡の外港と目される吹浦湊は見えない。

②庄内地域の湊の概要

次に『正保絵図』に現された湊を含めて、庄内地域の湊の様相について検討していきたい。『山形県漁業史』によれば、庄内浜沿岸に存在する漁村は、それぞれが小規模な湊を持っていた。この時期には漁港であるが、時代を溯ると海上交通の重要な拠点としての姿も見えてくる。それぞれの湊について概観し、『正保絵図』に見える湊の補足をしていきたい。

庄内地域の海岸は砂丘地域と岩礁地域の2地域に別れるが、このうち砂丘地に存在する漁村が、「吹浦」「十里塚」「服部興屋」「青塚」「白木」「宮海」「上村興屋」「小湊」「能登興屋」「宮野浦・酒田」「十里塚」「浜中」となっている。岩礁地帯である磯浜に存在する漁村は、「加茂」「油戸」「今泉」「金沢」「宮沢」「湯之浜」「鼠ケ関」「小岩川」「小波渡」「三瀬」「由良」「堅苔沢」「温海」「女鹿」「飛島」となる（図7）。このうち、『正保絵図』にも見える特徴的な湊としては、砂丘地帯では、「吹浦」と酒田湊の一部をなした「宮野浦」がある。「飛島」もこれを補完するものとしてまた重要であった。これらのうち砂丘に面している漁村は、湊が砂の堆積の影響を受けやすい。事実「吹浦」や「宮野浦」では、湊に堆積した砂の浚渫が行われ、一部には集落の移転などという事態にも陥っている。こうした砂丘地の湊に較べて、岩礁地帯の湊は水深を確保でき、さらには回りの山々が障壁となり風を防ぐこともでき安定していた[58]。

湊の様相についてまとめれば、砂丘地帯の湊は「吹浦」「小湊」「酒田・宮野浦」などがあるが、いずれも水深が浅く、大船の入港は出来なかった。また、湊の周囲には障壁となるものがなく、風の影響も受け易かった。季節的にも入港は冬季を避けている。従来指摘

されている日本海船運の持つ季節性のためである。「酒田」は「秋田」「佐渡」などの他国との航路が開かれており、元禄元年（1688）井原西鶴の『日本永代蔵』に「坂田にかくれなき亭主振、明れば春なり長持の蓋」に豪商として「鐙屋惣右衛門」が描かれるなど、古川古松軒が著したように羽州第一の湊として広く知られていた。まさに、江戸時代初期川村瑞賢の整備した西回り航路の起点として相応しいのである。しかしながら、砂丘地帯の湊は川底の堆積による船の入りの阻害や、風向きによる入港の制限などの問題などを抱えていたことが分かる。そしてこれらの障害を解決するために「加茂」「飛島」の湊は、「酒田」と密接な関連性があった。幕末安政の開港に際して、ロシア公使が、新潟は河口港なので不適としながらも、同じ河口港であるが、沖合に飛島という絶好の避難港を持つ酒田を開港すべきだと主張したのは、各港の密接な関連性を認識していたためであろう[59]。

次に岩礁地帯の湊であるが、「加茂」「堅苔沢」「鼠ケ関」「由良」が注目される。水深が確保出来、周囲を山などの遮蔽物で囲われていることから、風の影響を受けにくいという特長をもっている。特に「加茂」は大船の入港にも差し支えはなく、中世あるいはこれ以前から、活発な活動を見せていることがわかった。航路も「越前三国」、「敦賀」、「越後新潟」「秋田」へと結んでおり、酒田よりも遠隔の土地の名前が見える。恐らく「鼠ケ関」も同様であろう。羽黒山と結ぶ「由良」と、「堅苔沢」はいずれも小規模なものの風の影響を受けない湊であり、中世へと溯る重要な湊であることが確認出来た。ただし、これらの湊の規模は小さく、周囲に有力な遺跡を見いだすことも現在では困難である。しかしながら岩礁地帯においては小船での湊伝いの交通が近年まで残っており、各湊の連携の上にその機能を維持することが重要であったのであろう。さらに重要なことは、この岩礁地帯にそって浜街道が北上していることである。この意義は、恐らく、湊としての機能が安定した小規模な湊を陸路として結びつけ、物資輸送の円滑化を図るためであろう。浜街道は自然条件に恵まれないが維持される意義がここにあるのではなかろうか、このために、砂丘の活動が活発化した正保年間あるいは明和年間の段階でも主要街道として維持されなければならないのであろう。

まとめれば、中世までの庄内地方の湊の機能は、酒田などの著名な湊のみに注目されがちであるが、飛島や加茂、由良、堅苔沢、鼠ケ関、吹浦などの大規模湊とそれ以外の小規模湊のネットワークさらには、これを支える浜街道や大山街道などの陸上交通、さらには最上川、藤島川、赤川などの河川交通の補完という形こそが当地域の交通体系と見ることが妥当なのであろう。またこれは、古代以来自然地理的景観はほとんど変化がないという自然地理の研究成果からすれば、古代以来の交通体系を踏襲している姿であると見ることができる。

③海上交通の要衝としての飛島と吹浦湊の存在意義

次に海上交通の要衝としての飛島の存在意義を、飛島が表記された古図をもとにして検討する。さらに飛島と吹浦湊の関係について整理したい[60]。

飛島は当然『正保絵図』には姿を見せるが、それ以前の地図には別の姿を見せている。嘉元三年（1305）の京都仁和寺所蔵の『日本図』には、佐渡島は見えるが飛島は見えない。これより北方に嶋は描かれていない。室町時代後期の唐招提寺所蔵の『南瞻部州大日本国正統図』には、佐渡島の隣に、いくつかの無名小島の脇にやや大きく「止々嶋」と見える。この場合もこれより北方に嶋は描かれていない。江戸期の行基図にもこれらの記述を見いだすことが出来る。寛永元年（1624）の木版筆彩の『大日本国地震之図』には「止々嶋」と見え、『正保絵図』には「飛島」と見える。この場合もこれより北方には嶋は描かれておらずこの「飛島」が、日本海沿いの最北の嶋として意識されていたのであろうことが分かる。「止々嶋」という名称もこの状況をあらわした言葉としてふさわしい。

慶安四年（1651）の木版の京都大学付属図書館所蔵の「日本図之図」には、日本全図の出羽国の日本海沿岸の都市として、「大山」「酒田」「吹浦」が描かれている。また「酒田」と「吹浦」の間には、河川が描かれ恐らく「日向川」であろうと思われる。承応から明暦（1652～57）のころの大阪府立図書館所蔵の『皇圀道渡図（幕府撰正保日本図）』には、鼠ケ関と加茂、酒田が湊として描かれ青塚、吹浦が北国街道沿いに描かれている。寛文六年（1666）の木版筆彩綴本『日本分形図』には、出羽国の日本海沿岸の都市として、「大山」「酒田」

「吹浦」が描かれている。同様の記載はこのほかにもいくつか地図で伺うことができる[61]。

織田武雄によれば、天理図書館所蔵『拾芥抄』(1548)の行基図には、佐渡島の北方に「止嶋」が見える。ヨーロッパで刊行された日本図にもこうした記述が見いだされ、さらには注記から発音を知ることが出来る。『テイセイラの日本図』は1595年に刊行されたものであるが、この中に佐渡島の南に「止々嶋」が見え「Sisime」と記述される。『ブランクス(モレイラ系)』の日本図は1617年に刊行されたものであるが、この中に佐渡島の北方に「止々嶋」として記され、「Tondoxima」と記される。対岸には「酒田」が「Sacata」と記される[62]。

このような日本図の表記からすれば「止々嶋」は「シシマ」または「トドシマ」と読まれるべきである[63]。「トドシマ」とは、本来は止む＝とどむ嶋であり、当所の命名意図としては、もっとも北側の地でありそこから先にはいかない、という境界領域の先端という意味を読み取ることが出来よう。残されている古地図の年代から見て、16世紀以前の古い時期に、最も北側の嶋であるという境界意識から「とどがしま」あるいは「とどしま」という名称が成立し、その後表記である「止々嶋」の訓として「ししま」あるいはその変化という名称が成立し、正保段階では「とどしま」から「とびしま」と訓じられ、「飛島」の表記が行われるようになったのであろう。なお、長井政太郎は慶長十三年(1619)の酒田城付きの奉行より永田勘十郎に交付した年貢皆済状には、「飛島」が「とと島」と見えることを説明して、「海獣のとどが来る島であったと見える」という[64]。トドは体長4mほどの肉食の海獣であり、北太平洋を生息地とし、樺太・千島・北海道北部などでも見られる。これより南方の「飛島」では通常見ることが出来ない。「とと島」という名称は、先述のように、その地理的意味合いにおいて理解されるべきであろう[65]。「飛島」は日本海側最北の島と認識されていた時代のあったことを知ることが出来る。

さらに、「飛島」の描かれる絵図には、大山や酒田という地名も描きこまれ、密接な関連を知る。大山は加茂に隣接しているため湊としては加茂を示すと考えられるであろう。これらの湊の表記は、先程の湊の様相からして当然であるが、先の検討からすれば、吹浦は湊としての重要性は先に述べた「飛島」「加茂」「酒田」とは並列的には扱えないということになろう。事実、荒井太四郎が明治十七年(1884)の著した『出羽風土記』によれば、吹浦は「一ケ年間出入りする船は数十一艘に過ぎず古時は潤も広く船も多く入込しなる可し」と見え、飛島へ渡るにも「吹浦潤より渡るを最便とず(ママ)酒田加茂よりも渡るなり」としている。確かに吹浦は衰退し漁港に転化しており、飛島との関係は吹浦地内を始めとして魚介類と米の物々交換の特殊なシステムは残るものの、港としての役割は衰退している実態を表わしている。古時は盛んだったとの湊の記憶あるが、衰退は逃れない。だが、日本図として著される場合に取り上げられているのである。次にこの理由を検討したい。

吹浦は、一つには先程検討を加えたように、飛島と酒田との関係が、吹浦と飛島との関係にも存在し、補完的に湊の機能が成立していたのであろう。さらには、地理的位置もまた重要である。ここは、出羽南部と北部の境であり鳥海山から伸びた太師崎を迂回しなければ隣国秋田への移動はできなかった。砂浜から岩礁地帯へと移行する場所に存在するここは、出羽南部の最北の湊としての重要性を知ることができる。さらに重要なのは、古代以来と考えられる飛島の境界性と、吹浦との宗教的関係である。

④飛島、吹浦と大物忌神社

こうした飛島と吹浦湊の関係を宗教的から検討することができる。飛島には「小物忌神社」が営まれ、対岸吹浦には「大物忌神社」が存在する。大物忌神については、誉田慶信、伊藤清郎をはじめとする詳細な研究が蓄積されている[66]。これらの研究に導かれながら、大物忌神社について簡単に触れれば、大物忌神社は鳥海山を御神体とし、『三代実録』元慶四年(880)二月二十七日条には神階を従二位にまで上らせる辺境の守護神であった。ケガレを強く忌み嫌う神であり、平安時代後期には本地仏は薬師如来とされ信仰される。中世には国家神から一国の神へと姿を変え出羽国一宮となる、その後は在地の農業神となる。明治5年(1872)には国幣中社となるという。現在大物忌神社には「吹浦」と「蕨岡」にそれぞれ口之宮があり崇敬を受けている。

大物忌神社の神事として、「管粥神事」「物忌祭」「御浜出の神事」がある。このうちの「御浜出神事(オハ

マデ)」あるいは「火合神事」について、飛島と吹浦港、大物忌神社との関係をさぐる上で注目できる。昭和十八年（1943）に編まれた『山形県神社史』によれば、現在行われているこの神事は「中世より中絶せしものを明治三十一年（1898）より（中略）再興執行す」るものであり、断絶が認められるが、再興以降は「旧六月十五日（七月十四日）摂社月山神社祭の前夜祭として」行われている。その内容は、大物忌神社吹浦口之宮から吹浦西浜に神輿が渡御、西方飛島の小物忌神社に向かって祝詞をあげ、夕刻篝火を焚く。この時同時に、鳥海山山上と七合目の鳥の海湖畔、飛島の小物忌神社でも海岸に出て、祝詞を奏した後、大物忌神社に向かって篝火を焚き、「二社風穀の神力を通わせ」る神事という[67]。現在では、七月十四日の夕刻からはじまり、月山神・大物忌神の二神の神輿が西浜に渡御し、夕刻７時から、鳥海山山頂、鳥海湖畔、西浜、飛島、宮海の５箇所で一斉に御神火が焚かれ、「五穀豊饒、海上安全、大漁満足」を祈る。山頂の火が西浜からよく見えるとその年は豊作であるという[68]。火合せの箇所や、祈祷内容については異同があるが、鳥海山山上、大物忌神社の吹浦西浜、飛島と結ぶ聖なる火による線は三者の強い結び付きを暗示している。そしてそこにはいずれも、大物忌神社にかかわる神が存在している。

このようなことからすれば、大物忌神社の吹浦口之宮と飛島を結ぶ空間が重要な意味をもってくる。この空間は先史時代以来の航路であり、山当ての目標である鳥海山と飛島はこうした航路を保証するために、聖なる火によって強く結びつけられ、海峡が守護されていると考えられはしまいか。伊藤清郎によれば９世紀ごろには日本海岸の大物忌神社から東へ鳥海山、奥羽脊梁山脈の神室山、栗駒山さらには太平洋岸の室根山が国家の辺境を構成し、大物忌神社、駒形根神社、などの霊場が形成されるという。この延長には飛島も存在する。12 世紀中世初頭奥州藤原氏の策定した辺境は陸奥外ヶ浜であるが、８～９世紀代の境界はこの地であり、こうした時期の国家の辺境を表す言葉として、辺境の守護神大物忌神社とともに「とどしま」という呼称も成立したと見ておきたい。さらに、「とどしま」という呼称の辺境性からすれば、むしろ大物忌神の存在は飛島に相応しいと見ることもできる。大物忌神自体もこうした孤島に漂着した神に淵源を持つのではなかろうか、誉田慶信が整理したように、物忌という大物忌神に共通する神名を持つのは、伊豆諸島神津島に鎮座する「伊豆国物忌奈命神社」のみである。ここは国家の辺境を形成する離島であり、飛島と共通している。また、伊豆諸島利島は秀麗な山容を持つ離島であるが、ここには、古代以来の祭祀が存在し、鏡などが奉納されている[69]。飛島でも、平安時代から鎌倉時代の年代観をもつ鏡が出土している。この事例は池中納鏡の一例として理解されていた[70]。しかし、飛島の納鏡もこうした離島の祭祀に連なるものとして理解できよう。時期的整合性は検討の余地を残すものの、飛島は古来こうした祭祀の場所であり、大物忌神の鎮座する場所としての相応しいのであろう。

さて、こうして明らかにされた、古代の交通の要衝である飛島と吹浦大物忌神社口之宮との海峡は、いつ頃から使用されたものであろうか、飛島に残る遺跡に「葡萄崎遺跡」「船見沢遺跡」「テキ穴洞穴」がある。「葡萄崎遺跡」は縄文時代中期の、東北地方北半に主として分布域をもつ円筒上層Ｂ式土器が出土している。「船見沢遺跡」からは縄文時代中期初頭の北陸地方に主として分布域をもつ新保・新崎式土器が出土している。この地域に分布域をもたない土器群が離島飛島には存在するということは、縄文時代中期の時期には既に、東北地方北半や北陸地方との航路が開かれており、活発な往来があったことを示している。「テキ穴洞穴」には多数の平安時代の人骨が残されていた[71]。飛島には先史時代以来海上交通に拠り人々の往来があったのであった。

こうした交通の実態を考えたときに、日本海沿岸に点々と浮かぶ離島が重要な意味を持つ（図１）。これら「粟島」「佐渡」「舳倉島」「隠岐」などの離島は、先史時代から連続する日本海海上交通の拠点として利用され。それぞれに営々とした営みが知られている。小島芳孝はこれらの日本海沿岸の離島を、「飛島」を含めながら網羅的に調査し、その歴史的営みと、国内さらには国外へと発展する、海上交通の拠点としての姿を明らかにしている[72]。こうした論点に従えば北海道の南部と、京都の中間地点に位置するこの飛島･吹浦地域は、日本海を仲介とした、交通の要衝という姿を確認することができる。こうした古来の地域性が江戸期には西

回り航路として整備されたのであろう。

飛島と吹浦の間に横たわる海峡では、底引き漁業によって、海底から、恐らく沈没船に積載されていたと考えられる遺物が引き上げられている。現在のところ、これら飛島沖の沈船資料として、８～９世紀代の須恵器甕２点、近世唐津焼瓶１点、明治時代の陶器製の尿瓶１点、合計４点の遺物が確認できる[73]。図示したのはこのうちの個人所蔵にかかる須恵器甕である（図９）。法量は、口径が 23.8cm、高さが 44.5cm を測る。２種類の叩き具を使用し、頸部には体部よりも粗い叩きで、装飾的に一段の叩きを巡らせている。８世紀前半までには編年されるであろう。表面一面に貝類の付着が見られる。肩部から頸部にかかる装飾的な叩きが本資料の特徴であり、山形県内の現在まで知られている窯資料には類例を見つけだすことはできない。おそらく北陸地方を中心とした地域に生産拠点を持つ窯で生産されたものであろう。かかる事実から、この地域に遺跡が展開しはじめる８世紀～９世紀には活発な船舶の往来を知ることができるのである。

このような視点からすれば、『出羽国風土記』に見える飛島の小物忌神社の公験の一つには「風神」信仰があり、船舶の航海と密接な結び付きを知ることができる。大物忌神社にもこうした船舶の安全を保証する役割があった。『続日本後紀』承和七年（840）七月二十六日条によれば、大物忌神が南の賊の境で、襲撃された遣唐使船を救ったとして、従四位下神封二戸を授けられたという記事が見える。この遣唐使船は承和三年（836）藤原常嗣を正使とし唐に向い、承和六年（839）に帰朝するが、４回も出発を繰り返したり、海上で敵に襲われたりと、御難続きの航海であった。付け加えれば、この直後の遣唐使船の正使は菅原道真であり、遣唐使の中止を献策している。こうした国家事業である遣唐使の航海を保証するのは、大物忌神の国家神としての性格上当然のことであり、辺境の守護神としても南北の労を厭わず公験を現すこともこれまた当然のことであったのであろう。大物忌神は航海安全の神、海上神でもあったと見ることができるのである。これまた飛島との関連性を感じさせる。

こうした神々は国家神として崇敬されてはいたが、国家による奉幣がすたれた古代末期以降は、在地の一国神となるが、日本海側にそって伸びる、天台宗もこの地域に大きな影響力をもつことになった。『出羽国風土記』によれば、飛島大宮神社の社家は酒田の日吉神社であった。『飛島図絵』には飛島大明神といわれる遠賀美神社の御神宝が描かれ、これらは『慈覚大師の御作』と記される。吹浦から秋田への境に位置する岬は「太師崎」であり、ここには「太子堂」が営まれていた。さらには鳥海山信仰の重要な拠点である寺院にも天台宗の影響を認めるのである。こうしたことは、鳥海山を中心とする、古代国家の宗教世界に天台宗が影響力を持つという事実を見いだすとともに、航海、行路といった内容にまで及び、ここには網野善彦が言うように、日本海側の天台宗による開発が行われた痕跡を、濃密に見いだすことができよう。

以上古代から中世にかけては、この地域は、日本の境界と意識された時代のあったこと。それは、飛島の呼称や、大物忌神社の存在によってもこれを知ることができる。さらには、吹浦湊は、大物忌神や鳥海山信仰にかかわる宗教的起点としても、重要であったことがわかる。

図９　吹浦沖海上がり甕実測図

4　遺跡群の分布と展開

ここでは、地理的歴史的環境で明らかになった事柄を踏まえながら、古代から中世初頭の遺跡の時期的展開を検討し、庄内地域の遺跡の動態を検討する。この検討を通して、古代の遺跡の展開と中世遺跡の展開を探り、大楯遺跡の成立について考察したい[74]。

（1）庄内地方の遺跡の分布

この地域の遺跡の分布と展開について触れた先行研究は、佐藤庄一、阿部明彦、植松暁彦らの研究がある[75]。これらの先行研究に導かれつつ、庄内地方の遺跡の分布と立地について、検討を加えることとする。

山形県教育庁文化財保護室の集成した遺跡数の調査によれば、庄内地方に所在する奈良平安時代の遺跡は約 300 を数えることができる（図６）。表面採集資料や時期的検討が未評価な資料を含むため注意を要する。出土遺物から詳細に時期的検討を加えられるものは更に少なくなる。ここでは年代観の検討が可能な遺跡として、139 遺跡を上げることができた（図 10 ～ 21、表 1 図 11 ～ 21 中の№は、表 1 に合致）。抽出された遺跡について、さらに時期的な分離を行い、時期的経過に従う遺跡の動態について検証することとしたい。検討の中心は、遺跡数変化の動向、立地の検討、遺跡集中地点の移動の検討である。さらにはこれらの時期的な変化から、庄内地方に於ける遺跡の歴史的変遷の動態を見いだし、考察を加えることにある。

①８世紀以前の遺跡の展開

はじめに庄内地方に最初に遺跡が展開する時期である８世紀以前の遺跡の展開について検討する。庄内地方の古墳時代の遺跡について、その分布傾向を把握していきたい。古墳時代遺跡の分布を表したものが図 10 である。古墳時代の遺跡は、集落跡と墳丘墓がある。川北では、遊佐町の北側箕輪地区丸池に古墳があったものと考えられている。酒井英一によれば、ここからは、勾玉４点、管玉２点、小玉５点、金環１点が出土し、これらは現在鶴岡市の致道博物館の所蔵に帰している[76]。こうした伝承や遺物組成からすれば、古墳時代後期の古墳と見ることができよう。この他には、阿部明彦によれば酒田市境興野遺跡からは６世紀後半の須恵器蓋が出土し、酒田市関Ｂ遺跡では古墳時代前期４世紀後半の遺物の出土は報告されている。さらに、関Ｂ遺跡で検出された遺構について方形周溝墓の可能性を指摘している[77]。

つぎに川南について述べる。まず、余目町の施設に保管されている古墳の石棺がある。佐藤禎宏によれば、これは余目町の最上川の河畔槇島から出土したものという[78]。年代の考定資料に恵まれないため、確定はできないが古墳時代中期のものと押さえておきたい。藤島町に三和遺跡がある。酒井英一によれば、ここからは古墳時代前期の器台と壷の破片が出土している[79]。さらには、藤島町の出羽丘陵に接するあたり鷺畑地区には、４基の円墳がまとまりをもって存在する。発掘を伴う調査はなされておらず、時期決定の手段を持たないが、北陸地方の年代観を参考にすれば、これらは古墳時代中期ごろのものと考えられようか。庄内平野全体を通して、もっとも古墳時代の遺跡が濃密に分布するのは、鶴岡市街地の西側、大山地区と清水地区である。大山川の流域には濃密に古墳時代の遺跡が分布している。もっとも早いのは畑田遺跡で北陸の影響を受た周溝を巡らす住居跡が確認され、能登甕や装飾器台から組成される土器群からすれば、３世紀末に遺跡は成立していたと見ることができよう。このほかの古墳時代前期の遺跡も濃密である。５世紀から６世紀にかけては助作遺跡や矢馳遺跡が営まれている。菱津古墳の石棺は、この地方では希有な、縄掛突起を持った長持式の石棺であり、５～６世紀代の造営と考えられる。

以上の事実からすれば、最初にこの地域に営まれた古墳時代の遺跡は、３世紀後半であり、庄内平野のもっとも南側の位置であった。ここは、先程来の検討からすれば、小高い山を一つ越した西側には、日本海が広がり「加茂」「油戸」「由良」「三瀬」などの湊を控え、浜街道が立地する交通の拠点となっている。また、内水面交通も大山川を仲介すれば、最上川に臨みより内陸への交通も容易である。畑田・中野遺跡では北陸方面からの影響を受た土器を使用していた。こうした交通路を介してこの遺跡が成立したことは間違いない。次に藤島町の東側出羽丘陵に接するあたりには、４～５世紀の遺跡が成立し、併せて古墳も営まれている。三和遺跡は藤島側の自然堤防上の立地し、藤島川を通して最上川あるいは、内陸部へと交通が可能である。４基営まれている古墳の立地は、庄内平野を一望する場所であり、古墳の被葬者と眼下に展開する土地との深い関連性を知ることができ

表１　庄内地方遺跡一覧表

No.	遺　　跡		8世紀				9世紀				10世紀				11世紀				12世紀				文　　献
			1	2	3	4	1	2	3	4	1	2	3	4	1	2	3	4	1	2	3	4	
1	吹浦Ａ遺跡	遊佐町			■	■	★	■	■	■	■												山教委 1984・85・88 山埋調 82・93・120 集
2	升川遺跡	遊佐町				■	■	■	■	■											■	■	山埋セ 1994 調 9 集
3	筋田遺跡	遊佐町			■	■	★	■	■														山教委 1993 山埋調 187 集
4	野瀬遺跡	遊佐町				■	■		★														山教委 1994 山埋調 194 集
5	中田浦遺跡	遊佐町				■	★	★	★	■	■												山教委 1974・93 山埋調 1・185 集
6	地蔵田遺跡	遊佐町					■	■															山教委 1991・1992・1993・1994・1995 山埋調 1 集
7	北目長田遺跡	遊佐町			■	★	★			★													山埋セ 1995・96・98 調 24・31・56 集
8	橇待遺跡	遊佐町			■	■	■	■	■	■	■	■											山埋セ 1995・96 調 24・31 集
9	剣竜神社西窯跡	遊佐町			■																		阿部明彦・髙桑弘美 1999「山形県古代の土器編年」第 25 回城柵検討会資料
10	堂田遺跡	遊佐町					■	■	■	■	■												山埋セ 1995 調 24 集
11	木戸下遺跡	遊佐町			■	■		★	■														山埋セ 1995・97 調 25・45 集
12	宮の下遺跡	遊佐町			■	■	■	■	■	■													山埋セ 1996 調 32 集
13	上高田遺跡	遊佐町			■	★	★	★	★	★		■	★	■									山埋セ 1995・98 調 25 集・57 集
14	石田遺跡	遊佐町							■	■	■												山教委 1989 山埋調 136 集
15	宅田遺跡	遊佐町						■	■	■	■												山教委 1983 山埋調 72 集
16	道中遺跡	遊佐町				■																	山教委 1974 山埋調 1 集
17	大坪遺跡	遊佐町				■	■	■	■	■	■	■											山埋セ 1995 調 23 集
18	木原遺跡	遊佐町			■	■	■	■	■	■													山埋セ 1994 調 8 集
19	古屋敷遺跡	遊佐町					■	■	■	■													山教委 1998 山埋調 199 集
20	小深田遺跡	遊佐町				■	★		★		■	■											山教委 1988 山埋調 140 集
21	三田遺跡	遊佐町					■	■	■														山教委 1991 山埋調 163 集
22	袋冷遺跡	遊佐町					■	■	■														山教委 1989 山埋調 136 集
23	北子橋下遺跡	遊佐町					■	■	■	■	■	■	■	■									山教委 1992 山埋調 171 集
24	仁田田遺跡	遊佐町					■	■		★	■												山教委 1990 山埋調 148 集
25	金俣Ｄ遺跡	遊佐町																					山教委 1991 山埋調 163 集
26	大楯遺跡	遊佐町																			■	■	山教委 1988・89 山埋調 121・139 集
27	東田遺跡	遊佐町				■	★		★		★	★		■	■							■	山教委 1991 山埋調 165 集
28	浮橋遺跡	遊佐町					■	■	■	■		★	■	■	■								山教委 1988 山埋調 141 集
29	下長橋遺跡	遊佐町					■	■		★	■		★	■	■								山教委 1988・89 山埋調 142・145 集
30	水尻遺跡	遊佐町								■													山教委 1988 山埋調 1 集
31	中谷地遺跡	遊佐町			★	★	■	■	■	■													山教委 1974 山埋調 1 集
32	佐渡遺跡	遊佐町				■	■	■	■														山教委 1982 山埋調 51 集
33	塚田遺跡	遊佐町						■	■														山教委 1982 山埋調 51 集
34	地正面遺跡	遊佐町				■	■	■	■	■													山教委 1982 山埋調 51 集
35	前田遺跡	遊佐町						■	■	■													山教委 1982 山埋調 51 集
36	唐戸岩Ａ窯跡	遊佐町				■	■																阿部明彦・髙桑弘美 1999「山形県古代の土器編年」第 25 回城柵検討会資料
37	蕨岡遺跡	遊佐町																			■	■	佐藤禎宏 1980「最上川流域出土の珠洲陶器」庄内考古学 17
38	金俣経塚	遊佐町																			■	■	遊佐町教委 1993「遊佐町金俣経塚」
39	八森遺跡	八幡町							■	■	■	■											八幡町教委 2002『八森遺跡』
40	後田遺跡	八幡町				■	■	■	■	■	■												山教委 1983 山埋調 64 集
41	堂の前遺跡	八幡町					■	■	■	■	■												山教委 1975・76・77・80 山埋調 5・7・10・30 集
42	芽針谷地遺跡	八幡町							■	■													山教委 1981 山埋調 49 集
43	樋掛遺跡	八幡町				■	■	■	■														山教委 1982 山埋調 52 集
44	沼田遺跡	八幡町				■	■	■		★	■												山教委 1983 山埋調 78 集
45	俵田遺跡	八幡町				■	■	■	■														山教委 1983・84 山埋調 64・77 集
46	楯の腰経塚	八幡町																			■	■	佐藤禎宏 1977「八幡町楯の腰経塚出土の壺 (1)(2)」庄内考古学 14
47	向田遺跡	酒田市					★		■	■	■	■											山埋セ 1996 調 34 集
48	蛙橋遺跡	酒田市							■														山教委 1997 山埋調 198 集
49	家際遺跡	酒田市				■	■	■	■														山教委 1996 山埋調 197 集
50	梵天塚遺跡	酒田市					■	■	■														山埋セ 1996 調 42 集
51	若王寺遺跡	酒田市					■	■	■														山教委 1980 山埋調 32 集
52	新田目Ｂ遺跡	酒田市					■	■	■														酒田市教育委員会『新田目Ｂ遺跡』1980
53	前田遺跡	酒田市					■	■	■														山教委 1988 山埋調 199 集
54	庭田遺跡	酒田市									■	■	■	■	■							■	山教委 1983 山埋調 65 集
55	安田遺跡	酒田市					■																山教委 1982 山埋調 56 集
56	城輪柵跡	酒田市				■	■	■	■	■	■	■										■	酒田市教育委員会『史跡城輪柵跡』1999
57	上曽根遺跡	酒田市				★		■	■	■													山教委 1986 山埋調 116 集
58	新青渡遺跡	酒田市						■	★														山教委 1982・83 山埋調 67 集・79 集
59	南興野遺跡	酒田市				■	■	■	■	■	■	■	■	■									山教委 1986・87 山埋調 114・122 集
60	土崎遺跡	酒田市					★	■	■														山埋セ 1996 調 42 集
61	熊手島遺跡	酒田市					■	■	■														山教委 1992 山埋調 171 集
62	熊野田遺跡	酒田市					★		★		■	■											山教委 1988・89・89 山埋調 123 集・137 集・146 集
63	手蔵田２遺跡	酒田市						■		★	■												山教委 1985・86 山埋調 87 集・98 集
64	手蔵田３遺跡	酒田市					■																山教委 1989 山埋調 137 集
65	手蔵田５(８含む)遺跡	酒田市				■	■	■															山教委 1989 山埋調 137 集
66	手蔵田６遺跡	酒田市					■	■	■														山教委 1989 山埋調 137 集
67	手蔵田 12 遺跡	酒田市							■	■	■	■	■										山教委 1989 山埋調 137 集
68	手蔵田９遺跡	酒田市					■																山教委 1989 山埋調 137 集
69	手蔵田７遺跡	酒田市						■	■	■													山教委 1987 山埋調 110 集
70	横代遺跡	酒田市				■	■																山教委 1989 山埋調 137 集
71	高阿弥陀遺跡	酒田市				★		■														■	山教委 1985 山埋調 86 集
72	大槻新田遺跡	酒田市					■	■	■	■													山教委 1988・89 山埋調 129・137 集
73	生石４遺跡	酒田市			■	★			■														山教委 1987・88 山埋調 118・125 集
74	生石２遺跡	酒田市				■	★		★														山教委 1985・86・89 山埋調 89・99・117 集
75	境興野遺跡	酒田市				■			★		■	■	■	■	★	■							山教委 1981 山埋調 46 集
76	円能寺経塚	酒田市						■															山教委 1974 山埋調 1 集
77	関Ｂ遺跡	酒田市				■	■	■	■	■	■												山教委 1981・83 山埋調 47・68 集
78	北田遺跡	酒田市						■	■	■	■	■											山教委 1982 山埋調 53 集
79	泉谷地古窯跡群	酒田市			■	■	■	■															山教委 1991 山埋調 163 集

No.	遺　　跡		8世紀				9世紀				10世紀				11世紀				12世紀				文　　献
			1	2	3	4	1	2	3	4	1	2	3	4	1	2	3	4	1	2	3	4	
80	願瀬山古窯跡群	酒田市				■	■	■															阿部明彦・高桑弘美 1999「山形県古代の土器編年」第 25 回城柵検討会資料
81	本川遺跡	酒田市							■														山教委 1988 山埋調 137 集
82	手蔵田 10 遺跡	酒田市							■	■	■												山教委 1988 山埋調 124 集
83	上ノ田遺跡	酒田市			■	★	■	■		★													山教委 1982 山埋調 52 集
84	中谷地遺跡	酒田市				■	■	■	★	■													山埋セ 1996 調 42 集
85	鷹尾山 A 経塚	酒田市																	□	□	□	□	小野忍 1977「酒田市大字北沢太平周辺の古代・中世遺跡」庄内考古学 14
86	蕨山遺跡	飛島					□	□	□	□													齊藤主税氏のご教示による
87	テキ穴洞窟	飛島					■	■	■	■													酒井・本間・川崎 1971『飛島洞窟発掘調査報告書』
88	山海窯跡群	平田町						■	■	■	■												山教委 1991・92・93 山埋調 170・172・183 集
89	山楯楯跡	平田町					■	□	□														山教委 1992 山埋調 172 集
90	桜林遺跡	平田町						■															山教委 1987 山埋調 110 集
91	桜林興野遺跡	平田町				★	■	■		★	■												山教委 1987 山埋調 115 集
92	早稲田遺跡	平田町																					山教委 1988 山埋調 126 集
93	西田遺跡	平田町				□	■	■															山教委 1988 山埋調 126 集
94	山楯 5 遺跡	平田町				■	★																山埋セ 1994 調 4 集
95	山楯 8 遺跡	平田町						■	■														山教委 1992 山埋調 172 集
96	田沢長根	平田町																			□		佐藤禎宏 1980「最上川流域出土の珠洲陶器」庄内考古学 17
97	新山経塚	平田町																			□		川崎利夫 1991「山形県の埋、納経遺跡」山形考古 4-4
98	経ヶ蔵山経塚	平田町																			□		川崎利夫 1991「山形県の埋、納経遺跡」山形考古 4-4
99	狩川経塚	立川町																			□		川崎利夫 1991「山形県の埋、納経遺跡」山形考古 4-4
100	千河原遺跡	余目町							■	★													山教委 1984 山埋調 80 集
101	下餅山遺跡	松山町							■	■													山教委 1986 山埋調 97 集
102	山寺経塚	松山町																			■	■	佐藤禎宏 1980「最上川流域出土の珠洲陶器」庄内考古学 17
103	石欠遺跡	藤島町					■	■	■	■													藤島町教委『石欠遺跡』1981
104	藤島城	藤島町					■	□	□														山教委 1979・90・90・92・93 山埋調 25・159・160・181・193 集
105	平形 B 遺跡	藤島町						■	■	■	■	■											山教委 1980 山埋調 26 集
106	古郡 C 遺跡	藤島町				■	■	■															山教委 1974 山埋調 1 集
107	柳久瀬 A 遺跡	藤島町							■	□	□												山教委 1996 山埋調 197 集
108	三田遺跡	三川町					■	■													■	■	山教委 1980 山埋調 32 集
109	羽黒山頂経塚	羽黒町																	□	□	□		佐藤禎宏・小野忍・酒井英一 1979「羽黒山頂出土の中世陶器 (1)(2)」庄内考古学 16
110	羽黒山頂鏡が池	羽黒町																			■	■	羽黒町 1998『羽黒町史』
111	高寺遺跡	羽黒町																			□	□	佐藤禎宏 1980「最上川流域出土の珠洲陶器」庄内考古学 17
112	柳沢 A 遺跡	櫛引町																			□	□	山埋セ 1994 調 6 集
113	西谷地遺跡	鶴岡市			■	■	★	★	★	■	■	■											山埋セ 1994・95・96 調 12・26・33 集
114	中京田遺跡	鶴岡市				■	■	■	■														山教委 1980 山埋調 26 集
115	地ノ内遺跡	鶴岡市						■	■														山教委 1990 山埋調 148 集
116	大東遺跡	鶴岡市					■	■	■														山教委 1990 山埋調 153 集
117	月記遺跡	鶴岡市					■	■	■														山教委 1990 山埋調 153 集
118	大道下遺跡	鶴岡市						■															山教委 1990 山埋調 153 集　山埋セ 1997 調 49 集
119	後田遺跡	鶴岡市				■	★	■	■	■	■	■											山埋セ 1997 調 49 集
120	畑田遺跡	鶴岡市																					山埋セ 1995 調 22 集
121	山田遺跡	鶴岡市				★			★	■	■	■											山埋セ 2001 調 83 集
122	矢馳 A 遺跡	鶴岡市					■	■															山教委 1988 山埋調 127 集
123	塔の腰遺跡	鶴岡市					■	■		★	■												山埋セ 1997 調 50 集
124	漆原遺跡	鶴岡市																					山教委 1995 山埋調 195 集
125	荒沢須恵器窯跡	鶴岡市				■	■	□															鶴岡市教委『荒沢窯跡・玉林坊遺跡分布調査報告書』1992
126	西ノ川遺跡	鶴岡市				■	★		■	■	■	■											山埋セ 1995 山埋調 26 集
127	五百刈遺跡	鶴岡市					■	■	■														山埋セ 1994 山埋調 10 集
128	鳥居上遺跡	鶴岡市																				■	鶴岡市教委 1998 鶴埋調 8 集
129	湯田川経塚	鶴岡市																				■	川崎利夫 1968「鶴岡市湯田川の経塚について」庄内考古学 8
130	七日台墳墓群	鶴岡市																			■	■	佐藤禎宏 1980「最上川流域出土の珠洲陶器」庄内考古学 17
131	城山経塚	鶴岡市																					川崎利夫 1991「山形県の埋、納経遺跡」山形考古 4-4
132	井岡遺跡	鶴岡市																				■	川崎利夫 1976「山形県における古代・中世の火葬墓について」『東北考古学諸問題』
133	水沢城の下	鶴岡市																				■	川崎利夫 1976「山形県における古代・中世の火葬墓について」『東北考古学諸問題』
134	水沢経塚	鶴岡市																					川崎利夫 1991「山形県の埋、納経遺跡」山形考古 4-4
135	西目遺跡	鶴岡市																				■	佐藤禎宏 1980「最上川流域出土の珠洲陶器」庄内考古学 17
136	神社口遺跡	鶴岡市																					酒井英一 1977「鶴岡市大字西目字神社口の中世陶器」山形考古学 3-1
137	田川蓮花寺遺跡	鶴岡市																					佐藤禎宏 1980「最上川流域出土の珠洲陶器」庄内考古学 17
138	大谷火葬墓遺跡	鶴岡市																					川崎利夫 1976「山形県における古代・中世の火葬墓について」『東北考古学諸問題』
139	木谷地沢火葬墓遺跡	鶴岡市																					川崎利夫 1976「山形県における古代・中世の火葬墓について」『東北考古学諸問題』

（凡例）

① 文献の省略は次に依った。

・山形県教育委員会『書名』1987 山形県埋蔵文化財調査報告書第 115 集

→ 山教委 1987『書名』山埋調 115 集

・山形県埋蔵文化財センター 1994『書名』山形県埋蔵文化財調査報告書第 4 集

→ 山埋セ 1994『書名』調 4 集

・『書名』は表中の各遺跡名称を含んでいる。

② ■は遺物の多い時期を表している。

★は特に目立つ遺物の存在している時期を表している。

□は遺物の目立たない時期を表している。

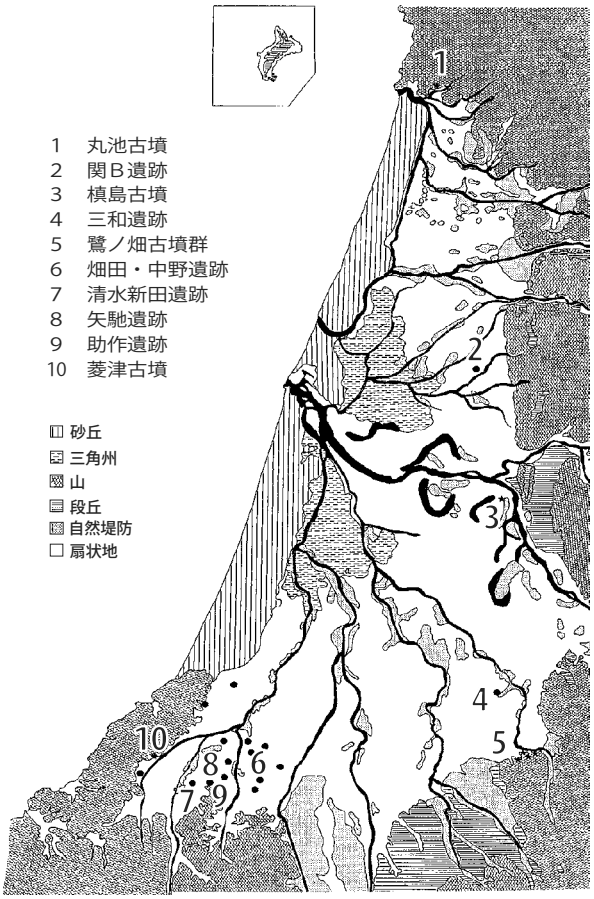


図 10　庄内地方古墳時代遺跡分布図

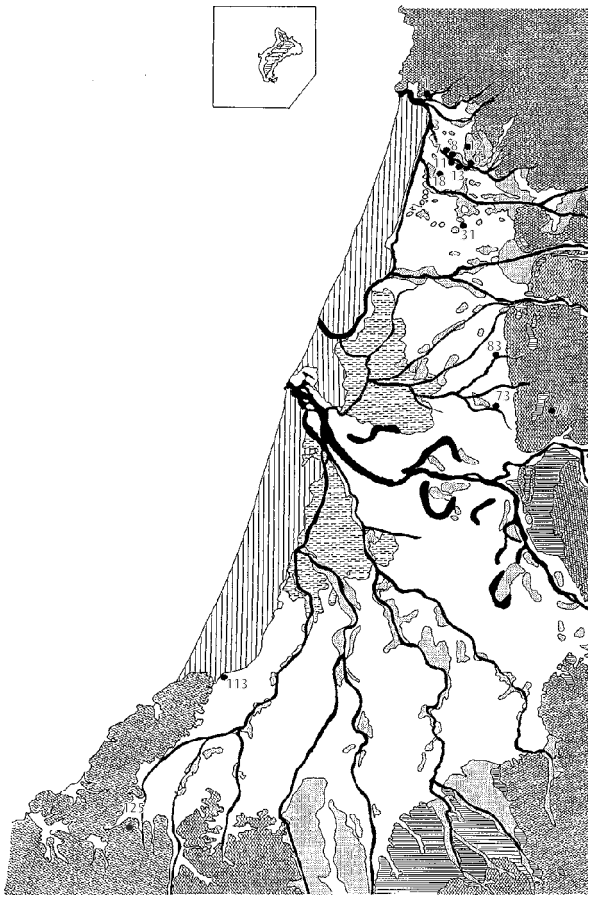


図 11　庄内地方８世紀第３四半期遺跡分布図

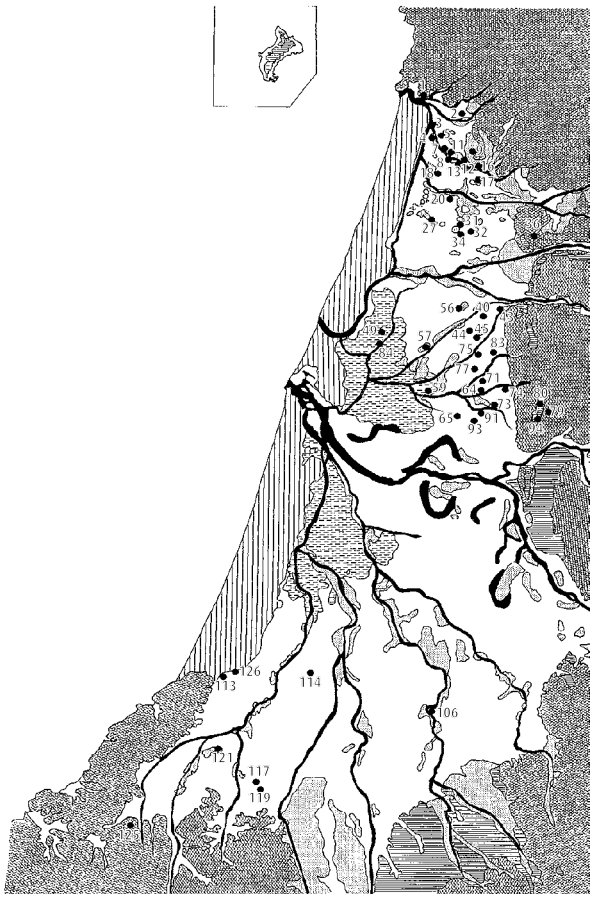


図 12　庄内地方８世紀第４四半期遺跡分布図

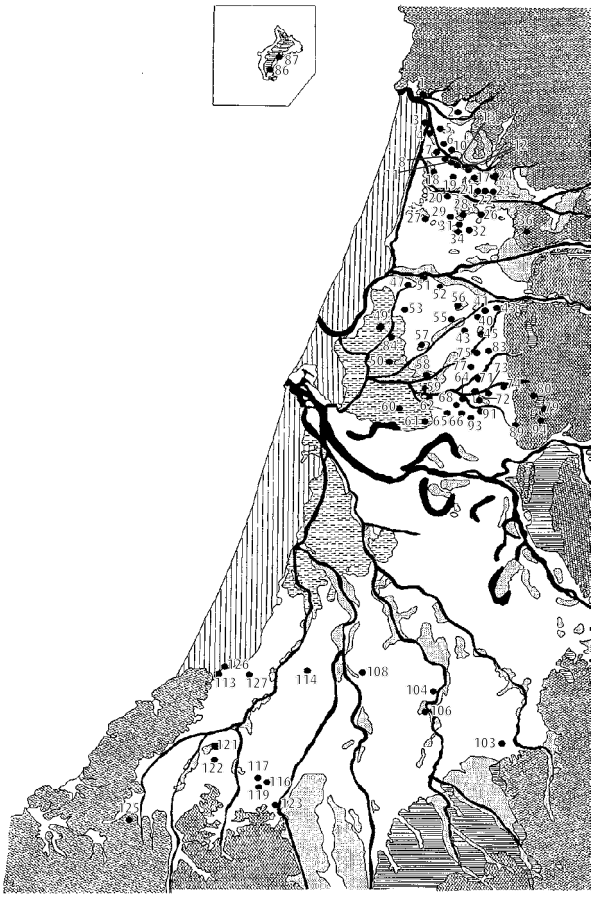


図 13　庄内地方９世紀第１四半期遺跡分布図

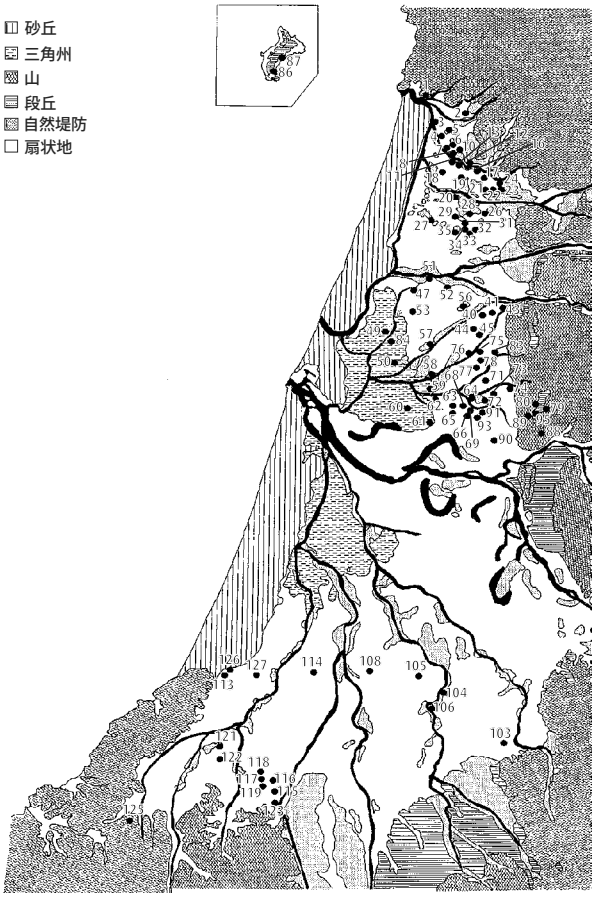


図 14　庄内地方 9 世紀第 2 四半期遺跡分布図

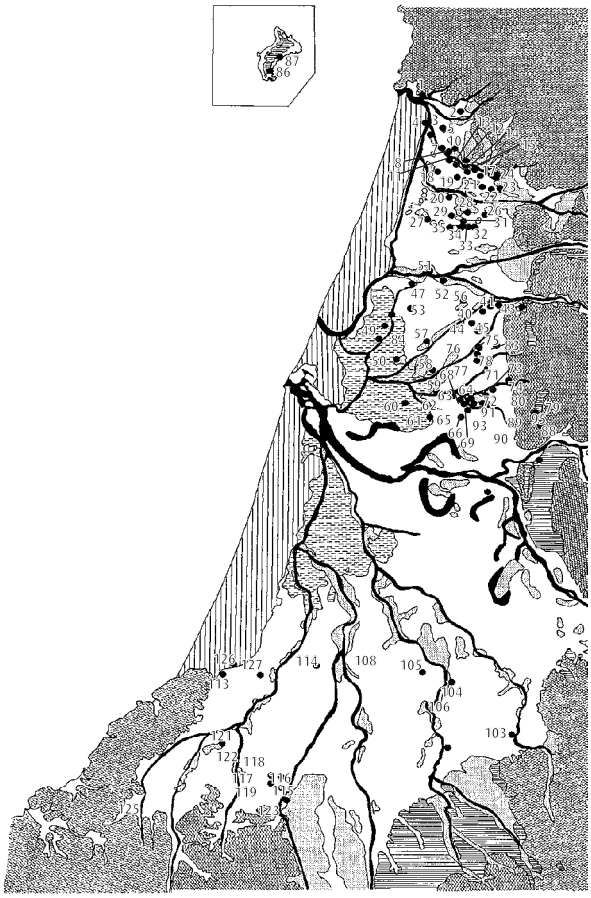


図 15　庄内地方 9 世紀第 3 四半期遺跡分布図

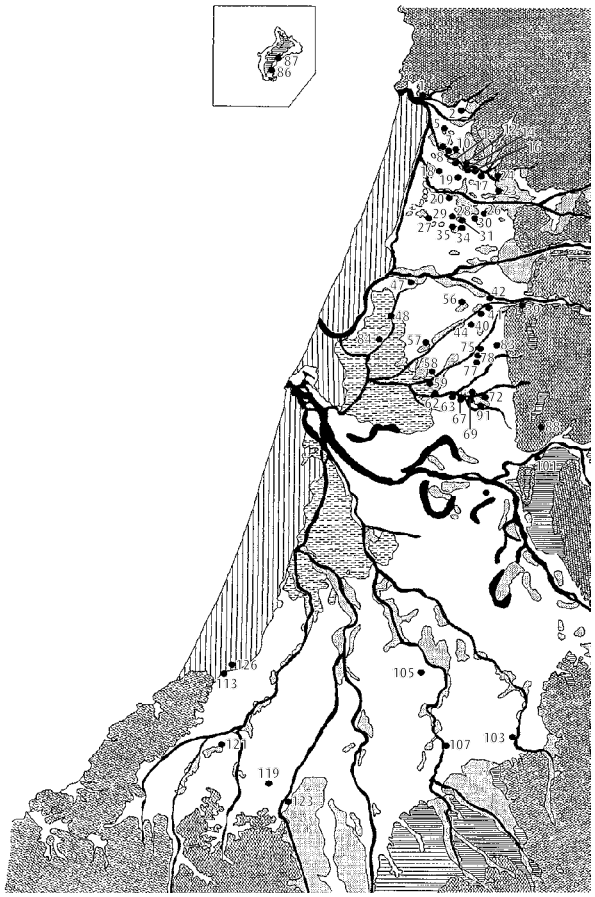


図 16　庄内地方 9 世紀第 4 四半期遺跡分布図

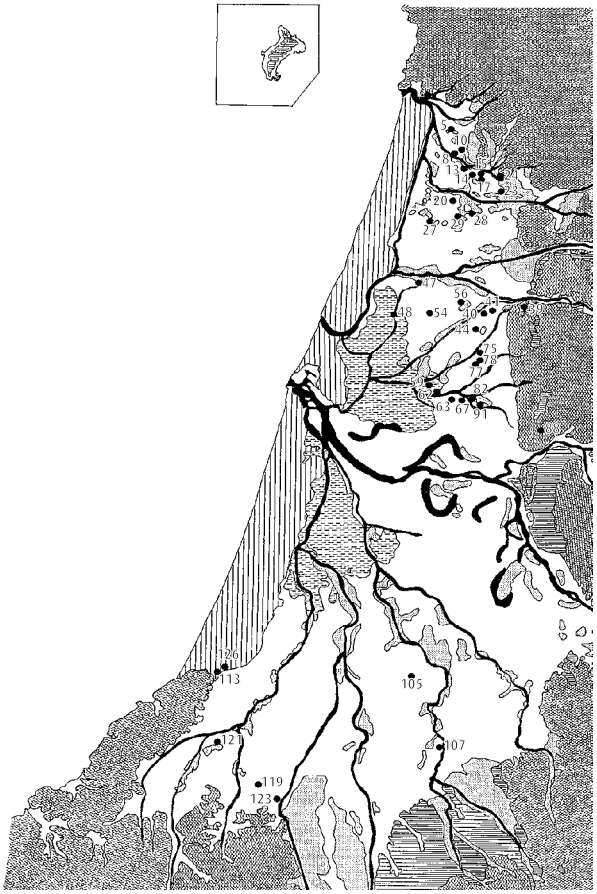


図 17　庄内地方 10 世紀第 1 四半期遺跡分布図

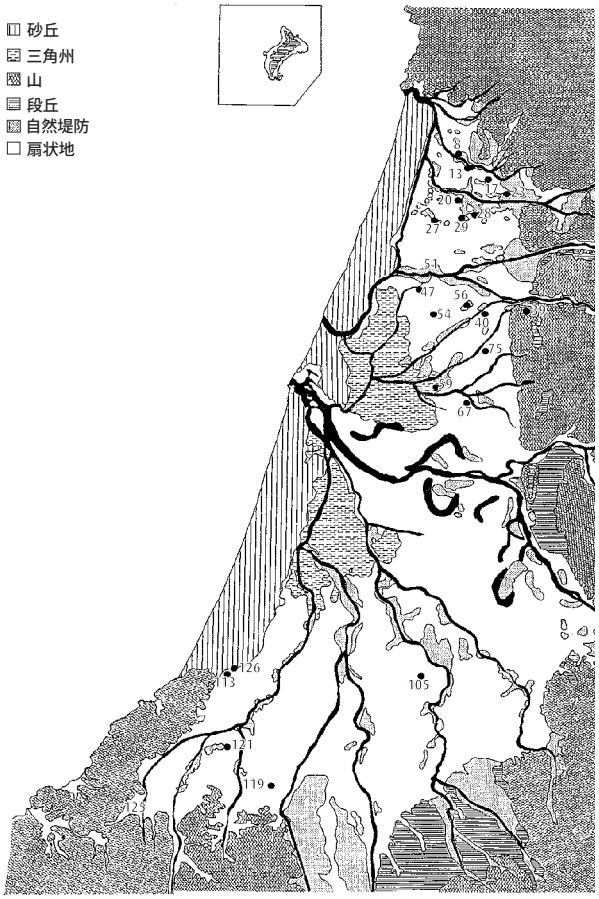


図 18　庄内地方 10 世紀第 2 四半期遺跡分布図

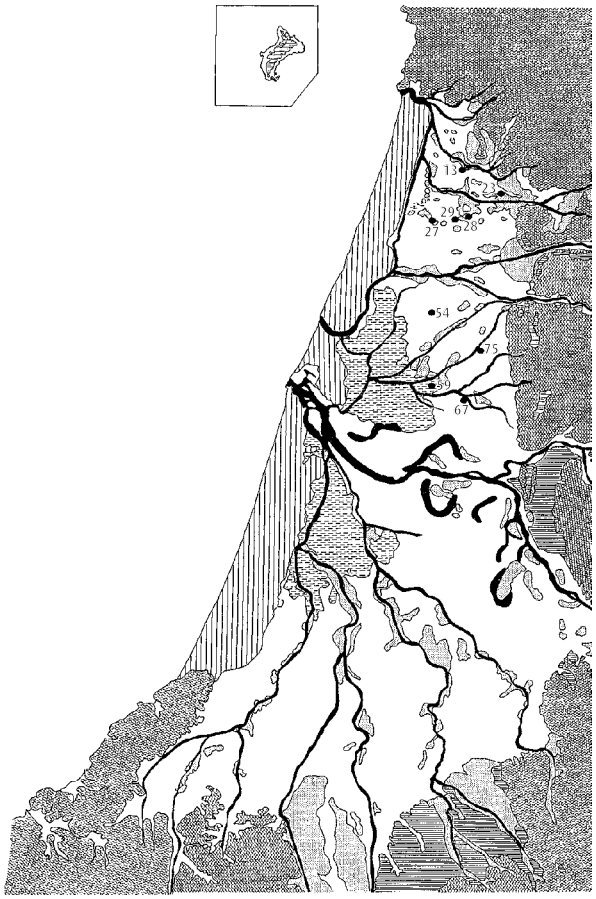


図 19　庄内地方 10 世紀第 3 四半期遺跡分布図

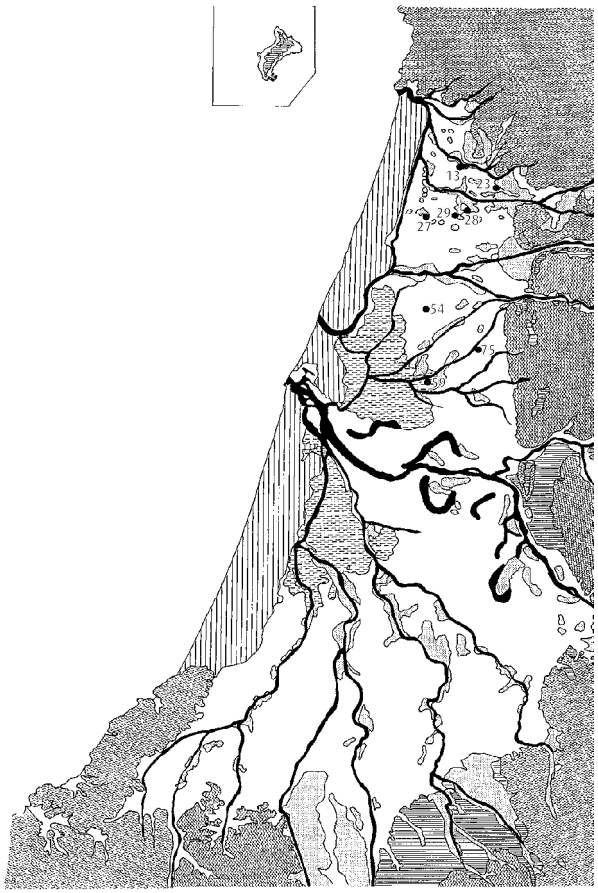


図 20　庄内地方 10 世紀第 4 四半期遺跡分布図

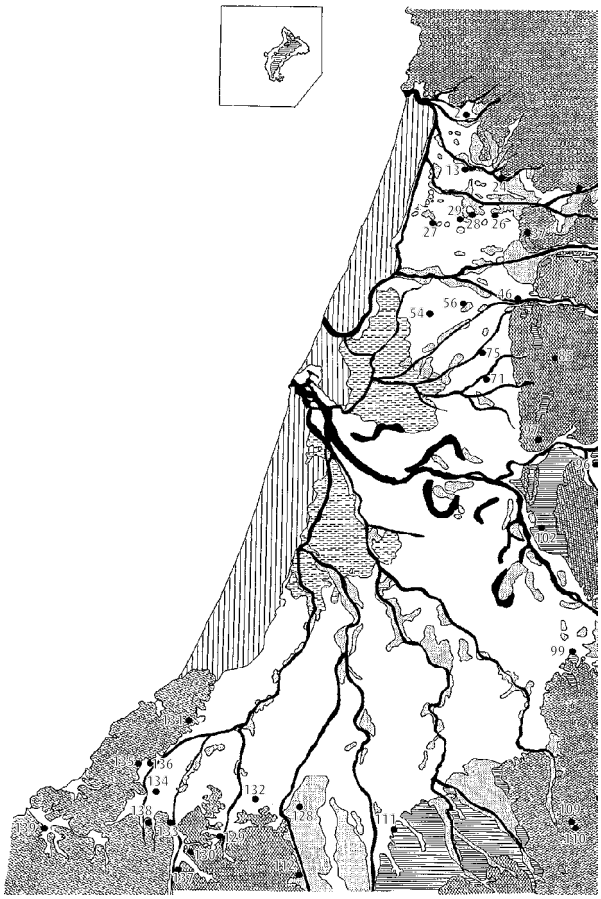


図 21　庄内地方 11 ～ 12 世紀遺跡分布図

る。余目町槇島古墳は最上川の自然堤防上に立地するものと思われる。時期や周辺集落は不明ながらも、最上川を足下にするこの位置は、最上川の交通を掌握する者がその被葬者として相応しい。先程来の検討からすれば、川湊の存在や駅の存在などから、庄内平野から最上川を交通する、内陸部への結節点が通時的にこの場所に構えられることがわかる。酒田市関Ｂ遺跡は、新井田川の自然堤防上に営まれているものと考えられる。ここには、４世紀代の周辺集落は見いだすことができず、孤立的であるが、方形周溝墓の造営などからすれば拠点的な集落と見ることができる。遊佐町丸池古墳は、庄内平野のもっとも奥に位置する。ここから北には鳥海山の裾野が伸び障壁となっている。ここは、吹浦湊に近接し、足下は海抜５m以下の標高を示している。周辺集落は不明なもののおそらく吹浦湊を管掌した者たちの古墳であろう。古代の吹浦遺跡も谷を挟んだ向かい側に位置している。またこのあたりから山越えをして北に抜ける道は、現在は失われているものの、浜街道が整備される以前の街道であったという。ここは交通の要衝でもあると見ることができる。こうした陸上と海上の交通をも掌握した者たちが被葬者として考えられよう。

以上から庄内平野の古墳時代の集落と墳丘墓についてまとめれば。古墳時代の遺跡の分布は、集落と古墳を持つ地域が２箇所、古墳だけのもの２箇所、集落と方形周溝墓をもつもの１箇所と、およそ５箇所を地域として見いだすことができる。これを先程来検討した図３の地域名を適合させれば、大山・鶴岡地域、藤島地域、余目・平田地域、生石地域、吹浦地域と見ることができ、阿部明彦が３ないし４つの地域群に分けた古墳時代の遺跡のまとまりとも大略符合する。図４によれば、こうした遺跡はほぼ標高 10 ～ 15m の場所に立地していることもわかる。

②８世紀代の遺跡の展開

この地域に、ある程度の密度をもって遺跡が存在するのが８世紀後半の時期からである。これ以前から文献史では盛んに移民の記述が認められるが、８世紀の第１～２四半期の遺物は得られておらず、考古遺跡の知見からはこうした事実は確認できない。８世紀の第１四半期、あるいは８世紀の第２四半期の遺跡は今だ確認されてはいないのである。この８世紀代前半以前の遺跡の希薄な傾向は日本海側通有の現象である。８世紀代、第３四半期から第４四半期までの遺跡の分布図が図 10 ～ 21 である。

８世紀の第３四半期（図 11）の遺跡は、この地域で最初に分布的展開を示す遺跡であるが、その存在は非常に少ない。分布は、川北では吹浦湊周辺、高瀬川周辺、遊佐町周辺、新井田川、平田川周辺となる。合計しても十数遺跡を見いだすに過ぎない。川南では、大山川周辺にわずか１遺跡を見いだすに過ぎない。開発の中心は川北にあり、庄内地域の古代の開発は、川北遊佐地域を中心として始まったことがわかる。高瀬川周辺では、遺跡群の成立と同時に、剣龍神社古窯跡群が成立する。新井田川・平田川周辺でも、遺跡数は少ないものの、遺跡が分布し始めると、時を同じくして泉谷地古窯跡群が成立する。生産遺跡と消費遺跡がセットで成立する姿を注目しておきたい。城輪柵跡を中心とした国府域の周辺には遺跡は希薄である。

立地景観としては、基本的には従前古墳時代の遺跡分布を踏襲しているものと考えられる。大山地域、平田地域、吹浦・北目・遊佐地域に分布している。大山川流域と藤島川流域には目立った遺跡の存在を追うことができないが、資料を子細に検討すれば恐らく見いだされるものと予想される。地形から検討すれば、この時期の遺跡は特に低湿な低地にはほとんど営まれていない。

注目されることは、８世紀第３四半期に成立した遺跡は、その後少なくとも９世紀後半までの１世紀間は存続し、その地域の中核的遺跡に成長して行くことである。逆にこの遺跡と並立するように成立した古窯跡群は、９世紀の半ばほどで生産をある程度終了してしまっている。

８世紀の第４四半期（図 12）の遺跡は、この地域で最初に広範な分布的展開を示す遺跡である。遺跡数も増加し、各流域毎に分布が知られるようになってくる。分布は、川北では吹浦湊周辺、高瀬川周辺、遊佐町周辺、新井田川、平田川周辺となる。川南では、大山川周辺と、藤島川周辺に遺跡を見いだすことができるが、その数は川北に較べて圧倒的に少ない。ここでもまた開発の中心は川北にあったと考えられる。北目長田遺跡や上高田遺跡、高瀬川周辺では北目長田遺跡や上高田遺跡が成立する。前代まで剣龍神社古窯跡群のみであった窯跡群も、唐戸岩窯跡群が操業を開始し、同じくして恐らく、宮山坂窯跡群も操業を開始するものとおもわれる。注目すべきことに古代墓もこの時期に営まれる。遺跡の展開と連

動して、生産遺跡の活動も活発化する。新井田川・平田川周辺でも、国府擬定地城ノ輪柵跡が成立し、周辺にも国分寺擬定地堂の前遺跡などが成立し、周辺にもたくさんの遺跡が営まれるようになる。低地の特に低湿な後背湿地の自然堤防にも、家際遺跡、中谷地遺跡が営まれ、この地域の開発が本格化したことを知ることができる。泉谷地古窯跡群は前代に引き続いて操業し、泉森南窯跡では城ノ輪柵跡出土と同范の瓦が生産され、国府との強い結び付きを知ることができる。新たに願瀬山古窯跡群が操業を開始する。生産遺跡と消費遺跡が国府とその工房というセットで成立する姿を注目しておきたい。大山川流域と藤島川流域には少数であるが遺跡の存在が知られるようになる。ここでも、遺跡の様相は川北と同一であり、この時期になると遺跡が増加し始める。とくに大山川周辺には、この時期から、古代駅家と関係する木簡が出土した山田遺跡などが知られる。先述のとおり、古代官道が通っていた。江戸期の街道である浜街道はこれを踏襲するものであろう。特筆される遺跡としては、月記遺跡が上げられる。ここからは奈良三彩の壷蓋が出土している。

この時期は、川北本楯地域で開発が著しい。川南の赤川、藤島川、大山川中流域でも開発が進行する。基本的には国府やその関連遺跡が成立し、特に低地への開発が進行した。ここには提示していないが、亀ケ崎城跡の調査に関わって須恵器甕破片が出土している。水磨の著しい破片であったが、出土位置はほとんど最上川の河口であり、低地への開発あるいは湊の存在を暗示する事例であろう。開発の様相は前代を基本的には引き継いではいるが、本楯地区の開発が進行している様子を見ることができる。開発にかかる中心的地域としては、北目地域、遊佐地域、新たに加わった本楯地域、生石地域、平田地域、藤島地域、鶴岡地域、大山地域となる。庄内平野の開発の転機と言えるであろう。

③９世紀代の遺跡の展開

９世紀第１・２・３四半期の遺跡（図 12 ～ 15）は、８世紀の第４四半期の遺跡の立地を引き継いで、展開した時期と言える。遺跡はこの地域に広範な分布的展開を示す。遺跡数も８世紀第４四半期からさらに増加し、各流域毎に分布が知られるようになっていたものが、その立地を自然堤防上から低地まで広げ、前代以来の面的展開がよりいっそう顕著になる。その分布は、川北では前代と同様であり濃密である。このために遺跡の営まれる地域がより具体的に把握できるようになる。特に遺跡立地の空閑地に注目すれば、日向川と荒瀬川の合流点付近から砂丘に当たって流露を南下させるあたりまでは遺跡が分布しない。このあたりは、日向川の流路変更などに伴って、安定しなかったものと思われる。図２の流域分布図にはこの地域は八幡地域として表わしている地域にほぼ適合する。さらに先述の歴史地理的状況からすれば、砂堆が季節風によって閉塞した場合にはこの場所は容易に滞水していた。また、近世の村立てによって成立した新田地名も見受けられることから、この地域には、もともと遺跡の分布は希薄であり、耕作地と見ることもできようが、河川の流路の変更が激しい荒撫地であったのであろう。ただしここを境として地域が二分されることは重要である。図２・３からすればおそらく用水域も異なっているので、違った権益の支配となることは明白であり、ひいては国衙領とそれ以外の開発地の境界にあたる空白地を形成していたものと考えられよう。興味深いことに高瀬川の自然堤防上には遺跡が濃密に分布するのに較べて、日向川と荒瀬川の形成した自然堤防上には８世紀第３四半期以来、本稿で扱う時期を通して遺跡の分布は希薄である。意図的なものであるのかどうかは後考を期したい。

また遺跡が集中する地域がいくつか見受けられるようになってくる。遊佐地区の南側は東田遺跡や下長橋遺跡を主体とする遺跡群である。特に下長橋遺跡には、官衙的な配置が見られる。本楯地域のより南の地域に新たな遺跡の集中域が見られる。これは、地域的には生石地区と平田地区の北半部であり、生石２遺跡や関Ｂ遺跡、熊野田遺跡がその中には含まれ拠点的な遺跡となる。川南では、やはり遺跡数は川北に較べて圧倒的に少ない。ここでもまた開発の中心は川北にあったと考えられる。またこの時期に遺跡の営みの頂点を迎える遺跡も多い。北目地域と遊佐地域では前代まで操業していた剣龍神社古窯跡群が操業を低下させ、唐戸岩窯跡群が操業を発展させる。恐らく宮山坂窯跡群も同様の傾向性を示すものと予想される。新井田川・平田川周辺でも、国府擬定地城ノ輪柵跡が成立し、周辺にも国分寺擬定地堂の前遺跡などが成立し、周辺にもたくさんの遺跡が営まれるようになる。後田遺跡もこうした傾向性に連なるものであろう。相変わらず低地の特に低湿な後背湿地の自然堤防に

も遺跡が営まれている。最上川の自然堤防には千河原遺跡が営まれる。最上川の自然堤防上に営まれる遺跡は少なく特殊な立地と言える。牧島古墳が営まれた場所は、このすぐ東側にあたる。

泉谷地古窯跡群は前代に引き続いて操業し、願瀬山古窯跡群も操業するが、新たに９世紀第２四半期代に操業を開始した山海窯跡に生産の中心を移行させて行く。

川南の状況であるが、大山川流域に前代以来展開していた遺跡は減少し、鶴岡地域の西側に分布の集中域を認めるようになる。とくに９世紀第２四半期になるとこの傾向は著しい。川北では前代の遺跡の立地がより充実する方向に移行するが、ここでは、大山川流域から赤川流域への遺跡の集中傾向が伺われる。それ以外の遺跡の分布は前代と同様に緩慢である。生産遺跡の様相も荒沢窯跡の生産は終息していく。

この時期は、本楯地区に国府関連の遺跡が展開する時期である。遊佐地域と吹浦地域、北目地域には前代と同様に遺跡が展開する。鶴岡地域では新たに遺跡の集中箇所が明らかとなってくる。開発がもっとも集中して行われた時期と見ることができる。

９世紀第１・２・３四半期の遺跡（図 13・14・15）は、基本的には８世紀の第４四半期の遺跡の立地を引き継いで展開したが、９世紀第３四半期に入ると遺跡の分布は変化を見せ廃絶する遺跡が多くなってくる。９世紀代に入って新たに展開する遺跡は、ほとんどが９世紀第１四半期から営まれる。まれに、第２あるいは第３四半期から営まれるものもあるが、これらはほとんど９世紀の中で終焉を迎える。とくにその画期は９世紀第４四半期である。

遺跡は前代を引継いで広範な分布的展開を示すものの、遺跡数は減少傾向へと突入する。遊佐地域ではこの傾向は見られない。本楯地域では全体として遺跡が減少している。より南の集中域である生石地区と平田地区の北半部では、生石２遺跡や関Ｂ遺跡、熊野田遺跡などは引き続いて残るが前代に較べると、遺物の様相は少なくなる。

須恵器生産も、山海窯跡群のみに集約されるようになり、それまで存在した窯跡群は生産を低下させやがては廃絶するようになる。基本的には、国衙の周辺であるこの上田地域に生産が集約されたものと見ることができよう。川南ではこの時期に遺跡の営みがまた減少する。しかしながら、基本的な主要遺跡は存続している。大山川流域、鶴岡地域、藤島川流域にかすかに分布の集中域を認めるようになる。

この時期は、本楯地区の国府関連の遺跡が展開から終焉へと向かう時期である。興味深いことに遊佐地域と吹浦地域、北目地域には前代と同様に遺跡が展開する。本楯地域ではやや減少する、平田地域でも減少する。鶴岡地域では基本的には前代の様相を引き継ぐが、遺跡数は減少する。また、重要なことは、この時期以降あたらしく遺跡が成立することはなくなる。

画期となる９世紀第４四半期（図 16）を過ぎ、遺跡数は減少し分布も前代の減少傾向をさらに進行させることになる。地域全体として、遺跡の分布減少傾向へと突入するものの、遊佐地域ではこの傾向は見られない。本楯地域では全体として遺跡が減少し、低地へと展開していた遺跡群が営まれなくなってくる。この時期には前代に施行された条里制が維持できなくなっていくと見ることもできようか。より南の地域に存在した遺跡の集中域である生石地区と平田地区の北半部では、生石２遺跡は廃絶され、関Ｂ遺跡、熊野田遺跡などは引き続いて残るものの、遺跡の盛期はすでに過ぎている。

須恵器生産も終焉を迎える、山海窯跡群の生産は、あかやき土器が中心となり、窯体を使用せず、窯わきの土坑などによる生産へと変化し、やがては生産が退廃し、遺跡自体も廃絶するようになる。川南ではこの時期に遺跡の営みがまた減少する。しかしながら、基本的な主要遺跡は存続している。大山川流域、鶴岡地域、藤島川流域にかすかに分布の集中域を認めるようになる。興味深いことに遊佐地域と吹浦地域、北目地域には前代と同様に遺跡が展開する。一方国府域の中心である本楯地域では減少する。同様に、平田地域でも減少する。これは、国府域の開発の一環として計画集落が分出され、特に低湿な地域に向かって展開していたものが、国府機能の衰退とともに、終焉をむかえるということであろう。鶴岡地域では基本的には前代の様相を引き継ぐ。

④ 10 世紀代の遺跡の展開

10 世紀第１・２四半期の遺跡（図 17・18）は、遺跡数は減少し分布も前代の減少傾向をさらに進行させることになる。遺跡の分布減少傾向が緩慢であった遊佐地域でもこの傾向は強まってくる。本楯地域ではさらに遺跡が減少し、城ノ輪柵跡や八森遺跡といった国府関連の

遺跡でしか存在し得なくなる。生石地区と平田地区の北半部でもこの傾向は著しい。須恵器生産はこの時期には廃絶する。川南では基本的な主要遺跡は存続している。大山川流域、鶴岡地域、藤島川流域にかすかに分布の集中域を認めるようになる。鶴岡地域では基本的には前代の様相を引き継ぐ。この時期でも遊佐地域と吹浦地域、北目地域には前代と同様に遺跡が展開している。本楯地域では減少し、平田地域を包括して一つ地域として捕らえられるような分布傾向を見ることができる。

10 世紀第３・４四半期の遺跡（図 19・20）は、前代に遺跡の分布減少傾向が緩慢であった遊佐地域でも、この時期に廃絶する遺跡が多くなってくる。本楯地域、上田地区と平田地区の北半部では、遊佐地域よりも若干早くこの傾向が始まる。川南では遺跡の分布はほとんど知ることができなくなる。この時期では、遺跡の分布は遊佐地域と吹浦地域・北目地域、本楯地域・平田地域のみで分布を見ることになる。鶴岡地域では遺跡の分布を知ることができなくなる。

⑤ 11 ～ 12 世紀代の遺跡の展開

11 世紀第１四半期 ~12 世紀後半の遺跡（図 21）は、この時期以降、12 世紀までの間、存在する遺跡は、北目地区の上高田遺跡、遊佐地区の東田遺跡・浮橋遺跡・下長橋遺跡。上田地区の境興野遺跡だけである。遺跡、あるいは遺跡の在り方が変化している時期であると考えられる。なお、この時期の遺物なり遺構なりが明白でなくなるというのは、東北地方あるいは北陸地方の通有の現象である。なお、土器生産の低減に伴って、その代替として木器が大量に出土し、従来土器が持っていた機能を補完する遺跡と言うのは、管見の限り見いだせない。

12 世紀後半～ 13 世紀の遺跡（図 21）は、11 世紀の半ば以降、遺跡の存在を遺物によって確認することはできなくなっていくが、12 世紀も基本的には同様の傾向性を見いだすことができる。12 世紀の遺跡として、集落遺跡と、経塚などの宗教遺跡をあげることができるが、集落遺跡の割合に比較して、経塚などの宗教遺跡の割合が高い。川北では集落遺跡としては、北目地区の増川遺跡、遊佐地区の大楯遺跡、東田遺跡などをあげることができる。大楯遺跡はこの時期、12 世紀の中頃になって初めて成立し、中世遺跡の成立という意味合においては、升川遺跡とともに、庄内平野全体の中でもっとも早い。本楯地区では、城ノ輪柵跡で須恵器系陶器壷や庭田遺跡で白磁が出土している。また周囲の山々には経塚が営まれるようになる。川南では、10 世紀の第３四半期以降、遺跡の分布は明確ではなかったが、この時期になると、鶴岡市の南側田川地区を中心として遺跡の分布を見るようになってくる。鳥居上遺跡､田川館遺跡では、12 世紀代のかわらけが出土している。さらにこれらの周囲には経塚が営まれるようになる。また、骨蔵器として須恵系中世陶器を使用した、火葬墓が出現する。七日台墳墓群は田川太郎行文の館跡と伝える場所を見下ろすところに、11 基の集団火葬墓が営まれている。田川太郎に連なる者達の墓所であろう。

（２）遺跡の様相

遺跡の分布における地域性、地域的・時期的な遺跡の動態について、遺跡群に見る、地域的要素の展開を、時期毎に検討してみたい。庄内平野は川北・川南と分けられるが、古墳時代は、川南に遺跡が多く、川北には遺跡が少ない。しかしながら、古代に入ると、川北に遺跡が主体的に分布し、川南には少ない。これは、遺跡の調査精度は、川北の方が密であり、川南の遺跡の調査はあまり伸展していないということもあるが、地理的環境の中で検討したように、基本的に古代の開発は川北を中心とするのであろう。ここでは、こうした遺跡の時期的変遷を明らかにするために、遺跡の様相、須恵器生産、初期貿易陶磁器、施釉陶器、古代墓について分析し、特徴的要素を把握し、遺跡相の変化を明らかにしたい。

①遺構から見た遺跡の傾向

以上遺跡の動態から見た、遺跡の在り方に対して、以下で検討を加えたい。最初に遺構から見た遺跡の類型化を試みたい。この地域の遺跡では、基本的に掘立柱建物で構成される遺跡がそのほとんどである。縦穴住居跡は非常に少ない。佐藤庄一、植松暁彦、石井浩幸、鈴木良仁、武田和宏、渡辺薫がこの地域の遺構の様相についてまとめている[80)]

こうした成果に習えば遺跡をつぎのように類型化できる。

Ａ類　　；掘立柱建物だけで構成される類

Ａ―１類；規則的な建物配置を持つ類ものＬ字状あるいはコ字状の建物配置を持つもの

Ａ―２類；規則的な建物配置を持たない類もの

Ｂ類　　；掘立柱建物と縦穴住居跡で構成される類

Ａ類として分類したものは、掘立柱建物だけで構成する類である。庄内地方の古代遺跡のほとんどはこの類に連なる。これを、遺構の配置の様相と複合させれば、さらにＡ－１とＡ―２の２つの類に分けることができる。掘立柱建物のみで構成されるＡ―１類は、八森･堂の前･沼田・大坪・小深田・城ノ輪柵・南興野・手蔵田５・生石２・西谷地遺跡などがあり、官衙的な建物の類型と見ることも可能であろう。Ａ―２はその他の遺跡であり、一般集落と理解したい。先に検討した通り、庄内地方の遺跡の展開は、８世紀第３四半期から顕著となり、掘建柱建物を主体として遺跡が営まれている。これは北陸での遺跡のありかたと共通している。宇野隆夫によれば、８世紀の半ばを過ぎた頃から、従来の縦穴住居は掘建柱建物に替わっていき、この動向は、濃淡はあるものの北陸に共通する現象であるという[81]。庄内平野における、８世紀後半からの集落が、北陸の様相と共通し、掘建柱建物を中心とした建物で構成されるということは、両地域の強い共通性を暗示している。

Ｂ類は掘立柱建物と縦穴住居跡で構成される類である、庄内地域で縦穴住居跡を持つ遺跡は合計で７遺跡、川北では吹浦遺跡 11 棟（９世紀前半)、地正面遺跡２棟（９世紀後半)、山楯８遺跡１棟（９世紀後半)、俵田遺跡１棟 (9 ～ 10 世紀） 4 遺跡。川南では千河原遺跡９棟（10 世紀)、鶴岡市岡山遺跡１棟 (10 世紀後半)、西谷地遺跡４棟（９世紀前半）の３遺跡となる。縦穴住居跡が営まれたのは、９世紀前半と９世紀後半から 10 世紀の２時期である。まとまって営まれるのは、吹浦遺跡と千河原遺跡のみである。吹浦遺跡、地正面遺跡、西谷地遺跡は存続期間も一世紀を越え、その地域の中核的な遺跡であると考えられる。千河原遺跡は主体となる時期は９世紀後半から 10 世紀代であるが、最上川河岸の遺跡であり流通の要衝である。こうしたことからすれば、８世紀第３四半期に登場した中核的な遺跡に縦穴住居跡が営まれることがわかる。吹浦遺跡も吹浦湊を足下に見る場所である。西谷地遺跡も背後の山を越せば加茂湊に直結している。交通の要衝にこうした縦穴住居と掘立柱建物が同時併存する遺跡の営まれた可能性が指摘できる。

②庄内地方の須恵器と土器の生産

庄内地方の須恵器と土器の生産についての最近の研究としては、佐藤庄一、阿部明彦、高桑弘美、植松暁彦、伊藤武士らの論功がある[82]。須恵器や土器についての編年的研究については以上の論功に拠られたい。小稿では紙数の関係もあり詳述しない。ここでは、須恵器生産に関係しては遺跡の分布の検討上重要な、古窯跡群の成立と展開について検討する。

庄内地方の古窯跡群は、平野を取り巻く丘陵沿いの斜面地に営まれている。これらはいくつかの群を構成する（図６)。古窯跡群の存在を地域毎に分ければ、大きく最上川の北側の川北と南側の川南に分けられ、さらにいくつかの地域にまとまりを知ることができる。川北に存在する古窯跡群を庄内北部古窯跡群、川南に存在する古窯跡群を庄内南部古窯跡群とする。庄内北部古窯跡群には、剣龍神社古窯跡群、宮山坂古窯跡群、唐戸岩古窯跡群、泉谷地・山海古窯跡群がある。このうち内容の検討ができるのは、剣龍神社古窯跡群、唐戸岩古窯跡群、泉谷地・山海古窯跡群である。庄内南部古窯跡群には、立川古窯跡群、鶴岡南部古窯跡群、荒沢古窯跡群、鶴岡西部古窯跡群がある。このうち内容の検討ができるのは、荒沢窯跡群である。この他に、内容的には明確ではないが、羽黒町の松ケ丘地区と羽黒町の鎌田地区に古窯跡群が存在した[83]。この位置は、立川古窯跡群と鶴岡南部古窯跡群の中間付近になる。以上からすれば、庄内地方には、詳しい検討は十分ではないが、９箇所の古窯跡群が存在することになる。

時期的な検討が可能な資料をもとにして、各窯跡群の様相を検討してみたい。この地域に窯業生産が開始するのは８世紀中葉の第３四半期ころである。庄内北部剣龍神社西窯跡と泉谷地２号窯跡が確認されている。これらは、回転ヘラ切りの切り離し技法を持ち、法量のやや大きな平底の坏や高台付坏を生産している。８世紀後半の８世紀第４四半期を中心とした時期には、泉谷地１号窯跡、荒沢１号窯跡、唐戸岩窯跡などが生産を開始する。９世紀第１四半期は中心とした時期には、泉谷地・山海古窯跡群を構成する、山楯５SQ １窯跡や願瀬山１号窯跡、泉森窯跡が生産を開始する。ヘラ切り無調整技法の坏を生産し、泉森窯跡では城ノ輪柵跡出土軒丸瓦と同范の瓦が焼造されている。これらは、城ノ輪柵跡の遺構の年代観からして創建瓦に該当する遺物と考えられよう。８世紀から生産を開始した古窯跡群はほぼこのあたりで、生産を中止する。９世紀第２四半期～第３四半期

には泉谷地・山海窯跡の山海窯跡が生産を開始する。ここは大規模な窯跡群である。製品の切り離しは回転糸切り技法に統一され高台付き坏や蓋の生産は極端に減少する。９世紀第４四半期から10世紀にかけては、山海窯跡群で生産が確認されている。山海窯跡SQ4遺構では、酸化焔焼成の製品が主体的に焼造され、いわゆるあかやき土器の生産が増加する。窯体を使用した焼造は不明確になり、山海窯跡SK17・18・19に見る窯脇の土坑を使用したような生産に移行していく。

以上まとめれば、８世紀の第３四半期にこの地域に窯跡群が最初に展開する地域は、遊佐町の北目地域と、酒田市・平田町にまたがる生石地区の２地区となる。ここは庄内地方で最初に集落の展開が見られところである（図11）。集中するのは北目地区であるが、この地区の遺跡群の位置付けというものは未だ確定していない。北目地区の遺跡群と剣龍神社窯跡群は一体になって成立している。一方生石地区は、近傍に、出羽国府である城ノ輪柵跡遺跡や国分寺擬定地の堂の前遺跡さらには後田遺跡などの遺跡群が控えている。こうした遺跡群を中心として供給するために、泉谷地・山海窯跡群は一体として成立しているのものと見ることができよう。８世紀第４四半期には、遺跡数も増加するとともに、窯跡群も広範囲に展開を見せる、泉谷地１号窯跡、荒沢１号窯跡、唐戸岩窯跡あるいは、内容的には不明確ながらも、宮山坂窯跡群、その他の川南の窯跡群もこの時期から９世紀第１四半期にかけて操業を開始するものと思われる。９世紀第１四半期には、国府関連の操業も見られるようになる。遺跡数も９世紀第３四半期までは増加あるいは維持されるが、この時期の窯業は、山海古窯跡の生産が中心となっていく。

各窯跡群の詳細が明らかにされていないため十分な検討ができないが、大まかには次のような見通しを持つことができる。８世紀第３四半期に遊佐地区と上田地区に成立した窯跡群は、次の８世紀第４四半期には川南地域まで展開し、９世紀第１四半期になると、さらに面的に展開する。９世紀第２四半期まではこの傾向は続くが、９世紀第３四半期になると、窯業生産は泉谷地・山海窯跡群に集約されていく。さらに、９世紀第４四半期から10世紀初めには窯業生産は終焉を迎えることになる。

土器については、遺跡分布の終末の問題と関連する、柱状高台もつ土器についてふれておきたい。八峠興は東北・北陸・甲信・中国（山陰）などを柱に、柱状高台を持つ土器群の分類を行い、分布や変遷さらには画期について考察している。この中で、下長橋遺跡SX1105出土の柱状高台を他地域の比較から、11世紀初頭におく編年観を示している[84]。従来下長橋遺跡SX1105出土土器は、10世紀後半前後の年代観で理解されてきたが、柱状高台の成立を全国的な展開での指標とすれば、11世紀前半の年代観をもつ可能性が指摘された。本稿では、編年観の擦り合わせは残るものの、八峠の編年観に習い、柱状高台を11世紀初頭の定点として理解しておきたい[85]。

③庄内平野の初期貿易陶磁器

初期貿易陶磁器は越州窯系青磁、邢州窯系あるいは定窯系白磁が存在する[86]。おおむね平安時代の輸入陶磁器にあたる。出土遺跡は、城輪柵跡・堂の前遺跡・後田遺跡・境興野遺跡・下長橋遺跡・東田遺跡・塔ノ腰遺跡の７カ所。出土している器種は、青磁類は椀、坏、香炉蓋。白磁は椀が存在する。出土遺跡の傾向としては、国府などの官衙関連遺跡での出土が多い。出土遺跡は、３つの地域に大きくまとめることができる、「遊佐地域」、城ノ輪柵跡の周辺地域である「本楯地区」「平田地区」、そして「鶴岡地域」である。これらの地域はいづれもこの時代以前からの開発を知ることのできる地域であり、出土遺跡は存続期間が１世紀以上にもわたる中核的遺跡が多い。初期貿易陶磁器を出土した、城輪柵跡は９世紀代の古代出羽国府と考定される遺跡であり、堂の前遺跡・後田遺跡の所在はこれに近接し・境興野遺跡はこれらからやや南に離れるものの、これらは深く関係するものと考えられる。下長橋遺跡・東田遺跡はこれらのさらに10kmほど北側、遊佐町に所在する遺跡であり両者は近接する。塔の腰遺跡はこれよりも20㎞ほど南下する。それぞれは、遊佐地域、本楯地域、生石地域、鶴岡地域にあたる。

次にそれぞれの様相であるが、小野忍氏のご教示によれば、出羽国国府遺跡である城輪柵跡では初期貿易陶磁が複数存在するという。報告書が未刊のため全体をうかがい知ることはできない。出羽国国分寺に考定される堂の前遺跡では、越州窯系青磁碗（体部破片）１点 越州窯系青磁坏（口縁部破片）１点、褐釉（？）蓋１点が出土している。褐釉（？）蓋は、体部の下半と上半を欠いている。火中しているためか、釉薬は黄緑色を呈するも

のが部分的に残っているにすぎない。これは鴻臚館跡ＳＫ 255 の事例から、褐釉の可能性があると考えられる。後田遺跡では、越州窯系青磁香炉２点、越州窯系青磁碗（底部、体部）５点、邢州窯系白磁碗１点が出土し、金箔？を捺した灰釉陶器片なども含まれている。境興野遺では越州窯系青磁碗（体部破片）１点､が出土している。境興野遺跡は北側約２km に城輪柵があり、堂の前遺跡・後田遺跡とも近接する。越州窯系青磁碗は、SK26 土器一括廃棄土抗から、土師器・高台付き土師器・灰釉手付瓶（Ｋ‐14）とともに出土している。この土壙の表土層からは破砕された「瑞花鳳凰八稜鏡」の破片も得られている。下長橋遺跡では越州窯系青磁碗（体部破片）２点が出土している。１点が土抗の覆土、他の１点は遺構外の出土である。東田遺跡では越州窯系青磁碗(底部破片)１点が出土している。塔の腰遺跡では白磁碗(体部破片)１点が出土している。報告書中では、白磁Ⅱ類と分類されていたのものである。胎土の堅緻さや口縁端部形成の様相から、白磁Ⅰ類と見ることができる。

これらの搬入時期であるが、古代陸奥では、宮城県多賀城の事例では、10 世紀前後の年代を決定することができるといい、胆沢城の事例からは、具注暦断簡（嘉祥元年・873 年）とともに、越州窯系青磁碗口縁部と口縁部がやや外反する白磁碗が出土しているということから、９世紀後半の年代を廃棄年代として示すことが出来る。出羽国でも９世紀半ば前後に搬入されたと考えられよう。また、10 世紀の後半代に初期貿易陶磁器の使用は知ることはできなくなる。古代的な土器・陶磁器の使用がこの時期に変化したものであろう。

初期貿易陶磁器の出土する遺跡は官衙関連遺跡であるが、施釉陶器が官衙関連遺跡以外でも出土するのとは異なり、初期貿易陶磁器の出土は官衙関連遺跡に限られる傾向が強い。これはこれらの使用が上級官人などを含む官人層の食膳具や寺院寺院の宗教的儀礼での儀器として使用であったためであろう。特に後田遺跡では、初期貿易陶磁器、緑釉陶器、金箔灰釉陶器などが豊富に出土し、６間×２間の３面庇をもつ大型建物を中心として、コの字状に展開する建物配置は見事である。城ノ輪柵跡や堂の前遺跡に近接するこの遺跡は国司館等の可能性を指摘できよう。分布は、庄内地方の北半、川北の地域にほぼ集中し、とくに本楯地域と遊佐地区の集中が特徴的である。

④庄内平野の施釉陶器

山形県内で、三彩陶器、緑釉陶器や灰釉陶器が出土した遺跡は、現在までに 57 遺跡を数えることができる。出羽国内の施釉陶器に関連する事柄について、主な遺跡の状況を触れれば、次のようになる。三彩陶器は月記遺跡で奈良三彩小壷蓋が出土している。井上喜久男は奈良三彩・二彩の分布の特徴について、その地域の中心的な役割を保ち得る性格のものや、交通の要衝に当たる所であることが多いという[87]。玉田芳英は奈良三彩について、平城宮・平城京での出土状況から、奈良三彩は供養具として使用したものということができるという[88]。現在のところ日本海側では最北の出土事例となっている。

緑釉陶器は城ノ輪柵跡では段皿、稜椀、椀。北目長田遺跡では皿、椀。下長橋遺跡では椀、皿、香炉、小瓶。東田遺跡では椀、皿、水注、香炉。後田遺跡では唾壷、椀。八森遺跡では花紋椀が得られている。このうち奈良三彩は８世紀後半の年代を考定できよう。緑釉陶器の時期的傾向としては、Ｋ‐14 窯式は少ない、Ｋ‐90 窯式は多く、０‐53 窯式や虎渓山窯式は少ない。９世紀中から後半さらには 10 世紀といった時期を中心に緑釉陶器はもたらされていることがわかる。

灰釉陶器は城ノ輪柵跡では長頸瓶、椀、手付小瓶、大坪遺跡では長頸瓶、椀、小瓶、平瓶、段皿、皿、双耳瓶、下長橋遺跡では椀、瓶。東田遺跡では長頸瓶、椀、段皿。後田遺跡では椀、瓶。沼田遺跡では、三足盤、椀が得られている。０‐10 窯式から搬入されはじめ、Ｋ‐14 窯式段階で定量搬入される。Ｋ‐90 窯式段階で多くなりはじめ、その後は徐々に少なくなっていく。９世紀中から後半さらには 10 世紀といった時期を中心に灰釉陶器ももたらされていることがわかる。

施釉陶器は９世紀代には庄内平野はいうに及ばず全県下で分布が展開する。次代 10 世紀に入り庄内地方に分布は集中する。９世紀代は、山形県全体に集落遺跡や官衙関連遺跡が展開する時期でもあり、施釉陶器あるいは初期貿易陶磁器の搬入の背景には、律令政府の強い影響を読み取ることができる。

初期貿易陶磁器の器種構成と、施釉陶器の器種構成が共通することも重要であろう。出土した遺跡の性格は官衙関連遺跡だけではなく、集落遺跡からも出土している。これは、調査範囲外に官衙ブロックが存在して可能

性も存在しようが、集落遺跡に分布するような、施釉陶器のあり方は、官衙遺跡などにまとまって搬入されたものが、在地への再配分によって拡散したものととらえられよう。日本の緑釉出土遺跡について分布を『日本の三彩と緑釉』から知ることができる[89]。当地庄内地域の施釉陶器の分布は、周辺の地域と比較すれば拡散的傾向を見いだすことができる。さらに、複数保有している遺跡の場合には、碗皿以外の器種も保有されるが、1～2点などという保有状況の場合にはその器種は碗皿にほとんど限定される。こうした分布の拡散性と、保有器種の限定性が大きな特徴として存在する。

一遺跡から出土する施釉陶器の出土傾向は、①緑釉陶器のみが出土する場合、②灰釉陶器のみが出土する場合、③緑釉陶器灰釉陶器の両方が出土する場合の3つの場合があるが、①は8遺跡、②は13遺跡、③は4遺跡となる。単独で出土する場合には、碗皿がその器種のほとんどを占めている。両方が出土する場合には、器種は複数になることが多い。この場合には初期貿易陶磁器も含まれることが多い。日常的な供膳具である碗皿が単独で出土する傾向があるということは重要であろう。また、灰釉陶器のみが出土する遺跡のうち大坪遺跡では、多種に渡る灰釉の器種構成を持っていながらも緑釉陶器は出土してはいないという現象からもこうした特徴を認めるのである。

以上初期貿易陶磁器と施釉陶器の様相からは、初期貿易陶磁器を所有する遺跡は、官衙遺跡にほぼ限定されるが、施釉陶器は集落遺跡にも拡大して保有されていることが分かる。また、その分布は、9世紀代では庄内地方の北半、川北の地域にほぼ集中し、10世紀代では、川北地域のみの分布となる。とくに遊佐地区への集中が特徴的である。

⑤庄内地方の古代墓様相

山形県の古代墓の様相については、川崎利夫の研究がある[90]。山口も一部について触れている[91]。庄内地方の古代墓は、火葬墓・土葬墓などが知られている。火葬墓は、遊佐町「宮山坂墳墓群」で、火葬骨蔵器をもつ群集する墳墓群が検出された[92]。ここでは9基の火葬墓があり、この中から11個体の骨蔵器と火葬骨が出土している。うち2個は礫による直径1mほどのマウンドをもち、小規模な方形石槨を構成していた。報告によれば付近には焼土・灰・火葬骨片・土師器片が出土する荼毘処とおもわれる箇所が認められたという。九世紀後半から十世紀の年代が与えられている[93]。酒田市の山楯4遺跡でも火葬墓と見られる事例が得られている。羽黒町高寺「高寺遺跡」も火葬墓として報告されている[94]。土葬墓は、酒田市「手蔵田10・11遺跡」で古代墓地の可能性が指摘される土壙墓群が報告されているが類例は少ない。その他として、合口甕棺と言い習わされている遺構が、余目町「千河原遺跡」・八幡町「山海窯跡群」・鶴岡市「西谷地遺跡」の各遺跡から検出されている。こうした遺構の性格についてはいくつかの考察があり、いまだ十分整理されないが、葬送に係わりあう事例も知られている。この他に文献史料に古代の墓制に関連する記事が見える。『三代実録』貞観十三(872)年五月十六日条には、河原に冢墓があり骸骨が山水を汚したため、大物忌神がケガレを嫌い、御神体である鳥海山が噴火したという出羽国司の報告が載る。

まとめれば、古墳以来の伝統は一度7世紀段階で途絶するために、8世紀代以降に新たに展開する墓制とは、区別して考える必要がある。しかしながら、立地には共通する要素も伺うことが出来る。高寺遺跡は羽黒町の小高い山中に存在するが、ここの丘陵部から平野へと変わるところには、古墳群が立地している。酒田市の関B遺跡には古墳時代前期の遺物が出土することは述べたが、山楯4遺跡はちょうどこの山側に所在する。時代的な断絶はあるものの、在地支配の連続性とこうした場所を支配下におく首長層の連続性が、こうした現象の背後にはあるのではなかろうか。古代に新たに展開するようになった墓制が火葬墓であり、これは古墳時代に古墳に葬られることと同様な意味付けを評価しても良かろう。宮山坂墳墓群の近傍には古墳の造営は認められない。しかしながら造営年代を8世紀後半に求めれば、これはこの地が開発される時期である8世紀第3四半期と近接する。8世紀第3四半期にこの地を開発したものたちの墳墓と見ることもできよう。そしてその者たちは、遠く関東地方、相模から移配されてきた可能性も見いだすことができる。

5　大楯遺跡の成立についての予察

以上から検討した内容をもとに、古代から中世への変化を、いくつかの小期に分けることができる（表2）。時期区分と遺跡の画期を見いだして、庄内地方の地域的

な動態を検討したい。また、図10～21、表1、表2をもとに大楯遺跡の成立について検討し、得られた様相を集約しながら、この地域の古代から中世への成立を検証したい。

この地域には古墳時代の初期から遺跡が存在した。その痕跡は断片的であり、畑田遺跡などの古墳時代前期、矢馳遺跡などの古墳時代中期の遺跡あるいは古墳をいくつか見いだすことができるものの、古墳時代後期の遺跡ははっきりしない。さらには7世紀から8世紀前半の遺跡は見いだせない。この時期に地域的動向として、集落の再編あるいは集約化が起こったのであろうが、遺跡は少ない。注目すべきは、各遺跡の存在は、流域ごとに集中する傾向のあることである。こうしたことは、流域毎に在地勢力が伸長していたことの証しであろう。また、古墳も交通の要衝に立地する傾向がある。次の7世紀から8世紀代の遺跡は、極めて限られている。7世紀代の末には新潟平野まで須恵器生産が始まるが、この地域には及んでいない。次に表2をもとに検討したい。

（1）古代0期の様相

8世紀の第1四半期から第2四半期を古代0期とした。庄内地方で現在のところ、この時期に編年される考古遺跡が見いだせないためである。文献上では、出羽建国、移民、渤海使の記事が見える[95]。

（2）古代Ⅰ期の様相

8世紀の第3四半期から8世紀第4四半期を古代期とした。この時期は庄内地方の古代遺跡の黎明期である。須恵器生産が開始し、集落が伸展し始める。特に、北目地域と生石地域に展開が見られる。もっとも初期に遺跡が展開するのはこの2つの地区であることは留意しておかなければならない。また、大山地域でも同様の展開が伺える。これらの地区は、前代の古墳時代の遺跡とほとんど分布が重なる。さらには、国府域である、本楯地区にはこの時期の遺跡の展開を伺うことはできない。このため、出羽国建国にあたっての開発は、それ以前から在地に流域を中心として勢力を保持していた、在地富豪層にその中心があるとみておきたい。こうした者達が郡司クラスを構成するのであろう。こうした遺跡群を造営した主体者に、移民を想定することもできよう。事実この時期までは8世紀前半からの移民の記事が見える[96]。しかしながら、こうした移民の集落は明らかではない。さらには、前代からの遺跡立地と複合する選地をなすことは、在地の勢力の伸長の様相が強いと見ておきたい。こうした開発に関係して、在地富豪層と中央の権門が結び付く可能性も見いだすことができる。天平宝字三年(760)には丸部足人が、越前から秋田城への米の運搬に使役されている。丸部足人は造東大寺司の官人であるが、郡司によって使役され秋田城まで米を運ぶことになったのであった[97]。この時期は、北陸で初期荘園が盛んに営まれる時期である[98]。丸部足人が秋田城への運搬に使役されるという事実は、出羽国と越前の関係さらには、東大寺領の初期荘園が営まれるのは越後までであるが、東大寺とこの地域との関係を暗示しているのではなかろうか。こうしたことは、次代に見える、中央の権門によるこの地への侵入と連動する事態であることは事実であろう。

次の時期8世紀第4四半期では、遺跡の数が増加し面的な分布を確認できるようになる。城輪柵跡にも一部遺物が見えるようになってくる[99]。城輪柵の位置する本楯地域にもこれと同時に遺跡の展開が見られるようになってくる。この地域では、城ノ輪柵跡よりも低位の土地に遺跡が展開する様相が認められ、国府域における計画村落の展開と見ることもできよう。もう一つこの時期に特徴的なのは、遊佐地域に遺跡が展開することである。時期的な検討の余地は残すが、こうした新たに展開する遺跡群が見いだされる地域には、条里遺構も展開している。

条里遺構の展開年代は明らかにはできないが、延暦二年(783)年に「口田」が与えられるとする記事が見え、本楯地域と遊佐地域という新たに展開する遺跡群の所在地付近に条里遺構が展開するということからすれば、こうした8世紀後半からの時期を条里遺構の成立時期と見ることもできよう。また、その造営主体も、水利毎に一條あるいは一ノ坪という地名が残り、日向川で条里地割も分断されることからすれば、一国規模の展開を伺うことはできない。川南の様相も同様であろう。また、天応元年(781)の記事には、疲弊した百姓に種子が貸し与えられるとの記事も見える。遊佐町の上高田遺跡からは稲の品種名「畦越」を記載した木簡が出土している。ここは8世紀の第3四半期から営まれ、その盛期は9世紀代になるが、北目地区の中心的な遺跡として展開する。ここから種子木簡が出土するということは、この遺跡の機能の一つに、種籾の保管があると見ることができる。この種籾は救荒用に保管されるなどのほかに、ここが有力

表２　遺跡の消長と関連事項

世紀	区分	小期	遺跡数	遺跡数の変化		移民	開発	荘園	対外	政治	宗教	その他
8	古代０期	1	0									●712（和銅五）出羽国建立（続日本紀） ●716（霊亀二）霊亀2陸奥国置賜・最上2郡、信濃・上野・越前・越後国の百姓各100戸が出羽国に移される（続日本紀） ●717（養老元）信濃・上野・越前・越後国の百姓各100戸が出羽柵戸となる（続日本紀） ●719（養老三）東海・東山・北陸3道の民200戸が出羽柵に移される（続日本紀）
		2	0					●727（神亀四）渤海郡王使首領高斎徳ら8人出羽国につく（続日本紀）				●733（天平五）出羽柵秋田村高清水岡移転（続日本紀） ●736（天平八）陸奥・出羽の功ある郡司と俘囚27人に爵が与えられる（続日本紀） ●739（天平十一）遣唐使平郡廣成、渤海国より出羽国に到着する（続日本紀） ●746（天平十八）来朝した渤海人及び鐵利1100余人が出羽国でもてなされる（続日本紀）
	古代Ⅰ期	3	14		須恵器窯の展開 土器の展開						●757（天平宝字元）不孝不恭不友不順なる者が陸奥国桃生・出羽国小勝郡に配流される（続日本紀） ●759（天平宝字三）板東8カ国と越前・能登・越後の浮浪人2000人が雄勝柵戸となる（続日本紀） ●760（天平宝字四）没官奴233人、婢277人が雄勝柵に配置される（続日本紀）	●760（天平宝字三）丸部足人が越前から秋田城へ米を運ぶ（大日本古文書） ●767（天平神護三）私鋳銭の罪を犯した清麻呂ら40人が出羽国に配流される（続日本紀） ●770（神護景雲四）戸主宍太部道石12名に出挙が貸し付けられる（秋田城漆紙文書）
		4	50		施釉陶器の展開 囲繞施設を持つ遺跡の展開 墨書土器			●771（宝亀二）渤海国使青授大夫壹萬福ら325人が出羽国野代湊に着く（続日本紀） ●772（宝亀三）出羽・陸奥国の蝦夷、爵と物とをもらい帰郷する（続日本紀） ●773（宝亀四）出羽・陸奥の蝦夷俘囚が位を叙され禄をもらって帰郷する（続日本紀） ●773（宝亀四）月山神に二戸の神封が与えられる（新抄格勅符抄）	●779（宝亀十）渤海・鐵利の入朝使359人がもてなされる（続日本紀） ●779（宝亀十）渤海・鐵利の使節に常陸国調　・相模国庸綿・陸奥国税布が禄としてあてられる（続日本紀） ●781（天応元）皆麻呂の乱に政府軍にしたがって出羽国に入り、そのため疲弊した百姓の田祖が免じられ、また、種子が与えられる（続日本紀） ●783（延暦二）雄勝平鹿二部百姓に口田を給う（続日本紀） ●786（延暦五）出羽国で渤海国使大使李元泰以下65人が漂着する（続日本紀） ●787（延暦六）出羽・陸奥国の馬を権貴の家、豪族の輩が買いあさることが禁止される（日本後紀） ●795（延暦十四）出羽国司は、渤海国使呂定琳ら68人が志理波村に漂着し劫略されたことを中央に報告する（類聚国史）
9	古代Ⅱ期	1	83		貿易陶磁器の展開 火葬墓の展開 製塩土器の展開					●802（延暦二一）大臣諸家による良質の皮（蝦夷貢納物）の買いしめが禁止される（類聚三代格）	●803（延暦二二）出羽国内田地の独占的開発の禁（類聚三代格）	●802（延暦二一）越後国米・佐渡塩出羽国雄勝城におくられる（日本紀略） ●811（弘仁二）出羽国・陸奥国の百姓の墾田は、公験なくとも収公されなくなる（日本後紀） ●814（弘仁五）出羽国健児に出挙息利が粮料として与えられる ●815（弘仁六）権貴の家、富貴の輩が、出羽・陸奥国で馬を買うことが禁止される（日本後紀・類聚三代格） ●820（弘仁十一）唐人の李小貞ら20人が出羽国に漂着する（日本紀略） ●国分寺料として四万束が当てられる（弘仁式）
		2	92		（赤焼き）					●835（承和二）夷俘が入京したりする者があるとして、按察使・国司・鎮守府が譴責される（続日本後紀） ●838（承和五）大物忌神の神階正五位下となる（続日本後紀） ●840（承和七）大物忌神が南賊境で襲撃された遣唐使船を救ったとして、従四位下神封二戸を授けられる（続日本後紀） ●850（嘉祥三）出羽国へ陰陽師設置の願いが許される（文徳実録）	●839（承和六）田川郡西浜に石鏃が降る（續日本後紀） ●843（承和十）出羽・陸奥の浮浪人が本貫に送付される（類聚三代格）
		3	89							●864（貞観六）飽海郡月山・大物忌両神社前に石鏃6枚降る（三代実録） ●868（貞観十）月山・大物忌神社前に石鏃が降る（三代実録） ●871（貞観十三）出羽国田川郡の節婦大荒木臣玉刀自、位二階を授かり、租を免ぜられる（三代実録） ●873（貞観十五）出羽国大物忌神正三位を授かる（三代実録） ●873（貞観十五）飽海郡の節婦伴部椋貴、位二階を授かり、戸租を免ぜられる（三代実録）	●このあたり、定額寺がおかれる ●このあたり、石鏃が盛んに降る
		4	60							●875（貞観十七）渡嶋の荒狄の水軍が秋田・飽海郡を襲撃し、21人を殺害する（三代実録） ●878（元慶二）大物忌神と月山神に、封戸が二戸ずつ加増される（三代実録） ●878（元慶二）大物忌神に勲三等、月山神に勲四等、小物忌神に勲七等がそれぞれ与えられる（三代実録） ●880（元慶四）月山神・大物忌神に従二位、大物忌神城輪神に従五位上がそれぞれ与えられる（三代実録） ●885（仁和元）飽海郡神宮寺西浜に石鏃が降る ●887（仁和三）出羽国府が出羽郡井口地より高敞の地に移る（三代實録） ●893（寛平五）陸奥・出羽の在京の者が本郷に送還される（類聚三代格）	●878（元慶二）元慶の乱
10	古代Ⅲ期	1	39							●905（延喜五）陸奥・出羽国司による俘囚叙位の禁止 ●915（延喜十五）出羽国に噴火灰が二寸積る		●延喜式に大物忌他5社が庄内地方から載る（延喜式） ●延喜式に遊佐駅が載る（延喜式） ●延喜式に飽海郡に8郷、田川郡に5郷が載る（延喜式）
		2	21									

世紀	区分	小期	遺跡数	遺跡数の変化		移民	開発	荘園	対外	政治	宗教	その他
10	古代Ⅳ期	3	9								●955（天暦九）出羽国田川郡龍華寺の妙達、示寂すという（僧妙達蘇生注記・三宝絵詞・大日本法華験記・今昔物語集・元亨釈書）	
		4	8									
11		1	6		（柱状高台）						●1017（寛仁元）大物忌神に神宝が奉納される（左経記）	
		2	4									
		3	3							●1051（永承六）前九年合戦おこる（陸奥話記）		
		4	3							●1083（永保三）後三年合戦おこる（奥州後三年紀）		
12	中世Ⅰ期	1	2									
		2	3		経塚の展開			●1148（久安四）久安4大曾禰・屋代・遊佐の各荘の本家職が藤原忠実から頼長へとうつる（台記）				
		3	16		須恵系陶器の展開 かわらけの展開 白磁の展開			●1152（仁平二）奥州藤原氏は、大曾禰・遊佐・屋代の各荘園の年貢額を摂関家へ提示する（台記） ●1153（仁平三）藤原頼長、久安6、仁平元・2年の奥羽の摂関家領荘園本数分の年貢を返却させる（台記） ●1153（仁平三）藤原頼長は、大曾禰荘の年貢を馬2疋、布300段とする（台記） ●1157（保元二）保元の乱により没官領となった大曾禰荘・遊佐荘・屋代荘が後院領となる（兵範記）				
		4	32		中世火葬墓の展開 囲繞施設の展開			●1189（文治五）田河太郎、秋田太郎が頼朝軍に梟首される（吾妻鑑） ●1190（文治六）大河兼任の乱（吾妻鑑）				

郡司層などの居宅であったと見れば、種子農料として貸し与えられ、私出挙が行われた可能性も指摘できよう。延暦六年(787)の史料からは、この時期には中央の有力者が盛んにこの地域に出入りしていたであろうことも判明する。こうした新たに開発された地域というのも、中央の政治的思惑と無関係に成立していたのではあるまい。

（3）古代Ⅱ期の様相

9世紀の第1四半期～第3四半期までを古代Ⅱ期とした。この時期は庄内地方の古代遺跡の最盛期である。前代古代Ⅰ期後半まで見えていた移民の記事は全く見られなくなり、渤海使の記事もなくなり、わずかに対外関係としては、弘仁十一年(820)に唐人の漂着が知られるに過ぎなくなる。北目地域、本楯地域、手蔵田地域には遺跡の集中が見られる。須恵器生産も盛期を迎える。この時期には在地の開発も活発化する。また開発に関係して中央の勢力がさまざまな形で影響力を持ってくる。延暦二十一年(802)には、良質の皮の買い占めが禁じられ、同じく延暦二十二年(803)には、中央の勢力が関係して開発を進行させたことが見える。弘仁2年(811)には、百姓の開発に対して公験がなくとも収公されなくなる。これは在地の開発の活性化を把らえてのことであろう。延暦二十一、二十二年の現状を是認追認している姿と見ることもできよう。こうした中央の勢力がこの地に勢力を及ぼすということの一方では、人々の入京という事態も引き起こされていた。承和二年(835)には夷俘が入京するのを取り締まるように国司等が譴責され、時期的には次の古代Ⅲ期の事例とはなるが、寛平五年(893)には在京の陸奥出羽の人が捜し出され本国に送還されている。ここでは在京しているのは「王臣家」に関係してのことであり、この地域と王臣家は人々の往来を含む密接な関連をこの時期には保有したことがわかる[100)]。

こうした王臣家の活動は、この時期に遺跡数が最盛期をむかえることと無関係ではあるまい。初期貿易陶磁器の出土遺跡は、本楯地域、遊佐地域、鶴岡地域からの出土であり、これらの地域は国府あるいは官衙との強い関連性を有していたとも見ることができようが、それ以外の地域、特に北目地域は、前代以来独立的に遺跡群が展開している。こうした遺跡群に王臣家の活動に連なる姿を投影することはできないであろうか。遺跡からは初期貿易陶磁器が出土するようになる。これらは官衙で使用された。国司クラスの日常什器か国分寺などの国家的祭祀に際して使用されたのであろう。こうした初期貿易陶磁器を模倣した緑釉・灰釉陶器も出土する、これらは、一般集落にまで拡散している。興味深いことに、川北地域が主となり、川南地域からの出土は、2遺跡のみである。開発の中心が川北にあったことの傍証ともなろうか。

（4）古代Ⅲ期の様相

9世紀後半第4四半期～10世紀第2四半期までを古代Ⅲ期とした。この時期は、遺跡の展開が終息し、衰退へと向かう時期である。この期の最初には元慶の乱(878)が起こり、延喜十五年(915)には降灰があり、災害が見られる。遺跡は少なくなる。特徴的な様相としては、宗教関係の記述が前代、9世紀第3四半期から含めて増加することである。これらは大物忌神社に関係する事柄が多数を占めるため、先述した飛島、吹浦大物忌神社のラインが成立するのもこの時期と考えられよう。

（5）古代Ⅳ期の様相

10世紀第2四半期から11世紀第4四半期までを古代Ⅳ期とした。この古代Ⅳ期と先述の古代Ⅲ期の時期区分は検討の必要性がある。この時期は遺跡の分布がほとんど見られなくなる時期であり、遺跡の再編と新たなる展開の時期に突入したのであろう。文献史の記事もこれまた少なくなる。遺跡は庄内地方全体でも、北目地域と遊佐地域に集中してくる。国府域であった本楯地域やその周辺には分布は薄くなる。川南ではほとんど存在を知ることはできなくなる。

大楯遺跡周辺には、西側に東田遺跡、下長橋遺跡、大坪遺跡が展開している。東田遺跡・下長橋遺跡では初期貿易陶磁器の越州窯系青磁碗が緑釉陶器、灰釉陶器とともに出土している。下長橋遺跡では官衙風のコの字型配置を持った遺構群が展開している。月光川を北に越えたところに所在する大坪遺跡では木柵による囲繞施設をもった建物跡群が検出されている。こうした遺跡は月光川に接しており、大楯遺跡とほとんど立地条件が共通している。このことは、大楯遺跡は基本的に古代からのこうした遺跡の性格を中世になって引き継いだ遺跡であるということができよう。

また、この位置は、山沿いの陸路を選んだ場合庄内地方の最北であり、『延喜式』に見る、遊佐駅などを持つ陸路である古代官道の要衝という姿を認めることがで

きる。事実『正保絵図』では、大楯（大舘と見える）は「平津」「大舘新田」「上長橋」の三方から街道が通じている。さらには、月光川を越える街道は、大楯から遊佐に向かって伸びる道しかない。ここは、古代からこうした街道と水路の両方に利便が高かった地域であると言うことができる。

（6）中世Ⅰ期の様相

12 世紀代を中世Ⅰ期とした。この時期は遺跡数は前代よりも増加しているが、集落遺跡はほとんどなく、大半は宗教遺跡である。とくに経塚と中世墳墓が多い。12 世紀の第３四半期から始まる集落遺跡は、大楯遺跡と升川遺跡のみである。その他の遺跡は 12 世紀の第４四半期から始まると考えられている。とくに大楯遺跡に保元 (1156 ～ 1159) の紀年を持つ木簡や、12 世紀半ばの年輪年代を算定された曲物などの定点資料が存在する。

この時期の遺跡の分布をほかの時期と重ね合わせると、古墳時代や８世紀第３四半期などの遺跡の分布と近似している。すなわち、各流域を支配している在地勢力の存在を見いだすことができるのではなかろうか。古代Ⅳ期の遺跡は見えづらくなるものの、各流域毎に遺跡の分布は集中する傾向は保持されると見ることができる。こうした勢力が古墳時代以来一貫した支配を継続しているかどうかは不明だが、こうした流域毎に成立した勢力が古代では郡司層を形成し、さらには王臣家と結び付いて開発を進めていくと見ることはできまいか。

こうした地域性のもとに、遊佐荘は、古代以来独立的であった北目地域、さらには遊佐地域を中心として成立し、大物忌神社を宗教的起点とし、交易の拠点としての吹浦湊さらには宗教的な結び付きからすれば、飛島もその視野に入れて成立したものであろう。本州最北の荘園と言われる遊佐荘の地域性もまた、９世紀以来の境界性をあらわしていると見ることもできよう。大楯遺跡は、外港吹浦から内陸へと月光川を媒介として結び付き、内陸との交通の結節点として重要であった。さらにその位置するところは、古代以来重要な遺跡のおかれるところに選地していたと見ることができる。

6　おわりに

はなはだ粗い検討になってしまったが、大楯遺跡の成立についての検討を終える。次稿では、大楯遺跡の展開と終末から、この地域の中世の展開を考察したい。

最後に、以上の検討にあたって次の方々から暖かいご助言をいただいた。伊藤清郎、阿子島功、田嶋明人、阿部明彦、伊藤邦弘、高桑弘美、伊藤武士、植松暁彦、高橋学、三上喜孝、吉田歓、各氏には一方的な論議にお付き合いいただき、深く感謝したい。とくに酒井英一、北野博司氏からは、資料収集調査を始めとしてご助言をいただき、さらには多くを学ばせていただいた。

註

1）　発掘調査は山形県教育委員会と遊佐町教育委員会で行われ、それぞれから発掘調査報告書が刊行されている。山形県教育委員会 1986「分布調査報告書」16、同 1988「大楯遺跡第１次発掘調査報告書」、同 1989「大楯遺跡第２次発掘調査報告書」、遊佐町教育委員会 1991「大楯遺跡第３・４次発掘調査報告書」

2）　伊藤邦弘 1996「遊佐荘大楯遺跡について」『歴史手帳』第 24 巻 10 号、飯村均・八重樫忠郎 1996「大楯遺跡再考」『歴史手帳』第 24 巻 10 号

3）　伊藤邦弘 1994「遊佐荘と大楯遺跡」『歴史評論』11 月号、藤原良章 1996「大楯遺跡と中世出羽国」『歴史手帳』第 24 巻 10 号、小松良博 1996「遊佐荘内における中世城館分布と伝承について」『歴史手帳』第 24 巻 10 号、岡陽一郎 1996「「大楯」地名考」『歴史手帳』第 24 巻 10 号

4）　河野眞知郎 1996「遊佐大楯遺跡と鎌倉」『歴史手帳』第 24 巻 10 号

5）　伊藤清郎 2000「中世出羽国における地方都市的場」『中世都市研究』第７号

6）　岡陽一郎 2002「山形県の中世景観「遊佐荘の歴史景観」」『東北中世考古学会第８回研究大会資料集』

7）　本稿で使用する『景観』という言葉について簡単に整理しておきたい。『景観』という語彙は地理学で用いられる概念のひとつである。岡田俊裕によれば、ドイツ地理学界で 19 世紀末ごろから使用された概念である「Landschaft」に起源を持つという。日本での地理学概念としての使用は、1925 年頃当時東京帝国大学助教授であった、辻村太郎がこの概念を導入するときに使用した和訳であり、植物学で植物群落の様相を言い表すのに、「植物景観」を使用していたのを、地理学の概念として使用したものという。こうした地理学の概念を表す語彙としては、「景観」のほかに、「風景」「景相」「景域」「風景形態」「環象」「風土」「地郷」「風景形態」がこの時期以降使用されている。岡田は「景観」のもともとの用語である「Landschaft」概念を説明し、「地域・地域単位の総合的内容」「類型としての地域」「地域の可視的・形状的側面」という３つの内容を含んでいると指摘している（岡田 2002「地理学史　人物と論争」古今書院）こうした「景観」用語の使用は歴史地理の分野で多い。使用頻度の高い「村落景観」について、古田悦造は「村落景観の構成要素の中でも重要な位置を占める集落（宅地）・耕地・水利・神社・寺院・墓地および山林について、村落内における空間的配置関係が宅地が密集する村落を中心として、耕地や山林が外円的に広がっていく様相」を例示しながらとらえて、これを村落景観と見ている（古田 2001「村落景観」『歴史地理調査ハンドブック』）上原秀明は、村落景観の分析方法に触れる中で、村落景観を分析することは、「こうした場所・空間要素（モノ）は、ただあるのではなく、彼らは彼らなりに山をもち、川をもち、森、海、浜を、そして季節、家族、隣人を、もっている。一種のコスモロジー近い生活空間をもつのである。この持ち方

を明らかにすることが重要である」という（吉田 2001「村落景観の構造」『歴史地理調査ハンドブック』)。地域あるいは村落「景観」の分析法について、本稿でもこうした「景観」を構成する個別的な内容について、各時代毎に留意しなくてはならないのは当然である。さらに、木村礎は村落史を研究する場合には、村の内実と村の可視的な外枠（枠組み)、を考慮することが重要であり、村の可視的な枠組みこそが、その共同体の存立基盤であるところの村落景観の問題であるという。さらにこうした内容に迫るためには、江戸時代の研究、考古学的研究、民俗学的研究、地理学的研究、歴史学的研究が重要であり、特に考古学的研究に求められるのは、「その遺物や遺跡がどこから来てどこへ行くのか、といった歴史における連続感覚が必要である」と述べる（木村 1996「景観復原の方法―木村礎編著『村落景観の史的研究』を中心に―」『木村礎著作集』Ⅶ)。このような整理を踏まえつつ、本稿で意図する「景観」とは、庄内地方の古代の遺跡の立地や分布やその他の歴史的位置付けなどを把握しつつ、古代から中世への地域的な遺跡・他の時間的変化を、大楯遺跡の成立に焦点化しつつ検討することであり、「地域の可視的・形状的側面」の変化を、時間的に追跡することになろう。また、その分析対象は、山、川、森、海、浜を含む、山野川海といった空間であり、歴史地理学で意図する景観と共通し、いわば一種のコスモロジー近い生活空間を景観として意図していくことになる。付け加えれば、内田芳明は、日本人の風景認識を検討しながら、「景観」を、「狭い部分の局部的・場所的外観を言うのに使われ」るとし、こうした表現として「風景」を使用し、古くからの大和言葉であるはずの「けしき（景色)」という言葉を合わせ紹介している（内田 2001「風景の発見」『朝日選書』675 号)。

8）　鋤柄俊夫 1999「中世村落と地域性の考古学的研究」

9）　吉岡康暢 1983「北陸初期荘園遺跡の考古学的検討」『東大寺領横江庄遺跡』、同 1996「北陸の初期荘園遺跡と横江庄遺跡」『東大寺領横江庄遺跡Ⅱ』、田嶋明人 1996「手取扇状地にみる古代遺跡の動態」『東大寺領横江庄遺跡Ⅱ』、宇野隆夫 1991「律令社会の考古学的研究」、同 2001「荘園の考古学」

10)　最上川は、山形県を貫流する大河として周知されているが、この長大な河川が、源流から河口まで一貫して最上川の名称を有するようになったのは、中世末、最上義光が庄内地域の支配を確定した時を境にする。『古今集』巻二十東歌に「最上川のぼれば下いな船のいなにはあらずこの月ばかり」の和歌が載り、河川名の古代に存在することを知るが、注意すべきことに古代中世の史料で、流域について一貫して最上川の呼称を使用している例はない。上流では梓川、下流では酒田川とも呼ばれていた（『日本歴史地名体系』平凡社)。最上川という名称の使用には歴史的には注意を払わなくてはならない。

11)　図は 1977 年国土庁土地局・国土調査課による「最上川地域主要水系調査書」の付図を基本図として、当地域の河川の所在を明らかにするために改編作成したものである。主要な河川位置を示している。図中の赤川・日向川の日本海への放水路は、後世の開削にかかるものであり、河川川口部の当初位置を示してはいない。

12)　河川の様相については、『月光川史』『日向川史』『赤川の歴史』、『余目町史』『大町溝土地改良区史』『酒田市史』などを参考とした。

13)　なお、庄内地方では、最上川を境として、その北部を川北、その南を川南と呼び、同じように、最上川右岸、左岸という呼ぶ呼び方もある。地域名としては、最上川以北を飽海郡、最上川以南を田川郡と呼ぶ。

14)　この図は本図は 1977 年国土庁土地局・国土調査課による「最上川地域主要水系調査書」の付図を基本図として、大正２年測図、大正５年刊行の図幅を参考として作成したものである。さらに、各河川に設けられている農業用排水口の位置、排水口の排水方向、各土地改良区の管理する地区の位置、などから水源河川と潅漑されている地域を推定した。各流域の潅漑水源河川名については、図２を参照

15)　農業用水の供給源としてはさまざまな様態が知られている。本間俊朗は農業用水について潅漑水源としての河川の役割を歴史的に強調し整理している。昭和 17 年 (1942) に帝国農会の実施した『状況別耕地に関する調査』による潅漑水源調査では、河川 (67.9%) 湖沼（1.4％）溜池（18.2％）井戸（1.5％）湧水（5.1％）天水（4.9％）その他（1.0％）となり、全国的な傾向としては、河川潅漑に関係するものが 80% 以上となっているという（本間俊朗 2002『日本人はお米をどれくらい食べていたか』山海堂)。庄内平野では溜池も形成されるが、河川による農業用水の供給が顕著である。

16)　有賀友子 1984「庄内平野の地形発達―更新世以降の砂礫分布範囲の変化―」『東北地理』第 36 巻第 1 号、角田清美 1976「庄内平野の地形について」『庄内考古学』第 13 号、阿子島功 1989「考古学発掘調査からわかった微地形発達史」『地理』34 巻 2 号

17)　有賀 1984 庄内平野の地形発達―更新世以降の砂礫分布範囲の変化―」『東北地理』第 36 巻第 1 号

18)　角田 1976「庄内平野の地形について」『庄内考古学』第 13 号

19)　米地文夫、阿子島功による、土地分類基本図『吹浦・鳥海山』『鶴岡』『酒田』『三瀬・温海』を使用した。

20)　佐々木七郎 1976「砂丘出土の土器」『庄内考古学』第 13 号

21)　小野忍 1976「酒田市黒森遺跡」『庄内考古学』第 13 号

22)　角田 1976「庄内平野の地形について」『庄内考古学』第 13 号

23)　新潟県中条町に所在する、「青田遺跡」では、旧紫雲寺潟の下から縄文時代晩期を中心とする遺跡が検出された。高濱信行・卜部厚志はこの様相について、縄文時代晩期には安定していた地形が、平安期の地震により陥没し、そこが潟湖として成立したのであろうことを述べている（高濱・卜部 2002「湖底に沈んだ縄文遺跡」『川辺の縄文集落』)。

24)　藤島川と、最上川の間の土地は、北楯大堰や吉田堰などの用水堰の通水によって、開発が進展した可能性が高いことなどを指摘しておきたい。この地域が主体的に開発できるようになるのは、近世になってからのことである。この地に古代の開発を積極的に求めることは困難である。

25)　本図幅は当地域を五万分の一で現した最古のものである

26)　この問題については、平凡社『山形県歴史地名大系』でも触れているが、本稿では類例を増やして検討してみたい。

27)　本稿では地域の遺跡の変化から古代から中世へという変化を読み取り、あわせて大楯遺跡の成立を考察するものであるから、国府や郡衙といった官衙関連施設あるいは、古代の郡郷と国府という極めて政治的問題については、準備もしていないので深入りできない。

28)　なお、ここで注意を要するのは『陸奥国最上・置賜二郡を割きて出羽国に隷せしむ』とみえる文言のうち、『陸奥国最上』と表記される郡は現在の行政単位の最上郡とは異なり、現在の行政区分では村山・最上の両郡を含む範囲を表すものと考えられていることである。

29)　出羽国府の所在並びに、出羽柵の所在については、近年の論功として、高橋富雄、平川南、佐藤禎宏、柏倉亮吉・小野忍、新野直吉、小野忍、今泉隆雄、加藤稔の研究がある。参照とされたい。文献史料に登場する、「出羽柵」「出羽国府」「川辺府」「井口国府」「高敞国府」の推定地は一定しない。高橋富雄 1972「城輪柵の性格と年代」『東北大学教養部紀要』15、平川南 1977「出羽国府論」『宮城県多賀城跡調査研究所研究紀要』４、佐藤禎宏 1991「出羽国の成立と律令

制の浸透」『羽黒町史』上巻、柏倉亮吉・小野忍「城輪柵遺跡の内部と性格について」『山形県民俗・歴史論集』２、新野直吉 1986『古代東北史の基本的研究』角川書店、小野忍 1994『古代官衙の終末をめぐる諸問題』東日本埋蔵文化財研究会、今泉隆雄 1995「秋田城の初歩的考察」『律令国家の地方支配』、加藤稔 1996「出羽国府遷移論」『山形史学研究』27・28・29 合併号、他

30) 戦国期から近世初期までの間「櫛引郡」も設けられたことがあり、『正保国絵図』には、櫛引郡が見える。

31) 『庄内三郡絵図』の検討に当たり、この絵図と補完的関係にある『出羽一国之絵図』をも参考にした。なお、同図幅についての直接調査は不可能なため、『角川歴史地名大辞典 山形県』に所載の、翻刻された絵図を参考とした。

32) 柏倉亮吉 1980「致道博物館本出羽一国大絵図について」『致道』第 15 号

33) 鶴岡市 1996「図録庄内の歴史と文化」『鶴岡市史資料編 荘内資料集』22

34) 子細に検討すると、『出羽一国之絵図』と、『庄内三郡絵図』とでは、差異がある。たとえば、「遊佐郡」「櫛引郡」「田川郡」の各々の郡高が各々違っていることなどが上げられる。この問題については準備もないので深入りしない。致道博物館所蔵『庄内三郡絵図』の熟覧に当たっては酒井英一氏のご高配と貴重なご教示を得た。

35) あくまでも概数を得るための操作である。櫛引郡の一部は松山町方面まで伸びるために、単純に川南と川北という地域区分を各郡の領域と一致させることはできないし、村数のカウントも概数であり、図示数とは微妙に整合しない。

36) この操作によって得られる数はあくまでも推定の域を出ない、かつ流域を構成している地域にその時期の村なり遺跡が、地図上のきちんとした位置でカウントできるどうかも厳密には確定しない。

37) 長井政太郎 1932「庄内地方京田興屋新田の研究」『山形県郷土史研究叢書』４、同 1973『新訂　山形県地史』中央書院など

38) 各用水堰の成立時期については、『山形県史要覧編』に詳しい。

39) 当地域の河川位置を現況で図示した図２は、当地域の河川の所在を明らかにするために作成したものである。潅漑水路は余目地区の開発に有効であった「吉田堰」「北楯大堰」のみを表示してある。最上川の河川改良工事に伴って消滅した河口の中島、『正保絵図』に載る「山居島」の様子も合わせて復元している。

40) この河口には著名な港町である酒田が存在している。赤川は、本来は酒田河口付近で京田川も合わせ最上川と合流していた。現在はそれよりも南側が河口となる。酒田市黒森の赤川の日本海への放水路は、国庫補助を受け、昭和五年 (1930) から８ケ年の県営事業で昭和十四年 (1939) に竣功を見たものである。赤川放水路の建設は、大正十年 (1921) 八月の大洪水を直接の契機とするものであるが、古くからその流路は洪水のたびに変更を繰り返し一定しなかった。現在の青竜寺川に沿う流路や大山川に沿う流路、黒瀬川に沿う流路などが主要な流路となっていた。これに大きな改変を加えたのは、中世末最上義光の時代であり、鶴岡市西南部をながれていた流路を、朝日村熊出で仕切り、現在の流路に近くなったという。（白波瀬正道 1977「赤川流域の概要」『最上川地域主要水系調査書』、月山ダム工事事務所 1984「赤川治水と利水」）

41) 日向川は荒瀬川を酒田市苅谷地内で合流し遊佐町比子地内で日本海へと注ぐ。江戸時代中期までは酒田市小湊で日本海へ注いでいた。酒田市街地近くを流れ、現在の光が丘地区を貫いて日本海に注いだこともあったという。こうした流路の変更は、水害被害の痕跡であり、水害予防のために流路が変更されたのである。これを一層助長したのは日本海岸の砂が真冬の暴風によって河口に吹き送られ堆積することであった。なお、日向川については日向川水害予防組合で刊行した「日向川史」全４巻がある。大部の労作である。本稿では流域図の作成や流路の変更などもこれによって確認することができた。本稿の大部分はこれに拠った。元和八年 (1622) から寛政四年 (1792) までに 10 回もの洪水があり、田畑も３分の２を失うなどの状況であった（結城豊太郎 1974「改訂遊佐の歴史」）。こうしたことから流路の変更工事が行われた。安政五年 (1858) 正月に起工し、文久二年 (1862) に竣功したものである。付け加えれば、江戸初期までは現在の庄内砂丘は鬱蒼とした密林であったという、これが製塩やその他の燃料のために濫伐され、このために江戸中期には植林事業が行われなければならないほどになったという（日向川水害予防組合 1962「日向川史」第１巻）支流荒瀬川は本来八幡町一條から漆曾根に流れるものと、酒田市苅谷から現在の幸福川と同様の流路をもって流れ、漆曾根に流下した流れと合流し、新井田川にそそぐ流路と、現在と同様日向川に合流する３つの流路が存在した。それぞれに自然堤防を形成し、この地域の地形の形成には重要な役割を果たしたことを知ることが出来る。

42) 月光川水防予防組合 1974「月光川史」

43) 月光川の流路は、近世初頭、慶長期に佐々木義綱が上野沢、大楯方面に流路があったものを吉出地区付近で一つにまとめたという。ここは、山地から平野部へと流下する、傾斜変換点とも言うべき位置であるから、ここでは流路の拡散が起こっていたものと思われる。江戸中期文化・文政期にも、漆曾根、江地、宮田、北目、菅野谷地、佐渡などでは蛇行していた流路を直線化する改修が行われている。大楯遺跡付近の明治期の字限り図を見ると、大楯集落の北側には、蛇行した河川の痕跡が明瞭である。こうした旧流路は、以上のような河川の改修によって生じたものと見ることも出来よう。

44) 月光川水防予防組合 1974「月光川史」

45) 遊佐町南山下から、酒田市六ツ新田までの約７㎞に渡る直線の人工水路である。近世この堰は遊佐地域の年貢を酒田の蔵屋敷に納める通路として利用されていた。ここを通る船は米一俵の運賃が八合であることから八合船といわれていた。遊佐方面から西通川を六ツ新田まで上った船は、日向川に入り、上藤塚から船通川を経て、新井田川、さらに鶴田橋に出て藩の米蔵に運び込んだという。もう一つ注目すべき点は日向川が砂丘に突き当たる地域に滞水した水を排水する機能も存在した。日向川河口付近の滞水状況は恒常的な潟湖となるかどうかははっきりしない。『正保絵図』にも潟湖の存在は記載されていない。しかしながら、『飽海郡史』には、天正慶長の頃飽海郡の西南部は、湿地であり洪水があれば、たちまち湖水を造り、谷地となり、湿地の植物である榛の木の林となって耕作に耐えなかったと見える。さらに、伝承とはなるが、隣県秋田県由利郡の伝承には、飽海郡に阿古之入江と称する南北二十里の江海があり、阿久美（後世飽海）の名称は之から起こったという所伝もあるという（日向川水害予防組合 1962「日向川史」第１巻）

46) 街道名にはそれぞれいくつか異称がある。時代や場所によって同一の街道が違った呼称を持つ場合がある。今回の名称もその一つに過ぎない。他の名称の使用を排除するものではない。

47) 山口博之 1996「平泉政権と田川氏」『田川の歴史』

48) 新野直吉 1982「山道と水道」『山形県史』第１巻

49) 山形県埋蔵文化財センター 2001「山田遺跡発掘調査報告書」『山形県埋蔵文化財センター調査報告書』第 83 集

50) 佐藤信 2002「古代国家と烽」『出土史料の古代史』

51) 山形県教育委員会 1987「生石４遺跡」『山形県埋蔵文化財調査報告書』第 118 集、藤島町古楯跡から出土した独木

舟は、スギ材を使用し、その年代は年輪年代法により、保延三年（1137）と算定されている。（山形県文化財保護協会 2002『山形県の文化財』）

52)　阿部正已 1935「飛島史」『山形県史跡名称天然記念物調査報告書』第七集

53)　鶴岡市史編纂委員会 1985「荘内史要覧」『荘内史料集』15

54)　この地域の海上交通とその意義については、近世の船運に関するものを除いて、主として今回の論旨にかかわる中世とそれ以前のものを上げれば、伊藤清郎 1987『霊山と信仰の世界』吉川弘文館、矢田俊文 2002『日本中世戦国期の地域と民衆』清文堂、網野善彦 1998「北陸の日吉神人」『日本中世の百姓と職能民』、斎藤利男 1987「古代中世の交通と国家」『日本の社会史』第２巻、誉田慶信 2000『中世奥羽の民衆と宗教』吉川弘文館、吉岡康暢 1994「北東日本海域における中世陶器の生産と流通」『中世須恵器の研究』、入間田宣夫・他編 1999『北の内海世界』、市村高男 2002「中世出羽の海運と城館」『中世出羽の領主と城館』、遠藤巌 2002「日の本将軍安藤氏と環日本海世界」『北の環日本海世界―書きかえられる津軽安藤氏―』、館野和巳 1981「東大寺北陸荘園の稲穀輸送」『古代文化』第 33 巻３号、宇野隆夫 1994「日本海に見る中世の生産と流通」『中世都市十三湊と安藤氏』、などがある。

55)　文献史料では、出羽一国の規模で述べられていることが多く、本稿で検討する庄内地域の問題として史料を収斂できない。こうした問題点は意識しながらも、出羽一国と捕らえている史料であっても取り上げ、検討の対象としなければならない。

56)　『正保絵図』には、これらの湊についてそれぞれに次の記載がある。吹浦湊は月光川の河口に設けられた湊である。「此川口遠浅にて大船不叶小舟は入」り、「南風の時分船掛不成」「潮時無く候」「水深弐尺」と浅い、「川口の広四拾間」である。小湊浦は日向川の河口に設けられた湊である。「一町川口の広」さであり、「遠浅沖へ三町水深弐三尺」と浅く、この時期には既に「此川船入不叶」であり「吹浦迄砂浜続」である。佐藤禎宏は「小湊」の音が「コミナト」であることに注目し、「国府湊」である「コウミナト」からの転嫁であり、古代出羽国府の外港であった可能性を指摘している（佐藤禎宏 1991「出羽国の成立と律令制の浸透」『羽黒町史』上巻）。宮浦は宮野浦のことであり、最上川の河口に設けられた湊で酒田湊と一体と考えてよい、酒田湊まで船が入れない場合ここで停留した。「岸深く船掛自由但湊入口の深さ７尺」と砂丘地帯の湊としては深度は深い、「此湊潮時不構船入申候」という状態であり条件も整っている。行路は「秋田の湊へ三拾三里」「塩越の湊へ拾里」「越後のせなみ（瀬波）の湊へ弐拾一里」「佐渡の湊まて六拾三里」「青島の湊え弐拾八里」「飛島の湊まて拾七里」である。庄内一国のみならず他国への行路も開かれている。加茂湊は、鶴岡の西側の岩礁地帯に設けられた湊である。「此湊より油戸村まて岩続」きの状態であり、「此湊の入口横の広さ百八間」と広く、「船掛自由岸深七尋八尋」と正保絵図に描かれる湊としては、鼠ケ関とともに、最も深度を確保出来る。ただし「此湊風雨の時分船掛不成」と見え、航路は「越前三国迄百七拾三里」、「敦賀迄百九拾六里」、「越後新潟迄四拾五里」、「飛島迄弐拾弐里」、「酒田迄五里弐拾六町」、「吹浦迄拾里」、「鼠ケ関迄八里弐拾一町」、「秋田湊迄三拾八里二十町」であり、庄内藩の外港として他国との航路を持つ重要な湊として存在していたことがわかる。鼠ケ関は越後との境の岩礁地帯に設けられた湊である。より北側の「堅海苔沢（かたのりざわ）迄山続」であり「湊の入口広百五拾三間」と広く、「遠浅なく岩御々き」ながら「湊の深さ七ひろ八ひろ」と深度を確保出来「岸深舟掛自由」の状態である。「風雨時分悪し」であるが「潮時無し」である。飛島は山形県のただ一つの離島に設けられた湊である。「湊岩続水の深さ拾四五尋」であり深度を確保出来る、「此湊岸深く船掛自由」であり「此湊風波不嫌舟掛自由」と状態が良い。行路は「とかの湊迄　四拾三里」、「船川の湊迄　四拾里」、「船越の湊迄　三拾八里」、「秋田の湊迄　三拾五里」、「本城の湊迄　弐拾弐里」、「平沢の磯迄　十八里」、「この浦の湊迄　拾五里」、「吹浦の湊迄　拾壱里」、「酒田の湊迄　拾七里」、「賀茂の湊迄　弐拾弐里」、「青島の湊迄　四拾弐里」、「佐渡の湊迄　八拾五里」と庄内のみならず他国への行路も開かれている。

57)　他国への行路が書かれている湊は、船着き五ケ所と表されているうちの海湊、「飽海郡酒田湊　田川郡飛島　田川郡加茂村　田川郡鼠ケ関村」となる。

58)　「加茂」は庄内藩の外港として慶長期に、最上義光によって整備されたものであるという。ここは、溺れ谷のような地形となるために集落の展開する余地は限られているが水深が深く利便性が高かった。酒田湊へも至近である。酒田湊の河口が砂の堆積のために浅く船が入港出来ない場合があるときには、加茂湊で酒田湊の様子を探らせ、差し支えがある場合には、ここで荷揚げをしたという。文献史料で確認出来るこの湊の存在は慶長期にまでしか溯ることは出来ないが、最上氏の支配以前にこの地域に勢力を持った武藤氏は、この湊のすぐ背後に拠点を構え、竜神信仰や、『今昔物語』に載る「妙達上人蘇生の話」が伝わる古刹善寶寺もこれまたすぐ背後に存在することからすれば、その成立は中世初頭には確実であろう。古川久雄によれば加茂極楽寺の寶篋印塔は、現在山形県指定文化財となっているが、寶篋印塔の石材には兵庫県の日引石製のものが含まれる。14 世紀後半から 15 世紀初頭の年代があたえられるという（古川久雄 2000「山形県鶴岡市加茂の石塔群―東北地方の関西風石造文化―」『ひびき』第４号）。「由良」は、幅４㎞で 500m ほど湾入した奥にある漁港である。前面には白山島（おしま）がそびえ、その北側が湊になる。現在ではより南の岩礁地帯に湊がかまえられている。ここは西または東の風には強く、冬の南西または北西の風には弱かった。興味深いことに『山形県漁業史』によれば、ここには新潟・津軽方面の北国海上で活動していた海人の根拠地であったという伝承があるという。白山島には白山妙理権現が祀られ、海沿いに日本海沿岸に分布する白山信仰に連なるものであろう。また、ここは東国三十三国の修験の根拠であった羽黒山との係わりが伝えられ、羽黒山の外港とも言うべき位置付けが考えられる、当所にある八乙女の洞窟は羽黒山の三山合祭殿の前面の鏡池の池底はここにつながるという。鏡池は平安時代以降池中納鏡が行われる聖なる泉であったことはよく周知されている。さらには、羽黒山の開祖であると伝える蜂子皇子が上陸したのも当所であると伝え、羽黒山との深い係わりを知ることが出来る。『奥羽永慶軍記』によれば、羽黒山の山伏が男鹿で船戦をする場面を知ることができ、こうしたことも当所とは無関係ではあるまい。「堅苔沢」は南方に山を背負い西は岬となっているので、北西風にも南風にも安全であった。ここは明治三十三年 (1900) の『山形県漁業史』に「加茂を除きてもっとも漁船の出入りに便なり、（中略）シケで各自の漁港に帰帆不能となりたるときにここに入りたり。当地方唯一の避難所なり」と見える。ここには、時宗の寺院である「留棹庵」が立てられており、これまた日本海側に分布する時宗寺院の展開に連なるものであろう。「鼠ケ関」は海岸から陸続きとなっている弁天島との間にはさまれた 500m ほどの湾である。西風には比較的安全であったが南風と北西風には安全な湊ではなかった。「飛島」は酒田湊が浅いために、西風などで難破しそうになると飛島へ避難した、飛島の勝浦湊は西または北西風には強かったが、北東風や東風には弱かった。また、酒田湊に入港出来ない場合は、飛島に入港して、そこから積み荷を酒田に回送するということもあった（『酒田市

史』)。「酒田湊」は、最上川河口に開けた湊であるが、河口湊という性格上、砂の堆積と河川の流路変更などの自然条件の変化に悩まされてきた。酒田の開祖として残る徳尼の尼伝説がある。徳尼の尼とは、藤原秀衡の妹または後室の後室泉の方という人物であると伝え、文治五年の奥州平泉藤原氏の滅亡に際して、36 人の家臣とともに酒田に到来したというものである(『酒田市史』)。藤原氏の縁者「徳尼」伝説は広く東北地方に残る。奥州藤原氏の強い影響が酒田湊に及んでいたでいた時期のあることを暗示していよう。十四世紀の事例とはなるが、建武元年 (1334) の『中尊寺衆徒等言上状案』によれば、酒田湊から溯った「清川」には中尊寺の所領が遺存している(『山形県史』第 15 巻上)。こうしたことも酒田湊と奥州藤原氏の関係についての傍証とはなろう。こうした結び付きは、中世前期の酒田湊の様相として注意しておきたい。後にこの 36 人衆は中世後期に自治都市酒田の長人集となるという。このあたりの酒田の町は、現在の酒田市街地の、最上川を挟んでの南側飯森山の周辺所在し、この場所を向う酒田、対岸の現在の酒田市街地を当酒田と呼んだという。諸説あるが大永年間(1521 ～ 28)ころに、それまでの向う酒田の湊が荒廃したために、現在の酒田市街地に異動してきたものという。酒田移転時期の酒田港と最上川の流路については直接史料が存在しないため不明な点が多い。想定図がいくつか存在するが、例えば、『ジュニア版酒田の歴史』では、現在の流路の河口より更に南側に河口が想定されており、飯盛山の直前最上川がほぼ直線的に西に向かい、日本海へと注いでいる。このため宮野浦は河口よりも北に位置している。飯盛山のすぐ西側に向酒田、対岸やや東側新井田川が最上川と合流する地点に当酒田を位置させている。『正保絵図』の段階では酒田湊には大船は入らず、天明八年 (1788) にこの地を訪れた古川古松軒は『東遊雑記』の中で「此所は、羽州第一の津湊、市中三千余軒、(中略)九州・大阪より廻船交易のため往来して此都に泊して、国中の産物を積事なり、大船は宮野浦の川口に寄せ、酒田までようよう三百石積の船ならでは入らず、酒田より川口まで三十五町あり」と見える(酒田市史)。宮野浦に大船は停留し、最上川を溯って三百石程度の船が酒田の町まで入ることが可能であった。入港を補完する「飛島」「加茂」の湊と強く関連しなければ、酒田湊は物流の拠点とはなり得なかったのである。このような問題点を抱えながらも酒田が港町として重要であったことの理由は、西回り航路の起点として整備される北国海運の要地である地域性と、最上川を媒介とした内陸部への河川交通の、起点であり終点であったからである。また、「正保絵図」には吹浦、加茂、鼠ケ関には「唐船番所」がおかれている。

59) 『酒田市史』

60) こうした地図の検討は、『日本古地図大成』講談社、によった。

61) これらの日本図には、飛島の周辺に、いくつかのこれよりも小さい島嶼が描かれる。こうした島嶼は、飛島周辺に点在するそれを描いたものであるのか、あるいは飛島よりも大きい新潟県村上市沖の粟島を描いたものであるのか確定することはできない。しかし、これらを飛島周辺の島嶼とすれば、これらを描き込むことによって、鳥海山や飛島とこれらの島嶼との位置関係の出入りから、所謂「やまあて」を行い、航路の指針を得た可能性を見いだすことができる。吹浦で岡陽一郎氏とともに行った、50 歳代の地元漁師の方への聞き取りの中で、今は「GPS」で漁船の位置の把握を行うが、漁を始たころは「ロラン」を使っていた。それ以前、父親のころは、飛島の島嶼の出入りや鳥海山、男鹿半島、粟島、摩耶山などの山々と、それぞれの位置関係を見て、自分の位置や漁場を把握していた。との内容を得た。

62) 織田武雄 1998『古地図の博物誌』

63) 「Tondoxima」の表記のうち「xi」は『日葡辞書』の「ローマ字辞書・音注対照表」によれば「シ」と発音される。

64) 山形県 1975『山形県史―漁業・畜産業・蚕糸業・林業編―』「山形県史」第 6 巻

65) 阿部正巳によれば、文化元年の紀行文には飛島に胡□(トド)嶋があり、多くのトドが生息し、これらは明治十年 (1877) ころまで見られたという(阿部正巳 1935「飛島史」『山形県史跡名称天然記念物調査報告書』第七集)。これを体長 4 mほどの肉食の海獣トドと考えることもできようが、江戸期の産物を収攬した『庄内史要覧』には、飛島の産物として「オットセイ」が見られる。「オットセイ」もまた北方の肉食海獣であるが、冬季日本海南部や本州東部海岸に回遊することがあるためこれを捕獲したと見ることもできよう。これら「トド」と「オットセイ」の庄内地方沿岸での棲息状況であるが、鶴岡市に所在する『加茂水族館』から得た情報によれば以下のようになる。「トド」は過去に何度か単独で庄内地方沿岸に現れている。「オットセイ」は、冬季に南下し一部はカラフトマスを追って佐渡よりも南下するらしい、庄内地方沿岸には 1 月～ 2 月にかけて打ち上げられることがある。また、飛島の海獣は「オットセイ」の可能性もあろうが、今では棲息しない「ニホンアシカ」の可能性もある。「アザラシ」は「ゴマフアザラシ」や「クラカケアザラシ」が庄内地方沿岸では現れている。集団で現れ棲息するという状況ではなく、いずれも単体で迷って現れるという状況が伺えるとのことであった。本稿では、紀行文中に見受けられる「胡□(トド)」とは「オットセイ」あるいは「ニホンアシカ」の可能性を指摘しておきたい。小嶋芳孝は日本海西部海域におけるニホンアシカ漁について広く沖ノ島までの事例を紹介している(小嶋 2001)

66) 大物忌神社に関係して本稿に関係する主な研究としては誉田慶信 1983「大物忌神社研究序説」『山形県地域史研究』8、伊藤清郎 1997『霊山と信仰の世界』吉川弘文館、誉田慶信 2000『中世奥羽の民衆と宗教』吉川弘文館、これらを含み鳥海山にまで論及したものとして、山形県学術調査会 1972『鳥海山・飛島』、月光善弘編 1977『東北霊山と修験道』名著出版さらには、遊佐町史編纂委員会 1977「鳥海山資料(鳥海山史)」『遊佐町町史資料』第 1 号などが基本的文献としてある。

67) 『山形県神社史』では、現在の飛島小物忌神社は、大宮神社とあらわされ、大宮神社が小物忌神社と改称したのは、昭和十七年 (1942) 七月のことであるという。また、火合も一度飛島側で中断していたものを、昭和十一年 (1936) より復興したものという。小嶋芳孝はこの神事に古代の「烽火」のイメージを複合させている。興味深い指摘である(小嶋 2001)

68) 山形放送 1993『新版　山形県大百科事典』「遊佐町のまつり」

69) 国學院大学 1993「堂ノ山神社境内祭祀遺跡学術調査報告書」『国学院大学考古学資料館紀要』第 9 輯)。

70) 川崎利夫・佐藤禎宏 1975「羽黒山頂出土の諸遺物について」『出羽三山・葉山』

71) 山形県 1969「山形県史　考古資料編」『山形県史』第 11 巻、酒井忠一・本間隆平・川崎利夫 1971「飛島洞窟発掘調査報告」『庄内考古』第 10 号、BinYmaguchi and HajimeIsida2000「Human Skeletal Remains of the HeianPeriod from the Tekiana Cave Site on Tobi-shima,YamagataPrefecture」『BULLETIN OF THE NATIONAL SCIENCE MUSEUM』

72) 本稿にかかわる部分として参考にしたのは、小嶋芳孝 1996「蝦夷とユーラシア大陸の後流」『古代蝦夷の世界と交流』、同 2001「日本海の島嶼から見た地域間交流史」『市史研究青森』第 4 号、同 2002「古代日本海世界北部の後流」『北の環日本海世界』など

73)　須恵器甕は致道博物館所蔵にかかるものが１点、個人所蔵にかかるものが１点、唐津焼瓶は遊佐町教育委員会所蔵、明治時代陶器製の尿瓶は致道博物館所蔵である

74)　庄内地方の遺跡の分布図は、山形県の遺跡位置データに基づいて示したものである。しかしながらこの図では、表採資料を含んだ取り扱いになっているために時期的な検討を十分加えることができない。時期的な検討を加える資料として、発掘調査などを通してある程度の資料が得られている遺跡を使用する。さらに、対象遺跡出土土器の編年的研究については、阿部明彦、伊藤邦弘、高桑弘美、植松暁彦の各氏と検討しご教示を得た。編年観についての確定については山口がこれを行った。

75)　阿部明彦・佐藤庄一、他 1998「庄内平野」『第 24 回古代城柵官衙遺跡検討会資料』、石井浩幸・鈴木良仁・武田和宏・渡辺薫 1999「山形県の一般集落の様相」『第 25 回古代城柵官衙遺跡検討会資料』、植松暁彦 1997「庄内高瀬川と月光川流域の平安時代の集落変遷について」『山形考古』第６巻１号。

76)　酒井英一 1982「庄内の古墳について考ていること」『致道』第 17 号

77)　阿部明彦 1992「庄内平野の古墳時代史」『東北文化論のための先史学歴史学論集』

78)　佐藤禎宏 1985「原始・古代の庄内と余目」『余目町史』

79)　酒井英一 1986「東田川郡三和出土の古式土師器」『庄内考古学』第 17 号

80)　佐藤庄一 1985「城輪柵とその周辺集落」『庄内考古学』第 19 号、植松暁彦 1997、石井浩幸、鈴木良仁、武田和宏、渡辺薫 1999「山形県の一般集落の様相」『第 25 回古代城柵官衙遺跡検討会資料』　阿部明彦 1979「山形県余目町上台遺跡の竪穴住居跡と出土土器について」『庄内考古学』第１６号

81)　宇野隆夫 1991「集落」『律令社会の考古学的研究』

82)　佐藤庄一 1997「山形県の８・９世紀の須恵器」『日本考古学協会 1997 年度秋田大会資料集』、植松暁彦 1997「庄内高瀬川と月光川流域の平安時代の集落変遷について」『山形考古』第６巻１号、伊藤武士 1997「出羽における 10・11 世紀の土器様相」『北陸古代土器研究』第７号、阿部明彦・高桑弘美 2001「願瀬山・泉谷地古窯跡群出土の須恵器」『庄内考古学』第 21 号

83)　酒井英一氏のご教示による。

84)　八峠興 2001「柱状高台考」『中世土器研究論集』

85)　こうした理解に伴う 11 世紀代の遺跡の存在と分布については、後考を期したい。

86)　山口博之 2002「古代出羽国南部に於ける貿易陶磁器の様相」『西村山の歴史と文化』Ⅳ

87)　井上喜久男 1998「畿外遺跡に見る三彩・緑釉陶器」『日本の三彩と緑釉』

88)　玉田芳英 1994「施釉陶器の成立と展開」『古代の土器研究』第３回シンポジューム資料

89)　愛知県陶磁資料館 1998『日本の三彩と緑釉』

90)　川崎 1976『山形県における古代・中世の火葬墓について』東北考古学の諸問題

91)　山口博之 1996「山形県の古代の人はどんな墓に入ったのか」『西村山の歴史と文化』Ⅲ

92)　酒井忠一・川崎利夫 1963「山形県飽海郡遊佐町宮山坂火葬墳墓群」『考古学雑誌』第 49 巻第３号

93)　「宮山坂遺跡」で出土した専用骨蔵器は、短い口縁部が「く」の字状に外反、あるいは短頸壷状にたつ形態がみられ、全体としての器形は楕円形を呈し、蓋がこれに伴うものが多い。これらの特徴をもつ短頸壷状の器形は、山形県内の発掘事例からは見いだすことが困難である。山口耕一は「宮山坂遺跡」出土の骨蔵器について、「専用骨蔵器」と考察し、類例をもとに、神奈川県出土の相模型専用骨蔵器との共通性を指摘した（山口耕一 1995「専用骨蔵器と転用骨蔵器」東日本における奈良・平安時代の墓制所収）。同様の共通性は、秋田県秋田市「潟向Ⅰ遺跡」出土骨蔵器と、千葉県出土の上総型専用骨蔵器との間にも伺うことができるという。さらにこの背景として、長谷川厚（長谷川厚 1983「歴史時代墳墓の成立と展開（１）」古代 75・76 合併号）の論旨に立脚しながら、東国と東北地方における人の移動による墓制とそれを取り巻く文化の移動をしめしていると考えている。このような論点を敷衍させれば、当地に構えられた墓所の被葬者は、相模方面と近い土地の者達であり、骨蔵器も移動にともなってもたらされたと見ることもできよう。また、骨蔵器自体の年代も、川崎等は９世紀後半から 10 世紀と推定しているが、類例に乏しく在地の土器群を指標とした編年では、年代を確定することは困難である。神奈川県出土の本事例類似の相模型専用骨蔵器の年代は８世紀代後半に比定されことから、本事例の時期は８世紀後半と見ておきたい。。

94)　松本喜久夫 1966「羽黒町高寺の火葬墓墳墓について」『庄内考古学』第３号

95)　この古代０期については、文献史では詳細な検討がある。近年のものでは、渡部育子 2000「七・八世紀の庄内と秋田」『国立歴史民俗博物館研究報告』第 84 集。この時期に考古遺跡が見いだせないことについては、いくつかの作業が必要なのであろう

96)　北村優季は、出羽国への移民について、出羽国関係の人名（姓）について分析し、それぞれを「陸奥系」「東国系」「北陸系」にわけ、東国系、北陸系は移民による結果見られ、陸奥系は住民レベルの相互交流であるとしている。（北村優季 1997「律令国家と出羽国」『山形考古』第６巻第１号）

97)　館野和巳 1981

98)　北陸の初期荘園については、（小口雅史・吉田孝 1991「律令国家と荘園」『講座日本荘園史』２、藤井一二 1986『初期荘園史の研究』、浅香年木 1978「北陸の庄田について」『北陸庄園遺跡の検討』古代を考える 16、等を参考とした。

99)　城ノ輪柵跡はその遺構の変遷が、小野忍によりⅠ期～Ⅳ期、小期を挟んで、総計では６期に分けられている。Ⅰ期は９世紀前半に比定され、９世紀前半から営まれていたことが報告されている（小野忍 1997「城輪柵遺跡」『日本考古学協会秋田大会資料集』）。こうした見解からは本格的な国庁の造営は９世紀前半と見ることができようか

100)　吉川真司によれば、「王臣家」や「諸家」とは主として三位以上の上級貴族の家政機関をさすという。この寛平年間前後には院宮王臣家禁圧令は数を増している。これは院宮王臣家の活動が活発化しているためであるという（吉川 2002「院宮王臣家」『平安京』日本の時代史　５）。この寛平五年の太政官符もこうした、院宮王臣家禁圧令に連なるものとみることもできよう。なお、鈴木拓也はこの太政官符について、38 年戦争の時期でもあり、陸奥出羽両国内に多くの人を集める必要があるため、京内に浮浪するものを連れ戻そうとしたものであろうとする（鈴木 1998「陸奥・出羽の浮浪逃亡政策」『古代東北の支配構造』）

須恵器長頸瓶の製作技法

－山形県内の窯跡出土資料から－

吉田　江美子

1　はじめに

須恵器について中村浩は、専門工人によって生産された規格性（形態や手法）をもつ手工業品であり、かつ一定の時代の変化とともに微妙に変化することをその特徴としている（中村 1993）。その特徴のひとつが手法つまり製作技法で、坏に見られるヘラ切りから糸切りへと変化する底部切り離し技法がその代表であろう。山形県内の須恵器出土資料においても、坏の底部切り離し技法の変化は土器編年上すでに重要な指標のひとつとなっている（阿部・水戸 1999）。しかしその他の器種については製作技法の変化を含むそれらの持つ規格性について、これまで検討があまり進展していない。そこで本稿では山形県内の複数の窯跡で生産されたことが確認されている、そして他地域でもその研究が進展している長頸瓶について取り上げる。特にその製作技法の変化について考察を行う。

2　瓶類の製作技法

ここでは瓶類における製作技法とその名称を定義づけるためにもその概略を述べる。今回瓶類の製作技法として以下の閉塞技法（風船技法）と開口技法の二方法に分類する。また三段構成の製作技法は円盤閉塞法のみ、二段構成の製作技法は回転絞り閉塞法と開口技法の二種に分類する（表１）。

（1）閉塞技法（風船技法）によるもの（第１図　平尾 2001）

閉塞技法とは瓶の体部内の空気圧を利用し意図的に器形の変形を行える、あるいは意図しない器形の変形（ヘタリ）防止が出来ることにより作業の効率化を図った技法とされる（笹沢 2001）。

① ロクロの上に粘土円盤を据え、粘土を輪積みした後に挽き上げ体部を形成する（第１図１～３）。

② 所定の高さまで挽き上げた後に開口部を狭めてゆく（第１図４～５）。

③ 体部を閉塞する（第１図６）。その方法として以下の二方法がある（第３図　北野 2001a）。

・別作りの粘土円盤を上部に被せ密閉する。
　→三段構成（円盤閉塞法）

・更に上方に伸ばし絞り切って密封する。
　→二段構成（回転絞り閉塞法）

④ 体部内の空気圧を利用し、コテで圧力を加え体部の成形（加圧変形）や、接合部分の調整を行う（第１図７～８）。

⑤ ある程度乾燥させ、底部に高台をつける（第１図９）。

⑥ 胴頂部の頸部との接合部分を切り取って穴を開け、口頸部を形成する粘土紐を接合する（第１図 10 ～ 11）。

⑦ 口頸部を形成する（第１図 12 ～ 13）。

⑧ 乾燥後焼成する（第１図 14）。

（2）開口技法によるもの

閉塞技法の痕跡が見られない、開口技法と推測されるものについて二方法に分類する。ひとつは閉塞せずに狭めた開口部に別作りの口頸部を接合した二段構成のもの

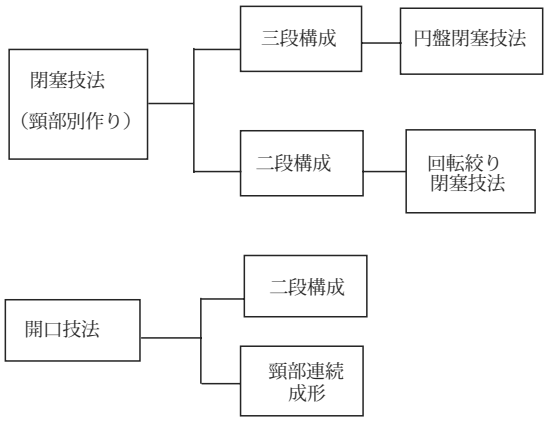


表１　長頸瓶製作技法概要

である。またひとつは9世紀以降小瓶を中心に出現する技法として胴頂部から口縁部まで連続して成形する技法がある（笹沢2001）。

3　研究史

横山浩一は、瓶類の頸部別作りの技法の発生についてロクロの回転力の弱さ、あるいは工人の技術不足の結果としている（横山1959）。また楢崎彰一はロクロの技術が向上した結果、古代において瓶類が三段構成から二段構成へと技法が移行したとしている（楢崎1961）。田辺昭三は長頸瓶において三段構成が奈良時代まで、二段構成は平安時代以降の技法とし、その理由としてロクロの回転力の向上を挙げている。しかしその一方で陶邑TK217号窯出土の平瓶にみられる回転絞り閉塞法の例を示している（田辺1981）。北野博司は、陶邑の例や石川県内の6～7世紀の出土資料より、すでに古墳時代には回転絞り閉塞法を行える水準にあり、よって円盤閉塞法から回転絞り閉塞法への移行は新技術導入という性格ではなく器形変化に即した結果としている（北野2001a）。また笹沢正史も製作技法の移行の理由として、長頸瓶の器形が胴部の成形に加圧変形を必要とする『算盤形（角肩・扁平形）』から、加圧変形を必要としない『球胴形』、そして『卵形』に変化したことを挙げている(第２図)（笹沢2001）。また一方で尾野善裕は猿投窯で「二段構成」化が進んだ要因として高級品である施釉陶器の生産に伴い回転軸の振れの少ないロクロへの改良が回転絞り閉塞が行いやすい土器製作の環境を作ったと指摘している（尾野2001）。古代の土器研究会シンポジウムにおいて、全国的傾向として三段構成の円盤閉塞技法は7世紀前半に使われはじめ、8世紀代までは主体であった。地域差はあるもののその後9世紀前半を境に二段構成の製作方法に移行する傾向にあるとの見解がなされている（古代土器研2001）。

4　山形県内で生産された須恵器長頸瓶

では、古代の山形県において生産された長頸瓶などの瓶類の製作技法の傾向を窯跡資料で検討する。遺跡の位置は第4図、所在地は表2に記した。また遺物実測図は第5図に記載し、その各遺物についての詳細は表3に記している[1)]。

山形県内陸部では3遺跡、日本海側の庄内地方では4遺跡、計7遺跡を対象とした。なお、今回使用する資料は、窯体・灰原・捨て場から出土した、胴部閉塞部分が実見できる、または明確な資料を対象とした。よって上記以外の遺構からの出土遺物、閉塞部分が欠損している、あるいは完形品で内部閉塞部分が確認できないものについては省略したが、一部はその限りではない。また、7遺跡のうち現在まで報告書が刊行されているのは5遺跡であり、現在整理作業中・報告書未刊行の2遺跡については本稿では文章のみの報告とする。今回遺跡の概要及び遺構の詳細については省略し、以下この章においてはカッコ内の数字に関してことわりがないものは全て第5図の実測図番号とする。

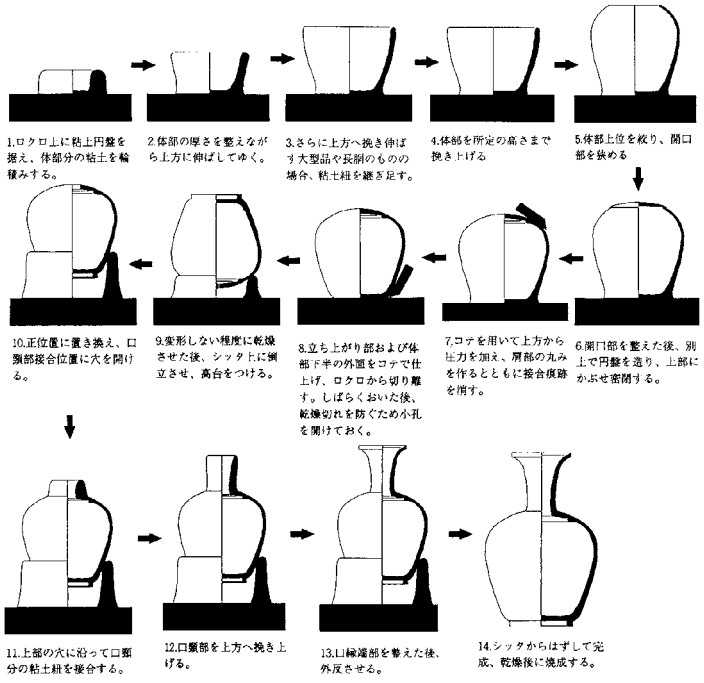
（1）合津窯跡

8世紀後半から末葉と想定される窯跡の灰原から円盤閉塞法によって製作された長頸瓶が出土している[2)]。

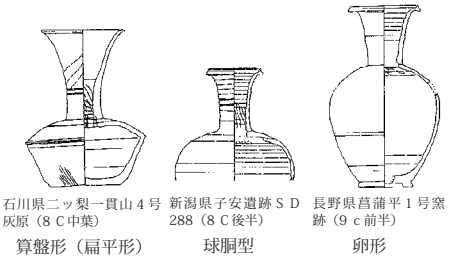
（2）平野山窯跡群遺跡　第12地点

第2次調査の灰原より出土している。(2)、(3)、(5)、（6）のいずれも円盤閉塞痕が切り取り部分より半径10mm以上大きく、円盤閉塞法を使用したことが明瞭である（写真2）。(1）については一部頸部切り取り部分に閉塞痕が切られているがやはり明瞭に円盤閉塞痕が残っている（写真1）。また（2）と（5）について頸部接合部分は欠損しているが、円盤閉塞法で製作していることから頸部については別作りと推定できる。器形については、8世紀代の（1）の場合はやや小型で肩に丸みを帯びているが、『扁平型』に類似しているといえよう。9世紀代中頃の（5)、（6）は『卵型』、(2)、(3）についても報告書では年代は不明であるが（5)、(6）と大きく年代差はないと思われる。いずれも全国的な傾向と同様と言えよう。長頸瓶については器形の変化とは関係なく同じ技法で製作されていたと考えられる。ただし、(4）の小瓶については閉塞部分、頸部接合がないため製作技法は不明である。しかし、頸部付近内面に若干の螺旋状の皺が見られ、胴部外部にはコテによる調整等が見られないため閉塞法を使っていない可能性がある。

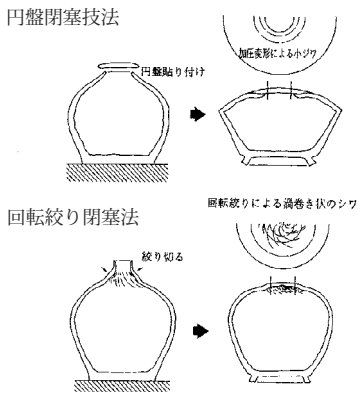
（3)、（5）については頸部付け根に環状の凸帯が見られる。丁寧に成形し仕上げるなど装飾性の高さが感じられる。なお、環状凸帯付長頸瓶については、奢侈品もしくは儀器用品としての意味合いが強く、有力者や機関



第 1 図　体部を形成する瓶類の製作工程概念図（平尾 2001）



第 2 図　長頸瓶の器形（笹沢 2001 より一部抜粋）



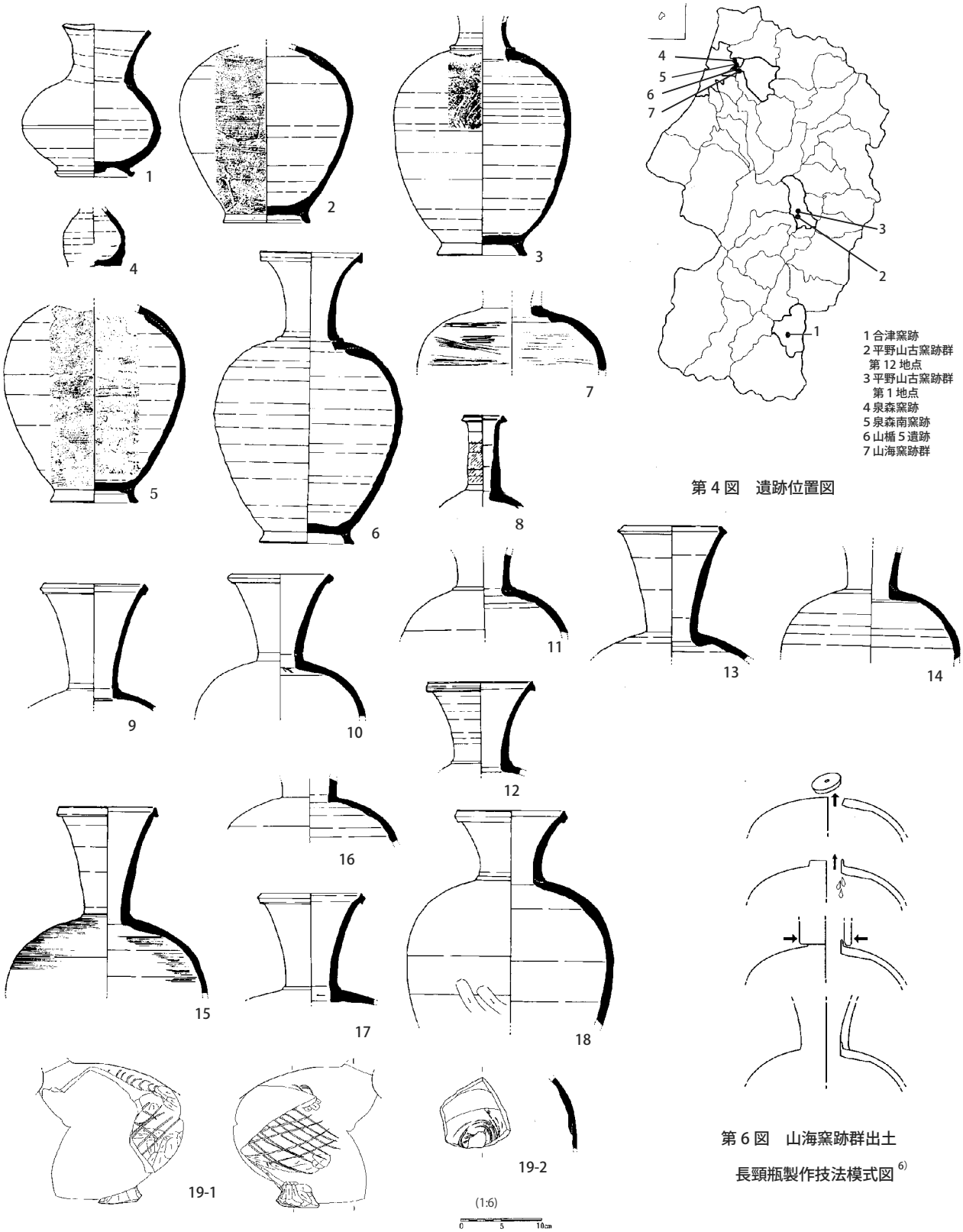
第 3 図　風船技法の二種（北野 2001a）

	遺 跡 名	所 在 地
1	合津窯跡	東置賜郡高畠町大字上和田字合津
2	平野山古窯跡群第１２地点	寒河江市大字芝橋字高松ほか
3	平野山古窯跡群第１地点	寒河江市高松平野山
4	泉森窯跡	酒田市大字生石字泉森
5	泉森南窯跡	酒田市大字生石字泉森
6	山楯５遺跡	飽海郡平田町山楯
7	山海窯跡郡	飽海郡平田町大字山谷新田字山海

表 2　　遺跡所在地

遺跡名	図	出土遺構	閉塞技法	頸部	年代	凸帯	閉塞痕渓	出典
合津窯跡	-	-	円盤閉塞	別作り	8C 4/4	無	-	高畠埋５
平野山古窯跡群	1	灰原Ｐブロック	円盤閉塞	別作り	8C3/4	無	-	山埋セ 52
第 12 地点遺跡	2	灰原Ｇブロック	円盤閉塞	（別作？）	不明	不明	72	山埋セ 52
	3	灰原Ｇブロック	円盤閉塞	別作り	不明	有	102	山埋セ 52
	4	灰原Ｇブロック	（連続？）	（連続？）	不明	無？	-	山埋セ 52
平野山（第２次）	5	灰原Ｈブロック	円盤閉塞	（別作?）	9C2/4	不明	90	山埋セ 52
	6	灰原Ｈブロック	円盤閉塞	別作り	9C2/4	有	78	山埋セ 52
平野山第１地点	7	捨て場	円盤閉塞	（別作？）	9C2/4	不明	78	寒市教委
山楯５遺跡	8	捨て場	（円盤？）	別作り	9C1/4	無	72 ？	山埋セ４
	9	ＳＱ１	円盤閉塞	別作り	9C3/4	有	48	-
	10	ＳＱ１	（円盤？）	別作り	9C3/4	無	-	-
	11	ＳＱ１捨て場	（円盤？）	別作り	9C3/4	有	-	県教 170
	12	ＳＱ１捨て場	（円盤？）	別作り	9C3/4	無	-	県教 170
山海窯跡群遺跡	13	ＳＱ１捨て場	（円盤？）	別作り	9C3/4	無	-	県教 170
（第１次調査）								
	14	ＳＱ１捨て場	（円盤？）	別作り	9C3/4	無	-	県教 170
	15	ＳＱ１捨て場	（円盤？）	別作り	9C3/4	有	-	県教 170
	16	ＳＱ３窯体内	（回転絞？）	別作り	9C3/4	無	-	県教 170
	17	ＳＱ４	（円盤？）	別作り	9C3/4	有	-	-
	18	ＳＱ４捨て場	（円盤？）	別作り	9C3/4	無	-	県教 170
山海（第２次）	19	ＳＱ８捨て場	円盤閉塞	-	9C3/4	-	20 ～ 4	県教 172

表 3　　遺物一覧表



第５図　山形県内窯跡出土の瓶類

第４図　遺跡位置図

第６図　山海窯跡群出土
長頸瓶製作技法模式図[6)]

の所持品とされる（利部 1998）。

（3）平野山窯跡群遺跡　第１地点

９世紀前半。捨て場から（７）が出土している。円盤閉塞痕が切り取り部分より半径 10mm 以上大きく、円盤閉塞法を使用したことが明瞭である。体部上部のみの残存のため全体の器形は不明だが『球胴型』あるいは『卵型』と思われる。

（4）泉森窯跡

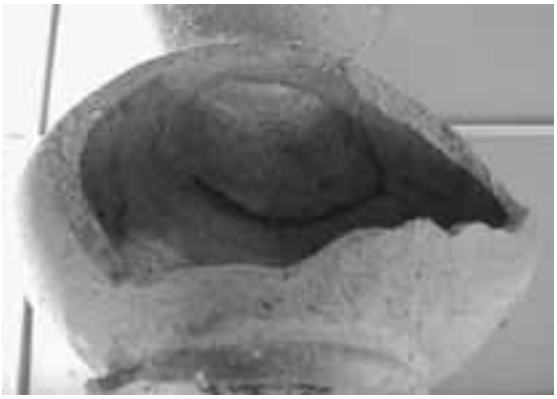


写真１（第５図１）

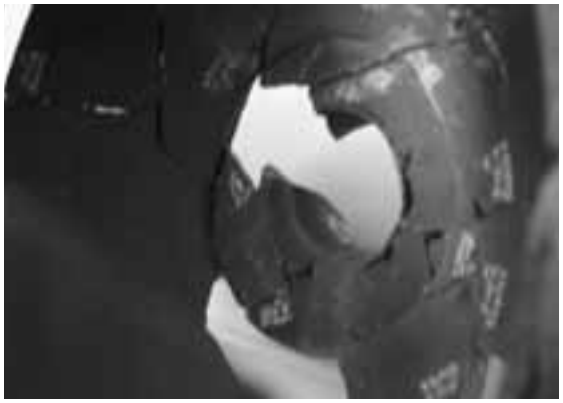


写真２（第５図３）

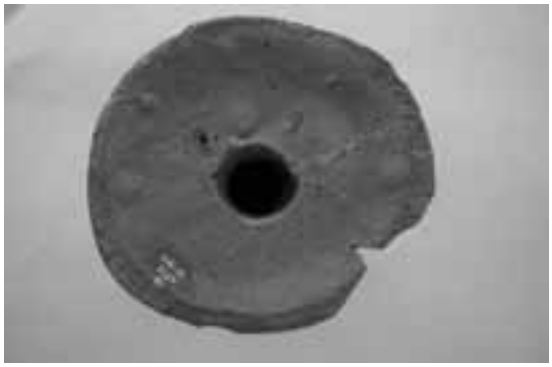


写真３（第５図８）

写真４（第５図９）

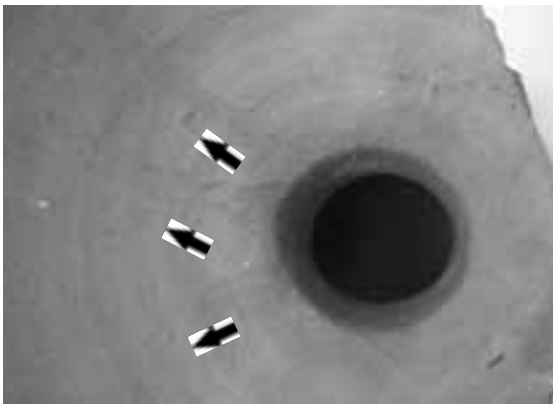


写真５（第５図 10）

写真６（第５図 16）

写真７（第５図 17）

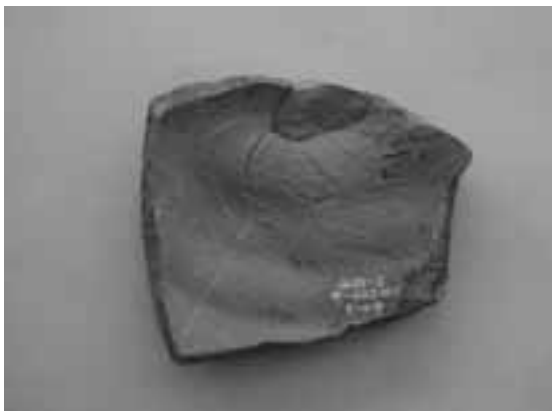


写真８（第５図 19-2）

９世紀前半の窯跡。円盤閉塞法・頸部別作りの長頸瓶が灰原から出土している。なお、報告書刊行は平成１５年度予定であり、詳細は刊行を待ちたい。

（５）泉森南窯跡

９世紀前半の窯跡。円盤閉塞法・頸部別作りの長頸瓶が灰原から出土している。なお、報告書刊行は平成１５年度予定であり、詳細は刊行を待ちたい。

（６）山楯５遺跡

９世紀初頭。灰原から水瓶（8）が出土している。体部は頸部別作りの円盤状に残存しており、環状に剥離したと思われる痕跡が認められる（写真３）。そのことから円盤閉塞法によって製作されたものと思われる。

（７）山海窯跡群遺跡

９世紀後半。この遺跡においては、円盤閉塞の痕跡があるのは（9）のみで、それについても円盤閉塞痕は切り取り部分より半径２～4mm 大きい程度である（写真４）。（10）～（18）では円盤閉塞痕は確認できず、個体差はあるものの胴頂部内部に渦巻状の皺がそれぞれで確認できる（写真５～７）。しかし､円盤閉塞である（6）でも同様の渦巻状の皺がみられ、必ずしも回転絞り閉塞のみに渦巻状の皺が現れるとは限らない[3)]。

また、遺跡からは鳥型土製品（19-1）が出土しているが､その胸部と思われる部分に存在する閉塞部分（19-２）を見てみると、直径 20 ～ 40mm 前後の楕円形の円盤閉塞痕が見られ、渦巻状の皺の後に加圧変形の際に出来る同心円の皺が形成されたことが確認できる（写真８）。そのことから、円盤閉塞径が他の窯跡のものよりも小さく頸部切り取り径の方が大きいこと、円盤閉塞技法においても渦巻状の皺が出来ることを示している。そして、（10）～（15）、（17）は胴頂部付近が他の器壁より厚みがあることから円盤閉塞を行った可能性が高い。その場合、切り取り径より円盤閉塞痕が小さかったため現状では確認できないものと思われる。

それに対し（16）については、胴頂部に近づくにつれて器壁が薄くなっているため回転絞り閉塞法の可能性が高い（写真６）[4)]。

このように閉塞法は明確ではないが、（10）～（17）については頸部付け根内部に切り取り痕等があるため頸部接合の際に切り取られたとみられ、胴頂部を切り取る風船技法のいずれかによって製作されたといえる。（18）について、頸部は別作りであるものの、頸部接合部内面が丸く整えられているため閉塞・開口技法両方の可能性がある。しかし胴頂部の器壁に厚みがあることから円盤閉塞法とも考えられる。

また山海窯跡群の製作技法の特徴としてあげられるのが、頸部の接合技法である。比較した場合平野山窯跡群のものは頸部と胴部の接合面が水平（横）方向の１面である。しかし山海窯跡群のものについて、頸部との接合面が垂直（縦）・水平（横）方向の２面になっていることが土器断面より観察できる。頸部接続部分の胴頂部内側を引き出し、２面で接合することによってより接合を強化することが目的と推測される。この方法について胴部切り取り部分内部を水で柔らかくして引き出していると思われ、その痕跡として（10）の胴部内面に水滴痕が残っている（第６図）（写真５。矢印は水滴の方向）。それにあらかじめ大きめに作った頸部を絞りながら引き出し面に接合させていったものと思われる[5)]。

また（9）、（11）、（15）、（17）について頸部付け根に環状凸帯が見られるものの、細い粘土紐を貼り付けて簡易な調整を行ったものと思われ、平野山古窯跡群のそれと比較して環状凸帯が形骸化している様子がうかがえる。

山海窯跡の長頸瓶の器形については、今回使用した資料からのみでは不明であるが、他の完形品に近い資料からみて、器形はなで肩であり卵型に近いと考えられ、９世紀後半のものとして全国的な傾向と同様な器形と思われる。

（８）その他

以下の窯跡からも長頸瓶が出土しているものの、体部の欠損等で製作技法が不明なことより、今回の集成から除外した。

・願瀬山第１号窯跡（酒田市大字生石字柳沢・９世紀初頭）（佐藤・佐藤 1971）
・久保手１号窯跡（上山市久保手四ッ谷、地蔵堂・９世紀初頭）（上山市教委 1983）

５　まとめ

今回は、山形県内の長頸瓶の窯跡資料において、最も古いものである８世紀第３四半期から最も新しい９世紀第３四半期までのものを集成した。その結果器形に関し

ては『扁平形』から『球胴型』あるいは『卵形』へ変化しており、他地域と傾向は同様といえよう。しかし、長頸瓶の製作技法については８世紀から９世紀前半まで、あるいは９世紀後半に入っても円盤閉塞技法を主に使用したと思われる。山海窯跡では回転絞り閉塞法と思われる長頸瓶（第５図１６）が１点存在するものの、それはマイナーな存在であり、あくまでも主流は円盤閉塞法によるものと推測される。前記の通り北野氏は器形の変化により製作技法が変化したとしているが、県内の長頸瓶については器形が変化しても従来の円盤閉塞による製作技法で製作していたと思われる。しかし､それと同時に、全国に波及しつつあった回転絞り閉塞法が導入されつつあった過渡期の状態であることを示しているのではないだろうか。また、窯の工房内においても製作技法を統一するべきという制約はなかったことが考えられる。これは８世紀後半～９世紀前半の猿投系須恵器窯跡でも長頸瓶の製作技法が三段構成と二段構成の長頸瓶が同時期に存在し、そして徐々に三段構成から二段構成へと移行していく様子が見られる（尾野 2001）。

だが、今回回転絞り技法が存在するのは山海窯跡の第５図 16 の１点のみであり、この窯特有の傾向である可能性とも考えられ、県内で９世紀後半に長頸瓶の製作技法の変化が見られたとするのは性急かもしれない。今後同時期の集落等の資料を含め考察を重ねていく必要があるだろう。

最後に本稿を執筆するにあたり北野博司氏に多大なるご教示をいただいた。また山形県立うきたむ風土記の丘考古資料館ならびに竹田純子氏には資料の実見に際しご尽力いただいた。紙面を借りて謝意を申し上げる。

註

1) 遺物について。第５図において、縮尺は１／６で掲載している。報告書にて白抜きで掲載されていたものについては加筆を行った。第５図 9、10、19-2 は報告書未掲載のため本稿を作成するにあたって作図した。19-1 については改めて作図した。また、表３について、推定される部分についてはカッコ書きとした。遺物の年代については報告書に従った。
2) 報告書において資料は写真でのみ報告･掲載されているため、本稿においては図版での掲載は省略した。なおこの資料を実見するにあたり、山形県立うきたむ風土記の丘考古資料館・竹田純子氏にご尽力いただいた。
3) 東北芸術工科大学北野博司氏のご教示による。
4) 東北芸術工科大学北野博司氏のご教示による。
5) 東北芸術工科大学北野博司氏のご教示による。
6) 第６図については東北芸術工科大学北野博司氏のご教示に従い作図した。

引用文献

阿部明彦・水戸弘美　1999 「山形県の古代土器編年」『第 25 回古代城柵官衙遺跡検討会資料』
尾野善裕　2001 「東海地方における須恵器製作技術の転換とその背景」『古代の土器研究会第６回シンポジウムレジュメ』古代の土器研究会
利部修　1998 「東北以北の双耳坏と環状凸帯付長頸瓶」『研究紀要第 13 号』秋田県埋蔵文化財センター
柏倉亮吉・伊藤忍　1970 『平野山古窯跡群』寒河江市教育委員会
上山市教育委員会　1983 『上山久保手窯跡発掘調査報告書』上山市教育委員会
北野博司　2001a 「須恵器の風船技法」『つぼとかめのつくりかた　北陸古代土器研究第９号』北陸古代土器研究会
北野博司　2001b 「須恵器成形方法研究の現在と課題」『古代の土器研究会第６回シンポジウムレジュメ』古代の土器研究会
笹沢正史　2001 「須恵器瓶類の口縁頸部接合痕跡」『つぼとかめのつくりかた　北陸古代土器研究第９号』北陸古代土器研究会
佐藤禎宏・佐藤潤子　1971 「酒田市願瀬山第４号窯古窯跡」『山形史学研究第７号』
田辺昭三　1981 「須恵器大成」角川書店
中村浩　1993 「須恵器の編年」『季刊考古学　第 42 号』雄山閣
楢崎彰一　1961 「土器の発達」『世界考古学大系第４巻　日本Ⅳ』平凡社
平尾政幸　2001 「須恵器製作技法の検討にむけて」『古代の土器研究会第６回シンポジウムレジュメ』古代の土器研究会
山形県教育委員会　1991 『山谷新田遺跡・山海窯跡群発掘調査報告書』山形県埋蔵文化財調査報告書第 170 集
山形県教育委員会　1992 『山海窯跡群第２次・山楯 7.8 遺跡・山楯楯跡発掘調査報告書』山形県埋蔵文化財調査報告書第 172 集
山形県高畠町教育委員会　1997 『町内遺跡発掘調査報告書（３）』山形県高畠町埋蔵文化財報告書第５集
（財）山形県埋蔵文化財センター　1994 『山楯 3.4.5 遺跡発掘調査報告書』山形県埋蔵文化財センター調査報告書第４集
（財）山形県埋蔵文化財センター　1998 『平野山古窯跡群第 12 地点遺跡第２次発掘調査報告書』山形県埋蔵文化財センター調査報告書第 52 集
（財）山形県埋蔵文化財センター　2001 『泉森窯跡・坂の下遺跡調査説明資料』山形県埋蔵文化財センター
（財）山形県埋蔵文化財センター　2002 『泉森南窯跡調査説明資料』山形県埋蔵文化財センター
横山浩一　1959 「手工業生産の発展」『世界考古学大系第３巻　日本Ⅲ』平凡社

山形県内出土の瓦質土器

髙桑　弘美

1　研究小史

山形県内で瓦質土器の出土資料が確認され始めるのは、1970 年代後半、立川町古楯遺跡・藤島町平形遺跡の発掘調査以降のことである。

1980 年代に入り、庄内地方を中心とした発掘調査の増加に伴い、出土資料は増え続けたが、一つの遺跡からの出土は数点に留まり、遺構との関連や詳しい時期について言及されることは無かった。

1989 年、藤島町藤島城跡の調査が行われ、15 世紀後半から 16 世紀の多量の遺物が出土した。これらは、山形県内の中世後半の基準資料となる遺物群であるが、それに含まれる瓦質土器の内容も、その数および多様性は特筆すべきものがある。藤島城跡の瓦質土器は、中世後期の広域流通品大和系瓦質土器の分布（近江 1997）や瓦質土器の権力装置としての性格を解明する検討資料（水澤 1999）として扱われている。

瓦質土器は、在地土器として編年され、年代観が示されている（齋藤ほか 1998）。また、大和産瓦質土器と在地産瓦質土器の比較調査も行われている[1)]。大和産と比較することにより、在地産の瓦質土器の特徴がより明確となり、産地や技術系譜についても検討可能な状態になりつつある。

2　瓦質土器とは

瓦質土器とは、その文字が示す通り、瓦のような質感を持ち、煤けたような色調を特徴とする土器である。

西日本では、火鉢・擂鉢・鍋等の大型品を瓦質土器、碗･皿について瓦器と称されることがあるが、両者には、製作技術の系譜の相違は見られないと考えられている。西日本の瓦器生産についてまとめた菅原正明は「瓦器とは､焼成温度を 800 ～ 900℃位まで上げ､短期間焼成し、その最終段階に還元焔焼成した軟質の焼物であり、その形態はより上質の容器を写し、さらに器面を須恵器に似せた灰色や金属器に似せた燻し銀色または黒色にしている。」と定義している（菅原 1989）。

3　瓦質土器の出土する遺跡とその分布

山形県内で瓦質土器が出土した遺跡は、43 遺跡を数える。報告書等で報告されている瓦質土器は、270 個体以上に上る。現在、整理が行われている遺跡や未掲載遺物を含めると、300 点以上の瓦質土器が出土していることが推定される。

瓦質土器が出土した遺跡は、県内全域に及ぶ。庄内地方が、24 遺跡と最も多く、村山地方と置賜地方はほぼ同数で、最上地方が 1 遺跡と極端に少ない。日本海に面した庄内地方に多いが、最上川を始めとする河川に沿って、遺跡の分布が見られる。

瓦質土器は、藤島城跡や鶴ヶ岡城跡、米沢城跡等の城館跡からまとまって出土し、器種も多様である。中世・近世の遺構が希薄な遺跡からは、擂鉢や鉢類の単体の出土が目立つ。中世・近世の本格的な調査が行なわれている遺跡は、城館跡が中心であることも、その理由と見られるが、遺跡の性格による数的な偏重は顕著である。滝の山廃寺・柳沢 A 遺跡（伝永慶寺跡）等の寺院においても、まとまって出土し注目される。遺跡の種類と瓦質土器の関係は、越後において明らかにされているが（水澤 1999）、山形県においても、支配者階級が主要な受容者であることは、出土状況から説明できる。

4　瓦質土器の器種とその出土状況

瓦質土器には、多様な器種がある。器種分類は、西日本（菅原 1989、近江 1990・1997、佐藤 1996 ほか）と東日本（工藤 1989・水澤 1999）でそれぞれの地域を中心に行われている。山形県の瓦質土器集成にあたっては、報告書掲載器種を示し、当地域が含まれる水澤分類（水澤 1999）に従い、表を作成している。

水澤分類風炉Ⅰ～Ⅳ類、円形浅鉢Ⅰ～Ⅳ類、円形小型鉢類は、一定量確認することができる。スタンプに多様なバリエーションが見られる。円形小型鉢Ⅲ・Ⅳ類、仏

具Ⅱ類は、出土数は少ないが確認できる。鶴ケ岡城跡出土仏具Ⅱ類は、浪岡城跡資料と類似し、産地が同一であると考えられる。一方、北陸では出土例があるものに、山形県内で確認できない器種も多くある。

風炉Ⅳについては、鶴岡市鶴ヶ岡城跡・櫛引町柳沢A遺跡、藤島町藤島城跡、酒田市手蔵田10・11遺跡で出土している。鶴ヶ岡城跡・藤島城跡・柳沢A遺跡は、他の風炉や浅鉢も量的なまとまりを見せており、城館跡・寺院跡の瓦質土器出土状況をよく物語る資料である。しかし、手蔵田10・11遺跡は、遺構密度が低く、陶磁器等の遺物は青磁碗・瀬戸美濃丸碗等で、他の瓦質土器資料も出土していない。遺跡の再評価が必要である。

城館跡や集落跡には、西川町睦合館跡・大蔵村清水城・新青渡遺跡等のように円形浅鉢や小型円形鉢を単独で持つ遺跡がある。多量に用いるのとは別に、瓦質土器を必要性とする生活形態・使用形態がある。その需要から、在地で作られた可能性が高い。

擂鉢の出土点数は、55点を数える。城館跡・寺院跡からの出土点数は少ない。擂鉢は、在地性の強い遺物である。

5　瓦質土器の年代観と画期

県内出土の瓦質土器で、最も古い資料は、酒田市豊原B遺跡の円形浅鉢Ⅰ類と見られる。珠洲甕Ⅳ期、陶器碗（中国？）と供伴する。円形浅鉢は、菊花文のスタンプが押され、底部に離砂が見られる。浅鉢は、漆接されており、年代が上がる可能性が残るが、14世紀前半と考えられる。大和産と見られる。藤島町平形遺跡、酒田市大楯遺跡等に出土例がある。

瓦質土器の出土量が急激に増加する時期がある。藤島城跡の栄えた時期で、15世紀中葉～16世紀代である。器種が多様化する時期でもある。山形県内の瓦質土器の基本的な器種は、この時期を軸にして年代観が想定できる。

中世社会の崩壊とともに、瓦質土器の器種構成が大きく変化する時期である。17世紀以降である。器種は更に多様となり、行火等の暖房機具の役割が増す。また、中世の瓦質土器とは明らかに異なる、粗雑で砂質感の強い胎土が主流となる。

6　擂鉢の変遷

庄内と内陸地方に分け、Ⅰ～Ⅳ類に分類し擂鉢の変遷を示す（図２）。分類の概要については図中に記す。

Ⅰ類は珠洲擂鉢の口縁形態に類似し、aからbへの変遷が考えられる。珠洲の焼成不良の可能性が残るが、チョーク質の胎土と硬質な燻しから、意図的に瓦質に仕上げたものと見る。Ⅱ・Ⅲ類は、16世紀に入り一定量出土する資料である。大平洋側にも分布し、伊達氏領国との関係が示されている（髙桑2003）。出現は15世紀に遡るとみられる。資料の増加が待たれる。Ⅱ・Ⅲ類ともに卸目が太くなる一群・卸目端部に横位直線がある一群がある。Ⅱ・Ⅲ類の系譜については検討を要す。

６は、胎土が白色緻密で柔らかく、燻しが強い。外面に縦のナデが認められる。大和産である[2)]。法貴寺出土擂鉢（今尾1990）と比較すると、口縁部の形状はⅠ型B、底部形状はⅠ型Dに類似し、15世紀後半の年代観が想定できる。擂鉢は、大和と隣接地域のみで出土すると考えられていた器種である（佐藤1996）。1点のみの出土であり、商品としての流通とは考えにくい。

珠洲擂鉢の口縁形態および共伴遺物（表１・髙桑2003）より、第２図に年代観を示す。

7　まとめにかえて

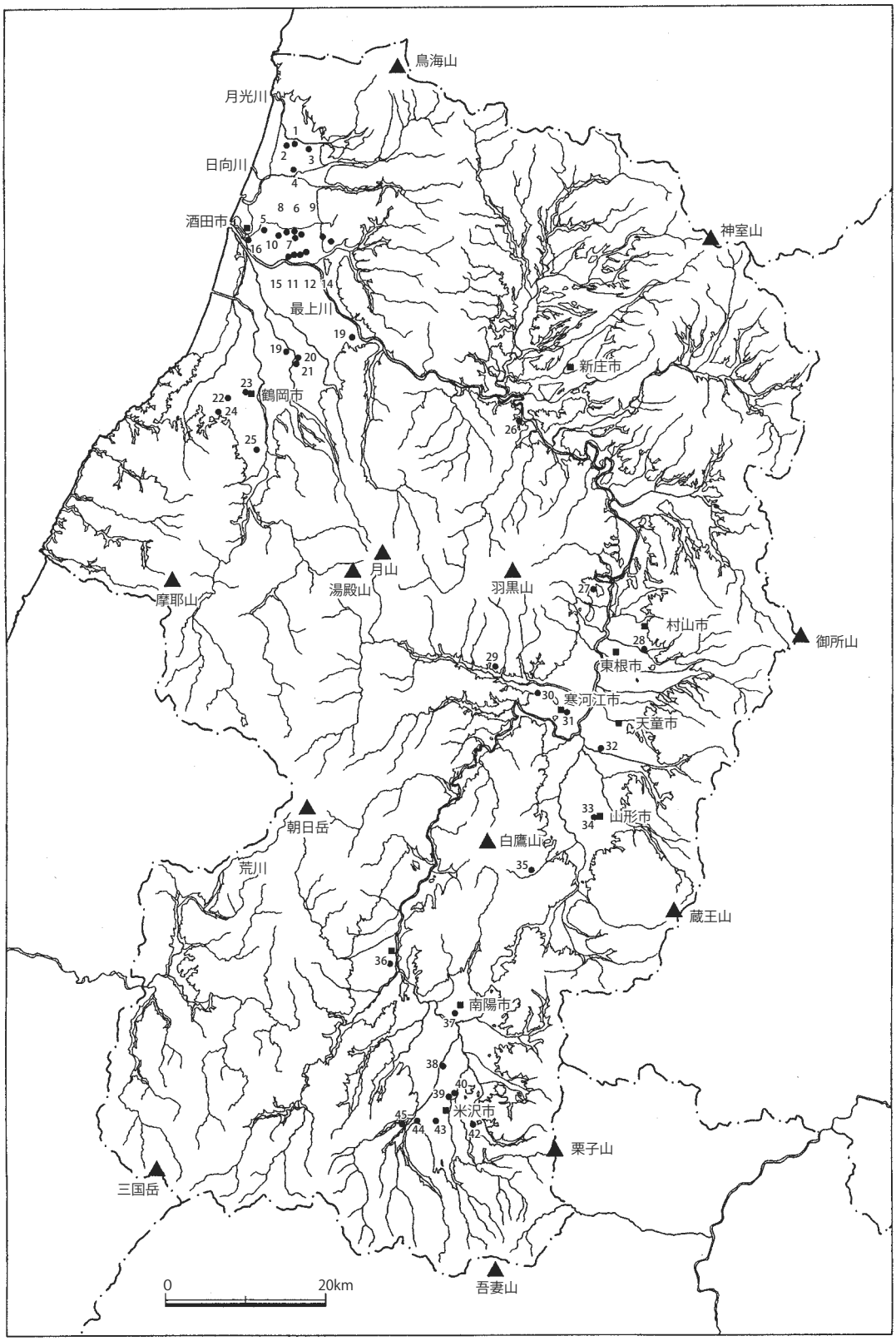
当地域では、大和で瓦質土器が作られた早い段階から瓦質土器の搬入が認められる。さらに、15世紀後半から出土量と器種が急激に増加する状況も大和と連動している。かわらけ同様、地域色を持ち、その一方で広域に画一的な動きが認められる。かわらけと異なるのは、多様な器種の存在である。

以上、山形県内の瓦質土器の集成を行い、概観を述べた。研究が進む瓦質土器の中心的な生産地大和と、消費地との比較検討をするための基礎的作業と位置づけたい。瓦質土器の編年作業は次稿としたい。

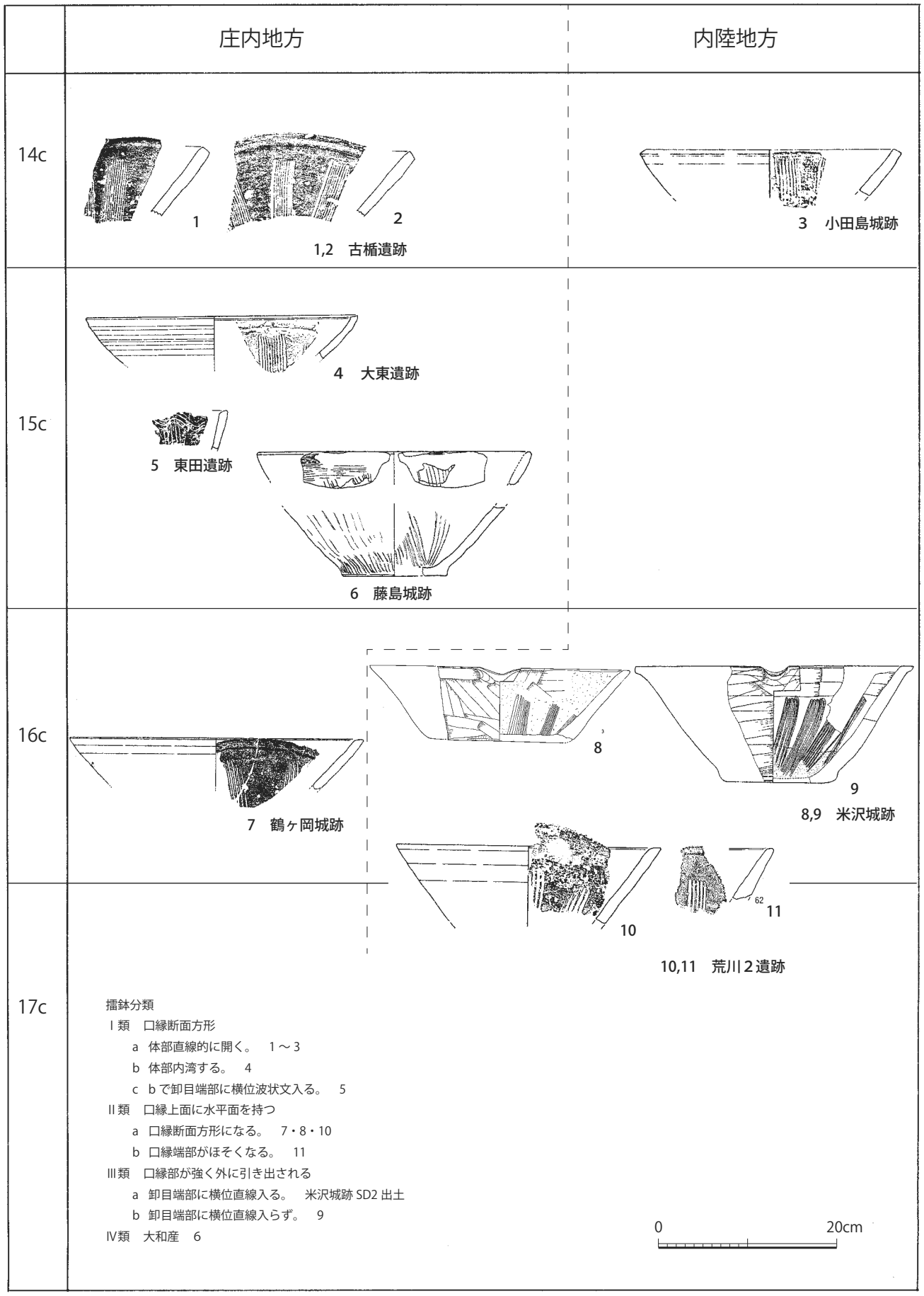
註

１）　1997年、佐藤亜聖氏が藤島城跡出土瓦質土器を実見され、大和産瓦質土器との比較検討を行っている。その時以来、大和産瓦質土器の特徴についてご教示をいただいている。記して、感謝申し上げる。

２）　佐藤亜聖氏・近江俊秀氏のご教示による。口縁部実測図は初出。



第１図　山形県内瓦質土器出土遺跡位置図



第２図　山形県内出土瓦質土器擂鉢変遷図

表１　山形県内出土瓦質土器

遺跡名	市町村	性格	主な時期	報告書掲載器種（NO）	水澤分類	出土地点	共伴遺物	色調	備考	文献
1 大楯遺跡	遊佐町	屋敷・宗教施設	12 世紀中葉～ 14 世紀前・近世	火鉢（27-7）	円形浅鉢Ⅰ	SD483F2	金属製品鈴	褐灰色	菊花文	山埋報 139 1989
				雑器（27-8）		97-62		黒	近世？	
2 東田遺跡	遊佐町	集落	８世紀後半～ 10 世紀初・中世・近世	擂鉢（249）		7-11		黒	卸目５条　波状卸目４条　珠洲写し **第２図５**	山埋報 165 1991
3 下餅山遺跡	松山町	集落	中世・近世	擂鉢（９）		SK23	瀬戸内禿皿（大窯３）・白磁皿（D 群）・珠洲甕	黒灰色	15 世紀後半　卸目 10 条	山埋報 97 1985
				擂鉢（25）		SK57		赤褐色	卸目６条以上	
				擂鉢（28）		SK146	珠洲甕・唐津皿（17 世紀初）	灰色	卸目６条	
				擂鉢（33）		SK146	同上	黒灰色	卸目７条	
				鉢（32）		SK146	同上	黒灰色		
				擂鉢（43）		SK163			卸目６条	
4 浮橋遺跡	遊佐町	集落	９～ 10 世紀中葉・中世	不明	不明	不明				山埋報 141 1989
5 大多遺跡	酒田市	散布地	鎌倉時代～近世	不明	不明	表採				山埋報 148 1990
6 豊原遺跡	酒田市	集落	９世紀・15 ～ 17 世紀	擂鉢（52）		SK74	赤焼土器・金属製品・木製品	灰褐色	珠洲	山埋報 66 1983
7 豊原 B 遺跡	酒田市	集落	８世紀末～ 10 世紀初・中世	火鉢（58・59）	円形浅鉢Ⅰ	SK27	珠洲甕（Ⅳ期）・陶器碗（中国？）		13 世紀後半　漆つぎ　58 と 59 は同一と判断	山埋報 55 1982
8 新田目城跡	酒田市	官衙関連・城館？	９世紀・15 ～ 16 世紀	不明	不明				瓦質陶・瓦器・瓦質陶器詳細不明	酒田市教育委員会 1983『新田目城跡―予備調査の概要』
9 関 B 遺跡	酒田市	集落・墓域？	古墳前期・８世紀後半～ 10 世紀前・13 ～ 14 世紀	擂鉢（45）		SD47F		黒灰色	珠洲年代疑問　卸目７以上	山埋報 68 1983
10 新青渡遺跡	酒田市	集落	平安時代・中世・近世	碗（38）	円形小型鉢Ⅰc	25 ～ 27-18- Ⅰ		黒色	香炉　スタンプ２以上	山埋報 67 1983
11 手蔵田遺跡	酒田市	集落	９世紀中～ 10 世紀中・13 世紀・近世	擂鉢（11）		SK38	土師器碗　あかやき土器甕・高台付坏	外面黒　内面灰白		山埋報 98 1986
12 手蔵田 10・11 遺跡	酒田市	集落	９世紀末～ 10 世紀初・13 世紀前半～江戸後期	香炉？（38-18）	風炉Ⅳ？	3-17- Ⅱ			蓮弁文・雷文	山埋報 124 1988
13 樋掛遺跡	八幡町	集落	縄文時代・奈良時代・平安時代・中世・近世	鉢（11）		xⅡ・B-302・Ⅲa		素地明灰　外面黒灰		山埋報 52 1982
14 大槻新田遺跡	酒田市	集落	９世紀・13 ～ 16 世紀	不明（38）	不明	包含層				山埋報 129 1988
15 熊野田遺跡	酒田市	集落	９世紀後葉～ 10 世紀前半・中世・近世	不明（17）	不明	E-5 トレンチ			スタンプ　近世？	山埋報 137 1989
16 亀ヶ崎城跡	酒田市	城館	16 ～ 19 世紀	手焙（87）		33-22-F 1		黒	近世	山埋報 169 1991
				七厘（171）		16-27		灰赤		山埋センター報 17 1994
				七厘（172）		28-30 Ⅳ		灰赤		
				焙烙（173）		30-29 Ⅳ		褐		
				こんろ（174）		32-32 Ⅳ		灰赤		
				行火（89）		53-8 Ⅱ		灰白	方形	山埋センター報 28 1995
				風炉（90）	長方形浅鉢Ⅰ	中央トレンチ		黒灰		
				焜炉（91）		53-7 Ⅱ		黒茶灰	スタンプ　近世？	
17 山楯楯跡	平田町	城館	縄文時代・奈良時代・15 世紀後半～ 16 世紀	風炉（59-7）	風炉Ⅰ～Ⅳ	C 7 SK152（370 ？）		黄灰	唐草文？	山埋報 172 1992
				方形火鉢（59-8）	長方形浅鉢Ⅰ	B 3		赤褐	スタンプ摩滅で不明　褐色	
18 古楯遺跡	立川町	集落	縄文時代・奈良時代・平安時代・中世・近世	摺鉢（41-12）				黒灰	卸目 13 条 **第２図１**	山埋報６　1976
				摺鉢（41-13）				黒灰	卸目 11 条 **第２図２**	
19 平形遺跡	藤島町	集落	奈良時代・平安時代・中世・近世	鉢形土器	不明	不明		灰褐		山埋報６　1976
				鉢形土器	円形浅鉢Ⅰ	不明			菊花文	
				鉢形土器	円形浅鉢Ⅰ	不明			菊花文	

遺跡名	市町村	性格	主な時期	報告書掲載器種（NO）	水澤分類	出土地点	共伴遺物	色調	備考	文献
20 藤島城跡	藤島町	城館	奈良時代・平安時代・中世・近世	風炉（25-8）	風炉	SK31	信楽壷	にぶい橙		山埋報 159 1990
				風炉（25-14）	風炉Ⅳ	SP31（SK31 ？）	信楽壷	暗灰	蓮弁文．花菱文	
				風炉（25-2）	風炉Ⅱ	SK380	かわらけ	青黒	菱形文	
				風炉（25-7）	風炉ⅡまたはⅣ	SK386	珠洲甕（Ⅲ期）・青磁蓮弁文碗(B 4類）	黒		
				火鉢（25-18）	長方形浅鉢Ⅰ	SE8	かわらけ・珠洲甕・白磁皿（D 群）・青磁連弁文碗（B 4類）・青磁盤・漆器・箸・元豊通宝・嘉泰通宝ほか多数	暗灰		
				香炉（25-10）	円形小型鉢Ⅰc	SP23	珠洲壷（Ⅳ期）	にぶい橙	唐草文	
				擂鉢（25-12）		SP151		暗灰	粗い卸目**第２図６**	
				風炉（25-4）	風炉Ⅱ	SD9	珠洲甕（Ⅳ期）・珠洲擂鉢（Ⅴ期）・青磁蓮弁文碗（B 4類）・青磁稜花皿・染付碗（B 群）・白磁皿（D 群）ほか多数	灰	花文	
				風炉（25-6）	風炉Ⅳ	SD9	同上	赤橙	雷文．蓮弁文	
				火鉢（25-16）	円形浅鉢Ⅲ	SD9	同上	灰	花菱文	
				火鉢（25-20）	長方形浅鉢Ⅰ	SD148		灰		
				火鉢（25-13）	風炉Ⅵ	SD320		暗灰		
				香炉（25-9）	円形小型鉢Ⅰc	3-7		にぶい橙	花文	
				火鉢（25-15）	円形浅鉢Ⅲ	5-4-Ⅳ		褐灰	花菱文	
				風炉（25-1）	風炉Ⅱ	6-6-Ⅳ		黒	唐草文	
				風炉（25-3）	風炉Ⅱ	8-6-Ⅳ		赤橙	花文	
				不明（25-11）		8-3		淡黄	渦巻文	
				火鉢（25-17）	長方形浅鉢Ⅰ	9-9		黒	雷文	
				風炉（25-5）	風炉Ⅳ	11-7		灰	連子文	
				火鉢（25-19）	深鉢Ⅰ	12-7-Ⅳ		にぶい橙		
				火鉢（25-21）	円形浅鉢？	16-5		暗灰		
				風炉（15）	風炉Ⅰ～Ⅳ			黒灰	連子文	山埋報 160 1990
				深鉢形火鉢（16）	円形小型鉢？			黒灰	花文	
				碗（10-13）		SD2	珠洲壷（Ⅲ・Ⅳ期）・珠洲甕（Ⅰ期）・越前壷・瀬戸瓶子（後Ⅱ期）・瀬戸皿（大窯Ⅰ）・瀬戸碗・染付碗（B 群）・白磁皿（D 群）・漆器ほか多数	黒 N2/1	手づくねかわらけ 黒色燻しあり	山埋報 181 1992
				火鉢（10-16）	長方形浅鉢Ⅰ	SD2	同上	にぶい橙 2.5 YR6/4		
				風炉（10-15）	風炉Ⅳ	SK10		浅黄橙 7.5YR8/4		
				火鉢（10-17）	円形浅鉢？	SK10		にぶい橙 5YR 7/3		
				植木鉢（10-20）		SK10		黒 N2		
				火鉢（10-14）	長方形浅鉢Ⅰ	SE35	珠洲甕（Ⅳ期）・染付皿（B 1群）・砥石	灰黄褐 10YR6/2		
				植木鉢（10-21）		SE35	珠洲甕（Ⅳ期）・染付皿（B 1群）・砥石	黒 N2		
				風炉（10-19）	風炉ⅠまたはⅡ	SD4	瀬戸天目茶碗（後Ⅳ古期）	赤橙 10R6/6	菱形花文　口縁外に引き出す	
				火鉢（10-18）	円形浅鉢？	2-6		赤橙 10R6/6	菱形文	
				火鉢（8-8）	円形小型鉢Ⅱ？	SK18	越前擂鉢	暗灰 N3	花文	山埋報 193 1993
				擂鉢（8-15）		SK21	越前壷	灰 N5		
				風炉（8-11）	風炉ⅠまたはⅣ	SE2	珠洲甕（Ⅳ期）・青磁稜花皿・瀬戸端反皿（大窯１）・白磁皿（E 群）・染付皿（B 1群）	暗灰 N3	連子文	

遺跡名	市町村	性格	主な時期	報告書掲載器種（NO）	水澤分類	出土地点	共伴遺物	色調	備考	文献
				風炉（8-7）	円形浅鉢？	SD1	越前壺・越前擂鉢・瀬戸碗（大窯３・４）・瀬戸丸皿（大窯１）・青磁稜花皿・白磁皿（E 群）・染付皿（B1 群）・肥前磁器皿ほか多量	淡橙 5YR8/4		
				火鉢（8-9）	円形小型鉢Ｉｃ？	SD1	同上	浅黄橙 7.5Y8/3	花文	
				火鉢（8-10）	円形小型鉢Ｉｃ	SD1	同上	淡橙 5YR8/4	唐草文	
				風炉（8-13）	風炉Ｉまたは Ⅱ	SD1	同上	橙 2.5YR7/6	菱形文	
				擂鉢（8-14）		SD1	同上	灰 5YR6/1		
				火鉢（8-6）	長方形浅鉢Ｉ	SD1	同上	灰白 10YR8/2		
				風炉（8-12）	風炉Ⅳ	4-7		橙 2.5YR7/6	連子文．蓮弁文．花文	
				風炉（8-47）	風炉	SX125F2		灰 HveN-6		山埋セン報 18 1994
				摺鉢（8-48）	擂鉢	SD1F4		灰白 Hve5Y-8		
				風炉猫足（9-99）	風炉Ⅳ？	不明		淡橙 Hve5YR-8		
21 藤島Ｄ遺跡	藤島町	集落	14 ～ 20 世紀	焙烙（29-120）		SX107-F	陶器甕・陶器壺・瀬戸磁器坏・瀬戸磁器小皿・瀬戸磁器レンゲ・肥前磁器碗・肥前磁器皿・石製品硯	胎土褐	近世１９世紀以降	山埋セン報 82 2001
				焙烙（29-121）		SX107-F	同上	胎土灰褐		
				焙烙（29-122）		SX107-F	同上	胎土灰褐		
				風口（30-126）		SX107-F	同上	胎土灰褐		
				手あぶり（30-129）		SX107-F	同上	胎土灰茶		
				炭甕（30-132）		SX107-F	同上	胎土灰茶		
				炭壷蓋（30-134）		SX107-F	同上	胎土灰		
				コンロ（29-123）		SX76-F2	大宝寺陶器筆筒・陶器人形・備前擂鉢・肥前磁器皿・肥前磁器蓋・肥前磁器仏飯具・瀬戸陶器徳利・瀬戸磁器水滴・寛永通宝ほか	胎土灰褐	20 世紀以降	
				コンロ（29-124）		SX76-F1	同上	胎土褐		
				七輪（30-127）		SX76-F	同上	胎土褐		
				炭壷蓋（31-135）		SK61-F		胎土褐		
				炭甕壷蓋（31-136）		SK61-F		胎土赤褐		
				コンロ（30-125）		B8- Ⅲ		胎土褐		
				手あぶり（30-128）		SK94-F	肥前陶器皿・肥前磁器碗・肥前磁器皿・肥前磁器蓋・瀬戸磁器碗・瀬戸磁器坏・瀬戸磁器徳利・瀬戸陶器壺・陶器擂鉢・陶器玩具・磁器玩具	胎土灰茶	近世１９世紀以降	
				手あぶりの獣足（30-133）		SD77-F	肥前磁器碗	胎土灰茶		
				火鉢（30-130）		B-10F		胎土灰茶		
				炭壷（30-131）		B8- Ⅲ		胎土茶		
				擂鉢（31-137）		A 区包含層		胎土赤褐	近世陶器	
				火鉢（42-71）		C 区包含層		胎土茶		
				コンロ（42-72）		C 区包含層		胎土灰茶		
22 後田遺跡	鶴岡市	集落	古墳時代・平安時代・中世・近世	火鉢（167）		SD3	須恵器・土師器・青磁・珠洲・かわらけ・肥前磁器・唐津・笹塔婆ほか多数		藤島Ｄに類似形態あり　近世	山埋セン報 49 1997
23 鶴ヶ岡城跡	鶴岡市	城館	古墳時代・平安時代・中世・近世	方形火鉢（35）	長方形浅鉢Ｉ	D-SK9	珠洲擂鉢・越前甕・青磁皿・染付鉢（近世）	10Y2/ 1 黒	唐草文？	鶴岡市埋報 10 2000
				方形火鉢（38）	長方形浅鉢Ｉ	C-SK269	砥石	5Y2/1 黒	唐草文	鶴岡市埋報 14 2001

遺跡名	市町村	性格	主な時期	報告書掲載器種（NO）	水澤分類	出土地点	共伴遺物	色調	備考	文献
				火鉢（36）	円形小型鉢Ⅲ	C-SK93F4	F 4かわらけ・砥石（天草産）・青磁盤　F 7かわらけ F 8珠洲甕（Ⅳ期）・越前・青磁壺	7.5YR7/1明褐	蓮子文・唐草文 15 世紀？	
				浅鉢（711）	長方形浅鉢Ⅰ	23 トレ SK533-F		赤褐	雲文	
				擂鉢（720）		SK171		黒		
				花瓶（714）	仏具Ⅱ	SD1-F1	染付碗（B 群）・志野皿（大窯 4）・肥前磁器碗（17 世紀後半～ 18 世紀初）・肥前磁器皿（18 世紀 2/4 ～ 3/4）ほか	黒	716 同一	山理セン報 99 2002
				擂鉢（717）		SD1-F3 S32-W19		黒		
				擂鉢（722）		8 トレ SD1-F3 S24-W27		黒灰		
				擂鉢（726）		SD1-F4 S31-W24		黒	卸目 5 条以上	
				風炉（703）	長方形浅鉢Ⅰ	SD3-F1 S36-W16		褐灰	雷文	
				擂鉢（728）		SD3 S32-W19		黒	卸目 5 条以上	
				香炉（713）	円形小型鉢Ⅰa	SD101		黒	雲文	
				擂鉢（719）		SD16F1		黒	卸目 5 条以上**第 2 図 7**	
				風炉（706）	風炉Ⅳ	12 トレ SD523-F	珠洲甕	赤褐	花菱文	
				擂鉢（723）		8 トレ SD186-F	信楽壺・珠洲甕	黒	卸目 4 条以上	
				風炉（700）	風炉Ⅰ～Ⅳ	23 トレ SP537-F		赤褐	花文	
				風炉（702）	円形小型浅鉢Ⅱ	21 トレ SP202-F		赤褐		
				風炉（701）	風炉Ⅰ～Ⅳ	26 トレ SX388-F		赤褐		
				風炉	風炉Ⅱまたは円形浅鉢Ⅲ	二の丸外堀			15 ～ 16 世紀第 1 四半期（報告書）	
				浅鉢（708）	円形小型鉢Ⅰa	SF2-F3 S25-W19		褐	花文？　709 同一個体	
				火鉢（37）	円形浅鉢Ⅲ	Tr5・3 面		N 5 灰	花菱文	
				風炉（698）	風炉Ⅰ～Ⅳ	Ⅱ		黒灰	唐草文	
				風炉（699）	風炉Ⅰ～Ⅳ	23 トレ F7		赤褐	唐草文	
				風炉（704）	風炉Ⅰ～Ⅳ	Ⅱ		赤灰	四葉（丸に花菱）文	
				深鉢（705）	深鉢Ⅰb	7 トレ		黒灰		
				浅鉢（707）	長方形浅鉢Ⅰ	23 トレ F7b ～ 7d		黒	雲文	
				浅鉢（709）	円形小型鉢Ⅰa	25 トレ Ⅱ		褐	花文？	
				浅鉢（710）		5 トレ　Ⅰ		赤彩	雷文　近世　内面漆	
				花瓶（716）	仏具Ⅱ	Ⅱb S31-W37		黒	雷文・巴文・半花菱形	
				擂鉢（718）		S34-W18		黒	卸目 5 条	
				擂鉢（721）		Ⅲa W32-W38		茶灰	卸目 5 条	
				擂鉢（724）		18 トレ		黒	卸目 2 条以上	
				擂鉢（727）		S24-W22		淡褐	卸目 7 条以上	
				擂鉢（729）				黒	卸目 5 条以上	
				擂鉢（730）		25 トレ Ⅲ		黒灰	卸目 4 条以上　外面ハケ	
				擂鉢（731）		Ⅱ S29-W32		黒灰	卸目 7 条以上	
				擂鉢（732）		14 トレ		黒	卸目 5 条以上	
				浅鉢（712）		X-O		黒灰	胎土近世	
				香炉（715）	円形小型鉢Ⅰb	X-O		褐	雷文・巴文　浪岡城に出土例	
				擂鉢（725）		X-O		褐	近世	
24 大東遺跡	鶴岡市	集落	平安時代・13 ～ 16 世紀	アンカ（58）	円形浅鉢？	SK475	陶器擂鉢・陶器甕		底部のみ遺存	山理報 153 1990
				擂鉢（150）		X-O			卸目 10 条**第 2 図 4**	

遺跡名	市町村	性格	主な時期	報告書掲載器種（NO）	水澤分類	出土地点	共伴遺物	色調	備考	文献
25 柳沢Ａ遺跡	櫛引町	集落・寺院	旧石器時代・縄文時代・14世紀中葉～15世紀中葉・近世	風炉（15-1）	風炉Ⅴ	B3、C3、石組み遺構　２層			簾状文　15世紀（報）	櫛引町教育委員会 1999『伝永慶寺跡発掘調査報告書―柳沢Ａ遺跡第３調査区の発掘調査―』
				風炉（15-2）	風炉Ⅳ	C4、Ｄ３、Ｄ４　Ｄ４内ピット		低部内面黒色化	蓮子文・連弁文・花菱文　底部離れ砂　15世紀（報）	
				火鉢（15-3）	円形浅鉢Ⅳ	A4、Ａ６、Ｂ６、Ｂ８、Ｃ６、Ｄ６　Ｂ８内ピット			菊花文・乳文・桝形文　15世紀（報）	
				火鉢（15-4）	円形浅鉢Ⅳ	Ａ７、Ｂ７、Ｃ６			桝形文　底部離れ砂　15世紀（報）	
				火鉢（15-5）	円形浅鉢Ⅳ	Ａ４、Ｃ３、Ｃ５、Ｄ３、Ｄ４　Ｄ３内ピット			底部離れ砂　15世紀（報）	
				火鉢（16-6）	不明	Ｆ１		内面黒色化	15世紀（報）	
				火鉢（16-7）	不明	Ｃ６　３層上面			15世紀（報）	
				火鉢（16-8）	不明	Ｄ４　２層上面				
				火鉢（16-9）	不明	Ｃ５　ピット				
				火鉢（16-10）	不明	Ｂ６、Ｂ７、Ｃ６、Ｄ６　２層、３層上面			15世紀（報）	
				火鉢（16-11）	不明	Ｂ４、Ｄ６				
				火鉢（16-12）	不明	Ｋ１　溝			15世紀（報）	
26 清水城跡	大蔵村	城館	15世紀後半～17世紀前半	火鉢	円形浅鉢Ⅳまたは長方形浅鉢Ⅰ	不明			唐草文	大蔵村文報１ 2001
27 白鳥館跡	村山市	城館	13世紀～18世紀	甕（27）		西側包含層		赤褐	亀甲文　近世？実見できず	山埋センター報 85 2001
				甕（28）		F-19G		赤褐	雷文　近世？実見できず	
28 小田島城跡	東根市	集落・城館	縄文時代・弥生時代・平安時代・12～18世紀	風炉	風炉Ⅱ					財団法人山形県埋蔵文化財センター 1999『小田島城跡調査説明資料』
				火鉢	円形浅鉢Ⅲ					
				擂鉢				黒灰	**第２図３**	
29 睦合館跡	西川町	城館	16～17世紀中葉	火鉢？（53-15）	円形小型鉢Ⅰａ	SP176F			亀甲文	山埋センター報 63 1999
30 富沢Ⅰ遺跡	寒河江市	集落	縄文時代・弥生時代・古墳時代・平安時代・中世・近世	鉢（33）		SG １Ｆ３		内面黒色化処理	時期不明	山埋センター報 30 1996
31 寒河江城跡	寒河江市	城館	９世紀初・14世紀末～17世紀	風炉？（23）	円形浅鉢Ⅳ？	SD-2	瀬戸美濃（唐津？）皿・碗　陶器壺　永楽通宝　石鉢	黒灰色	菱形文	寒河江市埋報４ 1986
				火鉢？（22）	不明	SD-2	同上	黒色		
32 永源寺跡遺跡	天童市	集落・寺院	８世紀～近世	擂鉢（376）		SE1196	瓷器系陶器甕・近世陶器甕	暗青灰 5BG4/1		山埋センター報 86 2001
33 山形城（双葉町）	山形市		縄文時代・古墳時代・平安時代・中世・近世							
34 城南一丁目遺跡	山形市	集落・城館	縄文時代・古墳時代・平安時代・中世・近世	壷（1125）		SK115		褐灰	大型　肩部のみ	山埋センター報 69 1999
				鉢（1122）		SK115SK		黒		
				摺鉢（1107）		SK1178		黒	卸目６条以上	
				火鉢（282）	円形小型浅鉢Ⅱ	SK145・SE55		灰	雷文・菊花文・半円文・花菱文　底部離砂	
				摺鉢（290）		SK190		黒茶	卸目６条以上	
				火鉢（1108）		SK214	染付皿（Ｅ群）	淡褐	足鍋	
				焙烙（1127）		SK37	須恵器・土師器・	黒		
				火鉢（1123）	風炉Ⅵ？	SK38		黒		
				火鉢（285）	円形浅鉢？	SK474		褐	雷文	
				摺鉢（1106）		SK51		黒灰褐	卸目６条以上	
				摺鉢（291）		SK866	元宝通宝・至道元宝・坩堝	黒茶	器種不明　ハケ明瞭	

遺跡名	市町村	性格	主な時期	報告書掲載器種（NO）	水澤分類	出土地点	共伴遺物	色調	備考	文献
				焙烙（1124）		SK909	かわらけ・唐津鉄釉花瓶・唐津擂鉢・肥前磁器碗・瓦・砥石・円盤状石製品・永楽通宝・石篦	褐灰	17 世紀前半	
				壷（1121）		SK941	須恵器・かわらけ・珠洲甕・瀬戸美濃折縁皿（大窯３）・志野菊皿（大窯４末）・瀬戸美濃天目茶碗（大窯４）・唐津沓茶碗・染付碗（E 群）・染付角皿（K 群）・瓦・円盤状石製品	黒		
				火鉢（284）	不明	SP307		灰	花菱文・唐草文・雷文	
				壷（1109）		SE613	坩堝・茶臼上臼	褐灰		
				火鉢（283）		SD269		黒	菱文　近世	
				火鉢（286）	不明	SD555	須恵器・かわらけ・砥石・石鉢・永楽通宝	灰	亀甲文	
				摺鉢（289）		SD9	須恵器・かわらけ・砥石・青白磁合子蓋・白磁皿・肥前磁器碗・坩堝・石鉢・寛永通宝・	淡褐	卸目６条	
				火鉢（287）		F- 5		黒	亀甲文　近世？	
				鍋（288）				黒灰	厚切り蒲鉾状把手横張り付け　丁寧なミガキ	
35 滝の山廃寺	山形市	寺院	中世	火鉢（18）					円文	茨木光裕 1993
				火鉢（19）					雷文	
				火鉢（20）					花文	
36 小山遺跡	長井市	集落	縄文時代・奈良時代・平安時代・15 ～ 16 世紀・近世	擂鉢（166）		Ⅱ			卸目太５条	山埋セン報 104 2002
37 沢田遺跡	南陽市	集落	弥生時代～平安時代・中世・近世	擂鉢（30-7）		32-43- Ⅱ			卸目太４条	山埋報 88 1985
38 荒川２遺跡	米沢市	集落・城館	縄文・奈良時代・平安時代・中世・近世	すり鉢（49-62）		SD308	内耳土鍋・かわらけ・瓷器陶器甕・須恵器系陶器甕・戸長里皿・戸長里匣鉢・瀬戸美濃皿（大窯３）・瀬戸美濃折縁皿（大窯３後・４前）・瀬戸美濃内禿皿（大窯３後）・瀬戸美濃丸皿（大窯３後）・志野丸皿（大窯４後・登窯１・２小期）・唐津皿・青磁碗・染付皿・寛永通宝・石臼・漆器碗ほか	7.5Y4/ 1 灰色	**第２図 11**	山埋セン報 43 1997
				火鉢（49-60）		SD308	同上	N3/1 暗灰色	近世	
				すり鉢（49-64）		SE701	石臼・漆器碗	7.5Y6/1 灰色		
				すり鉢（49-61）		SE707	内耳土鍋	5Y ３/ 1 オリ - ブ黒色	**第２図 10**	
				すり鉢（49-63）		SD544	瓷器陶器甕・染付皿（E 群）	10YR8/３浅黄橙色		
39 大浦 C 遺跡	米沢市	官衙関連・集落	奈良時代・平安時代・中世・近世	不明	不明	不明				米沢市埋報 71 2000
40 北小屋屋敷遺跡	米沢市	墳墓・集落・城館	古墳時代・15 ～ 18 世紀	擂鉢（25-10）		SK22F1			卸目太３条以上	山埋セン報 103 2002
				鉢（25-4）		SD6F 2	青磁盤・肥前磁器小碗・肥前磁器皿・陶器碗・陶器徳利・陶器戸車・砥石		近代混入　瓦質土器は近世？	

遺跡名	市町村	性格	主な時期	報告書掲載器種(NO)	水澤分類	出土地点	共伴遺物	色調	備考	文献
41 米沢城跡	米沢市	城館	16～19世紀	風炉（11-5）	風炉？	SK1	かわらけ・焼塩壺・焙烙・陶器皿	褐色		山埋セン報66 1999
				蓋（11-23）	その他	SK44	焙烙・瓷器系陶器擂鉢・磁器皿（肥前）・天目茶碗（瀬戸美濃大窯２）	赤褐色		
				鉢（11-25）		SK44	同上	灰褐色		
				焙烙（11-36）		SK44・SP40	焙烙・瓷器系陶器擂鉢・磁器皿（肥前）・天目茶碗（瀬戸美濃大窯２）　磁器碗（中国）・灰釉端反皿（瀬戸美濃大窯１）	赤褐色		
				擂鉢（11-32）		SK55	瓷器系陶器擂鉢・志野菊皿（瀬戸美濃大窯４）	赤褐色	横方向卸目　16世紀末	
				火鉢（26）		SD1F1（88-84）・SD1F2（88-88）	F1明治の遺物多数　F2同上	7.5YR7/4にぶい橙色		
				片口鉢（198）		SD1F 4（82-72）	同上	5YR4/4にぶい赤褐色	16世紀末？	
				火鉢（199）		SD1F 4（88-68）	同上	2.5Y5/1黄灰色		山埋セン報89 2001
				擂鉢（197）		SD1F 4（90-62）	同上	7.5YR7/2明灰褐色		
				擂鉢（196）		SD1F 4床面（82-58）	肥前磁器・岸・土師質土器皿・木製品ほか多数　17世紀初頭～18世紀前半中心　白磁皿（E群）・瀬戸美濃（大窯４）・内耳土鍋等混入	10YR7/1白灰色	16世紀末？	
				鉢（10-2）		SD2	磁器皿（景徳鎮）・碗（景徳鎮）	灰褐色		
				火鉢（25）		SD2F 2（100-68）	同上	10YR 5/2灰黄褐色		
				擂鉢（24）		SD2F 2（92-76）	肥前磁器・大堀相馬・会津本郷・土師質土器皿・木製品ほか多数　18世紀後半～19世紀前半	2.5Y4/1黄灰色		
				火鉢（10-11）	円形浅鉢	SD3	かわらけ・坩堝・内耳鍋・陶器擂鉢・志野向付（瀬戸美濃大窯４）・磁器碗・磁器皿	暗褐色	16世紀末	
				擂鉢（10-1）		SD2	磁器皿（景徳鎮）・碗（景徳鎮）	灰白色	卸目太４条	
				火鉢（12-4）		SX34	坩堝・陶器碗（鼠志野？）・唐津鉢（16世紀末）・陶器茶入・陶器土瓶（相馬？）・越前擂鉢・成島小甕・成島鉢・成島甕・陶器風炉？・陶器鉢・信楽壺（16世紀後半）・土人形ほか	赤褐色	成島18世紀後半	
				火鉢（12-5）		SX34	同上	褐色	同上	
				火鉢？（12-31）		C区		赤褐色	近世	
				手焙（27-1）	円形浅鉢	不明		暗灰褐色もしくは黒褐色	亀甲文　近世？	米沢市埋報44 1994
				手焙（27-2）	円形浅鉢	不明		同上	花弁文　近世？	
				手焙（27-3）	円形浅鉢	不明		同上	無文　近世？	
				手焙（28-6）	円形浅鉢	不明		同上	花弁文　近世？	
				手焙（28-7）	円形浅鉢	不明		同上	花弁文　近世？	
				擂鉢		不明			卸目太５条	
				手焙（172）		DN2	砥石・硯		近世？	米沢市埋報68 2000
				大型漆塗壷型土器（183）		DY63	須恵器・甕越前甕		近世？	
				摺鉢（144）		DY80	須恵器甕			
				手焙（173）		DY82F	須恵器壺・木製品		近世？	
				摺鉢（142）		DY89				
				手焙（174）		G50-94			近世？	

遺跡名	市町村	性格	主な時期	報告書掲載器種（NO）	水澤分類	出土地点	共伴遺物	色調	備考	文献
				筒形土器（176）		G50-94			近世	
				大型甕形土器（182）		G54-54			近世？	
				摺鉢（143）		G54-58				
				甕形土器（180）		G58-22			近世？	
				筒形土器（181）		G62-90			近世？	
				摺鉢（145）		G70-58			**第２図８**	
				土風呂（171）		G70-78			近世？	
				土風呂（170）		G70-82			近世？	
				摺鉢（140）		G70-86				
				手焙の足？（169）		KY11-3	須恵器甕・瓷器系陶器甕壺・岸小皿・瀬戸美濃端反皿（大窯１）・瀬戸美濃丸皿（大窯１）・肥前磁器椀・染付皿（B1群）・肥前青磁鉢・かわらけ・柄杓・とりべ			
				浅鉢形手焙（186）		KY11-7	同上		近世	
				手焙（185）		KY19-1	須恵器甕・瀬戸美濃皿（大窯１・２）・漆器椀・下駄・箸・招聖元宝・硯		近世？	
				摺鉢（146）		KY19-10	同上			
				小形皿（177）		KY19-10	同上			
				摺鉢（141）		KY26	須恵器甕・染付皿（C群）・染付碗（E群）・かわらけ・漆器椀・曲物			
				壷形土器（178）	その他	KY33	土師器甕・須恵器甕・下駄・内耳土鍋・土器・漆器皿・木製品櫛・木製品箸			
				摺鉢（147）		KY33F	同上		**第２図９**	
				手焙（175）		KY34	かわらけ		近世？	
				筒形土器（179）		KY34	かわらけ		近世？	
				七厘（184）		KY37			近世？	
				火鉢（七厘）（187）		KY5	とりべ		近世	
				摺鉢（139）		KY8-2	須恵器壺・須恵器甕・近世陶器皿・肥前磁器椀・かわらけ・とりべ・硯・箸・板状木製品・下駄		近世	
				黒色壷（168）	その他	KY8-2	同上		近世	
				黒色壷（167）	その他	NN2				
42 稲荷山館跡	米沢市	城館	15 世紀	擂鉢（13）～（29）17 点						米沢市埋報 54 1997
				不明（47）～（50）３点						
43 覚範寺廃寺跡	米沢市	寺院	縄文時代・中世・近世	手焙り（6-2）	不明	A 地点			連子文　近世？	米沢市埋報 26 1989
				手焙り（6-3）	不明	A 地点			雷文　近世？	
				手焙り（6-6）						
44 舘山北舘跡	米沢市	城館	縄文時代・15～16 世紀	擂鉢（86-4）		DN 3				米沢市埋報 79 2002
				擂鉢（87-3）		TY587				
				香炉（86-6）	円形小型鉢	不明				

１水澤分類は、水澤 1999 による。
２色調は、部位の記載なおないものは外面の色調を示す。報告書掲載内容を記載しているが、実見したものは一部修正している。
３文献の、山埋報○は山形県埋蔵文化財調査報告書○集、山埋セン○は山形県埋蔵文化財センター調査報告書○集を示す。市町村についても同様に略記する。
４桁の数字は、刊行年を示す。

引用文献

飯村　均　1997「中世食器の地域性　２―東北南部」『国立歴史民俗博物館研究報告』第 71 集
茨木光裕　1993「白鷹丘陵の宗教遺跡―滝の山廃寺跡を中心として―」『野に生きる考古・歴史と教育』川崎利夫先生還暦記念会
今尾文昭　1990「大和・中世村落における瓦質土器―奈良県日原本町法貴寺遺跡出土資料―」『中近世土器の基礎研究』VI
近江俊秀　1997「広域に流通した中世大和の土器―大和産・大和系瓦質土器の分布について―」『中近世土器の基礎研究』XII
工藤清泰　1989「浪岡城出土の瓦質土器とその考察」『浪岡城跡１０』昭和 61・62 年浪岡城発掘調査報告書
齋藤健・髙桑登　1998「山形県」『東北地方の在地土器・陶磁器　２』東北中世考古学会　第４回大会資料
菅原正明　1989「西日本における瓦器生産の展開」『国立歴史民俗博物館研究報告』第 19 集
佐藤亜聖　1996「大和における瓦質土器の展開と画期」『中近世土器の基礎研究』XI
髙桑　登　2003「奥羽南半における「伊達氏系遺物」の分布について」『研究紀要　創刊号』(財) 山形県埋蔵文化財センター
水澤幸一　1999「瓦質土器、その城館的なるもの―北東日本の事例から―」『帝京大学山梨文化財研究所研究報告』第９集
山形県教育委員会　1976『山形県文化財発掘調査報告書』山形県埋蔵文化財調査報告書第６集
山形県教育委員会 1990『藤島城跡第２次発掘調査報告書』山形県埋蔵文化財調査報告書第 159 集

奥羽南半における「伊達氏系遺物」の分布について

髙桑　登

1　はじめに

中世後半から近世初頭の奥羽南半で出土する内耳土鍋と瓦質擂鉢について、その分布範囲が戦国大名伊達氏の領国に重なることが指摘されている(飯村 1997)。また、瓦質擂鉢と伊達氏の家紋である三引両を描いた漆器の分布範囲の共通性から、「食膳具や調理具など在地産の共通分布圏」の存在が指摘されている（髙橋 2002)。

本稿ではこれらの検討をうけて、中世後半の奥羽南半で出土する内耳土鍋、瓦質擂鉢、三引両文漆器と、当地域で出土する特徴的な形態の露卯下駄の４種類の遺物について集成を行い、その分布について若干の考察を試みる。対象とする地域は宮城県、福島県の全域と、山形県置賜地方である。

2　遺物の特徴と分布

(1)　内耳土鍋（図１・２）

焼成は土師質で瓦質のものも少量ある。口径 30cm 前後、器高 15cm 前後のものが多く、２：１単位の３つの把手が内面につく。体部が内耳取付部の下で屈曲し外反する。外面に煤が付着しているものが多い。

筆者は山形県内の資料から、15 世紀末から 17 世紀初頭にかけて、体部の屈曲が明瞭なものから不明瞭なものへ変化し、新しいものほど内耳の横断面が円形に近くなるという変遷を想定している（髙桑 1998,2003)。

宮城県内では２遺跡からのみ出土している。２の熊谷館跡出土のものは、内耳が口縁部より下がった位置につくもので東北地方では類例が認められない。前述の拙稿では関東地方の内耳土鍋との器形の共通性から、点的な搬入品の可能性を指摘した（髙桑 2003)。

山形県内では、米沢盆地に出土遺跡が集中する。内耳横断面が円形または三角形に近い円形で、内耳の取り付け部が円錐状に広がるものが多い。口縁部の形状は多様であるが、断面方形状になり口縁端部が外傾または水平になるものが多い。これらの特徴は７の仙台城出土品にも共通しており、米沢からの搬入品の可能性がある。

伊達氏領国以外では山形城の三の丸にあたる城南一丁目遺跡から出土している。仙台城とともに 17 世紀初頭の年代観が想定されている。この時期に茶との関連で分布域が広がる可能性を指摘している（髙桑 2003)。

福島県内では、信達盆地から田村地方に出土遺跡が点在する。内耳縦断面が丸みを帯び、横断面がやや平たいものが多い。内耳取り付け部は扇状に広がり、口縁部内側が張り出すものが多い。

山形県内と福島県内で出土する内耳土鍋は、基本的な器形は共通するものの、内耳の形状等細部は異なる点が多く、各地に異なった生産体制が存在していたと考えられる。

(2)　瓦質擂鉢 (図３・４）

焼成は瓦質で黒灰色のものが多く、赤褐色の土師質のものも認められる。卸目のない捏鉢も少量認められるが、大半のものには卸目が施される。福島県内出土資料を、口縁部が端反りとなる I 類、口縁部内側が張り出す II 類に分類し、I 類が 15 世紀後半から 16 世紀前半、II 類が 16 世紀後半との年代観が示されている（山中 1996)。

宮城県内では黒川郡や仙台城周辺に多数分布する。山中 II 類の割合が多く、中でも器壁が厚く径が小さい一群が認められる。I 類の口縁部は、水平方向に強く張り出すものから、緩やかに外反するものまで多様である。

山形県内では内耳土鍋に比べ出土遺跡が少なくなる。I 類が少数認められるほかは、I・II 類に該当しない口縁端部が水平になるタイプが主体となる。

福島県内では、I 類の中でも端反部分が丸みを帯び、玉縁状となるタイプが伊達郡北部を中心に認められる。

I 類の中でも口縁部が外側に大きく張り出すタイプ(山中分類 Ia 類）は、卸目上端部をフック状に折り返し、口縁部下に部分的に横方向の卸目を入れるものが多く、このタイプは宮城、山形、福島の各県に広く分布している。ある程度広域に流通したか、規範性の高い生産集団がいたと考えられる。

瓦質擂鉢が仙台城周辺に多く分布することは、伊達氏の米沢から仙台への移封に伴って工人が移動した可能性が考えられる。また、Ia 類と在地的なタイプが共伴する事例が多いことから、内耳土鍋のように在地の生産体制も存在していたと考えられる。

(3)　三引両文漆器 (図 5)

伊達家家紋の三引両文が描かれた漆器で、椀身、椀蓋、皿、鉢、片口等の器種がある。三引両文は左右の線が湾曲する「しない三引両」が多い。また、中央の線が細くなるタイプ（ 1 -SE223、7-16 号 溝、24-KY2、25-SE529）がある。文様の構成は、外面に三引両文と草花文（鳥文？）を２～３単位に配置し、内面中央に大きく三引両文、その周囲に外面と同じ文様を配置したものが多い。16 世紀後半と考えられる荒川２遺跡出土品に、内面に三引両文を描いたものが認められないことから、内面に文様を描くタイプは 16 世紀末に成立したと考えられる。その他、上下に界線を引きその間に細線と千鳥文等を描くタイプがある。

26 の米沢城と 7 の仙台城の出土資料は器形、文様の構成等が共通しており、伊達氏移封の天正 19 年（1591）を挟んだ、ほぼ同時期と考えられる。

出土する遺跡は、大浦 C 遺跡を除けば、伊達氏関連の伝承または文献史料のある遺跡に限られ [1)]、米沢城、仙台城など伊達氏の拠城からの出土が多い。

(4)　逆舟形露卯下駄 [2)](図 6)

台の先端部が平坦で、後端部が尖り気味に丸みを帯びる形状の露卯下駄である。台の長さは 20 ～ 22cm、歯は幅の広い台形で、高さは 9 cm 前後と高いものが多い。歯を取り付けるホゾは宮城､山形県のものは 1 本だが、福島に２～３本のものが認められる。

下草古城跡 SK379 や城東町遺跡、川原町口遺跡出土資料以外は規格性が高く、平面形態はほぼ共通している。

No.	遺跡名	所在地	遺跡種別	内耳土鍋	瓦質擂鉢	三引両漆器	露卯下駄	文献
1	下草古城跡	黒川郡大和町	城館		◎	○	◎	宮城県文報 154 集 ,1993
2	熊谷館跡	黒川郡富谷町	城館	○	○			富谷町文報 3 集 ,2001
3	大沢窯跡	黒川郡利府町	窯跡		○			宮城県文報 116 集 ,1987
4	山王遺跡	多賀城市	屋敷		○	○	○	多賀城市文報 9,45 集 ,1986,1997
5	高崎遺跡 11 次	多賀城市	屋敷		○		○	多賀城市文報 37 集 ,1995
6	鴻ノ巣遺跡	仙台市	集落		○			仙台市文報 32 集 ,1981
7	仙台城二の丸跡第 9 地点	仙台市	城館	○		◎		東北大埋文セン 1997『東北大学埋文調査年報 8 』
8	仙台城二の丸北方武家屋敷跡	仙台市	城館		○			東北大埋文セン 2000『東北大学埋文調査年報 13』
9	仙台城三の丸跡	仙台市	城館		○	◎		仙台市文報 76 集 ,1985
10	富沢遺跡 86 次	仙台市	集落				○	仙台市文報 220 集 ,1997
11	南小泉遺跡 17 次	仙台市	城下		○			仙台市文報 140 集 ,1990
12	養種園遺跡	仙台市	都市		◎	○		仙台市文報 214 集 ,1997
13	今泉城跡	仙台市	城館		○			仙台市文報 57 集 ,1983
14	今泉遺跡第 3 次	仙台市	城館		○			仙台市文報 185 集 ,1992
15	中田南遺跡	仙台市	屋敷		○			仙台市文報 182 集 ,1994
16	元中田遺跡	名取市	集落		○			名取市文報 40 集 ,1999
17	城南一丁目遺跡	山形市	城館	○				山形埋文セン報 69 集 ,1999
18	歌丸館跡	長井市	城館	○				長井市埋文報 19 集 ,2001
19	飯塚館跡	東置賜郡高畠町	城館	○				山形埋文セン報 2 集 ,1994
20	北小屋屋敷遺跡	米沢市	城館	○	○			山形埋文セン報 103 集 ,2002
21	上浅川遺跡	米沢市	城館	○	○			米沢市埋文報 14 集 ,1985
22	東屋敷館跡	米沢市	城館	○				米沢市埋文報 58 集 ,1998
23	木和田館跡	米沢市	城館	○				米沢市埋文報 20 集 ,1987
24	大浦 C 遺跡	米沢市	城館	○		○	○	米沢市文報 33 集 ,1992
25	荒川 2 遺跡	米沢市	城館	◎	○	◎	◎	山形埋文セン報 40 集 ,1997
26	米沢城跡（二の丸堀）	米沢市	城館	◎	○	◎		山形埋文セン報 66 集 ,1999
27	米沢城跡 Ⅳ 次	米沢市	城館	○	○			米沢市埋文報 44 集 ,1994
28	米沢城跡 2 次	米沢市	城館	○	○			山形埋文セン報 89 集 ,2001
29	米沢城東二の丸跡	米沢市	城館	◎	○		◎	米沢市埋文報 68 集 ,2000
30	舘山北館跡	米沢市	城館	○	○			米沢市埋文報 79 集 ,2002
31	上谷地 c 遺跡	米沢市	集落	○				山形県埋文報 196 集 ,1995
32	我妻館跡	米沢市	城館	○				米沢市埋文報 50 集 ,1995
33	早坂山 b 遺跡	米沢市	寺院	○				山形県埋文報 154 集 ,1990
34	稲荷森館跡	米沢市	城館	◎	◎			米沢市埋文報 54 集 ,1997
35	暮坪湯ノ上遺跡	福島市	集落	○				福島市埋文報第 84 集 ,1996
36	勝口前畑遺跡	福島市	集落	○				福福島市埋文報 113 集 ,1998
37	大枝城跡	伊達郡梁川町	城館	○				梁川町史編纂委員会 1993『梁川町史第 4 巻自然・考古　資料編Ⅰ』梁川町
38	輪王寺跡	伊達郡梁川町	寺院		◎			梁川町文報 14 集 ,1991
39	梁川城跡	伊達郡梁川町	城館	○	○			梁川町文報 6 集 ,1986
40	梁川城二の丸	伊達郡梁川町	城館		○			梁川町文報 20 集 ,2002
41	梁川城二の丸土塁	伊達郡梁川町	城館		○			福島県文報 94 集 ,1981
42	梁川城跡北三の丸跡	伊達郡梁川町	城館	○	◎			梁川町文報 16 集 ,1993
43	東昌寺跡	伊達郡梁川町	寺院		○			梁川町文報 14 集 ,1991
44	西山城跡	伊達郡桑折町	城館					桑折町埋文報 ,1986
45	二本木遺跡	伊達郡桑折町	集落		○			福島県文報 81 集 ,1980
46	大榧遺跡	伊達郡桑折町	集落		○			桑折町史叢書第 2 集 ,1985
47	本町遺跡	伊達郡桑折町	町屋		○		○	桑折町埋文報 12 集 ,1996
48	北前遺跡	伊達郡保原町	集落		○			保原町文報 3 集 ,1991
49	保原城跡	伊達郡保原町	城館	◎	◎			保原町文報 7,8,11,14 集 ,1993a,1993b,1994,1996
50	梅窪遺跡	伊達郡川俣町	屋敷		○			川俣町文報 14 集 ,1996
51	河股城跡	伊達郡川俣町	城館	○	◎	○	○	川俣町文報 19 集 ,2002
52	四本松城跡	安達郡岩代町	城館		○			岩代町教委 1976『四本松城跡』
53	小浜城西京館跡	安達郡岩代町	城館		○			岩代町文報 6 集 ,1990
54	安子島城跡	郡山市	城館	○				郡山市埋文 1993 安子島地区土地改良関連発掘報 4
55	木村館跡	郡山市	城館	○	○			福島県文報 282 集 ,1992
56	三春条跡 3 次	田村郡三春町	城館	○				三春町文報 26 集 ,2000
57	近世追手門前通遺跡群 B 地点	田村郡三春町	城下	○	○			三井春町文報 22 集 ,1995
58	近世追手門前通遺跡群 D 地点	田村郡三春町	城下	○				三春町教委 2000 三春町文報 26 集
59	城東町遺跡	会津若松市	屋敷				○	会津若松市文報 38 集 ,1994
60	川原町口遺跡	会津若松市	寺院				○	会津若松市文報 36 集 ,1994

○：1 点以上出土

◎：内耳土鍋・瓦質擂鉢 10 点以上、漆器・下駄 4 点以上出土（報告書掲載数）

表 1　「伊達氏系遺物」出土遺跡一覧

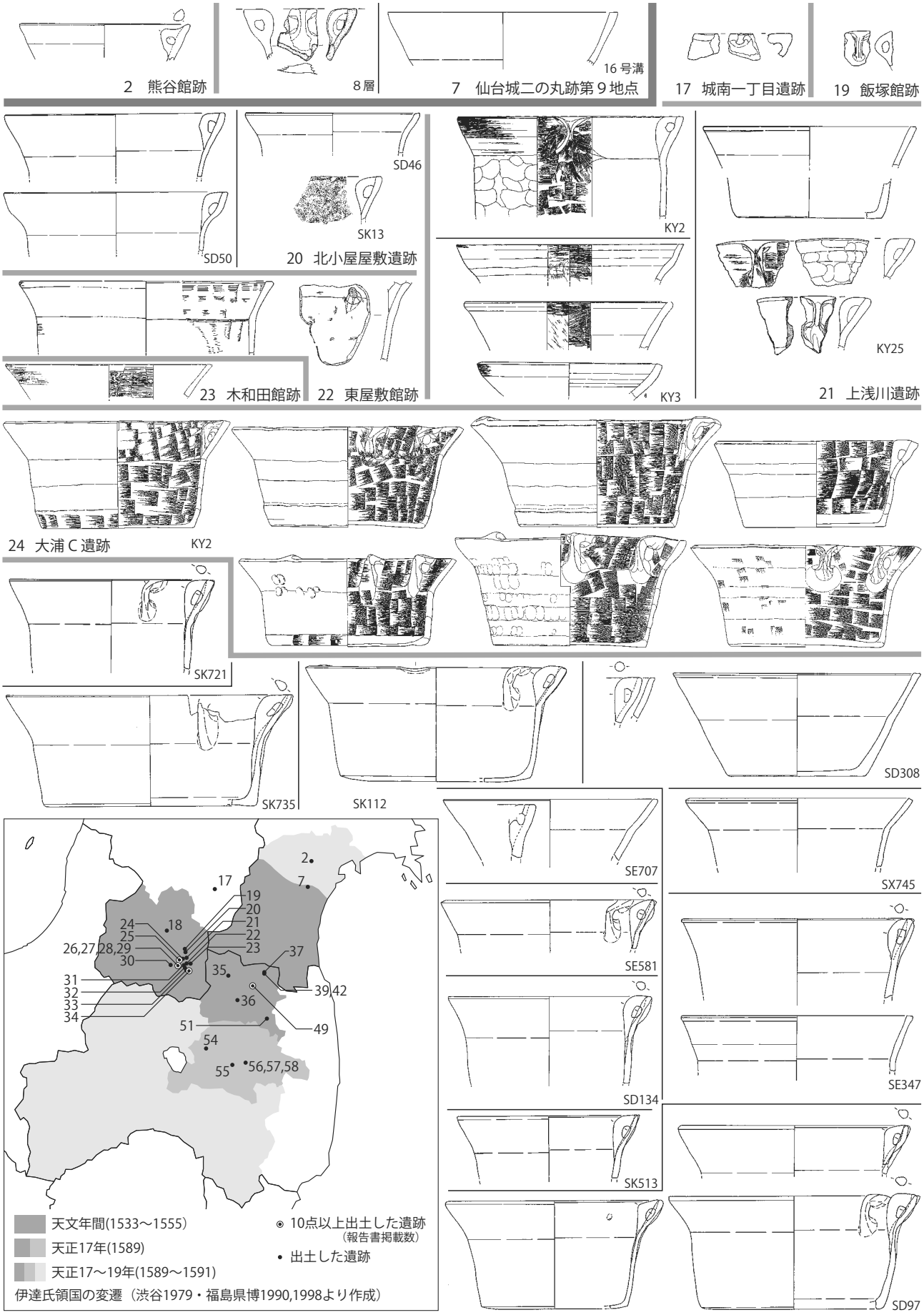


図１　各地の内耳土鍋とその分布（1/8）

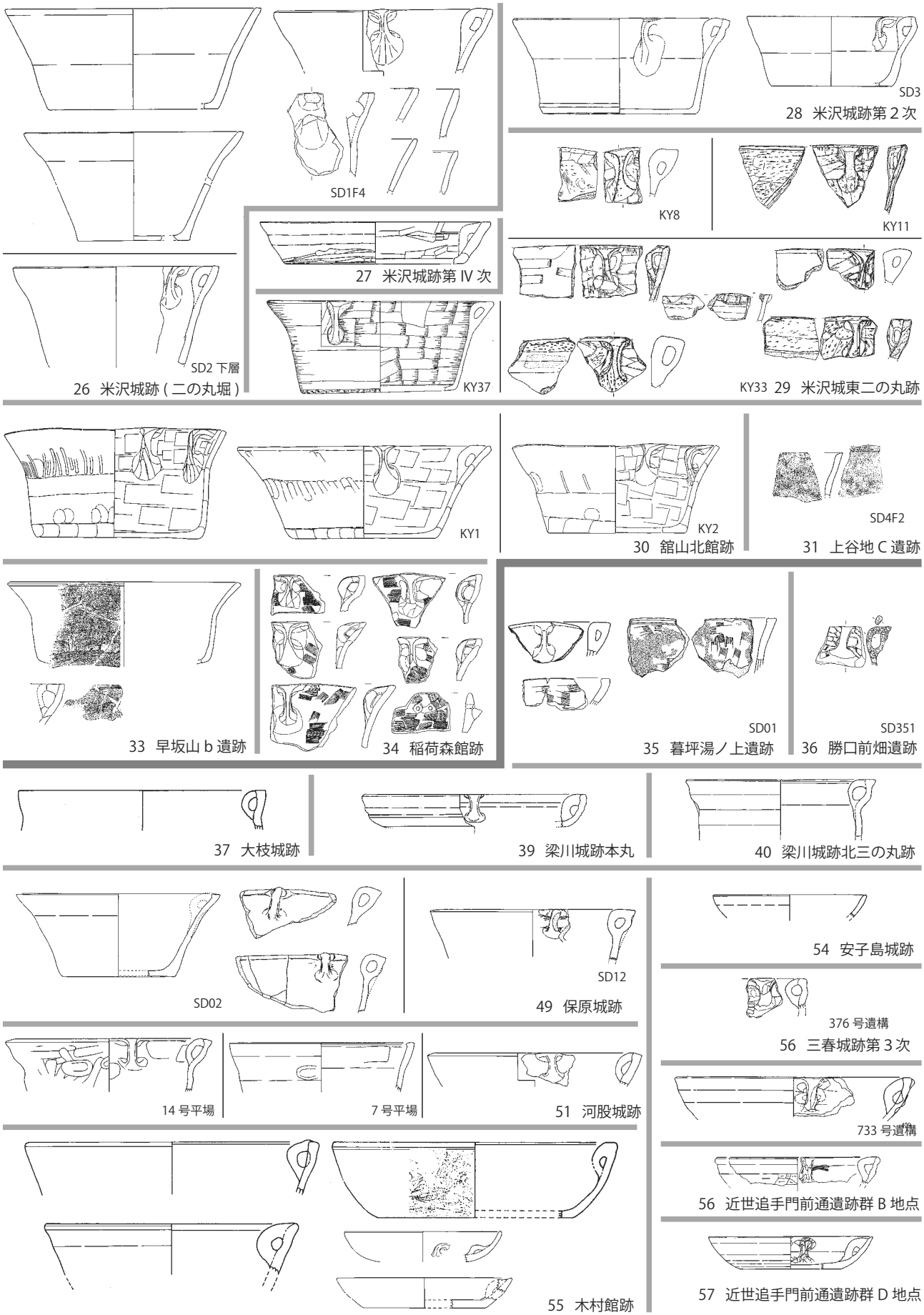


図 2　各地の内耳土鍋（1/8）

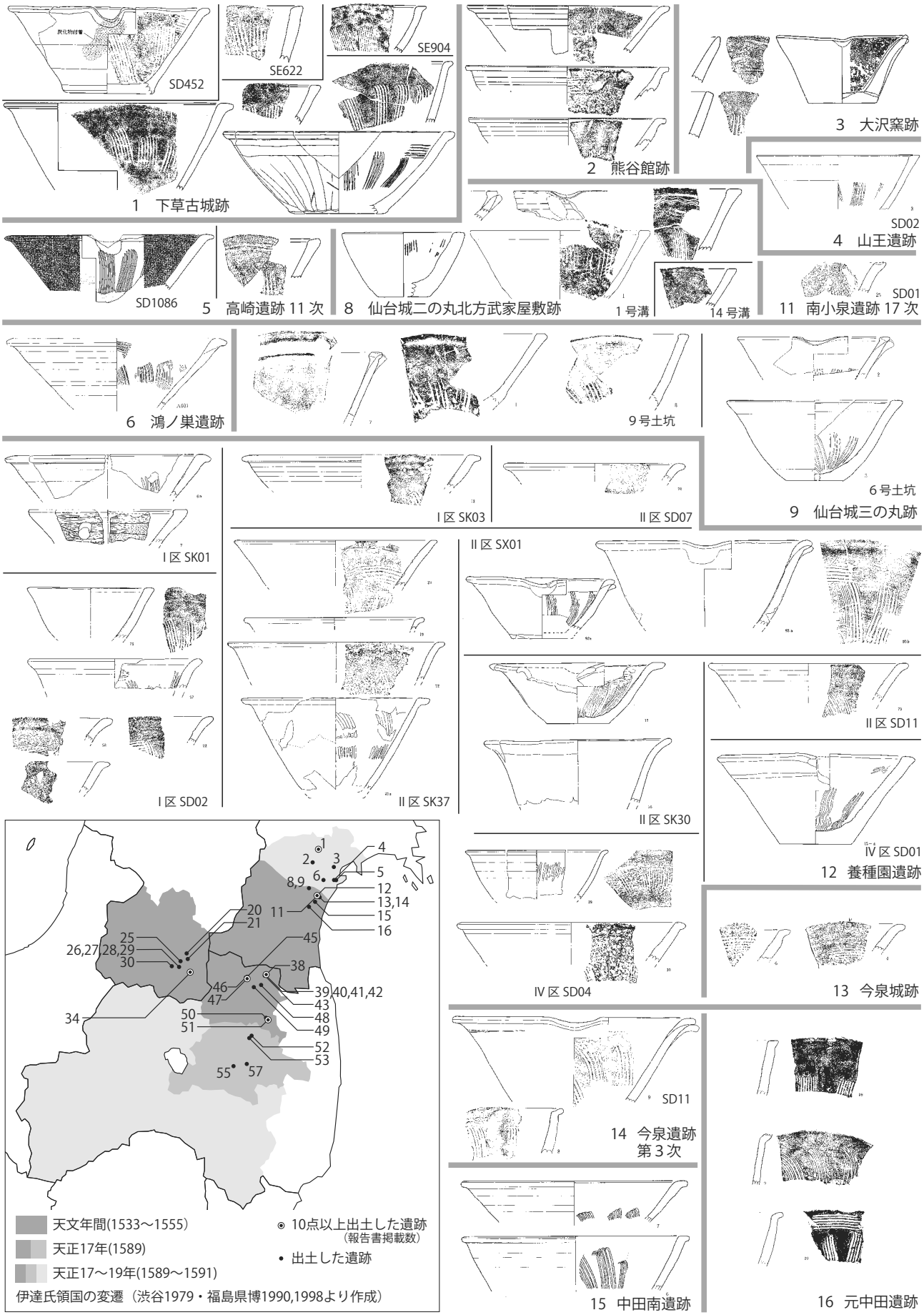


図３　各地の瓦質擂鉢とその分布（1/8）

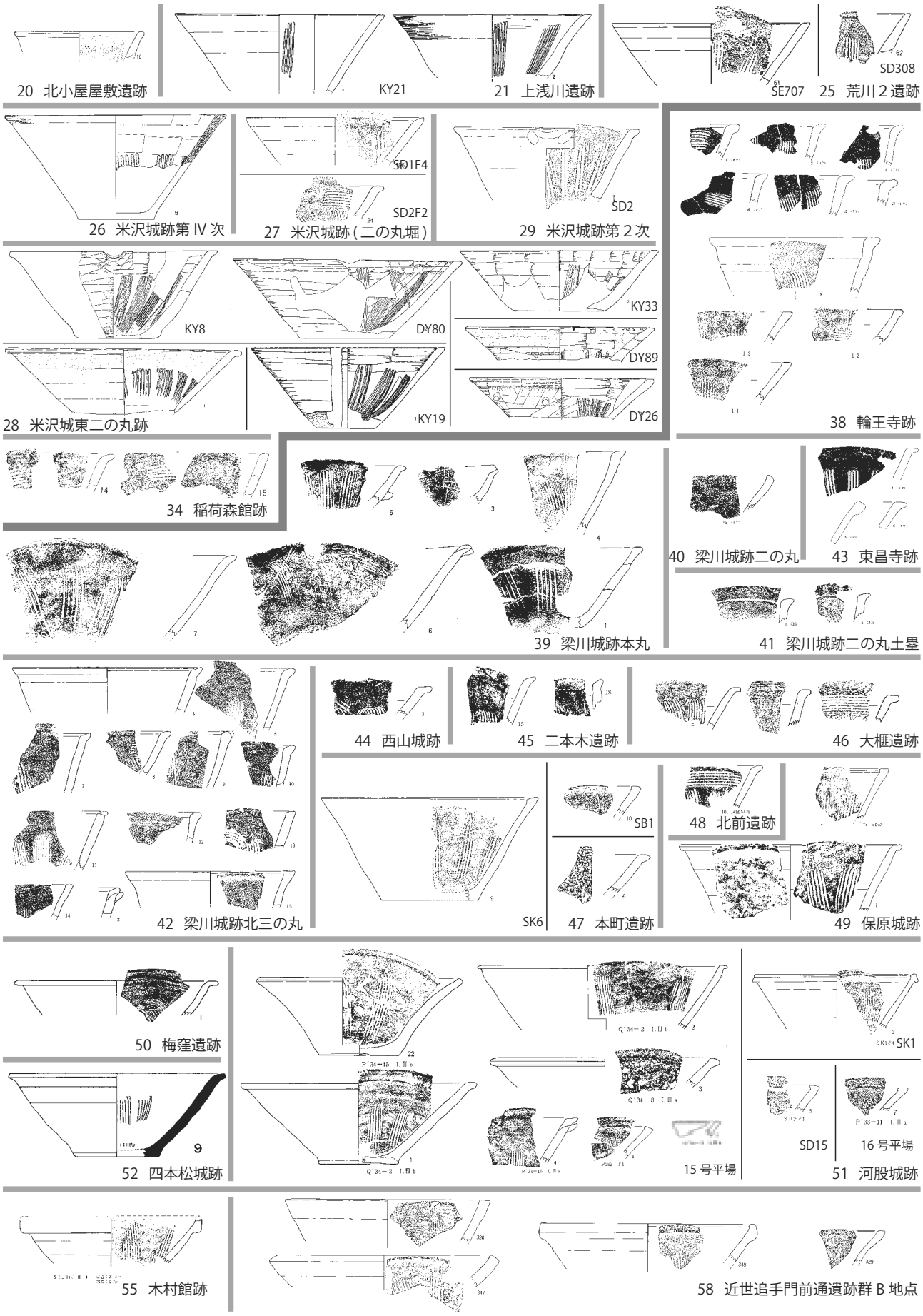


図４　各地の瓦質擂鉢（1/8）

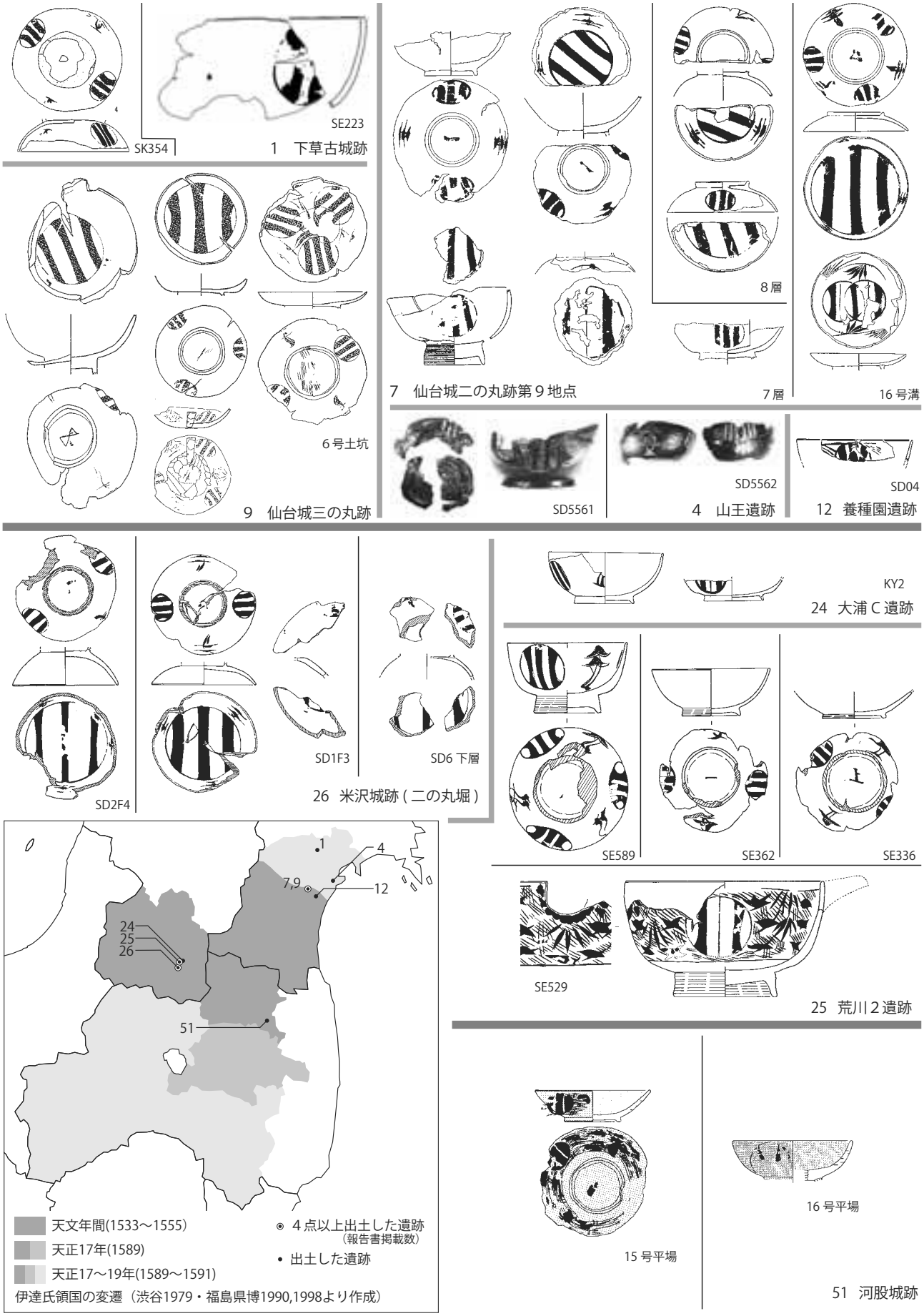


図５　各地の三引両文漆器とその分布（1/6）

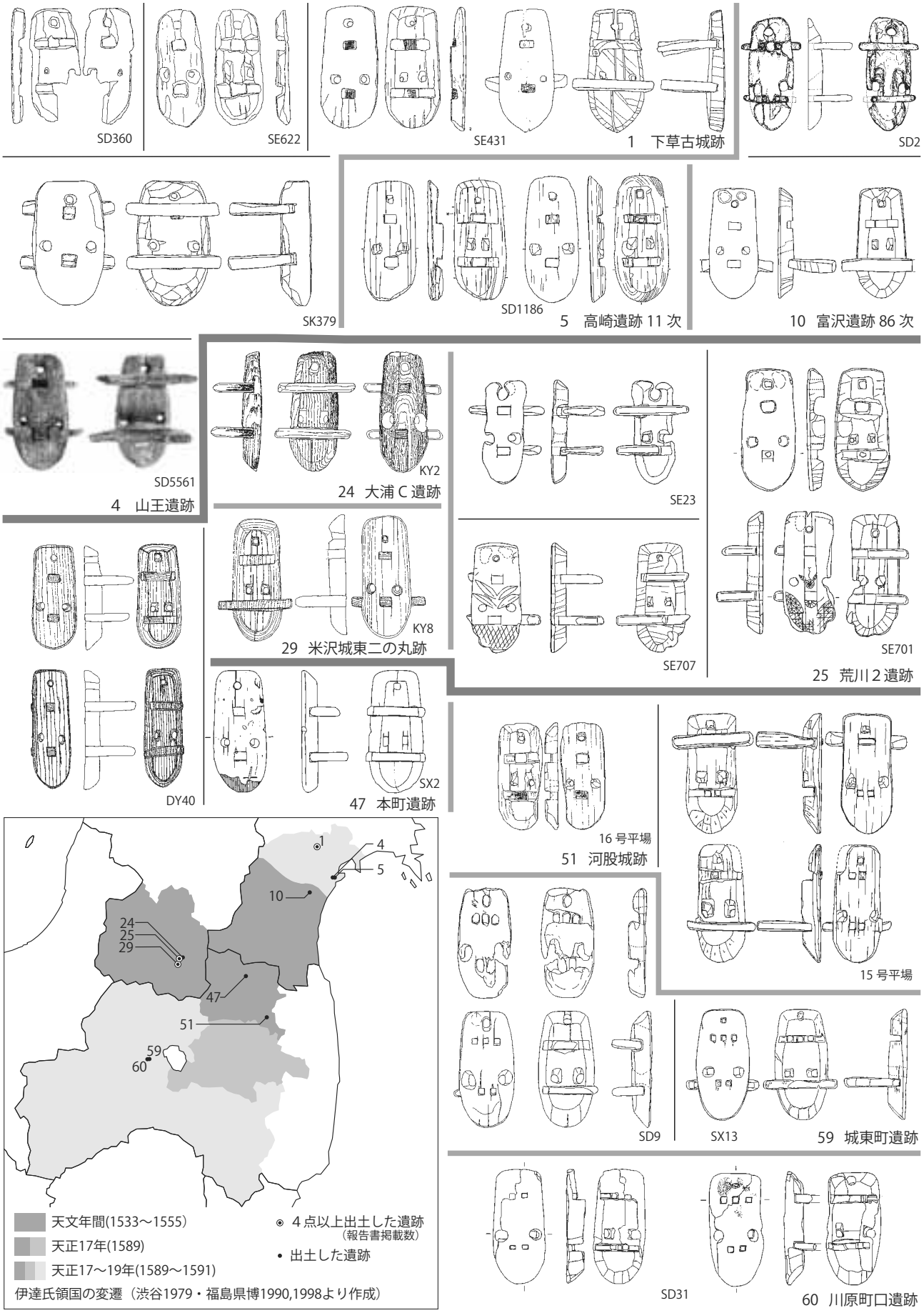


図 6　各地の逆舟形露卯下駄とその分布（1/10）

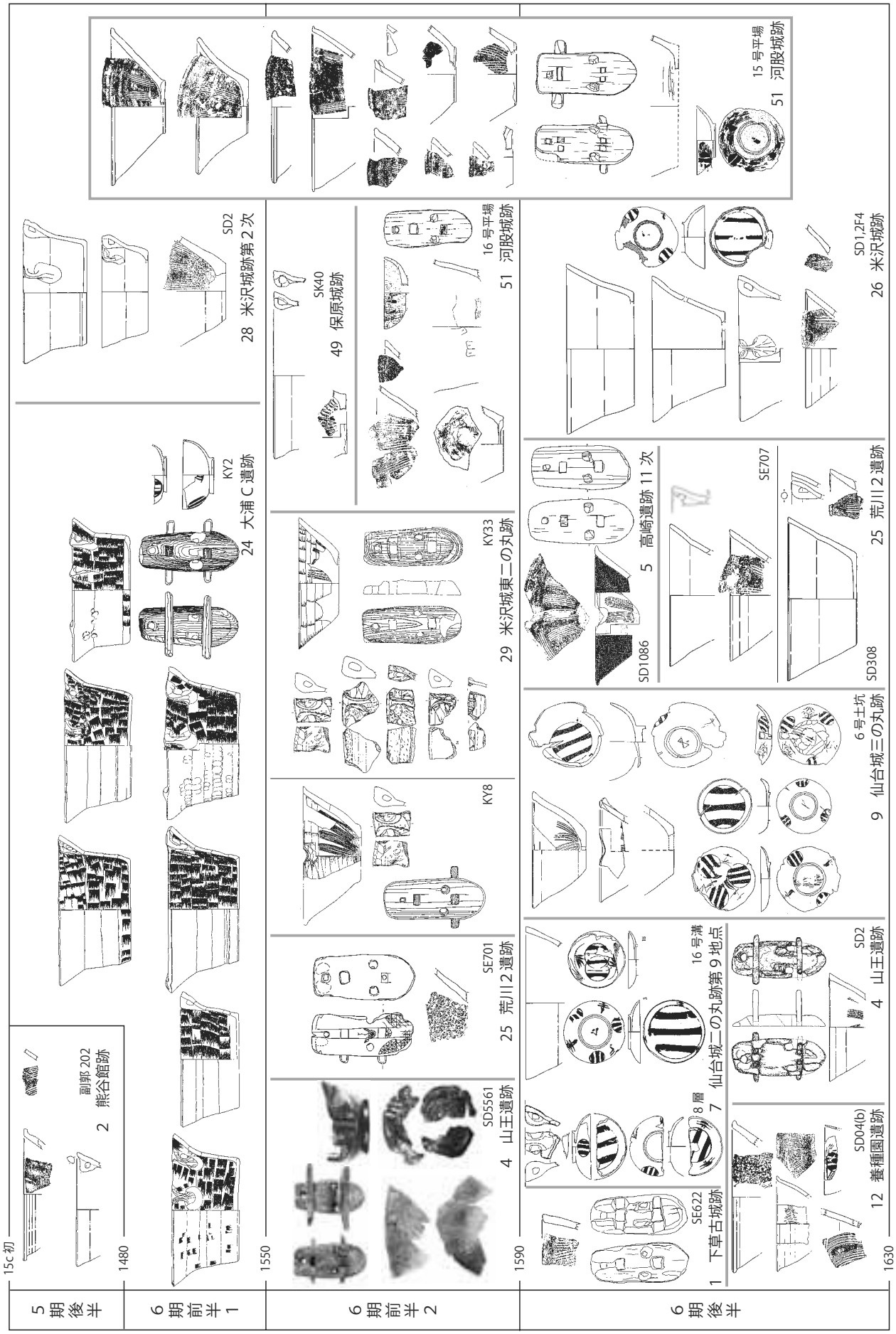


図 7 「伊達セット」の変遷（1/12, 漆器は 1/10）

下草古城跡、大浦C遺跡、荒川2遺跡、米沢城跡、河股城跡など、三引両漆器を出土する遺跡で出土する例が多い。

(5) 分布の比較

内耳土鍋と瓦質擂鉢の分布地域に顕著な違いが認められる。これは前述した生産体制の違いによるものと考えられる。つまり、より在地的な内耳土鍋の生産体制と、領主の移封に伴って移動するような、領主への従属度の高い瓦質擂鉢の生産体制との違いである。米沢盆地で瓦質擂鉢が比較的少ないのは、寺院や城郭等の造営が低調だったためか、豪雪地域のため瓦葺きの建物が少なかったためであろうか[3]。今後の検討を要する。

この生産体制の領主への従属度の高さがより鮮明に現れているのが三引両漆器の分布である。家紋という使用者が限定されるものであるため、より高度な職人支配が要求されたと考えられる。家紋を描く専門の職人がいた可能性もあり、塗膜分析等の自然科学的な分析も含めて検討する必要がある。

逆舟形露卯下駄の分布が三引両漆器とほぼ重なることは、今回の集成では意外な結果であった。その特殊な形状と分布、荒川2遺跡にみられる線刻を施した下駄の存在等から、何らかの儀礼的な使用のあり方があった可能性を指摘しておきたい。伊達氏の支配期間が短かった会津地方で出土している点も、この下駄の性格に関わるのかもしれない。

3 まとめ

表題に示した「伊達氏系遺物」の定義もしないまま書き進めしまったが、生産体制や遺物そのものの性格の違いによって分布地域を多小違えながらも、珠洲と常滑に代表されるような中世前期以来の流通圏を跨いだ地域に共通した遺物群が分布していることは、政治的な要素を考えざるを得ず、以上の4種類の遺物は「伊達氏系遺物」または「伊達セット」とでもいうべき、伊達氏との関わりが強い遺物であると考えられる。

最後に、図7に「伊達氏系遺物」のうち2種類以上が共伴している遺構について、共伴遺物や内耳土鍋の年代観によって変遷を図示した[4]。16世紀前半に3種類以上が共伴するセットが成立し、伊達氏の本拠の移動に伴って、各地の拠点的な遺跡で出土するようになる。

17世紀中葉以降、三引両文を描く漆器が消滅し（関根1998）、内耳土鍋はその用途と形態を変え（髙桑2003）、擂鉢は近世的な広域流通品である岸窯系の陶器（関根2000）がとってかわり、「伊達セット」は消滅することとなる。

今後、個々の遺物の特徴や詳細な年代観、伊達氏の職人支配のあり方、また、領主名を冠した遺物群の名称が妥当かどうか、他地域との比較などが検討課題である。

註

1） この他、山形県鶴岡市鶴ヶ岡城跡（山形埋文2002）、北海道上ノ国町向井宅遺跡（上ノ国町教委1999）で三引両文漆器が出土している。これらの遺跡の伊達氏との関わりは不明であり、単なるデザインとして三引両文が用いられる可能性もある。しかし、今回集成した資料については、伊達氏領国内という遺跡の立地や遺跡の性格から、伊達家の家紋として三引両文が使われていることは確実と考える。

2） 平面形態が舟を前後逆にした形状に類似することから、このように仮称しておく。

3） 瓦質土器工人と瓦工人の同一性が指摘されている（飯村1997）

4） 時期区分については福島県中近世部会10期区分（福島県中近世部会1997）をもとに伊達天文の乱前後を境に6期前半を2分した。

引用参考文献

飯村均　1997「中世食器の地域性　2ー東北南部」『国立歴史民俗博物館研究報告』第71集
上ノ国町教育委員会　1999『町内遺跡発掘調査事業概報II』
渋谷敏己　1979『戦国期伊達領下の郷村制の変化と「村」の成立についてー置賜地方の場合ー＜資料編＞』昭和53年度山形県長期研修報告並びに同年度文部省奨励研究(B)による研究報告
関根達人　1997「6.木製品・漆器　(1)供膳具」『東北大学埋蔵文化財調査年報』9
関根達人　2000「7.考察　(2)土器・陶磁器の検討」『東北大学埋蔵文化財調査年報』13
髙桑登　1998「山形県内陸地方」『東北地方の在地土器・陶磁器II』東北中世考古学会第4回研究大会資料
髙桑登　2003「内耳土鍋」『中世奥羽の土器・陶磁器』高志書院（近日刊行予定）
高橋圭司　2002「第4節　中世後期～近世初頭の遺構と遺物」『河股城跡発掘調査報告書』川俣町文化財調査報告書第19集
福島県中近世部会　1997「かわらけ編年の再検討（その2）」『福島考古』第38号
福島県立博物館　1990『企画展　秀吉・氏郷・政宗ー奥羽仕置400年ー』図録
福島県立博物館　1998『企画展　戦国の城ー天守閣への道ー』図録
(財)山形県埋蔵文化財センター　2002『鶴ヶ岡城跡発掘調査報告書』山形県埋蔵文化財センター調査報告書第99集
山中雄志1996「第4章　考察とまとめ」『本町遺跡発掘調査報告書』桑折町埋蔵文化財調査報告書第12集

渋江遺跡検出の墓域について

―主に近代墓に関する報告―

押切　智紀　　多田　和弘　　西田　明日香

1　はじめに

渋江遺跡の発掘調査は、これまでに平成 11・12 年度 (第 1 ～ 3 次) の 3 回 (内第 1 次は予備調査) にわたって実施されており、竪穴住居跡、土坑、溝跡などの多くの遺構が検出されており、古墳時代の集落跡が確認された。そして平成 13 年 4 月 16 日から 9 月 14 日まで行われた第 4 次調査においては、南小泉式期の土師器が大量に出土する古墳時代中期の大規模な集落跡が確認された。だが調査の際に古墳時代の遺構の上層から、近世・近代にかけて埋葬された墓坑が 170 基ほど検出された。これらの詳しい情報については『渋江遺跡第 4 次発掘調査報告書』(押切 2002) で述べられている。なお、副葬品としては六道銭、陶磁器、位牌[1] などが挙げられる。しかし、前掲報告書において特に近代の墓坑については十分に述べることができなかった。よって、これら述べられなかった墓坑 (ただし､SH103 などは掲載済) について、この稿で述べたいと思う。

2　遺跡の位置とその周辺

渋江遺跡は、山形市北西部にある大字渋江字田中・寺小路に位置している。付近には南側に白川 (馬見ヶ崎川) が流れ、北側に三条ノ目や灰塚などの集落が広がっている。また調査区の南隣には曹洞宗の真福寺があり、調査区内から近世・近代の墓坑が大量に検出された。

本遺跡は白川右岸の自然堤防上に位置しており、標高 97m を測る。この地域は立谷川扇状地の扇端部にあたり、豊富な地下水を利用して山形盆地内でも早くから集落が形成されたものと思われる。

3　木棺構造について

渋江遺跡から出土した木棺の構造は大きく 3 種類に分けられる (第 2 図参照)。

①底部に横木を渡して木棺を固定し、その上に筵が敷かれている箱形のもの（箱形 A）

②板に釘を打ちつけて固定し、板材や角材で補強されている箱形のもの (箱形 B)

③円筒形の桶状の木棺で、箍で固定されているもの (早桶)

このほかに箱形木棺の形状は残しているものの腐食のために木棺がほとんど残存しておらず、形状の確認できないものが出土したが、これについては便宜上、箱形 C とした。また、木棺を使用せずに直接遺体や遺灰等を土坑に埋葬した直葬の墓坑もあった。ここでは墓坑の構造として特徴のある木棺墓について述べることとする。

木棺の形状や大きさについては一定しておらず、特に箱形木棺では、立方体箱形木棺と直方体箱形木棺に分けることができた｡箱形 A は釘がほとんど使われておらず、横木を側板につけたホゾ穴に固定した簡素な造りである。筵のほとんどは炭化や腐食などで、その形状を留めていないのがほとんどである。横木の本数は木棺の大きさにより 2 ～ 4 本と一定してしない。これに対して、箱形 B は小さな板を組み合わせて作られており、釘で打ちつけて固定されていた。また、角材や板材を利用して厳重に補強されている。早桶の埋葬状態は、一部立てた状態で埋葬されたものもあったが、ほとんどは上部を北側に向けて倒された状態で埋葬されていた。このことは頭部を北側に向けることで、北枕の状態で埋葬していることを示したと考えられる。箍は短い材を編んで作られたものがほとんどである。蓋板も小さな板を組み合わせて構成したものが多いことから、近くにあった材料で短時間の内に作られていたことが想像できる。

本遺跡の木棺の使用年代は、副葬品から箱形 A の登場が 18 世紀後半以降と最も早く、その後 19 世紀に入ってから箱形 B や早桶が使用されるようになり、3 種類同時に推移していったようである[2]。

4　近代墓について

墓坑は、Ａ～Ｃ区から 26 基、Ｄ区から 143 基の合計 169 基が確認されている。また墓坑の一部はＸ軸 16 ～ 21、Ｙ軸 23 ～ 24 にかけて東西軸上に並んで配置されており、北側に広がって平行に移動していると考えられる。また葬法は一部土葬の墓もあったが、そのほとんどが火葬であり、焼け残った人骨がそのまま出土した墓坑もあった。その中で本稿の中心である近代墓は 20 数基を数える。

以下、検出された主な近代墓について説明する。

ＳＨ 103(第３図)　Ｂ区東側 18 － 23 Ｇで検出された箱形Ｃである。木棺は無かったものの、長軸 70 ㎝、短軸 52 ㎝で炭化物が残存しており、木棺規模が同程度あったことが推定される。副葬品は墓坑の南西部から、外面に笹文の描かれた平清水焼の小碗 (１) と、一屋山水・船文の描かれた会津本郷焼の小碗 (２) が出土している。副葬品の出土状況から墓坑の埋葬年代は 19 世紀後半以降と考えられる。

ＳＨ 618(第３図)　Ｂ区西側 20 － 14 Ｇで検出され、長軸 87 ㎝、短軸 75 ㎝の掘り方をもつ直葬である。副葬品は陶器の大碗 (３) と六道銭である。六道銭は古寛永 (４)、新寛永（５・６)、不明銭が出土している。副葬品の出土状況から、墓坑の埋葬年代は近代と考えられる。

ＳＨ 662(第３図)　Ｄ区北側 20 － 14 Ｇで検出され、長軸 54 ㎝、短軸 42 ㎝の掘り方をもつ直葬である。副葬品は染付破片 (７) と 六道銭である。六道銭は古寛永 (８)、新寛永 (９～ 12) が出土している。副葬品の出土状況から、墓坑の年代は近代と考えられる。

ＳＨ 732(第３図)　Ｄ区北側 20 － 11 Ｇで検出され、長軸 70 ㎝、短軸 62 ㎝の掘り方をもつ直葬である（箱形Ｃの可能性あり)。副葬品は大堀相馬焼の湯呑 (13) と六道銭である。湯呑 (13) は、外面と高台が指押し整形されており、見込みに走馬文が描かれている。また、高台裏には「相馬」と陰刻されていた。六道銭は新寛永５枚 (14 ～ 18) が出土している。副葬品の出土状況から、墓坑の埋葬年代は近代と考えられる。

ＳＨ 762(第３図)　Ｄ区北側 19 － 16 Ｇで検出された箱形Ｂである。木棺規模は長軸 75 ㎝、短軸 35 ㎝で、側板と底板が若干残っているほかは腐食しており、残存状態はあまり良好ではない。副葬品は平清水焼（？）の小碗 (19)、産地不明の急須 (20)、硯 (21)、キセル (22)、六道銭が出土している。小碗 (19) は、表面に竹が描かれ、「月分立　清影　　風来弄　好音　　文竹斎」と漢詩が草書で書かれている。急須 (20) は表面に赤錆が付着しているために、蓋と身が癒着していた。また側面に茸の装飾があり、高台裏には「白水」・「有隣」と陰刻されている。硯 (21) は関西の高嶋硯で、裏面に「加藤勇作」と線刻されていた。このことから故人の愛用品が副葬品として埋葬されたことが窺える。キセル (22) は銅製と考えられ、表面に銀メッキが施されている。また縦に接着痕が残っていることから、銅板を棒に巻きつけて整形したものと考えられる。六道銭は、古寛永１枚 (23)、新寛永２枚 (24・25) である。副葬品の出土年代から、墓坑の埋葬年代は近代と考えられる。

ＳＨ 720・766(第４図)　両方ともＤ区北側 19 － 17 Ｇで検出された箱形Ｃで、ＳＨ 766 がＳＨ 720 を切っている。ＳＨ 720 は木棺が残存しておらず、短軸 45 ㎝の木棺を据え置いた痕が残存するのみである。だが、墓坑内から鉄製の頭巻丸釘 (31・32) が出土していることから、箱形Ｂの可能性がある。他にも鉄釘は、ＳＨ 858 から断面が角状の折釘 (33) が出土している。ＳＨ 766 は木棺が残存しておらず、長軸 45 ㎝、短軸 40 ㎝の木棺を据え置いた痕が残っている。副葬品は、ＳＨ 720 から表面に縦縞文のある染付の破片 (26) と、白く色付けされたガラス製の数珠玉 (27) が出土しており、同様の数珠玉が同じ墓坑内から３個出土している。また、ＳＨ 720 とＳＨ 766 の境界付近から六道銭の新寛永３枚 (28 ～ 30) が出土している。副葬品の出土状況から、これらの墓坑の埋葬年代は近代と考えられる。

ＳＨ 842(第４図)　Ｄ区南側 21 － 12 Ｇから出土している箱形Ｂである。規模は長軸 78 ㎝、短軸 43 ㎝である。木棺内部には、炭化物が、５～ 10 ㎝の厚さで堆積していたが、その中に焼け残った人骨の一部が含まれていることから、火葬した際の遺灰であると考えられる。取り除いた木棺の底部から布の破片 (34) が出土している。布は中央に菱形文が描かれ、周囲に渦巻文があしらわれているが、残存状態は非常に悪い。

ＳＨ 864(第４図)　Ｄ区南側 22 － ９ Ｇから出土してい

る箱形Bである。規模は長軸76㎝、短軸44㎝で、木棺の底には厚さ3㎝の炭化物が残存している。副葬品は、透明なガラス製の数珠玉(35)と六道銭が出土している。同色同形状の数珠玉は同じ墓坑内からほかに49個出土している。しかし、中には少し直径の大きい数珠玉も含まれており、数珠が2本あった可能性もある。六道銭は古寛永5枚(36～39・41)、文銭1枚(40)、新寛永1枚(42)が出土している。副葬品の出土状況から、墓坑の埋葬年代は近代と考えられる。

なお〈43〉～〈47〉は墓域周辺の遺構外から集中して出土したものである。〈43〉～〈45〉については葬儀中に使用され廃棄されたと思われる。〈46〉は漆継ぎが行われており日常生活で活用されていたと想定できる。

5　まとめ

今回の渋江遺跡の調査でまとまって近世・近代の墓坑群が検出され、木棺構造や副葬品の変遷などが解明されたことは意義深い。近年、近世墓の発掘例が増加しており、平成13年度には、本県周辺で青森県の畑内遺跡、岩手県の胆沢城跡第82次、秋田県の柴内館跡の発掘調査が行われた[3)]。これらは木棺の形状が箱形木棺や早桶と非常に似ているものの、その葬法はすべて土葬である。本遺跡はほとんど火葬で埋葬されており、埋葬時期や地域性に違いがあると考えられる。

最後に本稿の執筆に際して、青木昭博氏、関根達人氏、高桑登・弘美両氏、青森県埋文（佐藤氏）、秋田県埋文（栗澤氏）、水沢市埋文（佐藤氏）からご教示を頂いた。深くお礼申し上げたい。

註

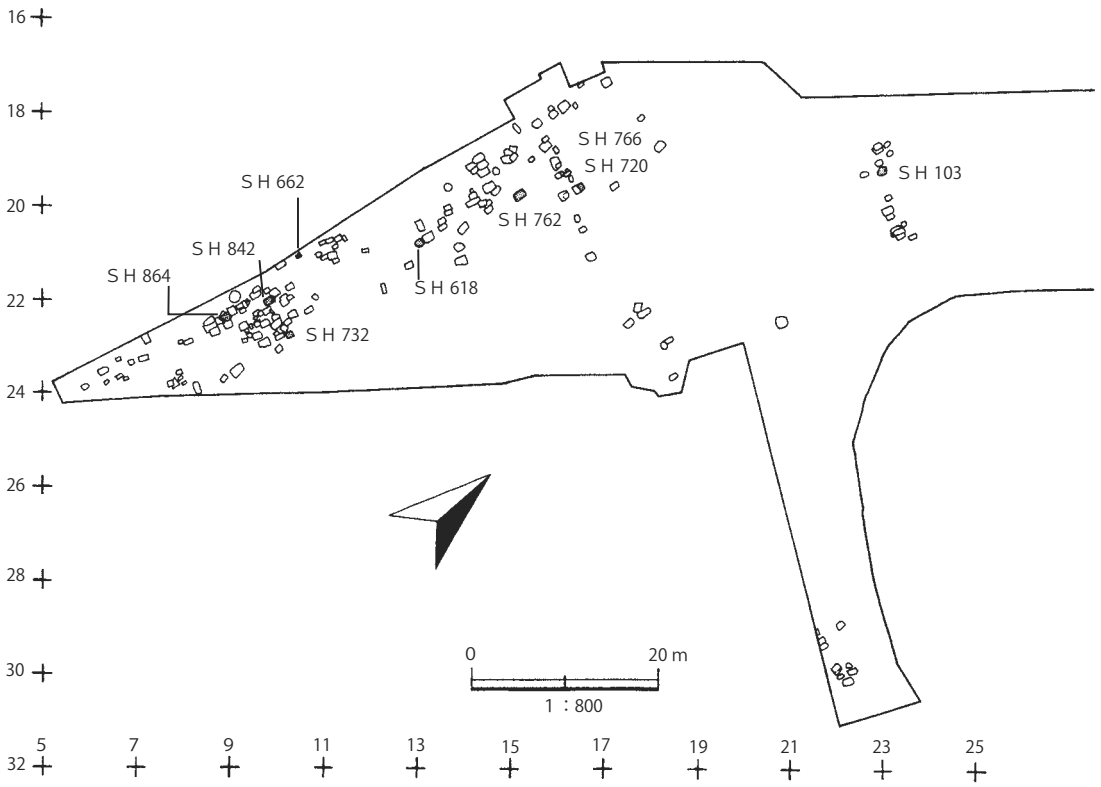
1)　報告書に掲載された位牌の中で「159」・「160」の漆と思われた付着物について理化学分析などを行った結果、それぞれ「鉄錆」・「墨」であることがわかった。ここに付記しておきたい。

2)　関根達人氏のご教示によれば、早桶の方が箱形より早くから使用されるということであった。今回の調査では、箱形の使用年代が早く行われる観があるが、墓域全体では、余り差のない状況であったと思う。

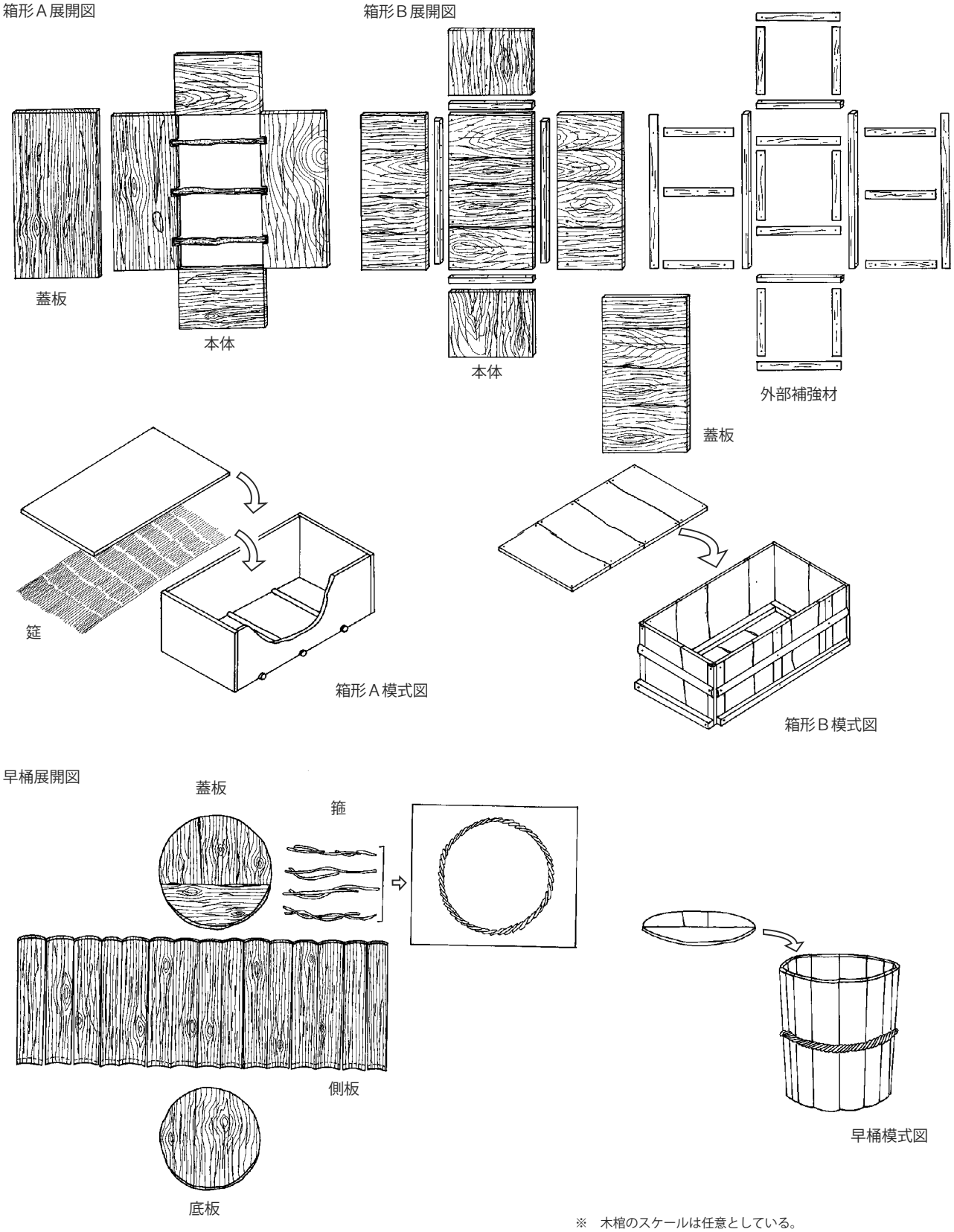
3)　畑内遺跡は、46基の墓が検出され、埋葬状況は土葬であった。墓坑形態は寝棺（長方形）、座棺（立方体）である。副葬品は大堀相馬焼、久慈コクジ焼、六道銭などである。胆沢城は、52基の墓が検出され、2基のみ掘り上げた。墓坑形態は寝棺、座棺、早桶で埋葬状況は土葬であった。柴内館は14基の墓が検出され、埋葬形態は土葬であった。副葬品は、六道銭、ハサミ、鏡、銅製鬢盥などである。

引用文献

押切智紀他　2002　『渋江遺跡第4次発掘調査報告書』山形県埋蔵文化財センター調査報告書第106集

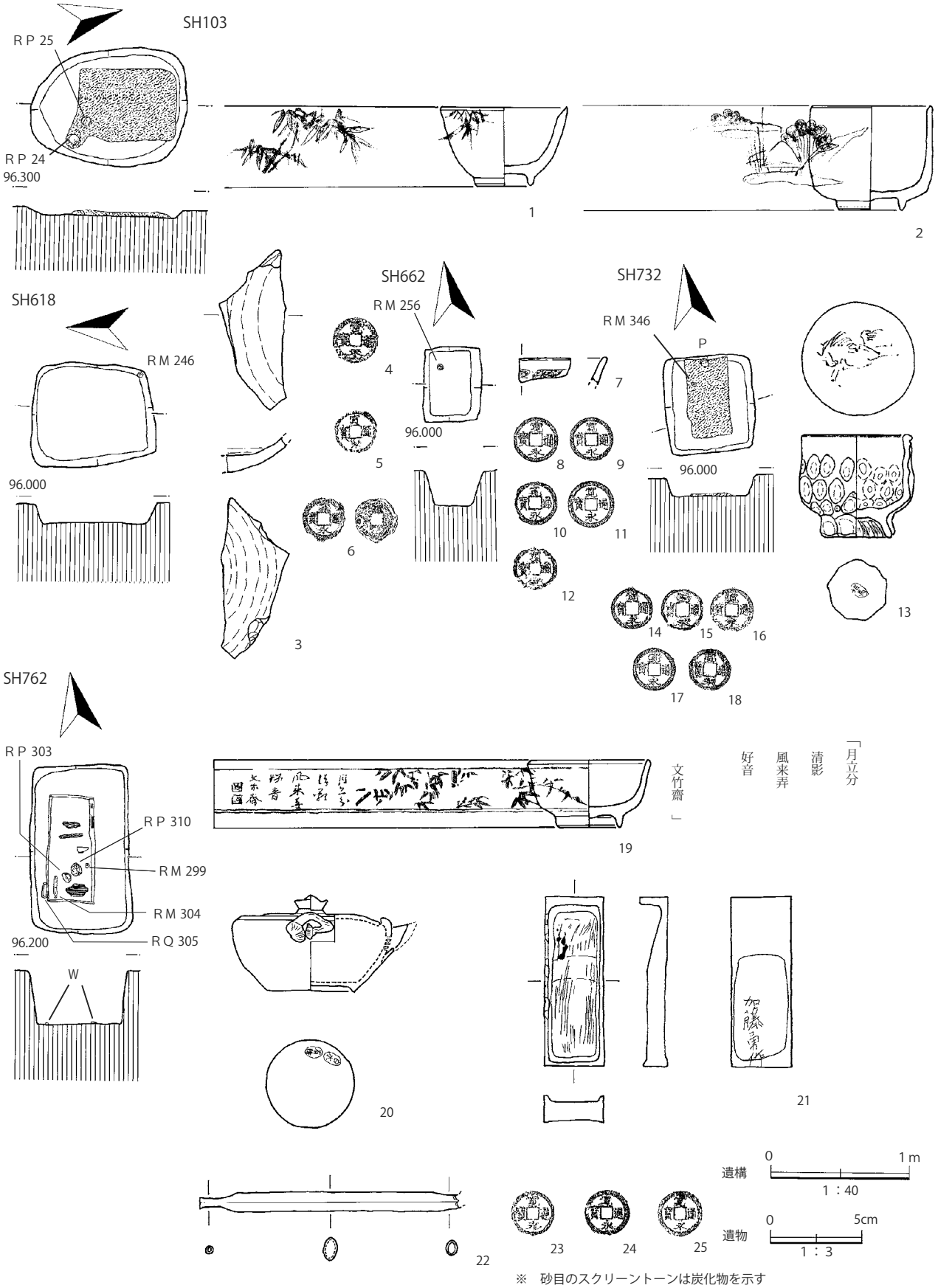


第1図　遺構配置図



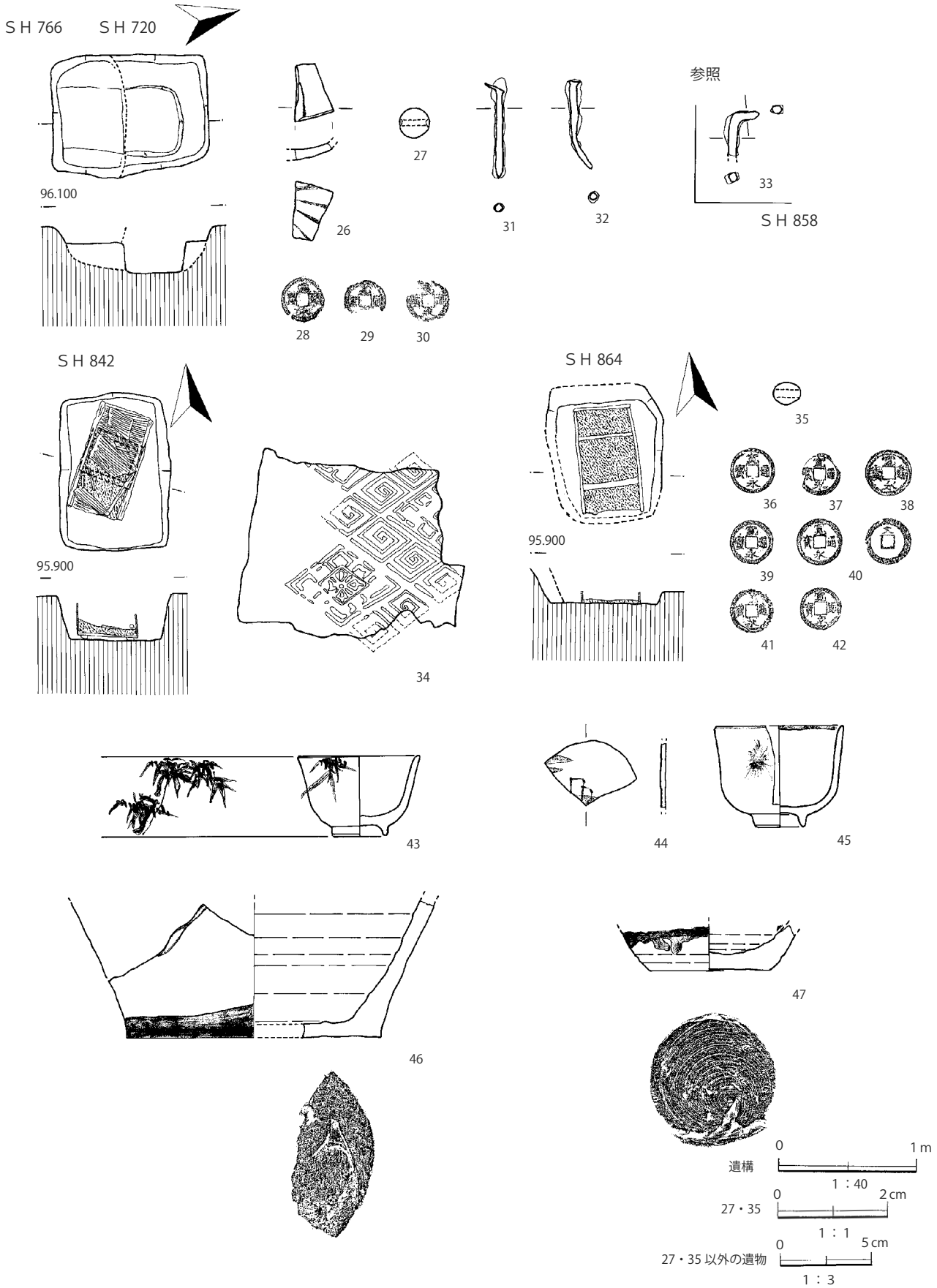
※　木棺のスケールは任意としている。
　　また、一部の不明箇所は推定で描いている。

第２図　木棺構造



※　砂目のスクリーントーンは炭化物を示す

第３図　近代墓（１）


SH 766
SH 720
96.100
27
26
31
32
参照
33
SH 858
28
29
30
SH 842
95.900
34
SH 864
95.900
35
36
37
38
39
40
41
42
43
44
45
46
47
遺構
0
1 m
1：40
27・35
0
2 cm
1：1
27・35 以外の遺物
0
5 cm
1：3

第4図　近代墓（2）

表１　陶磁器観察表

挿図	番号	種別 器種	形状	計測値（mm） 口径	底径	器高	器厚	胎土色調 釉薬色調	胎土	残存	装飾　印　銘　文様など 外面	内面	底部	出土地点 登録番号	製作地 製作年代
第3図	1	染付 小碗	端反形	68	32	42	4	灰白 5Y8/1 灰白 5GY8/1	緻密	完形	竹文 透明釉	透明釉	畳付露胎	SH103 RP25	平清水 19 世紀後半
	2	染付 小碗		66	35	55	3	灰白 7.5Y8/1 灰白 5Y8/1	緻密	完形	一屋山水・船 透明釉	透明釉	畳付露胎	SH103 RP24	会津本郷 19 世紀前半
	3	陶器 大碗		—	—	—	10	灰白 7.5Y7/1 灰ｵﾘｰﾌﾞ 5Y6/2	細砂混	体部	貫入あり 灰釉	灰釉	—	SH618	不明 近代
	7	染付 湯呑？		—	—	—	3	灰白 2.5GY8/1 灰白 2.5GY8/1	緻密	口縁部	文様あり 貫入透明釉	透明釉	—	SH662	不明 19 世紀
	13	陶器 湯呑		59	38	55	2	淡黄 2.5Y8/3 灰白 7.5Y7/2	細砂混	完形	指押し痕 灰釉	見込水金走馬文 灰釉	高台内畳付露胎 「相馬」陰刻	SH732	大堀相馬 19 世紀後半
	19	色絵 小碗		68	36	36	5	灰白 5Y8/1 灰白 5YG8/1	緻密	完形	竹文・漢詩 透明釉	透明釉	畳付露胎	SH762 RP303	平清水？ 19 世紀後半
	20	陶器 急須		82	45	51	3	灰 N4/0 —	緻密	9/10	蓋・身が癒着 赤錆付着 両側に茸装飾	—	「白水」・「有隣」陰刻	SH762 RP310	不明 近代
第4図	26	染付 碗？		—	—	—	4	灰白 N8/0 灰白 N8/0	緻密	体部	縦縞文 透明釉	圏線　透明釉	—	SH720	不明 19 世紀
	43	染付 小碗	端反形	66	31	44	3	灰白 5Y8/1 灰白 5YG8/1	緻密	完形	竹文 透明釉	透明釉	畳付露胎	18-15G	平清水 19 世紀後半
	44	染付 徳利		—	—	—	3	明緑灰 10GY8/1 灰白 N8/0	緻密	体部	帆掛け船 透明釉	露胎	—	20-11G	会津本郷？ 近代
	45	染付 小碗		(70)	(28)	54	4	灰白 2.5Y8/1 灰白 2.5Y8/1	細砂混	1/5	栗？ 透明釉	透明釉	畳付露胎	18-19G	会津本郷 19 世紀後半
	46	陶器 甕		—	(138)	—	10	褐灰 10YR5/1 暗赤褐 5YR3/2	粗砂混	底部	鉄釉（茶・黒）	鉄釉（茶）	回転糸切り痕 鉄釉（茶）	17-16G	在地系 近代
	47	陶器 小甕		—	68	—	8.5	にぶい橙 7.5YR7/4 暗紫灰 5RP4/1	細砂混	底部	鉄釉（黒）	鉄釉（黒）一部付着	回転糸切り痕	20-11G	在地系 近代

※　胎土・釉薬色調は 1999 年度版農林水産省農林水産技術会議事務局監修の『新版標準土色帖』に拠った。

表２　石製品・金属製品・ガラス製品観察表

挿図	番号	種別	器種		計測値（mm・g） 長さ	幅	厚さ	重量	破損	素材	調整その他	出土地点	登録番号
第3図	21	石製品	硯		91	31.5	14	81.27	無	粘板岩	裏に「加藤勇作」陰刻　高嶋硯	SH762	RQ305
	22	金属製品	キセル	吸口 胴部	19 118	径　8.12 径　6	孔径　3	厚さ　1 厚さ　1	有	銅？	表面に銀メッキ	SH726	RM304
第4図	27	ガラス製品	数珠玉		直径　5	孔径　1.5		0.33	無	ガラス	白色　ほかに同様のものが 3 個ある	SH720	
	31	金属製品	頭巻		54	5 ～ 10		3.59	有	鉄	表面に錆が付着する　丸釘	SH720	
	32	金属製品	頭巻		54	3 ～ 8		4.93	有	鉄	表面に錆が付着する　丸釘	SH720	
	33	金属製品	折釘		33	6 ～ 8		2.26	有	鉄	表面に錆が付着する　角釘	SH858	
	35	ガラス製品	数珠玉		長径　5	短径　4	孔径 1.5	0.23	無	ガラス	透明　ほかに同様のものが 49 個ある やや径の大きい数珠玉も含む　2 種類あるか	SH864	

表３　銭貨観察表

挿図	番号	出土地点	登録番号	銭銘	分類	鋳造地・名称	鋳造年代	計測値（mm・g） 外径	穿径	厚さ	重量	備考
第3図	4	SH618	RM245	寛永通寶	古寛永	水戸銭	寛永 14 年 (1637)	24.3	5.3	1	3.1	錆付着
	5	SH618	RM245	寛永通寶	新寛永	京都七条川原	元禄 13 年 (1700)	23	6	0.7	2.6	錆付着
	6	SH618	RM246	寛永通寶	新寛永	大坂高津新地	寛保元年（1741）	23.2	5	1	2.4	錆付着・背に「元」
	8	SH662	RM256	寛永通寶	古寛永	駿河国沓谷銭	寛永 14 年 (1637)	24	6	1	3.4	錆付着
	9	SH662	RM256	寛永通寶	新寛永	江戸亀戸村	元禄 10 年 (1697)	23.2	6	1	3.2	錆付着
	10	SH662	RM256	寛永通寶	新寛永	京都七条川原	元禄 13 年 (1700)	23.6	5.5	1	2.2	錆付着
	11	SH662	RM256	寛永通寶	新寛永	四ツ宝銭（広永）	宝永 5 年 (1708)	24.9	6	1	3.2	錆付着
	12	SH662	RM256	寛永通寶	新寛永		元禄 10 年～ (1697 ～)	25	6	1.5	2.9	錆付着・一部欠損
	14	SH732	RM346	寛永通寶	新寛永	下野国久次良村	元文 2 年 (1737)	21.8	6.5	0.4	2.2	錆付着・一部欠損
	15	SH732	RM346	寛永通寶	新寛永	江戸亀戸村	元文 2 年 (1737)	22.4	6.7	0.7	1.8	錆付着
	16	SH732	RM346	寛永通寶	新寛永	出羽国秋田	元文 2 年 (1737)	23	6	0.5	1.8	錆付着
	17	SH732	RM346	寛永通寶	新寛永	佐渡相川	寛保元年（1741）	22.6	6	0.6	2.8	錆付着
	18	SH732	RM346	寛永通寶	新寛永	佐渡相川	寛保元年（1741）	22.6	6.5	0.7	2.6	錆付着
	23	SH762	RM299	寛永通寶	古寛永	駿河国井之宮銭	寛永 16 年 (1639)	24.7	6	1.8	3.7	錆付着
	24	SH762	RM299	寛永通寶	新寛永	四ツ宝銭（広永）	宝永 5 年 (1708)	24.8	5.5	1.8	3.2	錆付着
	25	SH762	RM299	寛永通寶	新寛永	四ツ宝銭（広永）	宝永 5 年 (1708)	25	5.7	1.8	3.1	錆付着
第4図	28	SH720		寛永通寶	新寛永	出羽国秋田	元文 2 年 (1737)	23.5	6	0.8	2.1	錆付着
	29	SH720		寛永通寶	新寛永		元禄 10 年～ (1697 ～)	22.8	5.5	0.5	1	錆付着・残存率 2/3
	30	SH720		寛永通寶	新寛永		元禄 10 年～ (1697 ～)	22.8	5.8	0.8	1.5	錆付着・一部欠損
	36	SH864	RM380	寛永通寶	古寛永	仙台銭	寛永 12 年 (1637)	24.5	5.6	1.5	2.2	錆付着
	37	SH864	RM380	寛永通寶	古寛永	仙台銭	寛永 12 年 (1637)	22.9	6	2.6	2	錆付着・一部欠損
	38	SH864	RM380	寛永通寶	古寛永	仙台銭	寛永 12 年 (1637)	23.9	6.3	1.7	2.5	錆付着
	39	SH864	RM380	寛永通寶	古寛永		寛永 3 年 (1626) ～寛文 8 年 (1668)	23.2	5.7	2.3	1.5	錆付着
	40	SH864	RM380	寛永通寶	文銭	正字文	寛文 8 年 (1668) ～天和 3 年 (1683)	25.2	5.9	1.5	2.5	錆付着
	41	SH864	RM388	寛永通寶	古寛永	京都建仁寺銭	承応 2 年（1653）	23.5	6.8	1.4	2.6	錆付着
	42	SH864	RM388	寛永通寶	新寛永	下野国久次良村	元文 2 年 (1737)	23.7	6.1	1.4	2.1	錆付着

※古銭の鋳造地・名称・鋳造年代の判別は、
小川浩編『日本の古銭』（人物往来社）　日本貨幣商協同組合『日本貨幣カタログ』
武田健市 1998『大日北遺跡』（多賀城市教育委員会）　を参照した。
また、墓坑内で出土した銭貨の内、数枚癒着したものについてはこの表や挿図で示していない。

D区南側完掘（北から）

ＳＨ 618（北から）

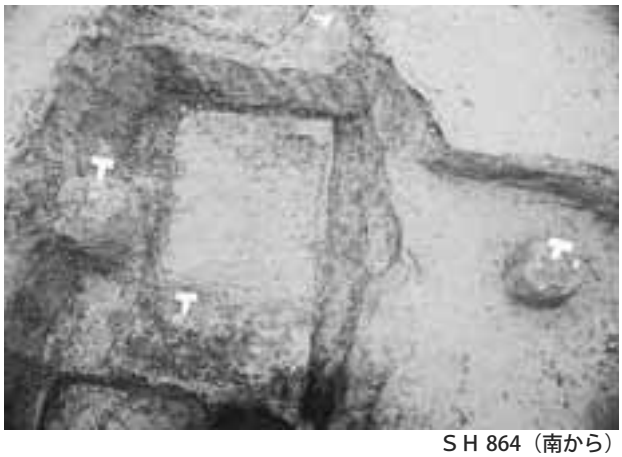
ＳＨ 622（東から）

ＳＨ 762（北から）

ＲＰ 310（東から）

ＳＨ 842 展開（南から）

ＳＨ 842 布出土状況（南から）


ＳＨ 864（南から）

明治時代に建造された山形県内の奥羽本線旧隧道の概要と現況

犬飼　透

1　はじめに

従来、山形県内における鉄道開業に関わる考察・分析は沿線各地域の経済・産業等に与えた影響についてのものが多くを占めており、開業当時の鉄道関連設備自体に関するものはそれに比べて少ないように見受けられる。本稿では明治時代に建造された奥羽本線旧隧道の外見上の構造や現状等を概観し、同時期の鉄道設備の特徴について考えてみることにする。

2　奥羽本線建設経過の概要と開業時の隧道の数・位置・変遷

奥羽本線は 1892（明治 25）年 7 月に公布された「鉄道敷設法」に基づいて福島～山形～秋田～青森間に官鉄線として着工された路線である。建設にあたっては秋田県の湯沢を境として「南線」は 1894（明治 27）年以降福島から北へ向けて、「北線」は 1893（明治 26）年以降青森から南へ向けて工事が行なわれ、南北線ともに小刻みに開業区間を延ばした末 1905（明治 38）年 9 月 14 日、「北線」の横手～湯沢間開業によって福島～青森間の全通を見た。[1] 山形県内の奥羽本線は建設時の区分ではすべて「南線」に属し、同県内では初の鉄道でありまた明治時代に建設され開業した唯一の鉄道でもある (第 1 表)。奥羽「南線」には 33 基の隧道があった[2] が福島～米沢間で 14 基が福島県内に、新庄～院内間で 1 基が秋田県内に位置するため、山形県内に位置していたものは秋田との県境に跨る 1 基を含めて 18 基となる。この 18 基の中で米沢以南の 5 基、赤湯～上ノ山（現・かみのやま温泉）間の 2 基、新庄～院内間で秋田との県境に跨る 1 基、の計 8 基の隧道は主に 1960 ～ 70 年代の交流電化・複線化に合わせて改修が行なわれ 2002 年現在も“現役”の隧道として使用されているが、他の 10 基はこの時期に設けられた新線にとって代わられ廃棄されている。本稿では以下に、これら山形県内に位置し 1960 ～ 70 年代に交流電化・複線化によって廃棄された 10 基の旧隧道について述べることにする。なお、各旧隧道の所在・現状確認は 2001（平成 13）年 10 ～ 11 月、2002（平成 14）年 4 ～ 5 月に行なったものである。また、隧道坑門・煉瓦の部位・積み方等の名称については第 1 図（1）～（3）によるものとする。

註

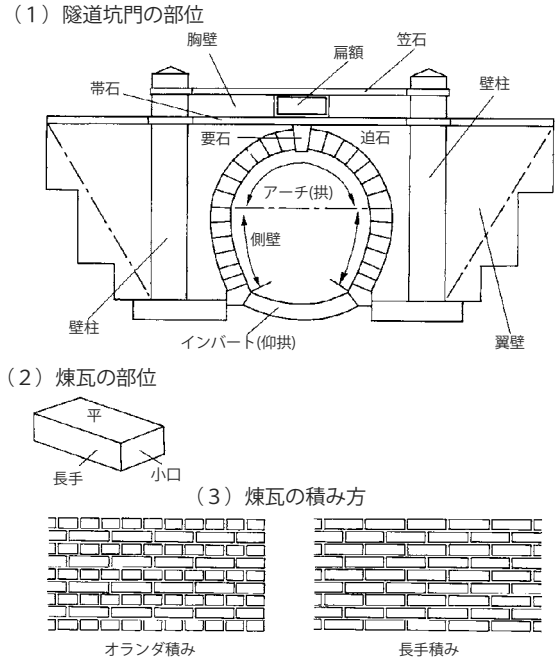
1) 『奥羽鐵道建設概要』ｐｐ.1 ～ 2
　なお奥羽北線・奥羽南線の通称は後には、主に列車の運転形態から前者は秋田～青森間、後者は福島～秋田間と、建設時の区分とは異なる形で用いられるのが一般的になっている。

2) 『奥羽鐵道建設概要』ｐｐ.18 ～ 21

第 1 表　奥羽「南線」の区間ごとの開業時期と隧道の分布

区間	開業日	隧道数（開業時）	備考
福島～米沢	1899/5/15	19	
米沢～赤湯	1900/4/21	0	
赤湯～上ノ山	1901/2/15	2	
上ノ山～山形	1901/4/11	0	
山形～楯岡	1901/8/23	0	「楯岡」は現「村山」
楯岡～大石田	1901/10/21	1	同上
大石田～舟形	1902/7/21	5	
舟形～新庄	1903/6/11	0	
新庄～院内	1904/10/21	6	
院内～湯沢	1905/7/5	0	

※アミは本稿でとりあげた区間



第 1 図　隧道坑門、煉瓦の部位･摘み方の名称

（小野田滋「鉄道構築物の見方･調べ方」（『鉄道廃線跡を歩く II』JTB　1996）に基づいて作成）

2・各旧隧道の概観

（1）今宿隧道（第２図）

袖崎～大石田間（北村山郡大石田町）の福島起点 77 哩 31 鎖 60 節（約 124.5 ㎞）[3] に位置する。並行・隣接する道路（現・県道 189 号線）にはトンネルは設置されておらず、鉄道はこの道路の東側の山中を走る。開業時の全長は 990 呎（約 301.8 m）。その後、青森（大石田）方の坑門に隣接してスノーシェッドが設置されている。福島（袖崎）方の坑門は線路移設後に県道 189 号線下の土盛の中に埋め込まれたと考えられ、2002 年 5 月現在は確認することができない。青森方坑門は煉瓦製で壁柱・帯石・笠石を有するが、線路移設後に崩れたスノーシェッドの部材や他所から持ち込まれたと思われる廃土等のため接近が困難であり内部の構造も含めて詳細を十分に観察するには至っていない（写真図版１）。本隧道は 1973（昭和 48）年から始まった奥羽本線羽前千歳～秋田間の電化工事[4] 完成に伴い本隧道のやや東側に設置された新トンネルに役割を譲り、1975（昭和 50）年 10 月 13 日[5] に廃棄されている。

第２図　今宿隧道位置図

（1:25,000 地形図「延沢」（国土地理院　昭 60・3・30）に基づいて作成）

写真図版１　今宿隧道　青森方坑門（2002 年 5 月）

（2）金堀隧道・瀧ノ澤隧道・猿羽根第一隧道・猿羽根第二隧道・猿羽根第三隧道（第３図）

以上の５隧道は大石田～舟形間のうち芦沢～舟形間（尾花沢市～最上郡舟形町）に属する。古くから交通の難所として知られた猿羽根峠を越える位置にあるが、同区間の奥羽本線は主要道路から最大で約２ｋｍ東側の山中に設けられている。

（2a）金堀隧道

福島起点 85 哩 7 鎖 86 節（約 136.9km）、当区間の５隧道中最も福島（芦沢）方に位置する。開業時の長さは 195.096 呎（約 59.5m）。現況からみてその後の延伸等はなく、廃棄時まで長さは変わらなかったものと思われる。坑門は両側とも煉瓦製で壁柱・帯石・笠石を有し、笠石部には歯飾りが見られる。青森（舟形）方坑門に向かって左手側の壁柱には黒塗りの木製の板に白い文字で「金堀」と記された銘板も残されていた。内部も煉瓦製でアーチ部は長手積み、側壁部はオランダ積みである。坑門部・内部とも後にコンクリートで補修された部分があるが、全般に遺存状態は良好である。（写真図版２）

（2b）瀧ノ澤隧道

福島起点 85 哩 26 鎖 74 節（約 137.3km）、金堀隧道の青森方坑口から約 300 m北西方に位置する。『奥羽鐵道建設概要』には「瀧ノ澤隧道ノ一部ハ地質軟弱湧水多量ナルカ為メ施工頗ル困難ナリシニ坑内凡ニ鎖間約百九十坪ノ土砂墜落ヲ来シタルコトアリ」[6] との記述があり、難工事であったことを窺わせる。開業時の長さは 1108.14 呎（約 337.8m）。その青森方はのちに約 40 メートル延伸されている（写真図版３）。延伸部分は側壁部が直立し上部はアーチ状の外形を持つコンクリート製の構造物になっており、側壁下部には採光用と思われる小さな窓が上下２段に規則的に設けられている。この延伸が行なわれた時期の詳細は未確認だが、コンクリート製であることから早くとも大正時代以降の施工と思われる。本来の坑門は福島方・青森方とも煉瓦製で壁柱・帯石・笠石を有するが笠石部の歯飾りは存在しない。また福島方坑門の翼壁部に用いられている煉瓦の小口部にそれぞれ「山」「形」と刻まれたものが横に並べられているものが１組あるが詳細は不明である（写真図版３・4）。内部はアーチ・側壁とも煉瓦製で前者は長手積み、後者がオランダ積みであるがそれぞれ後に部分的にコンクリー

トで補修されている。2002 年 5 月現在坑門の周辺は両側とも湧水が多く、建築時の苦心を垣間見ることができる。

（2c）猿羽根第一隧道

福島起点 85 哩 61 鎖 38 節（約 138.0km）、瀧ノ澤隧道の青森方坑口から約 350 m西北西方に位置する。開業時の長さは 454.74 呎（約 138.6m）。坑門は福島方・青森方とも煉瓦製で壁柱・帯石・笠石を有するが笠石部の歯飾りは存在しない。内部はアーチ・側壁とも煉瓦製で前者は長手積み、後者がオランダ積みであるがそれぞれ後に部分的にコンクリートで補修されている。また福島方坑口にはスノーシェッドが設けられていたが現在は側面の骨組を残すのみである。その部材は断面形状から見て廃レールと思われるものが多いが詳細は未確認である。（写真図版 5・6）

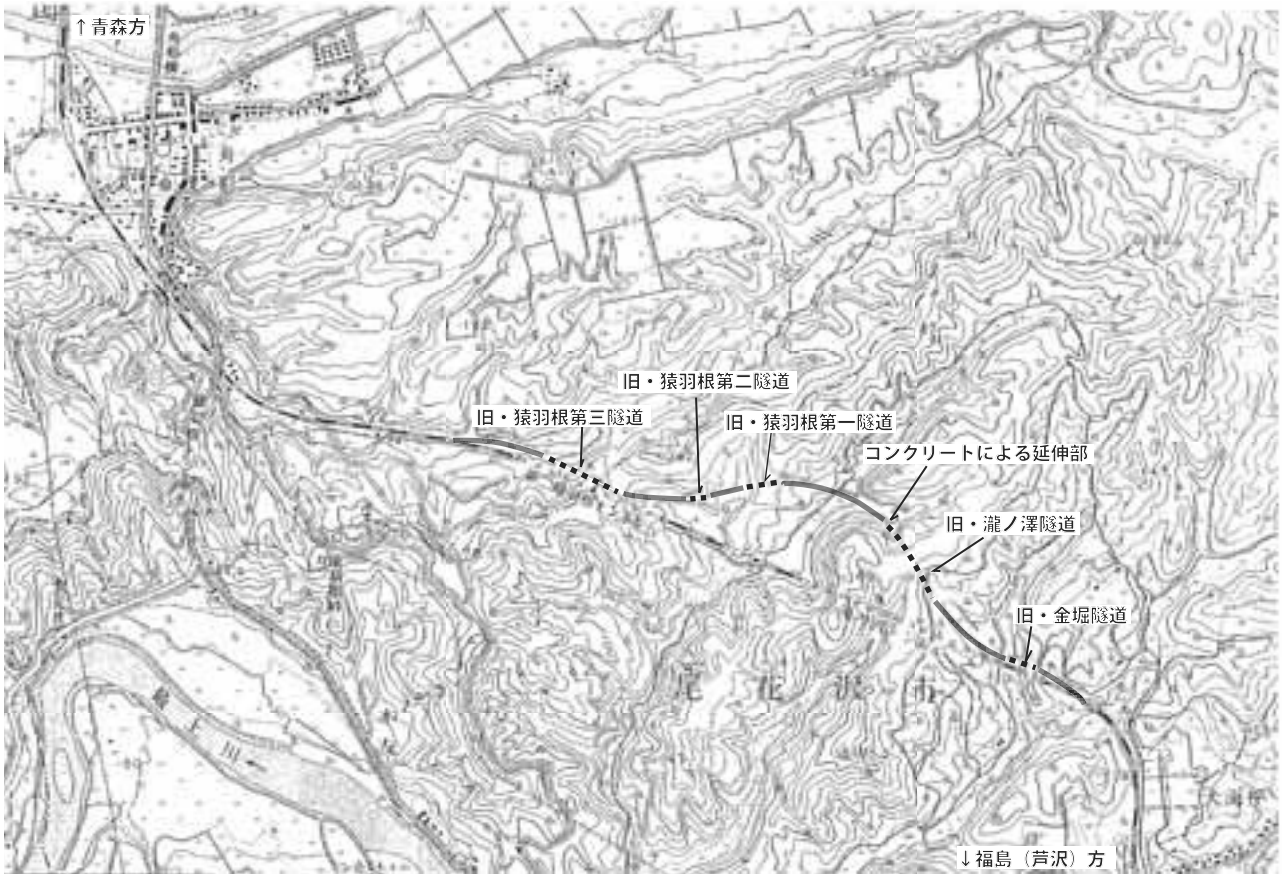
（2d）猿羽根第二隧道

福島起点 85 哩 74 鎖 1 節（約 138.3km）、猿羽根第一隧道の青森方坑口から約 110 m西方に位置する。開業時の長さは 174.901 呎（約 53.3m）。坑門は福島方・青森方とも煉瓦製で壁柱・帯石・笠石を有するが笠石部の歯飾りは存在しない。内部はアーチ・側壁とも煉瓦製で前者は長手積み、後者がオランダ積みであるがそれぞれ後に部分的にコンクリートで補修されている。青森方坑口から約 20 メートルの長さでコンクリート製の落石防護壁が 1964 ～ 65（昭和 39 ～昭和 40）年[7] に設けられている（写真図版 7）が隧道自体の長さは廃棄時まで変わらなかったものと思われる。

（2e）猿羽根第三隧道

福島起点 86 哩 7 鎖 61 節（約 138.5km）、猿羽根第二隧道の青森方坑口から約 200 m西方の当区間で最も青森（舟形）方に位置する。開業時の長さは 864.996 呎（約 263.7m）で、これは廃棄時まで変わらなかったものと思われる。坑門は福島方・青森方とも煉瓦製で壁柱・帯石・笠石を有し、笠石部には歯飾りが見られる。内部はアーチ・側壁とも煉瓦製で前者は長手積み、後者がオランダ積みであるがそれぞれ後に部分的にコンクリートで補修されている。福島方の坑門（写真図版 8）周辺は湧水が多いほか、構造物自体の遺存状況も他の遺構に比べると良くない。

これら芦沢～舟形間の 5 隧道は 1975 年 9 月 17 日、南側に建設された複線の新線開業に伴い廃棄されてい



第 3 図　金堀隧道～猿羽根第三隧道位置図（1:25,000 地形図「舟形」（国土地理院　昭 60・6・30）に基づいて作成）

写真図版２　金堀隧道　青森方坑門（2002 年 5 月）

写真図版３　瀧ノ澤隧道　青森方坑門延伸部（2002 年 5 月）

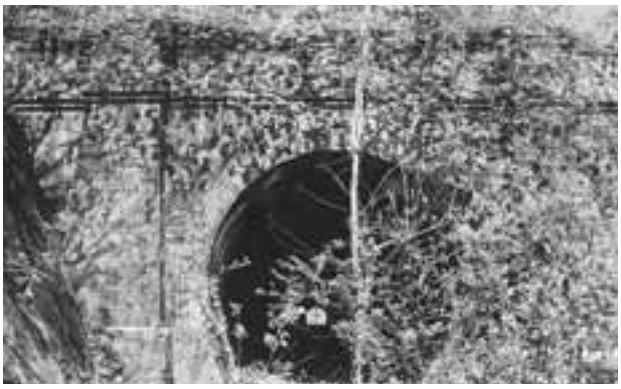
写真図版４　瀧ノ澤隧道　福島方坑門翼壁部（2002 年 5 月）

写真図版５　猿羽根第一隧道　福島方坑門（2002 年 5 月）

写真図版６　猿羽根第一隧道　スノーシェード骨組（2002 年 5 月）

写真図版７　猿羽根第二隧道　青森方坑門（2002 年 5 月）

写真図版８　猿羽根第三隧道　福島方坑門（2002 年 5 月）



写真図版９　權現山隧道　福島方坑門（2002 年 4 月）

る。

（3）權現山隧道（第4図）

新町（現在の駅名は「真室川」）～釜淵間（最上郡真室川町）の福島起点106哩53鎖13節（約171.6km）に位置する。やや東側を並行する道路（現・県道35号線）はこの区間にトンネルがなく切通しで対応しているが、地形図を見ると鉄道はやや西側を迂回し隧道が長くならないような位置を選んで建設されていることが容易に理解できる。

本隧道は開業時の長さ416呎（約126.8m）。前後に雪崩・落石除け等が設けられていた痕跡は確認できず、1975年10月13日に新線に切り替えられるまで長さは変わらなかったものと思われる。

坑門は福島（真室川）方・青森（釜淵）方とも深い藪に覆われているものの比較的良好な状態で残存している。煉瓦製で壁柱・帯石・笠石を有するが笠石部の歯飾りは存在しない（写真図版9）。内部はアーチ・側壁とも煉瓦製で前者は長手積み、後者はオランダ積みであるがアーチ部を中心に後に広い範囲がコンクリートで補修されている。

（4）第一及位隧道・第二及位隧道　（第5図）

以上の2隧道は大滝～及位（のぞき）間（最上郡真室川町）に位置する。この区間でもほぼ並行する道路（現・県道35号線）にはトンネルは存在せず、線路はその道路よりもやや西～北西寄りの山腹を走っている。

（4a）第一及位隧道

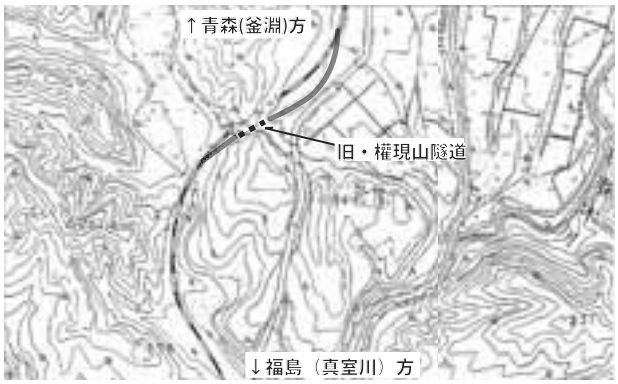
福島起点113哩77鎖86節（約183.4km）に位置する。開業時の全長は544.5呎（約166m）で、前後の状況から廃棄時まで変化しなかったものと推測する。坑門は福島（大滝）方・青森（及位）方とも石積みである。壁柱・帯石・笠石を有し、アーチ部の仕上げには要石を持つ。また迫石は外弧を丸く仕上げた石が用いられているが、福島方坑門は後に部分的にコンクリートで補修された箇所が目立つ（写真図版10）。内部はアーチが煉瓦製で長手積み、側壁は坑口付近（両側とも）に石積みが用いられているほかは煉瓦製でオランダ積みであるが、アーチ部は後にコンクリートで補修された部分も多い。

（4b）第二及位隧道

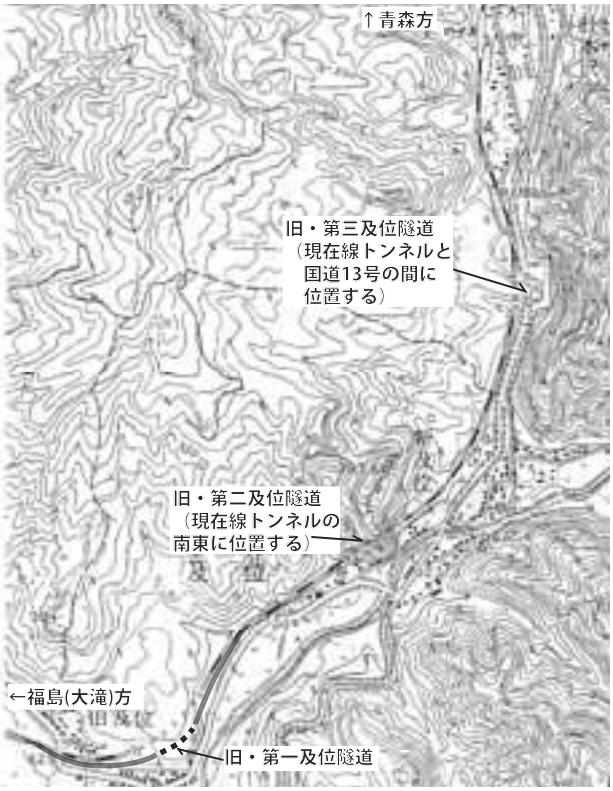
福島起点114哩43鎖61節（約184.3km）、第一及位隧道の青森方坑口から約700m北東に位置する。開業時の全長は640呎（約195.1m）。青森方坑門に隣接してスノーシェッドが設けられていた。坑門は基本的には石積みだが福島方坑門の表面は後に全般的にコンクリートで補修されている。アーチ部分の仕上げは煉瓦巻きだが要石を有し、その部分のみ石製である。（写真図版11）

内部はアーチが煉瓦製で長手積み、側壁は石積みで、後にアーチにはかなり広い範囲で補修のためコンクリートが塗られている。

第一及位隧道・第二及位隧道とも1975年10月13日に交流電化に備えてやや北西側に新たに建設されたト



第4図　權現山隧道位置図
（1:25,000地形図「羽前金山」（国土地理院　平2・8・1）に基づいて作成）



第5図　第一及位隧道～第三及位隧道位置図
（1:25,000地形図「及位」（国土地理院　平2・12・1）に基づいて作成）

ンネルに置き換えられ、廃棄されている。

（5）第三及位隧道　（第5図）

大滝～及位間（最上郡真室川町）の福島起点115哩17鎖1節（約185.4km）に位置する。並行する国道13号線にもほぼ同一の位置でトンネル（「及位隧道」）が設けられているが、鉄道は国道の西側の山腹を走っている。

開業時の全長は244呎（約74.4 m）。これは廃棄時まで変化していなかったものと推測される。坑門は石積みで壁柱を持ちアーチ部分仕上げは煉瓦巻きだが要石を有し、その部分は石製と思われる。福島（大滝）方・青森（及位）方とも開口部が土盛りによって大きく塞がれており詳細は不明な点が多いが、第二及位隧道と同様の構造を持っていたと思われる（写真図版12）。また僅かに残存した開口部の奥にはアーチ部分内面を支えるように設置された金属製の枠状構造物も確認された。本隧道は変状のため電化工事を待たず1962（昭和37）年11月2日に廃棄され、やや西側に設置された新トンネルに移行している。

註

3)　『奥羽鐵道建設概要』P.20
　以下、本稿でとりあげた旧隧道の福島起点の位置と長さはすべて同書に基づく。なお、単位のメートル法への換算は1哩＝約1,609メートル・1鎖＝約20.17メートル・1節＝約0.202メートル・1呎＝約0.3048メートルとして筆者が行なったものである。

4)　『奥羽本線福島・米沢間概史』P.141

5)　『鉄道廃線跡を歩くⅧ』」.219（「全国線路変更区間一覧」）
　以下、本稿に記した新線への切替時期はすべて同書による。なお、この1975年10月13日が、奥羽本線羽前千歳～秋田間電化工事の竣工日である。電化後の営業運転開始は同年11月25日からであった。（『奥羽本線福島・米沢間概史』P.141）

6)　『奥羽鐵道建設概要』P.12
　なお、ここでの「坪」は面積ではなく体積の単位（一坪＝六尺立方。約6.01立方メートル）と思われる。

7)　2002年5月、現地で確認

写真図版10　第一及位隧道　福島方坑門（2002年4月）

写真図版11　第二及位隧道　福島方坑門（2001年10月）

写真図版12　第三及位隧道　青森方坑門（2001年10月）

3　考察

一般に明治時代に建造された鉄道トンネルは煉瓦製あるいは石製のものが多く、その意匠・構造はバラエティに溢れている。以下に、本項でとりあげた旧隧道坑門の意匠・構造で気づいた点をいくつか挙げてみたい。

（1）芦沢～舟形間旧隧道坑門意匠について

当区間の旧隧道5基の坑門はいずれも煉瓦積みで壁柱・笠石・帯石を備えており基本的な外観・意匠は類似しているが、笠石・帯石の意匠の違いから次の3つのパターンに分類できる。

(A) 笠石部に歯飾りを有する。帯石は二段。
（金堀・猿羽根第三、写真図版13・14）

(B) 笠石部は二段で歯飾りなし。帯石は三段。
（猿羽根第一・猿羽根第二、写真図版15）

(C)　笠石部は三段で歯飾りなし。帯石は三段。
（瀧ノ澤、写真図版16）

(A) の金堀・猿羽根第三隧道は当区間の両端に位置する。その位置関係により、他の3基とは異なり歯飾りつきの笠石部を持つ坑門が与えられた可能性が考えられる。（ある特定区間の両端に位置する隧道坑門に特徴ある意匠が与えられた類例として、信越本線越後広田～長

写真図版 13　金堀隧道　笠石部歯飾り（分類（A））

写真図版 14　猿羽根第三隧道　笠石部歯飾り（分類（A））

写真図版 15　猿羽根第一隧道　笠石・帯石部（分類（B））

写真図版 16　瀧ノ澤隧道　笠石・帯石部（分類（C））

鳥～塚山～越後岩塚間（1898（明治 31）年開業、新潟県）の旧線隧道 4 基のうち、最も越後広田寄りの鼻田トンネルと最も越後岩塚寄りの塚山第 3 号トンネルの坑門が「破風型」の構造を持つことが報告されている。[8)]（B）（C）の外見上の差異は（A）とのそれよりも大きなものではないが、当区間の最長隧道である瀧ノ澤隧道と他の隧道との「差別化」を図るために前者にのみ、当区間で唯一の意匠が与えられているのかも知れない。

（2）權現山隧道坑門アーチ部分について

アーチ状の積み上げは隧道・橋梁を問わず煉瓦構造物では一般的に見られる形態だが、隧道の場合は筆者が実見したものも文献等で見たものも大半は 4 枚巻あるいは 5 枚巻である。（本稿でとりあげたものでは瀧ノ澤・猿羽根第一・猿羽根第二・猿羽根第三が 4 枚巻、今宿・金堀・第二及位が 5 枚巻。）

その中で、權現山隧道についてはアーチ部の煉瓦が 6 枚巻である（写真図版 17）。この部分の煉瓦巻の枚数については石製の要石や迫石を設置することなどに比べて装飾的な意味は薄く、むしろ隧道内の地質等を考慮しての強度を保つための構造ではないかと思われる[9)]が外見上やや特異な印象を与えることも事実である。

（3）第一及位隧道の迫石について

当隧道の坑門は石積みによるが、迫石の中で要石の左右両隣に位置する各 1 個のみが他の石より少し天地方向に長いものが使用されており、外見上のアクセントとなっている（写真図版 18）。

本稿でとりあげた旧隧道中には比較しうる構造の坑門を持つものはないが、同じく奥羽「南線」に建設された赤岩～板谷間（福島県福島市）に位置する第十二号（第

写真図版 17　權現山隧道　坑門アーチ部 6 枚巻

写真図版 18　第一及位隧道　坑門要石周辺

写真図版 19　第十二号隧道（赤岩～板谷間）坑門要石周辺

一天狗山）隧道と第十四号（戸澤）隧道（ともに 1899 年開業・1964 年廃棄）は迫石部に同様の特徴を持つ（写真図版 19）ことを筆者が実見の上確認している。

註

8)　『鉄道廃線跡を歩くⅧ』PP.121 ～ 123

9)　現・JR 東日本石巻線鳥谷坂隧道（1912 年 7 月竣工）建設に関わる申請書には、アーチ部分は地質が岩石時には煉瓦 3 枚巻、軟弱時には 4 枚または 5 枚巻にする、という一文があったということである。（『宮城県の近代化遺産』P.51）

　なお、權現山隧道の地質は「軟岩及粘板岩」であるが、他隧道の地質で同様かそれ以上に地質が弱いことを窺わせる記述も多く（『奥羽鐵道建設概要』P.20）、本隧道だけが煉瓦 6 枚巻アーチになった理由は必ずしも判然としない。

4　まとめと今後の課題

本稿でとりあげた旧隧道はいずれも開業からは約 100 年、大半が廃棄から約 30 年経過したものである。開業時以降に坑門部が延伸されたものあるいは内部で補修が行なわれたものがほとんどであるが、基本的には開業時の外観に大きな変化がないと思われる形で廃棄時の状態が保たれている。しかし内部においてアーチに用いられていた煉瓦や、後の補修時に用いられたコンクリートの剥落が目立つものも少なくない。また一部の旧隧道は廃棄後の人為的な理由によって坑門部の全体または一部が埋められている状態であった。

坑門の意匠については特定区間（芦沢～舟形）で隧道の所在位置によって複数の意匠が意図的に使い分けられていると推測されるものや、同じ奥羽本線（「南線」）の他区間に位置する旧隧道のそれと共通するものがあったが、詳細については旧隧道の調査等に基づくさらなる検討を要するところである。また全般的に煉瓦等の部材の規格・製造時期・場所などの調査のほか、より建築技術的な観点からの考察も必要であると思われる。

山形県内の鉄道路線には奥羽本線に限らず様々な路線で、建造時期が開業と同時期かそれに近い時期にまで遡ると思われる構造物が点在しておりその中には“現役”の設備として用いられているものも決して少なくない。これらまぎれもなく本県の「近代化」を担いながら市街地の建造物ほど一般的な注目を浴びる機会が少なく、また改修や改築で消える可能性の高い構造物について、その所在・現状の確認や構造等についての調査を継続していきたいと考えている。

引用文献等

『奥羽鐵道建設概要』（鉄道作業局建設部　1905 年）
小野田滋「鉄道構造物の見方・調べ方」（『鉄道廃線跡を歩くⅡ』JTB　1996 年）
進藤義朗『奥羽本線福島・米沢間概史』　（プレス・アイゼンバーン　2001 年）
木下晃博「全国線路変更区間一覧」
　同　「信越本線旧線」（『鉄道廃線跡を歩くⅧ』JTB　2001 年）
『宮城県の近代化遺産―宮城県近代化遺産総合調査報告書―』
（宮城県文化財調査報告書第 190 集　宮城県教育委員会 2002 年）

＊インターネット上のホームページ＊
「Nicht　eilen」（作者「TILL」（本稿筆者のハンドルネーム））
　http://homepage2.nifty.com/tilleulenspiegel/

なお、三浦裕士氏からは文献の紹介をはじめ格別な指導をいただいた。記して感謝申しあげる。

考古遺物を活用した学校教育への協力－出前授業を中心に－

佐竹　桂一

1　はじめに

全国では毎年約１万件近くの膨大な量の発掘調査がなされている。新聞やテレビ等のマスコミ報道も頻繁に繰り返され、ニュースソースの中で文化財報道は一定の位置を占めるに今日は至った。それをきっかけに、埋蔵文化財を守っていこうとする一般の人々を中心とする保護運動が各地で広がりを見せている現象が出てきた。

我々考古学に携わるものが、広く一般の人々に埋蔵文化財の大切さを伝える機会として、これまでは調査説明会や遺跡報告会で成果を公表することを常套としてきた。こうした動きは今後も啓蒙活動の主流として行われていくことは間違いなく、またその効果も甚大なものがあると思われる。

しかしながら、説明会に参加する関心層は、中高年を中心とした世代が圧倒的で、若年世代まで浸透しているとはお世辞にも言い難い状況である。もっと広い世代に訴え､関心層を広げていく努力が今我々に問われている。

各地の埋文センターや調査機関がそうした問いに答えるべく始まったのが、出張講座や体験学習・イベントの実施である（中村 2001）。また、学校における「総合的な学習の時間」を有効利用する試みも各地で始まっている（吉久 2001）。

平成９年には、文化庁次長通知「出土品の取り扱いについて」により埋文調査機関は積極的に学校教育への協力に取り組むよう指針が示されている[1)]。

山形県埋蔵文化財センターにおいても、県民を対象とした「縄文フェスティバル」の体験イベントを２年にわたり実施したのをはじめ、「出前授業」と銘打って学校教育への協力を開始し、これまで見過ごされがちだった子供たちへの啓蒙活動をスタートさせたところである。

本稿は、山形県埋蔵文化財センターにおける出前授業の構造とその方法・実践を紹介するものである。埋蔵文化財保護の啓蒙普及に資する活動として念頭においていただければ幸いである。

2　出前授業の事業化

出前授業は、本センターの啓蒙普及活動の中の新しい事業として始まった。

中心セクションとしては研究課がその役割を担っている。事業化にあたりセンター内では調査課・研究課兼務の職員が中心となり準備をすすめた。必要に応じて全員が協力する体制を確認し、教材開発は報告書作成の合間を縫って行い、多くの職員を協力を得ることができた。前述した体験イベント「縄文フェスティバル」の準備と平行していたことが幸いしていたといえよう。

学校に対しては、受付時に、授業は学校教師が主導であることを確認し、センターへの丸投げ意識をなくすことを心がけてきた。また、センターを活用しやすいように職員派遣の扱いを工夫した結果、前年度３件だった依頼が今年度 18 件に増加することとなった。

3　出前授業の構造

出前授業は４つの柱で構成している。この４つは相互に絡み合いながら、授業を構成するもので、対象学校・学年・子供たちの状況に応じて絶えず変化をつづけるものであると考える。事実、４つの柱の比重は授業によって変化し、多様な授業パターンを生み出す要素となっている。

＜４つの柱＞

ｉ　地域素材

地域素材は、社会科や生活科等において重要視されるところで、学校現場では教材開発に特に熱心な分野である。埋蔵文化財はその点で、遺跡の存在そのものが地域素材であり有効活用が期待できる。

身近にどんな遺跡があるのかを調べたり、学校の近くで出土した遺物を目の当たりにすることで、自分たちのアイデンティティーを再確認する場ができるのである。したがって、出前授業では学校の周囲で調査された遺跡を調べ、そこから出土した遺物を披露することを重要視

している。

ⅱ　実物観察

埋文センターの強みは、出土品を大量に保管し、直に手に触れる環境を作りやすいことである。展示を前提としている博物館にはない、機動力を発揮して学習者の手元に実物を届けることができる点が大きな利点である。

子供たちは教材レプリカに触れたことはあっても、本物の土器に触れる経験はほとんどない。本物をどんどん触らせ、その迫力や質感を感じることで感性を刺激することをねらいとするものである。

ⅲ　体験活動

体験活動は、出土資料をもとに道具を復元し、それを活用する方針をとっている。こうした活動は全国各地で行われており、そのノウハウは他県での活動に学ぶべき点が多く、参考にさせていただいている[2)]。

学校では、体験活動がもっとも子供たちの人気が高く本県における出前授業の主流となっている。

子供たちは遊びの延長として体験活動を好むが、授業を仕組む側としては、子供たちの行動を予測しながら、発問を吟味し話材を準備しながら緻密な効果を狙っている。

また、体験活動はその性格から大きく二つの領域に区分することができる。

体験活動の二つの領域

＜生活体験＞・・・いにしえの人々の暮らしぶりを出土遺物や遺構情報を用いて復元し、その一端に触れる。

・火起こし
・矢とばし（バーチャルハンティング）
・古代米試食
・石器カッター使用
・縄文風衣装試着
・木の実割り

＜ものづくり体験＞・・・出土遺物から当時どういうものがつくられていたか、先人のものづくりの知恵を考える。

・勾玉つくり
・アンギン編み
・土器づくり

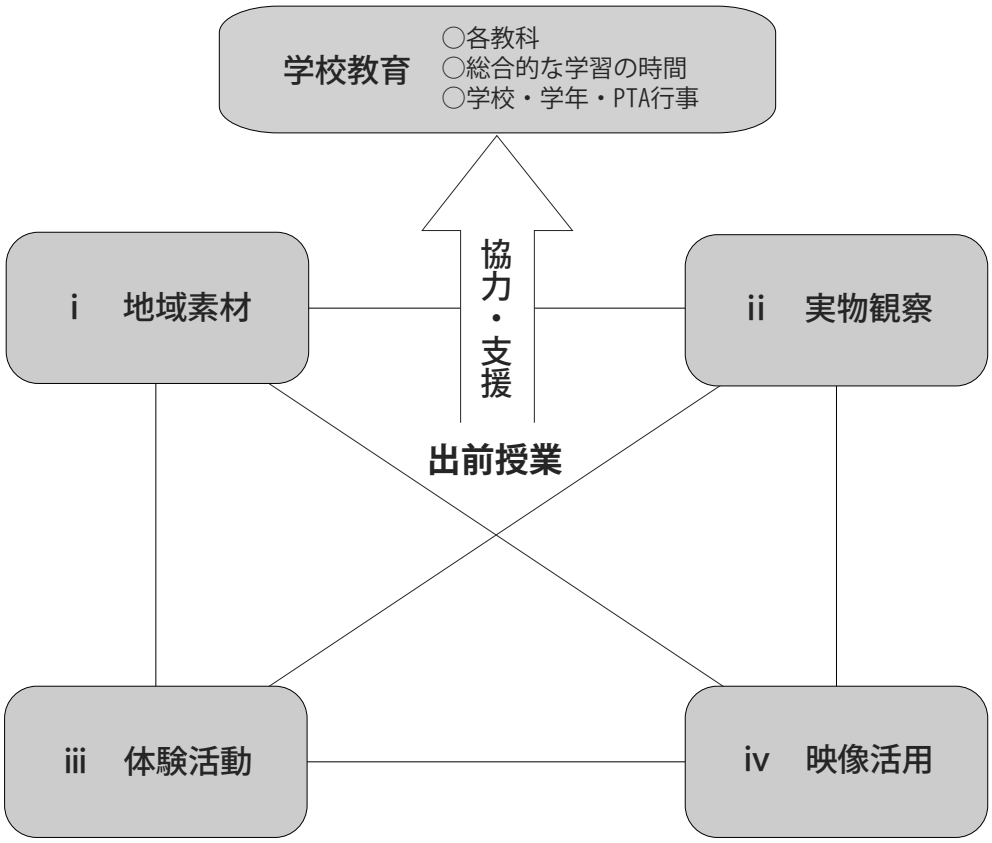


図１　出前授業の構造概念図

・縄文食（縄文風クッキー）づくり

食の体験については、復元が難しい部分があり[3)]、当時あった食材を用いてアレンジを加えたものとなる。それでも、現代食品に慣れきってしまった子供たちにとっては新鮮な驚きがある。

ⅳ　映像活用

パソコンを使った映像表現による資料提示である。具体的には、プレゼンテーションソフトを用いてプロジェクターで資料を投影し、写真上で建物を復元したり、アニメーション機能で子供たちの知的好奇心を喚起しようという方法である。教室に運べない重要遺物や遺構は画像として紹介することでイメージがつかみやすくなるという利点がある。

4　出前授業における考古資料の活用

調査研究を業務の中心とする埋文センターが、学校へ出前講座を行う意義として特筆できることは、出土した考古遺物を活用して授業展開できることである。また、検出された遺構や遺跡の写真情報の活用も考古遺物と同様の意義を持つといえる。ここでは、遺跡から得られた考古学的データを授業の中でいかに活用するかを、いくつかにカテゴライズし紹介していく。

A　周辺地域から出土した考古資料をいかに活用するか

1　出土品の活用

出土した遺物は多くの人々の目に触れるため、博物

プレゼンテーションソフトを利用した授業の様子

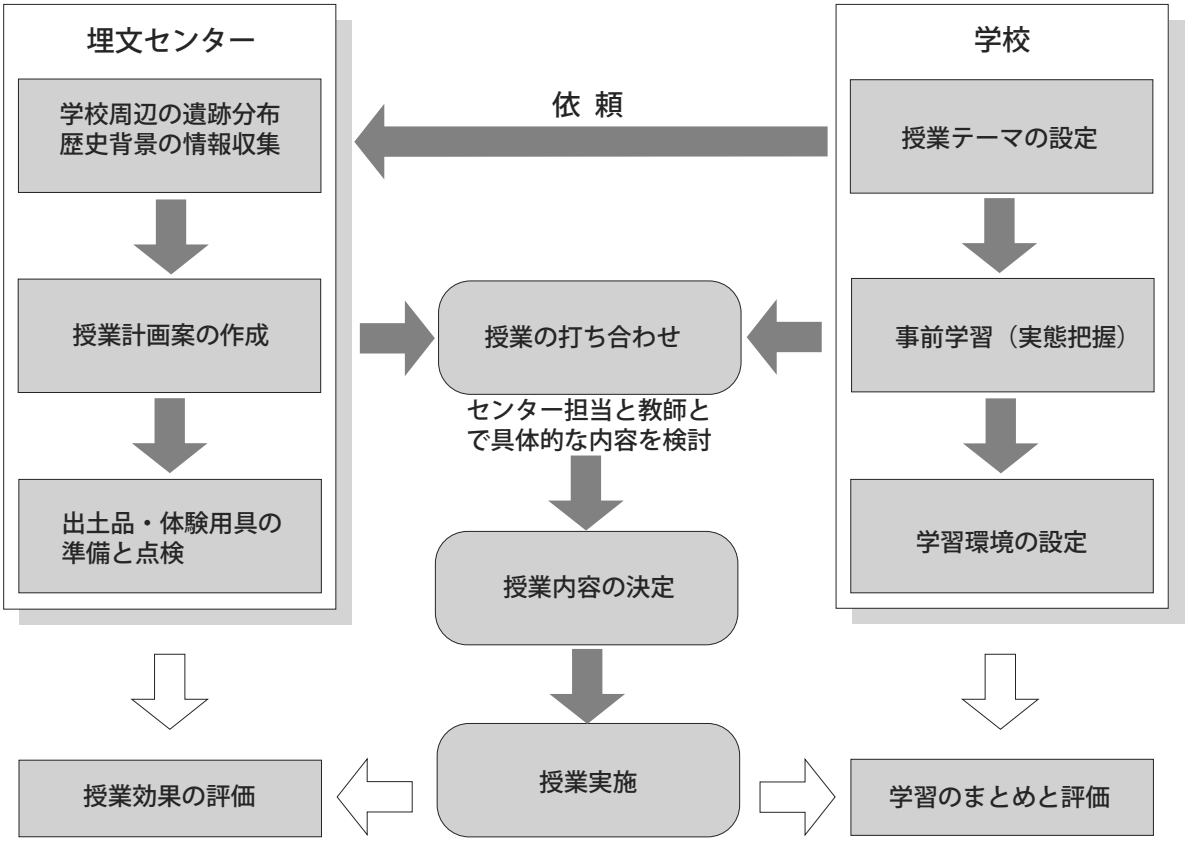


図３　出前授業実施の流れ

館では通常ガラスケースに入り、厳重な管理の下に置かれている。展示の常道ともいえるわけであるが、教育への活用という視点ではどうしても脆弱と言わざるを得ない。その点、埋文センターは組織としての性格上、研究対象として遺物に触れる場面が多く、教育的活用がし易いと考えられる。また、ほとんど日の目を見ることのない眠ったままの破片資料はもっと活用されてしかるべきと思われる。当センターでは破片資料も完形品も可能な限り直に手にとってもらえるような方針を貫いた。

2　学校に保管している遺物の活用

小学校等で意外とあるケースが、周辺遺跡から出土した土器や石器が学校に保管されていることである。これらは、地域住民が、学校の先生に聞けばわかるかもしれないといった期待から持ってきたものや、学校で活用してほしいといった希望で持ち込まれたケースがほとんどである。

しかしながら、学校の教師では、それらを十分に理解することができず、整理せずに埃をかぶってきたものが意外と多いのである。

センター職員がそうした遺物を実見し、整理方法を教え、授業に生かしていくこと[4]は、大変有意義な活動となる。

B　遺跡地図をいかに活用するか

1　周囲に存在する遺跡を知る

学校の近くに遺跡はないか、出前授業の前には必ず、遺跡地図を使って確認し、学区にある遺跡の数や分布を地図にまとめ、紹介することを取り入れてきた。こうした取り組みによって、子供たちは遺跡を身近なものとしてとらえることができるのである。中には、学校敷地内

地域素材（実物）を活用した土器づくり体験

石器カッターを使った生活体験

が遺跡であったり、自分の家の隣が遺跡であることを知らずに驚いたケースがあり、新しい発見があるといえる。

C　考古遺物の教材化

考古資料を教材化する試みは各地域で熱心に行われており（能登・原 1998）、後発の我々は学ぶべき点が多い。本センターではそうした各地での成果を学び、これまで教材として採り入れてきた。我々でアレンジを加えたものも含めて幾つか例をあげてみる。

1　石器カッターの活用

「石器は本当に切れるのか。」

子供の疑問は実に素朴でありながら、本質に迫る疑問を私たちに投げかける。実物の石器で実験するわけにはいかないことから、頁岩・黒曜石を割って作り出した薄片に柄を付け石器カッターとして教材化した[2]。素材は本物の石器と同じものだけに、その切れ味を試すには絶好である。切るものは , 野菜や果物から画用紙まで、実に多くのものが切れるということが体験できる。中には自分の手を切ってしまう子もいるが、それもまた生きた体験といえるのである。

2　復元弓矢の活用

弓矢の使用は子供達にとって最も楽しい体験活動の一つである。様々な種類の木を素材とした弓を作成し、しなり具合や矢の飛び具合を確認したりすることは、現代社会の生活ではなかなかできない体験であるし、最初から的にまともに当たる子供はほとんどいない。

「どうやったら遠くの的に正確に当てることができるのか。」

こうした発問を体験活動の中で投げかけることで教育効果が高まると考えられる。子供たちは、弦のテンショ

ンや引き具合、打つ角度など色々な条件を自分で考え、的に向かうのである。

３　縄文風衣装の製作と復元上必要な理解

縄文の人々はどんな服装をしていたのか、私たちは出土遺物からその断片を知りうることができる。各地で発見されている編布や土偶のデザインがそのヒントを与えてくれる。教材化にあたっては、これまで分かっていることを踏まえて、衣装製作を行っている。素材については手近な麻袋を使用し、毛糸で絵柄を刺繍した。絵柄は土偶の胴部デザインを意匠としている。色については赤・黒を基調としたが、藍、緑など確認例のないものも存在の可能性を否定せずに、子供達への学習の広がりや意欲づけのために使用した。

また、子供たちに衣装を着用させる際には、縄文の衣服そのものは出土例はなく、様々なデータの断片を集めて復元していることを理解させることは忘れてはならない。

Ｄ　考古遺物をどう体験活動につなげるか

１　ものづくり体験と実物展示

ものをつくるという体験は、時間と労力がかかる割には、その教育的効果を疑問視する風潮もある。当センターでは現在、勾玉つくり・アンギン編み・土器づくりを体験メニューとして採りあげているが、これらはつくることに主眼を置いているのではなく、つくることによって、いにしえの人々の生活や精神を考えたり、つくるための工夫を知ることに主眼を置いている。

ともすれば、作って終わり・楽しかった、で済ませることができる部分だけに、何に気づき・感じるかを大切にする必要がある。そのためには、必ず本物を観察し製作に生かすことを、授業の中に取り入れていかなければならない。

東北芸工大　北野助教授（中央）を迎えての土器焼成実験及び教材研究状況（奥　縄文焼成、手前　弥生焼成）

美術・工芸等の分野では、自由な発想やデザインは子供の個性伸長上好ましくとらえられるが、ものづくり体験においては、扱い方に注意を要する部分といえる。なぜなら、勾玉・アンギン・土器、それぞれの中に固有のデザインや製作技法が存在し、その文化的作法に基づいて製作されていることは、整理作業で遺物に向かった時、考古学に携わる者なら誰しも気づくところである。

ものづくり体験の目指すところは、いにしえの作法（文化としての規制）を学ぶことにあり、そこに自由で創造的なデザインや発想は、介在してはならないと考える。

実物観察風景

5　授業実践

出前授業では、いつも同じ授業はないと考えて、学校の求めるものに応じた内容を準備している。なぜなら、学校によって、必ず授業のねらいが変わってくるはずであり、それに答えようとすると埋文センターとしての準備やカリキュラムも、それ相応のものを準備する必要が出てくるからである。18 件の依頼の分野は以下の状況である。

表１　出前授業依頼分野

中学校	社会科	3
	総合的な学習	1
	行事	1
小学校	社会科	5
	総合的な学習	7
	行事	1

表１中からは、中学校では出前授業の利用を教科の中

矢とばし　生活体験風景

での１コマと位置づける傾向にあり、小学校では教科と総合的な学習と両面で活用して行こうとする傾向がうかがえる。

以下、主な実践としての授業内容を紹介する。

実践例１　中学校社会科「君も考古学者」

＜授業内容＞

縄文土器と弥生土器の実物に触れ・観察し、その違いを明らかにして、両時代の特徴をとらえることから、縄文から弥生への歴史の流れを理解する計画を組んだ。観察のポイントを学習シートにまとめることで両時代の土器の形、文様の特徴を理解することができた。本実践では完形と破片の両方の遺物を利用した。更に、実際に縄文原体を作り粘土に施文し、縄文土器の由来と土器のつくり方を考えた。

実践例２　中学校総合「地域に眠る文化財」

＜授業内容＞

自分たちの住む市で近年発掘された縄文遺跡の遺物を見、触れることで遺跡が身近なものであることを理解した。学校敷地が遺跡であることを知り、生徒は驚いていた。文化財がかけがえのない財産であることを考えた。

その後、興味のある題材を自分で調べ、新聞として発行し授業のまとめを行っている。

実践例４　小学校社会科　「大昔のくらしをさぐろう」

＜授業内容＞

縄文時代のいろいろな生活場面を体験し、理解度を高めた。小学校の多くの学校で求めてきたパターンの授業カリキュラムである。学校によって単元の導入部分として採り入れたり、学習の仕上げや確認として体験活動を行ったりと多種多様であった。本質的には体験活動で子供たちの理解度を上げることをねらいとしていた。

実践例５　小学校総合「縄文人の生活　再発見」

＜授業内容＞

学校の隣にある縄文遺跡をきっかけに地域の歴史や自然を学習し、その良さを確認した。半年にわたるカリキュラムを組み[6)]、センターでは後半で体験活動による支援を行った。まとめの活動としておこなったディベートでは、ゲストティーチャーとして子供たちの疑問に答え、子供たちは地域のすばらしさを確認した。

実践例６　中学校選択社会「古代米に挑戦！」

＜授業内容＞

学区内に存在する奈良・平安時代の遺跡をきっかけに古代の学習を行う。中学校の教科書では得てして律令制度とその政治的中心地の学習が主体になるところに、地元の遺跡をきっかけに、庶民のくらしと貴族の暮らしを対比させ特徴を浮き彫りにしていった。古代米とされる赤米と黒米を準備し、白米と三つの試食を通して、当時の生活の一端に触れた。

実践例７　小学校総合「縄文土器づくり」

＜授業内容＞

１ヶ月半にわたり、縄文土器を自分たちでつくる活動を行う。素地を練り上げ、成形、乾燥、焼成まですべての工程をおこなった。成形前に作りたい縄文土器の形を図書館で調べ、自分で描き、縄文土器のルールに従って製作を行った。燃焼材の準備も子供たちが自分達の手で地域から集めてきて行った。

尚、上記のものも含めた今年度の実践は、次ページの表２に一覧としてまとめてみた[7)]ので参照していただきたい。

6　おわりに

今後の課題と展望

山形県埋蔵文化財センターでの学校教育への協力事業

表２　平成 14 年度　出前授業一覧

	期日	学校名	対象学年	対象児童数	教科	テーマ	時間	体験項目								派遣職員数	備考
								弓	服	石器	火起し	勾玉	アンギン	クッキー	土器製作		
1	4 月 23 日	大石田町立亀井田小学校	3 ～ 6	34	総合的な学習	大昔の暮らしをさぐろう	5・6 校時	-	○	○	○	-	-	-	-	4	報道取材　ＳＡＹ・ＮＨＫ・ＴＵＹ・山新・毎日・読売・河北
2	4 月 25 日	山形市立蔵王第二小学校	6	42	社会　歴史	歴史の扉はすぐそばに	3・4 校時	○	○	○	○	-	-	-	-	3	報道取材　朝日　西ノ前土偶レプリカ持参
3	4 月 30 日	山形市立第六小学校	6	100	社会　歴史	大昔の暮らしをさぐろう	1・2 校時	○	○	○	○	-	-	-	-	4	
4	5 月 8 日	山形市立桜田小学校	6	116	社会　歴史	さあ開こう歴史の扉を	2・3 校時	○	○	○	○	-	-	-	-	6	
5	5 月 9 日	山形市立鈴川小学校	6	145	社会　歴史	古代のくらしのなぞをさぐろう	5・6 校時	○	○	○	○	-	-	-	-	6	
6	5 月 14 日	新庄市立新庄中学校	1	139	総合的な学習	地域に眠る文化財	5 校時	-	○	○	-	-	-	-	-	2	総合的学習の材料の提供
7	5 月 21 日	上山市立東小学校	2 3 6	7	総合的な学習	全校ふるさと学習「発見いっぱいコース」	1 ～ 3 校時	-	-	-	-	-	-	-	○	4	学年オープンの総合的学習（土器製作）
8	5 月 30 日	天童市立第四中学校	1	156	社会　歴史	縄文時代と弥生時代の暮らし	3・4 校時および 5・6 校時	○	○	○	○	-	-	-	-	6	2 クラスごとに 2 回の授業を行う
9	6 月 6 日	山形市立西山形小学校	6	22	社会　歴史	とかみの里の歴史を探ろう	2・3 校時	○	○	○	○	-	-	-	-	6	
10	6 月 11 日	山形市立千歳小学校	6	76	総合的な学習	ものづくり学習　導入部分	5・6 校時	○	○	○	-	-	-	-	-	6	
11	6 月 20・21 日	上山市立北中学校	1	150	社会　歴史	きみも考古学者ー土器から歴史を探る	3 校時および 4 校時	土器の観察を中心に授業を展開。2 日にわたり、各 1 時限筒行う。計 4 コマ								4	計 4 クラス個別授業
12	6 月 29 日	山形市立大曽根小学校	6	15	学年親子行事	大曽根の歴史を知ろう	午前 9 時～夕方	地域の歴史の勉強、体育館での勾玉づくり、石器による野菜切、土器による夕食づくり								1	ＰＴＡ親子行事
13	9 月 26 日	寒河江市立醍醐小学校	6	15	総合的な学習	縄文人の生活　再発見	3・4 校時	○	○	-	○	○	○	-	-	3	報道取材　ＳＡＹ「きいて委員会」
14	10 月 3 日	鶴岡市立湯野浜小学校	6	36	総合的な学習	縄文人の知恵と工夫（仮題）	3・4 校時	○	○	○	○	-	-	-	-	4	
15	10 月 25 日	天童市立第四中学校	オープン	35	文化祭行事	縄文クッキーづくり	9 時 30 分～ 12 時	-	-	-	-	-	-	○	-	4	
16	10 月 31 日 11 月 7 日 11 月 25 日	中山町立長崎小学校	5	35	総合的な学習	原始人体験「縄文土器づくり」	9 時 ～ 12 時 30 分	-	-	-	-	-	-	-	○	各 1 ～ 4	
17	11 月 26 日	真室川町立釜渕小学校	5・6	28	総合的な学習	地域の歴史、釜渕遺跡	5・6 校時	-	-	-	-	-	-	○	-	4	釜渕Ｃ遺跡の話とクッキーづくり
18	12 月 9 日	山形市立高楯中学校	1	19	選択社会科	歴史人物事典をつくろう（発展　食について）古代米に挑戦！	3・4 校時	赤米・黒米・白米の試食								5	身近な遺跡と赤米・黒米試食

出前授業　１８校　合計児童数１，１７０名

は、まだ緒についたばかりである。試行錯誤を繰り返しながら、ノウハウを積み上げてきたものであり、まだまだ不十分であることは否めない。授業をしながら多くの解決すべき課題も浮き彫りとなってきたので以下にまとる。

○専門セクションの設置と資料管理

学校への派遣には複数の調査員が派遣されない限り、出前授業は成立しない。研究課及び研究課兼務職員が中心となって出前授業を支えてきたが、今後はその人的配置を組織全体の中でどうやりくりしていくかが大きな問題である。調査員である以上、学校への派遣や準備をしながらでも、遺跡の発掘や整理作業、報告書の執筆をしながらの業務となる。また、授業案の作成や教材開発には多大な労力を必要とし、それらのノウハウを蓄積するには、片手間で行うことはできない。教材としての資料管理も子供たちを対象とした場合には、破損を含め様ざまなケースが予測される（野中 2001）。メンテナンスを含めた専門セクションを組織内に設置し、学校との橋渡しと情報交換を行うことが最も望まれるところである。

○意識改革と人材育成

出前授業では教育職派遣の調査員が主体となって、そこにプロパー職員が専門分野の補完をするという役割分担を組み行ってきた。ほとんどの調査員が一度は授業を体験しているが、一部の担当者を除くと主体となる人材は希薄である。また、報告書作成の妨げとなっているとの考え方も少なからず存在し、必ずしも全体が同じベクトルを向いているわけではない。普及事業の中の重要な位置づけである意識を更に高めていく必要がある。

○他との連携強化

山形県には当センターの他に県立うきたむ風土記の丘考古資料館や県立博物館が埋蔵文化財の普及啓蒙の一役を担っている。市町村の文化財担当部署も同様である。今後はこうした機関と相互に連携しながら教材の開発や資料整備の情報交換を図っていくことが考えられよう。他県の埋文センターとの意見交換や連携も必要になってくる（赤山・小林 2001）。

また、教育分野の研究機関である県教育センターとも指導方法や評価や教育効果についての研究を深めていく必要性を感じている。

最後になりましたが、本稿をまとめるにあたり、協力いただいた実践校の先生方と子供たち、出前授業を一緒に推進してきた長橋至研究主幹、山口博之調査研究員、積極的に加わってくれた職員各位の皆様に感謝の意を表し、末筆とさせていただきます。

※　本稿は平成 14 年 6 月に刊行した「埋文やまがた」第23号に掲載した出前授業の方法と考え方を体系化し、膨らませたものである。

註

1）　平成 9 年 8 月に出された文化庁次長通知「出土品の取り扱いについて」の中で学校教育における活用の充実が求められている。以下この部分を引用する。

　出土品は、こども達が直接、見て、触れながら、地域の歴史や文化を学ぶことができる貴重な資料であるため、これを学校教育における「生きた教材」として、一層積極的に活用すること。

　この場合、地方公共団体においては、出土品の提供や資料の作成・提供、埋蔵文化財担当専門職員による説明等の協力を行うことも必要である。

2）　平成 12 年に行われた石川県埋文での体験イベントでの活動から多くのアイデアをいただいている。石器カッターの教材化は石川埋文の実践にもとづくものである。

3）　縄文クッキーの成分は帯広畜産大の中野益男教授による分析が行われているが、近年科学的に再検証する必要があるとの意見が出されている。

4）　平成 14 年 8 月にセンター内で行った上山市社会科研修会の講座として山口博之調査研究員がまとめた内容を踏まえたものである。

5）　山形県では高畠町押出遺跡から編布が出土している。

6）　寒河江市醍醐小学校 6 年生の実践である。担任の小川尚道教諭の地域の遺跡に対する深い造詣によって綿密なカリキュラムが組まれた。

7）　表の作成は長橋至研究主幹の手によるものを活用した。

引用文献

石井伸明・川島健・野中仁　2001「収蔵資料の学校における活用」『研究紀要』第 16 号　（財）埼玉県埋蔵文化財調査事業団

能登健・原雅信　1998 「教科書の中にある群馬の遺跡 - 教育施設における展示とその映像化について - 」『研究紀要』15　（財）群馬県埋蔵文化財調査事業団

赤山容造・小林大悟　2001 「誰のための発掘か？発掘成果の教育利用推進に向けての試み」『研究紀要』19　（財）群馬県埋蔵文化財調査事業団

中村光司　2001 「埋文センターから教室へのアプローチ - 小学校を対象とした出張講座の実践例 - 」『考古学研究』第 48 巻第 1 号　考古学研究会

吉久正見　2001 「小 6 総合学習『原始時代探検隊』に取り組んで」『考古学研究』第 48 巻第 1 号　考古学研究会

（財）山形県埋蔵文化財センター　2002 『埋文やまがた』第 23 号　（財）山形県埋蔵文化財センター

執　筆　者（2002年12月1日現在）

小林　圭一（こばやし・けいいち）	(財) 山形県埋蔵文化財センター調査第二課
高橋　敏（たかはし・さとし）	(財) 山形県埋蔵文化財センター調査第三課
水戸部　秀樹（みとべ・ひでき）	(財) 山形県埋蔵文化財センター調査第一課
植松　暁彦（うえまつ・あきひこ）	(財) 山形県埋蔵文化財センター調査第三課
山口　博之（やまぐち・ひろゆき）	(財) 山形県埋蔵文化財センター調査第一課
吉田　江美子（よしだ・えみこ）	(財) 山形県埋蔵文化財センター調査第三課
髙桑　弘美（たかくわ・ひろみ）	(財) 山形県埋蔵文化財センター調査第一課
髙桑　登（たかくわ・のぼる）	(財) 山形県埋蔵文化財センター調査第二課
押切　智紀（おしきり・ともき）	(財) 山形県埋蔵文化財センター調査第二課
多田　和広（ただ・かずひろ）	(財) 山形県埋蔵文化財センター調査第二課
西田　明日香（にしだ・あすか）	前 (財) 山形県埋蔵文化財センター
犬飼　透（いぬかい・とおる）	(財) 山形県埋蔵文化財センター調査第三課
佐竹　桂一（さたけ・けいいち）	(財) 山形県埋蔵文化財センター調査第三課

研　究　紀　要　編　集　担　当

長橋至・黒坂雅人・伊藤邦弘・小林圭一・佐竹桂一・髙桑登・水戸部秀樹・須賀井明子

研 究 紀 要　創刊号

2003年3月31日発行

編集・発行　財団法人 山形県埋蔵文化財センター

〒999-3161　山形県上山市弁天二丁目15番1号

TEL　０２３－６７２－５３０１(代)

FAX　０２３－６７２－５５８６

URL　http://www.yamagatamaibun.or.jp

印刷　アベ印刷株式会社

BULLETIN

OF

YAMAGATA PREFECTURAL CENTER FOR ARCHAEOLOGICAL RESEARCH

The first issue

2003.3

CONTENTS

A Chronological Consideration on the Spouted Vessels of Earlier Final Jomon Age in Northern part of Tohoku District	KOBAYASHI Keiichi	1
A Consideration on the Ancient Custom of Intentional Bronze Miller Breakage in Kofun Age:A Northernmost Example Discovered in Yamagata Prefecture and its Signficance for the Studies of Incipient Kofun Era in the Area	TAKAHASHI Satoshi	45
On Round Eave Tiles Discovered at Kinowanosaku Site,Ancient Fortified Government Office in Yamagata Prefecture	MITOBE Hideki	55
An Archaeological Reconsideration of Imazuka Site and Its Implication	UEMATSU Akihiko	59
Some Problems on Formational Process of Yuza Estate Odate Site	YAMAGUCHI Hiroyuki	77
A Technological Reconstruction of Sue Long Necked Jar Production:A Study of Sue Wares Excavated in the Kilm Sites in Yamagata Prefecture	YOSHIDA Emiko	117
On Vesseles Made of Tile-clay Excavated in Yamagata Prefecture	TAKAKUWA Hiromi	124
On the Distribution of "Date Clan" Related Artifacts in the Southern Part of Ou District	TAKAKUWA Noboru	136
An Archaeological Report of Sibue Site,Yamagata Prefecture: A Special Reference to Modern Cemetery	OSHIKIRI Tomoki TADA Kazuhiro NISHIDA Asuka	146
The Overview and Remarks on the Present Condition of Old Tunnels Built in Yamagata Prefecture on Ou Line in Meiji Era	INUKAI Tooru	154
An Instructive Utilization of Archaeological Materials for School Education:A Case Study of Visiting Lectures for Primary and Secondary School	SATAKE Keiichi	162

YAMAGATA PREFECTURAL CENTER FOR ARCHAEOLOGICAL RESEARCH